HITACHI
Inspire the Next

JP1 Version 11

JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (Windows(R)用)

3021-3-A51-30

前書き

■ 対象製品

●JP1/Performance Management - Manager（適用 OS：Windows Server 2008 R2，Windows Server 2012，Windows Server 2016）

P-2A2C-AABL JP1/Performance Management - Manager 11-50

製品構成一覧および内訳形名

P-CC2A2C-5ABL JP1/Performance Management - Manager 11-50

P-CC2A2C-5RBL JP1/Performance Management - Web Console 11-50

●JP1/Performance Management - Manager（適用 OS：CentOS 6 (x64)，CentOS 7，Linux 6 (x64)，Linux 7，Oracle Linux 6 (x64)，Oracle Linux 7，SUSE Linux 12）

P-812C-AABL JP1/Performance Management - Manager 11-50

製品構成一覧および内訳形名

P-CC812C-5ABL JP1/Performance Management - Manager 11-50

P-CC812C-5RBL JP1/Performance Management - Web Console 11-50

●JP1/Performance Management - Manager（適用 OS：AIX V6.1，AIX V7.1，AIX V7.2）

P-1M2C-AABL JP1/Performance Management - Manager 11-50

製品構成一覧および内訳形名

P-CC1M2C-5ABL JP1/Performance Management - Manager 11-50

P-CC1M2C-5RBL JP1/Performance Management - Web Console 11-50

●JP1/Performance Management - Agent Option for Platform（適用 OS：Windows Server 2008 R2，Windows Server 2012，Windows Server 2016）

P-2A2C-ACBL JP1/Performance Management - Agent Option for Platform 11-50

製品構成一覧および内訳形名

P-CC2A2C-FCBL JP1/Performance Management - Agent Option for Platform 11-50

P-CC2A2C-AJBL JP1/Performance Management - Base 11-50

これらの製品には，他社からライセンスを受けて開発した部分が含まれています。

■ 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

■ 商標類

HITACHI，Cosminexus，HiRDB，JP1，OpenTP1，uCosminexus は，株式会社 日立製作所の商標または登録商標です。

Active Directory は，米国 Microsoft Corporation の，米国およびその他の国における登録商標または商標です。

IBM，AIX は，世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM， DB2 は，世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM， Lotus は，世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM，WebSphere は，世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

Intel は，アメリカ合衆国および / またはその他の国における Intel Corporation の商標です。

Internet Explorer は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Itanium は，アメリカ合衆国および / またはその他の国における Intel Corporation の商標です。

Linux は，Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Exchange Server は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Hyper-V は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および SQL Server は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Visual C++は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Visual Studio は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

ODBC は，米国 Microsoft Corporation が提唱するデータベースアクセス機構です。

Oracle と Java は，Oracle Corporation 及びその子会社，関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

Red Hat は，米国およびその他の国で Red Hat, Inc.の登録商標もしくは商標です。

すべての SPARC 商標は，米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標がついた製品は，米国 Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャに基づくものです。

UNIX は，The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

Win32 は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows NT は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Server は，米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他記載の会社名，製品名などは，それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

■ マイクロソフト製品の表記について

このマニュアルでは，マイクロソフト製品の名称を次のように表記しています。

表記		製品名
Exchange Server		Microsoft(R) Exchange Server
IIS		Microsoft(R) Internet Information Services
Internet Explorer		Windows(R) Internet Explorer(R)
Visual C++		Microsoft(R) Visual C++(R)
Visual Studio		Microsoft(R) Visual Studio(R)
Win32		Win32(R)
Windows Server 2008	Windows Server 2008 R2	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Standard
Windows Server 2012	Windows Server 2012	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard
	Windows Server 2012 R2	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard
Windows Server 2016		Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard
WSFC		Microsoft(R) Windows Server(R) Failover Cluster

Windows Server 2008，Windows Server 2012，および Windows Server 2016 を総称して，Windows と表記することがあります。

■ 発行

2017 年 11 月 3021-3-A51-30

■ 著作権

Copyright (C) 2016, 2017, Hitachi, Ltd.
Copyright (C) 2017, Hitachi Solutions, Ltd.

変更内容

変更内容（3021-3-A51-30） JP1/Performance Management - Agent Option for Platform 11-50

追加・変更内容	変更個所
Windows Server 2016 で Docker 環境（Windows コンテナ機能）を利用する場合，コンテナごとのプロセスを監視する機能をサポートした。	2.3.17，2.3.18，6.6.4(1)(a)，6.6.4(3)(a)，6.6.4(3)(c)，6.6.5(1)(b)，11.4.5
次のアラームテーブルを追加した。 • PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00 • PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00	3.2.5(1)(a)，6.6.4(1)(b)，6.6.6(1)(d)，6.6.6(2)(c)，7.，付録 H
ユーザー独自のパフォーマンスデータの収集で，ユーザーコマンドの実行に失敗したなどの理由でユーザーデータファイルが作成されていない場合に，レコードの収集処理をスキップするようにした。	6.8.1(1)
次のレポートを追加した。 • Application Status (8.4) • Application Process Count (8.4) • Application Process Status (8.4) • Monitoring Process Detail (8.4)	7.
PD レコード，PD_APP2 レコード，PD_APSI レコード，および PD_APS レコードに次のフィールドを追加した。 • Virtual Env ID また，上記レコードのファイルサイズを変更した。	8.
PD_ELOG レコードの Event Type ID フィールドの説明を変更した。	8.
PD_SVC レコードの注意事項を追加した。	8.
次のメッセージを追加した。 KAVF11508-W，KAVF11509-I，KAVF11510-W，KAVF11650-W	10.2，10.4
次のメッセージを変更した。 KAVF11007-W，KAVF11907-W	10.4
Agent Collector サービスに次のプロパティを追加した。 • ALL Container Collection for Process • Virtual Environment ID	付録 E.2

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

このマニュアルは，JP1/Performance Management - Agent Option for Platform の機能や収集レコードなどについて説明したものです。

■ 対象読者

このマニュアルは次の方にお読みいただくことを前提に，JP1/Performance Management について説明しています。

- 稼働監視システムを設計または構築したい方
- パフォーマンスデータの収集条件を定義したい方
- レポートおよびアラームを定義したい方
- 収集したパフォーマンスデータを参照して，システムを監視したい方
- 監視結果を基に，システムへの対策を検討または指示したい方

また，監視対象システムの運用について熟知していること，および OS に対する知識があることを前提としています。

なお，JP1/Performance Management を使用したシステムの構築，運用方法については，次のマニュアルもあわせてご使用ください。

- JP1/Performance Management 設計・構築ガイド
- JP1/Performance Management 運用ガイド
- JP1/Performance Management リファレンス

■ マニュアルの構成

このマニュアルは，次に示す編から構成されています。なお，このマニュアルは JP1/Performance Management - Agent Option for Platform のインストール先ホストの OS（Operating System）が，Windows の場合に共通のマニュアルです。OS ごとに差異がある場合は，本文中でそのつど内容を書き分けています。

第 1 編　概要編

JP1/Performance Management - Agent Option for Platform の概要について説明しています。

第 2 編　構築・運用編

JP1/Performance Management - Agent Option for Platform のインストール，セットアップ，およびユーザーレコードの収集方法について説明しています。

第３編　リファレンス編

JP1/Performance Management - Agent Option for Platform の監視テンプレート，レコード，コマンド，およびメッセージについて説明しています。

第４編　トラブルシューティング編

JP1/Performance Management - Agent Option for Platform でトラブルが発生したときの対処方法について説明しています。

■ 読書手順

このマニュアルは，利用目的に合わせて章を選択して読むことができます。利用目的別にお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的	記述個所
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform の特長を知りたい。	1 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform によるパフォーマンス監視の機能を知りたい。	2 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform によるパフォーマンス監視の運用例を知りたい。	3 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform の導入時の作業を知りたい。	4 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform のクラスタシステムでの運用を知りたい。	5 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform のユーザーレコードの収集方法について知りたい。	6 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform の監視テンプレートについて知りたい。	7 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform のレコードについて知りたい。	8 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform のコマンドについて知りたい。	9 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Platform のメッセージについて知りたい。	10 章
障害発生時の対処方法について知りたい。	11 章

■ このマニュアルで使用する書式

このマニュアルで使用する書式を次に示します。

書式	説明
文字列	可変の値を示します。 （例）日付は YYYYMMDD の形式で指定します。
[ ]	ウィンドウ，ダイアログボックス，タブ，メニュー，ボタンなどの画面上の要素名を示します。
[ ] －［]	メニューを連続して選択することを示します。 （例）［ファイル］－［新規作成］を選択します。 上記の例では，［ファイル］メニュー内の［新規作成］を選択することを示します。

目次

前書き　2
変更内容　6
はじめに　7

第 1 編　概要編

1　PFM - Agent for Platform の概要　20
1.1　PFM - Agent for Platform の特長　21
1.1.1　Windows のパフォーマンスデータを収集できます　21
1.1.2　パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます　22
1.1.3　パフォーマンスデータを保存できます　22
1.1.4　Windows の運用上の問題点を通知できます　23
1.1.5　アラームおよびレポートが容易に定義できます　23

2　パフォーマンス監視　25
2.1　パフォーマンス監視について　26
2.1.1　パフォーマンス監視の目的　26
2.1.2　パフォーマンス監視で最も重要なシステムリソース　27
2.1.3　ベースラインの選定　27
2.2　ユーザーレコード収集について　29
2.2.1　32 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報　30
2.2.2　64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報　30
2.2.3　イベントログ情報　31
2.2.4　ワークグループ情報　31
2.2.5　プロセスの稼働・非稼働情報　32
2.2.6　アプリケーションの稼働・非稼働情報　32
2.2.7　ユーザー独自のパフォーマンスデータ　32
2.3　仮想化システム上での運用について　34
2.3.1　仮想化システムの利点　34
2.3.2　仮想化システム上でのパフォーマンス監視の目的　34
2.3.3　仮想化システム上でのパフォーマンス監視で最も重要なシステムリソース　35
2.3.4　仮想化システム上での PFM - Agent for Platform のインストール　35
2.3.5　仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の設定　36
2.3.6　仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の利用例（仮想化システムの設定を変更するべきか判断したい場合）　36

2.3.7 仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の利用例（物理的なリソース追加が必要であるか判断したい場合） 37
2.3.8 仮想化システム上で PFM - Agent for Platform を利用する際の注意事項 38
2.3.9 プロセッサ情報収集時の注意点 38
2.3.10 メモリー情報収集時の注意点 39
2.3.11 ディスク情報収集時の注意点 40
2.3.12 ネットワーク情報収集時の注意点 40
2.3.13 プロセス情報収集時の注意点 40
2.3.14 仮想化システムの機能と収集されるパフォーマンスデータ 41
2.3.15 VMware/Hyper-V を使用した仮想化システムで収集できるデータ 41
2.3.16 日立サーバ論理分割機構を使用した仮想化システムで収集できるデータ 42
2.3.17 Docker 環境で収集できるデータ 44
2.3.18 仮想化システム別の収集データ範囲 49
2.4 監視テンプレートについて 52

3 パフォーマンス監視の運用例の紹介 53
3.1 パフォーマンスの監視例 54
3.1.1 プロセッサの監視例 54
3.1.2 メモリーの監視例 58
3.1.3 ディスクの監視例 61
3.1.4 ネットワークの監視例 64
3.1.5 プロセス・サービスの監視例 65
3.1.6 イベントログの監視例 67
3.1.7 Active Directory の監視例 68
3.1.8 利用ポート情報の収集例 73
3.1.9 PFM 製品が導入されていない複数のホストからのパフォーマンスデータの収集例 74
3.2 パフォーマンス監視の定義例 77
3.2.1 プロセッサ監視の定義例 77
3.2.2 メモリー監視の定義例 79
3.2.3 ディスク監視の定義例 84
3.2.4 ネットワーク監視の定義例 86
3.2.5 プロセス・サービス監視の定義例 87
3.2.6 イベントログ監視の定義例 88

第 2 編 構築・運用編

4 Windows 版のインストールとセットアップ 90
4.1 インストールとセットアップの流れ 91
4.2 インストールの前に確認すること 93
4.2.1 前提 OS 93

4.2.2 ネットワーク環境の設定 93
4.2.3 インストールに必要な OS ユーザー権限 95
4.2.4 前提プログラム 95
4.2.5 パフォーマンスデータを収集するために必要な環境構築 97
4.2.6 プロセス稼働の監視条件を 4,096 バイトにする場合の前提条件 100
4.2.7 障害発生時の資料採取の準備 100
4.2.8 インストール前の注意事項 101
4.3 インストール 104
4.3.1 プログラムのインストール順序 104
4.3.2 PFM - Agent for Platform のインストール手順 104
4.4 セットアップ 106
4.4.1 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for Platform の登録 〈オプション〉 106
4.4.2 ネットワークの設定 〈オプション〉 109
4.4.3 ログのファイルサイズ変更 〈オプション〉 109
4.4.4 パフォーマンスデータの格納先の変更 〈オプション〉 109
4.4.5 PFM - Agent for Platform の接続先 PFM - Manager の設定 110
4.4.6 動作ログ出力の設定 〈オプション〉 111
4.5 アンインストール 112
4.5.1 アンインストール前の注意事項 112
4.5.2 接続先 PFM - Manager の解除 113
4.5.3 アンインストール手順 113
4.6 PFM - Agent for Platform のシステム構成の変更 115
4.7 PFM - Agent for Platform の運用方式の変更 116
4.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更 116
4.7.2 Store バージョン 2.0 への移行 119
4.8 バックアップとリストア 123
4.8.1 バックアップ 123
4.8.2 リストア 124
4.9 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定 126
4.9.1 マニュアルを参照するための設定 126
4.9.2 マニュアルの参照手順 127

5 クラスタシステムでの運用 128

5.1 クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform の構成 129
5.2 フェールオーバー時の処理 131
5.2.1 PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー 131
5.2.2 PFM - Manager が停止した場合の影響と対処 132
5.3 クラスタシステムでのインストールとセットアップ 134

5.3.1 クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ 134
5.3.2 クラスタシステムでのインストールの前に確認すること 136
5.3.3 クラスタシステムでのインストール手順 140
5.3.4 クラスタシステムでのセットアップ手順 140
5.4 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ 147
5.4.1 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ 147
5.4.2 クラスタシステムでのアンセットアップ手順 148
5.4.3 クラスタシステムでのアンインストール手順 152
5.5 クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform の運用方式の変更 153
5.5.1 クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート 153
5.6 クラスタシステムで運用する場合の注意事項 154
5.6.1 アプリケーションおよびプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定をする場合の注意事項 154
5.6.2 ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する場合の注意事項 154
5.6.3 フェールオーバー前後のパフォーマンスデータの連続性についての注意事項 155

6 ユーザーレコードの収集 156
6.1 ユーザーレコードの収集時に起動する画面について 157
6.1.1 収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）の起動 157
6.1.2 収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）の終了 158
6.1.3 ユーザーレコード設定時の注意事項 158
6.2 パフォーマンスコンソールカウンター情報収集に関する設定 160
6.2.1 パフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定 160
6.2.2 パフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの内容確認 163
6.2.3 パフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの削除 164
6.3 イベントログ情報の収集に関する設定 166
6.3.1 イベントログ情報を収集するためのユーザーレコードの設定 166
6.3.2 イベントログ情報として設定されているユーザーレコードの内容確認 167
6.3.3 イベントログ情報として設定されているユーザーレコードの削除 167
6.4 ワークグループ情報の収集に関する設定 168
6.4.1 ワークグループ情報を収集するためのユーザーレコードの設定 168
6.4.2 ワークグループ情報として設定されているユーザーレコードの内容確認 171
6.4.3 ワークグループ情報として設定されているユーザーレコードの内容変更 171
6.4.4 ワークグループ情報としてユーザーレコードに設定されているユーザーレコードの削除 173
6.5 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報の収集に関する設定 174
6.5.1 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定 174
6.5.2 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの内容確認 176
6.5.3 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報としてユーザーレコードに設定されているユーザーレコードの削除 177
6.6 プロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定 179

6.6.1 プロセスの稼働・非稼働情報収集の概要 179
6.6.2 過去のバージョンとの機能差異 179
6.6.3 プロセスの稼働・非稼働情報の収集に使用するレコード 180
6.6.4 エージェント階層でのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定 182
6.6.5 サービス階層でのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定 194
6.6.6 コマンドでのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定 201
6.6.7 監視対象の大文字と小文字の区別 205
6.6.8 プロセスの稼働・非稼働情報収集時にアラームが発生したときの対応例 206
6.7 アプリケーションの稼働・非稼働情報収集に関する設定 210
6.7.1 アプリケーションの稼働・非稼働情報を収集するためのユーザーレコードの設定 210
6.7.2 アプリケーションの稼働・非稼働情報として収集したユーザーレコードの確認または変更 213
6.7.3 アプリケーションの稼働・非稼働情報として収集したユーザーレコードの設定の削除 214
6.7.4 アプリケーションの稼働・非稼働情報収集時のアラーム運用例 214
6.8 ユーザー独自のパフォーマンスデータの収集に関する設定 221
6.8.1 ユーザー独自のパフォーマンスデータ収集の機能概要 221
6.8.2 ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集するための設定 227
6.8.3 jpcuser コマンドの形式 236
6.8.4 ユーザー作成データのファイル形式 239
6.8.5 ユーザー作成データの内容が正しいかどうかを確認するためのデバッグログの参照 244

第 3 編 リファレンス編

7 監視テンプレート 252
アラームの記載形式 253
アラーム一覧 254
Available Memory 256
CPU Usage 258
Disk Space 260
Processor Queue 262
SVR Processor Queue 264
Committed Mbytes 266
Pages/sec 268
Page Faults/sec 270
Logical Disk Free 272
Disk Busy % 274
Logical Disk Queue 276
Physical Disk Queue 278
Network Received 280
Process End 282
Process Alive 284
Service(Service Nm) 286
Service(Display Nm) 288

Event Log(all)　290
Process Existence　293
Event Log(System)　295
Application Status　297
レポートの記載形式　299
レポートのフォルダ構成　301
レポート一覧　303
Access Failure Status（システムアクセスエラーを示すリアルタイムレポート）　305
Access Failure Status（システムアクセスエラーを示す履歴レポート）　306
Application Status　307
Application Status (8.4)　309
Application Process Count　310
Application Process Count (8.4)　311
Application Process Status　312
Application Process Status (8.4)　313
CPU Status (Multi-Agent)　314
CPU Trend　315
CPU Trend (Multi-Agent)　316
CPU Usage - Top 10 Processes　317
CPU Usage Summary　318
Disk Time - Top 10 Logical Drives　320
File System I/O Summary　321
Free Megabytes - Logical Drive Status　322
Free Space - Low 10 Logical Drives　323
Free Space - Top 10 Logical Drives　324
Logical Drive Detail　325
Memory Available Trend (Multi-Agent)　327
Memory Paging　328
Memory Paging Status (Multi-Agent)　329
Monitoring Process Detail　330
Monitoring Process Detail (8.4)　332
OS Memory Usage Status（メモリー使用量を示すリアルタイムレポート）　334
OS Memory Usage Status（メモリー使用量を示す履歴レポート）　335
Page Faults - Top 10 Processes　336
Process Detail　337
Process Trend　339
Server Activity Detail　340
Server Activity Summary (Multi-Agent)　342
Server Activity Summary（ネットワーク間での通信状況についての情報を示すリアルタイムレポート）　343
Server Activity Summary（ネットワーク間での通信状況についての情報を示す履歴レポート）　344
Server Activity Summary Trend (Multi-Agent)　345
Server Sessions Trend (Multi-Agent)　346
System Memory Detail　347
System Overview（システムの概要を示すリアルタイムレポート）　348
System Overview（システムの概要を示す履歴レポート）　350

System Utilization Status　352
Workload Status　353
Workload Status (Multi-Agent)　354

8 レコード　355
データモデルについて　356
レコードの記載形式　357
ODBC キーフィールド一覧　360
要約ルール　361
データ型一覧　364
フィールドの値　365
Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド　369
Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド　371
レコードの注意事項　372
レコード一覧　381
Active Directory Overview（PI_AD）　388
Application Process Detail（PD_APPD）　397
Application Process Interval（PD_APSI）　399
Application Process Overview（PD_APS）　406
Application Service Overview（PD_ASVC）　413
Application Summary（PD_APP）　417
Application Summary Extension（PD_APP2）　427
Browser Overview（PI_BRSR）　430
Device Detail（PD_DEV）　434
Event Log（PD_ELOG）　438
Generic Data Detail（PD_GEND）　442
Generic Data Detail64（PD_GD64）　445
Generic Data Interval（PI_GENI）　448
Generic Data Interval64（PI_GI64）　451
ICMP Overview（PI_ICMP）　454
ICMP Version 6 Overview（PI_ICM6）　459
IP Overview（PI_IP）　464
IP Version 6 Overview（PI_IP6）　468
Logical Disk Overview（PI_LOGD）　472
NBT Overview（PI_NBT）　478
Network Interface Overview（PI_NETI）　480
Page File Detail（PD_PAGF）　484
Physical Disk Overview（PI_PHYD）　486
Process Detail（PD）　490
Process Detail Interval（PD_PDI）　496
Process End Detail（PD_PEND）　502
Processor Overview（PI_PCSR）　506
Server Work Queues Overview（PI_SVRQ）　511
Service Process Detail（PD_SVC）　516
System Overview（PI）　520

TCP Overview（PI_TCP）　542
TCP Version 6 Overview（PI_TCP6）　545
UDP Overview（PI_UDP）　548
UDP Version 6 Overview（PI_UDP6）　550
User Data Detail（PD_UPD）　552
User Data Detail - Extended（PD_UPDB）　555
User Data Interval（PI_UPI）　558
User Data Interval - Expanded 1（PI_XUI1）　561
User Data Interval - Expanded 2（PI_XUI2）　567
User Data Interval - Expanded 3（PI_XUI3）　568
User Data Interval - Expanded 4（PI_XUI4）　569
User Data Interval - Expanded 5（PI_XUI5）　570
User Data Interval - Extended（PI_UPIB）　571
WINS Server Overview（PI_WINS）　576
Workgroup Summary（PI_WGRP）　579

9　コマンド　584
コマンドの記載形式　585
jpcappcvt　586

10　メッセージ　589
10.1　メッセージの形式　590
10.1.1　メッセージの出力形式　590
10.1.2　メッセージの記載形式　591
10.2　メッセージの出力先一覧　592
10.3　Windows イベントログの一覧　598
10.4　メッセージ一覧　599

第 4 編　トラブルシューティング編

11　トラブルへの対処方法　640
11.1　対処の手順　641
11.2　トラブルシューティング　642
11.2.1　ハングアップや異常停止に関するトラブルシューティング　642
11.2.2　その他のトラブルに関するトラブルシューティング　642
11.3　トラブルシューティング時に採取するログ情報　643
11.3.1　トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類　643
11.3.2　トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびフォルダー一覧　644
11.4　トラブルシューティング時に採取が必要な Windows に関する資料　647
11.4.1　トラブルシューティング時に採取する OS のログ情報　647
11.4.2　トラブルシューティング時に採取する Performance Management の情報　648
11.4.3　トラブルシューティング時に採取するオペレーション内容　652

11.4.4 トラブルシューティング時に採取する画面上のエラー情報 652
11.4.5 トラブルシューティング時に採取するパフォーマンスデータに関する情報 653
11.4.6 トラブルシューティング時に採取するユーザーモードプロセスダンプ 655
11.4.7 トラブルシューティング時に採取する問題レポート 655
11.4.8 トラブルシューティング時に採取するその他の情報 655
11.5 トラブルシューティング時に採取する Windows に関する資料の採取方法 656
11.6 Performance Management の障害検知 657
11.7 Performance Management システムの障害回復 658

付録 659
付録 A 構築前のシステム見積もり 660
付録 A.1 メモリー所要量 660
付録 A.2 ディスク占有量 660
付録 B 識別子一覧 661
付録 C プロセス一覧 662
付録 D ポート番号一覧 663
付録 D.1 PFM - Agent for Platform のポート番号 663
付録 D.2 ファイアウォールの通過方向 664
付録 E PFM - Agent for Platform のプロパティ 665
付録 E.1 Agent Store サービスのプロパティ一覧 665
付録 E.2 Agent Collector サービスのプロパティ一覧 670
付録 F ファイルおよびフォルダ一覧 685
付録 G バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項 691
付録 H バージョン互換 692
付録 I 動作ログの出力 693
付録 I.1 動作ログに出力される事象の種別 693
付録 I.2 動作ログの保存形式 693
付録 I.3 動作ログの出力形式 694
付録 I.4 動作ログを出力するための設定 699
付録 J JP1/SLM との連携 702
付録 K IPv4 環境と IPv6 環境での通信について 704
付録 L 各バージョンの変更内容 706
付録 L.1 11-50 の変更内容 706
付録 L.2 11-10 の変更内容 707
付録 L.3 11-01 の変更内容 707
付録 L.4 11-00 の変更内容 707
付録 L.5 10-00 の変更内容 711
付録 L.6 09-10 の変更内容 712
付録 L.7 09-00 の変更内容 713

付録 M　このマニュアルの参考情報　716
付録 M.1　関連マニュアル　716
付録 M.2　このマニュアルでの表記　716
付録 M.3　このマニュアルで使用する英略語　719
付録 M.4　このマニュアルでのプロダクト名，サービス ID，およびサービスキーの表記　720
付録 M.5　Performance Management のインストール先フォルダの表記　721
付録 M.6　KB（キロバイト）などの単位表記について　721
付録 N　用語解説　722

索引　731

1 PFM - Agent for Platform の概要

この章では，PFM - Agent for Platform の概要について説明します。

1.1 PFM - Agent for Platform の特長

PFM - Agent for Platform は，Windows のパフォーマンスを監視するために，パフォーマンスデータを収集および管理するプログラムです。このプログラムは，監視対象のホストにインストールして使用します。

PFM - Agent for Platform の特長を次に示します。

- Windows の稼働状況を分析できる
  監視対象の Windows から，CPU 使用率や起動中のプロセス数などのパフォーマンスデータを PFM - Agent for Platform で収集および集計し，その傾向や推移を図示することで，Windows の稼働状況の分析が容易にできます。
- Windows の運用上の問題点を早期に発見し，トラブルの原因を調査する資料を提供できる
  監視対象の Windows でシステムリソースが不足するなどのトラブルが発生した場合，E メールなどを使ってユーザーに通知することで，問題点を早期に発見できます。また，その問題点に関連する情報を図示することで，トラブルの原因を調査する資料を提供できます。

PFM - Agent for Platform を使用するには，PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

メモ

Performance Management で Windows の稼働状況を分析できる製品としては，PFM - Agent for Platform のほかに，PFM - RM for Platform があります。PFM - RM for Platform は，監視対象ホストへのインストールが不要な製品です。つまり，監視対象ホストの環境に手を加えることなく，そのパフォーマンスデータを監視できます（リモート監視)。また，収集できるパフォーマンスデータの種類は PFM - Agent for Platform より少ないですが，1 つの PFM - RM for Platform から複数ホストのパフォーマンスデータを監視できます。

リモート監視を実現したい場合，複数の監視ホストを対象にパフォーマンスデータを収集・管理したい場合などは，PFM - RM for Platform の導入もご検討ください。

1.1.1 Windows のパフォーマンスデータを収集できます

PFM - Agent for Platform を使用すると，Windows のシステムリソースなどのパフォーマンスデータが収集できます。PFM - Agent for Platform では，パフォーマンスデータは，次のように利用できます。

- Windows の稼働状況を表示する
  パフォーマンスデータは，PFM - Web Console を使用して，「レポート」と呼ばれるグラフィカルな形式に加工し，表示できます。レポートによって，Windows の稼働状況がよりわかりやすく分析できるようになります。レポートには，次の種類があります。
  - リアルタイムレポート

監視している Windows の現在の状況を示すレポートです。主に，システムの現在の状態や問題点を確認するために使用します。リアルタイムレポートの表示には，収集した時点のパフォーマンスデータが直接使用されます。

- 履歴レポート

  監視している Windows の過去から現在までの状況を示すレポートです。主に，システムの傾向を分析するために使用します。履歴レポートの表示には，PFM - Agent for Platform のデータベースに格納されたパフォーマンスデータが使用されます。

- 問題が起こったかどうかの判定条件として使用する

  収集されたパフォーマンスデータの値が何らかの異常を示した場合，ユーザーに通知するなどの処置を設定できます。

1.1.2 パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます

パフォーマンスデータは，「レコード」の形式で収集されます。各レコードは，「フィールド」と呼ばれるさらに細かい単位に分けられます。レコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。

レコードは，性質によって 2 つのレコードタイプに分けられます。どのレコードでどのパフォーマンスデータが収集されるかは，PFM - Agent for Platform で定義されています。ユーザーは，PFM - Web Console を使用して，どのパフォーマンスデータのレコードを収集するか選択します。

PFM - Agent for Platform のレコードタイプを次に示します。

- Product Interval レコードタイプ（以降，PI レコードタイプと省略します）

  PI レコードタイプのレコードには，1 分ごとのプロセス数など，ある一定の時間（インターバル）ごとのパフォーマンスデータが収集されます。PI レコードタイプは，時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。

- Product Detail レコードタイプ（以降，PD レコードタイプと省略します）

  PD レコードタイプのレコードには，現在起動しているプロセスの詳細情報など，ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが収集されます。PD レコードタイプは，ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

各レコードについては，「8. レコード」を参照してください。

1.1.3 パフォーマンスデータを保存できます

収集したパフォーマンスデータを，PFM - Agent for Platform の「Store データベース」と呼ばれるデータベースに格納することで，現在までのパフォーマンスデータを保存し，Windows の稼働状況について，過去から現在までの傾向を分析できます。傾向を分析するためには，履歴レポートを使用します。

ユーザーは，PFM - Web Console を使用して，どのパフォーマンスデータのレコードを Store データベースに格納するか選択します。PFM - Web Console でのレコードの選択方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

1.1.4 Windows の運用上の問題点を通知できます

PFM - Agent for Platform で収集したパフォーマンスデータは，Windows のパフォーマンスをレポートとして表示するのに利用できるだけでなく，Windows を運用していて問題が起こったり，障害が発生したりした場合にユーザーに警告することもできます。

例えば，システムリソースの空きが 10%を下回った場合，ユーザーに E メールで通知するとします。このように運用するために，「システムリソースの空きが 10%未満」を異常条件のしきい値として，そのしきい値に達した場合，E メールをユーザーに送信するように設定します。しきい値に達した場合に取る動作を「アクション」と呼びます。アクションには，次の種類があります。

- E メールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トラップの発行
- JP1 イベントの発行

しきい値やアクションを定義したものを「アラーム」と呼びます。1 つ以上のアラームを 1 つのテーブルにまとめたものを「アラームテーブル」と呼びます。アラームテーブルを定義したあと，PFM - Agent for Platform と関連づけます。アラームテーブルと PFM - Agent for Platform とを関連づけることを「バインド」と呼びます。バインドすると，PFM - Agent for Platform によって収集されているパフォーマンスデータが，アラームで定義したしきい値に達した場合，ユーザーに通知できるようになります。

このように，アラームおよびアクションを定義することで，Windows の運用上の問題を早期に発見し，対処できます。

アラームおよびアクションの設定方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

1.1.5 アラームおよびレポートが容易に定義できます

PFM - Agent for Platform では，「監視テンプレート」と呼ばれる，必要な情報があらかじめ定義されたレポートおよびアラームを提供しています。この監視テンプレートを使用することで，複雑な定義をしなくても Windows の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。監視テンプレートは，ユーザーの環境に合わせてカスタマイズすることもできます。監視テンプレートの使用方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働分析のためのレポートの作成またはアラー

ムによる稼働監視について説明している章を参照してください。また，監視テンプレートの詳細については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。

2 パフォーマンス監視

この章では，PFM - Agent for Platform によるパフォーマンス監視について説明します。

2.1　パフォーマンス監視について

- パフォーマンスデータの収集方法

  パフォーマンスデータの収集方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

  収集されるパフォーマンスデータの値については，「8.　レコード」を参照してください。

- パフォーマンスデータの管理方法

  パフォーマンスデータの管理方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

PFM - Agent で収集および管理されているレコードのうち，どのパフォーマンスデータを利用するかは，PFM - Web Console で選択します。選択方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

2.1.1　パフォーマンス監視の目的

パフォーマンスを監視することは，システム環境の構築や管理で重要な作業です。

PFM - Agent for Platform を用いたパフォーマンス監視は，主に次の目的で使用できます。

- パフォーマンスデータを分析し，ボトルネックの原因を見つける。
- パフォーマンスデータの傾向を分析し，負荷の特性と対応するシステムリソースへの影響を把握する。
- 運用システムが正しく動作しているか監視する。

システムを運用する場合，特定のボトルネックによって，システム全体のパフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。ボトルネックの原因としては，次のようなケースが挙げられます。

- メモリー不足
- プログラムによる特定のリソースの占有
- サブシステム故障
- サブシステム構成不正（ネットワークインターフェースカードで，100Mbps に設定する必要があるのに，10Mbps に構成されているなど）
- サブシステム間で負荷の不均等

各種条件（同時接続ユーザーなど）を変更してパフォーマンスを監視したり，継続的にパフォーマンスを監視したりすることで，システム環境の負荷特性と対応するシステムリソースへの影響を把握できます。これによって，次のようなメリットがあります。

- システム構成の変更や調整が容易にできる。
- 将来のシステムリソースのアップグレード計画が立てられる。

運用システムが正しく動作しているかを確認することは大変重要です。システム環境が正しく動作しているかどうかは，パフォーマンスの観点に加えて次のような監視によって確認できます。

- システムを提供するプロセスの動作監視
- システムが前提とするサービスの動作監視
- システム内の不正なプロセスの動作監視

このように，システムを安定稼働させるには，PFM - Agent for Platform を用いて正しくパフォーマンスを監視することが重要です。

2.1.2 パフォーマンス監視で最も重要なシステムリソース

PFM - Agent for Platform でパフォーマンスを監視する上で最も重要なシステムリソースは，次のとおりです。

- プロセッサ
- メモリー
- ディスク
- ネットワーク
- プロセス
- サービス

また，パフォーマンスを監視する以外にも，OS の不具合，プロセスの異常などを検知するには，次の情報が有効です。

- イベントログ

PFM - Agent for Platform では，これらの重要な項目については，監視テンプレートの形で提供しています。

2.1.3 ベースラインの選定

ベースラインの選定とは，システム運用で問題なしと想定されるラインをパフォーマンス測定結果から選定する作業です。

PFM 製品では，ベースラインの値をしきい値とすることでシステムの運用監視をします。ベースラインの選定はしきい値を決定し，パフォーマンスを監視する上での重要な作業となります。

なお，ベースラインの選定では，次の注意事項を考慮してください。

- 運用環境の高負荷テスト時など，ピーク時の状態を測定することをお勧めします。

- システム構成によってしきい値が大きく異なるため，システムリソースや運用環境を変更する場合は，再度ベースラインを測定することをお勧めします。

2.2　ユーザーレコード収集について

PFM - Agent for Platform では，デフォルトでは用意されていないパフォーマンスデータを収集し，レコードに格納できます。このパフォーマンスデータを格納したレコードをユーザーレコードと呼びます。ユーザーレコードの収集方法については，「6.　ユーザーレコードの収集」を参照してください。

ユーザーレコードの設定ができる情報と，それに対応するレコード，およびユーザーレコードの設定手段を次の表に示します。

表 2-1　ユーザーレコードの設定ができる情報と，それに対応するレコード，およびユーザーレコードの設定手段

収集設定できる情報	レコード	設定手段
パフォーマンスコンソールカウンター情報	PD_GEND レコード	収集データ追加ユーティリティ
	PI_GENI レコード	
64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報	PD_GD64 レコード	
	PI_GI64 レコード	
イベントログ情報	PD_ELOG レコード	
ワークグループ情報	PI_WGRP レコード	
プロセスの稼働・非稼働情報	PD_APP2 レコード	PFM - Web Console
	PD_APPD レコード	
	PD_APS レコード	
	PD_APSI レコード	
	PD_ASVC レコード	
アプリケーションの稼働・非稼働情報	PD_APP レコード	
ユーザー独自のパフォーマンスデータ	PD_UPD レコード	
	PD_UPDB レコード	
	PI_UPI レコード	
	PI_UPIB レコード	
	PI_XUI1 レコード	
	PI_XUI2 レコード	
	PI_XUI3 レコード	
	PI_XUI4 レコード	
	PI_XUI5 レコード	

各ホストで設定されたユーザーレコードは，ほかのレコードと同様，PFM - Web Console でレポートの表示やアラームでの監視に利用できます。

それぞれのレコードで，複数のパフォーマンスデータを収集する場合，パフォーマンスデータごとにユーザーレコードのフィールドが 1 行ずつ追加されます。その結果，それぞれのユーザーレコードは，複数行のレコードになります。複数行のレコードとは，複数インスタンスレコードのことです。

2.2.1　32 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報

PFM - Agent for Platform の Generic Data Detail（PD_GEND）レコードおよび Generic Data Interval（PI_GENI）レコードでは，定義されているフィールド以外のパフォーマンスデータを 32 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報として収集できます。

Generic Data Detail（PD_GEND）レコードおよび Generic Data Interval（PI_GENI）レコードで定義できるユーザーレコードは Windows の次のウィンドウに表示される次のデータと同等の情報です。

- ［パフォーマンスモニター］ウィンドウの「パフォーマンス」－「モニター ツール」－「パフォーマンス モニター」
- ［パフォーマンスモニター］ウィンドウの「データ コレクター　セット」

なお，Generic Data Detail（PD_GEND）レコードと Generic Data Interval（PI_GENI）レコードは，次のようにレコードタイプが違います。目的に応じて使用してください。

表 2-2　PD_GEND と PI_GENI のレコードタイプ

レコード名	レコードタイプ	用途
Generic Data Detail（PD_GEND）	PD レコードタイプ	ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用する。
Generic Data Interval（PI_GENI）	PI レコードタイプ	時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用する。

PD レコードタイプおよび PI レコードタイプについては，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

2.2.2　64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報

PFM - Agent for Platform の Generic Data Detail64（PD_GD64）レコードおよび Generic Data Interval64（PI_GI64）レコードでは，定義されているフィールド以外の 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンターをパフォーマンス情報として収集できます。

Generic Data Detail64（PD_GD64）レコードおよび Generic Data Interval64（PI_GI64）レコードで定義できるユーザーレコードは Windows の次のウィンドウに表示される次のデータと同等の情報です。

- [パフォーマンスモニター] ウィンドウの「パフォーマンス」－「モニター ツール」－「パフォーマンス モニター」
- [パフォーマンスモニター] ウィンドウの「データ コレクター　セット」

なお，Generic Data Detail64（PD_GD64）レコードと Generic Data Interval64（PI_GI64）レコードは，次のようにレコードタイプが違います。目的に応じて使用してください。

表 2-3　Generic Data Detail64 と Generic Data Interval64 のレコードタイプ

レコード名	レコードタイプ	用途
Generic Data Detail64 (PD_GD64)	PD レコードタイプ	ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用する。
Generic Data Interval64 (PI_GI64)	PI レコードタイプ	時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用する。

PI レコードタイプおよび PD レコードタイプについては，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

2.2.3　イベントログ情報

PFM - Agent for Platform では，Windows の［管理ツール］［イベント ビューア］の各種イベントログ情報をユーザーレコードとして収集し，Event Log（PD_ELOG）レコードとして管理できます。

ユーザーレコードとして定義できる Windows の各種イベントログ情報は，次の 2 つに分類できます。

- 標準イベントログ（アプリケーション，セキュリティ，システム）
- カスタムイベントログ（ディレクトリサービス，DNS サーバ，ファイルレプリケーションサービスなど）
  カスタムイベントログは，Windows のコンポーネントの追加で Active Directory などをインストールした場合に追加されます。

収集データ追加ユーティリティでイベントログ情報のユーザーレコードを何も設定していない場合，PFM - Web Console で各レコードのプロパティに「Log=Yes」が設定されているときは，PD_ELOG レコードは，標準イベントログ（アプリケーション，セキュリティ，システム）を無条件で収集します。

収集データ追加ユーティリティで設定すると，カスタムイベントログを収集対象に設定したり，標準イベントログを収集対象から外したりできます。

2.2.4　ワークグループ情報

複数のユーザーや複数のグループで Windows のプロセスを起動している場合，そのユーザー，グループなどを PFM - Agent for Platform でワークグループとして定義し，ワークグループに関するプロセスの情報を収集して Workgroup Summary（PI_WGRP）レコードとして管理できます。

PFM - Agent for Platform で定義するワークグループには，次の情報を設定できます。

- プロセス
- ユーザー
- グループ

収集データ追加ユーティリティで定義されたワークグループ情報を基に，Process Detail（PD）レコードのパフォーマンスデータのうち，該当するワークグループに関係するものが要約されて Workgroup Summary（PI_WGRP）レコードに格納されます。

2.2.5　プロセスの稼働・非稼働情報

指定した条件のプロセスが稼働しているかどうか，または想定数以内かどうかの情報を収集し，次に示すレコードとして管理できます。

- Application Summary Extension（PD_APP2）
- Application Process Detail（PD_APPD）
- Application Process Overview（PD_APS）
- Application Process Interval（PD_APSI）
- Application Service Overview（PD_ASVC）

監視するプロセスは PFM - Web Console 上で指定できます。

2.2.6　アプリケーションの稼働・非稼働情報

指定した条件のプロセスが稼働しているかどうか，または想定数以内かどうかの情報を収集し，Application Summary（PD_APP）レコードとして管理できます。監視するプロセスは PFM - Web Console 上で指定できます。

2.2.7　ユーザー独自のパフォーマンスデータ

PFM - Agent for Platform 製品で提供されていない情報や，マシンや環境固有の情報などユーザー独自のパフォーマンスデータを収集できます。これらの情報を収集する場合には，パフォーマンスデータを収集するためのユーザーコマンドと呼ばれるスクリプトを作成する必要があります。

ユーザー独自のパフォーマンスデータを格納するレコードには，PI レコードタイプが 7 種類，PD レコードタイプが 2 種類あります。

- User Data Detail（PD_UPD）

- User Data Detail - Extended（PD_UPDB）
- User Data Interval（PI_UPI）
- User Data Interval - Extended（PI_UPIB）
- User Data Interval - Expanded 1（PI_XUI1）
- User Data Interval - Expanded 2（PI_XUI2）
- User Data Interval - Expanded 3（PI_XUI3）
- User Data Interval - Expanded 4（PI_XUI4）
- User Data Interval - Expanded 5（PI_XUI5）

2.3　仮想化システム上での運用について

PFM - Agent for Platform を用いた仮想化システムのパフォーマンス監視について説明します。

2.3.1　仮想化システムの利点

仮想化システムは，システムの余剰リソースを有効に扱える技術として注目されています。例えば，「1 サーバ 1 アプリケーション」という状況の多い現在，ほとんどのサーバは余剰リソースを保持しています。具体的には，サーバのジョブが混雑する時間帯を除き 5%～7%程のリソースを使用しているのが現状です。このような状況を解決するのに仮想化システムは適しています。

また，仮想化システムはほかにも次のような利点があります。

- OS や機器を共有，一元管理できる。
- 複数の古いサーバを仮想サーバにして，1 台の新しいサーバ上で稼働できる。
- サーバの数が減るため，電力および空調コストが削減できる。

2.3.2　仮想化システム上でのパフォーマンス監視の目的

前述の「仮想化システムの利点」はシステムのリソースが過不足なく利用されているときに最大の恩恵を受けることができます。システムのリソースが過剰に消費されている，または逆にほとんど使用されていない場合，仮想化システムを有効に利用できていません。

このようなことは，リソースの消費状況を監視することで，現在のシステムが有効な設定であるか，そうでないか判断できます。

基本的には，PFM - Agent for Platform は物理的に 1 つの OS に関する情報を収集することを目的としています。しかし，使い方を工夫すれば，仮想化システムに依存するパフォーマンス情報についても監視できます。

PFM - Agent for Platform を用いた仮想化システムのパフォーマンス監視は，主に次の目的で使用できます。

- パフォーマンスデータの傾向を分析し，負荷の割り当てと対応するシステムリソースへの影響を把握する。
- パフォーマンスデータを分析し，ボトルネック原因を見つける。
- 運用システムが仮想化システム上で正しく動作しているか監視する。

仮想化システムでは特定のボトルネックによって，仮想化システム全体のパフォーマンスに悪影響を及ぼす場合があります。ボトルネックが発生する要因としては，次のようなものがあります。

- 論理パーティション上のメモリー不足。
- 仮想化システム間での負荷の割り当て。
- プログラムによる特定のリソースの占有。

ここでは，PFM - Agent for Platform を用いて仮想化システムのパフォーマンスを監視する方法について紹介していきます。なお，ここで表記されるパフォーマンス監視時のしきい値はあくまで参考値です。システムの構成，利用方法ごとに適切な値を検討してください。

2.3.3 仮想化システム上でのパフォーマンス監視で最も重要なシステムリソース

パフォーマンスを監視する上で最も重要なシステムリソースを次に示します。

- プロセッサ
- メモリー
- ディスク
- ネットワーク
- プロセス

仮想化システムでは，上記リソースのうち一部のパフォーマンスデータが収集できない，または動的に変更されることによって，利用上意味をなさないケースがあります。パフォーマンスは，OS ごと，または仮想化システムによって変動します。

2.3.4 仮想化システム上での PFM - Agent for Platform のインストール

仮想化システムは基本的に各種リソースを仮想化機能（ソフトウェアまたはハードウェア）で管理し，論理的なパーティションにそれらを割り当てることによって構築されます。管理されるリソースはプロセッサ，メモリー，ディスク，ネットワークなどです。

これらのリソースは，論理パーティション内に PFM - Agent for Platform をインストールすれば，インストールした論理パーティションのパフォーマンスデータとして取得できます。

また，仮想化システムにはゲスト OS とホスト OS に区分されるものがあります。VMware/Hyper-V や日立サーバ論理分割機構などの，ソフトウェアベースで仮想化を実現している場合はこのケースとなります。ホスト OS はゲスト OS を管理する OS で，ゲスト OS はホスト OS 上で動作する OS のことです。このような場合，PFM - Agent for Platform をゲスト OS 上にインストールしてパフォーマンスを監視します。

PFM - Agent for Platform はインストールした論理パーティション，またはゲスト OS 上のパフォーマンスデータを取得します。

注意

VMware のホスト OS は，仮想化機能を管理するための特殊な OS のため，アプリケーションの動作が保証されていません。日立サーバ論理分割機構の場合は，管理領域が SVP フレームと呼ばれるディスク外領域に作成されるため，管理領域には PFM - Agent for Platform で収集したデータをデータベースとして保存できません。

2.3.5 仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の設定

インストールした PFM - Agent for Platform によって情報を収集する手順は，仮想化システムでも変わりません。既存の設定方法で設定し，利用できます。

仮想化システムによって仮想マシンを構築し，その上で PFM - Agent for Platform をインストールした場合，PFM - Agent for Platform は仮想マシンのパフォーマンスデータを収集します。

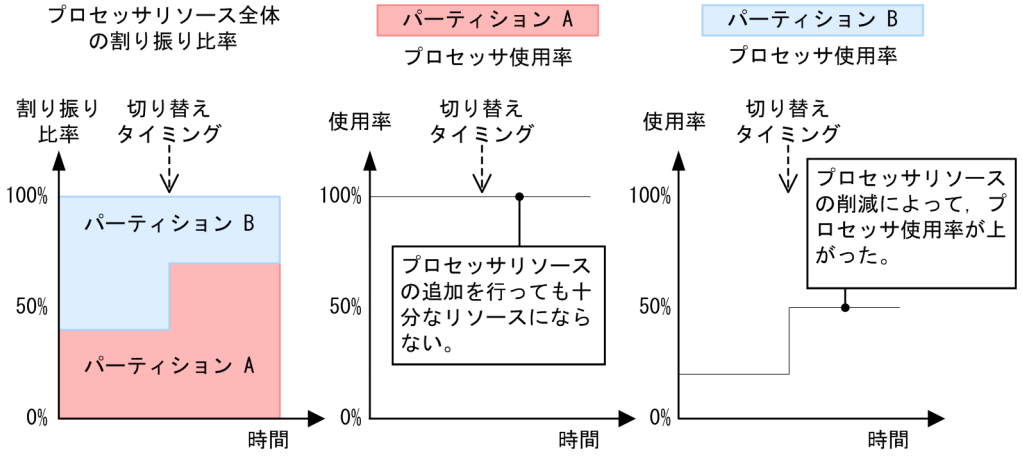
2.3.6 仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の利用例（仮想化システムの設定を変更するべきか判断したい場合）

特定のゲスト OS または論理パーティション上でリソースを大量に消費しているにも関わらず，物理リソースに余裕がある場合，仮想化システムの設定を変更することをお勧めします。

そのような状態かどうかを判定する材料として，PFM - Agent for Platform を利用できます。

次に示すグラフは，プロセッサリソースの割り振り設定が適切でないケースです。

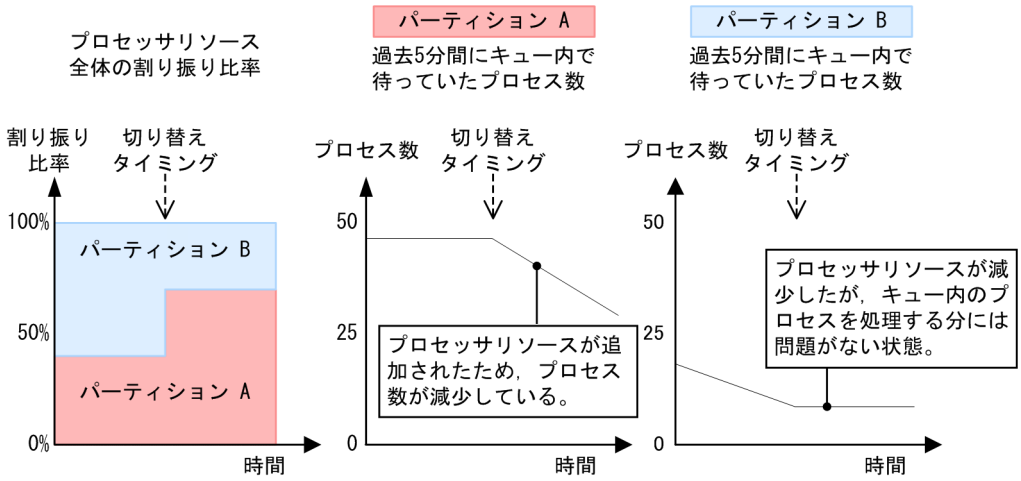
図 2-1 プロセッサリソースの割り振り設定が不十分なケース（プロセッサ使用率監視時）



論理パーティション A のプロセッサ使用率が 100%となっているため，割り振り比率を切り替えています。しかし，論理パーティション A のプロセッサ使用率は下がらないで，論理パーティション B のプロセッサ使用率は余裕がある状態となっています。このような場合は，割り振り比率の設定を変更してください。

次に示すグラフは，プロセッサリソースの割り振り設定が適切なケースです。

図 2-2　プロセッサリソースの割り振り設定が適切なケース（キュー内プロセス数監視時）



論理パーティション A のキュー内のプロセス数が多い状態で，プロセッサリソースの比率を切り替えています。その結果，論理パーティション A のキュー内のプロセス数が減少しています。

2.3.7　仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の利用例（物理的なリソース追加が必要であるか判断したい場合）

物理的なリソースが常に高負荷を示している場合，別途物理的なリソースの追加を検討してください。

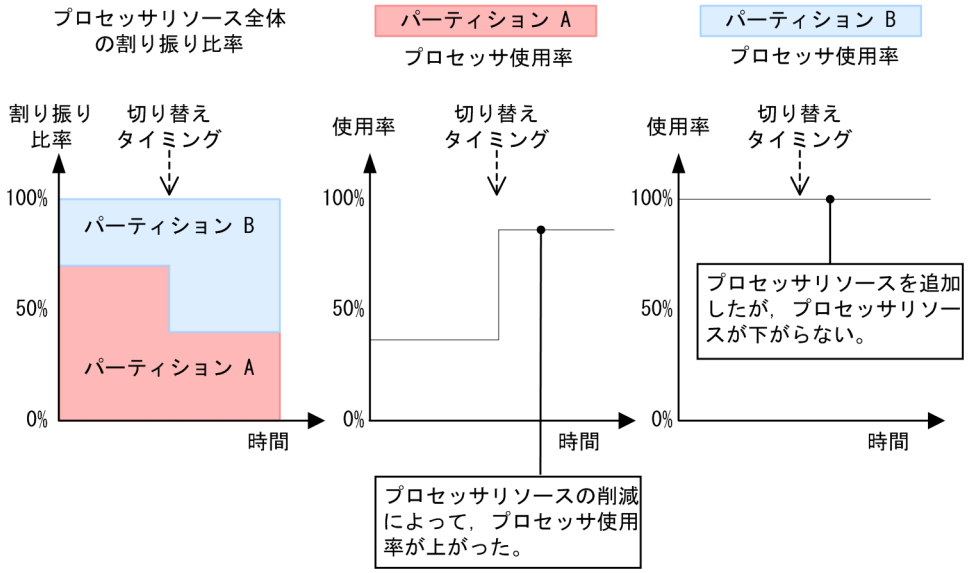
ただし，仮想化システムでは 1 つのゲスト OS または論理パーティションが高負荷でも，システム全体から見ると負荷が低いこともあります。そのため，すべてのゲスト OS，またはすべての論理パーティションが高負荷であることを確認してください。

PFM - Agent for Platform で負荷状況を確認する際に，仮想化システムでは通常の環境と異なる見方が必要になることもあります。

仮想化システムではプロセッサやメモリーなどの動的に変更できるリソースが存在します。そのため，プロセッサやメモリーの使用率だけでなく，現在のキューの長さやページング頻度などの，リソースの動的変更の影響を受けにくい項目もあわせて監視してください。

次に示すグラフは，プロセッサリソースを例とするサンプルです。

図 2-3　プロセッサリソースの追加が必要と推測されるケース（プロセッサ使用率監視時）



図の例では，論理パーティション B のプロセッサ使用率が高負荷のため割り当て比率を切り替えましたが，論理パーティション A と B どちらの使用率も高い状態となっています。このような場合は，物理的なリソースが不足しています。

2.3.8　仮想化システム上で PFM - Agent for Platform を利用する際の注意事項

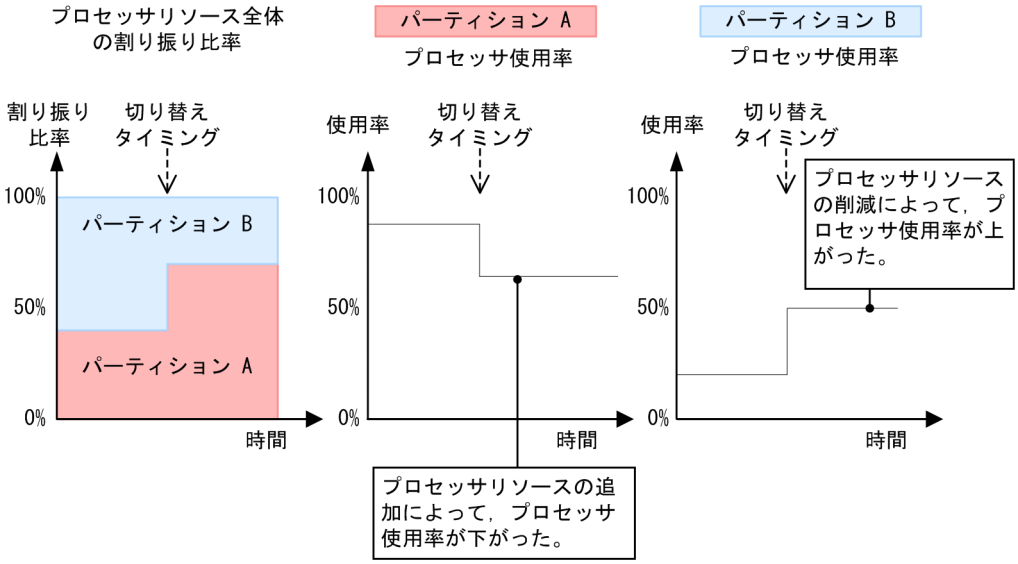
仮想化システム上で PFM - Agent for Platform が収集するパフォーマンスデータは，各仮想マシンが対象です。このため，各仮想マシンに PFM - Agent for Platform をインストールしてください。

仮想化システム全体または管理マシン側から，各仮想マシンのパフォーマンスデータを収集することはできません。

2.3.9　プロセッサ情報収集時の注意点

仮想化システム上で収集するプロセッサの使用率は，意図した値にならないことがあります。これは，仮想化システムがプロセッサのリソースの分割とほかの論理パーティションへの動的割り当てを行うためです。例えば，高負荷によって特定の論理パーティションでプロセッサリソースを大量に使用している場合は，別の論理パーティションでは少ないプロセッサリソースしか使えないことがあります。

図 2-4　リソースの動的変更によって収集値が変更されるケース



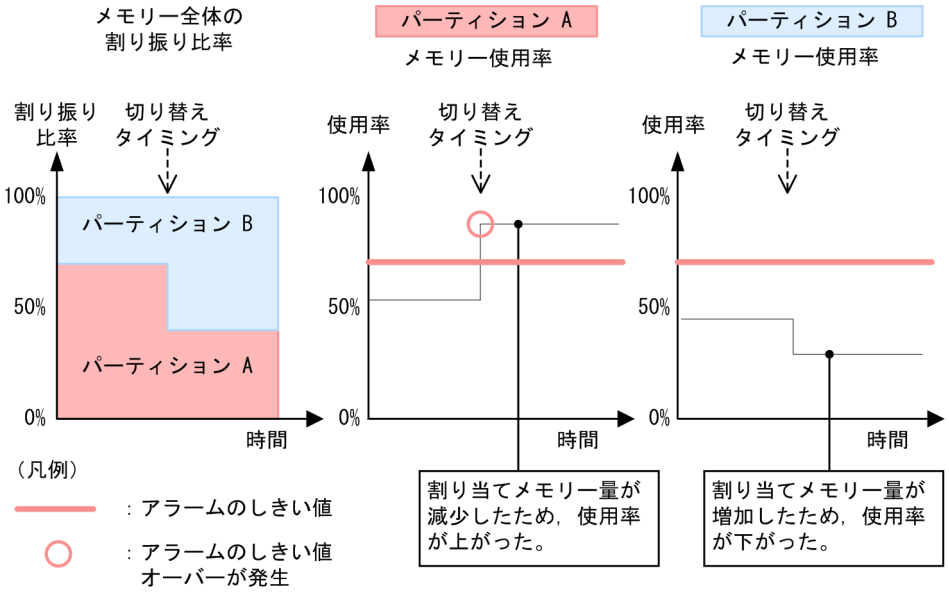
また，ある論理パーティションのアプリケーションが物理的なプロセッサを使用している場合，別の論理パーティションのジョブが稼働中として待たされることがあります。このような場合には，プロセッサ使用率が正確に計測できません。

2.3.10　メモリー情報収集時の注意点

プロセッサと同様に，仮想化システム上のメモリー情報も動的なリソース変更によって全体からの割合が変動することがあります。

例えば，256 メガバイトのメモリー領域が割り当てられ，そのうち 64 メガバイトを使用していたとき，PFM - Agent for Platform のメモリー使用量の割り当ては 25%を示す値を表示します。この状態で，動的に 256 メガバイトのメモリー割り当て領域が 128 メガバイトに変更されると，PFM - Agent for Platform はメモリー使用量として 50%を示す値を表示します。アラームなどに指定した場合は，意図しない警告が発生することがあるため注意してください。

図 2-5　メモリーリソースをアラームに組み込んだときのケース



2.3.11　ディスク情報収集時の注意点

プロセッサリソースと同様に，ディスクビジー率が正確に計測できないことがあります。例えば，仮想化システム上で，一方が物理的なディスクリソースを使用している場合，もう一方はジョブが稼働中として待たされてしまうことがあるためです。

2.3.12　ネットワーク情報収集時の注意点

PFM - Agent for Platform はネットワーク情報としてパケットの送受信だけを計測しています。そのため，仮想化システム上での利用は通常通り行えますが，ネットワーク情報に仮想ネットワークの情報が表示されるケースがあります。これは，仮想マシン上から OS が認識しているネットワーク情報を PFM - Agent for Platform が収集しているため誤りではありません。

2.3.13　プロセス情報収集時の注意点

プロセス関連のパフォーマンスデータには，プロセスの数とプロセスが使用しているリソース量を示すものがあります。どちらも仮想化システム上では論理パーティション上のデータを取得するもので，仮想化システム全体のプロセス情報を収集するものではありません。

PFM - Agent for Platform は各論理パーティション上に存在するプロセスの数と，プロセスが使用しているリソース量の両方を収集します。

2.3.14　仮想化システムの機能と収集されるパフォーマンスデータ

仮想化システムでは，そのシステムの実現方法によって，提供しているリソースの仕組みなどが異なります。また，リソースの変更に関しても，論理パーティションの一時停止が必要なものとそうでないものがあります。論理パーティションの停止が必要な場合，PFM - Agent for Platform も一時停止するため，あまり影響を受けることはありません。しかし，論理パーティションの停止が必要でなく，動的にリソースが変更されるシステムの場合，PFM - Agent for Platform で取得したパフォーマンスデータは大きく影響を受ける場合があります。その場合は，動的なリソース変更に影響を受けにくいパフォーマンスデータを収集することをお勧めします。

仮想化システムごとに，収集できるリソースを次の表に示します。

表 2-4　仮想化システムごとのリソース対応

仮想化システム	リソース			
	プロセッサ数	メモリー	ディスク	ネットワーク
VMware/Hyper-V	△	△	△	△
日立サーバ論理分割機構	△	△	－	△

（凡例）

△：論理パーティションの一時停止が必要

－：未対応

2.3.15　VMware/Hyper-V を使用した仮想化システムで収集できるデータ

VMware/Hyper-V は，Intel アーキテクチャー上で仮想化システムを実現するソフトウェアです。ソフトウェア上で仮想化システムを実現するため汎用性が高く，さまざまな環境で柔軟な動作を提供します。

(1)　VMware/Hyper-V の機能

VMware/Hyper-V が提供する機能は，ほかの仮想化システムと同様に，次のようなものがあります。

- 仮想ネットワーク
- 仮想プロセッサ
- 仮想メモリー
- 仮想ディスク

上記機能を VMware/Hyper-V が管理し，組み合わせることで仮想的なマシンである VM（Virtual Machine）を作成します。作成された VM はほかのホストからは 1 つのホストとして認識され，通常の物理マシンと同様に扱えます。

VM は複数作成して稼働させることができるため，Linux や Windows などの OS を同時に動作させることもできます。

(2) VMware/Hyper-V 上での PFM - Agent for Platform の利用

VMware/Hyper-V 上で PFM - Agent for Platform を利用するに際には，次の点に注意してください。

PFM - Agent for Platform のインストール

利用する際にはゲスト OS にインストールしてください。

プロセッサ情報

仮想化システムでは，ホスト OS に十分なリソースが割り当てられていない場合，ホスト OS の動作にも影響が出ます。特に，プロセッサリソースはその影響が顕著で，過負荷が発生したとき，VM に割り当てられているプロセッサリソースが不足しているのか，ホスト OS のプロセッサリソースが不足しているのかが判断できない場合があります。

また，仮想化システムによっては，プロセッサ使用率の割り当て上限，または下限を設定し，その範囲であれば自動でリソースの変動が行われるため，使用率が大幅に変動するおそれがあります。

それらが想定される場合は，現在のキューの長さなどプロセッサリソースの動的変更の影響を受けにくい項目を監視してください。

メモリー

動的に変更されるリソースとして，アラームの設定には注意してください。使用しているメモリーが一定であっても，割り当てているメモリーリソースを減少させると，メモリー使用率は増加するため，意図しないアラームが通知されることがあります。

デバイス

ディスクのパフォーマンスデータはゲスト OS 上の論理パーティション群だけです。ホスト OS を含むシステム全体のパフォーマンスデータは収集できません。ネットワークアダプター情報に関しては，ゲスト OS に割り当てられた仮想的なネットワークアダプター情報を取得します。

2.3.16 日立サーバ論理分割機構を使用した仮想化システムで収集できるデータ

(1) 日立サーバ論理分割機構の機能

日立サーバ論理分割機構が提供する機能は，ほかの仮想化システムと同様に，次のようなものがあります。

- 仮想ネットワーク
- 仮想プロセッサ
- 仮想メモリー

上記機能を日立サーバ論理分割機構が管理し，仮想化システムを実現します。仮想ネットワーク，仮想プロセッサの割り当て数，仮想メモリーのリソースを変更するときは，論理パーティションを停止する必要があります。仮想プロセッサの割り当て率を変更するときは，論理パーティションを停止する必要はありません。

(2) 日立サーバ論理分割機構の構造

日立サーバ論理分割機構は VMware と同じような親子構造をしています。日立サーバ論理分割機構で仮想化システム構築の手順を簡単に説明します。

1. インストールした日立サーバ論理分割機構を起動する。
2. 仮想マシンの作成および設定を行う。
3. 仮想マシンを起動する。

(3) 日立サーバ論理分割機構上での PFM - Agent for Platform の利用

日立サーバ論理分割機構上で PFM - Agent for Platform を利用するには，次の点に注意してください。

PFM - Agent for Platform のインストール

日立サーバ論理分割機構は SVP フレームという特殊な環境に構築されます。そのため，SVP フレーム上に PFM - Agent for Platform をインストールしないでください。

プロセッサ情報

日立サーバ論理分割機構は，論理パーティションを設定してから起動する仮想化システムのため，PFM - Agent for Platform の動作中にプロセッサ数が変更されることはありません。そのため，通常通り運用できますが，割り当てられたプロセッサ数と物理的に存在するプロセッサ数が一致しないことがあります。

メモリー

日立サーバ論理分割機構は，論理パーティションを設定してから起動する仮想化システムのため，PFM - Agent for Platform の動作中にメモリー量が変更されることはありません。そのため通常どおり運用できます。

デバイス

ディスクのパフォーマンスデータは論理パーティション群だけです。ホスト OS を含むシステム全体のパフォーマンスデータは収集できません。ネットワークアダプター情報に関しては，論理パーティションに割り当てられた仮想的なネットワークアダプター情報を取得します。

2.3.17　Docker 環境で収集できるデータ

(1)　Docker 環境の概要

Windows Server 2016 で利用できる Docker 環境（Windows コンテナ機能）は，1 つの Windows システム内で，ソフトウェア的に仮想化された複数の Windows 環境を稼働できます。Docker コンテナ（Windows コンテナ）は，ホスト OS とリソースを共有するため，仮想マシンと比べて，アプリケーション実行のオーバーヘッドが小さくて済みます。

(2)　Docker 環境の構造

Docker 環境は，アプリケーション用のワークスペースを提供する Solaris の Zone と同じような構造をしています。

Docker 環境は，Docker コンテナ（Windows コンテナ）環境と Docker コンテナを管理するホスト（Docker ホスト）環境から構成されます。

Windows コンテナには次の 2 種類が存在します。

- Windows Server コンテナ
  Windows Server コンテナ上のプロセスは，ホスト OS 上のプロセスとして実行されるため，コンテナの起動が速い特徴があります。
- Hyper-V コンテナ
  Hyper-V コンテナ上のプロセスは，Hyper-V 上のゲスト OS 内のプロセスとして実行されるため，隔離性が高い代わりに，コンテナの起動に時間が掛かります。

PFM - Agent for Platform がサポートする Docker 環境を次に示します。

Docker ホストの OS のバージョン

- Windows Server 2016

(3)　Docker ホスト環境でのプロセス監視

PFM - Agent for Platform が Docker ホスト環境上で動作する場合，Docker コンテナ内のプロセス情報を収集できます。

> **重要**
>
> PFM - Agent for Platform を Docker コンテナ環境にインストールすることはできません。

ALL Container Collection for Process プロパティの設定によって，Docker コンテナ内のプロセス情報を収集するかどうかを選択できます。ALL Container Collection for Process プロパティの設定値を次に示します。

Yes

Docker ホスト環境およびすべての Docker コンテナ環境のプロセス情報※を収集する。

注※

Windows Server コンテナのプロセス情報を収集できます。Hyper-V コンテナのプロセス情報は収集できません。

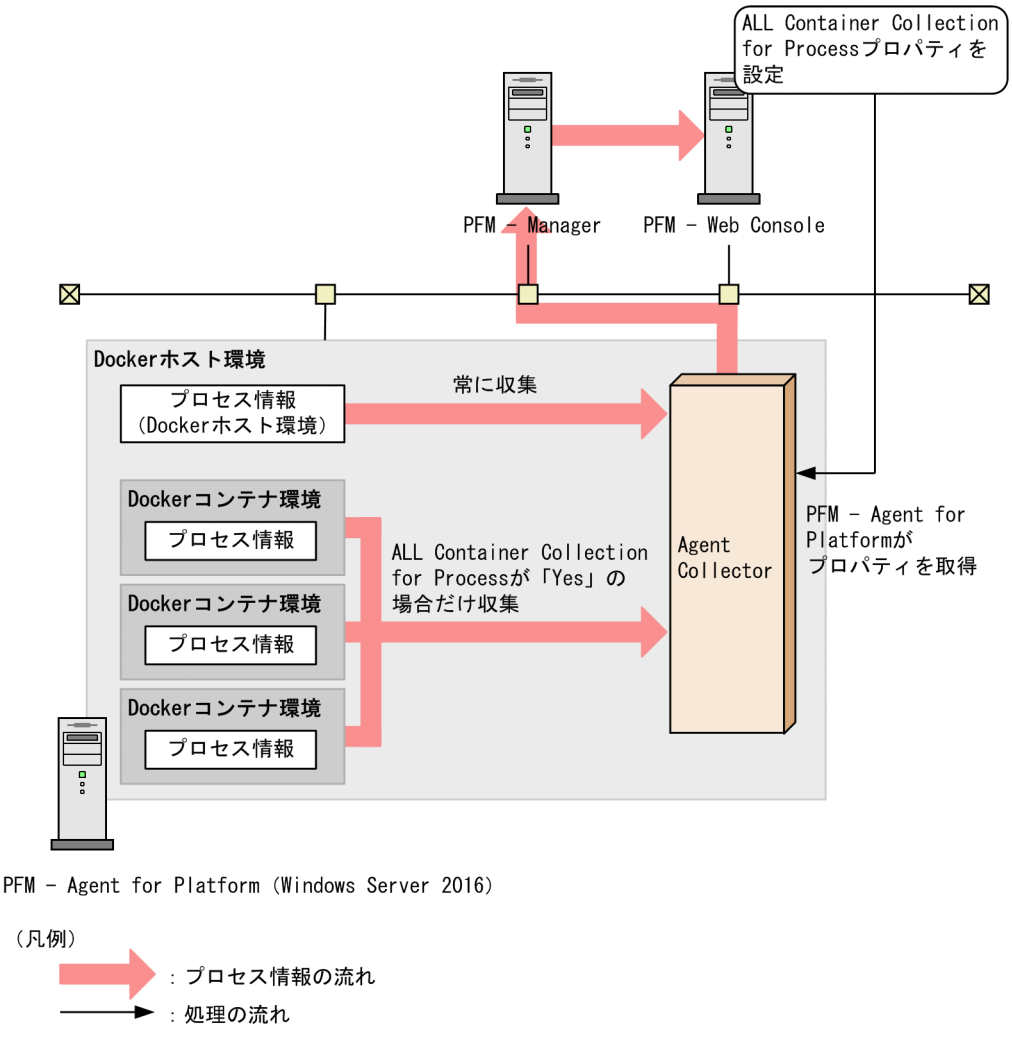
No

Docker ホスト環境のプロセス情報だけを収集する。

ALL Container Collection for Process プロパティのデフォルト値は「Yes」です。

Docker ホスト環境上で PFM - Agent for Platform が動作する場合に収集するプロセス情報を次の図に示します。

図 2-6　Docker ホスト環境上で収集するプロセス情報



(4)　プロパティの設定と取得情報との関係

ALL Container Collection for Process プロパティと Virtual Environment ID プロパティの設定内容と，取得情報の関係について説明します。

- PD レコード

PD レコードで収集されるプロセス情報について，プロパティの設定と取得情報との関係を次の表に示します。

表 2-5　プロパティの設定と取得情報との関係（PD レコード）

ALL Container Collection for Process プロパティの設定	取得情報	
	収集データ範囲	Virtual Env ID フィールドの値
Yes	Docker ホスト環境およびすべての Docker コンテナ環境	それぞれの Docker コンテナの ID※
No	Docker ホスト環境	0

注※

仮想化環境の ID（Virtual Env ID フィールドの値）は，Docker ホスト環境の場合は「0」，Docker コンテナ環境の場合は Docker コンテナに割り振られている ID となります。

- PD_APP レコード

PD_APP レコードでは，収集するプロセスを特定の環境だけに限定できません。収集するプロセスを特定の環境だけに限定する場合は，PD_APP2 レコードを使用してください。

なお，PFM - Agent for Platform が収集するデータの範囲は，ALL Container Collection for Process プロパティの設定値の影響を受けません。

PD_APP レコードで収集されるプロセス情報について，プロパティの設定と取得情報との関係を次の表に示します。

表 2-6　プロパティの設定と取得情報との関係（PD_APP レコード）

ALL Container Collection for Process プロパティの設定	収集データ範囲
Yes	Docker ホスト環境およびすべての Docker コンテナ環境
No	Docker ホスト環境およびすべての Docker コンテナ環境

- PD_APPD レコードおよび PD_APP2 レコード

PD_APPD レコードおよび PD_APP2 レコードで収集されるプロセス情報について，プロパティの設定と取得情報との関係を次の表に示します。

表 2-7　プロパティの設定と取得情報との関係（PD_APPD レコードおよび PD_APP2 レコード）

プロパティの設定		取得情報	
ALL Container Collection for Process	Virtual Environment ID※1	収集データ範囲	Virtual Env ID フィールドの値※2
Yes	空白	Docker ホスト環境およびすべての Docker コンテナ環境	空白
Yes	0	Docker ホスト環境	0
Yes	存在する Docker コンテナの ID	指定した Docker コンテナ環境	指定した Docker コンテナの ID
Yes	存在しない Docker コンテナの ID	－	－
No	空白	Docker ホスト環境	空白
No	0	Docker ホスト環境	0
No	存在する Docker コンテナの ID	－	－
No	存在しない Docker コンテナの ID	－	－

（凡例）

－：収集されません。PD_APPD レコードの場合，Monitoring Count フィールドには 0 が表示されます。

注※1

PFM - Web Console の［サービス階層］画面でホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択し，［Advanced application monitoring］－［Application monitoring setting］ツリーからアプリケーション名を選択したときに表示されるプロパティです。PFM - Web Console の［エージェント階層］画面から表示する［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成］画面または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集］画面では，［仮想化環境の識別子］に当たります。

注※2

PD_APPD レコードには，Virtual Env ID フィールドはありません。

- PD_APSI レコード

PD_APSI レコードで収集されるプロセス情報について，プロパティの設定と取得情報との関係を次の表に示します。

表 2-8　プロパティの設定と取得情報との関係（PD_APSI レコード）

プロパティの設定		取得情報	
ALL Container Collection for Process	Virtual Environment ID※1	収集データ範囲	Virtual Env ID フィールドの値
Yes	空白	Docker ホスト環境およびすべての Docker コンテナ環境	それぞれの Docker コンテナの ID※2
Yes	0	Docker ホスト環境	0
Yes	存在する Docker コンテナの ID	指定した Docker コンテナ環境	指定した Docker コンテナの ID
Yes	存在しない Docker コンテナの ID	―※3	－
No	空白	Docker ホスト環境	0
No	0	Docker ホスト環境	0
No	存在する Docker コンテナの ID	―※3	－
No	存在しない Docker コンテナの ID	―※3	－

（凡例）

－：収集されません。

注※1

PFM - Web Console の［サービス階層］画面でホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択し，［Advanced application monitoring］－［Application monitoring setting］ツリーからアプリケーション名を選択したときに表示されるプロパティです。PFM - Web Console の［エージェント階層］画面から表示する［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成］画面または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集］画面では，［仮想化環境の識別子］に当たります。

注※2

仮想化環境の ID（Virtual Env ID フィールドの値）は，Docker ホスト環境の場合は「0」，Docker コンテナ環境の場合は Docker コンテナに割り振られている ID となります。

注※3

レポートに表示されません。

- PD_APS レコード

PD_APS レコードで収集されるプロセス情報について，プロパティの設定と取得情報との関係を次の表に示します。

表 2-9　プロパティの設定と取得情報との関係（PD_APS レコード）

ALL Container Collection for Process プロパティの設定	取得情報	
	収集データ範囲	Virtual Env ID フィールドの値
Yes	Docker ホスト環境およびすべての Docker コンテナ環境	それぞれの Docker コンテナの ID※
No	Docker ホスト環境	0

注※

仮想化環境の ID（Virtual Env ID フィールドの値）は，Docker ホスト環境の場合は「0」，Docker コンテナ環境の場合は Docker コンテナに割り振られている ID となります。

(5)　Docker ホスト環境での注意事項

PFM - Agent for Platform を Docker ホスト環境にインストールしてプロセスの情報を収集する場合の注意事項を，次に示します。

- PFM - Agent for Platform は，Docker Engine API を使用し，デフォルトの名前付きパイプの設定で Docker との通信を行うため，Docker Engine API の名前付きパイプの設定を変更しないでください。名前付きパイプをデフォルトから変更すると，Docker Engine との通信に失敗し，PD レコード，PD_APSI レコード，PD_APS レコードで取得するすべてのプロセスの Virtual Env ID フィールドの値が「N/A」となります。
- PFM - Agent for Platform のレコード情報収集時に，Docker Engine との通信中にエラーが発生した場合，または，Docker Engine との通信中に Docker コンテナの起動または停止が行われた場合，一部のプロセスについて，Docker ホスト上で動作しているのか，Docker コンテナ上で動作しているのかが判断できないことがあります。この場合，動作環境を判断できなかったプロセスについて，PD レコード，PD_APSI レコード，および PD_APS レコードの Virtual Env ID フィールドの値が「N/A」となります。

2.3.18　仮想化システム別の収集データ範囲

- Docker 環境

  Docker 環境で PFM - Agent for Platform を利用する場合に，PFM - Agent for Platform が収集するデータの範囲については，「2.3.17　Docker 環境で収集できるデータ」を参照してください。
- VMware/Hyper-V，日立サーバ論理分割機構環境

  VMware/Hyper-V および日立サーバ論理分割機構環境の仮想化システムで PFM - Agent for Platform を利用する場合に，PFM - Agent for Platform が収集するデータの範囲を次の表に示します。

表 2-10　仮想化システム別の収集データ範囲（VMware/Hyper-V および日立サーバ論理分割機構環境）

レコード	VMware/Hyper-V および日立サーバ論理分割機構
PD	ゲスト OS 上のプロセス。
PD_APP	ゲスト OS 上のプロセスまたはサービス制御マネージャーに登録されているアプリケーションサービス。
PD_APP2	ゲスト OS 上のプロセスまたはサービス制御マネージャーに登録されているアプリケーションサービスのパフォーマンスデータ。
PD_APPD	ゲスト OS 上のプロセスまたはサービス制御マネージャーに登録されているアプリケーションサービスのパフォーマンスデータ。
PD_APS	ゲスト OS 上のプロセス。
PD_APSI	ゲスト OS 上のプロセス。
PD_ASVC	ゲスト OS 上のサービス制御マネージャーに登録されているアプリケーションサービスのパフォーマンスデータ。
PD_DEV	ゲスト OS 上のファイルシステムドライバおよびカーネルドライバのデバイス。
PD_ELOG	ゲスト OS 上のイベントログ。
PD_GD64	ゲスト OS 上でユーザー定義したパフォーマンスデータ。
PD_GEND	ゲスト OS 上でユーザー定義したパフォーマンスデータ。
PD_PAGF	ゲスト OS 上のページングファイルのインスタンスに関するパフォーマンスデータ。
PD_PDI	ゲスト OS 上のプロセス。
PD_PEND	ゲスト OS 上のプロセス。
PD_SVC	ゲスト OS 上のサービス制御マネージャーに登録されているアプリケーションサービスのパフォーマンスデータ。
PD_UPD	ゲスト OS 上でユーザーが独自に指定したパフォーマンスデータ。
PD_UPDB	ゲスト OS 上でユーザーが独自に指定したパフォーマンスデータ。
PI	ゲスト OS 上のシステム値。
PI_AD	ゲスト OS 上の Active Directory のパフォーマンスデータ。
PI_BRSR	−
PI_GENI	ゲスト OS 上でユーザー定義したパフォーマンスデータ。
PI_GI64	ゲスト OS 上でユーザー定義したパフォーマンスデータ。
PI_ICM6	ゲスト OS 上の ICMP 関連パフォーマンスデータ。
PI_ICMP	ゲスト OS 上の ICMP 関連パフォーマンスデータ。
PI_IP	ゲスト OS 上の IP 関連パフォーマンスデータ。
PI_IP6	ゲスト OS 上の IP 関連パフォーマンスデータ。

レコード	VMware/Hyper-V および日立サーバ論理分割機構
PI_LOGD	ゲスト OS に割り当てられた論理パーティションのパフォーマンスデータ。
PI_NBT	－
PI_NETI	ゲスト OS 上の TCP/IP 関連パフォーマンスデータ。
PI_PCSR	ゲスト OS に割り当てられたプロセッサ情報。
PI_PHYD	ゲスト OS に割り当てられた論理パーティションの合計値，または平均値のパフォーマンスデータ。
PI_SVRQ	ゲスト OS が提供する Server サービスのキューに関するパフォーマンスデータ。
PI_TCP	ゲスト OS 上の TCP 関連パフォーマンスデータ。
PI_TCP6	ゲスト OS 上の TCP 関連パフォーマンスデータ。
PI_UDP	ゲスト OS 上の UDP 関連パフォーマンスデータ。
PI_UDP6	ゲスト OS 上の UDP 関連パフォーマンスデータ。
PI_UPI	ゲスト OS 上でユーザーが独自に指定したパフォーマンスデータ。
PI_UPIB	ゲスト OS 上でユーザーが独自に指定したパフォーマンスデータ。
PI_WGRP	ゲスト OS 上のプロセス。
PI_WINS	－
PI_XUI1～PI_XUI5	ゲスト OS 上でユーザーが独自に指定したパフォーマンスデータ。

（凡例）

－：該当しない

2.4 監視テンプレートについて

Performance Management では，次の方法でアラームとレポートを定義できます。

- PFM - Agent で定義されているアラームやレポートをそのまま使用する
- PFM - Agent で定義されているアラームやレポートをコピーしてカスタマイズする
- ウィザードを使用して新規に定義する

PFM - Agent で用意されているアラームやレポートを「監視テンプレート」と呼びます。監視テンプレートのレポートとアラームは，必要な情報があらかじめ定義されているので，コピーしてそのまま使用したり，ユーザーの環境に合わせてカスタマイズしたりできます。そのため，ウィザードを使用して新規に定義をしなくても，監視対象の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

PFM - Agent for Platform で定義されている監視テンプレートのアラームとレポートの設定内容については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。監視テンプレートの使用方法の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，アラームによる稼働監視および稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

重要

監視テンプレートのアラームに設定されているしきい値は参考例です。監視テンプレートのアラームを使用する場合は，コピーして，環境や OS に合わせて適切なしきい値を設定してください。

3 パフォーマンス監視の運用例の紹介

この章では，PFM - Agent for Platform を使用した，パフォーマンス監視の運用例を紹介します。

3.1　パフォーマンスの監視例

ここでは，システムリソースごとのパフォーマンスの監視方法およびパフォーマンスデータの収集例について説明します。

- レコード名は，レコード ID で表記しています。フィールド名は，PFM - View 名で表記しています。正式なレコード名，フィールド名については，「8.　レコード」を参照してください。
- フィールドの説明は概要だけを記載しています。フィールドの詳細な説明については，「8.　レコード」を参照してください。
- 複数のプログラムの情報をまとめて監視したい場合は，「6.4　ワークグループ情報の収集に関する設定」を参照してください。
- プロセスやアプリケーションの稼働・非稼働情報など，各種のユーザーレコードを監視する方法については「6.　ユーザーレコードの収集」を参照してください。

3.1.1　プロセッサの監視例

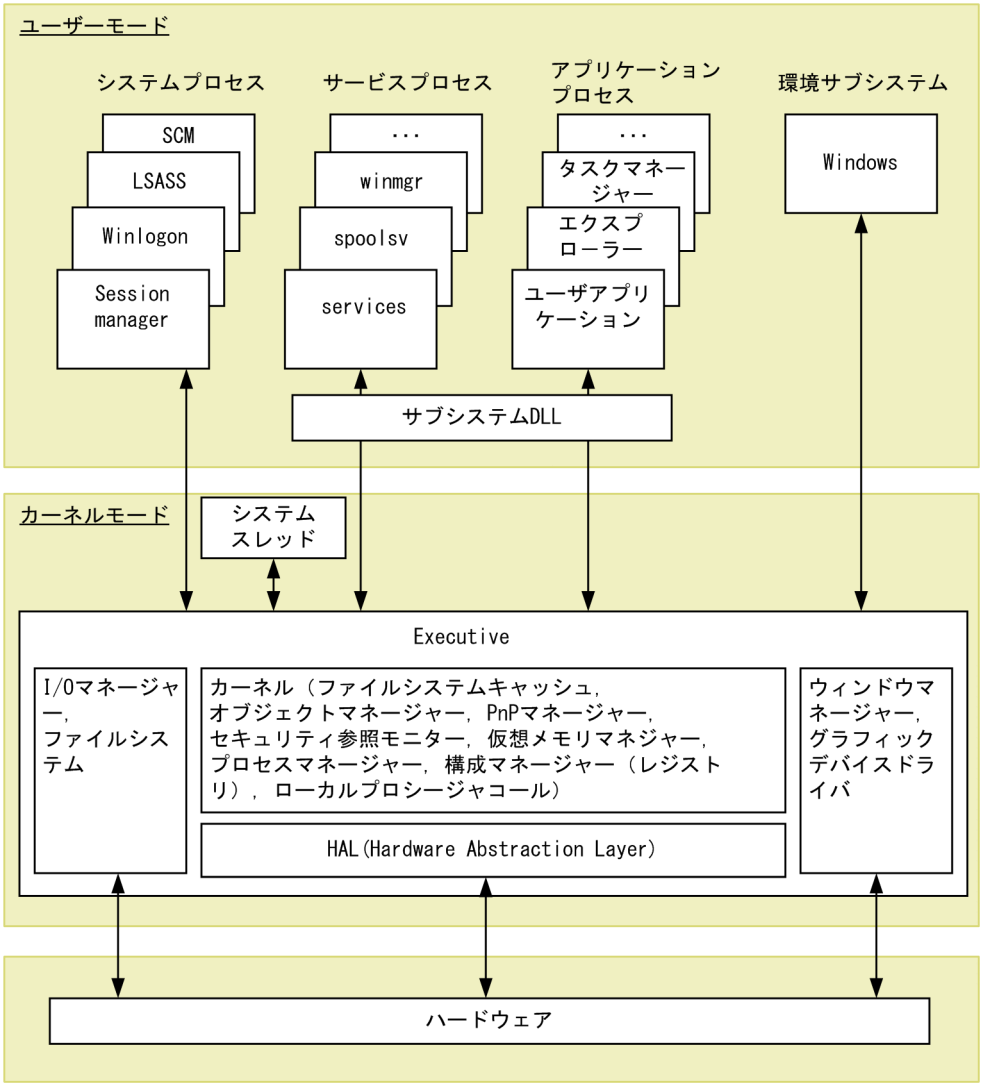
プロセッサのパフォーマンスを監視する方法について説明します。

(1)　概要

プロセッサのパフォーマンス情報を監視すれば，システム全体のパフォーマンスの傾向を把握できます。

Windows では，次の図に示すように，ユーザーモードとカーネルモードという，2 種類のプロセッサアクセスモードでプロセスを実行しています。Windows のアーキテクチャー概要図を次に示します。

図 3-1　Windows のアーキテクチャー概要図



さらに，キュー数で監視する方法が考えられます。

プロセスなどのジョブは，OS によってスケジューリングされ CPU を割り当てられて実行されます。キュー数は，CPU の割り当てられるのを待っているジョブの数です。このため，システム全体の負荷が高くなると，キュー数が増大する傾向にあります。

監視テンプレートでは，CPU Usage アラームや，CPU Status（Multi-Agent）レポートなどを提供しています。

監視テンプレートで用意されているプロセッサのパフォーマンスをさらに詳細に監視するには，プロセッサごとのプロセッサ使用率，プロセスごとのプロセッサ使用率，プロセッサのキュー数，およびハードウェアからのプロセッサ割り込みなどを監視する方法が考えられます。

関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 3-1　プロセッサに関連する主なフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PI_PCSR	CPU %	各プロセッサの CPU 使用率。継続してしきい値（通常 85%を目安とする）以上の値の場合，プロセッサがシステムのボトルネックになっているおそれがある。※
	Interrupts/sec	プロセッサごとの 1 秒当たりのハードウェア割り込みを処理した数。PI レコードの Total Interrupts/sec フィールドをプロセッサごとに監視する場合に使用する。
	Privileged CPU %	ワークグループが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。PI_PCSR レコード CPU %フィールドが継続してしきい値以上の場合，特定のアプリケーションプロセス（サービスを含む）またはシステムプロセス（サービスを含む）に問題があるおそれがある。※
	User CPU %	ユーザーモードで実行した各プロセッサの CPU 使用率。 PI_PCSR レコード CPU %フィールドが継続してしきい値以上の場合，特定のアプリケーションプロセス（サービスを含む）に問題があるおそれがある。※
PI_SVRQ	Queue Length	CPU のサーバ作業キューの現在の長さ。継続してしきい値（2）以上の値の場合，プロセッサの混雑を示す。
PI	Processor Queue Length	プロセッサのキューにある実行準備ができているスレッドの数。継続してしきい値（2）以上の値の場合，プロセッサの混雑を示す。
	CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は「100」で表示される。
	Privileged CPU %	カーネルモードで実行した CPU 使用率。PI レコード CPU %フィールドが継続してしきい値以上の場合，特定のアプリケーションプロセス（サービスを含む）またはシステムプロセス（サービスを含む）に問題があるおそれがある。
	User CPU %	ユーザーモードで実行したの CPU 使用率。PI レコード CPU %フィールドが継続してしきい値以上の場合，特定のアプリケーションプロセス（サービスを含む）に問題があるおそれがある。
	Total Interrupts/sec	1 秒当たりのハードウェア割り込みを処理した数。システムの活動状況がない状態で，このフィールドが大幅に増加している場合，ハードウェア割り込みでプロセッサに負荷を掛ける低速なデバイスが存在するなどのハードウェアの問題を示すおそれがある。

注※

各プロセッサを監視する場合に使用します。

マルチプロセッサ環境の場合，システムの CPU 使用率は全 CPU の使用率の平均値で表されます。このため，CPU ごとの CPU 使用率を確認してください。

また，ボトルネックの原因になっているプロセスを特定するには，プロセスごとの CPU 使用率を確認してください。

関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 3-2　プロセッサに関連する主なフィールド（マルチプロセッサ環境）

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PD_PDI	CPU %	各プロセスの CPU 使用率。継続してしきい値以上の値の場合，プロセスがプロセッサのボトルネックになっているおそれがある。※
	Privileged CPU %	ワークグループが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。CPU %フィールドが継続してしきい値以上の値で，さらに Privileged CPU %が CPU %フィールドに近い値の場合，プロセスが発行している API がプロセッサのボトルネックになっているおそれがある。※
	User CPU %	ユーザーモードで実行した各プロセスの CPU 使用率。CPU %フィールドが継続してしきい値以上の値で，さらに User CPU %が CPU %フィールドに近い値の場合，プロセスの処理がプロセッサのボトルネックになっているおそれがある。※

注※

マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示されます。

(2)　監視方法

(a)　プロセッサ使用率を監視したい

プロセッサ使用率は，監視テンプレートで提供している CPU Usage アラームを使用することで，システム全体のプロセッサ使用率を監視できます。

プロセッサの使用率（PI レコード CPU %フィールド）は，プロセッサの負荷状況を監視できます。詳細については，「3.2.1(1)　監視テンプレート」を参照してください。

(b)　プロセッサの混雑を監視したい

プロセッサの混雑（キュー数）を監視することで，プロセッサ使用率と同様，プロセッサの負荷状況を監視できます。

プロセッサの混雑は，プロセッサ使用率とあわせて監視すると効果的です。

プロセッサ使用率とキューの長さ（PI_SVRQ レコードの Queue Length フィールド）がしきい値以上の値を表示している場合，プロセッサが混雑していると考えられます。

また，キューにあるスレッドの数（PI レコードの Processor Queue Length フィールド）は 2 程度がしきい値となります。この値が 10 以上の値を表示している場合，システムの限界を超えているおそれがあります。プロセッサをアップグレードするか，プロセッサを追加するなどの対策の目安となります。

定義例については，「3.2.1(2)　監視テンプレート以外の定義例」を参照してください。

(c)　プロセッサ使用率が高いプロセスを確認したい

プロセッサ使用率とプロセッサの混雑を監視して，ボトルネックになっているおそれがあると判断した場合，過度にプロセッサを使用しているプロセス（PD_PDI レコード CPU %フィールド）を，リアルタイムレポートで見つけます。

プロセスに問題がない場合，限界を超えるシステム環境のため，プロセッサをアップグレードするか，プロセッサを追加するなどの目安となります。

定義例については，「3.2.1(2)　監視テンプレート以外の定義例」を参照してください。

3.1.2　メモリーの監視例

メモリーのパフォーマンスを監視する方法について説明します。

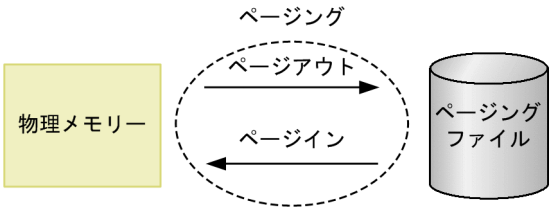
(1)　概要

メモリーを監視することによって，物理メモリーの不足を検出したり，プロセスの不正な動作を検出したりできます。

メモリーは，次の図のように，物理メモリーとページングファイルから構成されています。物理メモリーやページングファイルが十分でないからといってメモリーが不足しているだけとは限りません。このため，メモリー使用量に加えて，ページングやページフォルトなどのメモリー利用効率もあわせて監視してください。

メモリー空間の構成を次の図に示します。

図 3-2　メモリー空間概念図



物理メモリーが不足している場合，システム全体のパフォーマンスの低下を招きます。また，プログラムが参照するメモリー領域は，一定時間以上アクセスされないとページングファイル上に退避され，必要なタイミングで物理メモリーにロードされます。このようにして，少ない物理メモリーを有効利用します。しかし，ページングファイルへのアクセスは物理メモリーのアクセスに比べて，大幅に低速です。このため，メモリー利用効率が悪くページングやページフォルトが大量に発生している場合，システム処理の大幅な遅延が発生している状態を意味します。

- ページング

物理メモリーとページファイルとの間で発生するコードとデータの移動を指します。ページングファイルから物理メモリーへのロードをページインと呼び，物理メモリーからページングファイルへの退避をページアウトと呼びます。

- ページフォルト

  物理メモリーに存在しない領域をアクセスすることを指します。

ページングなどは，標準的な処理でも行われています。このため，システム安定稼働時のベースラインを測定し，適切なしきい値を決定してください。

監視テンプレートでは，Available Memory アラームを提供しています。さらに詳細な情報を参照するには，次のような関連するレコードとフィールドを参考にしてください。

表 3-3　メモリーに関連する主なフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PI	Pages/sec	ページングした 1 秒当たりの操作数。継続してしきい値（5）以上の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがある。ただし，一時的にしきい値以上の場合，20 までは許容範囲になることがある。
	Page Faults/sec	ページフォルトが発生した 1 秒当たりの数。継続してしきい値（5）以上の場合，メモリーがボトルネックになっているおそれがある。
	Data Map Hits %	ページングが発生しないで，ファイルシステムキャッシュにページをマッピングした要求の割合。低い値が継続している場合，メモリーがボトルネックになっているおそれがある。
	Total Physical Mem Mbytes	物理メモリーの容量。
	Available Mbytes	物理メモリーの空き容量。
	Used Physical Mem Mbytes	物理メモリーの使用量。
	% Physical Mem	物理メモリーの使用率。
	Commit Limit Mbytes	仮想メモリーの容量。
	Non Committed Mbytes	仮想メモリーの空き容量。
	Committed Mbytes	仮想メモリーの使用量。継続してしきい値（PI レコード Total Physical Mem Mbytes フィールド）以上の場合，より多くの物理メモリーが必要な可能性がある。
	% Committed Bytes in Use	仮想メモリーの使用率。継続してしきい値（システムの負荷状態で判断）以上の場合，ページングファイルの拡張が必要な可能性がある。
PD_PAGF	% Usage	ページングファイルの使用率。継続してしきい値（システムの負荷状態で判断）以上の場合，ページングファイルの拡張が必要な可能性がある。

システムのメモリー不足は，メモリー不足が原因であるとは限りません。プログラムの不具合が原因で，メモリーが不足する場合もあります。プロセスごとのメモリー使用量を監視すれば，これらの原因を切り

分けることができます。不当にメモリーを占有していたり，メモリー使用量が単調に増加していたりするプロセスがある場合，そのプロセスのプログラムに不具合があると判断できます。

特定のプロセスに関するメモリー使用量を参照するには，次のレコードとフィールドを参考にしてください。

表 3-4　プロセスごとのメモリーに関連する主なフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PI	Pool Nonpaged Bytes	ページアウトできない物理メモリー使用量。サーバの活動状況が増加していない状態で，このフィールドが増加し続けている場合，メモリーリークを発生させているプロセスが存在しているおそれがある。
PD_PDI	Page Faults/sec	ページフォルトが発生した 1 秒当たりの数。プロセスのページフォルトからボトルネックを発生させているプロセスを洗い出す。
	Pool Nonpaged Kbytes	各種メモリー，ハンドル使用量。このフィールド（メモリー，ハンドル数）が増加し続けている場合，プロセスがメモリーリークを発生させているおそれがある。
	Pool Paged Kbytes	
	Working Set Kbytes	
	Page File Kbytes	
	Private Kbytes	
	Handle Count	

(2)　監視方法

(a)　物理メモリーの未使用サイズを監視したい

物理メモリーの未使用サイズ（PI レコード Available Mbytes フィールド）は，監視テンプレートで提供している Available Memory アラームで監視できます。

詳細については，「3.2.2(1)　監視テンプレート」を参照してください。

(b)　仮想メモリーの使用状況を監視したい

仮想メモリーの使用状況は，メモリーの増設が必要かどうかの目安となります。

メモリーの使用状況が一時的に高い場合でも，継続的な高負荷状態ではないときは，パフォーマンスの低下を許容できる可能性があるため，仮想メモリーの負荷状況と合わせて監視すると効果的です。

使用している仮想メモリー使用量（PI レコード Committed Mbytes フィールド）が，物理メモリー総量（PI レコード Total Physical Mem Mbytes フィールド）以上の場合，より多くのメモリーが必要な可能性があります。

定義例については，「3.2.2(2)　監視テンプレート以外の定義例」を参照してください。

(c)　仮想メモリーの負荷状況を監視したい

仮想メモリーの負荷状況は，メモリーの増設が必要かどうかの目安となります。

メモリーの使用状況が一時的に高い場合でも，継続的な高負荷状態ではないときは，パフォーマンスの低下を許容できる可能性があるため，仮想メモリーの使用状況と合わせて監視すると効果的です。

ページフォルト数（PI レコード Page Faults/sec フィールド）がしきい値以上の場合，アプリケーションが確保するメモリー量に対して，サーバに割り当てられているメモリーが不足しているおそれがあります。

ページング数（PI レコード Pages/sec フィールド）がしきい値以上の場合，物理メモリーが不足している可能性があります。

定義例については，「3.2.2(2)　監視テンプレート以外の定義例」を参照してください。

(d)　メモリーリークが発生していないか確認したい

メモリーリークが発生すると余分なメモリーを消費するため，システム全体が正しく動作しません。履歴レポートの折れ線グラフで，非ページプールのメモリー量（PI レコード Pool Nonpaged Bytes フィールド）が単調に増加していないか確認することで，メモリーリークが発生していないか確認できます。

起動プロセスの増減がない状態で，非ページプールのメモリー量（PI レコード Pool Nonpaged Bytes フィールド）が単調に増加している場合，メモリーリークを発生させているプロセスが存在するおそれがあります。

定義例については，「3.2.2(2)　監視テンプレート以外の定義例」を参照してください。

(e)　プロセスのメモリー使用量を監視したい

メモリーリークが発生していると判断した場合，原因となるプロセスを特定してください。

サーバの活動状況が増加していない状態で，各プロセスのメモリー使用量（PD_PDI レコード Working Set Kbytes フィールドなど）をリアルタイムレポートで数分～数十分程度監視し，表示されている折れ線グラフで増加し続けているプロセスがないか確認します。

メモリーリークを発生させているプロセスを特定し，製造元に問い合わせるなどの対策の目安となります。

定義例については，「3.2.2(2)　監視テンプレート以外の定義例」を参照してください。

3.1.3　ディスクの監視例

ディスクのパフォーマンスを監視する方法について説明します。

(1) 概要

ディスクを監視すれば，ディスク資源の不足などを検出したり，ディスクによるボトルネックを把握したりできます。また，継続的にディスクを監視すれば，ディスク容量の使用量の増加傾向を把握し，システム構成決定や拡張するなどのタイミングを把握できます。

ディスクはプログラムやプログラムが参照するデータなどを保存しています。このため，ディスク容量が不足してくると，データが消失するなどの問題が発生するだけでなく，システムの応答速度が低下します。

プログラムからディスクのデータを入出力する場合，実行中に休止（応答を待っている）状態になることがあります。これは，ディスクがボトルネックになり始めていることを示します。

ディスクのボトルネックが原因で，プロセスの応答速度の低下などさまざまな性能劣化を引き起こす場合があります。そのため，ディスクに関連する性能劣化が発生していないことを確認するのは重要な作業です。

ディスクにボトルネックが存在すると思われる場合，はじめに，ディスクの断片化が発生していないことを確認してください。次に，不正なファイルなどによってディスクが消費されていないかを確認し，十分な空き容量が確保されていることを確認する必要があります。不正なファイルが存在する場合，不正にファイルなどを作成したプログラムを特定し，対処する必要があります。

監視テンプレートでは，Disk Space アラームを提供しています。さらに詳細な情報については，次のレコードとフィールドを参照してください。

表 3-5　ディスクに関連する主なフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PI_LOGD, PI_PHYD	% Disk Time	ディスクのビジー率。継続してしきい値（50%以上または 100%に近い）の場合，ディスクへの負荷が高いことを示す。
	Current Disk Queue Length	キューの要求数。継続してしきい値（3）以上の場合，ディスクが混雑していることを示す。
	Avg Disk Bytes/Xfer	ディスク間で転送された 1 回当たりのバイト数。転送サイズが大きいほどシステムは効果的に稼働していることを示す。
	Disk Bytes/sec	ディスク間で転送された 1 秒当たりのバイト数。転送サイズが大きいほどシステムは効果的に稼働していることを示す。
PI_LOGD	% Free Space	ディスクの空き領域率。少ない場合，ディスク容量が不足していることを示す。
	Free Mbytes	ディスクの未使用領域。少ない場合，ディスク容量が不足していることを示す。

(2) 監視方法

(a) 論理ディスクの空き容量率を監視したい

論理ディスクの空き容量率は，監視テンプレートで提供している Disk Space アラームを使用することで，監視できます。

論理ディスクの空き容量率（PI_LOGD レコード% Free Space フィールド）がしきい値以下の場合，断片化されたファイルをディスクデフラグツールで最適化する際，支障をきたすことがあります。

また，論理ディスクの空き容量率がしきい値以下の場合でも，全容量が大きいディスクの場合，許容できる容量の可能性もあります。このため，論理ディスクの空き容量と合わせて監視すると効果的です。

詳細については，「3.2.3(1) 監視テンプレート」を参照してください。

(b) 論理ディスクの空き容量を監視したい

論理ディスクの空き容量は，監視テンプレートで提供している Logical Disk Free アラームを使用することで，監視できます。

論理ディスクの空き領域をアラームで監視すると，ディスク容量不足を効果的に監視できます。

論理ディスクの空き領域（PI_LOGD レコード Free Mbytes フィールド）がしきい値以下になった場合，不要ファイルの削除，ファイル圧縮，ディスク増設などの対策の目安となります。

詳細については，「3.2.3(1) 監視テンプレート」を参照してください。

(c) ディスクのビジー率を監視したい

ディスクのビジー率は，監視テンプレートで提供している Disk Busy %アラームを使用することで，監視できます。

ディスクのビジー率は，過度なページング（プロセスによるページの読み取り，または書き込み）が発生していないかをアラームで監視できます。

ディスクのビジー率（PI_PHYD または PI_LOGD レコード% Disk Time フィールド）が継続的にしきい値以上の場合，ディスク要求を発生させているプロセスを調べ，プロセスの分散処理をするなどの対策の目安となります。

ディスクの混雑と合わせて監視すると効果的です。

詳細については，「3.2.3(1) 監視テンプレート」を参照してください。

(d) ディスクの混雑を監視したい

ディスクの混雑は，監視テンプレートで提供している Logical Disk Queue アラームまたは Physical Disk Queue アラームを使用することで，監視できます。

ディスクの混雑は，過度な I/O 要求が発生していないかをアラームで監視できます。

ディスクの混雑（PI_PHYD または PI_LOGD レコード Current Disk Queue Length フィールド）が継続的にしきい値以上の場合，ディスク要求を発生させているプロセスを調べ，プロセスの分散処理をするなどの対策の目安となります。

ディスクのビジー率と合わせて監視すると効果的です。

詳細については，「3.2.3(1)　監視テンプレート」を参照してください。

3.1.4　ネットワークの監視例

ネットワークのパフォーマンスを監視する方法について説明します。

(1)　概要

ネットワークの情報を監視すれば，システムが提供している機能の応答速度を確認できます。

ネットワークのデータの送受信量などを継続的に監視すれば，ネットワークの構成決定や拡張などを計画的に行えます。

関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 3-6　ネットワークに関連する主なフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PI_NETI	Bytes Total/sec	送受信された 1 秒当たりのデータ量。常に NIC を使用し送受信している環境で，しきい値（低い値[高い程良い]）以下の値が数多く発生した場合，NIC がボトルネックになっているおそれがある。※
	Bytes Sent/sec	送信された 1 秒当たりのデータ量。常に NIC を使用し送信している環境で，しきい値（低い値[高い程良い]）以下の値が数多く発生した場合，NIC がボトルネックになっているおそれがある。※
PI	Bytes Rcvd/sec	受信された 1 秒当たりのデータ量。サーバがネットワークから受信したバイト数をネットワークカードの総帯域幅性能と比較し，帯域幅（ネットワークで一定時間内に転送できるデータの量）50%以上の場合，ネットワーク接続がボトルネックになっているおそれがある。

注※

高い値の場合，多量の転送に成功したことを示します。

(2) 監視方法

(a) ネットワークインターフェースカードの帯域幅（一定時間内に転送できるデータの量）を超えるデータ受信がないか監視したい

ネットワークインターフェースカードの帯域幅は，監視テンプレートで提供している Network Received アラームを使用することで，監視できます。

ネットワークインターフェースカードの帯域幅をアラームで監視すると，ネットワークの送受信データ量を監視できます。

データ量が継続的にしきい値以上の場合，ネットワークインターフェースカードまたは物理ネットワークをアップグレードする目安となります。

詳細については，「3.2.4(1) 監視テンプレート」を参照してください。

3.1.5 プロセス・サービスの監視例

プロセスおよびサービスのパフォーマンスを監視する方法について説明します。

(1) 概要

システムは，個々のプロセスやサービスによって提供されています。このため，プロセスやサービスの稼働状況を把握することは，システムの安定運用に欠かせません。

システムの機能を提供するプロセスやサービスが異常終了した場合，運用システムが停止し重大な影響が発生します。このため，プロセスの生成，消滅，および起動状況やサービスの起動状況を監視し，早急に異常を検知し対策を立てることが必要です。

PFM - Agent for Platform では，情報収集のタイミングでプロセスを監視しています。このため，プロセスの存在確認をしている場合でも，プロセスが消滅したタイミングではなく，PFM - Agent for Platform が情報を収集したタイミングでプロセスの消滅が検知されることに注意してください。

プロセスおよびサービスを監視するためのレコードとフィールドを次の表に示します。

表 3-7 プロセスおよびサービスに関連する主なフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PI_WGRP	Process Count	プロセス数。しきい値（起動している必要があるプロセス数）以下の場合，プロセスが停止していることを示す。※
PD_PDI	Program	プロセス名。レコード収集されない場合，プロセスが停止していることを示す。

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PD_ASVC, PD_SVC	Service Name	サービス名および起動状態。アプリケーションサービス（プロセス）が起動中（RUNNING）以外の場合，サービスが停止していることを示す。
	Display Name	
	State	
PD_APS	Program Name	プロセス名。レコード収集されない場合，プロセスが停止していることを示す。
PD_APP, PD_APP2	Application Name	アプリケーション定義名。
	Application Exist	アプリケーションの状態。NORMAL の場合，各監視対象のうちどれかの状態が NORMAL の状態であることを示す。ABNORMAL の場合，各監視対象の状態がすべて ABNORMAL の状態であることを示す。
	Application Status	アプリケーションの状態。NORMAL の場合，各監視対象の状態がすべて NORMAL の状態であることを示す。ABNORMAL の場合，各監視対象のうちどれかの状態が ABNORMAL であることを示す。
PD_APPD	Application Name	監視数の条件結果。Monitoring Status フィールドの値が ABNORMAL の場合，プログラム，サービス，またはコマンドラインのうち，どれかの起動数が指定範囲外であることを示す。
	Monitoring Label	
	Monitoring Status	

注※

収集データ追加ユーティリティでの設定が必要です。

(2)　監視方法

(a)　プロセスの消滅を監視したい

プロセスの消滅は，監視テンプレートで提供している Process End アラームを使用することで，監視できます。

プロセスが異常終了した場合，運用システムが停止し重大な影響が発生します。早急に復旧させるために，プロセスの消滅をアラームで監視できます。

詳細については，「3.2.5(1)　監視テンプレート」を参照してください。

(b)　プロセスの生成を監視したい

プロセスの生成は，監視テンプレートで提供している Process Alive アラームを使用することで，監視できます。

プロセスの生成は，アプリケーション単位での監視やスケジュールされたプロセスの状況など，運用システムが正しく動作しているかどうかをアラームで監視できます。

収集データ追加ユーティリティのワークグループの設定と PI_WGRP レコードを使用することで，プロセスの生成や消滅，同一名称のプロセス数，アプリケーション単位のプロセス数，およびユーザーごとのプロセス起動数などさまざまな監視を行えます。

詳細については，「3.2.5(1)　監視テンプレート」を参照してください。

(c)　サービスの停止を監視したい

サービスの停止は，監視テンプレートで提供している Service(Service Nm)アラームまたは Service(Display Nm)アラームを使用することで，監視できます。

サービスが異常終了した場合，運用システムが停止し重大な影響が発生します。

早急に復旧させるために，サービスの起動状況をアラームで監視できます。

詳細については，「3.2.5(1)　監視テンプレート」を参照してください。

3.1.6　イベントログの監視例

イベントログのパフォーマンスを監視する方法について説明します。

(1)　概要

OS やアプリケーションは，「エラー，警告，情報」などの情報をイベントビューアに出力しています。このため，イベントビューアのイベントログを監視することで，OS の不具合やプロセスの異常な動作を検知でき，早急に復旧できます。

イベントログを監視するためのレコードとフィールドを次の表に示します。

表 3-8　イベントログに関連する主なフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方（例）
PD_ELOG	Log Name	イベントログの種類。Application，Security，System などがある。
	Event Type Name	イベントタイプの識別子名。異常（Error），警告（Warning）などがある。
	Source Name	作成したアプリケーション名など。生成したアプリケーションを特定する場合に利用する。
	Event ID	イベント ID。アプリケーションのイベントログを一意に特定する場合に利用する。
	Description	イベントログの説明。イベントログの詳細な情報が出力されている。

(2) 監視方法

(a) イベントログに出力されたすべてのエラーおよび警告を監視したい

イベントログに出力されたすべてのエラーおよび警告は，監視テンプレートで提供している Event Log(all) アラームを使用することで，監視できます。

イベントログに出力されたエラーおよび警告をアラームで監視できます。

詳細については，「3.2.6(1) 監視テンプレート」を参照してください。

(b) WSFC クラスタの動作を監視したい

WSFC クラスタの動作は，監視テンプレートで提供している Event Log(System)アラームを使用することで，監視できます。

WSFC が出力しているイベントログをアラームで監視できます。

詳細については，「3.2.6(1) 監視テンプレート」を参照してください。

3.1.7 Active Directory の監視例

Active Directory に関係するパフォーマンスの低下がある場合，PI_AD レコードを収集して監視することで，問題解決の糸口をつかめます。次の現象が発生している場合に，ボトルネックを特定するための監視項目を示します。

- ドメインコントローラーの負荷が継続的に高い場合
  Active Directory データベースキャッシュまたは Active Directory データベースのログ書き込み状況を監視します。
- 特定のドメインにログオンが集中する場合
  Active Directory サーバへのセッション状況を監視します。
- サイト内のネットワーク負荷が高い場合
  サイト内レプリケーショントラフィックを監視します。
- サイト間のネットワーク負荷が高い場合
  サイト間レプリケーショントラフィックを監視します。

上記の現象が発生している場合の監視例を次に示します。なお，記載している監視例は凡例であり，ユーザーの環境によって変動します。しきい値などの設定はユーザーの環境に合わせてください。

(1) ドメインコントローラーの負荷が継続的に高い場合

ドメインコントローラーの負荷が高くなる原因として，Active Directory データベースがディスクアクセスを頻繁に行っていることが挙げられます。この場合，メモリーのキャッシュやバッファへの割り当てを見直すことによって問題を解決できます。

Active Directory データベースキャッシュの監視

Active Directory データベースでは，適切なキャッシュサイズを設定することで，ディスク上のファイル操作を発生させることなくレコードを操作させることができます。このキャッシュ利用率を監視することで，データベースアクセスのパフォーマンスを上げるようキャッシュを調整できます。データベースのキャッシュ利用率を監視するフィールドを次に示します。

表 3-9　データベースのキャッシュ利用率を監視するフィールド

フィールド	説明
Cache % Hit	データベースキャッシュによって，ファイル操作を発生させることなく実行されたデータベースファイルページの要求の割合。
Cache Page Fault Stalls/sec	データベースキャッシュから割り当てできるページがないためにサービスを受けられない 1 秒当たりのページフォルトの数。
Cache Page Faults/sec	データベースキャッシュマネージャが，データベースキャッシュから新しいページを割り当てるために必要な 1 秒当たりのデータベースファイルページの要求数。
Cache Size	データベースキャッシュマネージャがデータベースファイルから頻繁に使用される情報を保持するのに使用するシステムメモリーの容量。
Table Open Cache % Hit	キャッシュしたスキーマ情報を使用して開かれたデータベーステーブルの割合。
Table Open Cache Hits/sec	キャッシュしたスキーマ情報を使用して開かれたデータベーステーブルの 1 秒当たりの数。
Table Open Cache Misses/sec	キャッシュしたスキーマ情報を使用しないで開かれたデータベーステーブルの 1 秒当たりの数。
Table Opens/sec	1 秒当たりに開かれたデータベーステーブルの数。

監視例

次の条件を満たす場合，キャッシュ容量の不足が原因でパフォーマンスが低下していると想定されます。

- Cache % Hit，Table Open Cache % Hit がベースラインを下回っている。
- Cache Page Fault Stalls/sec がベースラインを上回っている。

対策例

Active Directory データベースのキャッシュに割り当てるメモリーを増やしてください。

データベースのログ書き込み状況の監視

データベースログのバッファの使用状況を監視して，ログバッファの容量を適切に調整することで，ログ書き込みのための待ち時間を減少できます。「Active Directory データベースキャッシュの監視」と異なり，こちらはログバッファのパフォーマンス情報です。

表 3-10　データベースのログ書き込み状況を監視するフィールド

フィールド	説明
Log Record Stalls/sec	ログバッファに空きがないために追加できない 1 秒当たりのログレコードの数。
Log Threads Waiting	データベースの更新を完了させるために，ログバッファ上のデータがログファイルに書き込まれるのを待機しているスレッドの数。
Log Writes/sec	ログバッファ上のデータがログファイルに書き込まれる 1 秒当たりの回数。

監視例

次の条件を満たす場合，ログバッファの容量不足が原因でパフォーマンスが低下していると想定されます。

- Log Record Stalls/sec がベースラインを上回っている。

対策例

ログバッファに割り当てるメモリーを増やしてください。

(2)　特定のドメインにログオンが集中する場合

Active Directory によって使用されている現在のセッション数を確認したい場合は，次のフィールドを確認してください。

表 3-11　現在のセッション数を監視するフィールド

フィールド	説明
AB Client Sessions	接続されているアドレス帳クライアントセッションの数。
LDAP Client Sessions	接続されている LDAP クライアントセッションの数。

監視例

次の条件を満たす場合，特定のドメインにログオンが集中していると想定されます。

- LDAP Client Sessions がベースラインを上回っている。

対策例

- 各ドメインコントローラーに割り当てるユーザーの数を均等にしてください。
- ドメインコントローラーを増やすなど，ユーザーの数を分散させる対処をしてください。

(3)　サイト内のネットワーク負荷が高い場合

サイト内のネットワーク負荷が高い場合，Active Directory がサイト内でレプリケーションを大量に行っていることが原因となっている場合があります。サイト内のレプリケーションのトラフィックを監視するフィールドを次に示します。

表 3-12　サイト内のレプリケーションのトラフィックを監視するフィールド

フィールド	監視対象	説明
DRA In Not Compress	入力方向のレプリケーション	圧縮されていないデータのバイト数（入力量）。
DRA In Not Compress/sec		圧縮されていないデータの 1 秒当たりのバイト数（入力頻度）。
DRA Out Not Compress	出力方向のレプリケーション	圧縮されていないデータのバイト数（出力量）。
DRA Out Not Compress/sec		圧縮されていないデータの 1 秒当たりのバイト数（出力頻度）。

監視例

次の条件を満たす場合，サイト内のレプリケーションのトラフィックが原因で，サイト内のネットワーク負荷が高くなっていると想定されます。

- DRA In Not Compress/sec，DRA Out Not Compress/sec がベースラインを上回っている。

対策例

ドメインコントローラーを増やすなど，負荷を分散させてください。

(4)　サイト間のネットワーク負荷が高い場合

サイト間のネットワーク負荷が高い場合，Active Directory がサイト間レプリケーションを大量に行っていることが原因となっている場合があります。サイト間レプリケーションでは通信を圧縮して行う点がサイト内のレプリケーションと異なります。レプリケーションの動作自体は変わりません。サイト間レプリケーションのトラフィックを監視するフィールドを次に示します。

表 3-13　サイト間レプリケーションのトラフィックを監視するフィールド

フィールド	監視対象	説明
DRA In After Compress	入力方向のレプリケーション	圧縮後データのバイト数（入力量）。
DRA In After Compress/sec		圧縮後データの 1 秒当たりのバイト数（入力頻度）。
DRA In Before Compress		圧縮前データのバイト数（入力量）。

フィールド	監視対象	説明
DRA In Before Compress/sec	入力方向のレプリケーション	圧縮前データの 1 秒当たりのバイト数（入力頻度）。
DRA Out After Compress	出力方向のレプリケーション	圧縮後データのバイト数（出力量）。
DRA Out After Compress/sec		圧縮後データの 1 秒当たりのバイト数（出力頻度）。
DRA Out Before Compress		圧縮前データのバイト数（出力量）。
DRA Out Before Compress/sec		圧縮前データの 1 秒当たりのバイト数（出力頻度）。

監視例

次の条件を満たす場合，サイト間レプリケーションのトラフィックが原因で，サイト間のネットワーク負荷が高くなっていると想定されます。

- DRA In After Compress/sec，DRA In Before Compress/sec，DRA Out After Compress/sec，DRA Out Before Compress/sec がベースラインを上回っている。

対策例

- サイト間レプリケーションのスケジュールを CPU 使用率の低い時間帯に設定してください。
- サイトの統合を検討して，サイト間通信を減らしてください。

ヒント

レプリケーションはデータベース管理システムが持つ負荷分散機能の一つです。データベースの複製をネットワーク上に複数配置し，回線やマシンの負荷を軽減する機能です。Active Directory ではレプリケーション機能が使用できます。これによってマシンの負荷を分散させるとともに，高速なディレクトリサービスを提供しています。

レプリケーションは Active Directory を含むディレクトリサービスで重要な位置にあります。レプリケーションのトラフィックを監視することによって，現在の負荷を知ることができ，必要な処置の判断ができます。

Active Directory は，サイト内では高速で信頼性のあるネットワーク接続を想定した動作を行います。そのため，サイト内レプリケーションの実行時にデータは圧縮されません。これによって圧縮処理によるオーバーヘッドを抑えています。

一方，サイト間のドメインコントローラー間でレプリケーションを行う場合，通常のサイト間通信では距離が離れているためコストが掛かります。このため，サイト間レプリケーションを行う場合にはデータを圧縮します。

3.1.8　利用ポート情報の収集例

PFM - Agent for Platform では，ユーザーがテキストファイルに出力した独自のパフォーマンスデータ（ユーザー作成データ）を，PFM - Agent for Platform が提供するレコードに格納できる形式（ユーザーデータファイル）に変換する機能を提供しています。ユーザー独自のパフォーマンスデータの詳細については，「6.8　ユーザー独自のパフォーマンスデータの収集に関する設定」を参照してください。

ここでは，ユーザー独自のパフォーマンスデータとして利用ポート情報を PI_UPIB レコードに収集する例を示します。利用ポート情報は，次の表に示す形式で格納するものとします。

表 3-14　ユーザー作成データのフォーマット

オプション	値
tt	"TCP"。
ks	ホスト名。
lr	ホストが持つ TCP ポートの総数。
lr	ホストが持つ TCP ポートのうち現在アクティブなポート数。
lr	ホストが持つ TCP ポートのうちリッスン中のポート数。

1. 利用ポート情報を収集するためのバッチを作成する。

この例では，利用ポート情報を収集するためにバッチを利用します。バッチの作成例を次に示します。

バッチの作成例（D:¥homework¥sample.bat）

```
@echo off
echo Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows) > D:¥homework¥userdata.tcp
echo FormVer=0001 >> D:¥homework¥userdata.tcp
echo tt ks lr lr lr >> D:¥homework¥userdata.tcp
hostname > D:¥homework¥userdata.tmp
netstat -ap tcp | find "TCP" /C >> D:¥homework¥userdata.tmp
netstat -ap tcp | find "ESTABLISHED" /C >> D:¥homework¥userdata.tmp
netstat -ap tcp | find "LISTENING" /C >> D:¥homework¥userdata.tmp
(
set /p ks=
set /p lr1=
set /p lr2=
set /p lr3=
) < D:¥homework¥userdata.tmp
del D:¥homework¥userdata.tmp
echo TCP %ks% %lr1% %lr2% %lr3% >> D:¥homework¥userdata.tcp
```

重要

ここで紹介するバッチは，環境によっては動作しないことがあります。

2. 手順 1 で作成したバッチを実行する。

バッチの実行結果として作成されるユーザー作成データを次に示します。

ユーザー作成データ（D:¥homework¥userdata.tcp）

```
Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)
FormVer=0001
tt ks lr lr lr
TCP jp1ps05 15 3 12
```

3. 手順 2 で作成されたユーザー作成データをユーザーデータファイルへ変換する。

   ユーザー作成データをユーザーデータファイルへ変換するコマンド（jpcuser コマンド）の実行例を次に示します。

   jpcuser コマンドの実行例

```
"C:¥Program Files (x86)¥HITACHI¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥jpcuser" PI_UPIB
-file D:¥homework¥userdata.tcp
```

4. 手順 3 で出力されたユーザーデータファイルを PFM - Agent for Platform で収集する。

   PFM - Agent for Platform がレコードを収集するタイミングで，ユーザーデータファイルの内容がユーザーレコードに格納されます。

3.1.9 PFM 製品が導入されていない複数のホストからのパフォーマンスデータの収集例

PFM 製品が導入されていないホスト固有のパフォーマンスデータを，PFM - Agent for Platform のユーザー作成データ収集機能を使って収集できます。また，複数のホストのパフォーマンスデータを 1 つのユーザーデータファイルに変換することで，同時に複数のホストの状態を監視することもできます。この場合，PFM 製品が導入されていないそれぞれのホストでユーザー作成データを作成するために，バッチなどのスクリプトを準備する必要があります。ここでは，PFM 製品が導入されていないホストのパフォーマンスデータを収集し，PFM - Agent for Platform のレコード情報として出力するまでの例を示します。

(1) 収集データ

ここでは「3.1.8 利用ポート情報の収集例」で作成したユーザー作成データを使用して情報を取得する例を示します。

(2) 前提条件

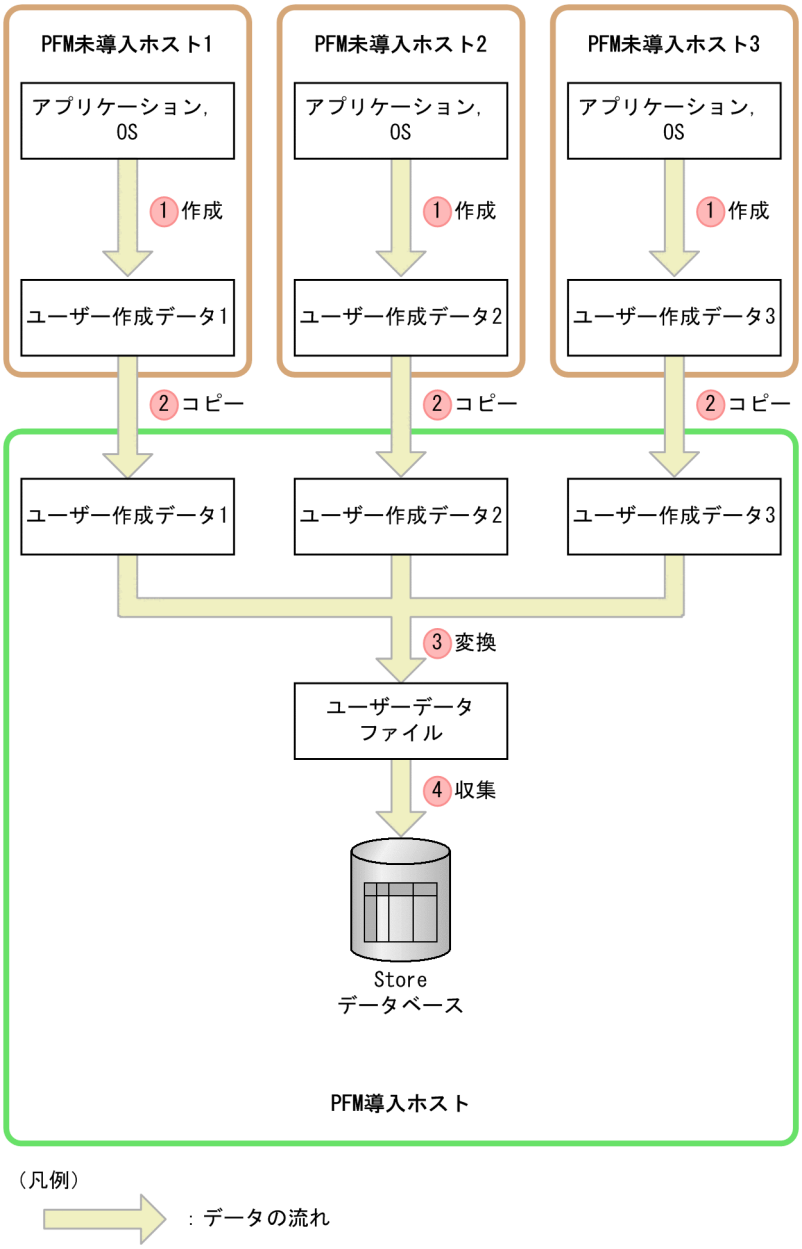
PFM 製品が導入されていない複数のホストからパフォーマンスデータを収集するための前提条件を次に示します。

- PFM 製品が導入されているホストと PFM 製品が導入されていないホストの間で信頼関係が結ばれており，ファイルのやり取りが可能な環境である。
- PFM 製品が導入されているホストの PFM - Agent for Platform のバージョンが 08-11 以降である。

(3)　データ収集の手順

PFM 製品が導入されていないホストのデータ収集の流れを次の図に示します。

図 3-3　PFM 製品が導入されていないホストのデータ収集の流れ



図中の番号に従って処理の流れを説明します。複数のホストのパフォーマンスデータを収集する場合は，同様の手順をホストごとに実行してください。

1. PFM 製品が導入されていないホストでユーザー作成データを作成する。

   パフォーマンスデータを収集するスクリプトを実行して，ユーザー作成データを作成します。ここでは「3.1.8　利用ポート情報の収集例」で作成したユーザー作成データを使用します。

2. リモートホスト間でファイルをコピーする。

手順 1 で作成したユーザー作成データを，PFM 製品が導入されているホストにコピーします。ここではネットワークドライブの割り当てによってホスト間で共有している領域「F:¥nethome¥」にユーザー作成データをコピーします。copy コマンドの例を次に示します。

copy コマンドの例

```
copy D:¥homework¥userdata.tcp F:¥nethome¥userdata.tcp
```

重要

複数のホストのユーザー作成データを収集する場合は，ファイル名が重複しないようにしてください。ファイル名が重複している場合，ファイルをコピーするときに上書きするおそれがあります。

3. PFM 製品が導入されているホストで jpcuser コマンドを実行する。

PFM 製品が導入されているホストでjpcuser コマンドを実行して，手順 2 でコピーしたユーザー作成データをユーザーデータファイルに変換します。手順 1 および 2 を実行した PFM 未導入ホストのユーザー作成データを，1 つのユーザーデータファイルに変換する例を次に示します。

jpcuser コマンドの例

```
”C:¥Program Files (x86)¥HITACHI¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥jpcuser” PI_UPIB
-file ユーザー作成データ1 -file ユーザー作成データ2 -file ユーザー作成データ3
```

4. PFM 製品が導入されているホストでレコードデータを収集する。

手順 3 で出力されたユーザーデータファイルの内容を，PFM 製品が導入されているホストでレコードデータとして収集します。

3.2　パフォーマンス監視の定義例

監視するリソースごとに，監視テンプレート，および監視テンプレート以外の定義例について説明します。定義例の見方を次に示します。

- 定義例の■と□は，PFM - Web Console のチェックボックスを示しています。また，●と○は，PFM - Web Console のラジオボタンを示しています。
- 定義例の■と●は，PFM - Web Console での設定で，チェックすることを示しています。また，□と○は，PFM - Web Console での設定で，チェックしないことを示しています。
- 定義例の「xxx」「yyy」「zzz」「dummy」はユーザーがシステム環境に応じて変更する文字列です。その他の定義内容については，必要に応じて変更してください。
- 定義例の発生頻度（例：[3]回しきい値超過／[5]インターバル中）は，システム環境によって異なります。発生頻度の定義内容は，必要に応じて変更してください。例えば，システム環境で処理が集中する時間帯が 2 分以上で継続的な高負荷状態であるとします。このとき，収集間隔が 60 秒であれば，5 回中 2 回までは許容範囲であり，3 回以上で継続的な高負荷状態であるといえます。よって，発生頻度には「[3]回しきい値超過／[5]インターバル中」と設定します。

3.2.1　プロセッサ監視の定義例

監視テンプレート，および監視テンプレート以外の定義例について説明します。

(1)　監視テンプレート

(a)　プロセッサに関連する監視テンプレートのアラーム

プロセッサに関連する監視テンプレートのアラームは，PFM Windows Template Alarms [CPU] 09.00 アラームテーブルに格納されています。

表 3-15　プロセッサの監視テンプレートのアラーム

監視テンプレートのアラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件	値の見方
CPU Usage	PI	CPU %	>= 90	> 80	プロセッサの使用率（%）が継続して高い場合，プロセッサがシステムのボトルネックになっているおそれがある。過度にプロセッサを使用しているプロセスを見つけ，対策を立てる必要がある。プロセスに問題がない場合，限界を超えるシステム環境のため，プロセッサをアップグレードするか，プロセッサを追加するなどの対策が必要である。
Processor Queue	PI	Processor Queue Length	>= 10	>= 2	要求数が継続してしきい値以上の場合，プロセッサが混雑していることを示す。

監視テンプレートのアラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件	値の見方
SVR Processor Queue	PI_SVRQ	Queue Length	>= 3	>= 2	キューの長さが継続してしきい値以上の場合，プロセッサに大きな負荷が掛かっていることを示す。

(b)　プロセッサに関連する監視テンプレートのレポート

表 3-16　プロセッサの監視テンプレートのレポート

レポート名	表示する情報
CPU Status (Multi-Agent)	最近 24 時間の複数のエージェントについての CPU 使用率の要約（時単位）。
CPU Trend	最近 1 か月間のユーザーモードと特権モードで実行された CPU 使用率（日単位）。
CPU Trend (Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数システムの CPU 使用率（日単位）。
CPU Usage Summary	最近 1 時間の CPU 使用率の要約（分単位）。

既存レポートの設定内容については，「7.　監視テンプレート」を参照してください。

(2)　監視テンプレート以外の定義例

(a)　プロセッサ使用率が高いプロセスを確認するリアルタイムレポート

表 3-17　定義例

項目			内容
名前と種別	レポート名		PD_PDI - Memory
	プロダクト		Windows (6.0)
	レポート種別	○リアルタイム（1 つのエージェント）	●チェックする
		○履歴（1 つのエージェント）	－
		○履歴（複数のエージェント）	－
フィールド	レコード		PD_PDI
	選択されたフィールド		Program PID CPU % Privileged CPU % User CPU %
フィルター	条件式:		●拡張フィルター
	条件式の定義		Program <> "_Total" AND PID <> "0"

項目			内容
フィルター	表示時に指定		□チェックしない
表示設定	□ 表示時に指定		■チェックする
	□ デルタで表示		□チェックしない
	更新間隔	□ 自動更新しない	□チェックしない
		初期値	30
		最小値	30
	ランキング表示	フィールド	CPU %
		表示数	10 ※
		□ 降順	□チェックしない
表示形式	表		全フィールド
	一覧		－
	グラフ		Privileged CPU % User CPU %
	表示キー	フィールド	（なし）
		降順	－
グラフのプロパティ	グラフの種類		積み上げ横棒
	系列		行
	軸ラベル	X 軸	プロセス名（プロセス ID）
		Y 軸	CPU %
	データラベル	データラベル 1	プロセス名
		データラベル 2	プロセス ID
ドリルダウン	レポートのドリルダウン		任意
	フィールドのドリルダウン		任意

（凡例）

－：指定しない

注※

状況に応じて設定します。

3.2.2 メモリー監視の定義例

監視テンプレート，および監視テンプレート以外の定義例について説明します。

(1) 監視テンプレート

(a) メモリーに関連する監視テンプレートのアラーム

メモリーに関連する監視テンプレートのアラームは，PFM Windows Template Alarms [MEM] 09.00 アラームテーブルに格納されています。

表 3-18 メモリーの監視テンプレートのアラーム

監視テンプレートのアラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件	値の見方
Available Memory	PI	Available Mbytes	< 3	< 4	未使用サイズがしきい値より小さい場合，物理メモリーが不足しているおそれがある。過度にメモリーを使用しているプロセスを見つけ，対策を立てる必要がある。プロセスに問題がない場合，限界を超えるシステム環境のため，メモリーを増設するなどの対策を立てる必要がある。
Committed Mbytes	PI	Committed Mbytes	>= 2046	>= 1024	仮想メモリー領域の使用量が継続してしきい値（PI レコードの Total Physical Mem Mbytes フィールド）以上の場合，物理メモリーが不足しているおそれがある。
Pages/sec	PI	Pages/sec	>= 5	>= 4	ページ数の割合が継続してしきい値以上の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがある。ただし，しきい値の超過が一時的な場合は，監視した値が 20 までは許容範囲になることがある。
Page Faults/sec	PI	Page Faults/sec	>= 5	>= 4	ページフォルトが発生した数の割合が継続してしきい値以上の場合，メモリーがボトルネックになっているおそれがある。

既存アラームの設定内容については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。

(b) メモリーに関連する監視テンプレートのレポート

表 3-19 メモリーの監視テンプレートのレポート

レポート名	表示する情報
Memory Available Trend (Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数システムの物理メモリーの空き容量（日単位）。
Memory Paging	最近 1 時間のページングしたページ数の頻度（分単位）。
Memory Paging Status (Multi-Agent)	最近 24 時間の複数のエージェントについてのメモリーのページフォルトが発生した状況の要約（時単位）。
OS Memory Usage Status（メモリー使用量を示すリアルタイムレポート）	物理メモリーの空き容量。

レポート名	表示する情報
OS Memory Usage Status（メモリー使用量を示す履歴レポート）	最近 24 時間のシステムの物理メモリーの空き容量の要約（時単位）。
System Memory Detail	最近 1 時間のシステムの物理メモリーの詳細（分単位）。

(c) システム（メモリー）に関連する監視テンプレートのレポート

表 3-20 システムの監視テンプレートのレポート

レポート名	表示する情報
File System I/O Summary	最近 1 時間の I/O 使用量の要約（分単位）。
Process Trend	最近 1 か月間のシステムで実行されたプロセス数（日単位）。
System Overview（システムの概要を示すリアルタイムレポート）	システム全体の概要。
System Overview（システムの概要を示す履歴レポート）	最近 1 時間のシステムの概要（分単位）。
Workload Status	システムのワークロード関連データ。
Workload Status (Multi-Agent)	最近 24 時間の複数のシステムについてのワークロード関連データの要約（時単位）。

既存レポートの設定内容については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。

(2) 監視テンプレート以外の定義例

(a) メモリーリークが発生しているおそれがないか確認する履歴レポート

表 3-21 定義例

項目			内容
名前と種別	レポート名		PI - Memory
	プロダクト		Windows (6.0)
	レポート種別	○リアルタイム（1 つのエージェント）	－
		○履歴（1 つエージェント）	●チェックする
		○履歴（複数のエージェント）	－
フィールド	レコード		PI
	選択されたフィールド		Pool Nonpaged Bytes Pool Paged Bytes Pages/sec Page Faults/sec Data Map Hits %

項目			内容
フィールド	選択されたフィールド		Commit Limit Mbytes Committed Mbytes Non Committed Mbytes % Committed Bytes in Use Total Physical Mem Mbytes Used Physical Mem Mbytes Available Mbytes % Physical Mem Current Processes Current Threads
フィルター	条件式:		●フィルターなし
表示設定	表示時に指定		□チェックしない
	□ 表示時に指定		■チェックする
	レポート表示期間の設定	対象期間	レポートの表示時に指定
		レポート間隔	分
	ピーク時間	フィールド	(なし)
	最大レコード数		1440 ※
表示形式	表		全フィールド
	一覧		−
	グラフ		Pool Nonpaged Bytes
	表示名		−
	表示キー	フィールド	(なし)
		降順	−
グラフのプロパティ	グラフの種類		折れ線
	系列		行
	軸ラベル	X 軸	時間
		Y 軸	非ページプール
	データラベル	データラベル 1	(なし)
		データラベル 2	(なし)
ドリルダウン	レポートのドリルダウン		任意
	フィールドのドリルダウン		任意

(凡例)

−：指定しない

注※

状況に応じて設定します。

(b) プロセスのメモリー使用量を確認するリアルタイムレポート

表 3-22 定義例

項目			内容
名前と種別	レポート名		PD_PDI - Memory
	プロダクト		Windows (6.0)
	レポート種別	○リアルタイム（1 つのエージェント）	●チェックする
		○履歴（1 つのエージェント）	－
		○履歴（複数のエージェント）	－
フィールド	レコード		PD_PDI
	選択されたフィールド		すべて選択する
フィルター	条件式:		●拡張フィルター
	条件式の定義		Program <> "_Total" AND PID <> "0"
	表示時に指定		□チェックしない
表示設定	□ 表示時に指定		■チェックする
	□ デルタで表示		□チェックしない
	更新間隔	□ 自動更新しない	□チェックしない
		初期値	30
		最小値	30
	ランキング表示	フィールド	Pool Nonpaged Kbytes※
		表示数	30 ※
		□ 降順	■チェックする
表示形式	表		Program PID Handle Count Page Faults/sec Pool Nonpaged Kbytes Pool Paged Kbytes Working Set Kbytes Page File Kbytes Private Kbytes

項目			内容
表示形式	表		CPU %
	一覧		−
	グラフ		Pool Nonpaged Kbytes Pool Paged Kbytes Working Set Kbytes Page File Kbytes Private Kbytes
	表示名		−
	表示キー	フィールド	(なし)
		降順	−
グラフのプロパティ	グラフの種類		折れ線
	系列		行
	軸ラベル	X 軸	時間
		Y 軸	メモリー使用量
	データラベル	データラベル 1	(なし)
		データラベル 2	(なし)
ドリルダウン	レポートのドリルダウン		任意
	フィールドのドリルダウン		任意

(凡例)

−：指定しない

注※

監視したいフィールドを設定します。

3.2.3 ディスク監視の定義例

監視テンプレートの定義例について説明します。

(1) 監視テンプレート

(a) ディスクに関連する監視テンプレートのアラーム

ディスクに関連する監視テンプレートのアラームは，PFM Windows Template Alarms [DSK] 09.00 アラームテーブルに格納されています。

表 3-23　ディスクの監視テンプレートのアラーム

監視テンプレートのアラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件	値の見方
Disk Space	PI_LOGD	% Free Space	< 5	< 15	空き領域がしきい値より少ない場合，ディスク容量不足になっているおそれがある。不要ファイルの削除，ファイル圧縮，ディスクの最適化，ディスク増設などの対策が必要である。
Logical Disk Free	PI_LOGD	ID	<> _Total	<> _Total	未使用領域が少ない場合，ディスク容量不足になっているおそれがある。
		Free Mbytes	< 5120	< 10240	
Disk Busy %	PI_LOGD	ID	<> _Total	<> _Total	経過時間の割合が継続してしきい値以上の場合，ディスクへの負荷が高いことを示す。
		% Disk Time	>= 90	>= 50	
Logical Disk Queue	PI_LOGD	ID	<> _Total	<> _Total	要求数が継続してしきい値以上の場合，論理ディスクが混雑していることを示す。
		Current Disk Queue Length	>= 5	>= 3	
Physical Disk Queue	PI_PHYD	ID	<> _Total	<> _Total	要求数が継続してしきい値以上の場合，物理ディスクが混雑していることを示す。
		Current Disk Queue Length	>= 5	>= 3	

既存アラームの設定内容については，「7.　監視テンプレート」を参照してください。

(b)　ディスクに関連する監視テンプレートのレポート

表 3-24　ディスクの監視テンプレートのレポート

レポート名	表示する情報
Disk Time - Top 10 Logical Drives	ディスク使用率が高い論理ディスクの上位 10 個。
Free Megabytes - Logical Drive Status	論理ディスクで使用できる領域に関連する情報。
Free Space - Low 10 Logical Drives	空き領域が少ない論理ディスクの上位 10 個。

レポート名	表示する情報
Free Space - Top 10 Logical Drives	空き領域が多い論理ディスクの上位 10 個。
Logical Drive Detail	特定の論理ディスクの詳細。

既存レポートの設定内容については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。

3.2.4 ネットワーク監視の定義例

監視テンプレートの定義例について説明します。

(1) 監視テンプレート

(a) ネットワークに関連する監視テンプレートのアラーム

ネットワークに関連する監視テンプレートのアラームは，PFM Windows Template Alarms [NET] 09.00 アラームテーブルに格納されています。

表 3-25 ネットワークの監視テンプレートのアラーム

監視テンプレートのアラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件	値の見方
Network Received	PI_NETI	Bytes Rcvd/sec	>= 3000	>= 2048	サーバがネットワークから受信したバイト数とネットワークカードの総帯域幅性能を比較し，帯域幅（ネットワークで一定時間内に転送できるデータの量）が 50%以上の場合，ネットワーク接続がボトルネックになっているおそれがある。

既存アラームの設定内容については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。

(b) ネットワークに関連する監視テンプレートのレポート

表 3-26 ネットワークの監視テンプレートのレポート

レポート名	表示する情報
Access Failure Status（システムアクセスエラーを示すリアルタイムレポート）	システムアクセス試行でのエラー数。
Access Failure Status（システムアクセスエラーを示す履歴レポート）	最近 24 時間にシステムへのアクセス試行中に発生したエラー数の累積値（時単位）。
Server Activity Detail	ネットワーク間での通信状況についての情報。

レポート名	表示する情報
Server Activity Summary (Multi-Agent)	最近 24 時間の複数のエージェントについてのネットワーク間での通信状況についての要約（時単位）。
Server Activity Summary（ネットワーク間での通信状況についての情報を示すリアルタイムレポート）	ネットワーク間での通信状況についての情報。
Server Activity Summary（ネットワーク間での通信状況についての情報を示す履歴レポート）	最近 1 時間のネットワーク間での通信状況（分単位）。
Server Activity Summary Trend (Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数システムのサーバがネットワークとの間で送受信したデータの稼働状況（日単位）。
Server Sessions Trend (Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数システムのサーバでアクティブなセッション数（日単位）。
System Utilization Status	サーバがネットワークとの間で送受信した状況。

既存レポートの設定内容については，「7.　監視テンプレート」を参照してください。

3.2.5　プロセス・サービス監視の定義例

監視テンプレートの定義例について説明します。

(1)　監視テンプレート

(a)　プロセスに関連する監視テンプレートのアラーム

プロセスに関連する監視テンプレートのアラームは，PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00 アラームテーブルに格納されています。

表 3-27　プロセスの監視テンプレートのアラーム

監視テンプレートのアラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件	値の見方
Process End	PD_PDI	Program	= jpcsto	= jpcsto	パフォーマンスデータが収集されない場合，プロセスが停止していることを示す。
Process Alive	PI_WGRP	Process Count	> 0	> 0	ワークグループのプロセスが動作していることを示す。
		Workgroup	= workgroup	= workgroup	
Service(Service Nm)	PD_SVC	Service Name	= JP1PCAGT_TS	= JP1PCAGT_TS	アプリケーションサービス（プロセス）が起動中（RUNNING）以外の場合，サービスが停止していることを示す。
		State	<> RUNNING	<> RUNNING	

監視テンプレートのアラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件	値の見方
Service(Display Nm)	PD_SVC	Display Name	= PFM - Agent Store for Windows	= PFM - Agent Store for Windows	アプリケーションサービス（プロセス）が起動中（RUNNING）以外の場合，サービスが停止していることを示す。
		State	<> RUNNING	<> RUNNING	
Application Status	PD_APP2	Application Name	= *	= *	Application Exist フィールドの値が ABNORMAL の場合，アプリケーションに設定している監視対象のすべてが ABNORMAL の状態であることを示す。Application Status フィールドの値が ABNORMAL の場合，アプリケーションに設定している監視対象のうちどれかが ABNORMAL の状態であることを示す。
		Application Exist	= ABNORMAL	= NORMAL	
		Application Status	= ABNORMAL	= ABNORMAL	
Process Existence	PD_APS	Program Name	= jpcsto.exe	= jpcsto.exe	レコード収集されない場合，プロセスが停止していることを示す。

既存アラームの設定内容については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。

(b) プロセスに関連する監視テンプレートのレポート

表 3-28 プロセスの監視テンプレートのレポート

レポート名	表示する情報
CPU Usage - Top 10 Processes	CPU 使用率が高いプロセスの上位 10 個。
Process Detail	特定のプロセスのシステムリソース消費についての詳細。
Page Faults - Top 10 Processes	ページフォルトが発生した頻度が高いプロセスの上位 10 個。

既存レポートの設定内容については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。

3.2.6 イベントログ監視の定義例

監視テンプレートの定義例について説明します。

(1) 監視テンプレート

(a) イベントログに関連する監視テンプレートのアラーム

イベントログに関連する監視テンプレートのアラームは，PFM Windows Template Alarms [LOG] 09.00 アラームテーブルに格納されています。

表 3-29 イベントログの監視テンプレートのアラーム

監視テンプレートのアラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件	値の見方
Event Log(all)	PD_ELOG	Log Name	<> dummy	<> dummy	アプリケーションでエラーまたは警告が発生したことを示す。
		Event Type Name	= Error	= Warning	
		Source Name	<> dummy	<> dummy	
		Event ID	<> 0	<> 0	
		Description	<> dummy	<> dummy	
Event Log(System)	PD_ELOG	Log Name	= System	= System	WSFC でエラーまたは警告が発生したことを示す。
		Event Type Name	= Error	= Warning	
		Source Name	= ClusSvc	= ClusSvc	
		Event ID	<> 0	<> 0	
		Description	<> dummy	<> dummy	

既存アラームの設定内容については，「7. 監視テンプレート」を参照してください。

(b) イベントログに関連する監視テンプレートのレポート

なし

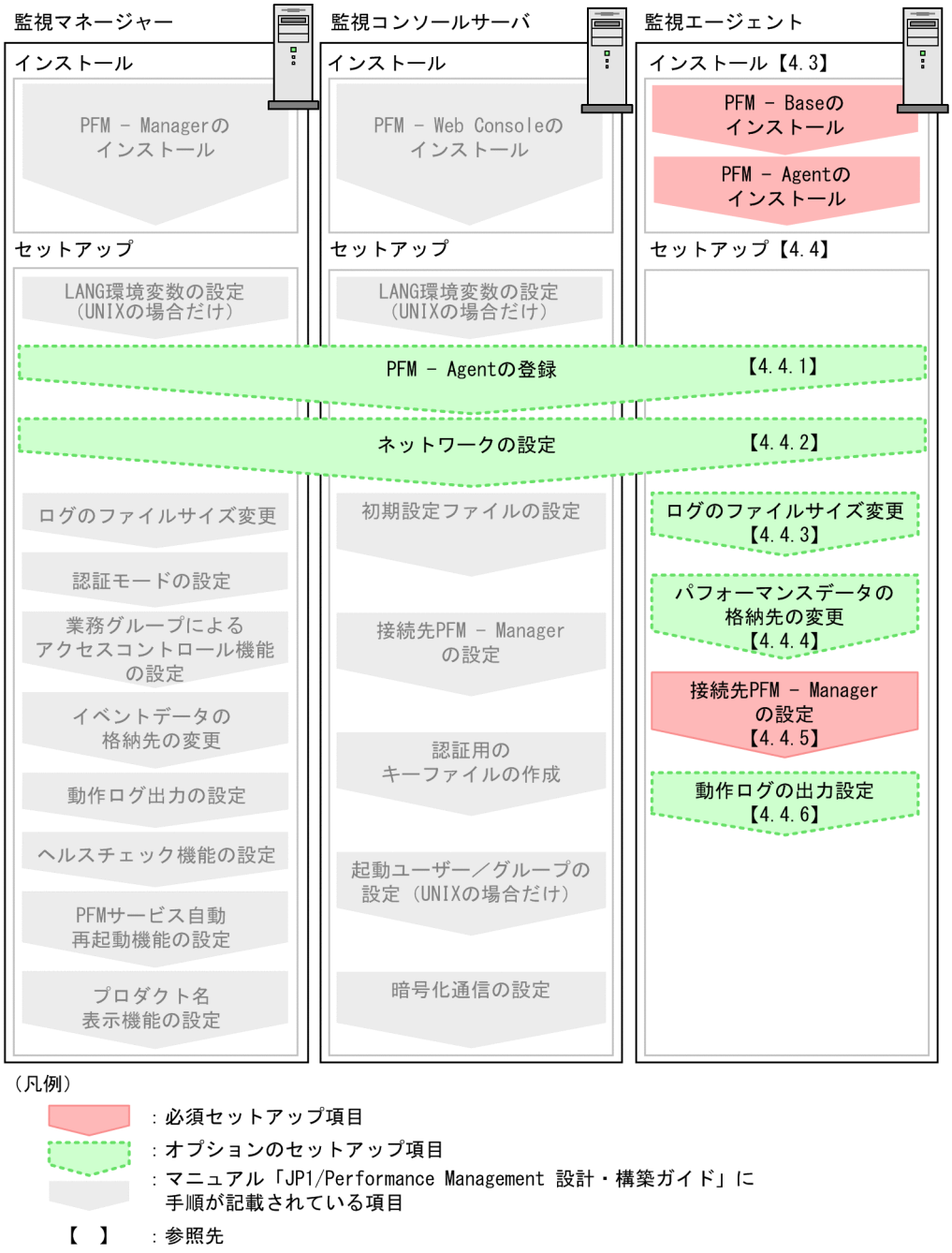
4 Windows 版のインストールとセットアップ

この章では，PFM - Agent for Platform のインストールおよびセットアップ方法について説明します。Performance Management システム全体のインストールおよびセットアップ方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

4.1　インストールとセットアップの流れ

PFM - Agent for Platform をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 4-1　インストールとセットアップの流れ



PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

なお，ユーザー入力を必要とするセットアップコマンドは，対話形式で実行するか非対話形式で実行するかを選択できます。

対話形式で実行する場合は，コマンドの指示に従ってユーザーが値を入力する必要があります。

非対話形式で実行する場合は，コマンド実行中に必要となる入力作業をオプション指定や定義ファイルで代替するため，ユーザー入力が不要になります。また，バッチ処理やリモート実行によってセットアップ作業を自動化できるため，管理者の負担や運用コストを低減できます。

コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

4.2 インストールの前に確認すること

4.2.1 前提 OS

PFM - Agent for Platform が動作する OS を次に示します。

- Windows Server 2008
- Windows Server 2012
- Windows Server 2016

4.2.2 ネットワーク環境の設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(1) IP アドレスの設定

PFM - Agent のホストは，ホスト名で IP アドレスを解決できる環境を設定してください。IP アドレスを解決できない環境では，PFM - Agent は起動できません。

監視ホスト名（Performance Management システムのホスト名として使用する名前）には，実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合
  Windows システムでは`hostname` コマンド，UNIX システムでは`uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で，IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。なお，UNIX システムでは，`hostname` コマンドで取得するホスト名を使用することもできます。
- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合
  設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ホスト名と IP アドレスは，次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル（`jpchosts` ファイル）
- hosts ファイル
- DNS

重要

- Performance Management は，DNS 環境でも運用できますが，FQDN 形式のホスト名には対応していません。このため，監視ホスト名は，ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は，jpchosts ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細は，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は，DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。Performance Management を導入するすべてのホストに，固定の IP アドレスを設定してください。

Performance Management では，ネットワーク構成が IPv4 環境だけでなく IPv6 環境にも対応しています。そのため，IPv4 環境と IPv6 環境が混在するネットワーク構成でも，Performance Management を運用できます。

PFM - Agent for Platform では，PFM - Manager と IPv6 で通信できます。ただし，PFM - Agent for Platform および PFM - Manager が導入されているホストの OS が，Windows または Linux の場合に限ります。

IPv4 環境と IPv6 環境での通信の適用範囲については，「付録 K　IPv4 環境と IPv6 環境での通信について」を参照してください。

IPv6 で通信する場合，PFM - Manager ホストと PFM - Agent ホストのそれぞれで IPv6 の利用設定を有効にする必要があります。また，PFM - Agent for Platform をインストールする前に，PFM - Agent ホストで IPv6 の利用設定を有効にする必要があります。この設定は jpcconf ipv6 enable コマンドで実行しますが，すでに有効になっている場合，この設定は必要ありません。IPv6 の利用設定を確認するためには，jpcconf ipv6 display コマンドを実行します。

jpcconf ipv6 enable，jpcconf ipv6 display コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。また，jpcconf ipv6 enable コマンドを実行する条件やタイミングについては，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の IPv6 環境が含まれる場合のネットワーク構成例について説明している章を参照してください。

なお，PFM - Agent for Platform と PFM - Manager を IPv6 で通信する場合，名前解決できるホスト名を指定してください。

PFM - Agent for Platform と PFM - Manager との通信は，解決できる IP アドレスで通信します。また，PFM - Agent for Platform と PFM - Manager との通信では，IPv4 と IPv6 が共存した環境の場合，解決できる IP アドレスで通信に失敗したとき，別の IP アドレスで通信することはありません。

例えば，IPv4 で接続に失敗した場合，IPv6 でリトライすることはありません。また，IPv6 で接続に失敗した場合に，IPv4 でリトライすることもありません。事前に接続できることを確認してください。

(2) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは，デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては，サービスを起動するたびに，そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また，ファイアウォール環境で，Performance Management を使用するときは，ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 4-1　デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス (Windows の場合)

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	jp1pcnsvr	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用されるポート番号。 Performance Management のすべてのホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	jp1pcstatsvr	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。 PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
JP1/SLM 連携機能	JP1/ITSLM	−	20905	JP1/SLM で設定されるポート番号。

(凡例)

−：なし

これらの PFM - Agent が使用するポート番号で通信できるように，ネットワークを設定してください。

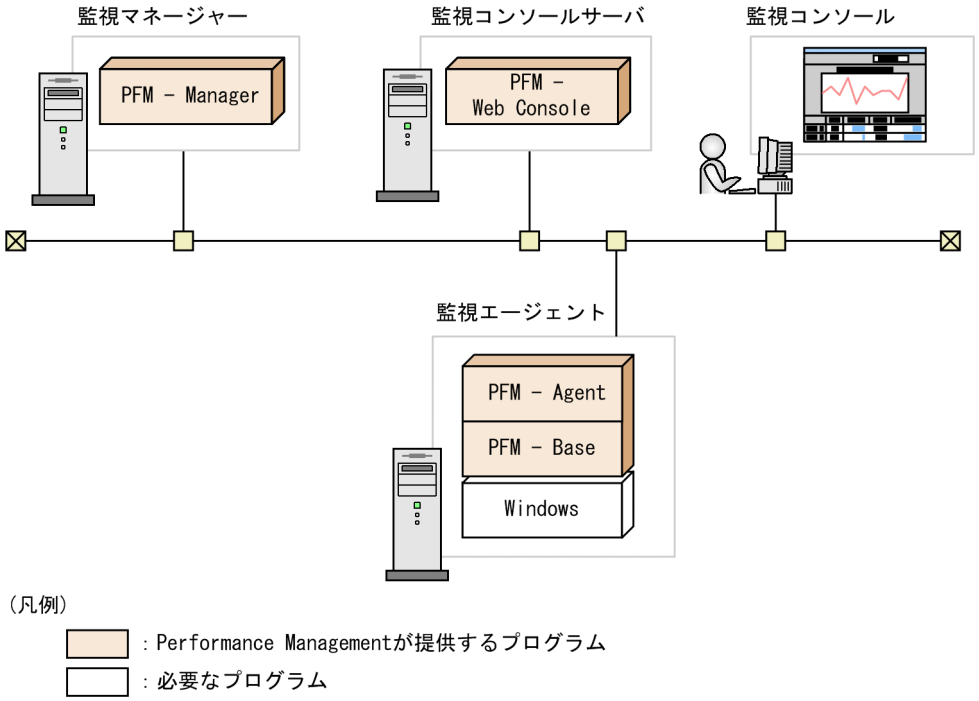
4.2.3 インストールに必要な OS ユーザー権限

PFM - Agent for Platform をインストールするときは，必ず，Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

4.2.4 前提プログラム

ここでは，PFM - Agent for Platform をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。プログラムの構成図を次に示します。

図 4-2　プログラムの構成図



(1)　監視対象プログラム

PFM - Agent for Platform の監視対象プログラムを次に示します。

- Windows Server 2008
- Windows Server 2012
- Windows Server 2016

これらの監視対象プログラムは，PFM - Agent for Platform と同一ホストにインストールする必要があります。

(2)　Performance Management プログラム

監視エージェントには，PFM - Agent と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - Agent の前提プログラムです。同一ホストにほかの PFM - Agent や PFM - RM をインストールする場合でも，PFM - Base は 1 つだけでかまいません。ただし，PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合，PFM - Base は不要です。

Performance Management プログラムを導入するホストとバージョンの関係については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のシステム構成のバージョン互換について説明している章を参照してください。

また，PFM - Agent for Platform を使って Windows Server の稼働監視をするためには，PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

4.2.5　パフォーマンスデータを収集するために必要な環境構築

PFM - Agent for Platform を動作させるために必要なネットワーク環境でパフォーマンスデータを収集するためには，Agent Collector サービス起動前に，パフォーマンス情報を監視できるネットワークサービス，プロトコル，サーバ，製品などをインストールする必要があります。また，インストールした製品の環境を構築していない場合，または，インストールで追加したサービスが［停止］している場合，パフォーマンスデータを収集してもデータが取得できなかったり，フィールド値が 0 で表示されたりします。

PFM - Agent for Platform で特定のレコードのパフォーマンスデータを収集する場合，Agent Collector サービスを起動する前に，次の表に示す前提条件が満たされている必要があります。ただし，次の表には Event Log［サービス名：Eventlog］など，OS の動作の前提となるサービスは記載していません。

パフォーマンスデータの収集に必要な前提条件を次の表に示します。

表 4-2　パフォーマンスデータの収集に必要な前提条件

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	フィールド名（PFM - View 名）	前提条件
OS	Application Process Detail（PD_APPD）	Monitoring Count（MONITORING_COUNT）	Windows Management Instrumentation［サービス名：WinMgmt］が開始されていること。
		Monitoring Status（STATUS）	
	Application Process Interval（PD_APSI）	すべてのフィールド	
	Application Process Overview（PD_APS）	すべてのフィールド	
	Application Service Overview（PD_ASVC）	PID（ID_PROCESS）	
	Application Summary Extension（PD_APP2）	Application Exist（EXIST）	
		Application Status（STATUS）	
	Logical Disk Overview（PI_LOGD）	Page File Size Mbytes（PAGE_FILE_SIZE_BYTES）	
	Process End Detail（PD_PEND）	すべてのフィールド	
	Processor Overview（PI_PCSR）	すべてのフィールド	
	System Overview（PI）	System Type(SYSTEM_TYPE)	
ネットワークサービス	Browser Overview（PI_BRSR）	すべて	Computer Browser[サービス名： Browser]が開始されていること。
	WINS Server Overview（PI_WINS）	すべて	Windows インターネットネームサービス（WINS）をインストールし，インストール後に追加され

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	フィールド名（PFM - View 名）	前提条件
ネットワークサービス	WINS Server Overview (PI_WINS)	すべて	たサービスが開始されていていること。
	Server Work Queues Overview (PI_SVRQ)	すべて	Server［サービス名：LanmanServer］が開始されていること。
	System Overview（PI）	Blocking Reqs Rejected (BLOCKING_REQUESTS_REJECTED)	
		Bytes Rcvd/sec (BYTES_RECEIVED_PER_SEC)	
		Bytes Total/sec (BYTES_TOTAL_PER_SEC)	
		Bytes Xmitd/sec (BYTES_TRANSMITTED_PER_SEC)	
		Context Blocks Queued/sec (CONTEXT_BLOCKS_QUEUED_PER_SEC)	
		Errors Access Permissions (ERRORS_ACCESS_PERMISSIONS)	
		Errors Granted Access (ERRORS_GRANTED_ACCESS)	
		Errors Logon (ERRORS_LOGON)	
		Errors System (ERRORS_SYSTEM)	
		File Directory Searches (FILE_DIRECTORY_SEARCHES)	
		Files Open（FILES_OPEN）	
		Files Opened Total (FILES_OPENED_TOTAL)	
		Logon Total (LOGON_TOTAL)	
		Logon/sec (LOGON_PER_SEC)	

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	フィールド名（PFM - View 名）	前提条件
ネットワークサービス	System Overview（PI）	Pool Nonpaged Failures（POOL_NONPAGED_FAILURES）	Server［サービス名：LanmanServer］が開始されていること。
		Pool Nonpaged Peak（POOL_NONPAGED_PEAK）	
		Pool Paged Failures（POOL_PAGED_FAILURES）	
		Pool Paged Peak（POOL_PAGED_PEAK）	
		Server Pool Nonpaged Bytes（SERVER_POOL_NONPAGED_BYTES）	
		Server Pool Paged Bytes（SERVER_POOL_PAGED_BYTES）	
		Server Sessions（SERVER_SESSIONS）	
		Sessions Errored Out（SESSIONS_ERRORED_OUT）	
		Sessions Forced Off（SESSIONS_FORCED_OFF）	
		Sessions Logged Off（SESSIONS_LOGGED_OFF）	
		Sessions Timed Out（SESSIONS_TIMED_OUT）	
		Work Item Shortages（WORK_ITEM_SHORTAGES）	
Active Directory	Active Directory Overview（PI_AD）	Cache % Hit	Active Directory が有効で Active Directory データベースパフォーマンスカウンタがインストールされていること。
		Cache Page Fault Stalls/sec	
		Cache Page Faults/sec	
		Cache Size	
		Log Record Stalls/sec	
		Log Threads Waiting	
		Log Writes/sec	
		Table Open Cache % Hit	
		Table Open Cache Hits/sec	

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	フィールド名（PFM - View 名）	前提条件
Active Directory	Active Directory Overview（PI_AD）	Table Open Cache Misses/sec	Active Directory が有効で Active Directory データベースパフォーマンスカウンタがインストールされていること。
		Table Opens/sec	
		上記以外すべて	Active Directory が有効であること。

4.2.6　プロセス稼働の監視条件を 4,096 バイトにする場合の前提条件

PFM - Manager および PFM - Web Console が 09-50 以降の場合，パフォーマンス監視時に使用する監視条件を 4,096 バイトまで設定できます。

PFM - Base または PFM - Manager を PFM - Agent のホストに導入する場合は，バージョンが 10-00 以降のものを導入してください。

4.2.7　障害発生時の資料採取の準備

トラブルが発生した場合にメモリーダンプ，ユーザーモードプロセスダンプなどが必要になることがあります。トラブル発生時にこれらのダンプを採取する場合は，あらかじめメモリーダンプ，ユーザーモードプロセスダンプが出力されるように設定してください。

(1)　メモリーダンプの出力設定

1. [コントロールパネル] から [システム] をダブルクリックする。
2. [詳細設定] ページの [起動と回復] の [設定] ボタンをクリックする。
3. [デバッグ情報の書き込み] で，[完全メモリダンプ] を選択し，出力先のファイルを指定する。

注意

メモリーダンプのサイズは，実メモリーのサイズによって異なります。搭載している物理メモリーが大きいと，メモリーダンプのサイズも大きくなります。メモリーダンプを採取できるだけのディスク領域を確保してください。詳細は，OS 付属のドキュメントを参照してください。

(2)　ユーザーモードプロセスダンプの出力設定

次のレジストリを設定することによって，アプリケーションプログラムの異常終了時，即座に調査資料のユーザーモードプロセスダンプを取得できます。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥Windows Error Reporting¥LocalDumps
```

このレジストリキーに，次のレジストリ値を設定します。

- DumpFolder : REG_EXPAND_SZ <ダンプ出力先のフォルダ名>
  （出力先フォルダには書き込み権限が必要です）
- DumpCount : REG_DWORD <保存するダンプの数>
- DumpType : REG_DWORD 2

注意

- レジストリを設定することで，JP1 だけでなくほかのアプリケーションプログラムでもユーザーモードプロセスダンプが出力されるようになります。ユーザーモードプロセスダンプの出力を設定する場合はこの点をご注意ください。
- ユーザーモードプロセスダンプが出力されると，その分ディスク容量が圧迫されます。ユーザーモードプロセスダンプが出力されるように設定する場合は，十分なディスク領域が確保されているダンプ出力先フォルダを設定してください。

4.2.8 インストール前の注意事項

ここでは，Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

(1) レジストリに関する注意事項

PFM - Agent for Platform は，OS が提供する標準的な方法で設定された環境での動作しかサポートしていません。Microsoft のサポート技術情報で公開されている情報であっても，レジストリエディターでレジストリ情報を直接編集するなど，OS の環境をカスタマイズしている場合，パフォーマンスデータが正しく収集できなくなることがあります。

(2) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため，ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は，Performance Management が正しく動作しません。

(3) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール，セットアップするときの注意事項

Performance Management は，同一ホストに PFM - Manager，PFM - Web Console，および PFM - Agent をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合，PFM - Base は不要です。この場合，PFM - Agent の前提プログラムは PFM - Manager になるため，PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は，PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールした後に PFM - Manager，PFM - Agent の順でインストールしてください。また，PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に，PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールした後に PFM - Base，PFM - Agent の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent をインストールすると，接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager になります。この場合，接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続したい場合は，インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに，PFM - Agent をインストールする場合は，Web ブラウザの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は，ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ただし，07-50 から 08-00 以降にバージョンアップインストールした場合は，ステータス管理機能の設定状態はバージョンアップ前のままとなります。ステータス管理機能の設定を変更する場合は，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

> **ヒント**
>
> システムの性能や信頼性を向上させるため，PFM - Manager，PFM - Web Console，および PFM - Agent はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

(4) バージョンアップの注意事項

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合の注意事項については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章にある，バージョンアップの注意事項について説明している個所を参照してください。

PFM - Agent for Platform をバージョンアップする場合の注意事項については，「付録 G バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項」を参照してください。

なお，バージョンアップについての詳細は，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

(5) その他の注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや，Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままインストールした場合，システムの再起動を促すメッセージが表示されることがあります。この場合は，メッセージに従ってシステムを再起動し，インストールを完了させてください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや，Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままの状態，ディスク容量が不足している状態，またはフォルダ権限がない状態でインストールした場合，ファイルの展開に失敗することがあります。Performance Management のプログラムおよびサービスや，Performance Management のファイルを参照するような他プログラムが起動している場合はすべて停止してからインストールし直してください。ディスク容量不足やフォルダ権限不足が問題である場合は，問題を解決したあとでインストールし直してください。
- Performance Management のプログラムをインストールする場合，次に示すセキュリティ関連プログラムがインストールされていないかどうか確認してください。インストールされている場合，次の説明に従って対処してください。
  - セキュリティ監視プログラム

    セキュリティ監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して，Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。
  - ウィルス検出プログラム

    ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールしてください。

    Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合，インストールの速度が低下したり，インストールが実行できなかったり，または正しくインストールできなかったりすることがあります。
  - プロセス監視プログラム

    プロセス監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して，Performance Management のサービスまたはプロセス，および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。

    Performance Management のプログラムのインストール中に，プロセス監視プログラムによって，これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると，インストールに失敗することがあります。

4.3　インストール

ここでは，PFM - Agent のプログラムをインストールする順序と提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

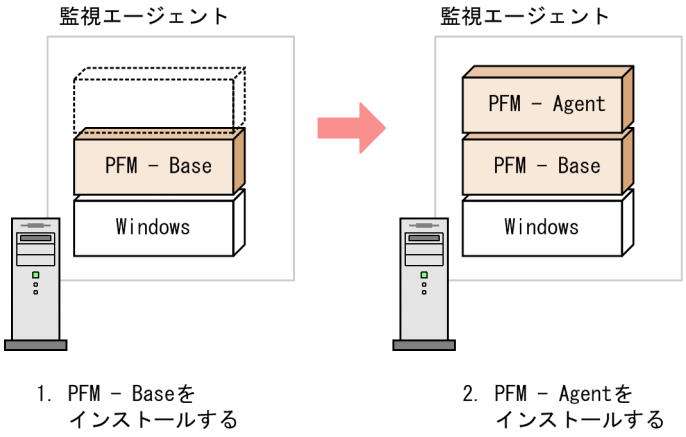
4.3.1　プログラムのインストール順序

まず，PFM - Base をインストールし，次に PFM - Agent をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。

なお，PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合は，PFM - Manager，PFM - Agent の順でインストールしてください。また，Store データベースのバージョン 1.0 からバージョン 2.0 にバージョンアップする場合，PFM - Agent と PFM - Manager または PFM - Base のインストール順序によって，セットアップ方法が異なります。Store バージョン 2.0 のセットアップ方法については，「4.7.2　Store バージョン 2.0 への移行」を参照してください。

同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合，PFM - Agent 相互のインストール順序は問いません。

図 4-3　プログラムのインストール順序



4.3.2　PFM - Agent for Platform のインストール手順

Windows ホストに Performance Management プログラムをインストールするには，提供媒体を使用する方法と，JP1/NETM/DM（JP1/NETM/DM は日本国内の製品名称です。）を使用してリモートインストールする方法があります。JP1/NETM/DM を使用する方法については，マニュアル「JP1/NETM/DM　運用ガイド 1（Windows(R)用)」を参照してください。

重要

OS のユーザーアカウント制御機能（UAC）を有効にしている場合は，インストール中にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は，［続行］ボタンをクリックしてインストールを続行してください。［キャンセル］ボタンをクリックした場合は，インストールが中止されます。

提供媒体を使用する場合のインストール手順を次に示します。

1. プログラムをインストールするホストに，Administrators 権限でログオンする。
2. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば，すべて停止する。

   停止するサービスは，物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。サービスの停止方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
3. 提供媒体をセットし，インストーラーを実行する。

   起動したインストーラーの指示に従ってインストールを進めます。

   PFM - Manager または PFM - Base のインストール時に設定された次の項目が表示され，確認できます。

   - ユーザー情報
   - インストール先のフォルダ
   - プログラムフォルダ
4. ［インストール］ボタンをクリックして，インストールを開始する。

4.4 セットアップ

ここでは，PFM - Agent for Platform を運用するための，セットアップについて説明します。

〈オプション〉は使用する環境によって必要になるセットアップ項目，またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

4.4.1 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for Platform の登録 〈オプション〉

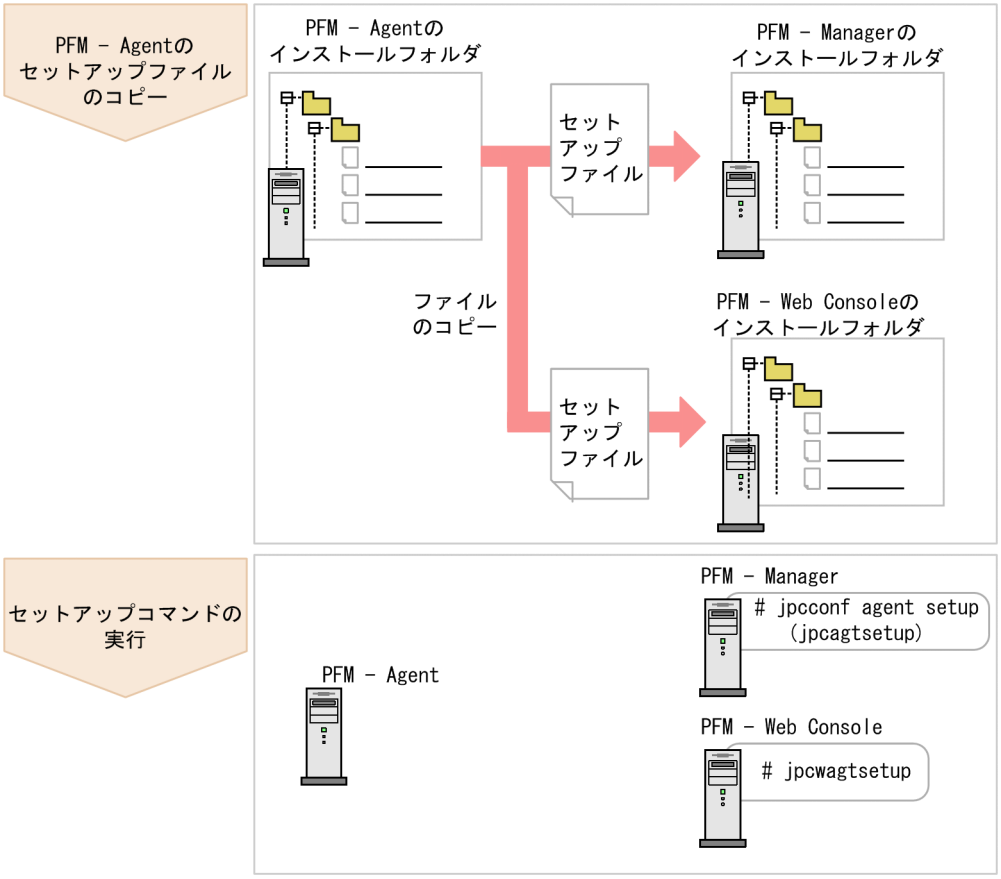
PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために，PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for Platform を登録する必要があります。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合，PFM - Agent の登録は自動で行われるため，ここで説明する手順は不要です。

ただし，PFM - Manager よりリリース時期が新しい PFM - Agent または PFM - RM については手動登録が必要になる場合があります。手動登録の要否については，PFM - Manager のリリースノートを参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次に示します。

図 4-4　PFM - Agent の登録の流れ



重要

- すでに PFM - Agent for Platform の情報が登録されている Performance Management システムに，新たに同じバージョンの PFM - Agent for Platform を追加した場合，PFM - Agent の登録は必要ありません。
- PFM - Agent for Platform のデータモデルバージョンが「3.0」「4.0」の場合は，データモデルバージョンを更新するためのセットアップは不要です。
- バージョンが異なる PFM - Agent for Platform を，異なるホストにインストールする場合，古いバージョン，新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合，`jpcconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので，結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は，コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。

(1) PFM - Agent for Platform のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for Platform をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は，停止する。
2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。
   ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 4-3　コピーするセットアップファイル

コピー先			PFM - Agent の セットアップファイル
PFM プログラム名	OS	コピー先フォルダ	
PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先フォルダ¥setup¥	インストール先フォルダ¥setup¥jpcagttw.EXE
	UNIX	/opt/jp1pc/setup/	インストール先フォルダ¥setup¥jpcagttu.Z
PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール先フォルダ¥setup¥	インストール先フォルダ¥setup¥jpcagttw.EXE
	UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/	インストール先フォルダ¥setup¥jpcagttu.Z

(2) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for Platform をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcconf agent setup -key Windows
```

ここでは，対話形式の実行例を示していますが，jpcconf agent setup コマンドは非対話形式でも実行できます。jpcconf agent setup コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

重要

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態でjpcconf agent setup コマンドを実行した場合，エラーが発生することがあります。その場合は，Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと，再度jpcconf agent setup コマンドを実行してください。

(3) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for Platform をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは，この作業が終了したあと削除してもかまいません。

4.4.2 ネットワークの設定 〈オプション〉

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて，変更する場合に必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

- **IP アドレスを設定する**

  Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときに設定します。複数の IP アドレスを設定するには，jpchosts ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した jpchosts ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

  詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- **ポート番号を設定する**

  Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため，ポート番号とサービス名は，Performance Management システム全体で統一させてください。

  ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

4.4.3 ログのファイルサイズ変更 〈オプション〉

Performance Management の稼働状況を，Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「**共通メッセージログ**」と呼びます。共通メッセージログは，デフォルトで 8,192 キロバイトのファイルが 2 ファイル使用されます。このファイルサイズを変更したい場合に，必要な設定です。

詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

4.4.4 パフォーマンスデータの格納先の変更 〈オプション〉

PFM - Agent for Platform で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先，バックアップ先またはエクスポート先のフォルダを変更したい場合に，必要な設定です。

パフォーマンスデータは，デフォルトで，次の場所に保存されます。

- 保存先：**インストール先フォルダ**¥agtt¥store¥
- バックアップ先：**インストール先フォルダ**¥agtt¥store¥backup¥
- 部分バックアップ先：**インストール先フォルダ**¥agtt¥store¥partial¥
- エクスポート先：**インストール先フォルダ**¥agtt¥store¥dump¥
- インポート先：**インストール先フォルダ**¥agtt¥store¥import¥

詳細については，「4.7.1　パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

4.4.5　PFM - Agent for Platform の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで，その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには，jpcconf mgrhost define コマンドを使用します。

重要

- 同一ホスト上に，複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも，接続先に指定できる PFM - Manager は，1 つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合，接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合，接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

   セットアップを実施する前に，ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は，すべて停止してください。サービスの停止方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

   jpcconf mgrhost define コマンド実行時に，Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は，停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して，jpcconf mgrhost define コマンドを実行する。

   例えば，接続先の PFM - Manager がホスト host01 上にある場合，次のように指定します。

   ```
   jpcconf mgrhost define -host host01
   ```

   ここでは，対話形式の実行例を示していますが，jpcconf mgrhost define コマンドは非対話形式でも実行できます。jpcconf mgrhost define コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

4.4.6　動作ログ出力の設定 <オプション>

PFM サービスの起動・停止時や，PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは，システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については，「付録Ｉ　動作ログの出力」を参照してください。

4.5 アンインストール

ここでは，PFM - Agent for Platform をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

4.5.1 アンインストール前の注意事項

ここでは，PFM - Agent for Platform をアンインストールするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

PFM - Agent for Platform をアンインストールするときは，必ず，Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても，services ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

(3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや，Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合，ファイルやフォルダが残ることがあります。この場合は，手動で「**インストール先フォルダ¥agtt**」以下をすべて削除してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや，Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合，システムの再起動を促すメッセージが出力されることがあります。この場合，システムを再起動して，アンインストールを完了させてください。
- PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストの場合，PFM - Base のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合，PFM - Agent，PFM - Base の順にアンインストールしてください。また，PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストの場合も同様に，PFM - Manager のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合，PFM - Agent，PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールしただけでは，`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。サービス情報の削除方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章のサービスの削除について説明している個所を参照してください。

(5)　その他の注意事項

PFM - Web Console がインストールされているホストから，Performance Management プログラムをアンインストールする場合は，Web ブラウザの画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。

4.5.2　接続先 PFM - Manager の解除

接続先 PFM - Manager を解除する場合は，対象の PFM - Manager に接続している PFM - Agent for Platform のサービス情報を削除する必要があります。

サービス情報の削除方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップ（Windows の場合）の章の，サービス情報の削除手順について説明している個所を参照してください。

なお，接続先を別の PFM - Manager に変更する場合は，「4.4.5　PFM - Agent for Platform の接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

4.5.3　アンインストール手順

PFM - Agent for Platform をアンインストールする手順を説明します。

1. PFM - Agent for Platform をアンインストールするホストに，Administrators 権限でログオンする。

2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

   サービス情報を表示して，サービスが起動されていないか確認してください。

   ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は，すべて停止してください。サービス情報の表示方法およびサービスの停止方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. アンインストールする Performance Management プログラムを選択する。

   Windows の［コントロールパネル］で［プログラムと機能］※を選択して，アンインストールする Performance Management プログラムを選択します。

   注※　Windows のバージョンによって名称が異なる場合があります。

4. ［削除］を選択し，［OK］ボタンをクリックする。

   選択したプログラムがアンインストールされます。

注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能（UAC）を有効にしている場合は，アンインストール中にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は，［続行］

ボタンをクリックしてアンインストールを続行してください。[キャンセル]ボタンをクリックした場合は，アンインストールが中止されます。

4.6 PFM - Agent for Platform のシステム構成の変更

監視対象システムのネットワーク構成の変更や，ホスト名の変更などに応じて，PFM - Agent for Platform のシステム構成を変更する場合があります。ここでは，PFM - Agent for Platform のシステム構成を変更する手順を説明します。

PFM - Agent for Platform のシステム構成を変更する場合，PFM - Manager や PFM - Web Console の設定もあわせて変更する必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお，物理ホスト名またはエイリアス名を変更するときに，固有の追加作業が必要な PFM - Agent もありますが，PFM - Agent for Platform の場合，固有の追加作業は必要ありません。

4.7　PFM - Agent for Platform の運用方式の変更

収集した稼働監視データの運用手順の変更などで，PFM - Agent for Platform の運用方式を変更する場合があります。ここでは，PFM - Agent for Platform の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

4.7.1　パフォーマンスデータの格納先の変更

PFM - Agent for Platform で収集したパフォーマンスデータは，PFM - Agent for Platform の Agent Store サービスの Store データベースで管理しています。ここではパフォーマンスデータの格納先の変更方法について説明します。

(1)　jpcconf db define コマンドを使用して設定を変更する

Store データベースで管理されるパフォーマンスデータの，次のデータ格納先フォルダを変更したい場合は，jpcconf db define コマンドで設定します。Store データベースの格納先フォルダを変更する前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は，jpcconf db define コマンドの-move オプションを使用してください。jpcconf db define コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

- 保存先フォルダ
- バックアップ先フォルダ
- 部分バックアップ先フォルダ※
- エクスポート先フォルダ
- インポート先フォルダ※

注※

Store バージョン 2.0 使用時だけ設定できます。

jpcconf db define コマンドで設定するオプション名，設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 4-4　パフォーマンスデータの格納先を変更するコマンドの設定項目

説明	オプション名	設定できる値（Store バージョン 1.0）※	設定できる値（Store バージョン 2.0）※	デフォルト値
パフォーマンスデータの保存先フォルダ	sd	1～127 バイトのフォルダ名	1～214 バイトのフォルダ名	インストール先フォルダ¥agtt¥store

説明	オプション名	設定できる値（Store バージョン 1.0）※	設定できる値（Store バージョン 2.0）※	デフォルト値
パフォーマンスデータのバックアップ先フォルダ	bd	1～127 バイトのフォルダ名	1～211 バイトのフォルダ名	インストール先フォルダ¥agtt¥store¥backup
パフォーマンスデータの部分バックアップ先フォルダ	pbd	－	1～214 バイトのフォルダ名	インストール先フォルダ¥agtt¥store¥partial
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	bs	1～9	1～9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先フォルダ	dd	1～127 バイトのフォルダ名	1～127 バイトのフォルダ名	インストール先フォルダ¥agtt¥store¥dump
パフォーマンスデータのインポート先フォルダ	id	－	1～222 バイトのフォルダ名	インストール先フォルダ¥agtt¥store¥import

（凡例）

－：設定できません。

注※

フォルダ名は，Store データベースのデフォルト格納先フォルダ（インストール先フォルダ¥agtt¥store）からの相対パスか，または絶対パスで指定してください。

(2) jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する（Store バージョン 1.0 の場合だけ）

Store バージョン 1.0 使用時は，jpcsto.ini を直接編集して変更できます。

(a) jpcsto.ini の設定項目

jpcsto.ini ファイルで編集するラベル名，設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 4-5 パフォーマンスデータの格納先の設定項目（jpcsto.ini の[Data Section]セクション）

説明	ラベル名	設定できる値（Store バージョン 1.0）※1	デフォルト値
パフォーマンスデータの保存先フォルダ	Store Dir※2	1～127 バイトのフォルダ名	インストール先フォルダ¥agtt¥store

説明	ラベル名	設定できる値（Store バージョン 1.0）※1	デフォルト値
パフォーマンスデータのバックアップ先フォルダ	Backup Dir※2	1～127 バイトのフォルダ名	インストール先フォルダ¥agtt¥store¥backup
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	Backup Save	1～9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先フォルダ	Dump Dir※2	1～127 バイトのフォルダ名	インストール先フォルダ¥agtt¥store¥dump

注※1

- フォルダ名は，Store データベースのデフォルト格納先フォルダ（**インストール先フォルダ¥agtt¥store**）からの相対パスか，または絶対パスで指定してください。
- 指定できる文字は，次の文字を除く，半角英数字，半角記号および半角空白です。
  ; , * ? ’ ” < > |
- 指定値に誤りがある場合，Agent Store サービスは起動できません。

注※2

Store Dir，Backup Dir，および Dump Dir には，それぞれ重複したフォルダを指定できません。

(b) jpcsto.ini ファイルの編集前の準備

- Store データベースの格納先フォルダを変更する場合は，変更後の格納先フォルダを事前に作成しておいてください。
- Store データベースの格納先フォルダを変更すると，変更前に収集したパフォーマンスデータを使用できなくなります。変更前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は，次に示す手順でデータを引き継いでください。

  1. jpctool db backup コマンドで Store データベースに格納されているパフォーマンスデータのバックアップを採取する。
  2. 「(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順」に従って Store データベースの格納先フォルダを変更する。
  3. jpctool db restore コマンドで変更後のフォルダにバックアップデータをリストアする。

(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順

手順を次に示します。

1. PFM - Agent のサービスを停止する。

   ローカルホストで PFM -Agent のプログラムおよびサービスが起動されている場合は，すべて停止してください。

2. テキストエディターなどで，jpcsto.ini ファイルを開く。

3. パフォーマンスデータの格納先フォルダなどを変更する。

次に示す網掛け部分を，必要に応じて修正してください。

```
        :
[Data Section]
Store Dir=.
Backup Dir=.¥backup
Backup Save=5
Dump Dir=.¥dump
        :
```

重要

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- 各ラベルの値の「.」は，Agent Store サービスの Store データベースのデフォルト格納先フォルダ（**インストール先フォルダ¥agtt¥store**）を示します。格納先を変更する場合，その格納先フォルダからの相対パスか，または絶対パスで記述してください。
- jpcsto.ini ファイルには，データベースの格納先フォルダ以外にも，定義情報が記述されています。[Data Section]セクション以外の値は変更しないようにしてください。[Data Section]セクション以外の値を変更すると，Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. jpcsto.ini ファイルを保存して閉じる。
5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

注意

この手順で Store データベースの保存先フォルダを変更した場合，パフォーマンスデータファイルは変更前のフォルダから削除されません。これらのファイルが不要な場合は，次に示すファイルだけを削除してください。

- 拡張子が.DB であるすべてのファイル
- 拡張子が.IDX であるすべてのファイル

4.7.2 Store バージョン 2.0 への移行

Store データベースの保存形式には，バージョン 1.0 と 2.0 の 2 種類あります。Store バージョン 2.0 の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の稼働監視システムの運用設計について説明している章を参照してください。

Store バージョン 2.0 は，PFM - Base または PFM - Manager のバージョン 08-10 以降の環境に，08-10 以降の PFM - Agent for Platform を新規インストールした場合にデフォルトで利用できます。それ以外

の場合は，Store バージョン 1.0 形式のままとなっているため，セットアップコマンドによって Store バージョン 2.0 に移行してください。

何らかの理由によって Store バージョン 1.0 に戻す必要がある場合は，Store バージョン 2.0 のアンセットアップを行ってください。

インストール条件に対応する Store バージョン 2.0 の利用可否と利用手順を次の表に示します。

表 4-6　Store バージョン 2.0 の利用可否および利用手順

インストール条件		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利用手順
インストール済みの PFM - Base，または PFM - Manager のバージョン	PFM - Agent のインストール方法		
08-10 より前	上書きインストール	利用できない	PFM - Base，または，PFM - Manager を 08-10 以降にバージョンアップ後，セットアップコマンドを実行
	新規インストール		
08-10 以降	上書きインストール	セットアップ後利用できる	セットアップコマンドを実行
	新規インストール	利用できる	設定不要

(1)　Store バージョン 2.0 のセットアップ

1. システムリソース見積もりと保存期間の設計

   Store バージョン 2.0 導入に必要なシステムリソースが，実行環境に適しているかどうかを確認してください。必要なシステムリソースを次に示します。

   - ディスク容量
   - ファイル数
   - 1 プロセスがオープンするファイル数

   これらの値は保存期間の設定によって調節できます。実行環境の保有しているリソースを考慮して保存期間を設計してください。システムリソースの見積もりについては，リリースノートを参照してください。

2. フォルダの設定

   Store バージョン 2.0 に移行する場合に，Store バージョン 1.0 でのフォルダ設定では，Agent Store サービスが起動しないことがあります。このため，Agent Store サービスが使用するフォルダの設定を見直す必要があります。Agent Store サービスが使用するフォルダの設定は`jpcconf db define` コマンドを使用して表示・変更できます。

   Store バージョン 2.0 は，Store データベースの保存先フォルダやバックアップ先フォルダの最大長が Store バージョン 1.0 と異なります。Store バージョン 1.0 でフォルダの設定を相対パスに変更している場合，絶対パスに変換した値が Store バージョン 2.0 でのフォルダ最大長の条件を満たしているか確認してください。Store バージョン 2.0 のフォルダ最大長は 214 バイトです。フォルダ最大長の条件を

満たしていない場合は，Agent Store サービスが使用するフォルダの設定を変更したあと，手順 3 以降に進んでください。

3. セットアップコマンドの実行

   Store バージョン 2.0 に移行するため，次のコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf db vrset -ver 2.0 -key Windows
   ```

   jpcconf db vrset コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

4. 保存期間の設定

   手順 1 の見積もり時に設計した保存期間を設定してください。Agent Store サービスを起動して，PFM - Web Console で設定してください。

(2) Store バージョン 2.0 のアンセットアップ

Store バージョン 2.0 は jpcconf db vrset -ver 1.0 コマンドを使用してアンセットアップします。Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると，Store データベースのデータはすべて初期化され，Store バージョン 1.0 に戻ります。

jpcconf db vrset コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

(3) 注意事項

(a) Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移行する場合

Store データベースを Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移行した場合，PI レコードタイプのレコードの保存期間の設定は引き継がれますが，PD レコードタイプのレコードについては，以前の設定値（保存レコード数）に関係なくデフォルトの保存日数がレコードごとに設定され，保存日数以前に収集されたデータは削除されます。

例えば，Store バージョン 1.0 で，Collection Interval が 3,600 秒の PD レコードの保存レコード数を 1,000 に設定していた場合，PD レコードは 1 日に 24 レコード保存されることになるので，1,000/24≒約 42 日分のデータが保存されています。この Store データベースを Store バージョン 2.0 へ移行した結果，デフォルト保存日数が 10 日に設定されたとすると，11 日以上前のデータは削除されて参照できなくなります。

Store バージョン 2.0 へ移行する前に，PD レコードタイプのレコードの保存レコード数の設定を確認し，Store バージョン 2.0 でのデフォルト保存日数以上のデータが保存される設定となっている場合は，jpctool db dump コマンドでデータベース内のデータを出力してください。Store バージョン 2.0 でのデフォルト保存日数については，リリースノートを参照してください。

(b) Store バージョン 2.0 から Store バージョン 1.0 に戻す場合

Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると，データは初期化されます。このため，Store バージョン 1.0 に変更する前に，`jpctool db dump` コマンドで Store バージョン 2.0 の情報を出力してください。

4.8 バックアップとリストア

PFM - Agent for Platform のバックアップおよびリストアについて説明します。

障害が発生してシステムが壊れた場合に備えて，PFM - Agent for Platform の設定情報のバックアップを取得してください。また，PFM - Agent for Platform をセットアップしたときなど，システムを変更した場合にもバックアップを取得してください。

なお，Performance Management システム全体のバックアップおよびリストアについては，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のバックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

収集データ追加ユーティリティで設定した内容はバックアップできません。

4.8.1 バックアップ

バックアップはファイルをコピーするなど，任意の方法で取得してください。バックアップを取得する際は，PFM - Agent for Platform のサービスを停止した状態で行ってください。

PFM - Agent for Platform の設定情報のバックアップ対象ファイルを次の表に示します。

そのほかのファイルについては，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の PFM - Agent のバックアップ対象ファイル一覧（Windows の場合）について説明している個所を参照してください。

表 4-7　PFM - Agent for Platform のバックアップ対象ファイル（物理ホストの場合）

ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥*.ini ファイル	Agent Collector サービスの設定ファイル
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥*.ini ファイル	Agent Store サービスの設定ファイル
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcapp ファイル※1	アプリケーション定義ファイル（09-00 以前）
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcapp2 ファイル※1	アプリケーション定義ファイル（09-10 以降）
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥*.ini ファイル	JPCUSER 定義ファイル

表 4-8　PFM - Agent for Platform のバックアップ対象ファイル（論理ホストの場合）

ファイル名	説明
環境フォルダ※2¥jp1pc¥agtt¥agent¥*.ini ファイル	Agent Collector サービスの設定ファイル
環境フォルダ※2¥jp1pc¥agtt¥store¥*.ini ファイル	Agent Store サービスの設定ファイル
環境フォルダ※2¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcapp ファイル※1	アプリケーション定義ファイル（09-00 以前）

ファイル名	説明
環境フォルダ※2¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcapp2 ファイル※1	アプリケーション定義ファイル（09-10 以降）
環境フォルダ※2¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥*.ini ファイル	JPCUSER 定義ファイル

注※1

プロセス監視を設定していない場合は，存在しません。

注※2

環境フォルダは，論理ホストの作成時に作成される共有ディスク上のフォルダです。論理ホストを作成していない場合は，バックアップされません。

重要

PFM - Agent for Platform のバックアップを取得する際は，取得した環境の製品バージョン番号を管理するようにしてください。製品バージョン番号の詳細については，リリースノートを参照してください。

4.8.2 リストア

PFM - Agent for Platform の設定情報をリストアする場合は，次に示す前提条件を確認した上で，バックアップ対象ファイルを元の位置にコピーしてください。バックアップした設定情報ファイルで，ホスト上の設定情報ファイルを上書きします。

前提条件

- PFM - Agent for Platform がインストール済みであること。
- PFM - Agent for Platform のサービスが停止していること。

論理ホスト環境の場合はさらに次の条件が必要です。

- 論理ホスト環境を作成済みで，論理ホスト名および環境フォルダがバックアップしたときの構成と同じであること。
- 待機系への論理ホスト定義ファイルのインポートが実施済みであること。

重要

PFM - Agent for Platform の設定情報をリストアする場合，バックアップを取得した環境とリストアする環境の製品バージョン番号が完全に一致している必要があります。製品バージョン番号の詳細については，リリースノートを参照してください。リストアの可否についての例を次に示します。

リストアできるケース

PFM - Agent for Platform 08-50 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for Platform 08-50 にリストアする。

リストアできないケース

・PFM - Agent for Platform 08-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for Platform 08-50 にリストアする。

・PFM - Agent for Platform 08-50 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for Platform 08-50-04 にリストアする。

4.9　Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では，PFM - Web Console がインストールされているホストに，プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル提供媒体からマニュアルをコピーすることで，Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお，PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は，実行系，待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

4.9.1　マニュアルを参照するための設定

(1)　PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い，PFM - Web Console に PFM - Agent を登録する（PFM - Agent の追加セットアップを行う）。
2. PFM - Web Console がインストールされているホストに，マニュアルのコピー先ディレクトリを作成する。
   - Windows の場合：Web Console のインストール先フォルダ¥doc¥言語コード¥××××
   - UNIX の場合：/opt/jp1pcwebcon/doc/言語コード/××××
     ××××には，PFM - Agent のヘルプ ID を指定してください。ヘルプ ID については，「付録 B 識別子一覧」を参照してください。
3. 上記で作成したディレクトリの直下に，マニュアル提供媒体から次のファイルおよびディレクトリをコピーする。

   HTML マニュアルの場合

   Windows の場合：該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号（03004A0D など）下の，すべての HTML ファイル，CSS ファイル，および FIGURE フォルダ

   UNIX の場合：/提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号（03004A0D など）下の，すべての HTML ファイル，CSS ファイル，および FIGURE ディレクトリ

   PDF マニュアルの場合

   Windows の場合：該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号（03004A0D など）下の PDF ファイル

   UNIX の場合：/提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号（03004A0D など）下の PDF ファイル

   コピーの際，HTML マニュアルの場合は INDEX.HTM ファイルが，PDF マニュアルの場合は PDF ファイル自体が，作成したディレクトリ直下に配置されるようにしてください。
4. PFM - Web Console を再起動する。

(2) お使いのマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合

提供媒体の setup.exe を使ってインストールするか，または直接 HTML ファイル，CSS ファイル，PDF ファイル，および GIF ファイルを任意のフォルダにコピーしてください。HTML マニュアルの場合，次のディレクトリ構成になるようにしてください。

```
html（HTML ファイルおよび CSS ファイルを格納）
└FIGURE（GIF ファイルを格納）
```

4.9.2 マニュアルの参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の［メイン］画面のメニューバーフレームにある［ヘルプ］メニューをクリックし，［ヘルプ選択］画面を表示する。
2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの［PDF］をクリックする。

   マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。［PDF］をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

Web ブラウザでの文字の表示に関する注意事項

Windows の場合，［スタート］メニューからオンラインマニュアルを表示させると，すでに表示されている Web ブラウザの画面上に HTML マニュアルが表示されることがあります。

5 クラスタシステムでの運用

この章では，クラスタシステムで PFM - Agent for Platform を運用する場合のインストール，セットアップ，およびクラスタシステムで PFM - Agent for Platform を運用するときの処理の流れについて説明します。

5.1　クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform の構成

ここでは，HA クラスタシステムで PFM - Agent for Platform を運用する場合の構成について説明します。クラスタシステムの概要，および Performance Management システムをクラスタシステムで運用する場合のシステム構成については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のクラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

なお，この章で，単に「クラスタシステム」と記述している場合は，HA クラスタシステムのことを指します。

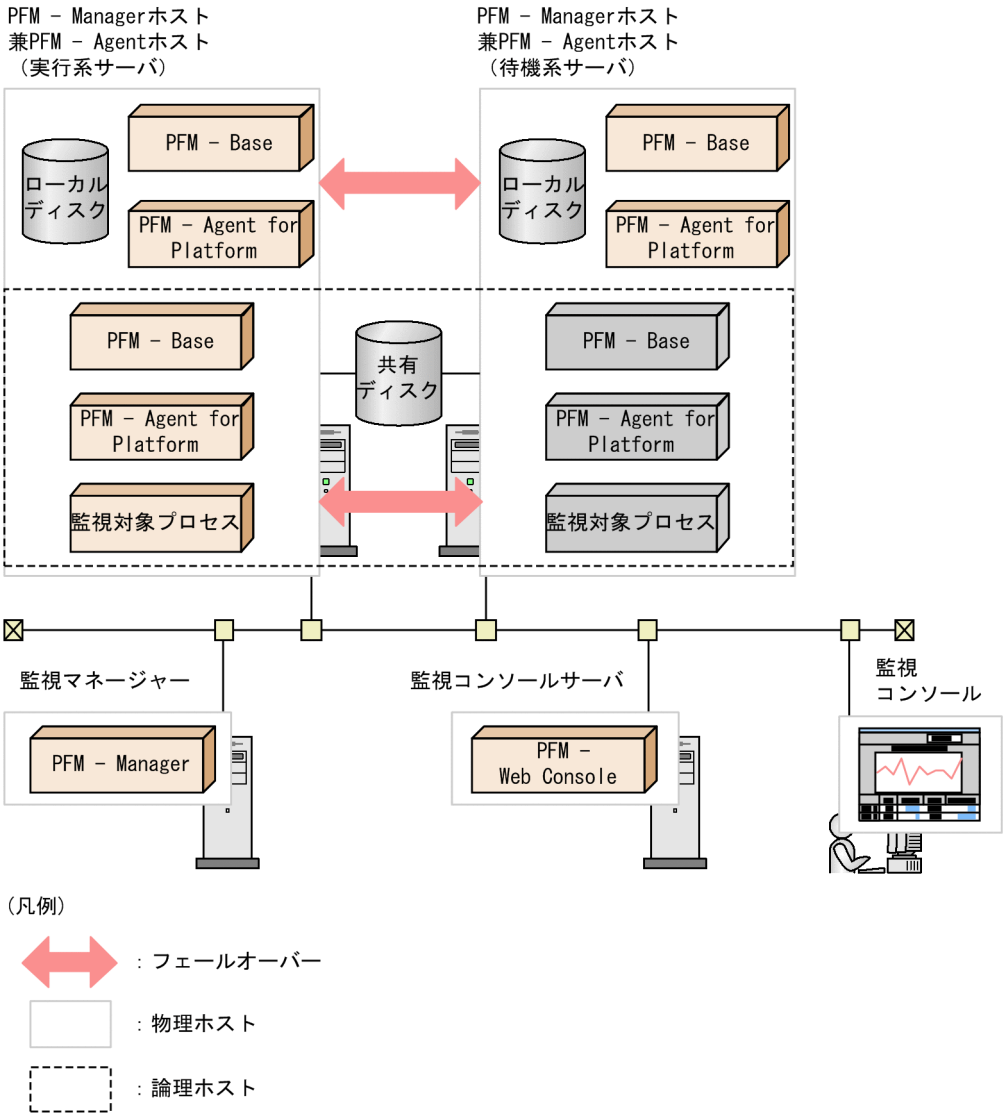
PFM - Agent for Platform をクラスタシステムで運用すると，障害発生時にフェールオーバーすることができ，可用性が向上します。

PFM - Agent for Platform をクラスタシステムで運用する場合は，実行系ノードと待機系ノードの両方で，同じ PFM - Agent for Platform が実行できる環境を構築します。また，データファイル，構成ファイル，ログファイルなど，データ一式を共有ディスクに格納します。

PFM - Agent for Platform は，クラスタ構成のプロセスを監視する場合にだけ，論理ホストで運用することを推奨します。

クラスタシステムで PFM - Agent for Platform を運用する場合は，次の図のような構成で運用します。

図 5-1　クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform の構成例



共有ディスクに定義情報やパフォーマンス情報を格納し，フェールオーバー時に引き継ぎます。1 つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがある場合は，すべて同じ共有フォルダを使います。

1 つのノードで PFM - Agent for Platform を複数実行できます。クラスタ構成が複数ある構成（アクティブ・アクティブ構成）の場合，それぞれの論理ホスト環境で，PFM - Agent for Platform を実行してください。それぞれの PFM - Agent for Platform は独立して動作し，別々にフェールオーバーできます。

5.2　フェールオーバー時の処理

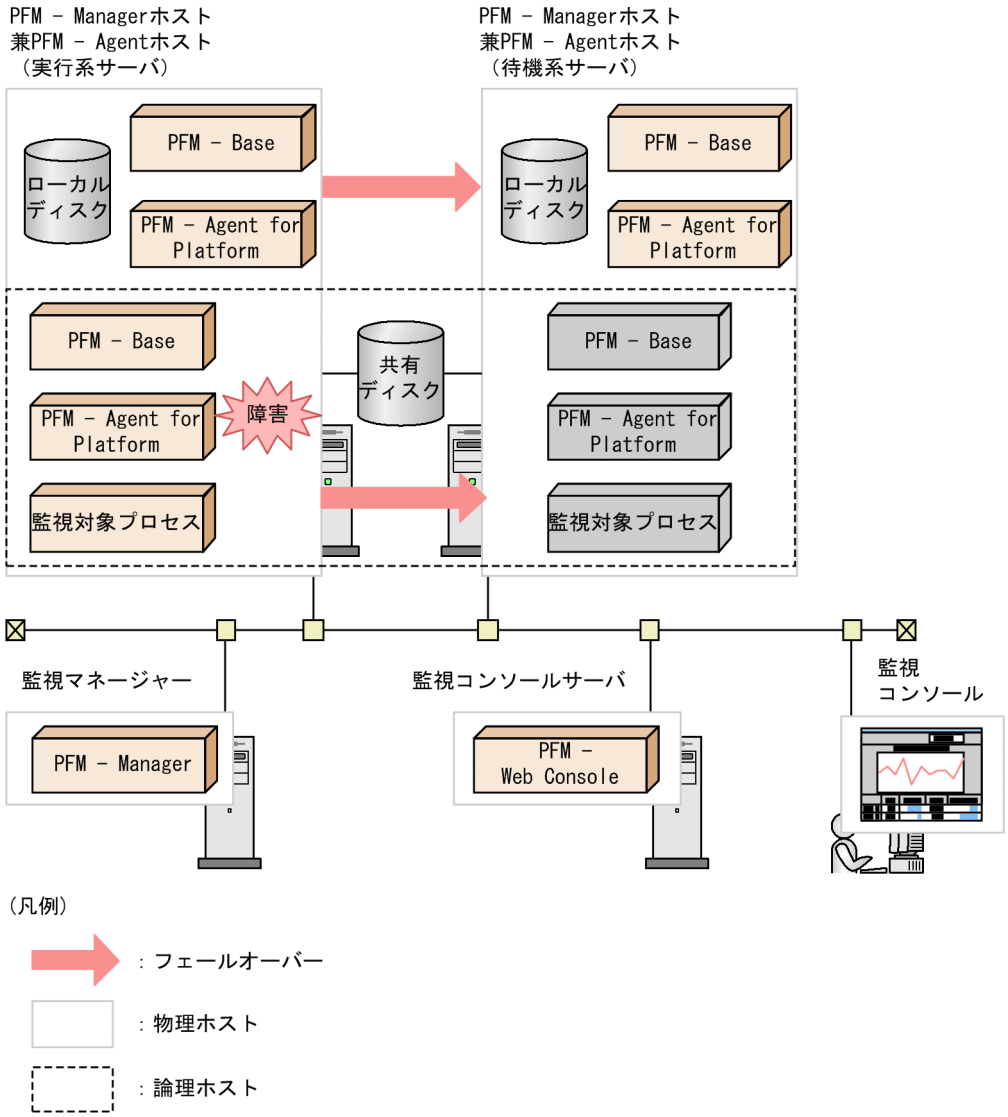
実行系ホストに障害が発生すると，処理が待機系ホストに移ります。

ここでは，PFM - Agent for Platform に障害が発生した場合のフェールオーバー時の処理について説明します。また，PFM - Manager に障害が発生した場合の，PFM - Agent for Platform への影響について説明します。

5.2.1　PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー

PFM - Agent for Platform を実行しているホストでフェールオーバーが発生した場合の処理を次の図に示します。

図 5-2　PFM - Agent ホストでフェールオーバーが発生した場合の処理



PFM - Agent for Platform のフェールオーバー中に，PFM - Web Console で操作すると，「There was no answer(-6)」というメッセージが表示されます。この場合は，フェールオーバーが完了するまで待ってから操作してください。

PFM - Agent for Platform のフェールオーバー後に，PFM - Web Console で操作すると，フェールオーバー先のノードで起動した PFM - Agent for Platform に接続されます。

5.2.2 PFM - Manager が停止した場合の影響と対処

PFM - Manager が停止すると，Performance Management システム全体に影響します。

PFM - Manager は，各ノードで動作している PFM - Agent for Platform のエージェント情報を一括管理しています。また，PFM - Agent for Platform がパフォーマンス監視中にしきい値を超えた場合のアラームイベントの通知や，アラームイベントを契機としたアクションの実行を制御しています。

PFM - Manager が停止したときの PFM - Agent for Platform への影響とその対処について，次に示します。

表 5-1　PFM - Manager が停止した場合の影響

プログラム名	影響	対処
PFM - Agent for Platform	PFM - Agent for Platform の動作中に，PFM - Manager が停止した場合，次のように動作する。 • パフォーマンスデータは継続して収集される。 • 発生したアラームイベントが PFM - Manager に通知されないため，アラーム定義ごとにアラームイベントが保持される。また，PFM - Manager が起動されるまで，PFM - Agent for Platform は通知をリトライする。保持しているアラームイベントが 3 つを超えると，古いアラームイベントは上書きされる。PFM - Agent for Platform を停止すると，保持しているアラームイベントは削除される。 • PFM - Manager に通知済みのアラームステータスは，PFM - Manager が再起動したときに一度リセッ	PFM - Manager を起動する。動作中の PFM - Agent for Platform はそのまま運用できる。ただし，アラームが期待したとおりに通知されない場合があるため， PFM - Manager 復旧後に，共通メッセージログに出力されているメッセージ KAVE00024-I を確認する。

プログラム名	影響	対処
PFM - Agent for Platform	トされる。リセットされると，PFM - Manager が PFM - Agent for Platform の状態を確認し，アラームステータスが最新の状態になる。 • PFM - Agent for Platform を停止しようとした場合，PFM - Manager に停止の旨を通知できないため，停止に時間が掛かる。	PFM - Manager を起動する。動作中の PFM - Agent for Platform はそのまま運用できる。ただし，アラームが期待したとおりに通知されない場合があるため， PFM - Manager 復旧後に，共通メッセージログに出力されているメッセージ KAVE00024-I を確認する。

PFM - Manager が停止した場合の影響を考慮の上，運用方法を検討してください。なお，トラブル以外にも，構成の変更やメンテナンスの作業などで PFM - Manager の停止が必要になる場合もあります。運用への影響が少ないときに，メンテナンスすることをお勧めします。

5.3　クラスタシステムでのインストールとセットアップ

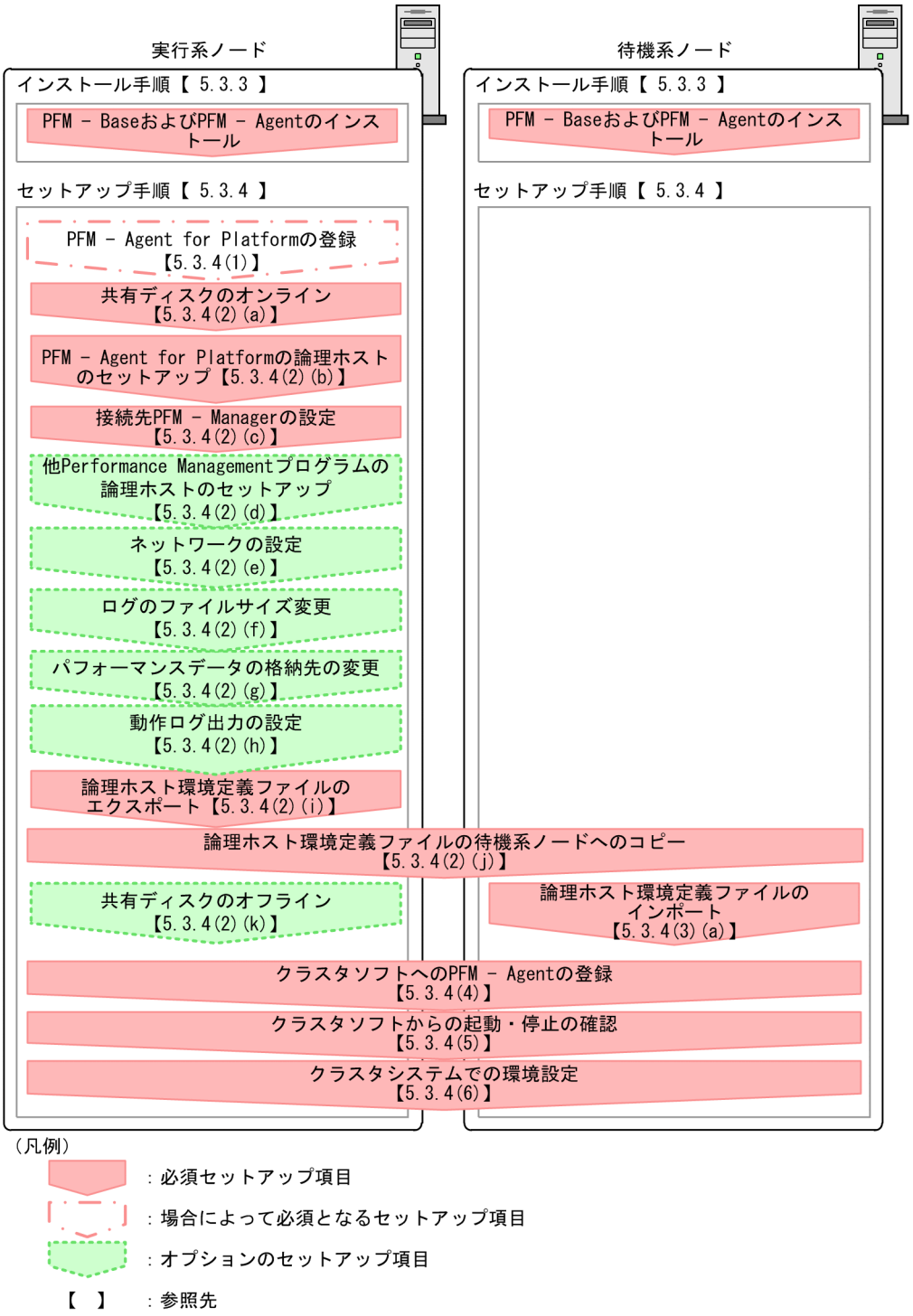
ここでは，クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform のインストールとセットアップの手順について説明します。

なお，PFM - Manager のインストールとセットアップの手順については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のクラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

5.3.1　クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ

クラスタシステムで，論理ホスト運用する PFM - Agent for Platform のインストールおよびセットアップの流れを次の図に示します。

図 5-3　クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform のインストールとセットアップの流れ



なお，ユーザー入力を必要とするセットアップコマンドは，対話形式で実行するか非対話形式で実行するかを選択できます。

対話形式で実行する場合は，コマンドの指示に従ってユーザーが値を入力する必要があります。

非対話形式で実行する場合は，コマンド実行中に必要となる入力作業を，オプション指定や定義ファイルで代替するため，ユーザー入力が不要になります。また，バッチ処理やリモート実行によってセットアップ作業を自動化できるため，管理者の負担や運用コストを低減できます。

コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

5.3.2 クラスタシステムでのインストールの前に確認すること

インストールおよびセットアップを開始する前に，前提条件，必要な情報，および注意事項について説明します。

(1) 前提条件

PFM - Agent for Platform をクラスタシステムで使用する場合，次に示す前提条件があります。

(a) Performance Management のバージョン

クラスタシステムで運用するためには，PFM - Agent for Platform と同一装置内に，JP1/Performance Management - Base 11-01 以降，または JP1/Performance Management - Manager 11-01 以降が必要です。

(b) クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されている
- 論理ホストで運用する PFM - Agent for Platform の起動や停止などをクラスタソフトで制御するように設定されている
- 実行系および待機系で Microsoft へのエラー報告を抑止するよう設定されている
  Windows では，アプリケーションエラーが発生すると，Microsoft へエラーを報告するダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスが表示されるとフェールオーバーできないおそれがあるため，エラー報告を抑止する必要があります。設定されていない場合は次のように設定してください。

Windows Server 2008 の場合

1. [コントロールパネル] － [システムとセキュリティ] － [アクションセンター] － [メンテナンス] を選択する。
2. 「問題のレポートの解決策を確認」の [設定] をクリックする。
3. [報告された問題の解決策をいつ確認するかを選択します] ダイアログボックスで，[解決策を確認しない] を選択する。
4. [OK] ボタンをクリックする。

Windows Server 2012 の場合

1. [コントロールパネル] − [システムとセキュリティ] − [アクションセンター] − [メンテナンス] を選択する。
2. 「問題のレポートの解決策を確認」の [設定] をクリックする。
3. [Windows エラー報告の構成] ダイアログボックスで，[レポートを送信せず，この確認画面も今後表示しません] を選択する。
4. [OK] ボタンをクリックする。

Windows Server 2016 の場合

1. Windows の [スタート] メニューを右クリックし，[ファイル名を指定して実行] を選択する。
2. 「gpedit.msc」を入力し，[OK] ボタンをクリックする。
   ローカルグループポリシーエディターが表示されます。
3. [コンピュータの構成] − [管理用テンプレート] − [Windows コンポーネント] − [Windows エラー報告] をクリックする。
4. 右ペインにある [Windows エラー報告を無効にする] を右クリックし，[編集] を選択する。
   設定画面が表示されます。
5. 設定画面で [有効] をチェックする。
6. [OK] ボタンをクリックする。

(c) 共有ディスク

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに共有ディスクがあり，実行系ノードから待機系ノードへ引き継げる
- 共有ディスクが各ノードに物理的に Fibre Channel や SCSI などで接続されている
  Performance Management では，ネットワークドライブや，ネットワーク経由でレプリケーションしたディスクを共有ディスクとして使う構成はサポートされていません。
- 何らかの問題によって共有ディスクを使用しているプロセスが残っていても，クラスタソフトなどの制御によって強制的に共有ディスクをオフラインにして，フェールオーバーできる。
- 1 つの論理ホストで複数の PFM 製品を運用する場合，共有ディスクのフォルダ名が同じであること。なお，Store データベースについては格納先を変更して共有ディスク上のほかのフォルダに格納できます。

(d) 論理ホスト名，論理 IP アドレス

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに論理ホスト名と論理ホスト名に対応する論理 IP アドレスがあり，実行系ノードから待機系ノードに引き継げる
- 論理ホスト名と論理 IP アドレスが，hosts ファイルやネームサーバに設定されている

- DNS 運用している場合は，FQDN 名ではなく，ドメイン名を除いたホスト名を論理ホスト名として使用している
- 物理ホスト名と論理ホスト名が，システム内でユニークである

> **重要**
>
> - 論理ホスト名に，物理ホスト名（hostname コマンドで表示されるホスト名）を指定しないでください。正常に通信処理がされなくなるおそれがあります。
> - 論理ホスト名の長さは 1～32 文字です。
> - 論理ホスト名に使用できる文字は，半角英数字，ハイフン（-），アンダーバー（_）だけです。
> - 論理ホスト名には，"localhost"，IP アドレス，ハイフン（-）から始まるホスト名を指定できません。

(e) IPv6 を使用する場合の設定

Performance Management では，ネットワーク構成が IPv4 環境だけでなく IPv6 環境にも対応しています。そのため，IPv4 環境と IPv6 環境が混在するネットワーク構成でも Performance Management を運用できます。PFM - Agent for Platform では，PFM - Manager と IPv6 で通信できます。

ただし，PFM - Manager が導入されているホストの OS が Windows または Linux の場合に限ります。

IPv4 環境と IPv6 環境での通信の適用範囲については，「付録 K　IPv4 環境と IPv6 環境での通信について」を参照してください。

IPv6 で通信する場合，PFM - Agent for Platform をインストールする前に，PFM - Agent ホストで IPv6 の利用設定を有効にする必要があります。利用設定を確認する場合は，jpcconf ipv6 display コマンドを実行してください。また，PFM - Agent ホストで IPv6 の利用設定が有効であることを確認したあとに，PFM - Manager ホストと PFM - Agent ホストのそれぞれで IPv6 の利用設定を有効にする必要があります。この設定はjpcconf ipv6 enable コマンドで実行しますが，コマンドの実行要否は次のとおりです。

jpcconf ipv6 enable コマンドの実行が必要なケース

- それぞれのホストで，IPv4 環境から IPv6 環境に変更する場合
- IPv4 環境と IPv6 環境が共存していて，PFM - Manager を IPv4 環境から IPv6 環境に変更する場合

jpcconf ipv6 enable コマンドの実行が不要なケース

- それぞれのホストが，すでに IPv6 環境である場合
- IPv4 環境と IPv6 環境が共存していて，PFM - Manager が IPv6 環境である場合

jpcconf ipv6 enable コマンドの実行例を次に示します。

```
jpcconf ipv6 enable
```

jpcconf ipv6 enable コマンドは，実行系ノードおよび待機系ノードで，それぞれ実行してください。

jpcconf ipv6 enable コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。また，jpcconf ipv6 enable コマンドを実行する条件やタイミングについては，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の IPv6 環境が含まれる場合のネットワーク構成例について説明している章を参照してください。

(2) 論理ホストで運用する PFM - Agent for Platform のセットアップに必要な情報

論理ホストで PFM - Agent for Platform を運用する場合は，通常の PFM - Agent for Platform のセットアップで必要となる環境に加えて，次の表の情報が必要です。

表 5-2　論理ホストで運用する PFM - Agent for Platform のセットアップに必要な情報

項番	項目	設定例
1	論理ホスト名	jp1-halaop
2	論理 IP アドレス	172.16.92.100
3	共有ディスク	S:¥jp1

なお，1 つの論理ホストで運用する Performance Management のプログラムが複数ある場合も，同じ共有ディスクのフォルダを使用します。

共有ディスクに必要な容量については，リリースノートを参照してください。

(3) PFM - Agent for Platform で論理ホストをフェールオーバーさせる場合の注意事項

論理ホストで PFM - Agent for Platform を運用するシステム構成の場合，PFM - Agent for Platform の障害によって，論理ホスト全体をフェールオーバーさせるかどうかを検討してください。

論理ホスト全体をフェールオーバーさせる場合，PFM - Agent for Platform と同じ論理ホストで運用するほかの業務アプリケーションもフェールオーバーすることになります。このため，業務に影響を与えるおそれがあります。

PFM - Agent for Platform に異常が発生しても，ほかの業務アプリケーションの動作に影響がないように，通常はクラスタソフトで次に示すどちらかの設定をすることをお勧めします。

- PFM - Agent for Platform の動作監視をしない
- PFM - Agent for Platform の異常を検知してもフェールオーバーしない

5.3.3　クラスタシステムでのインストール手順

実行系ノードおよび待機系ノードに PFM - Base および PFM - Agent for Platform をインストールします。

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については，「4.　Windows 版のインストールとセットアップ」を参照してください。

5.3.4　クラスタシステムでのセットアップ手順

ここでは，クラスタシステムで Performance Management を運用するための，セットアップについて説明します。

セットアップ手順には，実行系ノードの手順と，待機系ノードの手順があります。実行系ノード，待機系ノードの順にセットアップしてください。

なお，実行系 は実行系ノードで実施する項目を，待機系 は待機系ノードで実施する項目を示します。また，オプション は次に示すセットアップ項目を示します。

- 使用する環境によって必要となるセットアップ項目
- デフォルトの設定を変更したい場合のセットアップ項目

(1)　PFM - Agent for Platform の登録 実行系　オプション

PFM - Agent for Platform を登録する手順は非クラスタシステムの場合と同じです。登録手順については，「4.　Windows 版のインストールとセットアップ」を参照してください。

(2)　PFM - Agent の論理ホストのセットアップ

実行系ノードで，PFM - Agent for Platform の論理ホスト環境をセットアップします。

注意

セットアップを実施する前に，Performance Management システム全体で，Performance Management シリーズプログラムのサービスをすべて停止してください。サービスの停止方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

(a)　共有ディスクのオンライン 実行系

共有ディスクがオンラインになっていることを確認します。共有ディスクがオンラインになっていない場合は，クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャーの操作などで，共有ディスクをオンラインにしてください。

(b) PFM - Agent for Platform の論理ホストのセットアップ 実行系

jpcconf ha setup コマンドを実行して論理ホスト環境を作成します。コマンドを実行すると，共有ディスクに必要なデータがコピーされ，論理ホスト用の定義が設定されて，論理ホスト環境が作成されます。

手順を次に示します。

1. jpcconf ha setup コマンドを実行して，PFM - Agent for Platform の論理ホスト環境を作成する。

   次のようにコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf ha setup -key Windows -lhost jp1-halaop -d S:¥jp1
   ```

   論理ホスト名は，-lhost オプションで指定します。ここでは，論理ホスト名をjp1-halaop としています。DNS 運用をしている場合は，ドメイン名を省略した論理ホスト名を指定してください。

   共有ディスクのフォルダ名は，-d オプションの環境フォルダ名に指定します。例えば-d S:¥jp1 と指定するとS:¥jp1¥jp1pc が作成されて，論理ホスト環境のファイルが作成されます。

2. jpcconf ha list コマンドを実行して，論理ホストの設定を確認する。

   次のようにコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf ha list -key all
   ```

   作成した論理ホスト環境が正しいことを確認してください。

(c) 接続先 PFM - Manager の設定 実行系

jpcconf mgrhost define コマンドを実行して，PFM - Agent for Platform を管理する PFM - Manager を設定します。

手順を次に示します

1. jpcconf mgrhost define コマンドを実行して，接続先 PFM - Manager を設定する。

   次のようにコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf mgrhost define -host jp1-hal -lhost jp1-halaop
   ```

   接続先 PFM - Manager のホスト名は，-host オプションで指定します。接続先 PFM - Manager が論理ホストで運用されている場合は，-host オプションに接続先 PFM - Manager の論理ホスト名を指定します。ここでは，PFM - Manager の論理ホスト名をjp1-hal としています。

   PFM - Agent for Platform の論理ホスト名は，-lhost オプションで指定します。ここでは，PFM - Agent for Platform の論理ホスト名をjp1-halaop としています。

ここでは，対話形式の実行例を示していますが，jpcconf mgrhost define コマンドは非対話形式でも実行できます。jpcconf mgrhost define コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

(d) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ 実行系

オプション

PFM - Agent for Platform のほかに，同じ論理ホストにセットアップする PFM - Manager や PFM - Agent がある場合は，この段階でセットアップしてください。

セットアップ手順については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」，または各 PFM - Agent マニュアルの，クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(e) ネットワークの設定 実行系 オプション

ファイアウォールがあるネットワーク環境で Performance Management のシリーズプログラムを運用する場合は，ネットワークの設定が必要です。

ネットワーク環境の設定として，次の 2 つの項目があります。必要に応じて設定を変更してください。

- IP アドレスを設定する

  複数の LAN に接続されたネットワークで Performance Management を使用するときに設定します。使用する IP アドレスを指定したい場合には，`jpchosts` ファイルの内容を直接編集します。

  このとき，編集した`jpchosts` ファイルは，実行系ノードから待機系ノードにコピーしてください。

  IP アドレスの設定方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の Windows 用のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- ポート番号を設定する

  ファイアウォールを経由し，Performance Management のシリーズプログラム間の通信をする場合には，`jpcconf port define` コマンドを使用してポート番号を設定します。

  ポート番号の設定方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Windows 用のインストールとセットアップについて説明している章，およびクラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(f) ログのファイルサイズ変更 実行系 オプション

Performance Management の稼働状況を，Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。共通メッセージログは，デフォルトで 8,192 キロバイトのファイルが 2 個使用されます。このファイルサイズを変更したい場合にだけ，必要な設定です。

詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Windows 用のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(g) パフォーマンスデータの格納先の変更 実行系 オプション

PFM - Agent で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先，バックアップ先，エクスポート先，またはインポート先のフォルダを変更したい場合にだけ必要な設定です。設定方法については，「4. Windows 版のインストールとセットアップ」を参照してください。

(h)　動作ログ出力の設定 実行系 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは，システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については，「付録Ⅰ　動作ログの出力」を参照してください。

(i)　論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

PFM - Agent for Platform の論理ホスト環境が作成できたら，環境定義をファイルにエクスポートします。エクスポートでは，その論理ホストにセットアップされている Performance Management シリーズプログラムの定義情報を一括してファイル出力します。同じ論理ホストにほかの Performance Management シリーズプログラムをセットアップする場合は，セットアップが一とおり済んだあとにエクスポートしてください。

論理ホスト環境定義をエクスポートする手順を次に示します。

1. jpcconf ha export コマンドを実行して，論理ホスト環境定義をエクスポートする。

   これまでの手順で作成した論理ホスト環境の定義情報を，エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

   例えば，lhostexp.txt ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合，次のようにコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf ha export -f lhostexp.txt
   ```

   ここでは，対話形式の実行例を示していますが，jpcconf ha export コマンドは非対話形式でも実行できます。jpcconf ha export コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

(j)　論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系 待機系

「(i)　論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートした論理ホスト環境定義ファイルを，実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(k)　共有ディスクのオフライン 実行系 オプション

クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャーの操作などで，共有ディスクをオフラインにして，作業を終了します。なお，その共有ディスクを続けて使用する場合は，オフラインにする必要はありません。

(3)　待機系の論理ホスト環境のセットアップ 待機系

待機系ノードで，PFM - Agent for Platform の論理ホスト環境をセットアップします。

(a)　論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを，待機系ノードにインポートします。

実行系ノードで作成した論理ホストの Performance Management のシリーズプログラムを，待機系ノードで実行するための設定には，jpcconf ha import コマンドを使用します。1 つの論理ホストに複数の Performance Management のシリーズプログラムがセットアップされている場合は，一括してインポートされます。

なお，このコマンドを実行するときには，共有ディスクをオンラインにしておく必要はありません。

論理ホスト環境定義ファイルをインポートする手順を次に示します。

1. **jpcconf ha import コマンドを実行して，論理ホスト環境定義をインポートする。**

   次のようにコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf ha import -f lhostexp.txt
   ```

   ここでは，対話形式の実行例を示していますが，jpcconf ha import コマンドは非対話形式でも実行できます。jpcconf ha import コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

   コマンドを実行すると，待機系ノードの環境を，エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって，論理ホストの PFM - Agent for Platform を起動するための設定が実施されます。

   また，セットアップ時にjpcconf port define コマンド固定のポート番号を設定している場合も，同様に設定されます。

2. **jpcconf ha list コマンドを実行して，論理ホストの設定を確認する。**

   次のようにコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf ha list -key all
   ```

   実行系ノードでjpcconf ha list コマンドを実行したときと同じ内容が表示されることを確認してください。

(4) クラスタソフトへの PFM - Agent の登録 実行系 待機系

Performance Management シリーズプログラムを論理ホスト環境で運用する場合は，クラスタソフトに登録して，クラスタソフトからの制御で Performance Management シリーズプログラムを起動したり停止したりするように環境設定します。

ここでは，PFM - Agent for Platform をクラスタソフトに登録するときに設定する内容を説明します。

PFM - Agent for Platform の場合，次の表のサービスをクラスタに登録します。

表 5-3 クラスタソフトに登録する PFM - Agent for Platform のサービス

項番	名前	サービス名	依存関係
1	PFM - Agent Store for Windows [論理ホスト名]	JP1PCAGT_TS [論理ホスト名]	IP アドレスリソース 物理ディスクリソース

項番	名前	サービス名	依存関係
2	PFM - Agent for Windows [**論理ホスト名**]	JP1PCAGT_TA [**論理ホスト名**]	項番 1 のクラスタリソース
3	PFM - Action Handler [**論理ホスト名**]	JP1PCMGR_PH [**論理ホスト名**]	IP アドレスリソース 物理ディスクリソース

論理ホスト名が「jp1-halaop」の場合，サービスの名前は「PFM - Agent for Platform [jp1-halaop]」，サービス名は「JP1PCAGT_TS [jp1-halaop]」になります。

WSFC の場合は，これらのサービスを WSFC のリソースとして登録します。各リソースは次のように設定します。

- ［リソースの種類］は「汎用サービス」として登録する
- ［依存関係］を「表 5-3　クラスタソフトに登録する PFM - Agent for Platform のサービス」のとおりに設定する
- ［スタートアップ パラメータ］および［レジストリのレプリケーション］は設定しない
- プロパティの［ポリシー］タブは，Performance Management のプログラムの障害時にフェールオーバーするかどうか運用方法に合わせて設定する

  例えば，PFM - Agent for Platform の障害時に，フェールオーバーするように設定する場合は，次のようにします。

  - ［リソースが失敗状態になった場合は，現在のノードで再起動を試みる］をチェックする。
  - ［再起動に失敗した場合は，このサービスまたはアプリケーションのすべてのリソースをフェールオーバーする］※をチェックする。
  - ［指定期間内での再起動の試行回数］を，3 回を目安に設定する。

注※

Windows Server 2012 以降の場合は，［再起動に失敗した場合は，この役割のすべてのリソースをすべてフェールオーバーする］になります。

注意

クラスタに登録するサービスは，クラスタで起動や停止を制御します。このため，OS 起動時に自動起動しないように［スタートアップの種類］が［手動］になっていることを確認してください。なお，jpcconf ha setup コマンドでセットアップした直後のサービスは［手動］に設定されています。

PFM - Manager の論理ホストと同居する場合の依存関係の設定については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のクラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(5)　クラスタソフトからの起動・停止の確認 実行系 待機系

クラスタソフトからの操作で，Performance Management のプログラムの起動および停止を各ノードで実行し，正常に動作することを確認してください。

(6) クラスタシステムでの環境設定 実行系 待機系

Performance Management のプログラムのセットアップ終了後，PFM - Web Console から，運用に合わせて監視対象の稼働状況についてのレポートを表示できるようにしたり，監視対象で問題が発生したときにユーザーに通知できるようにしたりするために，Performance Management のプログラムの環境を設定します。

Performance Management のプログラムの環境設定方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のクラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

物理環境で運用していた環境を論理環境に移行する場合は，物理環境，論理環境のそれぞれで，収集する必要のないレコードを収集しないように設定を変更してください。

5.4　クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ

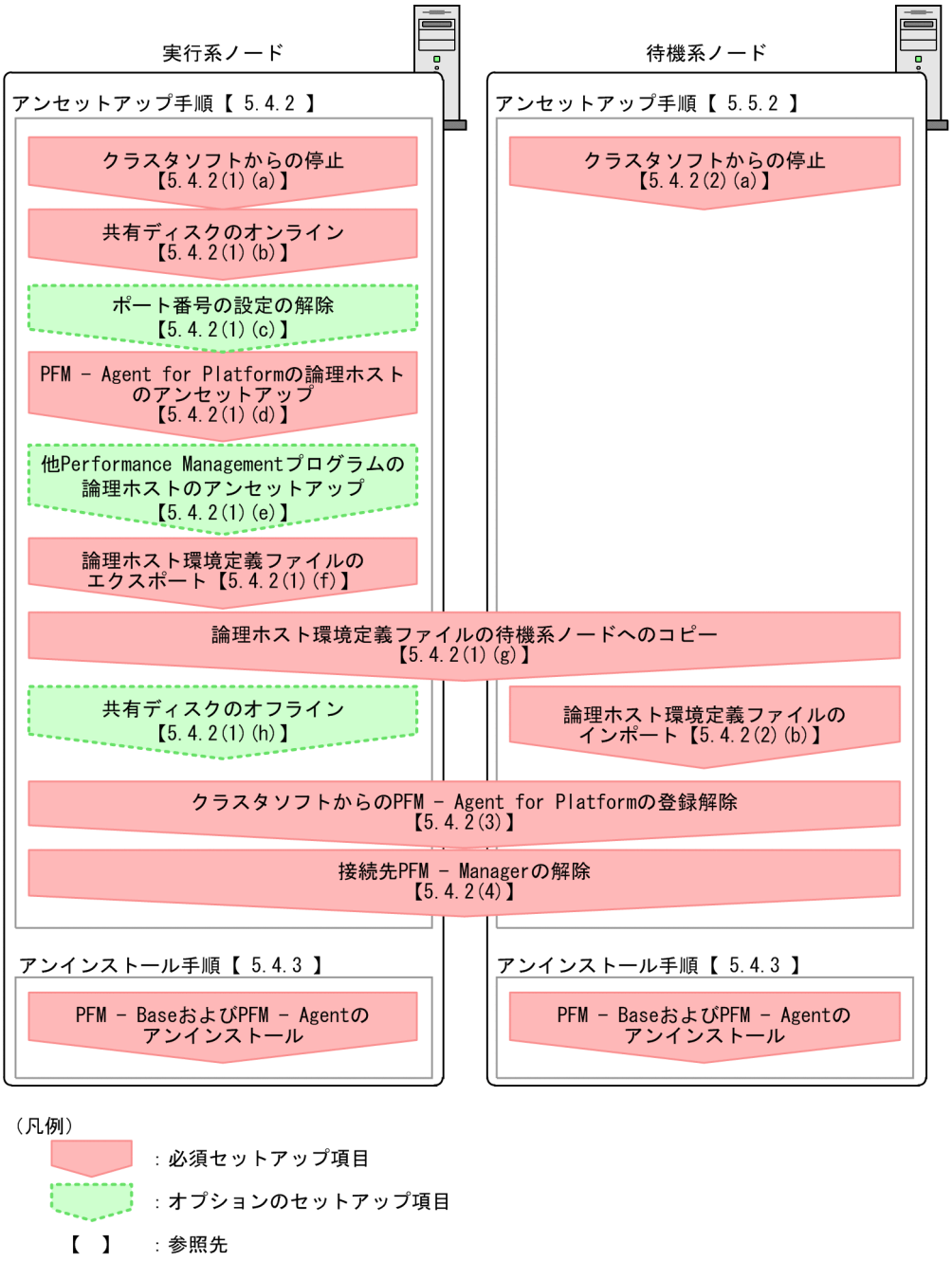
ここでは，クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for Platform を，アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

なお，PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

5.4.1　クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ

クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for Platform のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。

図 5-4　クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform のアンストールおよびアンセットアップの流れ



5.4.2　クラスタシステムでのアンセットアップ手順

論理ホスト環境をアンセットアップします。アンセットアップ手順には，実行系ノードの手順と，待機系ノードの手順があります。実行系ノード，待機系ノードの順にアンセットアップしてください。

なお，ここでの 実行系 は実行系ノードで実施する項目を，待機系 は待機系ノードで実施する項目を示します。また，〈オプション〉は次に示すセットアップ項目を示します。

- 使用する環境によって必要となるセットアップ項目
- デフォルトの設定を変更したい場合のセットアップ項目

PFM - Agent for Platform のアンセットアップ手順について説明します。

(1) 実行系ノードの論理ホスト環境をアンセットアップする

(a) クラスタソフトからの停止 実行系

クラスタソフトからの操作で，実行系ノードで起動している Performance Management のプログラムおよびサービスを停止してください。停止する方法については，クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(b) 共有ディスクのオンライン 実行系

共有ディスクがオンラインになっていることを確認します。共有ディスクがオンラインになっていない場合は，クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャーの操作などで，共有ディスクをオンラインにしてください。

(c) ポート番号の設定の解除 実行系 オプション

この手順は，ファイアウォールを使用する環境で，セットアップ時に`jpcconf port define`コマンドでポート番号を設定した場合だけに必要な手順です。

ポート番号の解除方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Windows 用のインストールとセットアップについて説明している章，およびクラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(d) PFM - Agent for Platform の論理ホストのアンセットアップ 実行系

手順を次に示します。

注意

共有ディスクがオフラインの状態で論理ホスト環境を削除した場合は，物理ホスト上に存在する論理ホストの設定が削除され，共有ディスク上のフォルダやファイルは削除されません。この場合，共有ディスクをオンラインにして，環境フォルダ以下の`jp1pc`フォルダを手動で削除する必要があります。

1. **`jpcconf ha list`コマンドを実行して，論理ホスト設定を確認する。**

   次のようにコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf ha list -key all -lhost jp1-halaop
   ```

   論理ホスト環境をアンセットアップする前に，現在の設定を確認します。論理ホスト名や共有ディスクのパスなどを確認してください。

2. **`jpcconf ha unsetup`コマンドを実行して，PFM - Agent for Platform の論理ホストの情報を削除する。**

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha unsetup -key Windows -lhost jp1-halaop
```

jpcconf ha unsetup コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

jpcconf ha unsetup コマンドを実行すると，論理ホストの PFM - Agent for Platform を起動するための設定が削除されます。また，共有ディスク上の論理ホスト用のファイルが削除されます。

3. jpcconf ha list コマンドを実行して，論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

論理ホスト環境から PFM - Agent for Platform が削除されていることを確認してください。

(e) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ 実行系

オプション

PFM - Agent for Platform のほかに，同じ論理ホストからアンセットアップする PFM - Agent がある場合は，この段階でアンセットアップしてください。

アンセットアップ手順については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，クラスタシステムでの運用について説明している章，または各 PFM - Agent マニュアルの，クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(f) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

論理ホストの PFM - Agent for Platform を削除したら，環境定義をファイルにエクスポートします。

Performance Management では，環境定義のエクスポートおよびインポートによって実行系と待機系の環境を合わせる方式を採っています。

待機系ノードには Performance Management の定義が削除前の状態で残っています。実行系ノードでエクスポートした環境定義を待機系ノードにインポートすると，待機系ノードで環境定義を削除しなくても，Performance Management が定義を比較して，差分を自動で削除します。

手順を次に示します。

1. jpcconf ha export コマンドを実行して，論理ホスト環境定義をエクスポートする。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha export -f lhostexp.txt
```

ここでは，対話形式の実行例を示していますが，jpcconf ha export コマンドは非対話形式でも実行できます。jpcconf ha export コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

(g)　論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系　待機系

「(f)　論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートしたファイルを，実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(h)　共有ディスクのオフライン 実行系　オプション

クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャーの操作などで，共有ディスクをオフラインにして，作業を終了します。なお，その共有ディスクを続けて使用する場合は，オフラインにする必要はありません。

(2)　待機系ノードの論理ホスト環境のアンセットアップ 待機系

実行系ノードでエクスポートしたファイルを待機系ノードにコピーし，待機系ノードで，論理ホスト環境をアンセットアップします。なお，待機系ノードでは，アンセットアップのときに共有ディスクをオンラインにする必要はありません。

手順を次に示します。

(a)　クラスタソフトからの停止 待機系

クラスタソフトからの操作で，待機系ノードで起動している Performance Management のプログラムおよびサービスを停止してください。停止する方法については，クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(b)　論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを，待機系ノードに反映させるためにインポートします。なお，待機系ノードでは，インポート時に共有ディスクをオンラインにする必要はありません。

論理ホスト環境定義ファイルをインポートする手順を次に示します。

1. jpcconf ha import コマンドを実行して，論理ホスト環境定義をインポートする。

   次のようにコマンドを実行します。

   ```
   jpcconf ha import -f lhostexp.txt
   ```

   ここでは，対話形式の実行例を示していますが，jpcconf ha import コマンドは非対話形式でも実行できます。jpcconf ha import コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

   コマンドを実行すると，待機系ノードの環境が，エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように変更されます。これによって，論理ホストの PFM - Agent for Platform を起動するための設定が削除されます。ほかの論理ホストの Performance Management のプログラムをアンセットアップしている場合は，それらの設定も削除されます。また，セットアップ時にjpcconf port define コマンドで固定のポート番号を設定している場合も，同様に解除されます。

2. jpcconf ha list コマンドを実行して，論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

実行系ノードで`jpcconf ha list`コマンドを実行したときと同じ内容が表示されることを確認してください。

(3) クラスタソフトからの PFM - Agent for Platform の登録解除 実行系 待機系

クラスタソフトから，論理ホストの PFM - Agent for Platform に関する設定を削除してください。

設定を削除する方法は，クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(4) 接続先 PFM - Manager の解除 実行系 待機系

接続先 PFM - Manager を解除する場合は，対象の PFM - Manager に接続している PFM - Agent for Platform のサービス情報を削除する必要があります。

サービス情報の削除方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップ（Windows の場合）の章の，サービス情報の削除手順について説明している個所を参照してください。

なお，接続先を別の PFM - Manager に変更する場合は，「5.3.4(2)(c) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

5.4.3 クラスタシステムでのアンインストール手順

PFM - Base および PFM - Agent for Platform をアンインストールしてください。

アンインストール手順は，非クラスタシステムの場合と同じです。詳細は，「4. Windows 版のインストールとセットアップ」を参照してください。

注意

- PFM - Agent for Platform をアンインストールする場合は，PFM - Agent for Platform をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。
- 論理ホスト環境を削除しないで PFM - Agent for Platform をアンインストールすると，環境フォルダが残ることがあります。その場合は，環境フォルダを手動で削除してください。

5.5　クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform の運用方式の変更

ここでは，クラスタシステムで PFM - Agent for Platform の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

5.5.1　クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート

論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートは，次の操作を実行した場合だけ実施します。

- 論理ホストのセットアップ時に，論理ホスト上のノード構成を変更した。
  PFM - Agent の論理ホストのセットアップ方法については，「5.3.4(2) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ」を参照してください。
- 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ時に，論理ホスト環境定義ファイルのエクスポートが必要な操作を実行した。
  他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ方法については，「5.3.4(2)(d) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ」を参照してください。
- ネットワークの設定時に，ポート番号を設定した。
  ネットワークの設定方法については，「5.3.4(2)(e)　ネットワークの設定」を参照してください。

論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートの手順については，「5.3.4(2)(i)　論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」～「5.3.4(3)　待機系の論理ホスト環境のセットアップ」を参照してください。

5.6　クラスタシステムで運用する場合の注意事項

ここでは，PFM - Agent for Platform をクラスタシステムで運用する場合の注意事項について説明します。

論理ホスト環境では，次の機能に対応していません。

- パフォーマンスコンソールカウンター情報の収集
- 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報の収集
- イベントログ情報の収集
- ワークグループ情報の収集
- 論理ホストのサービスに対する収集データ追加ユーティリティでの設定

5.6.1　アプリケーションおよびプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定をする場合の注意事項

アプリケーションの稼働・非稼働情報の収集に関する設定，およびプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定は，物理ホスト環境から論理ホスト環境へは引き継がれません。論理ホスト環境でアプリケーションの稼働・非稼働情報およびプロセスの稼働・非稼働情報を収集する場合は，論理ホスト環境をセットアップしたあとに設定してください。また，論理ホスト環境では，jpcappcvt コマンドに対応していません。

5.6.2　ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する場合の注意事項

論理ホスト環境でユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する場合の注意事項について説明します。

- ユーザー作成データおよびユーザーコマンドの配置

  フェールオーバー発生後にも収集を継続するために，ユーザー作成データおよびユーザーコマンドは共有ディスク上に配置してください。ユーザーコマンド定期実行機能を使用する場合は，実行系ノードおよび待機系ノードから，同じパスでアクセスできる必要があります。
- カレントフォルダ

  ユーザーコマンド定期実行機能で定期実行するときのカレントフォルダは，論理ホスト環境での PFM - Agent for Platform のフォルダ（**環境フォルダ¥jp1pc¥agtt¥agent**）です。
- jpcuser コマンド

  論理ホスト環境でjpcuser コマンドを実行するときは，-lhost オプションで論理ホスト名を指定する必要があります。
- 収集する情報

  収集する情報にユーザーコマンドを実行しているホスト名の情報を含めると，どのノードで実行しているかがわかりやすくなります。

収集する情報にユーザーコマンドを実行しているホスト名の情報を含める方法については，「6.8.2 ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集するための設定」を参照してください。

5.6.3 フェールオーバー前後のパフォーマンスデータの連続性についての注意事項

フェールオーバー前とフェールオーバー後では，パフォーマンスデータの取得対象となる物理ホストが異なるため，フェールオーバー前後のパフォーマンスデータに連続性はありません。

6 ユーザーレコードの収集

この章では，PFM - Agent for Platform でユーザーレコードを収集するための設定について説明します。

6.1　ユーザーレコードの収集時に起動する画面について

パフォーマンスコンソールカウンター情報，イベントログ情報，ワークグループ情報，および 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報の収集には，収集データ追加ユーティリティを使用します。ここでは，収集データ追加ユーティリティについて説明します。

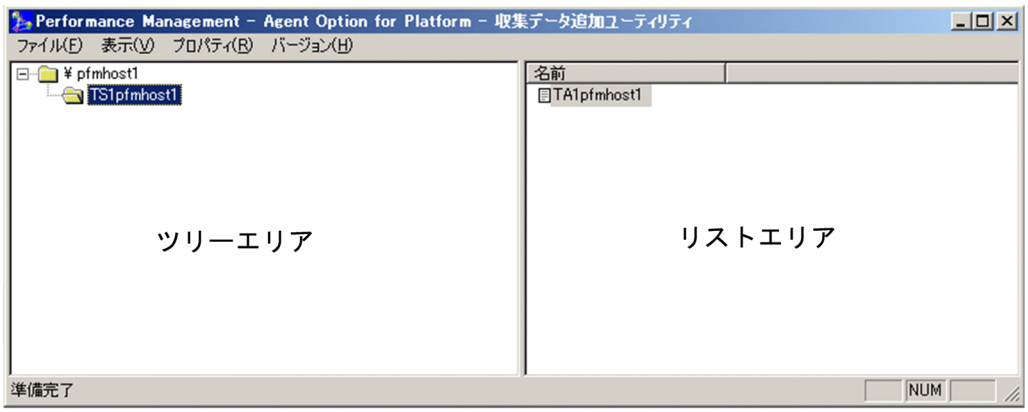
上記以外の情報の収集で使用する画面などについては，この章の各情報の収集に関する設定の説明を参照してください。

6.1.1　収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）の起動

収集データ追加ユーティリティを起動する方法を示します。

1. PFM - Agent for Platform がインストールされている Windows ホストにログオンする。
   Administrators 権限でログオンする必要があります。
2. Windows の［スタート］メニューから［プログラム］－［Performance Management］－［Agent Option for Platform］－［Collection Data Addition Utility］を選択する。

図 6-1　収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）



ツリーエリア：ローカルホストのAgent Storeを表示します。

リストエリア：選択されているAgent StoreのAgent Collector名を表示します。
サービスの状態がアイコンで表示されます。

：サービス起動中
：サービス停止中

重要

- 収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）を複数起動できません。

- 最新の Agent の状態を表示したい場合は［表示］－［最新の情報に更新］を選択してください。
- 複数のレコードの設定画面（例えば PD_ELOG 設定画面と PI_WGRP 設定画面）を同時に起動することはできません。

  OS のユーザーアカウント制御機能（UAC）を有効にしている場合は，Collection Data Addition Utility の起動時にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は，［承認］ボタンをクリックして，Collection Data Addition Utility を続行してください。［キャンセル］ボタンをクリックした場合は，Collection Data Addition Utility が中止されます。ダイアログが表示された場合は，［承認］ボタンをクリックして Collection Data Addition Utility を続行してください。［キャンセル］ボタンをクリックした場合は，Collection Data Addition Utility が中止されます。
- 収集するパフォーマンスデータとして追加できるオブジェクト数，カウンター数，インスタンス数に制限はありませんが，大量に設定すると PFM - Agent for Platform のデータ収集時にシステム負荷やディスク使用量が大きくなることがあります。そのため，通常は合計 100 個を上限としてください。
- パフォーマンスコンソールカウンター情報およびユーザーレコードは，WOW64 で動作します。サポートしていないオブジェクトは，収集データ追加ユーティリティの［レコードの追加］画面に表示されません。64 ビットパフォーマンスコンソールカウンターを取得する場合は，PI_GI64 レコード，PD_GD64 レコードを使用してください。
  PI_GI64 レコード，PD_GD64 レコードについては，「8. レコード」を参照してください。

ここで設定したユーザーレコードをデータベースに格納するかどうかを設定する方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

6.1.2 収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）の終了

収集データ追加ユーティリティを終了する方法を示します。

1. 収集データ追加ユーティリティの［ファイル］－［終了］を選択する。

6.1.3 ユーザーレコード設定時の注意事項

- 収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）の起動は，Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

- 収集データ追加ユーティリティで設定できるユーザーレコードは，そのローカルホストで収集するユーザーレコードだけです。PFM - Agent for Platform がインストールされているホストがシステム内に複数ある場合は，ホストごとに Collection Data Addition Utility を起動してユーザーレコードを設定します。
- 画面操作時に，ファイル名・ディレクトリ名が示されたエラーメッセージが表示された場合，ファイルが存在するか，アクセス権があるかを確認してください。
- 画面操作時にエラーメッセージが表示された場合，要因が判明しないときは，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

  保守資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。
- 履歴データを収集する場合は，PFM - Web Console で各レコードのプロパティに「Log=Yes」を設定してください。
- PFM - Web Console から Collection Data Addition Utility を起動することはできません。
- Collection Data Addition Utility をクライアントマシンで起動する場合，OS 既存機能「リモートデスクトップ接続」を使用してください。
- Windows のタスクマネージャーから収集データ追加ユーティリティ（jpcconfig）を強制終了しないでください。設定内容が不正になるおそれがあります。
- PFM - Agent for Platform 08-00 以降がインストールされているホストに PFM - View 07-00 もインストールされている場合，Windows の［スタート］メニューからも，PFM - View 07-00 からも収集データ追加ユーティリティを起動できますが，両方の収集データ追加ユーティリティを，同時に実行しないでください。
- PFM - Agent for Platform をアンインストールする場合は，収集データ追加ユーティリティを閉じてからアンインストールを実施してください。

6.2 パフォーマンスコンソールカウンター情報収集に関する設定

パフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定，確認，および削除方法を説明します。

6.2.1 パフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定

パフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。

参考　プロダクト名表示

収集データ追加ユーティリティの［表示］メニューで［プロダクト名表示］を選択すると，メイン画面に表示されるサービス名をプロダクト名に切り替えることができます。

・通常の表示

Agent Store：TS1 **ホスト名**

Agent Collector：TA1 **ホスト名**

・プロダクト名表示

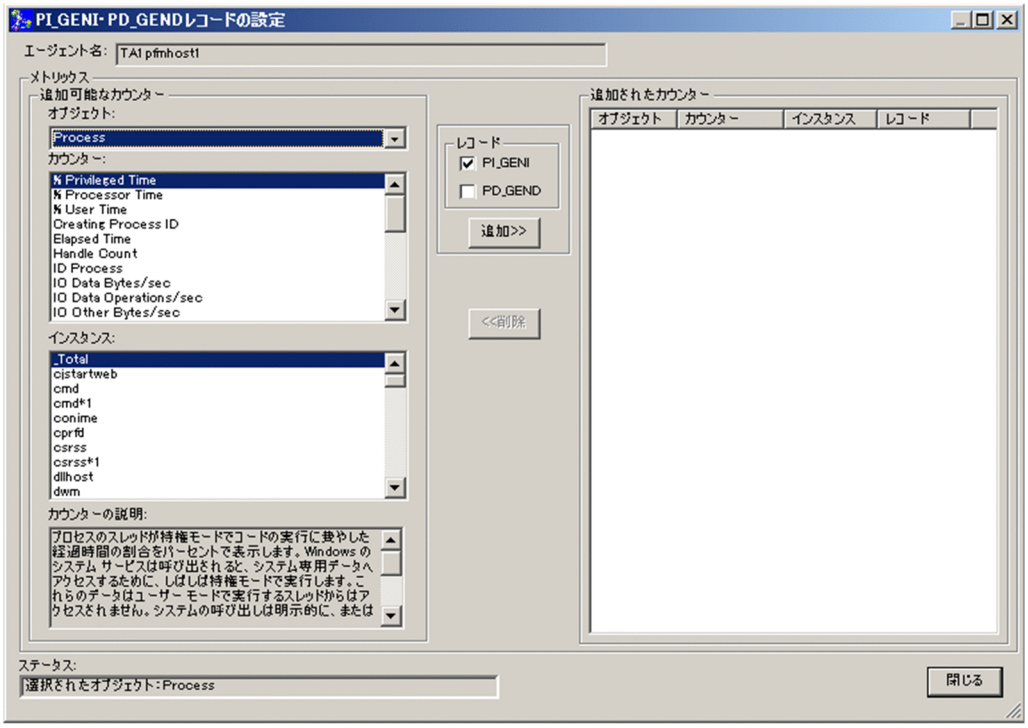
Agent Store：**ホスト名**<Windows>(Store)

Agent Collector：**ホスト名**<Windows>

プロダクト名表示機能の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，機能について説明している章を参照してください。

2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PI_GENI・PD_GEND レコードの追加・確認・削除］を選択する。

［PI_GENI・PD_GEND レコードの設定］ダイアログボックスが表示されます。



3. [オブジェクト] から，収集するデータオブジェクトを選択する。

データオブジェクトを選択すると，選択したデータオブジェクトに対して設定できるデータカウンターが，[カウンター] に表示されます。また，設定できるデータインスタンス（マルチインスタンスオブジェクト）が，[インスタンス] に表示されます。

なお，選択したオブジェクトがシングルインスタンスオブジェクトの場合，設定できるデータインスタンスがないので，[インスタンス] には何も表示されません。

ここで選択したデータオブジェクトは，ユーザーレコードの Object Name（OBJECT_NAME）フィールドに格納されます。

4. [カウンター] から，収集するデータカウンターを選択する。

データカウンターは，[Ctrl] キーを押しながら左クリックすることで，複数選択および選択の解除ができます。データカウンターを選択すると，[カウンターの説明] に，選択したデータカウンターの説明が表示されます。

ここで選択したデータカウンターは，ユーザーレコードの Counter Name（COUNTER_NAME）フィールドに格納されます。

なお，[カウンター] には収集データ追加ユーティリティで収集できるデータカウンターだけが表示されます。収集データ追加ユーティリティで収集できるデータカウンターは，次に示すパフォーマンスカウンターに対応しています。データカウンターとパフォーマンスカウンターとの関連については，Microsoft 社にお問い合わせください。

- 100nSec Multi Timer
- 100nSec Multi Timer Inv
- 100nSec Timer
- 100nSec Timer Inv

- Average Bulk
- Average Timer
- Counter 100nSec Queuelen
- Counter Bulk Count
- Counter Counter
- Counter Delta
- Counter Large Delta
- Counter Large Queuelen
- Counter Large Rawcount
- Counter Large Rawcount Hex
- Counter Multi Timer
- Counter Multi Timer Inv
- Counter Object Time Queuelen
- Counter Queuelen
- Counter Rawcount
- Counter Rawcount Hex
- Counter Text
- Counter Timer
- Counter Timer Inv
- Elapsed Time
- Large Raw Fraction
- Object Time Timer
- Precision 100nSec Timer
- Precision Object Timer
- Precision System Timer
- Raw Fraction
- Sample Counter
- Sample Fraction

5. [インスタンス] から，収集するデータインスタンスを選択する。

「インスタンス」に表示されている項目は，[Ctrl] キーを押しながら左クリックすることで，複数選択および選択の解除ができます。ここで選択したデータインスタンスは，ユーザーレコードの Instance（INSTANCE）フィールドに格納されます。

データインスタンスに何も表示されていなければ，設定できるデータインスタンスはありません。手順 6 に進んでください。

6. ［レコード］で［PD_GEND］または［PI_GENI］をチェックする。

   PD_GEND レコードで性能値を収集したい場合は，［PD_GEND］をチェックします。

   PI_GENI レコードで性能値を収集したい場合は，［PI_GENI］をチェックします。

7. ［追加］ボタンをクリックする。

   ［追加可能なカウンター］に表示されているオブジェクト，カウンター，およびインスタンスの情報が［追加されたカウンター］に反映されます。［追加されたカウンター］に反映されたパフォーマンスデータは，収集対象としてユーザーレコードに設定されます。

8. 収集するパフォーマンスデータを，さらにユーザーレコードに追加する場合は，手順 3 から手順 7 を繰り返す。

9. 設定が終わったら，［閉じる］ボタンをクリックする。

   ［PI_GENI・PD_GEND レコードの設定］ダイアログボックスが閉じます。

重要

- 収集するパフォーマンスデータとして追加できるオブジェクト数，カウンター数，インスタンス数に制限はありませんが，大量に設定すると PFM - Agent for Platform のデータ収集時にシステム負荷やディスク使用量が大きくなることがあります。そのため，通常は合計 100 個を上限としてください。
- パフォーマンスコンソールカウンター情報は，WOW64 で動作します。サポートしていないオブジェクトは，収集データ追加ユーティリティの［レコードの追加］画面に表示されません。64 ビットパフォーマンスコンソールカウンターを取得する場合は，PI_GI64 レコード，PD_GD64 レコードを使用してください。PI_GI64 レコード，PD_GD64 レコードについては，「8.　レコード」を参照してください。

ここで設定したユーザーレコードをデータベースに格納するかどうかを設定する方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

6.2.2　パフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの内容確認

パフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定内容を確認する方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。

2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PI_GENI・PD_GEND レコードの追加・確認・削除］を選択する。

［PI_GENI・PD_GEND レコードの設定］ダイアログボックスが表示されます。

3. 収集対象に設定したパフォーマンスコンソールカウンター情報を確認する。

［追加可能なカウンター］に表示されているパフォーマンスコンソールカウンター情報を確認してください。

4. 確認が終わったら，［閉じる］ボタンをクリックする。

［PI_GENI・PD_GEND レコードの設定］ダイアログボックスが閉じます。

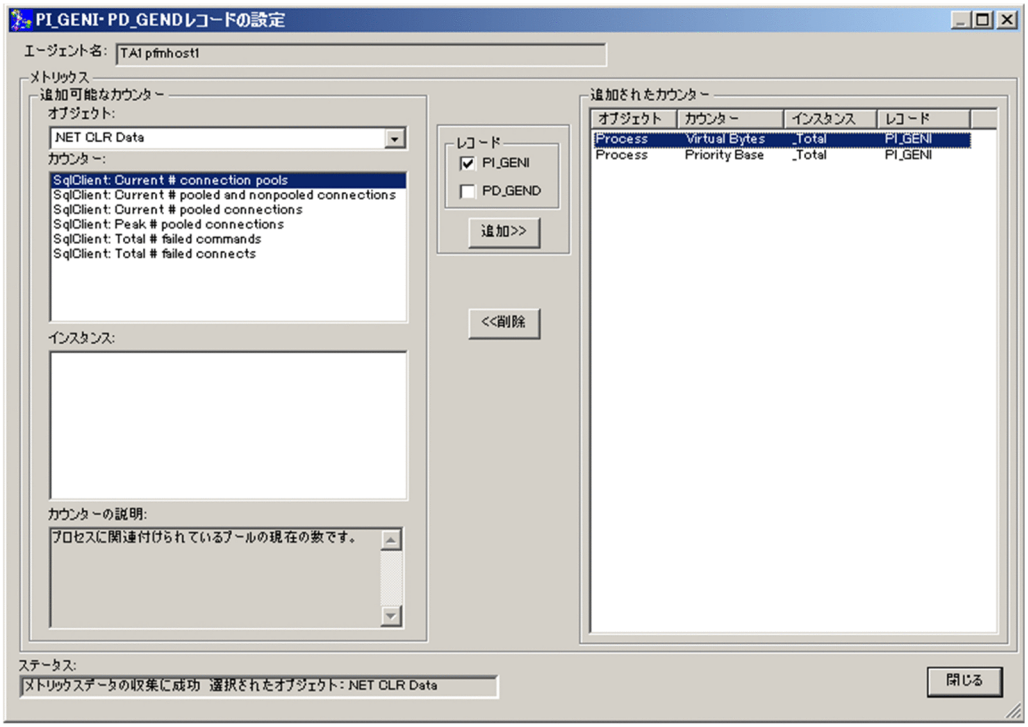
6.2.3 パフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの削除

パフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定を削除する方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。

2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PI_GENI・PD_GEND レコードの追加・確認・削除］を選択する。

［PI_GENI・PD_GEND レコードの設定］ダイアログボックスが表示されます。



3. ［追加されたカウンター］から収集設定を解除したいパフォーマンスデータを選択し，［削除］ボタンをクリックする。

［追加されたカウンター］から設定が削除され，収集対象から外れます。

なお，「追加されたカウンター」に表示されている項目は，［Ctrl］キーを押しながら左クリックすることで，複数選択および選択の解除ができます。

4. 操作が終了したら，［閉じる］ボタンをクリックする。

［PI_GENI・PD_GEND レコードの設定］ダイアログボックスが閉じます。

6.3　イベントログ情報の収集に関する設定

イベントログ情報を収集するためのユーザーレコードの設定，確認，および削除方法を説明します。

6.3.1　イベントログ情報を収集するためのユーザーレコードの設定

イベントログ情報を収集対象にする方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。
2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PD_ELOG レコードの追加・確認・削除］を選択する。
   ［PD_ELOG レコード設定］ダイアログボックスが表示されます。

   デフォルト（ユーザーが一度も設定していない）状態では，［収集対象のイベントログ］リストに標準イベントログが表示されています。
   また，収集できるイベントログのリストが［収集対象外のイベントログ］に表示されています。収集できるイベントログが追加または削除されていた場合，確認用のメッセージボックスが表示されます。
3. ［収集対象外のイベントログ］から収集したいイベントログを選択し，［=>］ボタンをクリックする。
   収集対象設定を確認するメッセージが表示されます。
4. ［OK］ボタンをクリックする。
   選択したイベントログが収集対象として登録され，［収集対象のイベントログ］に表示されます。
5. 設定が終わったら［終了］ボタンをクリックする。
   ［PD_ELOG レコード設定］ダイアログボックスが閉じます。

重要

PD_ELOG レコードについては，「8. レコード」を参照してください。

6.3.2 イベントログ情報として設定されているユーザーレコードの内容確認

イベントログ情報を確認する方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。
2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PD_ELOG レコードの追加・確認・削除］を選択する。
   ［PD_ELOG レコード設定］ダイアログボックスが表示されます。
3. 収集対象に設定したイベントログを確認する。
   ［収集対象のイベントログ］に表示されているイベントログ情報を確認してください。
4. 確認が終わったら［終了］ボタンをクリックする。
   ［PD_ELOG レコード設定］ダイアログボックスが閉じます。

6.3.3 イベントログ情報として設定されているユーザーレコードの削除

イベントログ情報を収集対象から外す方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。
2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PD_ELOG レコードの追加・確認・削除］を選択する。
   ［PD_ELOG レコード設定］ダイアログボックスが表示されます。
3. ［収集対象のイベントログ］から収集設定を解除したいイベントログを選択し，［<=］ボタンをクリックする。
   収集対象外設定を確認するメッセージが表示されます。
4. ［OK］ボタンをクリックする。
   選択したイベントログが収集対象外に設定され，［収集対象外のイベントログ］に表示されます。
5. 設定が終わったら［終了］ボタンをクリックする。
   ［PD_ELOG レコード設定］ダイアログボックスが閉じます。

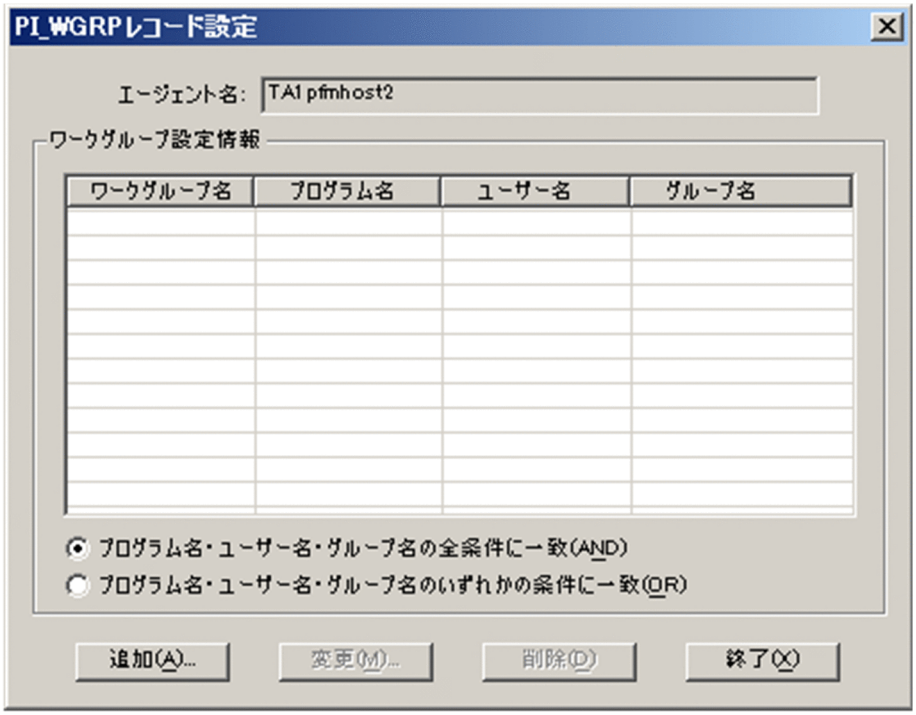
6.4　ワークグループ情報の収集に関する設定

ワークグループ情報を収集するためのユーザーレコードの設定，確認，および削除方法を説明します。

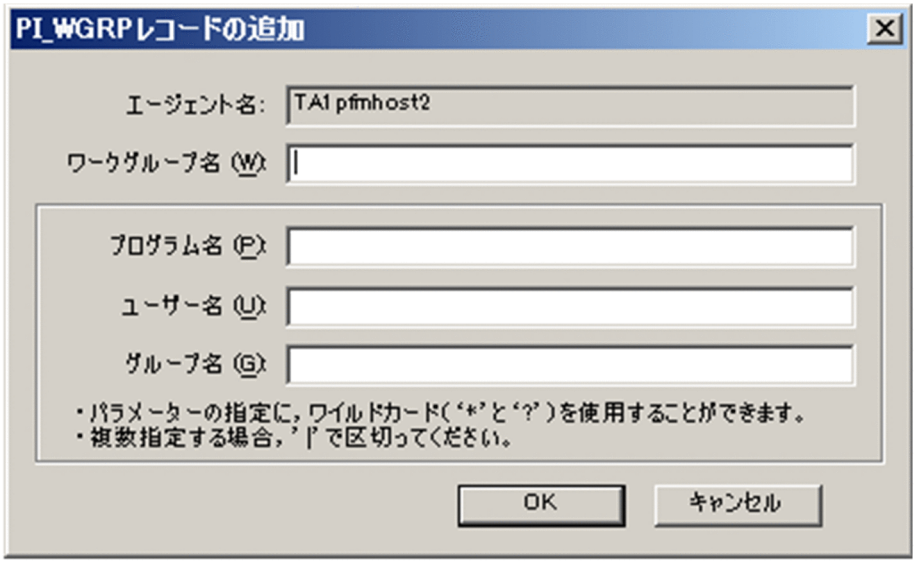
6.4.1　ワークグループ情報を収集するためのユーザーレコードの設定

ワークグループ情報を収集するためのユーザーレコードの設定方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。
2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PI_WGRP レコードの追加・確認・削除］を選択する。
   ［PI_WGRP レコード設定］ダイアログボックスが表示されます。



3. ［PI_WGRP レコード設定］ダイアログボックスの［追加］ボタンをクリックする。
   ［PI_WGRP レコードの追加］ダイアログボックスが表示されます。



4. パラメーターを入力する。

［ワークグループ名］［プログラム名］［ユーザー名］および［グループ名］を入力します。

各パラメーター共通の入力規則

- 大文字小文字は区別しません。空白は文字として扱います。
- すべてのパラメーターで次の文字を含む文字列を指定できません。

  ¥ / : * ? " < > |
- ［プログラム名］［ユーザー名］および［グループ名］の各パラメーターの指定には，ワイルドカード（「*」および「?」）を使用できます。
- ［プログラム名］［ユーザー名］および［グループ名］の各パラメーターで，1 つのパラメーターに複数の値を指定する場合は，それぞれの名前を「|」で区切ってください。

各パラメーター設定の詳細を次に示します。

表 6-1　各パラメーター設定の詳細

パラメーター	指定する情報	情報が保存されるフィールド	入力規則
ワークグループ名	情報を収集するワークグループ名を指定する。	Workgroup(WORKGROUP_NAME)	• 使用できる文字は，半角英数字，ハイフン（-），アンダーバー（_）だけ。 • 35 バイト以内。 • 既存のワークグループ名は指定できない。 • 「Other」は指定できない。
プログラム名	実行されるプログラム名を指定する。	Programs(PROGRAMS)※1	• 1,023 バイト以内。 • Process Detail(PD) レコードの Program(INSTANCE)フィールドに格納される値を指定する。※2 • 何も入力しない場合，この項目で検索はしない。

パラメーター	指定する情報	情報が保存されるフィールド	入力規則
ユーザー名	［プログラム名］で指定されたプログラムを実行するユーザーのユーザー名を指定する。	Users(USERS)※1	• 1,023 バイト以内。 • Process Detail(PD) レコードの User(USER_NAME)フィールドの値を指定する。※3 • 何も入力しない場合，この項目で検索はしない。
グループ名	［プログラム名］で指定されたプログラムを実行するユーザーの属するグループ名を指定する。	Groups(GROUPS)※1	• 1,023 バイト以内。 • Process Detail(PD) レコードの Group(GROUP_NAME)フィールドの値を指定する。※4

注※1

Process Detail(PD)レコードの各フィールドに保存される情報は，35 バイトまでです。35 バイトを超えた場合，保存される最後の文字は「>」となります。

注※2

Process Detail（PD）レコードの Program（INSTANCE）フィールドの値が「_Total」で，かつ PID（ID_PROCESS）フィールドの値が「0」のレコードは，全体の合計や平均を表すデータのため，収集されません。

注※3

プロセスのセキュリティ ID に対応するユーザー名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」が，プロセス ID から実行ユーザー名が取得できない場合は「Unknown」が格納されます。

注※4

グループ名は，ドメイン名またはローカルシステムによってあらかじめ定義された名前です。プロセスのセキュリティ ID に対応するグループ名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」が，プロセス ID から実行グループ名が取得できない場合は「Unknown」が格納されます。

5. ［OK］ボタンをクリックしてワークグループ情報を登録する。

パラメーターの入力に誤りがある場合は，エラーメッセージが表示されます。表示されるエラーの詳細を参考にして，入力をし直してください。

6. ワークグループ情報を，さらにユーザーレコードに追加する場合は，手順 3 から手順 5 を繰り返す。

7. 目的に応じて，［プログラム名・ユーザー名・グループ名の全条件に一致（AND)］，または［プログラム名・ユーザー名・グループ名のいずれかの条件に一致（OR)］を選択する。

注意

［プログラム名・ユーザー名・グループ名の全条件に一致（AND)］，または［プログラム名・ユーザー名・グループ名のいずれかの条件に一致（OR)］で設定した内容は，［ワークグループ情報］に表示されているすべてのワークグループに適用されます。各ワークグループに対して個々に設定することはできません。

8. [終了] ボタンをクリックする。

ユーザーレコードの設定が保存され，[PI_WGRP レコード設定] ダイアログボックスが閉じます。

重要

- Process Detail（PD）レコードおよび Workgroup Summary（PI_WGRP）レコードについては，「8. レコード」を参照してください。
- Windows のユーザー名，グループ名については，Windows のヘルプを参照してください。

6.4.2 ワークグループ情報として設定されているユーザーレコードの内容確認

ワークグループ情報を収集するためのユーザーレコードの設定内容を確認する方法を示します。

[PI_WGRP レコード設定] ダイアログボックスで，ユーザーレコードに格納されるパフォーマンスデータの設定を確認する方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。
2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，[PI_WGRP レコードの追加・確認・削除] を選択する。

   [PI_WGRP レコード設定] ダイアログボックスが表示されます。
3. 収集対象に設定したワークグループ情報を確認する。

   [ワークグループ設定情報] に表示されているワークグループ情報を確認してください。
4. 確認が終わったら，[終了] ボタンをクリックする。

   ユーザーレコードの設定が保存され，[PI_WGRP レコード設定] ダイアログボックスが閉じます。

6.4.3 ワークグループ情報として設定されているユーザーレコードの内容変更

ワークグループ情報を収集するためのユーザーレコードの設定内容を変更する方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。
2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，[PI_WGRP レコードの追加・確認・削除] を選択する。

   [PI_WGRP レコード設定] ダイアログボックスが表示されます。

3. [PI_WGRP レコード設定] ダイアログボックスの［ワークグループ情報］から，確認したいワークグループ情報を選択し，［変更］ボタンをクリックする。

［PI_WGRP レコードの変更］ダイアログボックスが表示されます。

4. 変更したいパラメーターの値を編集する。

パラメーターの設定についての注意事項は「6.3.1　イベントログ情報を収集するためのユーザーレコードの設定」を参照してください。

ただし，［ワークグループ名］は，変更できません。

5. ［OK］ボタンをクリックする。

パラメーターを変更した場合，パラメーターの入力に誤りがあるときは，エラーメッセージが表示されます。表示されるエラーの詳細を参考にして，入力し直してください。

6. ほかのワークグループ情報の設定を変更する場合は，手順 3 から手順 5 を繰り返す。

7. 必要な場合は，［プログラム名・ユーザー名・グループ名の全条件に一致（AND)］，または［プログラム名・ユーザー名・グループ名のいずれかの条件に一致（OR)］を変更する。

注意

［プログラム名・ユーザー名・グループ名の全条件に一致（AND)］，または［プログラム名・ユーザー名・グループ名のいずれかの条件に一致（OR)］で設定した内容は，［ワークグループ情報］に表示されているすべてのワークグループに適用されます。各ワークグループに対して個々に設定することはできません。

8. 変更が終わったら，［終了］ボタンをクリックする。

ユーザーレコードの設定が保存され，［PI_WGRP レコード設定］ダイアログボックスが閉じます。

6.4.4 ワークグループ情報としてユーザーレコードに設定されているユーザーレコードの削除

ワークグループ情報を収集するためのユーザーレコードの設定を削除する方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。
2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PI_WGRP レコードの追加・確認・削除］を選択する。
   ［PI_WGRP レコード設定］ダイアログボックスが表示されます。
3. ［PI_WGRP レコード設定］ダイアログボックスの［ワークグループ情報］から，削除したいワークグループ情報を選択し，［削除］ボタンをクリックする。
   削除確認のメッセージが表示されます。
4. ［OK］ボタンをクリックする。
   ワークグループ情報が削除されます。
5. ほかのワークグループ情報を削除する場合は，手順 3 と手順 4 を繰り返す。
6. 操作が終わったら［終了］ボタンをクリックする。
   ユーザーレコードの設定が保存され，［PI_WGRP レコード設定］ダイアログボックスが閉じます。

(1) アラーム運用例

ワークグループ情報を収集する機能を用いたアラームの運用例について説明します。ここでは，同じプロセス名で複数起動しているプロセスを監視し，プロセスの起動状況が n 個以下になった場合にアラームを発行するときの設定内容について説明します。

ユーザーレコードの設定およびアラーム条件の設定内容を次に示します。

ユーザーレコードの設定

ワークグループ名：**ワークグループ名**

プログラム名：**監視したいプログラム名**（Process Detail（PD）レコードの Program（INSTANCE）フィールドに格納される値を指定します）

アラームに設定する条件

Workgroup Summary（PI_WGRP）レコードに対して，次の条件を異常と検知するアラームを定義します。

workgroup=**ワークグループ名**

AND Process Count<=**n**

注意

n はプロセス数を示します。

6.5 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報の収集に関する設定

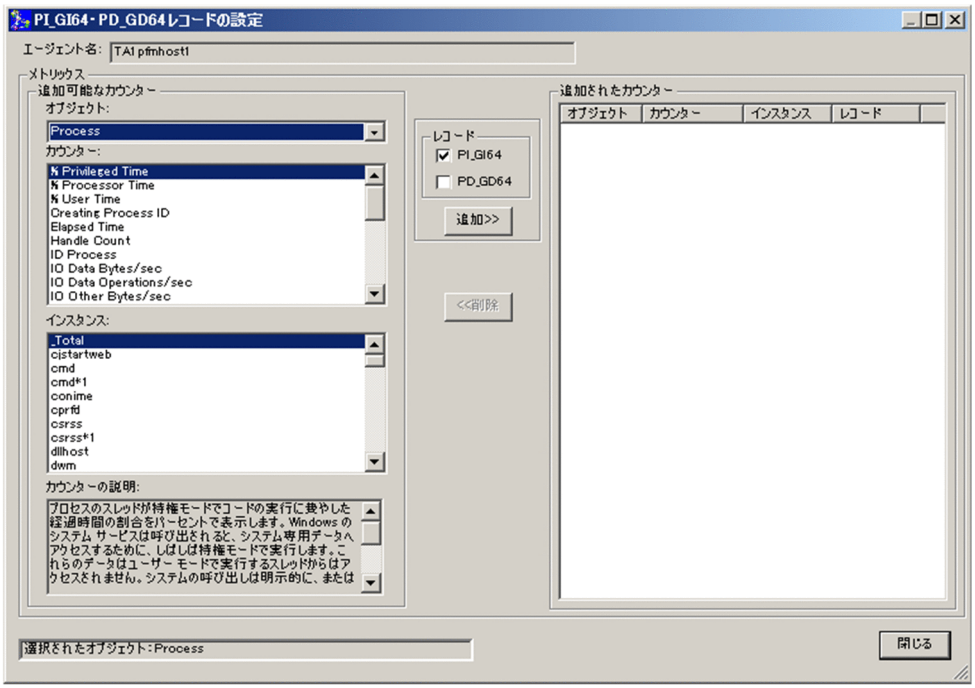
6.5.1 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定

64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。

2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PI_GI64・PD_GD64 レコードの追加・確認・削除］を選択する。

   ［PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定］ダイアログボックスが表示されます。



3. ［オブジェクト］から，収集するデータオブジェクトを選択する。

   データオブジェクトを選択すると，選択したデータオブジェクトに対して設定できるデータカウンターが，［カウンター］に表示されます。また，設定できるデータインスタンス（マルチインスタンスオブジェクト）が，［インスタンス］に表示されます。

   なお，選択したオブジェクトがシングルインスタンスオブジェクトの場合，設定できるデータインスタンスがないので，［インスタンス］には何も表示されません。

   ここで選択したデータオブジェクトは，ユーザーレコードの Object Name（OBJECT_NAME）フィールドに格納されます。

4. ［カウンター］から，収集するデータカウンターを選択する。

データカウンターは，［Ctrl］キーを押しながら左クリックすることで，複数選択および選択の解除ができます。データカウンターを選択すると，［カウンターの説明］に，選択したデータカウンターの説明が表示されます。

ここで選択したデータカウンターは，ユーザーレコードの Counter Name（COUNTER_NAME）フィールドに格納されます。

なお，［カウンター］には収集データ追加ユーティリティで収集できるデータカウンターだけが表示されます。収集データ追加ユーティリティで収集できるデータカウンターは，次に示すパフォーマンスカウンターに対応しています。データカウンターとパフォーマンスカウンターとの関連については，Microsoft 社にお問い合わせください。

- 100nSec Multi Timer
- 100nSec Multi Timer Inv
- 100nSec Timer
- 100nSec Timer Inv
- Average Bulk
- Average Timer
- Counter 100nSec Queuelen
- Counter Bulk Count
- Counter Counter
- Counter Delta
- Counter Large Delta
- Counter Large Queuelen
- Counter Large Rawcount
- Counter Large Rawcount Hex
- Counter Multi Timer
- Counter Multi Timer Inv
- Counter Object Time Queuelen
- Counter Queuelen
- Counter Rawcount
- Counter Rawcount Hex
- Counter Text
- Counter Timer
- Counter Timer Inv
- Elapsed Time
- Large Raw Fraction

- Object Time Timer
- Precision 100nSec Timer
- Precision Object Timer
- Precision System Timer
- Raw Fraction
- Sample Counter
- Sample Fraction

5. [インスタンス] から，収集するデータインスタンスを選択する。

「インスタンス」に表示されている項目は，[Ctrl] キーを押しながら左クリックすることで，複数選択および選択の解除ができます。ここで選択したデータインスタンスは，ユーザーレコードの Instance（INSTANCE）フィールドに格納されます。

データインスタンスに何も表示されていなければ，設定できるデータインスタンスはありません。手順 6 に進んでください。

6. [レコード] で [PI_GI64] または [PD_GD64] をチェックする。

PI_GI64 レコードで性能値を収集したい場合は，[PI_GI64] をチェックします。

PD_GD64 レコードで性能値を収集したい場合は，[PD_GD64] をチェックします。

7. [追加] ボタンをクリックする。

[追加可能なカウンター] に表示されているオブジェクト，カウンター，およびインスタンスの情報が [追加されたカウンター] に反映されます。[追加されたカウンター] に反映されたパフォーマンスデータは，収集対象としてユーザーレコードに設定されます。

8. 収集するパフォーマンスデータを，さらにユーザーレコードに追加する場合は，手順 3 から手順 7 を繰り返す。

9. 設定が終わったら，[閉じる] ボタンをクリックする。

[PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定] ダイアログボックスが閉じます。

6.5.2 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの内容確認

64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定内容を確認する方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。

2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，[PI_GI64・PD_GD64 レコードの追加・確認・削除] を選択する。

［PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定］ダイアログボックスが表示されます。

3. 収集対象に設定したパフォーマンスコンソールカウンター情報を確認する。

［追加されたカウンター］に表示されているパフォーマンスコンソールカウンター情報を確認してください。

4. 確認が終わったら，［閉じる］ボタンをクリックする。

［PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定］ダイアログボックスが閉じます。

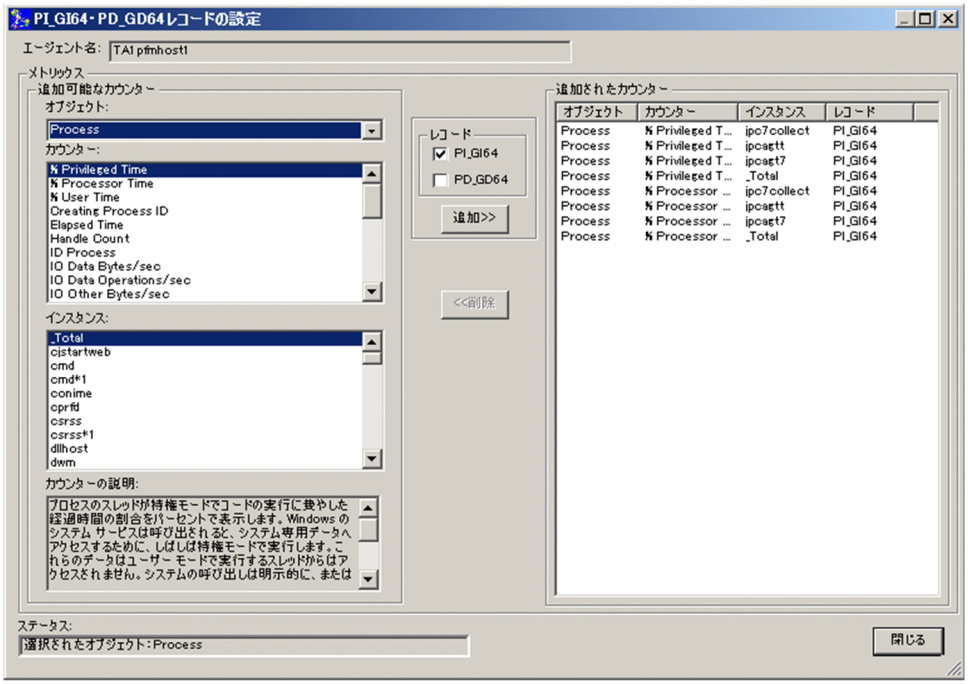
6.5.3 64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報としてユーザーレコードに設定されているユーザーレコードの削除

パフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定を削除する方法を示します。

1. Windows の［スタート］メニューから Collection Data Addition Utility を起動する。

2. ツリーエリアからログオンしているホストの Agent Store を選択し，リストエリアで Agent Collector アイコンを右クリックして，［PI_GI64・PD_GD64 レコードの追加・確認・削除］を選択する。

［PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定］ダイアログボックスが表示されます。



3. ［追加されたカウンター］から収集設定を解除したいパフォーマンスデータを選択し，［削除］ボタンをクリックする。

［追加されたカウンター］から設定が削除され，収集対象から外れます。

なお，「追加されたカウンター」に表示されている項目は，［Ctrl］キーを押しながら左クリックすることで，複数選択および選択の解除ができます。

4. 操作が終了したら，［閉じる］ボタンをクリックする。

［PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定］ダイアログボックスが閉じます。

6.6　プロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定

プロセスの稼働・非稼働情報を収集するためのユーザーレコードの設定方法を説明します。また，アラーム発生時の対応例についても説明します。

6.6.1　プロセスの稼働・非稼働情報収集の概要

PFM - Agent for Platform では，プロセスの稼働・非稼働情報を収集し，PFM - Web Console で監視できます。プロセスの稼働・非稼働情報を監視することで，運用システムが正しく動作しているかどうかを確認できます。

なお，PFM - Agent for Platform 09-10 以降で実装している「プロセスの稼働・非稼働情報収集」の機能は，09-00 以前で実装していた「アプリケーションの稼働・非稼働情報収集」の機能を拡張したものです。

PFM - Agent for Platform でプロセスの稼働・非稼働情報を収集する場合，次の方法があります。

- プロセス単位またはサービス単位で収集する
- 複数のプロセスおよびサービスをグルーピングしてアプリケーション単位で収集する

プロセスの稼働・非稼働情報の収集は，PFM - Web Console の［エージェント階層］画面で設定します。

なお，PFM - Agent for Platform の 09-00 以前と同様の手順でプロセスの稼働・非稼働情報の収集を設定したい場合は，PFM - Web Console の［サービス階層］画面で設定できます。

6.6.2　過去のバージョンとの機能差異

過去のバージョンの「アプリケーションの稼働・非稼働情報収集」と 10-00 以降の「プロセスの稼働・非稼働情報収集」の機能差異について次の表に示します。

表 6-2　プロセスの稼働・非稼働情報収集に関する過去のバージョンとの機能差異

機能	09-00 以前の「アプリケーションの稼働・非稼働情報収集」	09-10 の「プロセスの稼働・非稼働情報収集」	10-00 以降の「プロセスの稼働・非稼働情報収集」
コマンドラインの取得	×	○	○
コマンドラインの取得できる最大値	−	4,096 バイト	4,096 バイト
特定のプロセスまたはサービス単位での性能情報の収集	×※1	○※2	○※2
監視条件に指定できる最大値	127 バイト	127 バイト	4,096 バイト

機能	09-00 以前の「アプリケーションの稼働・非稼働情報収集」	09-10 の「プロセスの稼働・非稼働情報収集」	10-00 以降の「プロセスの稼働・非稼働情報収集」
PFM - Web Console で表示できる監視条件の最大値	31 バイト	127 バイト	4,096 バイト
監視対象の大文字と小文字の区別	×	○※3	○※3
ラベルによる監視条件の識別	×	○※4	○※4
プロセス監視を設定する際のグルーピング対象	• プログラム（Program） • サービス（Service Name）	• プログラム（Program Name） • コマンドライン（Command Line） • サービス（Service Name）	• プログラム（Program Name） • コマンドライン（Command Line） • サービス（Service Name）

（凡例）

○：実行できる。

×：実行できない。

－：該当しない。

注※1

すべてのプロセスまたはサービスの性能情報を収集します。

注※2

プロセス監視の設定を行っているプロセスまたはサービスだけ，性能情報を収集します。

注※3

デフォルトの設定では，監視対象の大文字と小文字を区別しません。詳細については，「6.6.7　監視対象の大文字と小文字の区別」を参照してください。

注※4

MonitoringXX Label フィールドを使用してプロセスまたはサービスを識別できます。

`jpcappcvt` コマンドを使用することで，09-00 以前で設定したアプリケーション定義を，09-10 以降のアプリケーション定義にバージョンアップできます。`jpcappcvt` コマンドの詳細については，「9.　コマンド」を参照してください。

メモ

09-00 以前で設定したアプリケーション定義を拡張しない場合は，バージョンアップは必要ありません。

6.6.3　プロセスの稼働・非稼働情報の収集に使用するレコード

PFM - Agent for Platform でプロセスの稼働・非稼働情報の収集に使用するレコードを次の表に示します。

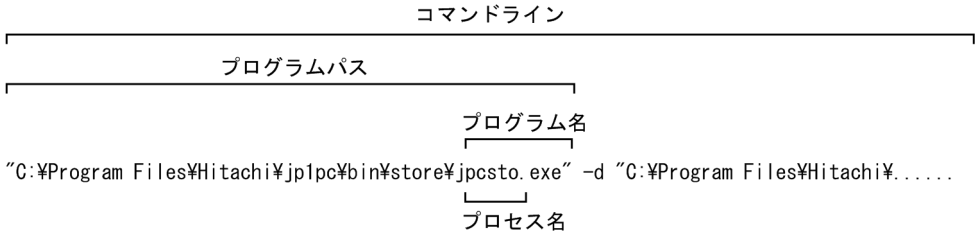
表 6-3　プロセスの稼働・非稼働情報の収集に使用するレコード（プロセス単位またはサービス単位で収集する場合）

レコード	監視対象	格納される情報	収集方法
Application Process Overview（PD_APS）	プロセス	プロセスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。	リアルタイム
Application Process Interval（PD_APSI）		プロセス監視の設定を行っているプロセスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。	• リアルタイム • 履歴
Application Service Overview（PD_ASVC）	サービス	サービス制御マネージャー（SCM）に登録されている，Win32 プロセスなどのアプリケーションサービスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。	リアルタイム

表 6-4　プロセスの稼働・非稼働情報の収集に使用するレコード（アプリケーション単位で収集する場合）

レコード	監視対象	格納される情報	収集方法
Application Summary Extension（PD_APP2）	プロセスおよびサービス	Application Process Overview（PD_APS）レコードおよび Application Service Overview（PD_ASVC）レコードに格納されるレコードを，アプリケーションを単位に，ある時点での状態で要約したパフォーマンスデータ。	• リアルタイム • 履歴
Application Process Detail（PD_APPD）		Application Process Overview（PD_APS）レコードおよび Application Service Overview（PD_ASVC）レコードに格納されるレコードを，アプリケーション単位で監視しているプロセスおよびサービスごとに，ある時点での状態で要約したパフォーマンスデータ。	

プロセスの稼働・非稼働監視の設定で使用する「プロセス名」，「プログラム名」，「プログラムパス」，および「コマンドライン」の関係について，例を使って説明します。



6.6.4 エージェント階層でのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定

ここでは，プロセスの稼働・非稼働情報を収集するために PFM - Web Console の［エージェント階層］画面で行う設定，設定内容の変更，および設定の削除について説明します。

また，設定の操作を簡略化するためのアプリケーション定義のテンプレートの利用方法についても説明します。

エージェント階層での設定は，PFM - Web Console 09-10 以降で実行できます。

この説明では，PFM - Web Console 11-50 の画面を掲載しています。

(1) ユーザーレコード（監視対象）を設定する

監視対象は，次の流れで設定します。

1. アプリケーションを作成する
2. 監視エージェントにアラームテーブルをバインドする

プロセス単位またはサービス単位で稼働・非稼働情報を収集する場合，アプリケーション作成時に，アプリケーションにプロセスまたはサービスを 1 つだけ設定します。アプリケーション単位で稼働・非稼働情報を収集する場合，アプリケーション作成時に，アプリケーションにプロセスまたはサービスを複数設定します。

監視対象の設定方法の詳細を次に示します。

(a) アプリケーションを作成する

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。
2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［エージェント階層］タブを選択する。
   ［エージェント階層］画面が表示されます。
3. ナビゲーションフレームのエージェント階層で，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。
   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。
4. メソッドフレームの［プロセス監視の設定］メソッドを選択する。
   ［プロセス監視の設定］画面が表示されます。

5. 新規に設定する場合は，［作成］ボタンをクリックする。設定を変更する場合は，［アプリケーション定義］から変更したいアプリケーション定義を選択し，［編集］ボタンをクリックする。

アプリケーション定義は，複数選択できません。

［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成］画面または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集］画面が表示されます。

6. 新規作成の場合，［アプリケーション定義名］にアプリケーション定義名を指定する。

アプリケーション定義名，および指定する文字列については，次の規則に従ってください。

- ユーザーが任意のアプリケーション定義名を指定できます。指定したアプリケーション定義名は，PD_APP2 レコード，PD_APPD レコード，および PD_APSI レコードの「Application Name」フィールドに格納され，アプリケーションを特定するための識別子として利用されます。そのため，アプリケーション定義名は，ユニークな名称を指定してください。

- 指定できる文字は，次の文字を除く半角英数字および半角記号です。1～63 バイトの範囲で指定できます。

  タブ文字（¥t） ¥ : ; , * ? ” ’ <> |

- 設定できるアプリケーションの数は，64 個までです。

7. **仮想化システム（Docker コンテナ）を使用して運用している場合，必要に応じて［仮想化環境の識別子］に仮想化環境の識別子を指定する。**

   注

   PFM - Web Console のバージョンが 11-50 より前の場合，仮想化環境の識別子を指定できません。

   仮想化システムを使用して運用している場合，仮想化環境を特定するための識別子を入力します。指定した場合，監視対象を特定環境のプロセスだけに限定できます。

   詳細については，「2.3.17(4)　プロパティの設定と取得情報との関係」を参照してください。

   仮想化環境の識別子には，Docker コンテナの ID を 64 文字の 16 進数（0～9，a～f の半角の文字列）で指定します。なお，Docker ホスト環境のプロセスだけを監視する場合は「0」を指定します。

   > **メモ**
   >
   > Docker コンテナの ID を調べる方法については，リリースノートを参照してください。

8. **アプリケーションの詳細情報を設定する。**

   ［プロセス監視の設定 ＞ アプリケーション定義の新規作成］画面または［プロセス監視の設定 ＞ アプリケーション定義の編集］画面で設定できる詳細情報を次の表に示します。

表 6-5　設定できるアプリケーションの詳細情報

設定項目名	設定内容	対応するレコードのフィールド名
名称※1	監視対象を特定するための条件を入力します。 指定できる文字は**タブ文字（¥t）**を除く半角英数字および半角記号です。4,096 バイト以内で指定できます。	PD_APPD レコードの「Monitoring Condition」フィールド
ラベル	監視条件を特定するためのラベルを指定します。 指定できる文字は**タブ文字（¥t）**を除く半角英数字および半角記号です。31 バイト以内で指定できます。 デフォルトは「MonitoringXX※2」です。 何も入力しない場合は，デフォルトの「MonitoringXX※2」が設定されます。 監視ラベルは，ユニークな名称を指定してください。	PD_APPD レコード，PD_APSI レコードの「Monitoring Label」フィールド
種別	［プログラム］，［コマンドライン］，［サービス］，［選択なし］のどれかを選択します。 • プログラム PD_APS レコードの「Program Name」フィールドの値を使用して評価します。 • コマンドライン	PD_APPD レコード，PD_APSI レコードの「Monitoring Field」フィールド

設定項目名	設定内容	対応するレコードのフィールド名
種別	PD_APS レコードの「Command Line」フィールドの値を使用して評価します。 • サービス PD_ASVC レコードの「Service Name」フィールドの値を使用して評価します。 • 選択なし 評価しません。	PD_APPD レコード，PD_APSI レコードの「Monitoring Field」フィールド
下限	監視対象数のしきい値の下限値を入力します。 設定できる値は 0～65535 です。デフォルトは「0」です。	PD_APPD レコードの「Monitoring Min」フィールド
上限	監視対象数のしきい値の上限値を入力します。 設定できる値は 0～65535 です。ただし，［下限］の指定値以上の値を指定する必要があります。デフォルトは「0」です。	PD_APPD レコードの「Monitoring Max」フィールド

注※1

- プロセスの監視では，ワイルドカード（「*」と「?」）を使用できます。
  「*」は 0 個以上の任意の文字，「?」は任意の 1 文字を意味します。
- プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定で，監視条件（MonitoringXX Condition）に 128 バイト以上設定した場合でも，PD_APPD レコードの「Monitoring Condition」フィールドには，設定された監視条件の先頭から 127 バイトまでしか表示されません。ただし，監視は設定された監視条件で実行されます。
- ［名称］で指定した監視条件から監視対象を特定するときに，デフォルトでは，大文字と小文字は区別されません。監視条件から監視対象を特定するときに，大文字と小文字を区別するかどうかの設定を変更する方法については，「6.6.7　監視対象の大文字と小文字の区別」を参照してください。
- ［種別］に「プログラム」を指定したときは，［名称］に Windows のプログラムの拡張子（.exe など）を指定してください。
- ［名称］には，PD_APS レコードの「Program Name」フィールド，PD_APS レコードの「Command Line」フィールド，および PD_ASVC レコードの「Service Name」フィールドを確認して，これらのフィールドと同じ文字列を入力する必要があります。
  取得元の情報に ASCII コードの文字（0x20～0x7E）以外が含まれる場合，PD_APS レコードの「Program Name」フィールド，PD_APS レコードの「Command Line」フィールド，または PD_ASVC レコードの「Service Name」フィールドには，「#(0x23)」に変換された値が格納されます。1 バイト単位で変換されるため，例えば，マルチバイト文字の「A」（全角）は次のように変換されます。

取得元の情報		変換後の情報	
文字コードの種類	バイナリ	バイナリ	文字列
Shift-JIS コード	8260	2360	#`
EUC コード	A3C1	2323	##
UTF-8 コード	EFBCA1	232323	###

注※2

「XX」には 01～15 までの数値が入ります。PD_APPD レコードおよび PD_APSI レコードの「Monitoring Number」フィールドに対応した数値が設定されます。

メモ

［入力支援機能］の［エージェント］プルダウンメニューから監視対象の Agent Collector サービスを選択し，［実行］ボタンをクリックすると，［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成 > 稼働中のプログラム一覧から追加］画面※または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集 > 稼働中のプログラム一覧から追加］画面※が表示されて，プロセスを選択してプロパティを設定できます。

注※

監視対象種別には，［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成］画面または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集］画面の［種別］の指定内容によって，「稼働中のプログラム」，「稼働中のコマンドライン」，または「サービス」が表示されます。

［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成］画面または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集］画面の［種別］に「プログラム」を指定した場合は「稼働中のプログラム」が，「コマンドライン」を指定した場合は「稼働中のコマンドライン」が，「サービス」を指定した場合は「サービス」が表示されます。デフォルトでは「稼働中のプログラム」が表示されます。

9. ［OK］ボタンをクリックする。

設定内容が有効になります。

なお，「アプリケーションを作成する」の手順 7.以降で，［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成 > 稼働中のプログラム一覧から追加］画面※または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集 > 稼働中のプログラム一覧から追加］画面※からプロパティを設定する場合の手順を次に示します。

注※

監視対象種別には，［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成］画面または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集］画面の［種別］の指定内容によって，「稼働中のプログラム」，「稼働中のコマンドライン」，または「サービス」が表示されます。

［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成］画面または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集］画面の［種別］に「プログラム」を指定した場合は「稼働中のプログラム」，「コマンドライン」を指定した場合は「稼働中のコマンドライン」，「サービス」を指定した場合は「サービス」が表示されます。デフォルトでは「稼働中のプログラム」が表示されます。

10. 「アプリケーションを作成する」の手順 1.～7.を実行する。

11. ［入力支援機能］の［エージェント］プルダウンメニューから監視対象の Agent Collector サービスを選択し，［実行］ボタンをクリックする。

［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成 > 稼働中のプログラム一覧から追加］画面または［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集 > 稼働中のプログラム一覧から追加］画面が表示されます。

12. [一覧] の左側のプルダウンメニューから監視対象の種別（「稼働中のプログラム」，「稼働中のコマンドライン」，「サービス」のどれか）を選択し，[選択] ボタンをクリックする。

    [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成 > 稼働中のプログラム一覧から追加] 画面または [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集 > 稼働中のプログラム一覧から追加] 画面の下部にプロセスの一覧が表示されます。

    プロセスの一覧で，[絞り込み] にキーワードを指定して [実行] ボタンをクリックすると，プロセス名にキーワードを含むプロセスだけを表示できます。[解除] ボタンをクリックすると，元のプロセスの一覧に戻ります。

    また，[仮想化環境ごとにプログラムを表示] を選択し，[仮想化環境の識別子] プルダウンメニューから監視対象の仮想化環境の識別子を選択すると，選択された仮想化環境のプロセスだけが表示されます。

13. プロセスの一覧から監視したいプロセスを選択し，[OK] ボタンをクリックする。

    [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成 > 稼働中のプログラム一覧から追加] 画面または [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集 > 稼働中のプログラム一覧から追加] 画面が閉じて，[プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成] 画面または [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集] 画面に戻ります。

14. [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成] 画面または [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の編集] 画面で，必要な設定項目を変更する。

    設定項目については，「表 6-5　設定できるアプリケーションの詳細情報」を参照してください。

15. [OK] ボタンをクリックする。

    設定内容が有効になります。

(b) 監視エージェントにアラームテーブルをバインドする

監視エージェントに，稼働・非稼働情報を監視するためのアラームテーブルをバインドします。稼働・非稼働情報を監視するためのアラームは，Application Status アラームです。必要に応じて編集してください。Application Status は，「7. 監視テンプレート」の「Application Status」を参照してください。

アラームテーブルをバインドする場合，次の方法があります。

- PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00 のアラームテーブルをバインドする
- ユーザーが作成したアラームテーブルをバインドする

PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00 のアラームテーブルをバインドする方法

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。
2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［エージェント階層］タブを選択する。
   ［エージェント階層］画面が表示されます。
3. ナビゲーションフレームのエージェント階層で，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。
   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。
4. メソッドフレームの［プロセス監視の設定］メソッドを選択する。
   ［プロセス監視の設定］画面が表示されます。
5. ［プロセス監視用アラームでの監視の設定］の［開始］ボタンをクリックする。
   監視エージェントに，アラームテーブルがバインドされます。

ユーザーが作成したアラームテーブルをバインドする方法

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。
2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［エージェント階層］タブを選択する。
   ［エージェント階層］画面が表示されます。
3. ナビゲーションフレームのエージェント階層で，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。
   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。
4. メソッドフレームの［アラームテーブルのバインド］メソッドを選択する。
   ［アラームテーブルのバインド[アラームテーブル選択]］画面が表示されます。
5. ［Windows］フォルダの下位に表示されるアラームテーブルを選択し，［OK］ボタンをクリックする。

監視エージェントに，アラームテーブルがバインドされます。

特定のプロセスの状態だけを監視する場合は，次の条件式のアラームを作成して，監視できます。

表 6-6　特定のプロセスの状態だけを監視する場合の条件式

設定項目	条件式
レコード	Application Process Detail (PD_APPD)
フィールド	Application Name Monitoring Label Monitoring Status
異常条件および警告条件※1	Application Name = Name※2 AND Monitoring Label = Label※2 AND Monitoring Status = ABNORMAL

注※1

異常条件と警告条件には，同じ条件を指定します。

注※2

監視したいアプリケーション名と監視ラベルを指定します。

(2)　ユーザーレコード（監視対象）を削除する

監視対象を削除する方法を次に示します。

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。

   ［メイン］画面が表示されます。

2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［エージェント階層］タブを選択する。

   ［エージェント階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームのエージェント階層で，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。

   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

4. メソッドフレームの［プロセス監視の設定］メソッドを選択する。

   ［プロセス監視の設定］画面が表示されます。

5. ［アプリケーション定義］から，削除したいアプリケーション定義を選択し，［削除］ボタンをクリックする。

   ［プロセス監視の設定 ＞ アプリケーション定義の削除］画面が表示されます。

6. ［OK］ボタンをクリックする。

   設定内容が削除されます。

(3)　アプリケーション定義のテンプレートを利用する

PFM - Web Console の［エージェント階層］画面で設定したプロセスの稼働・非稼働情報を収集するための設定（アプリケーション定義）を，テンプレートに保存して，複数のマシンで利用できます。

アプリケーション定義のテンプレートの作成方法，削除方法，および読み込み方法を次に示します。

(a)　アプリケーション定義のテンプレートを作成する

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。

2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［エージェント階層］タブを選択する。
   ［エージェント階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームのエージェント階層で，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。
   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

4. メソッドフレームの［プロセス監視の設定］メソッドを選択する。
   ［プロセス監視の設定］画面が表示されます。

5. ［アプリケーション定義のテンプレートを表示］メニューを選択する。
   ［テンプレートの編集］メニューが表示されます。

6. [テンプレートの編集] メニューを選択する。

   [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義のテンプレート] 画面が表示されます。

7. テンプレートを新規に作成する場合は，[作成] ボタンをクリックする。設定内容を変更する場合は，[アプリケーション定義のテンプレート] から変更したいテンプレートを選択し，[編集] ボタンをクリックする。

   [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義のテンプレートの新規作成] 画面または [プロセス監視の設定 > アプリケーション定義のテンプレートの編集] 画面が表示されます。

8. [テンプレート名] にテンプレートの名称を入力する。

9. [説明] にテンプレートの説明を入力する。

10. アプリケーションの詳細情報を設定する。
    設定項目については,「表 6-5　設定できるアプリケーションの詳細情報」を参照してください。

11. [OK] ボタンをクリックする。
    アプリケーション定義のテンプレートが作成されます。

(b)　アプリケーション定義のテンプレートを削除する

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   [メイン] 画面が表示されます。

2. [メイン] 画面のナビゲーションフレームの [エージェント階層] タブを選択する。
   [エージェント階層] 画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームのエージェント階層で，ホスト名<Windows> (Agent Collector サービス) を選択する。
   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

4. メソッドフレームの [プロセス監視の設定] メソッドを選択する。
   [プロセス監視の設定] 画面が表示されます。

5. [アプリケーション定義のテンプレートを表示] メニューを選択する。
   [テンプレートの編集] メニューが表示されます。

6. [テンプレートの編集] メニューを選択する。

［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義のテンプレート］画面が表示されます。

7. ［アプリケーション定義のテンプレート］から削除したいテンプレートを選択し，［削除］ボタンをクリックする。
［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義のテンプレートの削除］画面が表示されます。

8. ［OK］ボタンをクリックする。
アプリケーション定義のテンプレートが削除されます。

(c) アプリケーション定義のテンプレートを読み込む

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
［メイン］画面が表示されます。

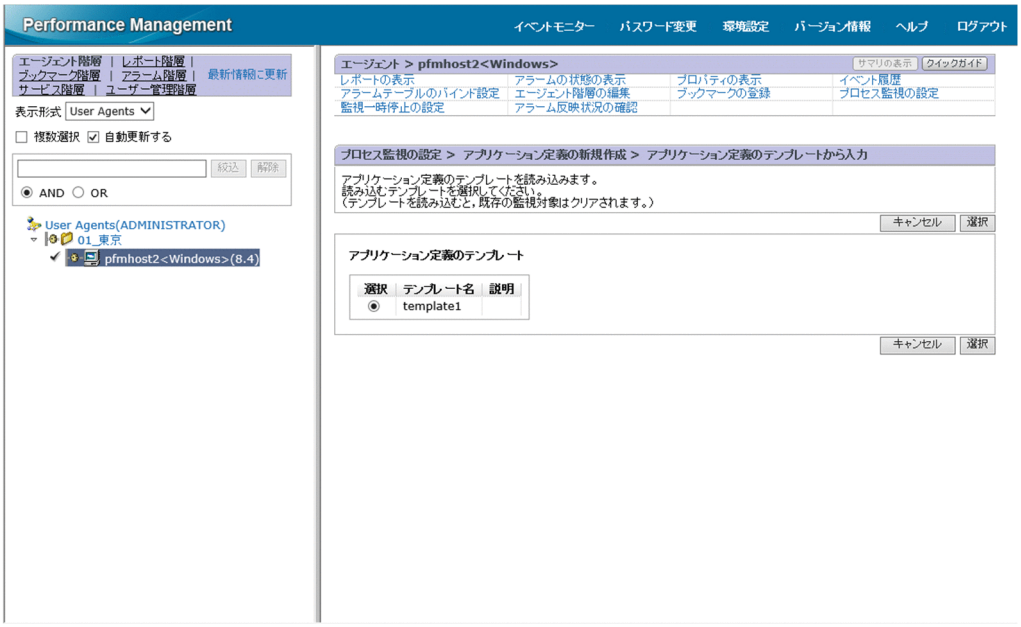
2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［エージェント階層］タブを選択する。
［エージェント階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームのエージェント階層で，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。
選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

4. メソッドフレームの［プロセス監視の設定］メソッドを選択する。
［プロセス監視の設定］画面が表示されます。

5. ［作成］ボタンをクリックする。
［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成］画面が表示されます。

6. ［テンプレート読み込み］ボタンをクリックする。
［プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成 > アプリケーション定義のテンプレートから入力］画面が表示されます。



7. [アプリケーション定義のテンプレート] から読み込みたいテンプレートを選択し，[選択] ボタンをクリックする。

   アプリケーション定義のテンプレートが読み込まれます。

6.6.5 サービス階層でのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定

ここでは，プロセスの稼働・非稼働情報を収集するために PFM - Web Console の［サービス階層］画面で行う設定，設定内容の確認，設定内容の変更，および設定の削除について説明します。

(1) ユーザーレコード（監視対象）を設定する

監視対象は，次の流れで設定します。

1. アプリケーションを作成する
2. アプリケーションのプロパティ（監視するアプリケーション名やしきい値）を設定する
3. 監視エージェントにアラームテーブルをバインドする※

注※

アラームテーブルのバインドは，PFM - Web Console の［エージェント階層］画面で実行します。

プロセス単位またはサービス単位で稼働・非稼働情報を収集する場合，アプリケーション作成時に，アプリケーションにプロセスまたはサービスを 1 つだけ設定します。アプリケーション単位で稼働・非稼働情報を収集する場合，アプリケーション作成時に，アプリケーションにプロセスまたはサービスを複数設定します。

監視対象の設定方法の詳細を次に示します。

(a) アプリケーションを作成する

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。

2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［サービス階層］タブを選択する。
   ［サービス階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームの［Machines］フォルダの下位の階層を展開する。
   Performance Management のサービスがインストールされているホストの名前が付いたフォルダが表示されます。また，ホスト名が付いたフォルダを展開すると，そのホストにインストールされているサービスが表示されます。
   各サービスの名前は，サービス ID で表示されます。サービス ID の詳細については「付録 B　識別子一覧」，およびマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録の，サービスの命名規則について説明している個所を参照してください。
   サービス ID の形式は，プロダクト名表示機能が有効か無効かによって異なります。プロダクト名表示機能の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

4. 監視エージェントホストのフォルダの下位にある階層を展開し，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。
   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

5. メソッドフレームの［プロパティ］メソッドを選択する。
   ［サービスのプロパティ］画面が表示されます。

6. [Advanced application monitoring] − ［ADDITION OR DELETION A SETTING］ツリーを選択する。

7. インフォメーションフレームの下部の［ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING］にアプリケーション名を指定する。
   アプリケーション名，および指定する文字列については，次の規則に従ってください。
   - ユーザーが任意のアプリケーション名を指定できます。指定したアプリケーション名は，PD_APP2 レコードおよび PD_APPD レコードの「Application Name」フィールドに格納され，アプリケーションを特定するための識別子として利用されます。そのため，アプリケーション名は，ユニークな名称を指定してください。
   - 指定できる文字は，次の文字を除く半角英数字および半角記号です。1～63 バイトの範囲で指定できます。
     タブ文字（¥t） ￥ ： ； ， ＊ ？ ” ’ <> |
   - 設定できるアプリケーションの数は，64 個までです。

8. [OK] ボタンをクリックする。

［サービスのプロパティ］画面の［Advanced application monitoring］－［Application monitoring setting］ツリーの下位に，アプリケーション名のツリーが生成されます。

(b) アプリケーションのプロパティを設定する

1. 「アプリケーションを作成する」の手順を実行したあと，再び［サービスのプロパティ］画面を表示し，［Advanced application monitoring］－［Application monitoring setting］ツリーの下位に生成されたアプリケーション名のツリーを選択する。

   インフォメーションフレームの下部に，プロパティ情報の入力画面が表示されます。

2. アプリケーションのプロパティを設定する。

   監視ラベル，監視フィールド，監視条件，および監視対象数のしきい値の下限値と上限値を設定します。複数のプロセス情報を設定できます。アプリケーションのプロパティの設定項目を次の表に示します。

表 6-7 アプリケーションのプロパティの設定項目

設定項目	プロパティ名	設定内容	対応するレコードのフィールド名
仮想化環境の識別子	Virtual Environment ID※1	仮想化システム（Docker コンテナ）を使用して運用している場合，必要に応じて仮想化環境を特定するための識別子を入力します。指定した場合，特定環境のプロセスだけに限定できます。 詳細については，「2.3.17(4) プロパティの設定と取得情報との関係」を参照してください。 仮想化環境の識別子には，Docker コンテナの ID を 64 文字の 16 進数（0～9，a～f の半角の文字列）で指定します。なお，Docker ホスト環境のプロセスだけを監視する場合は「0」を指定します。	PD_APP2 レコードの「Virtual Env ID」フィールド
監視ラベル	MonitoringXX Label	監視条件を特定するためのラベルを指定します。 指定できる文字はタブ文字（¥t）を除く半角英数字および半角記号です。31 バイト以内で指定できます。 デフォルトは「MonitoringXX※2」です。 何も入力しない場合は，「MonitoringXX※2」が設定されます。 監視ラベルは，ユニークな名称を指定してください。	PD_APPD レコードの「Monitoring Label」フィールド
監視フィールド	MonitoringXX Field	「Program Name」，「Command Line」，「Service Name」，「None」のどれかを選択します。 • Program Name	PD_APPD レコードの「Monitoring Field」フィールド

設定項目	プロパティ名	設定内容	対応するレコードのフィールド名
監視フィールド	MonitoringXX Field	PD_APS レコードの「Program Name」フィールドの値を使用して評価します。 • Command Line PD_APS レコードの「Command Line」フィールドの値を使用して評価します。 • Service Name PD_ASVC レコードの「Service Name」フィールドの値を使用して評価します。 • None 評価しません。 デフォルトは「None」です。	PD_APPD レコードの「Monitoring Field」フィールド
監視条件※3	MonitoringXX Condition	監視対象を特定するための条件を入力します。 指定できる文字はタブ文字（¥t）を除く半角英数字および半角記号です。4,096 バイト以内で指定できます。 デフォルトは空白です。	PD_APPD レコードの「Monitoring Condition」フィールド
監視対象数のしきい値の下限値と上限値	MonitoringXX Range	監視対象数のしきい値の下限値と上限値を，「1-2」のようにハイフン（-）でつないで入力します。 設定できる値は 0～65535 です。 デフォルトは「0-0」です。	• 下限値 PD_APPD レコードの「Monitoring Min」フィールド • 上限値 PD_APPD レコードの「Monitoring Max」フィールド

注※1

このプロパティは，PFM - Agent for Platform が動作する OS が Windows Server 2016 以降の場合だけ表示されます。

注※2

「XX」には 01～15 までの数値が入ります。PD_APPD レコードの「Monitoring Number」フィールドに対応した数値が設定されます。

注※3

- プロセスの監視では，ワイルドカード（「*」と「?」）を使用できます。
  「*」は 0 個以上の任意の文字，「?」は任意の 1 文字を意味します。
- プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定で，監視条件（MonitoringXX Condition）に 128 バイト以上設定した場合でも，PD_APPD レコードの「Monitoring Condition」フィールドには，設定された監視条件の先頭から 127 バイトまでしか表示されません。ただし，監視は設定された監視条件で実行されます。
- 監視条件から監視対象を特定するときに，デフォルトでは，大文字と小文字は区別されません。監視条件から監視対象を特定するときに，大文字と小文字を区別するかどうかの設定を変更する方法については，「6.6.7　監視対象の大文字と小文字の区別」を参照してください。
- ［MonitoringXX Field］プロパティに「Program Name」を指定したときは，［MonitoringXX Condition］プロパティに Windows のプログラムの拡張子（.exe など）を指定してください。

- MonitoringXX Condition プロパティには，PD_APS レコードまたは PD_APSI レコードの「Program Name」フィールド，PD_APS レコードの「Command Line」フィールド，および PD_ASVC レコードの「Service Name」フィールドを確認して，これらのフィールドと同じ文字列を入力する必要があります。

  取得元の情報に ASCII コードの文字（0x20～0x7E）以外が含まれる場合，PD_APS レコードまたは PD_APSI レコードの「Program Name」フィールド，PD_APS レコードの「Command Line」フィールド，および PD_ASVC レコードの「Service Name」フィールドには，「#(0x23)」に変換された値が格納されます。1 バイト単位で変換されるため，例えば，マルチバイト文字の「A」（全角）は次のように変換されます。

取得元の情報		変換後の情報	
文字コードの種類	バイナリ	バイナリ	文字列
Shift-JIS コード	8260	2360	#`
EUC コード	A3C1	2323	##
UTF-8 コード	EFBCA1	232323	###

3. [OK] ボタンをクリックする。

   設定内容が有効になります。

(c) 監視エージェントにアラームテーブルをバインドする

監視エージェントに，稼働・非稼働情報を監視するためのアラームテーブルをバインドします。稼働・非稼働情報を監視するためのアラームは，Application Status アラームです。必要に応じて編集してください。Application Status アラームの詳細については，「7. 監視テンプレート」の「Application Status」を参照してください。

アラームテーブルをバインドする方法を次に示します。

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。

   ［メイン］画面が表示されます。

2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［エージェント階層］タブを選択する。

   ［エージェント階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームのエージェント階層で，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。

   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

4. メソッドフレームの［アラームテーブルのバインド］メソッドを選択する。

   ［アラームテーブルのバインド[アラームテーブル選択]］画面が表示されます。

5. ［Windows］フォルダの下位に表示されるアラームテーブルを選択し，［OK］ボタンをクリックする。

   監視エージェントに，アラームテーブルがバインドされます。

特定のプロセスの状態だけを監視する場合は，次の条件式のアラームを作成して，監視できます。

表 6-8　特定のプロセスの状態だけを監視する場合の条件式

設定項目	条件式
レコード	Application Process Count (PD_APPD)
フィールド	Application Name Monitoring Label Monitoring Status
異常条件および警告条件※1	Application Name = Name※2 AND Monitoring Label = Label※2 AND Monitoring Status = ABNORMAL

注※1

異常条件と警告条件には，同じ条件を指定します。

注※2

監視したいアプリケーション名と監視ラベルを指定します。

(2)　ユーザーレコード（監視対象）の設定内容を確認または変更する

プロセスの稼働・非稼働情報を収集するための監視対象の設定の確認方法または変更方法を次に示します。

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。

   ［メイン］画面が表示されます。

2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［サービス階層］タブを選択する。

   ［サービス階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームの［Machines］フォルダの下位の階層を展開する。

   Performance Management のサービスがインストールされているホストの名前が付いたフォルダが表示されます。また，ホスト名が付いたフォルダを展開すると，そのホストにインストールされているサービスが表示されます。

   各サービスの名前は，サービス ID で表示されます。サービス ID の詳細については「付録 B　識別子一覧」，およびマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録の，サービスの命名規則について説明している個所を参照してください。

   サービス ID の形式は，プロダクト名表示機能が有効か無効かによって異なります。プロダクト名表示機能の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

4. 監視エージェントホストのフォルダの下位にある階層を展開し，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。

   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

5. メソッドフレームの［プロパティ］メソッドを選択する。

   ［サービスのプロパティ］画面が表示されます。

6. [Advanced application monitoring] − [Application monitoring setting] ツリーを展開し，確認したいアプリケーション名のツリーを選択する。

7. 設定内容を確認する。

8. 設定内容を更新する場合は，「(1) ユーザーレコード（監視対象）を設定する」の「アプリケーションのプロパティを設定する」の手順 2.に従って設定する。

9. [OK] ボタンをクリックする。
   手順 8.で設定内容を更新した場合は，変更内容が有効になります。

(3) ユーザーレコード（監視対象）を削除する

監視対象を削除する方法を次に示します。

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。

2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［サービス階層］タブを選択する。
   ［サービス階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームの［Machines］フォルダの下位の階層を展開する。
   Performance Management のサービスがインストールされているホストの名前が付いたフォルダが表示されます。また，ホスト名が付いたフォルダを展開すると，そのホストにインストールされているサービスが表示されます。
   各サービスの名前は，サービス ID で表示されます。サービス ID の詳細については「付録 B 識別子一覧」，およびマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録の，サービスの命名規則について説明している個所を参照してください。
   サービス ID の形式は，プロダクト名表示機能が有効か無効かによって異なります。プロダクト名表示機能の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

4. 監視エージェントホストのフォルダの下位にある階層を展開し，ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。
   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

5. メソッドフレームの［プロパティ］メソッドを選択する。
   ［サービスのプロパティ］画面が表示されます。

6. [Advanced application monitoring] − [ADDITION OR DELETION A SETTING] ツリーを選択する。

7. インフォメーションフレーム下部の［DELETE AN APPLICATION MONITORING SETTING］で削除したい監視対象のアプリケーション名を選択し，［OK］ボタンをクリックする。

設定内容が削除されます。

6.6.6　コマンドでのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定

ここでは，コマンドを実行してプロセスの稼働・非稼働情報を収集するための設定をする方法について説明します。

プロセスの稼働・非稼働情報の収集は，PFM - Web Console の［エージェント階層］画面で設定できますが，コマンドを使うと，バッチ処理によって，メンテナンス時の設定作業などを自動化できます。

(1)　ユーザーレコード（監視対象）を設定する

監視対象は，次の流れで設定します。

1. アプリケーション定義ファイルを作成する
2. アプリケーションを作成する
3. 監視エージェントにアラームテーブルをバインドする

プロセス単位またはサービス単位で稼働・非稼働情報を収集する場合，アプリケーション定義ファイル作成時に，アプリケーションにプロセスまたはサービスを 1 つだけ設定します。アプリケーション単位で稼働・非稼働情報を収集する場合，アプリケーション定義ファイル作成時に，アプリケーションにプロセスまたはサービスを複数設定します。

監視対象の設定方法の詳細を次に示します。

なお，jpcmkkey コマンド，jpcprocdef create コマンド，jpcprocdef output コマンド，およびjpctool alarm bind コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

サービス ID は，PFM - Agent ホスト名によって異なります。例えば，PFM - Agent ホスト名が「pfmhost1」の場合，サービス ID は「TA1pfmhost1」となります。サービス ID の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録に記載されている命名規則を参照してください。

(a)　認証用キーファイルの作成

PFM - Web Console がインストールされているホストで，jpcmkkey コマンドを実行して，認証用キーファイルを作成します。作成済みの場合，この手順は不要です。

コマンド実行時のログイン認証に使用するユーザー名およびパスワードを，ADMINISTRATOR および xxxxx として認証用のキーファイルを作成する場合のコマンド実行例を次に示します。

```
jpcmkkey -user ”ADMINISTRATOR” -password ”xxxxx”
```

(b) アプリケーション定義ファイルを作成する

プロセスの稼働・非稼働情報を収集するために必要な条件を，アプリケーション定義ファイル（XML 形式）に記述します。アプリケーション定義ファイルは，アプリケーション作成時に，jpcprocdef create コマンドのパラメーターファイルとして使用します。

jpcprocdef create コマンドは，PFM - Web Console がインストールされているホストにログインして実行します。新規に作成する場合は，次のサンプルファイルをひな形として使用できます。

PFM - Web Console が Windows の場合

PFM - Web Console のインストール先フォルダ¥sample¥processmonitoringcommand¥jpcprocdef-parameters-windows.xml

PFM - Web Console が UNIX の場合

/opt/jp1pcwebcon/sample/processmonitoringcommand/jpcprocdef-parameters-unix.xml

すでにアプリケーション定義が存在し，その定義内容を編集して新しいアプリケーション定義を作成したいときは，jpcprocdef output コマンドで出力してください。

jpcprocdef output コマンドは，PFM - Web Console がインストールされているホストにログインして実行します。jpcprocdef output コマンドの指定例を次に示します。

PFM - Web Console が Windows の場合（c:¥sample.xml に出力する）

jpcprocdef output -agent サービス ID -name application1 -f c:¥sample.xml

PFM - Web Console が UNIX の場合（/tmp/sample.xml に出力する）

jpcprocdef output -agent サービス ID -name application1 -f /tmp/sample.xml

(c) アプリケーションを作成する

-f オプションにアプリケーション定義ファイルを指定してjpcprocdef create コマンドを実行し，アプリケーションを作成します。

jpcprocdef create コマンドは，PFM - Web Console がインストールされているホストにログインして実行します。

jpcprocdef create コマンドでは，1 つのエージェントに対してアプリケーションを作成できます。複数のエージェントに対してアプリケーションを作成する場合は，バッチ処理によって，コマンドを繰り返し実行してください。jpcprocdef create コマンドの指定例を次に示します。

PFM - Web Console が Windows の場合（アプリケーション定義の設定情報ファイル：c:¥sample.xml）

jpcprocdef create -agent サービス ID -f c:¥sample.xml

PFM - Web Console が UNIX の場合（アプリケーション定義の設定情報ファイル：/tmp/sample.xml）

jpcprocdef create -agent サービス ID -f /tmp/sample.xml

(d) 監視エージェントにアラームテーブルをバインドする

jpctool alarm bind コマンドを実行して，監視エージェントに，稼働・非稼働情報を監視するためのアラームテーブルをバインドします。

jpctool alarm bind コマンドは，PFM - Manager がインストールされているホストにログインして実行します。

稼働・非稼働情報を監視するためのアラームは，Application Status アラームです。必要に応じて編集してください。Application Status アラームについては，「7. 監視テンプレート」の「Application Status」を参照してください。

すでに，アラームテーブルをバインドしている場合は，監視対象を設定するたびにバインドする必要はありません。

アラームテーブルをバインドする場合，次の方法があります。

- PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00 のアラームテーブルをバインドする
- ユーザーが作成したアラームテーブルをバインドする

PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00 のアラームテーブルをバインドする場合のjpctool alarm bind コマンドの指定例を次に示します。

PFM - Manager が Windows の場合

```
jpctool alarm bind -key Windows -table "PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00" -id サービス ID -add
```

PFM - Manager が UNIX の場合

```
jpctool alarm bind -key Windows -table "PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00" -id サービス ID -add
```

ユーザーが作成したアラームテーブルをバインドする場合のjpctool alarm bind コマンドの指定例を次に示します。

PFM - Manager が Windows の場合

```
jpctool alarm bind -key Windows -table ユーザー作成アラームテーブル名※ -id サービス ID -add
```

PFM - Manager が UNIX の場合

```
jpctool alarm bind -key Windows -table ユーザー作成アラームテーブル名※ -id サービス ID -add
```

注※

ユーザー作成アラームテーブル名には，ユーザーが任意に作成したアラームテーブルの名称を指定できます。

特定のプロセスの状態だけを監視する場合は，次の条件式のアラームを作成して，監視できます。特定のプロセスの状態だけを監視する場合は，「表 6-6」を参照してください。

(2) ユーザーレコード（監視対象）の設定を削除する

監視対象は，次の流れで削除します。

1. 削除するアプリケーション定義の定義名を確認する
2. アラームテーブルをアンバインドする
3. アプリケーション定義を削除する

なお，jpcmkkey コマンド，jpcprocdef listコマンド，jpctool alarm unbindコマンド，および jpcprocdef deleteコマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

サービス ID は，PFM - Agent ホスト名によって異なります。例えば，PFM - Agent ホスト名が「pfmhost3」の場合，サービス ID は「TA1pfmhost3」となります。サービス ID の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録に記載されている命名規則を参照してください。

(a) 認証用キーファイルの作成

PFM - Web Console がインストールされているホストで，jpcmkkey コマンドを実行して，認証用キーファイルを作成します。作成済みの場合，この手順は不要です。

コマンド実行時のログイン認証に使用するユーザー名およびパスワードを，ADMINISTRATOR および xxxxx として認証用のキーファイルを作成する場合のコマンド実行例を次に示します。

```
jpcmkkey -user ”ADMINISTRATOR” -password ”xxxxx”
```

(b) 削除するアプリケーション定義の定義名を確認する

jpcprocdef list コマンドを実行して，監視エージェントで定義されているアプリケーション定義の一覧から，削除したいアプリケーション定義の定義名を確認できます。

jpcprocdef list コマンドは，PFM - Web Console がインストールされているホストにログインして実行します。jpcprocdef list コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcprocdef list -agent サービス ID
```

(c) アラームテーブルをアンバインドする

jpctool alarm unbind コマンドを実行して，監視エージェントにバインドされているアラームテーブルをアンバインドして，監視を停止します。

jpctool alarm unbind コマンドは，PFM - Manager がインストールされているホストにログインして実行します。jpctool alarm unbind コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

すでに，アラームテーブルをアンバインドしている場合は，監視対象の設定を削除するたびにアンバインドする必要はありません。

PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00 のアラームテーブルをアンバインドする場合の jpctool alarm unbind コマンドの指定例を次に示します。

jpctool alarm unbind -key Windows -table ”PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00” -id サービス ID

(d) アプリケーション定義を削除する

jpcprocdef delete コマンドを実行して，アプリケーション定義を削除します。

jpcprocdef delete コマンドは，PFM - Web Console がインストールされているホストにログインして実行します。

jpcprocdef delete コマンドでは，1 つのエージェントに対してアプリケーション定義を削除できます。複数のエージェントに対してアプリケーション定義を削除する場合は，バッチ処理によって，コマンドを繰り返し実行してください。

jpcprocdef delete コマンドでアプリケーション定義 application5 を削除する指定例を次に示します。

jpcprocdef delete -agent サービス ID -name ”application5”

6.6.7 監視対象の大文字と小文字の区別

監視対象となるプロセス名またはサービス名について，大文字と小文字を区別するかどうかを設定できます。デフォルトでは大文字と小文字が区別されません。

監視対象の大文字と小文字を区別するかどうかは，次の手順で変更します。

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。
2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームの［サービス階層］タブを選択する。
   ［サービス階層］画面が表示されます。
3. サービス階層からホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択する。
   選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。
4. メソッドフレームの［プロパティ］メソッドを選択する。
   ［サービスのプロパティ］画面が表示されます。
5. [Advanced application monitoring] − [Application monitoring setting] ツリーを選択する。
   インフォメーションフレームの下部に，プロパティ情報の入力画面が表示されます。

6. Case Sensitive プロパティの値を変更する。

次のどちらかを選択します。

- Yes：大文字と小文字を区別する
- No：大文字と小文字を区別しない

7. [OK] ボタンをクリックする。

設定が反映されます。

Case Sensitive プロパティの値による動作の違いについて，次の表に例を示します。

表 6-9　Case Sensitive プロパティの値による動作の違い

稼働しているプロセス名	MonitoringXX Condition プロパティの設定値	Case Sensitive プロパティの設定値	プロセス数
ProcessA PROCESSA	ProcessA	Yes	1
		No	2
	PROCESSA	Yes	1
		No	2
	processa	Yes	0
		No	2

（凡例）

Yes：大文字と小文字を区別します。

No：大文字と小文字を区別しません。

ここでは，PFM - Agent ホストで「ProcessA」，「PROCESSA」の 2 種類のプロセスが稼働している環境で，MonitoringXX Condition プロパティおよび Case Sensitive プロパティの設定値による，稼働していると判定されるプロセス数の違いを示しています。

注意

Case Sensitive プロパティの設定は，すべてのアプリケーション定義に影響します。Case Sensitive プロパティの設定を変更した場合，既存のアプリケーション定義を見直してください。

6.6.8　プロセスの稼働・非稼働情報収集時にアラームが発生したときの対応例

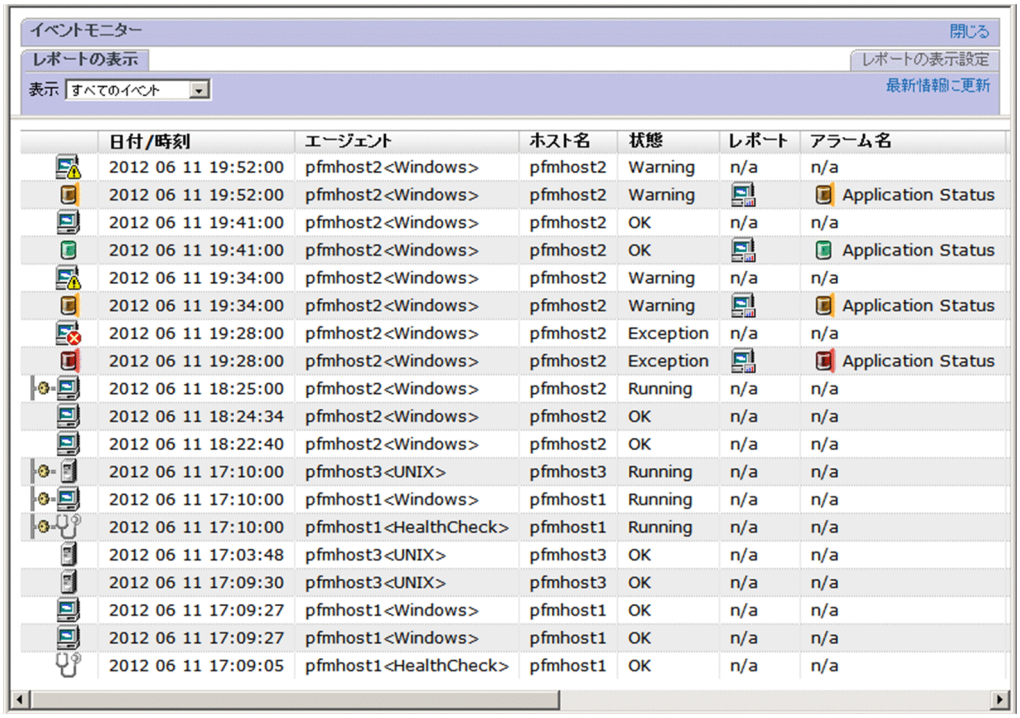
プロセスの稼働・非稼働監視が設定されている場合，アラーム発生時に，警告となったプロセスを特定する手順の例を次に示します。

アラームおよびレポートの詳細については，「7.　監視テンプレート」を参照してください。

この説明では，PFM - Web Console 10-00 の画面を掲載しています。

1. [メイン] 画面のメニューバーフレームの［イベントモニター］メニューを選択する。

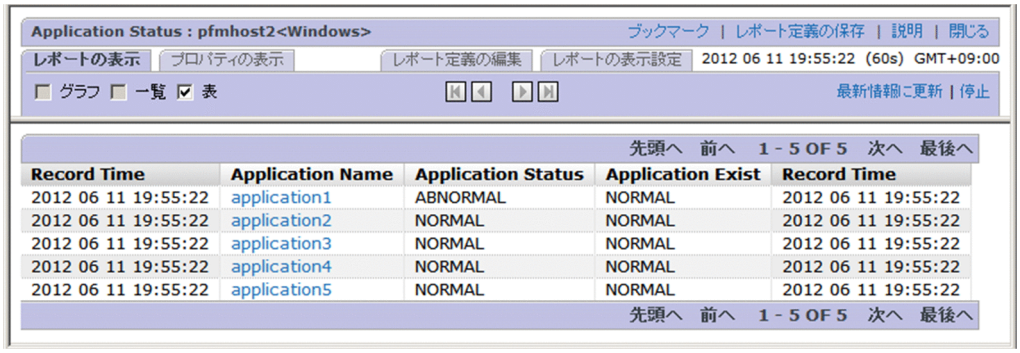
［イベントモニター］画面が表示されます。



	日付/時刻	エージェント	ホスト名	状態	レポート	アラーム名
	2012 06 11 19:52:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	Warning	n/a	n/a
	2012 06 11 19:52:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	Warning		Application Status
	2012 06 11 19:41:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	OK	n/a	n/a
	2012 06 11 19:41:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	OK		Application Status
	2012 06 11 19:34:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	Warning	n/a	n/a
	2012 06 11 19:34:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	Warning		Application Status
	2012 06 11 19:28:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	Exception	n/a	n/a
	2012 06 11 19:28:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	Exception		Application Status
	2012 06 11 18:25:00	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	Running	n/a	n/a
	2012 06 11 18:24:34	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	OK	n/a	n/a
	2012 06 11 18:22:40	pfmhost2<Windows>	pfmhost2	OK	n/a	n/a
	2012 06 11 17:10:00	pfmhost3<UNIX>	pfmhost3	Running	n/a	n/a
	2012 06 11 17:10:00	pfmhost1<Windows>	pfmhost1	Running	n/a	n/a
	2012 06 11 17:10:00	pfmhost1<HealthCheck>	pfmhost1	Running	n/a	n/a
	2012 06 11 17:03:48	pfmhost3<UNIX>	pfmhost3	OK	n/a	n/a
	2012 06 11 17:09:30	pfmhost3<UNIX>	pfmhost3	OK	n/a	n/a
	2012 06 11 17:09:27	pfmhost1<Windows>	pfmhost1	OK	n/a	n/a
	2012 06 11 17:09:27	pfmhost1<Windows>	pfmhost1	OK	n/a	n/a
	2012 06 11 17:09:05	pfmhost1<HealthCheck>	pfmhost1	OK	n/a	n/a

2. 警告が発生しているアラームのレポートアイコンをクリックする。

Application Status レポートが表示されます。



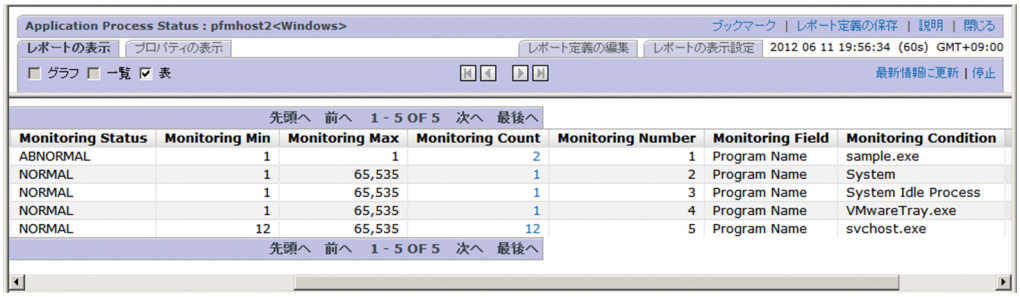
Record Time	Application Name	Application Status	Application Exist	Record Time
2012 06 11 19:55:22	application1	ABNORMAL	NORMAL	2012 06 11 19:55:22
2012 06 11 19:55:22	application2	NORMAL	NORMAL	2012 06 11 19:55:22
2012 06 11 19:55:22	application3	NORMAL	NORMAL	2012 06 11 19:55:22
2012 06 11 19:55:22	application4	NORMAL	NORMAL	2012 06 11 19:55:22
2012 06 11 19:55:22	application5	NORMAL	NORMAL	2012 06 11 19:55:22

3. [Application Status] または［Application Exist］の値が「ABNORMAL」となっている行を確認し，警告が発生しているアプリケーションを特定する。

4. [Application Name] で，警告が発生しているアプリケーションを選択する。

ここでは，「application1」を選択します。

Application Process Status レポートが表示されます。



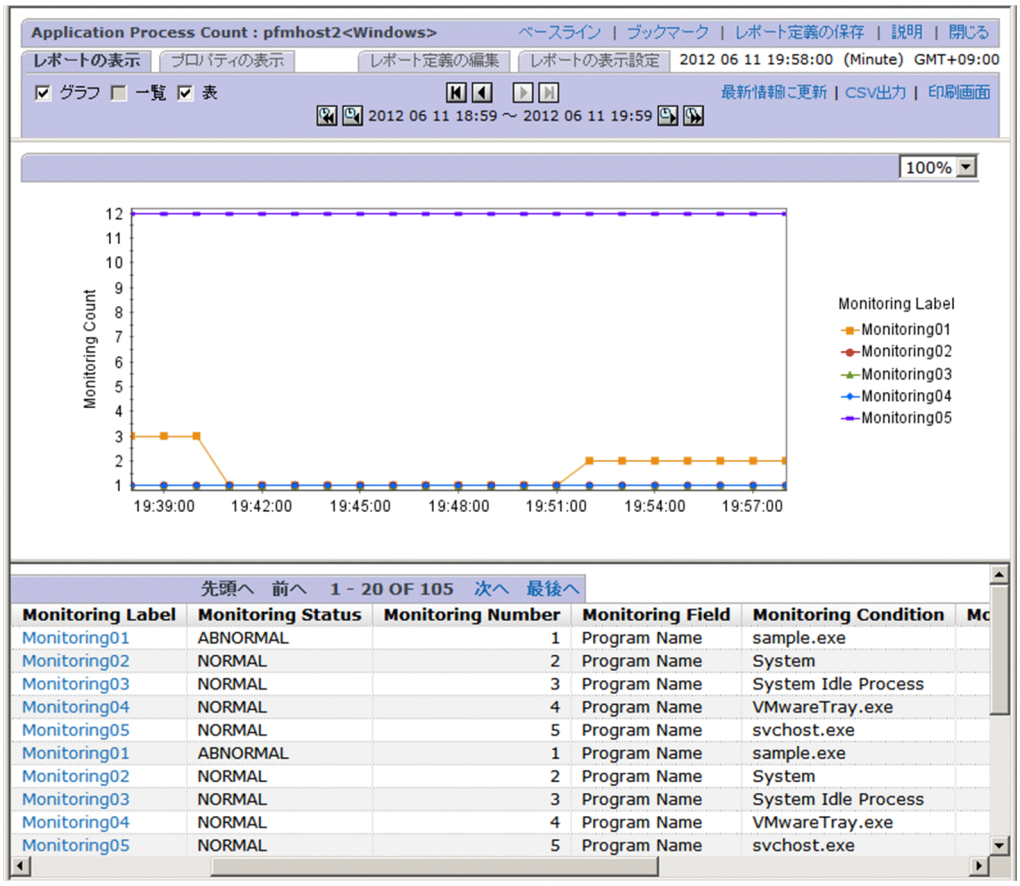
Monitoring Status	Monitoring Min	Monitoring Max	Monitoring Count	Monitoring Number	Monitoring Field	Monitoring Condition
ABNORMAL	1	1	2	1	Program Name	sample.exe
NORMAL	1	65,535	1	2	Program Name	System
NORMAL	1	65,535	1	3	Program Name	System Idle Process
NORMAL	1	65,535	1	4	Program Name	VMwareTray.exe
NORMAL	12	65,535	12	5	Program Name	svchost.exe

5. [Monitoring Status] の値が，「ABNORMAL」となっている行を確認し，警告が発生しているプロセスを特定する。

   ここでは，「sample.exe」で警告が発生していることが特定できます。

6. PD_APPD レコードの履歴データを収集している場合，必要に応じて［Monitoring Count］の値を選択する。

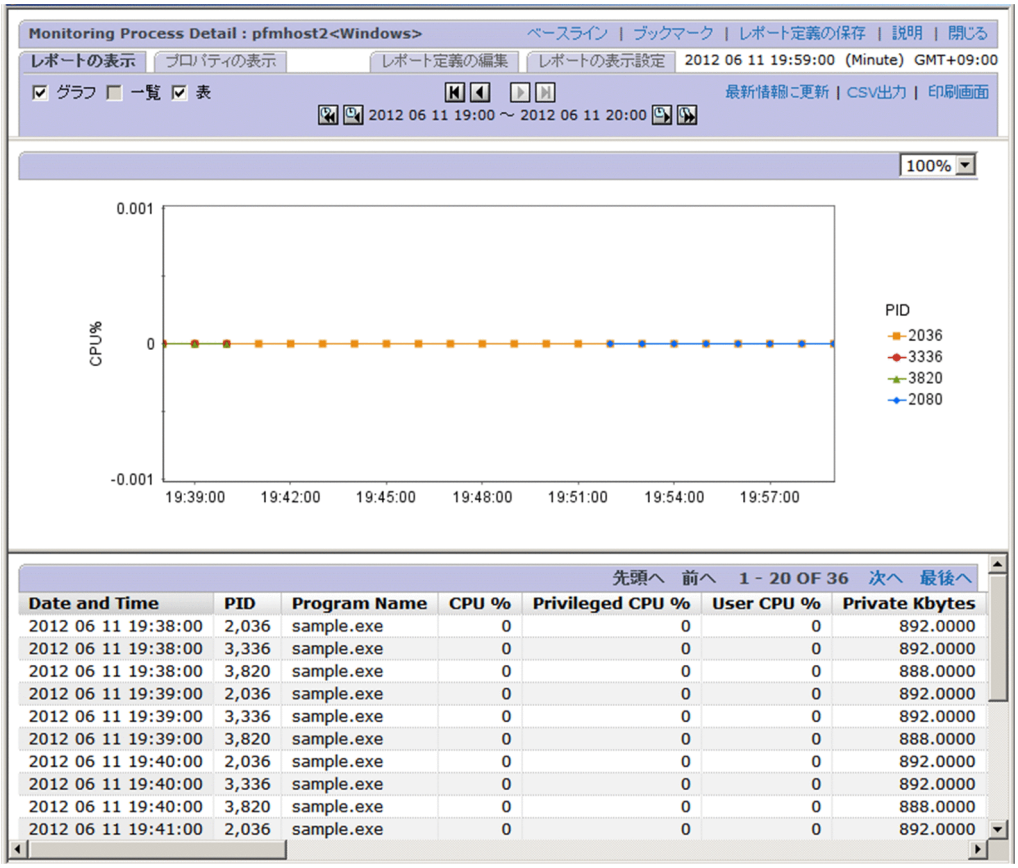
   Application Process Count レポートが表示されます。各プロセスの状態やプロセス数の増減に関する履歴が確認できます。



Monitoring Label	Monitoring Status	Monitoring Number	Monitoring Field	Monitoring Condition	Mc
Monitoring01	ABNORMAL	1	Program Name	sample.exe	
Monitoring02	NORMAL	2	Program Name	System	
Monitoring03	NORMAL	3	Program Name	System Idle Process	
Monitoring04	NORMAL	4	Program Name	VMwareTray.exe	
Monitoring05	NORMAL	5	Program Name	svchost.exe	
Monitoring01	ABNORMAL	1	Program Name	sample.exe	
Monitoring02	NORMAL	2	Program Name	System	
Monitoring03	NORMAL	3	Program Name	System Idle Process	
Monitoring04	NORMAL	4	Program Name	VMwareTray.exe	
Monitoring05	NORMAL	5	Program Name	svchost.exe	

7. PD_APSI レコードの履歴データを収集している場合，必要に応じて［Monitoring Label］の値を選択する。

   Monitoring Process Detail レポートが表示されます。プロセス監視の設定を行っている特定のプロセスについての性能情報が確認できます。



Date and Time	PID	Program Name	CPU %	Privileged CPU %	User CPU %	Private Kbytes
2012 06 11 19:38:00	2,036	sample.exe	0	0	0	892.0000
2012 06 11 19:38:00	3,336	sample.exe	0	0	0	892.0000
2012 06 11 19:38:00	3,820	sample.exe	0	0	0	888.0000
2012 06 11 19:39:00	2,036	sample.exe	0	0	0	892.0000
2012 06 11 19:39:00	3,336	sample.exe	0	0	0	892.0000
2012 06 11 19:39:00	3,820	sample.exe	0	0	0	888.0000
2012 06 11 19:40:00	2,036	sample.exe	0	0	0	892.0000
2012 06 11 19:40:00	3,336	sample.exe	0	0	0	892.0000
2012 06 11 19:40:00	3,820	sample.exe	0	0	0	888.0000
2012 06 11 19:41:00	2,036	sample.exe	0	0	0	892.0000

注意

イベントモニターから Application Status レポート（リアルタイムレポート）を表示するタイミング，または Application Status レポートから Application Process Status レポート（リアルタイムレポート）を表示するタイミングで，アラームの状態が正常に戻った場合，リアルタイムレポートでは警告となったプロセスやサービスを特定できません。この場合は，イベントモニターまたは Application Process Count レポート（履歴レポート）を参照し，アラーム発生からの状態の遷移を確認してください。

6.7　アプリケーションの稼働・非稼働情報収集に関する設定

アプリケーションの稼働・非稼働情報を収集するためのユーザーレコードの設定，確認，変更，削除方法，およびアラーム運用例について説明します。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前に実装していた既存の機能のことです。プロセスの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前で実装していたアプリケーションの稼働・非稼働情報収集の機能を拡張したものです。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とプロセスの稼働・非稼働情報収集の機能の差異については，「6.6.2　過去のバージョンとの機能差異」を参照してください。

6.7.1　アプリケーションの稼働・非稼働情報を収集するためのユーザーレコードの設定

アプリケーションの稼働・非稼働情報を収集するためのユーザーレコードの設定方法を示します。

設定手順として，まずインスタンスを作成し，次にそのインスタンスのプロパティ（監視するアプリケーション名やしきい値）を設定します。

(1)　インスタンスを作成する

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。

2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームで［サービス階層］タブを選択する。
   ［サービス階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームから「Machines」フォルダの下位の階層を展開する。
   Performance Management のサービスがインストールされているホストの名前が付いたフォルダが表示されます。また，ホスト名が付いたフォルダを展開すると，そのホストにインストールされているサービスが表示されます。
   各サービスの名前は，サービス ID で表示されます。サービス ID の詳細については「付録 B　識別子一覧」，およびマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録の，サービスの命名規則について説明している個所を参照してください。
   サービス ID の形式は，プロダクト名表示機能が有効か無効かによって異なります。プロダクト名表示機能の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

4. PFM - Agent ホストのフォルダの下位にある階層を展開し，Agent Collector サービスを選択する。
   ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択します。選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

5. メソッドフレームの［プロパティ］メソッドを選択する。

［サービスのプロパティ］画面が表示されます。

6. ［ADDITION OR DELETION A SETTING］ツリーを選択する。

7. インフォメーションフレームの下部の［ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING］に任意のインスタンス名を入力し，［OK］ボタンをクリックする。

［サービスのプロパティ］画面の［Application monitoring setting］ツリーの下位に，インスタンス名のツリーが生成されます。

重要

- ［ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING］に入力するインスタンス名は，ユーザーで任意に指定できます。ここで指定したインスタンス名は，PD_APP レコードの「Application Name」フィールドに格納され，アプリケーションを特定するための識別子として利用します。
- ［ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING］に指定できる文字は，次の文字を除く半角英数字および半角記号です。1～63 バイトの範囲で指定できます。

  タブ文字（¥t） ¥ : ; , * ? ” ’ <> |
- 設定できるインスタンスの数は，64 個までです。

(2) インスタンスのプロパティを設定する

1. 上記手順のあと，再び［サービスのプロパティ］画面を表示し，［Application monitoring setting］ツリーの下位に生成されたインスタンス名のツリーを選択する。

インフォメーションフレームの下部に，プロパティ情報の入力画面が表示されます。

2. プロパティを設定する。

プロセスの種別，プロセス名，プロセス数のしきい値の下限値と上限値を設定します。複数のプロセス情報を設定できます。プロパティを次の表に示します。

表 6-10 監視フィールドのプロパティ

設定項目	パラメーター名	設定内容	対応する PD_APP レコードのフィールド名
プロセスの種別	ProcessXX Kind	「Command Line」か「Service Name」のどちらかを選択します。なお，「None」を選択すると評価をしません。 •「Command Line」を選択すると，PD レコードの Program フィールドの値を使用して評価します。	ProcessXX Kind

設定項目	パラメーター名	設定内容	対応する PD_APP レコードのフィールド名
プロセスの種別	ProcessXX Kind	• 「Service Name」を選択すると，PD_SVC レコードの Service Name フィールドの値を使用して評価します。	ProcessXX Kind
プロセス名	ProcessXX Name	プロセス名を 127 バイト以内で入力します。	ProcessXX Name
プロセス数のしきい値の上限値と下限値	ProcessXX Range	プロセス数のしきい値の下限値と上限値を「1-2」のようにハイフン（-）でつないで入力します。 ハイフンを使用しないで値を 1 つだけ指定すると，下限値と上限値に同じ値を設定できます。例えば，「10」を指定すると，「10-10」が設定されます。 設定できる値は 0～65535 です。	ProcessXX Range

（凡例）

XX：01～15 までの数値が入る。

重要

- 「ProcessXX Name」プロパティに指定した値を使用して，アプリケーションの稼働・非稼働を評価します。ただし，PFM - Web Console で PD_APP レコードの「ProcessXX Name」フィールドをレポート表示すると，先頭から 31 バイトまでしか表示されません。
- 先頭から 31 バイトまでが同じ名称のプロセスが複数存在する場合，それぞれのプロセスを監視するために，インスタンスをプロセスごとに分けて設定し，その評価結果（PD_APP レコードの「ProcessXX Name」フィールドの値）でアラーム通知するように設定します。しかし，PD_APP レコードの「ProcessXX Name」フィールドの値がすべてのインスタンスで同じ名称となるため，正しくアラーム通知できません。このため，PD_APP レコードの「ProcessXX Name」フィールドの値を使用しないで「ProcessXX Status」フィールドの値を使用してアラーム通知するように設定してください。設定例については，「6.7.4(4)　先頭から 31 バイトまでが同じ名称のプロセスが複数存在する場合に，ある特定のプロセスに対して起動しているか監視する場合」を参照してください。
- 「ProcessXX Name」プロパティに指定できる文字は，次の文字を除く半角英数字および半角記号です。

  タブ文字（¥t） ¥ : ; , ” ’ <> |
- 「ProcessXX Name」プロパティに指定できる文字のうち，ワイルドカード文字として「*」および「?」を利用できます。「*」は 0 個以上の任意の文字，「?」は任意の 1 文字を意味します。

- 「ProcessXX Name」プロパティに Windows のプログラムの拡張子(.exe など)を指定しないでください。

3. [OK] ボタンをクリックする。
   設定内容が有効になります。

6.7.2 アプリケーションの稼働・非稼働情報として収集したユーザーレコードの確認または変更

アプリケーションの稼働・非稼働情報を収集するためのユーザーレコードの設定内容を確認または変更する方法を次に示します。

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   [メイン] 画面が表示されます。

2. [メイン] 画面のナビゲーションフレームで [サービス階層] タブを選択する。
   [サービス階層] 画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームから「Machines」フォルダの下位の階層を展開する。
   Performance Management のサービスがインストールされているホストの名前が付いたフォルダが表示されます。また，ホスト名が付いたフォルダを展開すると，そのホストにインストールされているサービスが表示されます。
   各サービスの名前は，サービス ID で表示されます。サービス ID の詳細については「付録 B 識別子一覧」，およびマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録の，サービスの命名規則について説明している個所を参照してください。
   サービス ID の形式は，プロダクト名表示機能が有効か無効かによって異なります。プロダクト名表示機能の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

4. PFM - Agent ホストのフォルダの下位にある階層を展開し，Agent Collector サービスを選択する。
   ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択します。選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

5. メソッドフレームの [プロパティ] メソッドを選択する。
   [サービスのプロパティ] 画面が表示されます。

6. [Application monitoring setting] ツリーを展開し，確認したいインスタンス名のツリーを選択する。
   プロパティが表示されます。

7. 内容を確認し，[OK] ボタンをクリックする。

6.7.3　アプリケーションの稼働・非稼働情報として収集したユーザーレコードの設定の削除

アプリケーションの稼働・非稼働情報を収集するためのユーザーレコードの設定内容を削除する方法を次に示します。

1. 監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインする。
   ［メイン］画面が表示されます。

2. ［メイン］画面のナビゲーションフレームで［サービス階層］タブを選択する。
   ［サービス階層］画面が表示されます。

3. ナビゲーションフレームから「Machines」フォルダの下位の階層を展開する。
   Performance Management のサービスがインストールされているホストの名前が付いたフォルダが表示されます。また，ホスト名が付いたフォルダを展開すると，そのホストにインストールされているサービスが表示されます。
   各サービスの名前は，サービス ID で表示されます。サービス ID の詳細については「付録 B　識別子一覧」，およびマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録の，サービスの命名規則について説明している個所を参照してください。
   サービス ID の形式は，プロダクト名表示機能が有効か無効かによって異なります。プロダクト名表示機能の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

4. PFM - Agent ホストのフォルダの下位にある階層を展開し，Agent Collector サービスを選択する。
   ホスト名<Windows>（Agent Collector サービス）を選択します。選択した Agent Collector サービスにチェックマークが表示されます。

5. メソッドフレームの［プロパティ］メソッドを選択する。
   ［サービスのプロパティ］画面が表示されます。

6. ［ADDITION OR DELETION A SETTING］ツリーを選択する。

7. インフォメーションフレーム下部の「DELETE AN APPLICATION MONITORING SETTING」から，削除したいインスタンス名を選択し，［OK］ボタンをクリックする。
   設定内容が削除されます。

6.7.4　アプリケーションの稼働・非稼働情報収集時のアラーム運用例

アプリケーションの稼働・非稼働情報を収集する機能を用いたアラームの運用例について説明します。

(1) 特定のプロセス起動状況について監視する場合

ここでは，監視対象のうち，特定のプロセスが起動しているか監視する場合の設定内容について説明します。

次に示すプロセスが通常は 1 つだけ起動している環境で，プロセスが複数（2 つ以上）起動するかまたは停止してしまった場合に，異常アラームを通知するように設定します。

表 6-11　特定のプロセス起動の例

プログラム名	プロセス名
GyoumuProcess.exe	GyoumuProcess

1. [ADDITION OR DELETION A SETTING] ツリーの［ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING］に設定するインスタンス名を次に示します。

   GyoumuProcess Monitor

2. [Application monitoring setting] ツリーの下位に生成された「GyoumuProcess Monitor」のプロパティで設定する内容を次に示します。

```
Process01 Kind：「Command Line」を選択する。
Process01 Name：「GyoumuProcess」を入力する(.exeの拡張子は指定しない)。
Process01 Range：「1-1」を入力する。
```

   上記の設定の結果，プロセスが起動していると，PD_APP レコードの「Process01 Count」，「Process01 Status」，および「Application Status」フィールドの値はそれぞれ次のようにレポート表示されます。

表 6-12　PD_APP レコードの各フィールド値の結果

フィールド名	値
Process01 Count	1※1
Process01 Status	NORMAL※2
Application Status	NORMAL※2

注※1

稼働中の該当プロセス数を示します。

注※2

問題がないことを示します。

3. アラームに設定する内容を次に示します。

```
レコード：「Application Summary(PD_APP)」を選択する。
監視フィールド：「Application Name」を選択する。
条件：「=」を選択する。
異常値：「GyoumuProcess Monitor」を入力する。
警告値：「GyoumuProcess Monitor」を入力する。
```

上記内容を設定し［追加］ボタンをクリックしたあと，次の内容を追加設定します。

```
レコード：「Application Summary(PD_APP)」を選択する。
監視フィールド：「Application Status」を選択する。
条件：「<>」を選択する。
異常値：「NORMAL」を入力する。
警告値：「NORMAL」を入力する。
```

アラーム条件式は AND で結合されます。インスタンスを特定しないで「Application Status」の結果だけを監視する場合には，「Application Status」<>「NORMAL」だけを指定してください。

(2) 特定のサービス起動状況について監視する場合

ここでは，監視対象のうち，特定のサービスアプリケーションが起動しているか監視する場合の設定内容について説明します。

次に示すサービスアプリケーションが停止してしまった場合に，異常アラームを通知するように設定します。

表 6-13 特定のサービス起動の例

表示名	サービス名
Windows Audio	AudioSrv

1. [ADDITION OR DELETION A SETTING]ツリーの［ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING］に設定するインスタンス名を次に示します。

   AudioSrv Monitor

2. [Application monitoring setting]ツリーの下位に生成された「AudioSrv Monitor」のプロパティで設定する内容を次に示します。

   ```
   Process01 Kind：「Service Name」を選択する。
   Process01 Name：「AudioSrv」を入力する(サービス名を入力する)。
   Process01 Range：「1-1」を入力する。
   ```

   上記の設定の結果，サービスが起動していると，PD_APP レコードの「Process01 Count」，「Process01 Status」，および「Application Status」フィールドの値はそれぞれ次のようにレポート表示されます。

表 6-14 PD_APP レコードの各フィールド値の結果

フィールド名	値
Process01 Count	1※1
Process01 Status	NORMAL※2
Application Status	NORMAL※2

注※1

稼働中の該当プロセス数を示します。

注※2

問題がないことを示します。

3. アラームに設定する内容を次に示します。

```
レコード：「Application Summary(PD_APP)」を選択する。
監視フィールド：「Application Name」を選択する。
条件：「=」を選択する。
異常値：「AudioSrv Monitor」を入力する（手順1で設定したインスタンス名）。
警告値：「AudioSrv Monitor」を入力する（手順1で設定したインスタンス名）。
```

上記内容を設定し［追加］ボタンをクリックしたあと，次の内容を追加設定します。

```
レコード：「Application Summary(PD_APP)」を選択する。
監視フィールド：「Application Status」を選択する。
条件：「<>」を選択する。
異常値：「NORMAL」を入力する。
警告値：「NORMAL」を入力する。
```

アラーム条件式は AND で結合されます。インスタンスを特定しないで「Application Status」の結果だけを監視する場合には，「Application Status」<>「NORMAL」だけを指定してください。

(3) 複数のプロセスがすべて起動しているかどうか監視する場合

ここでは，監視対象のプロセスがすべて起動しているか監視する場合の設定内容について説明します。

次に示す 5 つのプロセスが，すべて起動しているときはアラームを通知しないようにし，1 つでも停止しているときは異常アラームを通知する手順について説明します。

表 6-15　5 つのプロセス起動の例

プログラム名	プロセス名
GyoumuProcess1.exe	GyoumuProcess1
GyoumuProcess2.exe	GyoumuProcess2
GyoumuProcess3.exe	GyoumuProcess3
GyoumuProcess4.exe	GyoumuProcess4
GyoumuProcess5.exe	GyoumuProcess5

1. [ADDITION OR DELETION A SETTING] ツリーの［ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING］に設定するインスタンス名を次に示します。

   GyoumuProcess Monitor

2. [Application monitoring setting] ツリーの下位に生成された「GyoumuProcess Monitor」のプロパティで設定する内容を次に示します。

```
Process01 Kind：「Command Line」を選択する。
Process01 Name：「GyoumuProcess*」を入力する。※
Process01 Range：「1-5」を入力する。
```

注※

通番にワイルドカード文字「*」を使用します。なお，ワイルドカード文字の代わりに，任意の一文字「?」を使用することもできます。

上記の設定の結果，5 つのプロセスがすべて起動していると，PD_APP レコードの「Process01 Count」，「Process01 Status」，および「Application Status」フィールドの値はそれぞれ次のようにレポート表示されます。

表 6-16　PD_APP レコードの各フィールド値の結果

フィールド名	値
Process01 Count	5※1
Process01 Status	NORMAL※2
Application Status	NORMAL※2

注※1

稼働中の該当プロセス数を示します。

注※2

問題がないことを示します。

3. アラームに設定する内容を次に示します。

```
レコード：「Application Summary(PD_APP)」を選択する。
監視フィールド：「Process01 Count」を選択する。
条件：「<」を選択する。
異常値：「5」を入力する。
警告値：「5」を入力する。
```

5 つのプロセスがすべて起動していればアラームを通知しません。プロセスが 1 つでも停止している場合はアラームを通知します。また，アラーム条件式は AND で結合されるため，プロセスの起動数が 1～5 以外の場合に異常アラームを通知させるような設定はできません。

(4)　先頭から 31 バイトまでが同じ名称のプロセスが複数存在する場合に，ある特定のプロセスに対して起動しているか監視する場合

ここでは，監視対象のうち，先頭から 31 バイトまでが同じ名称のプロセスが複数存在している場合に，ある特定のプロセスが起動しているか監視する場合の設定内容について説明します。

次に示す 2 つのプロセスがそれぞれ 1 つずつ起動している場合に，「12345678901234567890123456789012A」プロセスが複数（2 つ以上）起動されたとき，または停止してしまったときに，異常アラームを通知するように設定します。

表 6-17　先頭から 31 バイトまでが同じ名称のプロセス起動の例

プログラム名	プロセス名
12345678901234567890123456789012345678901A.exe	1234567890123456789012345678901A
12345678901234567890123456789012345678901B.exe	1234567890123456789012345678901B

1. [ADDITION OR DELETION A SETTING] ツリーの［ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING］に設定するインスタンス名を次に示します。

   Long Name Process Monitor

2. [Application monitoring setting] ツリーの下位に生成された「Long Name Process Monitor」のプロパティで設定する内容を次に示します。

   Process01 Kind：「Command Line」を選択する。
   Process01 Name：「12345678901234567890123456789012345678901A」を入力する。
   Process01 Range：「1-1」を入力する。

   上記の設定の結果，「12345678901234567890123456789012345678901A」プロセスが 1 つだけ起動していると，PD_APP レコードの「Process01 Count」，「Process01 Status」,および「Application Status」フィールドの値はそれぞれ次のようにレポート表示されます。

   表 6-18　PD_APP レコードの各フィールド値の結果

フィールド名	値
Process01 Count	1※1
Process01 Status	NORMAL※2
Application Status	NORMAL※2

   注※1

   稼働中の該当プロセス数を示します。

   注※2

   問題がないことを示します。

3. アラームに設定する内容を次に示します。

   レコード：「Application Summary(PD_APP)」を選択する。
   監視フィールド：「Application Name」を選択する。
   条件：「=」を選択する。
   異常値：「Long Name Process Monitor」を入力する（手順1で設定したインスタンス名）。
   警告値：「Long Name Process Monitor」を入力する（手順1で設定したインスタンス名）。

   上記内容を設定し，［追加］ボタンを押したあと，次の内容を追加設定します。

   レコード：「Application Summary(PD_APP)」を選択する。
   監視フィールド：「Application Status」を選択する。
   条件：「<>」を選択する。
   異常値：「NORMAL」を入力する。
   警告値：「NORMAL」を入力する。

上記の監視に加えて，これまでの監視方法と別の方法で「12345678901234567890123456789012345678901B」プロセスについても監視する場合は，上記のインスタンス名と異なるインスタンス名を使用し，アラーム設定の「Application Name」フィールドの条件にそのインスタンス名を追加してください。

6.8　ユーザー独自のパフォーマンスデータの収集に関する設定

ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する機能の概要と，設定方法について説明します。

6.8.1　ユーザー独自のパフォーマンスデータ収集の機能概要

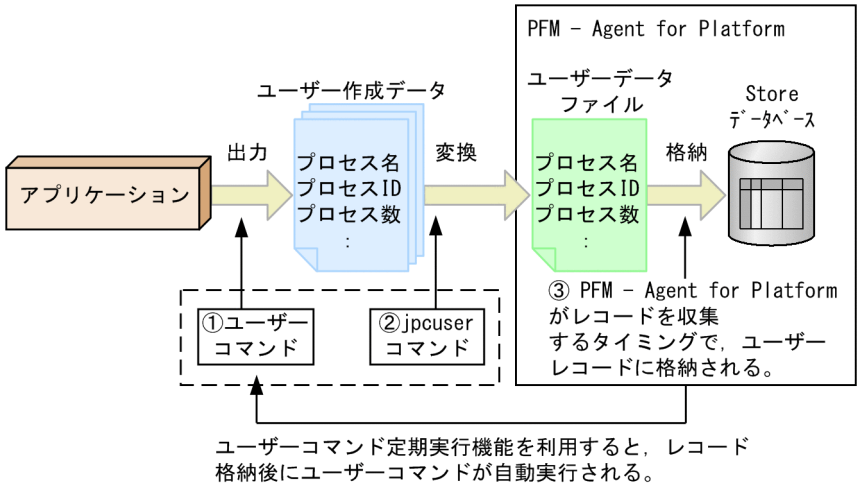
ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する機能およびユーザーコマンド定期実行機能について説明します。

(1)　ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する機能

この機能は，ユーザーがテキストファイルに出力した独自のパフォーマンスデータを，jpcuser コマンドによって，PFM - Agent for Platform が提供するレコード（PD_UPD，PD_UPDB，PI_UPI，PI_UPIB，PI_XUI1～PI_XUI5）に格納できる形式に変換する機能です。この機能を使用してユーザー独自のパフォーマンスデータを収集するためには，あらかじめ，パフォーマンスデータをテキストファイルに出力するためのコマンドを作成する必要があります。

ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する仕組みを，次の図を用いて説明します。

図 6-2　ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する仕組み



図中の番号に従って処理の流れを説明します。

1. ユーザーコマンドを実行して，ユーザー作成データを作成する。

   アプリケーションから，プロセス名，プロセス ID，プロセス数などのパフォーマンスデータを収集し，テキストファイルに出力します。このデータを**ユーザー作成データ**と呼びます。

   ユーザー作成データを作成するには，あらかじめパフォーマンスデータを収集するスクリプトを作成する必要があります。これを**ユーザーコマンド**と呼びます。

2. jpcuser コマンドを実行して，ユーザー作成データを変換する。

jpcuser コマンドを実行して，ユーザー作成データを PFM - Agent for Platform が管理できるレコード形式に変換します。変換されたデータファイルを**ユーザーデータファイル**と呼びます。

3. **PFM - Agent for Platform がレコードを収集するタイミングで，ユーザーデータファイルの内容がユーザーレコードに格納される。**

   PFM - Agent for Platform がユーザーデータファイルのデータを収集するよう，あらかじめ PFM - Web Console で設定する必要があります。

   ユーザーコマンドの実行に失敗したなどの理由でユーザーデータファイルが作成されていない場合，KAVF11508-W のメッセージ※を出力し，該当レコードの収集処理をスキップします。

   注※

   ・ユーザーコマンド定期実行機能を使用して，ユーザーコマンドをレコード収集前に実行する設定で，ユーザーコマンドの起動に失敗，またはユーザーコマンドの実行がタイムアウトまでに終了しなかった場合，このメッセージは出力されません。

   ・ユーザーコマンドの実行の失敗が頻発した場合，このメッセージは同一レコードに対して 1 時間に 1 回だけ出力されます。

定期的にパフォーマンスデータを収集したい場合は，ユーザーコマンド定期実行機能を利用して，ユーザーコマンドとjpcuser コマンドを自動実行するよう設定してください。

> **重要**
>
> jpcuser コマンドの引数に指定するファイル，またはjpcuser コマンドを実行するバッチ，スクリプト内でファイルを出力する場合，**インストール先フォルダ**以外を指定してください。
>
> ユーザーコマンドから jpcuser コマンドを直接実行する場合は，Administrators 権限を持つユーザーからユーザーコマンドを実行してください。

(2) ユーザーコマンド定期実行機能

この機能は，タスクスケジューラーなどのスケジュール機能を使用しないで，PFM - Agent for Platform からユーザーコマンドを一定間隔で実行する機能です。ユーザーコマンドからユーザーデータファイルを作成する仕組みは，「(1) ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する機能」と同じです。

ユーザーコマンド定期実行機能は，ユーザーレコードの Collection Interval の設定に従って実行するため，ユーザーコマンドは，履歴データの収集およびアラームの監視データの収集で実行しますが，リアルタイムデータの収集では実行しません。

また，ユーザーコマンドを実行するタイミングは，レコード収集後（ユーザーデータファイルを読み込んだ後）とレコード収集前（ユーザーデータファイルを読み込む前）のどちらかを選択できます。デフォルトは，レコード収集後を設定します。

ユーザーコマンド定期実行機能の処理の流れを次の図に示します。

図 6-3　ユーザーコマンド定期実行機能の処理の流れ（ユーザーコマンドをレコード収集後に実行する場合）

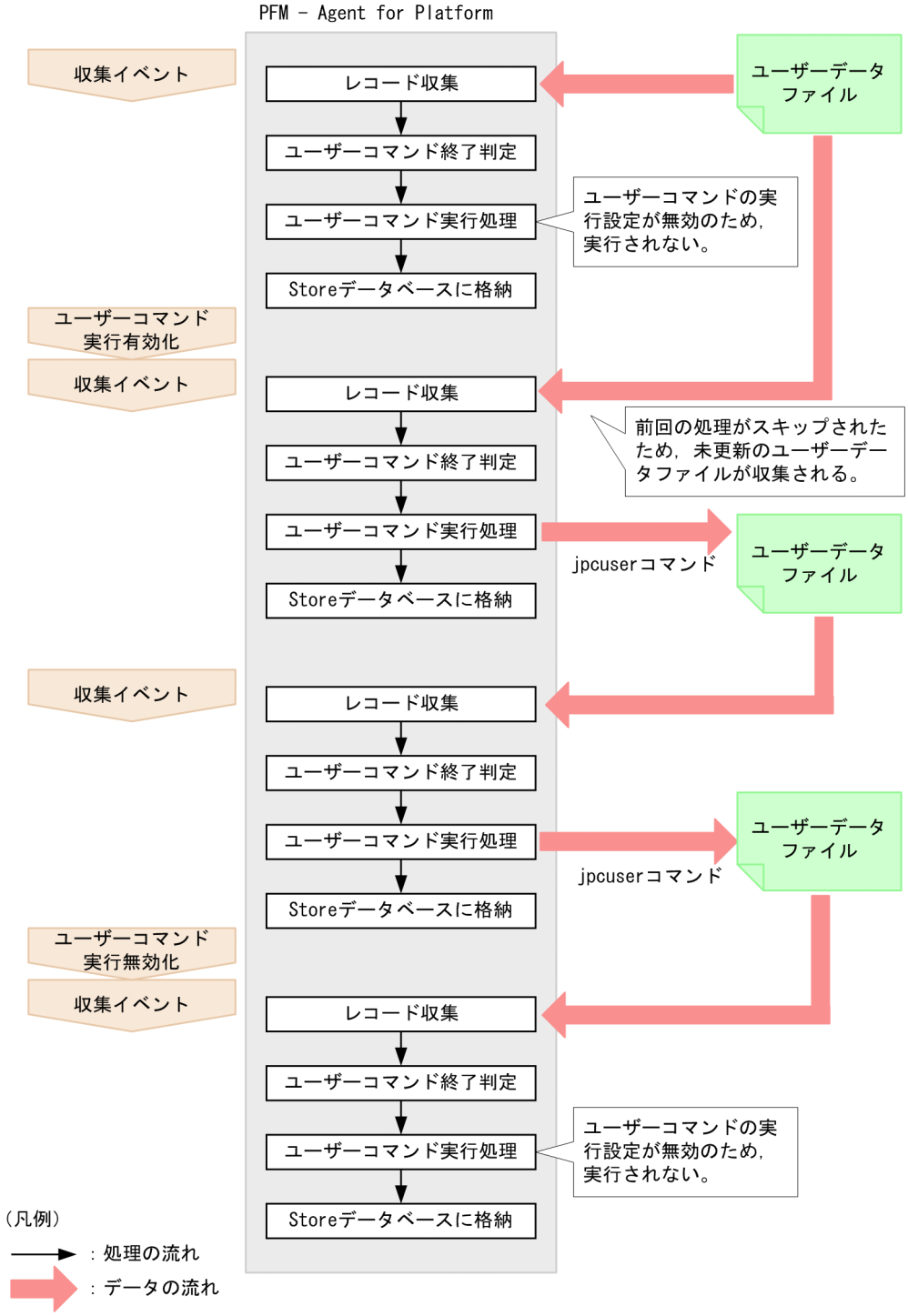
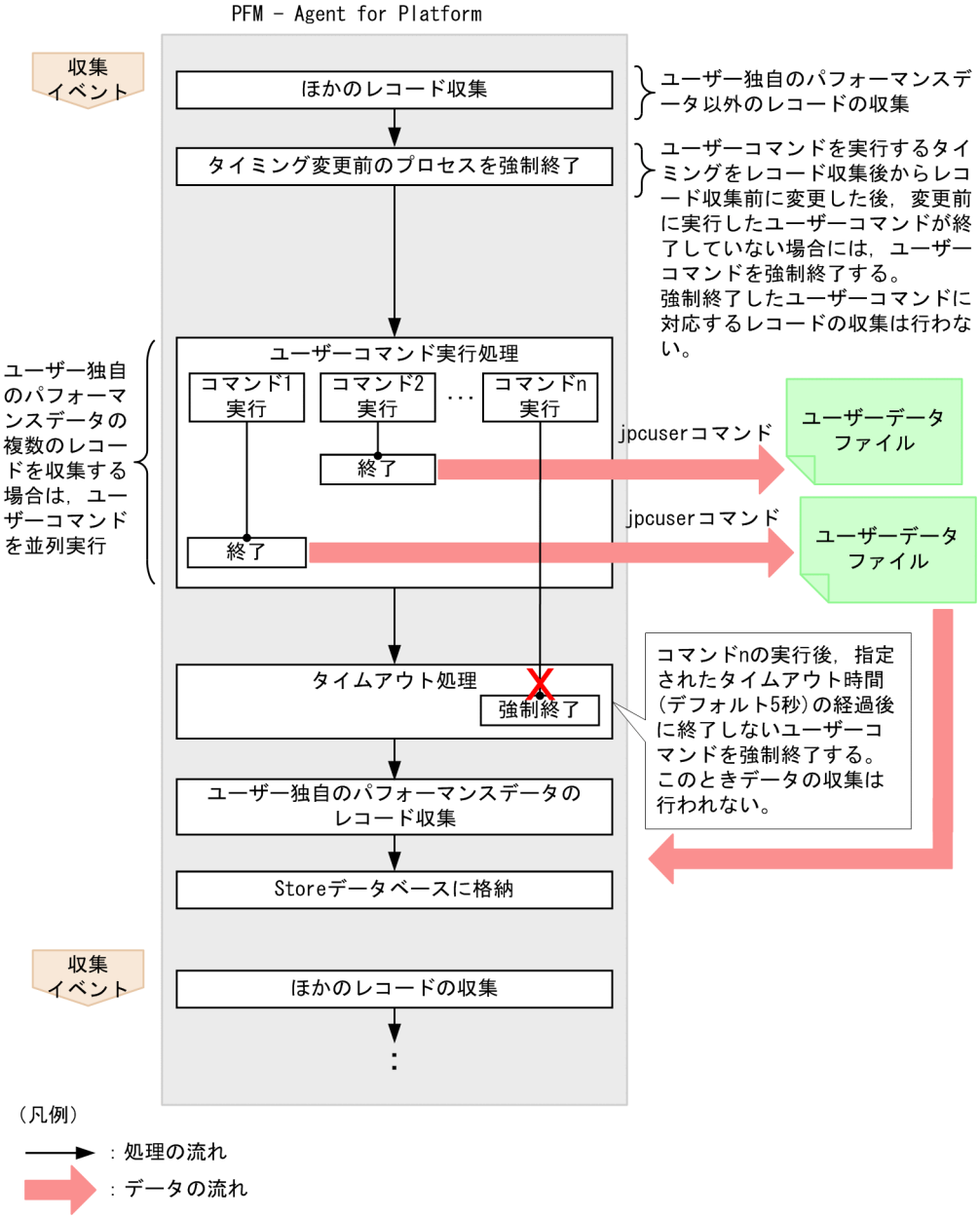


図 6-4　ユーザーコマンド定期実行機能の処理の流れ（ユーザーコマンドをレコード収集前に実行する場合）



ユーザーコマンド定期実行機能は，前回起動したユーザーコマンドが終了しているか判定し，実行中の場合はユーザーコマンドの処理をスキップします。

メモ

PFM - Web Console のバージョンが 08-50 より前の場合，ユーザーコマンド定期実行機能のプロパティを複数の PFM - Agent へ一括配布できません。

(3) ユーザーコマンド定期実行機能に関する注意事項

実行ファイル

ユーザーコマンド定期実行機能で実行できるファイル形式を次に示します。

- EXE 形式：実行形式ファイル
- COM 形式：実行形式（コマンド）ファイル
- BAT 形式：バッチファイル

DEL やDIR などの内部コマンドをジョブとして実行する場合は，バッチファイルを作成し，バッチファイル内のコマンドとして実行してください。

アカウント

ユーザーコマンド定期実行機能を実行する時のアカウントは，システムアカウントです。次のファイルおよびリソースについては，システムアカウントでアクセスできるようにしてください。

- ユーザーコマンド定期実行機能で指定するファイル（ユーザーコマンド）
- ファイル（ユーザーコマンド）から参照または更新するリソース

環境変数

ユーザーコマンド定期実行機能を実行する時に有効な環境変数は，Performance Management プログラムのサービス起動時のシステム環境変数です。ユーザーコマンド定期実行機能を実行する時にはプロファイル情報を読み込みません。

カレントフォルダ

ユーザーコマンド定期実行機能を実行する時のカレントフォルダは，次の PFM - Agent for Platform サービスのフォルダです。

- 物理ホスト環境：**インストール先フォルダ**¥agtt¥agent
- 論理ホスト環境：**環境フォルダ**¥jp1pc¥agtt¥agent

ユーザーコマンドをレコード収集前に実行する場合の注意事項

- ユーザーコマンドがタイムアウトした場合，ユーザーコマンドを強制終了しますが，ユーザーコマンド内から起動したプロセスを強制終了しません。必要に応じて，前回起動したユーザーコマンドがタイムアウトした場合に，ユーザーコマンドから起動したプロセスを終了させる処理を，ユーザーコマンドで実装してください。
- ユーザーコマンドが指定されていない，ユーザーコマンドの起動に失敗した，またはユーザーコマンドがタイムアウトした場合，ユーザーコマンドに対応するレコードの収集処理をスキップします。
- ユーザーコマンドは，ほかのレコードの収集処理が完了したあとで実行されます。このため，収集イベントのタイミングからタイムラグが生じます。
- ユーザーコマンドの実行中も，Agent Collector サービスの状態は Busy になります。

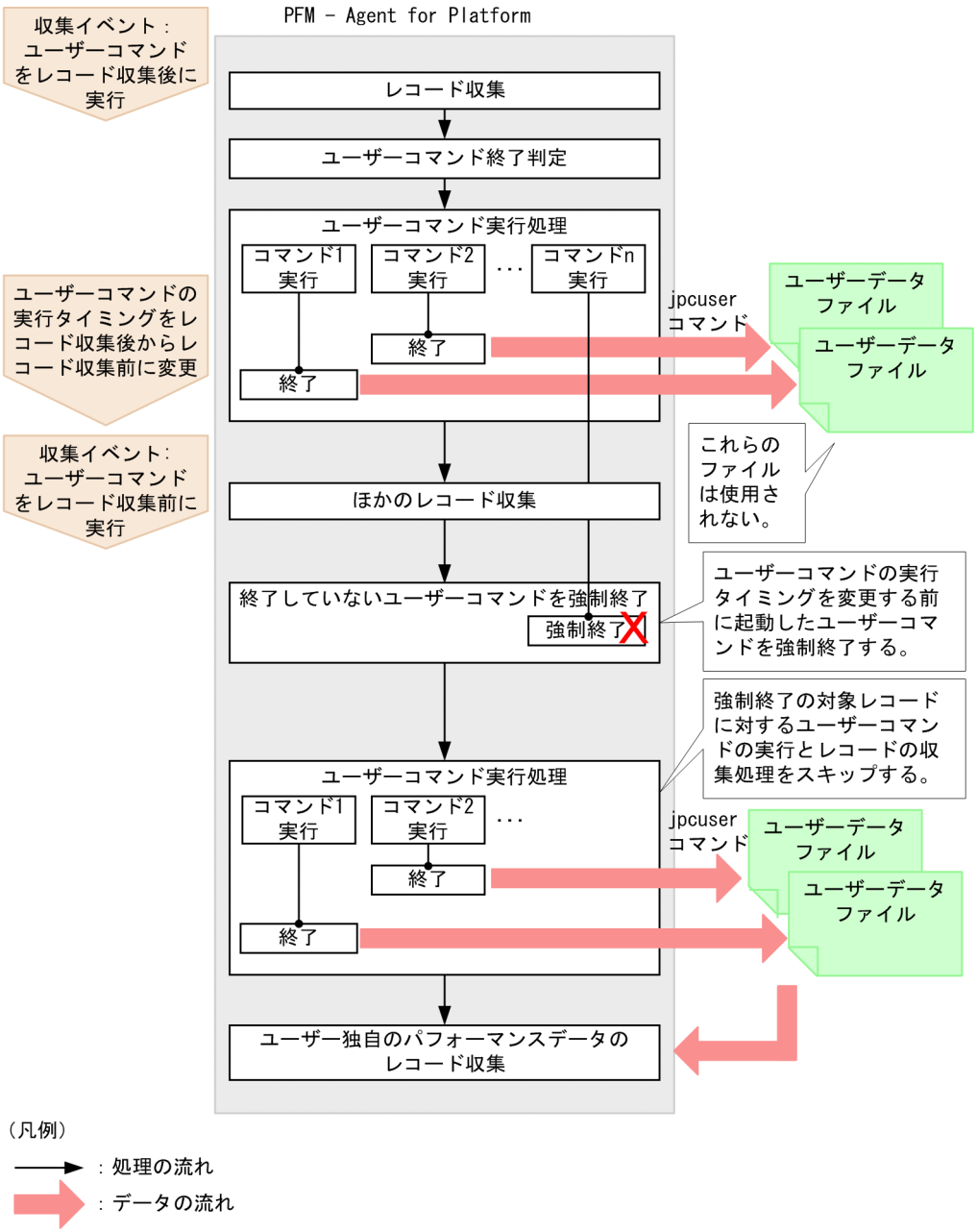
ユーザーコマンドを実行するタイミングを変更する場合の注意事項

- ユーザーコマンドを実行するタイミングを，レコード収集後からレコード収集前に変更した場合，変更前に実行したユーザーコマンドの結果は収集されません。また，変更前に実行したユーザーコ

マンドが，変更直後のレコードの収集開始までに終了していない場合，ユーザーコマンドを強制終了します。

なお，強制終了したユーザーコマンドの対象レコードに対するユーザーコマンドの実行とレコードの収集処理はスキップします（次回の収集のタイミングからユーザーコマンドの実行とレコードの収集処理を行います）。

図 6-5　ユーザーコマンドを実行するタイミングをレコード収集後からレコード収集前に変更した場合の注意事項



その他の注意事項

- Win16 ビットアプリケーションは実行できません。
- Windows の SysWOW64 システムフォルダ配下にあるコマンドをユーザーコマンド定期実行機能に指定する場合は，絶対パスで指定してください。

- ウィンドウやダイアログボックスを表示するプログラムは実行できません。ただし，net send コマンドを実行してダイアログボックスを表示することはできます。これは，net send コマンドがダイアログボックスを表示するのではなく，Windows の Messenger サービスが表示するためです。
- Windows メッセージ機構（DDE）を利用したプログラムは実行できません。
- 対話操作を必要とするプログラムは実行できません。
- 常駐プログラム（終了しないプログラム）は実行できません。
- アプリケーションに関連づいている拡張子を持つプログラムは実行できません。
- ネットワークフォルダ上にあるプログラムは実行できません。
- ディスクの準備ができていないリムーバブルディスク上のプログラムを設定しないでください。
- Windows サービスの起動設定で，デスクトップとの対話を許可する設定をしないでください。
- 実行したプログラムの標準出力や標準エラー出力の内容は取得できません。
- 実行するプログラムからファイル出力を行う場合は，出力先のファイルを絶対パスで指定してください。絶対パスを指定しない場合は，PFM - Agent for Platform サービスのフォルダがカレントフォルダになります。
- 実行するユーザーコマンドのパスに空白を含む場合は，パスを" "で囲んでください。
  （例）
  ”C:¥Program Files (x86)¥userperf¥userperf.bat”

6.8.2 ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集するための設定

ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集するためには，次の手順で設定してください。

1. フィールドに格納する情報を決定する。
2. ユーザーコマンドを作成する。
3. ユーザー独自のパフォーマンスデータを定期的に収集するための設定をする。
4. ユーザーデータファイルを収集する設定をする。

各手順について次に説明します。

(1) フィールドに格納する情報を決定する

ユーザーレコードのフィールドには，キー情報とデータ情報を格納します。それぞれに格納する内容を検討してください。

(a) キー情報に格納する情報

ユーザー独自のパフォーマンスデータを格納するユーザーレコードは，一回の収集で複数行のレコードを記録できる複数インスタンスレコードです。同じユーザーレコード内で複数インスタンスレコードを一意に識別するためには，キー情報を設定する必要があります。jpcuser コマンドに複数のユーザー作成データファイルを同時に指定する場合，同時に指定したすべてのユーザー作成データファイルにわたって，レコードインスタンスを一意に識別するキー情報を設定する必要があります。キー情報の種類を次の表に示します。

表 6-19　キー情報の種類

キー情報の種類	フィールド名	説明
トランザクションタイプ	Trans Type	インスタンスの種類を識別する。
トランザクションキー	Trans Data Key（数値型）	同一トランザクションタイプのインスタンスを識別する。
	Trans String Key（文字列型）	

トランザクションタイプは，複数のパフォーマンスデータを区別する場合に使います。例えば，データベースと Web サーバに関する情報をレコードに格納する場合，トランザクションタイプに「DATABASE」と「WEB」を格納するようにします。これによって，格納された情報が，データベースの情報であるか，Web サーバの情報であるかを区別できます。

トランザクションタイプが同じインスタンスが複数ある場合には，トランザクションキーを用いて区別します。Trans Data Key または Trans String Key を設定しなかったり，同じ値を設定したりして，レコードのインスタンスをユニークに識別できない場合は，最初のインスタンスが採用されます。

(b) データ情報に格納する情報

データ情報として，double 型，long 型，ulong 型の 3 種類の数値データと，長さの異なる 3 種類の文字列データと，時間データを格納できます。格納できる数はユーザーレコードごとに異なります。なお，PI レコードタイプの数値データについては，集約ルールとして，平均，または累積のどちらかを選択できます。

収集するパフォーマンスデータに応じて，どのユーザーレコードを使用するかを選択してください。格納できる情報が多いユーザーレコードの方がメモリーなどを大量に消費するため，必要十分なユーザーレコードを選択してください。

ユーザーレコードごとのフィールド数を次の表に示します。

表 6-20　ユーザーレコードごとのフィールド数

レコードタイプ	ユーザーレコードの種類	フィールド数		
		数値データ	文字列データ	時間データ
PD レコードタイプ	User Data Detail（PD_UPD）	2＊3=6	1+2+4=7	1
	User Data Detail - Extended（PD_UPDB）	5＊3=15	5+5+5=15	1

レコードタイプ	ユーザーレコードの種類	フィールド数		
		数値データ	文字列データ	時間データ
PI レコードタイプ	User Data Interval（PI_UPI）	4＊3=12	1+2+4=7	1
	User Data Interval - Extended（PI_UPIB）	10＊3=30	5+5+5=15	1
	User Data Interval - Expanded n※1（PI_XUIn※1）	60＊1=60※2	1※3+2※4=3	1

注※1

n は 1～5 の数字です。

注※2

すべて double 型です。

注※3

128 バイトの文字列の数です。

注※4

64 バイトの文字列の数です。

ユーザーレコードを選択する際の判断基準を次の表に示します。

表 6-21　ユーザーレコードの選択基準

パフォーマンスデータの累積データを保持するか？	保持するパフォーマンスデータの種類は多いか？	推奨するユーザーレコード
Yes	No	PI_UPI
Yes	Yes	PI_UPIB，PI_XUI1～PI_XUI5
No	No	PD_UPD
No	Yes	PD_UPDB

(2)　ユーザーコマンドを作成する

ユーザーコマンドは，パフォーマンスデータを収集しユーザー作成データを作成するためのスクリプトです。ユーザー作成データのファイル形式に従ってパフォーマンスデータを出力するようにスクリプトを記述してください。

ユーザー作成データのファイル書式については，「6.8.4　ユーザー作成データのファイル形式」を参照してください。

ユーザー作成データは，jpcuser コマンドを実行するときに-file オプションで指定できるパスに格納してください。詳細は，「6.8.3　jpcuser コマンドの形式」の引数の説明を参照してください。

なお，ユーザーコマンドで出力したユーザー作成データが正しいかどうかを確認する場合，jpcuser コマンドを次のように実行してください。

- 物理ホスト環境：

```
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥jpcuser PI_UPI -file ユーザー作成データ -debug 1
```

- 論理ホスト環境：

```
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥jpcuser PI_UPI -file ユーザー作成データ -debug 1 -lhost 論理ホスト名
```

上記コマンドを実行すると，次に示すデバッグログが生成されます。

- 物理ホスト環境：

```
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug¥jpcuser_dbg_01.log
```

- 論理ホスト環境：

```
環境フォルダ¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug¥jpcuser_dbg_01.log
```

デバッグログの内容を確認して，エラーが発生していないことを確認してください。

jpcuser コマンドの詳細については，「6.8.3　jpcuser コマンドの形式」を参照してください。

(3)　ユーザー独自のパフォーマンスデータを定期的に収集するための設定をする

ユーザーコマンド定期実行機能を使って，定期的にユーザー独自のパフォーマンスデータを収集するための設定方法を説明します。

1. PFM - Web Console でユーザーレコードの収集設定を行う。
   ユーザーコマンド定期実行機能の実行間隔は，各ユーザーレコードの Collection Interval の設定に依存します。

2. PFM - Web Console でユーザーコマンド定期実行機能のプロパティを設定する。
   ユーザーコマンド定期実行機能を実行するために，PFM - Web Console で各ユーザーレコードの次のプロパティを設定します※。プロパティの設定方法は，PD_UPD レコード，PD_UPDB レコード，PI_UPI レコード，PI_UPIB レコード，および PI_XUI1 レコード～PI_XUI5 レコードで共通です。

注※

PFM - Web Console で定期的にユーザー独自のパフォーマンスデータを収集するための設定をする場合，物理ホスト運用時と論理ホスト運用時で選択するサービスが次のように異なることに注意してください。

- 物理ホスト環境：Windows<**物理ホスト名**> または TA1 **物理ホスト名**
- 論理ホスト環境：Windows<**論理ホスト名**> または TA1 **論理ホスト名**

図 6-6　ユーザーコマンド定期実行機能のプロパティ

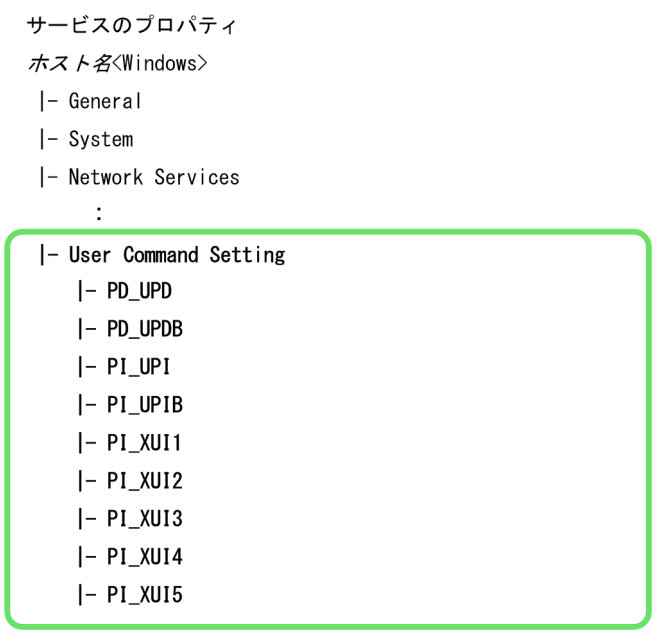


表 6-22　ユーザーレコードのプロパティ設定

プロパティ	値	説明	デフォルト値
User Command Setting - User Command Execution Timing	After/Before	ユーザーコマンド定期実行機能でユーザーコマンドを実行するタイミングを指定する。 • After：レコード収集後にユーザーコマンドを実行する • Before：レコード収集前にユーザーコマンドを実行する	After
User Command Setting - User Command Timeout	1～86,400 の整数	ユーザーコマンド定期実行機能で「User Command Execution Timing」プロパティに「Before」を選択した場合に，ユーザーコマンドの実行を打ち切る時間（秒）※を指定する。 注※ ユーザーコマンドの実行を打ち切る時間は，ほかのレコード収集のタイミングに影響がない範囲で指定する必要があります。	5
User Command Setting - **レコード名** - Execute	Yes/No	ユーザーコマンド定期実行機能を実行するかどうか指定する。 • Yes：実行する • No：実行しない	No
User Command Setting - **レコード名** - UserCommand	絶対パス	ユーザーコマンドの絶対パスを指定する。絶対パスに指定できる文字列の最大長は 255 バイト。指定できる文字は，次の文字を除く，半角英数字および半角記号。 | < >	空白

注 1　「Execute」プロパティが「Yes」，「UserCommand」プロパティが空白の場合，KAVF11318-W のメッセージが出力されユーザーコマンドは実行されません。

注２　指定されたユーザーコマンドが存在しない場合，またはユーザーコマンドの実行権限がない場合は，KAVF11007-W のメッセージが出力されます。

注３　論理ホスト運用の場合，「UserCommand」プロパティで共有ディスク上に配置したユーザーコマンドのパスを指定できます。ユーザーコマンドを共有ディスク上に配置しない場合は，実行系ノードと待機系ノードの両方で，同じパスに配置する必要があります。

注４　「User Command Execution Timing」プロパティが「After」の場合，実行したユーザーコマンドが次回の収集タイミングまでに終了しないときは，次回の収集タイミングでは未更新のユーザーデータファイルを使用してレコードを収集します。また，前回のユーザーコマンドが終了していないため，ユーザーコマンドを実行しません。

メモ

Windows のタスクスケジューラーを使って，定期的にユーザー独自のパフォーマンスデータを収集することもできます。タスクスケジューラーは，バッチファイルやプログラムなどを指定した時刻と間隔で自動実行できる Windows の機能です。ユーザーコマンド，および`jpcuser` コマンドを続けて実行するバッチファイルを作成し，タスクスケジューラーでそのバッチファイルを定期的に実行するように設定してください。

(4)　ユーザーデータファイルを収集する設定をする

ユーザーデータファイルとは，`jpcuser` コマンドによって，ユーザー作成データを PFM - Agent for Platform が管理できるレコード形式に変換したデータファイルのことです。このユーザーデータファイルのデータは，PFM - Agent for Platform がレコードを収集するタイミングで，ユーザーレコードに格納されます。PFM - Agent for Platform がユーザーレコードを収集するように，PFM - Web Console で設定してください。

レコードの収集方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

(5)　ユーザー独自のパフォーマンスデータの収集例（物理ホスト環境）

次の表に示す形式でプロセス情報を PI_UPI レコードに収集する例を示します。

表 6-23　収集するパフォーマンスデータの例

オプション	説明	対応するフィールド名	値
`tt`	トランザクションタイプ	Trans Type	PROCESS
`ki`	トランザクションキー(数値型)	Trans Data Key	プロセス ID
`sm`	32 バイトの長さの文字列	User String(32)	プロセス名
`u`	符号なし long 型	User Unsigned Long 1	スレッド数

(6) ユーザーコマンドの例（物理ホスト環境）

Windows からプロセスの情報を取得し，ユーザー作成データを出力するユーザーコマンド（userproc1.vbs，userproc2.vbs）の例を次に示します。

userproc1.vbs の例

```
'ヘッダー出力
WScript.Echo "Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)"
WScript.Echo "FormVer=0001"
'オプションヘッダー出力
WScript.Echo "tt ki sm u"
'プロセス一覧を取得し，その内容を出力：注)空白を含む文字列は，Chr(34)で囲む。
for each Process in GetObject("winmgmts:").InstancesOf("win32_process")
  WScript.Echo "Process", Process.ProcessId, Chr(34) & Process.Name & Chr(34),
Process.ThreadCount
next
```

userproc2.vbs の例

```
'ヘッダー出力
WScript.Echo "Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)"
WScript.Echo "FormVer=0001"
'オプションヘッダー出力
WScript.Echo "tt u"
'物理メモリーの合計を取得し，その内容を出力
for each Memory in GetObject("winmgmts:").InstancesOf("Win32_OperatingSystem")
  WScript.Echo "TotalPhysicalMemory", Memory.TotalVisibleMemorySize
next
```

上記ユーザーコマンドを実行したときのユーザー作成データを次に示します。

userproc1.vbs によって出力されるユーザー作成データの例

```
Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)
FormVer=0001
tt ki ks u
Process 0 "System Idle Process" 1
Process 8 "System" 41
Process 172 "SMSS.EXE" 6
Process 200 "CSRSS.EXE" 12
Process 196 "WINLOGON.EXE" 19
Process 248 "SERVICES.EXE" 41
```

userproc2.vbs によって出力されるユーザー作成データの例

```
Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)
FormVer=0001
tt u
TotalPhysicalMemory 1048052
```

メモ

- 利用ポート情報の収集例については，「3.1.8　利用ポート情報の収集例」を参照してください。
- PFM 製品が導入されていない複数のホストからのパフォーマンスデータの収集例については，「3.1.9　PFM 製品が導入されていない複数のホストからのパフォーマンスデータの収集例」を参照してください。

(7)　定期的に収集するためのバッチファイルの例（物理ホスト環境）

ユーザーコマンド定期実行機能を使って定期的に実行するためのバッチファイル（userperf.bat）の例を次に示します。

```
REM フォルダの移動
cd C:¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser
REM ユーザー作成データの生成
cscript //nologo userproc1.vbs > UPI1.txt
cscript //nologo userproc2.vbs > UPI2.txt
REM jpcuserコマンドによってユーザー作成データをレコード形式に変換
jpcuser PI_UPI -file UPI1.txt -file UPI2.txt※
```

注※

-debug 2 を指定すると，次のフォルダにデバッグログが出力されます。

インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug¥

なお，バッチファイル（userperf.bat）と VB スクリプトは次の場所に格納してください。

```
C:¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser
```

メモ

このバッチファイルを Windows のタスクスケジューラーを使って，定期的に実行することもできます。

(8)　ユーザー独自のパフォーマンスデータの収集例（論理ホスト環境）

プロセス情報を PI_UPI レコードに収集するときの例を次の表に示します。論理ホスト環境の場合は，ユーザーコマンドを実行しているホスト名の情報を含めると，どのノードで実行しているかがわかりやすくなります。

表 6-24　収集するパフォーマンスデータの例

オプション	説明	対応するフィールド名	値
tt	トランザクションタイプ	Trans Type	PROCESS
ki	トランザクションキー（数値型）	Trans Data Key	プロセス ID
sm	32 バイトの文字列	User String 5	プロセス名
u	符号なし long 型	User Unsigned Long 1	スレッド数
sm	32 バイトの文字列	User String 6	ホスト名

(9)　ユーザーコマンドの例（論理ホスト環境）

Windows からプロセスの情報を取得し，ユーザー作成データを出力するユーザーコマンド（userproc1.vbs）の例を次に示します。

userproc1.vbs の例

```
'変数宣言
Dim objNetwork
Dim hostName
'ネットワークオブジェクトの生成
Set objNetwork = CreateObject("WScript.Network")
'ユーザーコマンドを実行しているホスト名を取得
hostName = objNetwork.ComputerName
'ヘッダー出力
WScript.Echo "Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)"
WScript.Echo "FormVer=0001"
'オプションヘッダー出力
WScript.Echo "tt ki sm u sm"
'プロセス一覧を取得し，その内容を出力：注)空白を含む文字列は，Chr(34)で囲む。
'末尾のフィールドにホスト名を含める
for each Process in GetObject("winmgmts:").InstancesOf("win32_process")
  WScript.Echo "Process", Process.ProcessId, Chr(34) & Process.Name & Chr(34),
Process.ThreadCount, hostName
next
'ネットワークオブジェクトの解放
Set objNetwork = Nothing
```

userproc1.vbs によって出力されるユーザー作成データの例

```
Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)
FormVer=0001
tt ki sm u sm
Process 0 "System Idle Process" 1 jp1-aop
Process 8 "System" 41 jp1-aop
Process 172 "SMSS.EXE" 6 jp1-aop
Process 200 "CSRSS.EXE" 12 jp1-aop
Process 196 "WINLOGON.EXE" 19 jp1-aop
Process 248 "SERVICES.EXE" 41 jp1-aop
```

メモ

- 利用ポート情報の収集例については，「3.1.8　利用ポート情報の収集例」を参照してください。
- PFM 製品が導入されていない複数のホストからのパフォーマンスデータの収集例については，「3.1.9　PFM 製品が導入されていない複数のホストからのパフォーマンスデータの収集例」を参照してください。

(10)　定期的に収集するためのバッチファイルの例（論理ホスト環境）

ユーザーコマンド定期実行機能を使って定期的に収集するためのバッチファイル（userperf.bat）の例を次に示します。

```
REM フォルダの移動
cd S:¥jp1¥userdata
REM ユーザー作成データの生成
cscript //nologo userproc1.vbs > UPI1.txt
REM jpcuserコマンドによってユーザー作成データをレコード形式に変換
"C:¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥jpcuser" PI_UPI -file UPI1.txt -
lhost jp1-halaop※
```

注※

-debug 2 を指定すると，次のフォルダにデバッグログが出力されます。

環境フォルダ¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug¥

なお，バッチファイル（userperf.bat）と VB スクリプトは次の場所に格納してください。

S:¥jp1¥userdata

メモ

このバッチファイルを Windows のタスクスケジューラーを使って，定期的に実行することもできます。

6.8.3　jpcuser コマンドの形式

jpcuser コマンドの形式について説明します。

形式

```
jpcuser レコード名
        -file ユーザー作成データのファイル名1
        [-file ユーザー作成データのファイル名2]...
        [-debug [0|1|2]]
        [-lhost 論理ホスト名]
```

[　]は，省略できることを示します。|は，複数の項目に対して項目間の区切りを示し，「または」の意味を示します。

機能

ユーザーコマンドによって出力した独自のパフォーマンスデータ（ユーザー作成データ）を，PFM - Agent for Platform が読み取れる形式のデータ（ユーザーデータファイル）に変換するコマンドです。

デバッグログを出力することで，ユーザー作成データの内容が正しいかどうかも確認できます。デバッグログの形式と見方については，「6.8.5　ユーザー作成データの内容が正しいかどうかを確認するためのデバッグログの参照」を参照してください。

論理ホスト環境でこのコマンドを実行する場合は実行系ノードで実行してください。

このコマンド実行時にエラーが発生した場合は，エラーメッセージが次のフォルダに出力されます。

- 物理ホスト環境：**インストール先フォルダ**¥agtt¥agent¥jpcuser¥log¥public¥
- 論理ホスト環境：**環境フォルダ**¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥log¥public¥

実行権限

Administrators 権限を持つユーザー

格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥

引数

コマンドラインの第一引数には**レコード名**を指定してください。-file オプション，-debug オプション，および-lhost オプションは，順不同で指定できます。**レコード名**および-file オプションは必ず指定してください。-debug オプション，および-lhost オプションは省略できます。

レコード名

パフォーマンスデータを格納するユーザーレコード名を指定します。複数の**レコード名**を指定することはできません。

- PD_UPD
- PD_UPDB
- PI_UPI
- PI_UPIB
- PI_XUI1
- PI_XUI2
- PI_XUI3
- PI_XUI4
- PI_XUI5

-file ユーザー作成データのファイル名

ファイル名を 259 バイト以内で指定します。**ファイル名**は複数指定でき，複数のユーザー作成データファイルを 1 つのユーザーデータファイルにまとめることができます。

ファイル名にワイルドカードは指定できません。

ファイル名は，カレントディレクトリ（jpcuser コマンド実行時のディレクトリ）から見た相対パスで指定できます。

ユーザー作成データを複数読み込ませた場合，1 つでも警告が発生すれば戻り値は「警告のある正常終了」，1 つでもエラーが発生すれば戻り値は「異常終了またはエラー発生」になります。

-debug [0|1|2]

ユーザーデータファイル，およびデバッグログを出力するかどうかを値で指定します。このオプションは，ユーザー作成データの内容が正しいかどうかを確認する目的で使用します。このオプションは，一度だけしか設定できません。

-debug 1 を指定した場合は，デバッグだけ行われます。ユーザーレコードを作成したい場合は，-debug 1 以外を指定してください。

デバッグログにエラーが出力された場合は，ユーザーコマンドのスクリプトに誤りがあるおそれがあります。

このオプションを省略した場合，デバッグログは出力されません。

このオプションに指定する値を次の表に示します。

表 6-25　debug オプションに指定する値

値	ユーザーデータファイルの出力	デバッグログの出力
0	○	×
1	×	○
2	○	○
上記以外の値	○	×
指定しない	○	×

（凡例）

○：出力する。

×：出力しない。

なお，ユーザーデータファイルは，jpcuser_XXX を指します。XXX は，レコード形式の UPD，UPDB，UPI，UPIB，または XUIn（n は 1～5 の数字）に相当します。格納フォルダは次のとおりです。

- 物理ホスト環境：**インストール先フォルダ**¥agtt¥agent¥jpcuser¥userdata
- 論理ホスト環境：**環境フォルダ**¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥userdata

デバッグログは，jpcuser_dbg_XX.log を指します。XX は，作成された順番を表します。格納フォルダは次のとおりです。

- 物理ホスト環境：**インストール先フォルダ**¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug
- 論理ホスト環境：**環境フォルダ**¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug

デバッグログの出力例を次の表に示します。

表 6-26　デバッグログの出力例

デバッグログファイル名	説明
jpcuser_dbg_01.log	最新のデバッグログファイル
jpcuser_dbg_02.log	最新から 1 つ前のデバッグログファイル
jpcuser_dbg_03.log	最新から 2 つ前のデバッグログファイル
・・・	・・・

-lhost

このコマンドを実行するホストの論理ホスト名を指定します。指定を省略した場合，物理ホストが仮定されます。論理ホスト名の形式については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のjpcconf ha setup コマンドの-lhost オプションを参照してください。

なお，このオプションは一度だけ設定できます。

戻り値

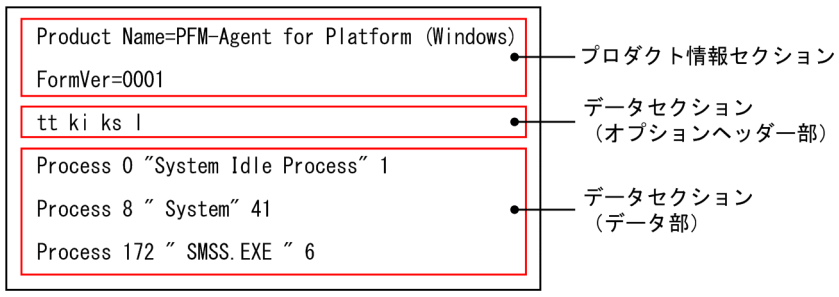
0	正常終了
1～100	警告のある正常終了
101～255	異常終了またはエラー発生

6.8.4　ユーザー作成データのファイル形式

ユーザー作成データのファイル形式について説明します。パフォーマンスデータを収集するユーザーコマンドでは，この形式に従ってテキスト出力するようにしてください。

ユーザー作成データのファイルに出力する情報として，プロダクト情報セクションとデータセクションがあります。プロダクト情報セクションとデータセクションは，ユーザー作成データのファイルごとに作成してください。ユーザー作成データの構成例を次の図に示します。

図 6-7　ユーザー作成データの構成例



(1) プロダクト情報セクション

製品名と，ユーザー作成データのファイル形式のバージョンを設定するセクションです。これらは固定値です。プロダクト情報セクションは内部機能で使用され，ユーザーレコードには格納されません。

形式を次に示します。

```
Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)
FormVer=0001
```

注意

上記の指定方法について，「=」の前後などにスペースが含まれる場合はエラーとなります。また，指定する文字の大文字小文字および全角半角も区別されます。

(2) データセクション

パフォーマンスデータの情報を設定するセクションです。この情報は，プロダクト情報セクションの下に指定します。データセクションは，オプションヘッダー部とデータ部で構成されます。

(a) オプションヘッダー部

1 行目はオプションヘッダー行です。フィールドオプションを 1 バイト以上のスペースまたはタブで区切ります。フィールドオプションは，ユーザーレコードのフィールドに対応します。

```
tt ks ki l ・・・
```

オプションと，対応するレコードのフィールド名を次の表に示します。「フィールド数」列のフィールド数を上限にそのオプションを複数指定できます。例えば，PI_UPI レコードでフィールドオプションに「ss」を複数指定する場合，項番 10 の「PI_UPI」列に「4」と表記されているので，PI_UPI レコードでは「ss ss ss ss」のように 4 個まで「ss」を指定できます。

表 6-27　データセクションで指定するオプションと対応するフィールド

項番	オプション名	フィールド名	値の説明	フィールド数（合計）				
				PD_UPD（17）	PD_UPDB（34）	PI_UPI（23）	PI_UPIB（49）	PI_XUI1～PI_XUI5（67）
1	tt	Trans Type	トランザクションタイプ。このオプションは必ず指定する。※1 サイズ：1～19 バイト	1	1	1	1	1
2	ki	Trans Data Key	数値型のトランザクションキー。ki または ks のどちら	1	1	1	1	1

項番	オプション名	フィールド名	値の説明	フィールド数（合計）				
				PD_UPD（17）	PD_UPDB（34）	PI_UPI（23）	PI_UPIB（49）	PI_XUI1～PI_XUI5（67）
2	ki	Trans Data Key	かを必ず指定する。両方指定することもできる。 タイプ：ulong 指定できる文字：数値および記号（+）	1	1	1	1	1
3	ks	Trans String Key	文字列型のトランザクションキー。ki または ks のどちらかを必ず指定する。両方指定することもできる。※1 サイズ：1～19 バイト	1	1	1	1	1
4	f	User Float	浮動小数点数※2 タイプ：double	2	5	2	5	30
5	fr※3	User Float Roll	累積値の浮動小数点数※2 タイプ：double	－	－	2	5	30
6	l	User Long	符号つき long タイプ：long 指定できる文字：数値および記号（- +）	2	5	2	5	－
7	lr※3	User Long Roll	累積値の符号つき long タイプ：long 指定できる文字：数値および記号（- +）	－	－	2	5	－
8	sl	User String(64)	64 バイトの文字列※1 サイズ：1～63 バイト＋NULL	1	5	1	5	2
9	sm	User String(32)	32 バイトの文字列※1 サイズ：1～31 バイト＋NULL	2	5	2	5	－
10	ss	User String(16)	16 バイトの文字列※1 サイズ：1～15 バイト＋NULL	4	5	4	5	－
11	sv	User String(128)	128 バイトの文字列※1 サイズ：1～127 バイト＋NULL	－	－	－	－	1
12	t	User Time	時刻（time_t 型） 次の形式で指定する。	1	1	1	1	1

項番	オプション名	フィールド名	値の説明	フィールド数（合計）				
				PD_UPD（17）	PD_UPDB（34）	PI_UPI（23）	PI_UPIB（49）	PI_XUI1～PI_XUI5（67）
12	t	User Time	YYYY/MM/DD,hh:mm:ss jpcuser コマンドを実行するマシンの LocalTime を設定する。	1	1	1	1	1
13	u	User Unsigned Long	符号なし long タイプ：ulong 指定できる文字：数値および記号（+）	2	5	2	5	－
14	ur※3	User Unsigned Long Roll	累積値の符号なし long タイプ：ulong 指定できる文字：数値および記号（+）	－	－	2	5	－

（凡例）

－：指定できない。

注※1

指定できる文字は，英文字（大文字，小文字），数値，空白，および記号（` ~ ! @ # $ % ^ & * ( ) _ + - = { } : ; < > , . ? / | ¥ [ ]）です。

注※2

指定できる文字は，数値，および記号（- + .）です。

注※3

fr，lr，ur を履歴収集したデータで集約して表示した場合は，累積値が表示されます。これらのオプションとki 以外の数値オプションは平均値が表示されます。

なお，ユーザー作成データに複数のフィールドオプションを指定した場合は，ユーザーレコードの対象フィールドの連番順に割り当てられます。

例えば，PI_UPIB レコードでフィールドオプションに「lr」を 3 個指定する場合は，「lr lr lr」と指定します。この場合，「lr」はそれぞれ次のフィールドに割り当てられます。

- 1 個目の lr：User Long Roll 1
- 2 個目の lr：User Long Roll 2
- 3 個目の lr：User Long Roll 3

また，「sl lr sl lr lr」のように指定した場合は，それぞれ次のフィールドに割り当てられます。

- 1 個目の sl：User String 11

- 2 個目の lr：User Long Roll 1
- 3 個目の sl：User String 12
- 4 個目の lr：User Long Roll 2
- 5 個目の lr：User Long Roll 3

(b) データ部

2 行目以降はデータ行です。データ行には，オプションヘッダー部に指定したフィールドオプションに対応するように，パフォーマンスデータそのものを指定します。各カラムは，1 バイト以上のスペースまたはタブで区切ります。

データの並び順は，必ずフィールドオプションの型に合わせてください。

例えば，フィールドオプションに「tt ks lr lr ss ss」と指定した場合，次のデータの並び順では，すべての行がエラーとなります。

```
TCP jp1host ”ESTABLISHD COUNT=” 5 ”LISTENING COUNT=” 2
TCP jp1host ”ESTABLISHD COUNT=” 3 ”LISTENING COUNT=” 1
TCP jp1host ”ESTABLISHD COUNT=” 3 ”LISTENING COUNT=” 2
```

3 列目と 6 列目のフィールドオプションとデータの型が一致していないことがエラーの原因です。

- 3 列目

  フィールドオプション「lr」に合わせて「蓄積した long 型整数値」が指定されるべきところに，文字列「”ESTABLISHD COUNT=”」が指定されています。
- 6 列目

  フィールドオプション「ss」に合わせて「サイズ 16 の文字列」が指定されるべきところに，整数値「2，1，2」が指定されています。

(3) 注意事項

- ユーザー作成データファイルは，アスキーファイルで作成してください。
- このファイルの各データラインは，キャリッジリターンキャラクタ+ラインフィードキャラクタ（CR+LF）によって終了する必要があります。
- ユーザー作成データファイルにコメントは記述できません。
- ユーザー作成データファイルの 1 行目から 3 行目に，空行または半角スペース行が含まれる場合はエラーとなります。
- ユーザー作成データファイルの 4 行目以降に，空行または半角スペース行が含まれる場合は，空行または半角スペース行は無視されます。
- スペースを含む文字列が入力される場合は，設定する文字列を” ”で囲みます。

- string タイプでは，印字できる英数字のシングルバイトの文字列値を設定してください。”のような特別なシングルバイトキャラクターは設定できません。
- オプションヘッダー行に指定できるフィールドオプションの定義は，1 つのユーザー作成データファイルごとに 1 つです。異なるフィールドオプションを定義したい場合，別のユーザー作成データファイルを作成してください。

6.8.5 ユーザー作成データの内容が正しいかどうかを確認するためのデバッグログの参照

デバッグログとは，ユーザー作成データの内容が正しいかどうかを確認するためのログファイルです。デバッグログを出力する場合には，jpcuser コマンドに-debug 1，または-debug 2 オプションを指定して実行してください。

デバッグログファイルには，ユーザー作成データのデータ行ごとに OK（成功），NG（失敗），WG（警告）などのチェック結果が出力されます。デバッグログに NG（失敗）や WG（警告）が出力された場合，ユーザー作成データが不正であると考えられます。ユーザー作成データを出力したユーザーコマンドを見直し，「6.8.4 ユーザー作成データのファイル形式」に従った形式で出力されるように修正してください。

デバッグログファイルの出力先を次に示します。

- 物理ホスト環境：

```
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug¥jpcuser_dbg_{01|02|03|04|05}.log
```

- 論理ホスト環境：

```
環境フォルダ¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug¥jpcuser_dbg_{01|02|03|04|05}.log
```

次に，デバッグログファイルの形式と見方について説明します。

(1) デバッグログファイルの形式

デバッグログファイルには 4 つのセクションがあります。

- プロダクト情報
- jpcuser コマンドの実行日時，プロセス ID
- ヘッダー行
- チェック結果

チェック結果はユーザー作成データのデータ行ごとに出力されます。各項目はコンマで区切ります。

出力される項目を次の表に示します。

表 6-28　デバッグログファイルに出力される項目

項番	セクション	項目	値	説明
1	プロダクト情報	製品名称	Product Name=PFM-Agent for Platform (Windows)	PFM - Agent の製品名称。
2		フォーマットバージョン	FormVer=0001	ユーザー作成データのフォーマットバージョン。
3	jpcuser コマンドの実行日時，プロセス ID	実行日時	YYYY/MM/DD hh:mm:ss	YYYY：年 MM：月 DD：日 hh：時 mm：分 ss：秒
4		プロセス ID	PID=xxxx	jpcuser コマンドのプロセス ID。
5	ヘッダー行	ヘッダー	（例）PD_UPD レコードの場合 LineNumber, Result, APITime, Recordtype, Transactiontype, t, ks, ki, L1, L2, UL1, UL2, F1, F2, SS1, SS2, SS3, SS4, SM1, SM2, SL1	デバッグログのヘッダー。 ヘッダー名は，ユーザー作成データファイルのオプションヘッダー行で指定するフィールドオプション，およびフィールド名と対応している。対応については「表 6-29」を参照。 なお，ヘッダー項目は格納するユーザーレコードによって異なる。
6	チェック結果	ユーザー作成データファイル名	（例） File=D:¥Program Files (x86)¥HITACHI¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcuser¥UPIB_sample01.txt	読み込んだユーザー作成データファイル名を，ユーザーが指定したパスで出力する。
7		警告・エラーメッセージ	KAVFxxxxx-x	後続するレコードの警告・エラー内容を出力する。1 つのレコードに複数の誤りがある場合は，その数だけ警告やエラーを出力する。
8		行番号	数値	ユーザー作成データ内の行番号。
9		結果	OK	成功。 ユーザー作成データの該当行に問題がなく，レコードを変換した。
10			WG	警告。

項番	セクション	項目	値	説明
10	チェック結果	結果	WG	ユーザー作成データの該当行に誤りがあるが，レコードを処理した。 あわせて警告メッセージを出力する。
11			NG	失敗。 ユーザー作成データの該当行に誤りがあり，レコードを変換しなかった。 失敗した原因によって，警告メッセージが表示され処理が続行される場合と，エラーメッセージが表示され処理が中断する場合がある。
12			BL	空行。 ユーザー作成データの該当行が空行であることを示し，無視する。
13		データ	データ	ユーザー作成データの該当行の内容。 数値フィールドに指定がない場合は 0 を出力する。 文字列フィールドに指定がない場合は空白（””）を出力する。

デバッグログファイルに出力されるヘッダー行とユーザー作成データファイルのオプションヘッダー行で指定するフィールドオプション，およびフィールド名の関係を次の表に示します。

表 6-29　デバッグログのヘッダー行と，フィールドオプションおよびフィールドとの対応

項番	デバッグログのヘッダー行の表示	ユーザー作成データファイルのオプションヘッダー行で指定するフィールドオプション	フィールド名 (PFM - View 名)	説明
1	Line Number	−	−	データの行番号
2	Result	−	−	データのチェック結果
3	API Time	−	Collect Time	データが変換された時間
4	Record type	−	Record Type	レコード種別
5	Transaction type	tt	Trans Type	トランザクションタイプ
6	t	t	User Time 1	時間値
7	ks	ks	Trans String Key	文字列型のトランザクションキー

項番	デバッグログのヘッダー行の表示	ユーザー作成データファイルのオプションヘッダー行で指定するフィールドオプション	フィールド名 (PFM - View 名)	説明
8	ki	ki	Trans Data Key	数値型のトランザクションキー
9	L1	l	User Long 1	long 型整数値
10	L2	l	User Long 2	long 型整数値
11	L3	l	User Long 3	long 型整数値
12	L4	l	User Long 4	long 型整数値
13	L5	l	User Long 5	long 型整数値
14	L1R	lr	User Long Roll 1	蓄積された long 型整数値
15	L2R	lr	User Long Roll 2	蓄積された long 型整数値
16	L3R	lr	User Long Roll 3	蓄積された long 型整数値
17	L4R	lr	User Long Roll 4	蓄積された long 型整数値
18	L5R	lr	User Long Roll 5	蓄積された long 型整数値
19	UL1	u	User Unsigned Long 1	unsigned long 型整数値
20	UL2	u	User Unsigned Long 2	unsigned long 型整数値
21	UL3	u	User Unsigned Long 3	unsigned long 型整数値
22	UL4	u	User Unsigned Long 4	unsigned long 型整数値
23	UL5	u	User Unsigned Long 5	unsigned long 型整数値
24	UL1R	ur	User Unsigned Long Roll 1	蓄積された unsigned long 型整数値
25	UL2R	ur	User Unsigned Long Roll 2	蓄積された unsigned long 型整数値
26	UL3R	ur	User Unsigned Long Roll 3	蓄積された unsigned long 型整数値
27	UL4R	ur	User Unsigned Long Roll 4	蓄積された unsigned long 型整数値
28	UL5R	ur	User Unsigned Long Roll 5	蓄積された unsigned long 型整数値
29	F1	f	User Float 1	浮動小数点値
30	F2	f	User Float 2	浮動小数点値
31	F3	f	User Float 3	浮動小数点値
32	F4	f	User Float 4	浮動小数点値
33	F5	f	User Float 5	浮動小数点値

項番	デバッグログのヘッダー行の表示	ユーザー作成データファイルのオプションヘッダー行で指定するフィールドオプション	フィールド名 (PFM - View 名)	説明
34	F01～F30	f	User Float 01～User Float 30	浮動小数点値
35	F1R	fr	User Float Roll 1	蓄積された浮動小数点値
36	F2R	fr	User Float Roll 2	蓄積された浮動小数点値
37	F3R	fr	User Float Roll 3	蓄積された浮動小数点値
38	F4R	fr	User Float Roll 4	蓄積された浮動小数点値
39	F5R	fr	User Float Roll 5	蓄積された浮動小数点値
40	F01A～F30A	fr	User Float Add 01～User Float Add 30	蓄積された浮動小数点値
41	SS1	ss	User String 1	サイズ 16 の文字列
42	SS2	ss	User String 2	サイズ 16 の文字列
43	SS3	ss	User String 3	サイズ 16 の文字列
44	SS4	ss	User String 4	サイズ 16 の文字列
45	SS5	ss	User String 5	サイズ 16 の文字列
46	SM1	sm	PD_UPD，PI_UPI レコードでは User String 5 PD_UPDB，PI_UPIB レコードでは User String 6	サイズ 32 の文字列
47	SM2	sm	PD_UPD，PI_UPI レコードでは User String 6 PD_UPDB，PI_UPIB レコードでは User String 7	サイズ 32 の文字列
48	SM3	sm	User String 8	サイズ 32 の文字列
49	SM4	sm	User String 9	サイズ 32 の文字列
50	SM5	sm	User String 10	サイズ 32 の文字列
51	SL1	sl	PD_UPD，PI_UPI レコードでは User String 7 PD_UPDB，PI_UPIB レコードでは User String 11 PI_XUI1～PI_XUI5 レコードでは User String 1	サイズ 64 の文字列
52	SL2	sl	PD_UPDB，PI_UPIB レコードでは User String 12 PI_XUI1～PI_XUI5 レコードでは User String 2	サイズ 64 の文字列

項番	デバッグログのヘッダー行の表示	ユーザー作成データファイルのオプションヘッダー行で指定するフィールドオプション	フィールド名 (PFM - View 名)	説明
53	SL3	sl	User String 13	サイズ 64 の文字列
54	SL4	sl	User String 14	サイズ 64 の文字列
55	SL5	sl	User String 15	サイズ 64 の文字列
56	SV1	sv	User String 3	サイズ 128 の文字列

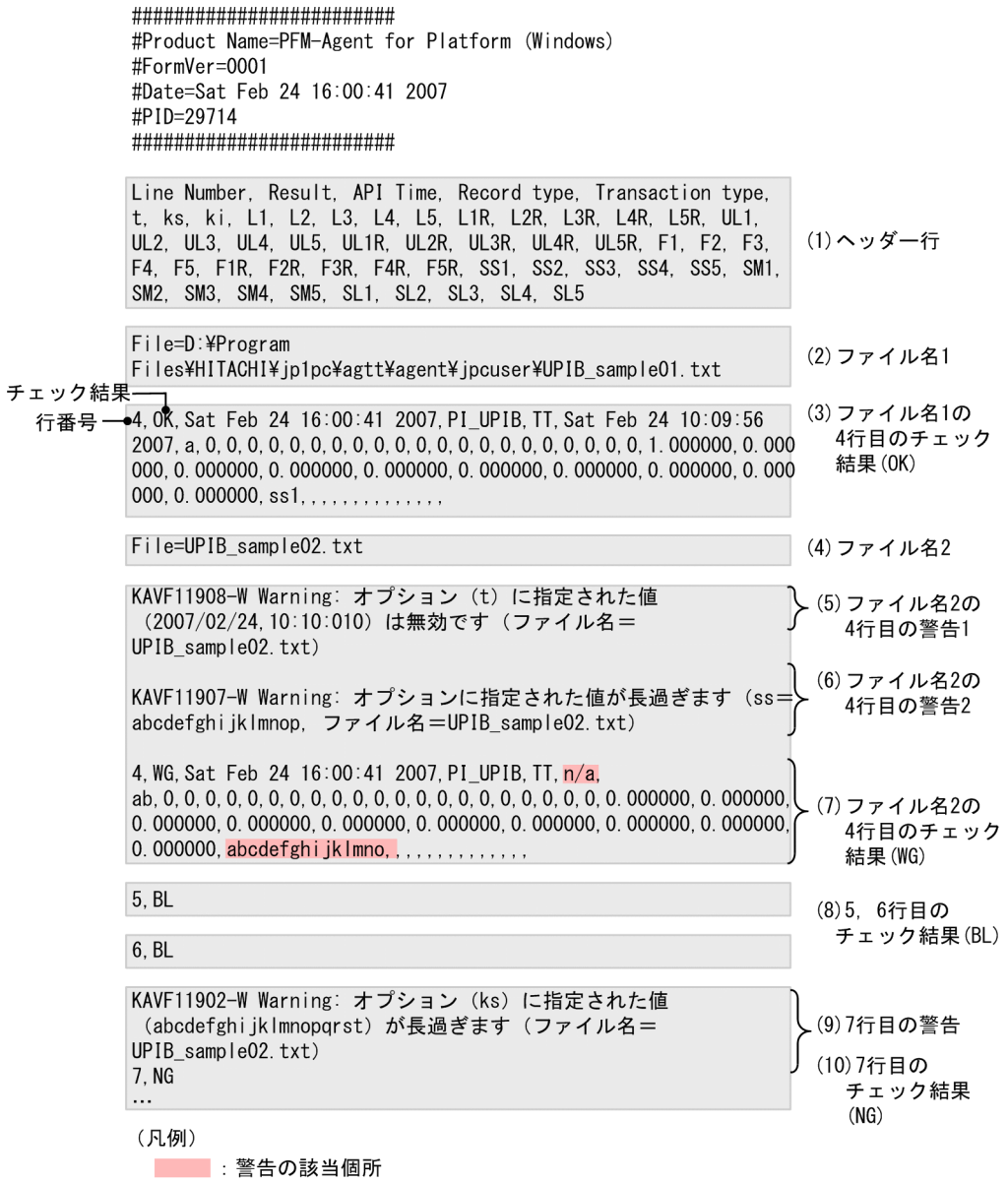
（凡例）

－：該当しない。

(2) デバッグログファイルの出力例

デバッグログファイルの出力例を次の図に示します。

図 6-8　デバッグログファイルの出力例



図中の番号に沿って説明します。

1. この行は，ヘッダー行を示しています。
2. 読み込んだユーザー作成データのファイル名が，ユーザーが指定したパスで表示されています。
3. この行から，ユーザー作成データのチェック結果が出力されます。先頭の「4」は，ユーザー作成データファイルの行数です。ユーザー作成データファイルは，1 行目が製品情報，2 行目がバージョン情報，3 行目がオプションヘッダー行となっているため，通常は「4」から始まります。チェック結果が問題なければ，「Result」に「OK」が出力されます。
4. 読み込んだユーザー作成データのファイル名が，ユーザーが指定したパスで表示されています。
5. この行は，UPIB_sample02.txt の 4 行目に警告が発生していることを示しています。設定された「t」の値（2007/02/24,10:10:010）が，指定のフォーマットと合っていないため警告となり，図中（7）に該当する行の「t」が「n/a」になっています。

6. この行も同じく，UPIB_sample02.txt の 4 行目に警告が発生していることを示しています。「ss」が規定バイト数の 15 バイトを超えているため警告が出力され，図中（7）に該当する行の「SS1」が「abcdefghijklmno」になっています。
7. 図中（5）と（6）の警告が発生しているため，4 行目のチェック結果「Result」に「WG」が出力されています。
8. この行は，5 行目と 6 行目が，空白であることを示しています。
9. この行は，7 行目で警告が発生していることを示しています。設定された「ks」が規定の 19 バイトを超えているため，警告が出力されています。
10. ユーザー作成データファイルの 7 行目のユニークキーである「ks」が誤っているためこのデータは使用できず，「Result」が「NG」になっています。ユニークキーである「Transaction type」，「ks」，「ki」が不正なレコードは処理されません。

7 監視テンプレート

この章では，PFM - Agent for Platform の監視テンプレートについて説明します。

アラームの記載形式

ここでは，アラームの記載形式を示します。アラームは，アルファベット順に記載しています。

アラーム名

監視テンプレートのアラーム名を示します。

概要

このアラームで監視できる監視対象の概要について説明します。

主な設定

このアラームの主な設定値を表で説明します。この表では，アラームの設定値と，PFM - Web Console の［アラーム階層］画面でアラームアイコンをクリックし，［プロパティの表示］メソッドをクリックしたときに表示される，［プロパティ］画面の設定項目との対応を示しています。各アラームの設定の詳細については，PFM - Web Console のアラームの［プロパティ］画面で確認してください。

設定値の「－」は，設定が常に無効であることを示します。

なお，条件式で異常条件と警告条件が同じ場合は，アラームイベントは異常のものだけが発行されます。

アラームテーブル

このアラームが格納されているアラームテーブルを示します。

関連レポート

このアラームに関連する，監視テンプレートのレポートを示します。PFM - Web Console の［エージェント階層］画面でエージェントアイコンをクリックし，［アラームの状態の表示］メソッドで表示される アイコンをクリックすると，このレポートを表示できます。

アラーム一覧

1 つ以上のアラームを 1 つのテーブルにまとめたものを「アラームテーブル」と呼びます。PFM - Agent for Platform の監視テンプレートで定義されているアラームは，アラームテーブルの形式で，PFM - Web Console の［アラーム階層］タブに表示される「Windows」フォルダに格納されています。

アラームテーブル名を次に示します。

- PFM Windows Template Alarms 09.00
- PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00
- PFM Windows Template Alarms [CPU] 09.00
- PFM Windows Template Alarms [DSK] 09.00
- PFM Windows Template Alarms [LOG] 09.00
- PFM Windows Template Alarms [MEM] 09.00
- PFM Windows Template Alarms [NET] 09.00
- PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00

アラームテーブル名の[ ]内の表示

[ ]内は，そのアラームテーブルがどんな監視項目に対応しているかを示しています。[ ]が付かないアラームテーブルは，基本的なアラームをまとめたアラームテーブルです。

アラームテーブル名末尾の数値

アラームテーブルのバージョンを示します。

なお，PFM - Agent for Platform の場合，アラーム階層に，ご使用の Performance Management システムにはないバージョンのアラームテーブルが表示されることがあります。監視テンプレートで定義されているアラームを使用する際は，Performance Management システムで使用しているアラームテーブルのバージョンおよびバージョンの互換性をご確認ください。アラームテーブルのバージョンおよびバージョン互換については，「付録 H　バージョン互換」を参照してください。

PFM - Agent for Platform の監視テンプレートで定義されているアラームを，次の表に示します。

表 7-1　アラーム一覧

アラームテーブル名	アラーム名	監視対象
PFM Windows Template Alarms 09.00	Available Memory	物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）。
	CPU Usage	プロセッサの使用率（%）。
	Disk Space	使用可能な領域全体に対する論理ディスクの空き領域の割合（%）。
PFM Windows Template Alarms [CPU] 09.00	CPU Usage	プロセッサの使用率（%）。
	Processor Queue	プロセッサのキュー内の要求数。
	SVR Processor Queue	

アラームテーブル名	アラーム名	監視対象
PFM Windows Template Alarms [MEM] 09.00	Available Memory	物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）。
	Committed Mbytes	仮想メモリー領域の使用量（メガバイト単位）。
	Pages/sec	ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（秒単位）。
	Page Faults/sec	ページフォルトが発生した数の割合（秒単位）。
PFM Windows Template Alarms [DSK] 09.00	Disk Space	使用可能な領域全体に対するディスクの空き領域の割合（%）。
	Logical Disk Free	使用可能なディスク領域全体に対する未使用領域（メガバイト単位）。
	Disk Busy %	読み込みまたは書き込み要求の処理でディスクがビジーだった経過時間の割合（%）。
	Logical Disk Queue	ディスクに残っている処理待ちまたは処理中のキューの要求数。
	Physical Disk Queue	
PFM Windows Template Alarms [NET] 09.00	Network Received	ネットワークインターフェースで受信されたデータ量の割合（バイト／秒単位）。
PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00	Process End	プロセス名。
	Process Alive	ワークグループが実行しているプロセス数。
	Service(Service Nm)	サービスコントロールマネージャーデータベースで使用されているサービス名，およびデータ収集時のサービスの状態。
	Service(Display Nm)	サービスを識別するためにユーザーインターフェースプログラムによって使用されている名前，およびデータ収集時のサービスの状態。
	Process Existence	プログラム名。
PFM Windows Template Alarms [LOG] 09.00	Event Log(all)	イベントログに出力されたすべてのエラーおよび警告。
	Event Log(System)	イベントログに出力された WSFC のエラーおよび警告。
PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00	Application Status	プロセスの稼働・非稼働情報収集で収集しているアプリケーションの状態。

Available Memory

概要

Available Memory アラームは，物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）を監視します。監視する値は，プロセスへの割り当て，またはシステムがすぐに利用できるゼロメモリー，空きメモリー，およびスタンバイメモリー（キャッシュ済み）の収集時の領域の合計です。この値は，平均値ではなく最新の監視値となります。未使用サイズがしきい値より小さい場合，物理メモリー領域が不足しているおそれがあります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Available memory is below %CVS megabytes
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Overview（PI）
	フィールド	Available Mbytes
	異常条件	Available Mbytes ＜ 3
	警告条件	Available Mbytes ＜ 4
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms 09.00

PFM Windows Template Alarms [MEM] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/System Overview

CPU Usage

概要

CPU Usage アラームは，プロセッサの使用率（%）を監視します。監視する値は，プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合です。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100%で表示されます。使用率が継続してしきい値より高い場合，プロセッサがシステムのボトルネックになっているおそれがあります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	CPU is at %CVS% utilization
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Overview（PI）
	フィールド	CPU %
	異常条件	CPU % >= 90
	警告条件	CPU % > 80
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms 09.00

PFM Windows Template Alarms [CPU] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/CPU Usage - Top 10 Processes

Disk Space

概要

Disk Space アラームは，使用可能な領域全体に対する論理ディスクの空き領域の割合を監視します。空き領域がしきい値より少ない場合，ディスク容量が不足しているおそれがあります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Available disk space is %CVS%
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	Logical Disk Overview（PI_LOGD）
	フィールド	% Free Space
	異常条件	% Free Space < 5
	警告条件	% Free Space < 15
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms 09.00

PFM Windows Template Alarms [DSK] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Free Space - Low 10 Logical Drives

Processor Queue

概要

Processor Queue アラームは，プロセッサのキューにある実行準備ができているスレッドの数を監視します。要求数が継続してしきい値以上の場合，プロセッサが混雑していることを示します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Queue Length = %CVS
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Overview（PI）
	フィールド	Processor Queue Length
	異常条件	Processor Queue Length >= 10
	警告条件	Processor Queue Length >= 2
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [CPU] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Real-Time/Workload Status

SVR Processor Queue

概要

SVR Processor Queue アラームは，CPU のサーバ作業キューの現在の長さを監視します。キューの長さが継続してしきい値以上の場合，プロセッサに大きな負荷が掛かっていることを示します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Queue Length = %CVS
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	Server Work Queues Overview（PI_SVRQ）
	フィールド	Queue Length
	異常条件	Queue Length >= 3
	警告条件	Queue Length >= 2
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [CPU] 09.00

関連レポート

なし

Committed Mbytes

概要

Committed Mbytes アラームは，仮想メモリー領域の使用量（メガバイト単位）を監視します。仮想メモリー領域の使用量が継続してしきい値（PI レコードの Total Physical Mem Mbytes フィールド）以上の場合，物理メモリーが不足しているおそれがあります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Committed Mbytes = %CVS1
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Overview（PI）
	フィールド	Committed Mbytes
	異常条件	Committed Mbytes >= 2046※1
	警告条件	Committed Mbytes >= 1024※2
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※1

環境に応じて，PI レコードの Commit Limit Mbytes フィールドの 90%程度の値を設定してください。

注※2

環境に応じて，PI レコードの Total Physical Mem Mbytes フィールドの値を設定してください。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [MEM] 09.00

関連レポート

なし

Pages/sec

概要

Pages/sec アラームは，ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（秒単位）を監視します。ページ数の割合が継続してしきい値以上の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがあります。ただし，しきい値の超過が一時的な場合は，監視した値が 20 までは許容範囲になることがあります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Page Faults = %CVS1
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Overview（PI）
	フィールド	Pages/sec
	異常条件	Pages/sec >= 5※
	警告条件	Pages/sec >= 4※
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

環境に応じて変更してください。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [MEM] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/System Overview

Page Faults/sec

概要

Page Faults/sec アラームは，ページフォルトが発生した数の割合（秒単位）を監視します。ページフォルトが発生した数の割合が継続してしきい値以上の場合，メモリーがボトルネックになっているおそれがあります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Page Faults = %CVS1
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Overview（PI）
	フィールド	Page Faults/sec
	異常条件	Page Faults/sec >= 5※
	警告条件	Page Faults/sec >= 4※
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

環境に応じて変更してください。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [MEM] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/System Overview

Logical Disk Free

概要

Logical Disk Free アラームは，使用可能なディスク領域全体に対する未使用領域（メガバイト単位）を監視します。未使用領域が少ない場合，ディスク容量が不足していることを示します。

> **メモ**
>
> 特定のディスクを監視する場合，このアラームをコピーし，ID フィールドの条件式を「ID ＝ **監視する論理ディスクボリューム名**」に変更したアラームを作成してください。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Disk Space(%CVS1) ＝ %CVS2 MB
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	0
	インターバル中	0
アラーム条件式 1	レコード	Logical Disk Overview（PI_LOGD）
	フィールド	ID
	異常条件	ID <> _Total※1
	警告条件	ID <> _Total※1
アラーム条件式 2	レコード	Logical Disk Overview（PI_LOGD）
	フィールド	Free Mbytes
	異常条件	Free Mbytes < 5120※2
	警告条件	Free Mbytes < 10240※2
アクション	E メール	－

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
アクション	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※1

監視する論理ディスクボリューム名を設定してください。表の設定値は，ID フィールドを満たす条件値を設定する場合の例です。

注※2

環境に応じて変更してください。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [DSK] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Real-Time/Free Megabytes - Logical Drive Status

Disk Busy %

概要

Disk Busy %アラームは，読み込みまたは書き込み要求の処理でディスクがビジーだった経過時間の割合（%）を監視します。経過時間の割合が継続してしきい値の場合，ディスクへの負荷が高いことを示します。

> **メモ**
>
> 特定のディスクを監視する場合，このアラームをコピーし，ID フィールドの条件式を「ID = **監視する論理ディスクボリューム名**」に変更したアラームを作成してください。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Disk Busy % (%CVS1) = %CVS2
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	4
	インターバル中	5
アラーム条件式 1	レコード	Logical Disk Overview（PI_LOGD）
	フィールド	ID
	異常条件	ID <> _Total※
	警告条件	ID <> _Total※
アラーム条件式 2	レコード	Logical Disk Overview（PI_LOGD）
	フィールド	% Disk Time
	異常条件	% Disk Time >= 90
	警告条件	% Disk Time >= 50
アクション	E メール	－

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
アクション	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

監視する論理ディスクボリューム名を設定してください。表の設定値は，ID フィールドを満たす条件値を設定する場合の例です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [DSK] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Disk Time - Top 10 Logical Drives

Logical Disk Queue

概要

Logical Disk Queue アラームは，論理ディスクに残っている処理待ちまたは処理中のキューの要求数を監視します。要求数が継続してしきい値以上の場合，論理ディスクが混雑していることを示します。

> **メモ**
>
> 特定のディスクを監視する場合，このアラームをコピーし，ID フィールドの条件式を「ID = **監視する論理ディスクボリューム名**」に変更したアラームを作成してください。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Disk Queue(%CVS1) = %CVS2 MB
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	4
	インターバル中	5
アラーム条件式 1	レコード	Logical Disk Overview（PI_LOGD）
	フィールド	ID
	異常条件	ID <> _Total※
	警告条件	ID <> _Total※
アラーム条件式 2	レコード	Logical Disk Overview（PI_LOGD）
	フィールド	Current Disk Queue Length
	異常条件	Current Disk Queue Length >= 5
	警告条件	Current Disk Queue Length >= 3
アクション	E メール	−

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
アクション	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

監視する論理ディスクボリューム名を設定してください。表の設定値は，ID フィールドを満たす条件値を設定する場合の例です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [DSK] 09.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/Logical Drive Detail

Physical Disk Queue

概要

Physical Disk Queue アラームは，物理ディスクに残っている処理待ちまたは処理中のキューの要求数を監視します。要求数が継続してしきい値以上の場合，物理ディスクが混雑していることを示します。

> **メモ**
>
> 特定のディスクを監視する場合，このアラームをコピーし，ID フィールドの条件式を「ID = **監視する物理ディスク番号**」に変更したアラームを作成してください。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Disk Queue(%CVS1) = %CVS2 MB
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	4
	インターバル中	5
アラーム条件式 1	レコード	Physical Disk Overview（PI_PHYD）
	フィールド	ID
	異常条件	ID <> _Total※
	警告条件	ID <> _Total※
アラーム条件式 2	レコード	Physical Disk Overview（PI_PHYD）
	フィールド	Current Disk Queue Length
	異常条件	Current Disk Queue Length >= 5
	警告条件	Current Disk Queue Length >= 3
アクション	E メール	−

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
アクション	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

監視する物理ディスク番号を設定してください。表の設定値は，ID フィールドを満たす条件値を設定する場合の例です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [DSK] 09.00

関連レポート

なし

Network Received

概要

Network Received アラームは，1 秒ごとにネットワークインターフェースで受信されるデータ量の割合（バイト/秒単位）を監視します。サーバがネットワークから受信したバイト数とネットワークカードの総帯域幅性能を比較し，帯域幅（ネットワークで一定時間内に転送できるデータの量）が 50%以上の場合，ネットワーク接続がボトルネックになっているおそれがあります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Received = %CVS1 byte/sec
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	3
	インターバル中	5
アラーム条件式	レコード	Network Interface Overview（PI_NETI）
	フィールド	Bytes Rcvd/sec
	異常条件	Bytes Rcvd/sec >= 3000※1
	警告条件	Bytes Rcvd/sec >= 2048※2
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※1

環境に応じて，NIC の帯域幅の 70%程度の値を設定してください。

注※2

環境に応じて，NIC の帯域幅の 50%程度の値を設定してください。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [NET] 09.00

関連レポート

なし

Process End

概要

Process End アラームは，プロセスの消滅を監視します。パフォーマンスデータが収集されない場合，プロセスが停止していることを示します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Process status has changed
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	0
	インターバル中	0
アラーム条件式	レコード	Process Detail Interval（PD_PDI）
	フィールド	Program
	異常条件	Program ＝ jpcsto※
	警告条件	Program ＝ jpcsto※
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

監視するプロセス名を設定してください。表の設定値は，Agent Store サービスのプロセス名を設定する場合の例です。なお，値を監視するだけなので，異常条件および警告条件はありません。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/Process Detail

Process Alive

概要

Process Alive アラームは，ワークグループに属しているプロセスの生成を監視します。

収集データ追加ユーティリティで，次のように設定して監視してください。

表 7-2　収集データ追加ユーティリティでの設定

収集データ追加ユーティリティの項目※1	内容※3
プログラム名・ユーザー名・グループ名の全条件に一致（AND）	チェックする
ワークグループ名	workgroup
プログラム名※2	yyy|zzz
ユーザー名	－
グループ名	－

（凡例）

－：指定しません。

注※1

収集データ追加ユーティリティは，PFM - Agent for Platform をインストールした環境で実行してください。収集の設定方法については，「6.4　ワークグループ情報の収集に関する設定」を参照してください。

注※2

プログラム名は，Windows の［スタート］メニューの［管理ツール］－［パフォーマンス］－［システムモニタ］で表示される Process オブジェクトのインスタンス，または PD レコードの Program フィールドに格納される値を指定してください。

注※3

yyy および zzz という名前のプロセスをワークグループとして設定する場合の例を示しています。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Workgroup Application Process Count = %CVS1
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	0
	インターバル中	0
アラーム条件式 1	レコード	Workgroup Summary（PI_WGRP）
	フィールド	Process Count
	異常条件	Process Count ＞ 0
	警告条件	Process Count ＞ 0
アラーム条件式 2	レコード	Workgroup Summary（PI_WGRP）
	フィールド	Workgroup
	異常条件	Workgroup ＝ workgroup※
	警告条件	Workgroup ＝ workgroup※
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

監視するワークグループ名を設定してください。収集データ追加ユーティリティでの設定が必要です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/Process Detail

Service(Service Nm)

概要

Service(Service Nm)アラームは，サービスコントロールマネージャーデータベースで使用されているサービス名，およびデータ収集時のサービスの状態を監視します。アプリケーションサービス（プロセス）が起動中（RUNNING）以外の場合，サービスが停止していることを示します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	State of service(%CVS1) has changed
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	0
	インターバル中	0
アラーム条件式 1	レコード	Service Process Detail（PD_SVC）
	フィールド	Service Name
	異常条件	Service Name = JP1PCAGT_TS※
	警告条件	Service Name = JP1PCAGT_TS※
アラーム条件式 2	レコード	Service Process Detail（PD_SVC）
	フィールド	State
	異常条件	State <> RUNNING
	警告条件	State <> RUNNING
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

監視するサービス名を設定してください。表の設定値は，Agent Store サービスのサービス名を設定する場合の例です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00

関連レポート

なし

Service(Display Nm)

概要

Service(Display Nm)アラームは，サービスを識別するためにユーザーインターフェースプログラムによって使用されている名前，およびデータ収集時のサービスの状態を監視します。アプリケーションサービス（プロセス）が起動中（RUNNING）以外の場合，サービスが停止していることを示します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	State of service(%CVS1) has changed
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	0
	インターバル中	0
アラーム条件式 1	レコード	Service Process Detail（PD_SVC）
	フィールド	Display Name
	異常条件	Display Name ＝ PFM - Agent Store for Windows※
	警告条件	Display Name ＝ PFM - Agent Store for Windows※
アラーム条件式 2	レコード	Service Process Detail（PD_SVC）
	フィールド	State
	異常条件	State <> RUNNING
	警告条件	State <> RUNNING
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

サービスを識別するためにユーザーインターフェースプログラムによって使用される名称を設定してください。表の設定値は，ユーザーインターフェースプログラムによって使用されている Agent Store サービスの名称を設定する場合の例です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00

関連レポート

なし

Event Log(all)

概要

Event Log(all)アラームは，イベントログに出力されたすべてのエラーおよび警告を監視します。なお，収集データ追加ユーティリティで収集対象のイベントログを設定できます。収集データ追加ユーティリティでイベントログを収集する設定については，「6.3　イベントログ情報の収集に関する設定」を参照してください。

メモ

このアラームでは，1 つでも異常域や警告域の値が検知された時点でアラーム評価を終了します。そのため，収集されたすべてのデータが評価されるとは限りません。イベントログは，それぞれのログが単独の情報で前回の評価とは関係がないため，収集されたすべてのデータを評価することを推奨します。

すべてのデータを評価するには，このアラームをコピーし，PFM - Web Console のアラームのプロパティで［アラームを有効にする］，［常にアラーム通知する］，および［すべてのデータを評価する］をチェックしたアラームを作成して監視してください。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	%CVS1 %CVS2, %CVS3 (%CVS4), %CVS5
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	1
	インターバル中	1
アラーム条件式 1	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Log Name
	異常条件	Log Name <> dummy※1
	警告条件	Log Name <> dummy※1

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
アラーム条件式 2	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Event Type Name
	異常条件	Event Type Name = Error
	警告条件	Event Type Name = Warning
アラーム条件式 3	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Source Name
	異常条件	Source Name <> dummy※2
	警告条件	Source Name <> dummy※2
アラーム条件式 4	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Event ID
	異常条件	Event ID <> 0
	警告条件	Event ID <> 0
アラーム条件式 5	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Description
	異常条件	Description <> dummy※3
	警告条件	Description <> dummy※3
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※1

監視するイベントログの種類を設定してください。表の設定値は，Log Name フィールドを満たす条件値を設定する場合の例です。

注※2

エントリーを生成したソース名を設定してください。表の設定値は，Source Name フィールドを満たす条件値を設定する場合の例です。

注※3

イベントログの説明を設定してください。表の設定値は，Description フィールドを満たす条件値を設定する場合の例です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [LOG] 09.00

関連レポート

なし

Process Existence

概要

Process Existence アラームは，プロセスの消滅を監視します。プロセスの存在が確認されない場合，プロセスが停止していることを示します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Process status has changed
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	0
	インターバル中	0
アラーム条件式	レコード	Application Process Overview（PD_APS）
	フィールド	Program Name
	異常条件	Program Name = jpcsto.exe※
	警告条件	Program Name = jpcsto.exe※
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

監視するプログラム名を設定してください。PD_APS レコードの「Program Name」フィールドを確認して，このフィールドと同じ文字列を入力する必要があります。

取得元の情報に ASCII コードの文字（0x20～0x7E）以外が含まれる場合，PD_APS レコードの「Program Name」フィールドには，「#(0x23)」に変換された値が格納されます。1 バイト単位で変換されるため，例えば，マルチバイト文字の「A」（全角）は次のように変換されます。

取得元の情報		変換後の情報	
文字コードの種類	バイナリ	バイナリ	文字列
Shift-JIS コード	8260	2360	#`
EUC コード	A3C1	2323	##
UTF-8 コード	EFBCA1	232323	###

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00

関連レポート

なし

Event Log(System)

概要

Event Log(System)アラームは，イベントログに出力される WSFC のエラーおよび警告を監視します。

なお，収集データ追加ユーティリティで収集対象のイベントログを設定できます。収集データ追加ユーティリティでイベントログを収集する設定については，「6.3　イベントログ情報の収集に関する設定」を参照してください。

メモ

このアラームでは，1 つでも異常域や警告域の値が検知された時点でアラーム評価を終了します。そのため，収集されたすべてのデータが評価されるとは限りません。イベントログは，それぞれのログが単独の情報で前回の評価とは関係がないため，収集されたすべてのデータを評価することを推奨します。

すべてのデータを評価するには，このアラームをコピーし，PFM - Web Console のアラームのプロパティで［アラームを有効にする］，［常にアラーム通知する］，および［すべてのデータを評価する］をチェックしたアラームを作成して監視してください。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	%CVS1 %CVS2, %CVS3 (%CVS4), %CVS5
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	する
	回しきい値超過	1
	インターバル中	1
アラーム条件式 1	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Log Name
	異常条件	Log Name = System

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
アラーム条件式 1	警告条件	Log Name = System
アラーム条件式 2	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Event Type Name
	異常条件	Event Type Name = Error
	警告条件	Event Type Name = Warning
アラーム条件式 3	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Source Name
	異常条件	Source Name = ClusSvc
	警告条件	Source Name = ClusSvc
アラーム条件式 4	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Event ID
	異常条件	Event ID <> 0
	警告条件	Event ID <> 0
アラーム条件式 5	レコード	Event Log（PD_ELOG）
	フィールド	Description
	異常条件	Description <> dummy※
	警告条件	Description <> dummy※
アクション	E メール	－
	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

注※

イベントログの説明を設定してください。表の設定値は，Description フィールドを満たす条件値を設定する場合の例です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [LOG] 09.00

関連レポート

なし

Application Status

概要

Application Status アラームは，Application Summary Extension（PD_APP2）レコードで監視しているアプリケーションの状態を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	Windows
	アラームメッセージテキスト	Status of application(%CVS1) has changed
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	0
	インターバル中	0
アラーム条件式 1	レコード	Application Summary Extension（PD_APP2）
	フィールド	Application Name
	異常条件	Application Name = *
	警告条件	Application Name = *
アラーム条件式 2	レコード	Application Summary Extension（PD_APP2）
	フィールド	Application Exist
	異常条件	Application Exist = ABNORMAL
	警告条件	Application Exist = NORMAL
アラーム条件式 3	レコード	Application Summary Extension（PD_APP2）
	フィールド	Application Status
	異常条件	Application Status = ABNORMAL
	警告条件	Application Status = ABNORMAL
アクション	E メール	−

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
アクション	コマンド	－
	SNMP	異常，警告，正常

（凡例）

－：設定は常に無効です。

アラームテーブル

PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00

関連レポート

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Application Status (8.4)

レポートの記載形式

ここでは，レポートの記載形式を示します。レポートは，アルファベット順に記載しています。

レポート名

監視テンプレートのレポート名を示します。

レポート名に「(Multi-Agent)」が含まれるレポートは，複数のインスタンスについて情報を表示するレポートです。

レポート名に「(Multi-Agent)」が含まれないレポートは，単一のインスタンスについて情報を表示するレポートです。

概要

このレポートで表示できる情報の概要について説明します。

格納先

このレポートの格納先を示します。

レコード

このレポートで使用するパフォーマンスデータが，格納されているレコードを示します。履歴レポートを表示するためには，この欄に示すレコードを収集するように，あらかじめ設定しておく必要があります。レポートを表示する前に，PFM - Web Console の［エージェント階層］画面でエージェントのプロパティを表示して，このレコードが「Log ＝ Yes」に設定されているか確認してください。リアルタイムレポートの場合，設定する必要はありません。

フィールド

このレポートで使用するレコードのフィールドについて，表で説明します。

表中の※1～※3 は，次の内容を示します。

注※1

このフィールドの値は，収集時に OS から返された最新の監視値です。

注※2

このフィールドを履歴レポートで要約した場合，最後に収集した値が表示されます。

注※3

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドです。Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドの詳細については，「8.　レコード」を参照してください。

各フィールドのパフォーマンスデータの求め方には，次の種類があります。

- 今回収集したデータと前回のインターバルで収集したデータによって求められた平均や割合を求めるもの。
- 今回収集したデータたけで求められるのもの（OS 内部で累積された値を含む。表中の※1 が該当する）。
- ほかのフィールドのデータから求めるもの（「8. レコード」の各レコードのフィールドの表にある「データソース」参照）。

特に断り書きがない場合，データの収集間隔によって求められる値となります。

履歴レポートで，PI レコードタイプのレコードを，レポート間隔に「分」以外を設定して要約した場合に表示される値には，次の種類があります。

- 要約した間隔の平均値を表示するもの。
- 最後に収集した値を表示するもの。
- 合計値を表示するもの。
- 最小値を表示するもの。
- 最大値を表示するもの。

特に断り書きがないフィールドの値は，要約した間隔の平均値が表示されます。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

このレポートに関連づけられた，監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには，PFM - Web Console のレポートウィンドウのドリルダウンレポートプルダウンメニューから，該当するドリルダウンレポート名を選択し，［レポートの表示］をクリックしてください。なお，レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

このレポートのフィールドに関連づけられた，監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには，PFM - Web Console のレポートウィンドウのグラフ，一覧，または表をクリックしてください。履歴レポートの場合，時間項目からドリルダウンレポートを表示することで，より詳細な時間間隔でレポートを表示できます。なお，レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

ドリルダウンレポートについての詳細は，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

レポートのフォルダ構成

PFM - Agent for Platform のレポートのフォルダ構成を次に示します。＜　＞内は，フォルダ名を示します。

```
<Windows>
 +-- <Operating System>
     +-- <Monthly Trend>
     |   +-- CPU Trend
     |   +-- CPU Trend (Multi-Agent)
     |   +-- Memory Available Trend (Multi-Agent)
     |   +-- Process Trend
     |   +-- Server Activity Summary Trend (Multi-Agent)
     |   +-- Server Sessions Trend (Multi-Agent)
     +-- <Status Reporting>
     |   +-- <Daily Trend>
     |   |   +-- Access Failure Status
     |   |   +-- CPU Status (Multi-Agent)
     |   |   +-- Memory Paging Status (Multi-Agent)
     |   |   +-- OS Memory Usage Status
     |   |   +-- Server Activity Summary (Multi-Agent)
     |   |   +-- Workload Status (Multi-Agent)
     |   +-- <Real-Time>
     |       +-- Access Failure Status
     |       +-- Free Megabytes - Logical Drive Status
     |       +-- OS Memory Usage Status
     |       +-- System Utilization Status
     |       +-- Workload Status
     +-- <Troubleshooting>
         +-- <Real-Time>
         |   +-- CPU Usage - Top 10 Processes
         |   +-- Disk Time - Top 10 Logical Drives
         |   +-- Free Space - Top 10 Logical Drives
         |   +-- Free Space - Low 10 Logical Drives
         |   +-- Network Segment Summary※
         |   +-- Page Faults - Top 10 Processes
         |   +-- Server Activity Summary
         |   +-- System Overview
         |   +-- Application Status
         |   +-- Application Status (8.4)
         |   +-- <Drilldown Only>
         |       +-- Logical Drive Detail
         |       +-- Network Segment Detail※
         |       +-- Process Detail
         |       +-- Server Activity Detail
         |       +-- Application Process Status
         |       +-- Application Process Status (8.4)
         +-- <Recent Past>
             +-- CPU Usage Summary
             +-- File System I/O Summary
             +-- Memory Paging
             +-- Server Activity Summary
             +-- System Memory Detail
             +-- System Overview
             +-- <Drilldown Only>
```

```
+-- Application Process Count
+-- Application Process Count (8.4)
+-- Monitoring Process Detail
+-- Monitoring Process Detail (8.4)
```

注※

予約レポートのため使用できません。

各フォルダの説明を次に示します。

- 「Monthly Trend」フォルダ

  最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示する履歴レポートが格納されています。1 か月のシステムの傾向を分析するために使用します。

- 「Status Reporting」フォルダ

  日，または週ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。システムの総合的な状態を見るために使用します。

  - 「Daily Trend」フォルダ

    最近 24 時間の 1 時間ごとに集計された情報を表示する履歴レポートが格納されています。1 日ごとにシステムの状態を確認するために使用します。

  - 「Real-Time」フォルダ

    システムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。

- 「Troubleshooting」フォルダ

  トラブルを解決するのに役立つ情報を表示するレポートが格納されています。システムに問題が発生した場合，問題の原因を調査するために使用します。

  - 「Real-Time」フォルダ

    現在のシステムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。

  - 「Recent Past」フォルダ

    最近 1 時間の 1 分ごとに集計された情報を表示する履歴レポートが格納されています。

さらに，これらのフォルダの下位には，次のフォルダがあります。上位のフォルダによって，どのフォルダがあるかは異なります。各フォルダについて次に説明します。

- 「Advanced」フォルダ

  デフォルトで「Log = No」に設定されているレコードを使用しているレポートが格納されています。このフォルダのレポートを表示するには，使用しているレコードの設定を PFM - Web Console で「Log = Yes」にする必要があります。

- 「Drilldown Only」フォルダ

  ドリルダウンレポート（フィールドレベル）として表示されるレポートが格納されています。そのレポートのフィールドに関連する詳細な情報を表示するために使用します。

レポート一覧

監視テンプレートで定義されているレポートをアルファベット順に次の表に示します。

表 7-3　レポート一覧

カテゴリー	レポート名	表示する情報
システム	File System I/O Summary	最近 1 時間の I/O 使用量の要約（分単位）。
	Process Trend	最近 1 か月間のシステムで実行されたプロセス数（日単位）。
	System Overview（システムの概要を示すリアルタイムレポート）	システム全体の概要。
	System Overview（システムの概要を示す履歴レポート）	最近 1 時間のシステムの概要（分単位）。
	Workload Status	システムのワークロード関連データ。
	Workload Status (Multi-Agent)	最近 24 時間の複数のシステムについてのワークロード関連データの要約（時単位）。
ディスク	Disk Time - Top 10 Logical Drives	ディスク使用率が高い論理ドライブの上位 10 個。
	Free Megabytes - Logical Drive Status	論理ディスクで使用できる領域に関連する情報。
	Free Space - Low 10 Logical Drives	空き領域が少ない論理ドライブ上位 10 個。
	Free Space - Top 10 Logical Drives	空き領域が多い論理ドライブの上位 10 個。
	Logical Drive Detail	特定の論理ドライブの詳細。
ネットワーク	Access Failure Status（システムアクセスエラーを示すリアルタイムレポート）	システムアクセス試行でのエラー数。
	Access Failure Status（システムアクセスエラーを示す履歴レポート）	最近 24 時間にシステムへのアクセス試行中に発生したエラー数の累積値（時単位）。
	Server Activity Detail	ネットワーク間での通信状況についての情報。
	Server Activity Summary (Multi-Agent)	最近 24 時間の複数のエージェントについてのネットワーク間での通信状況についての要約（時単位）。
	Server Activity Summary（ネットワーク間での通信状況についての情報を示すリアルタイムレポート）	ネットワーク間での通信状況についての情報。
	Server Activity Summary（ネットワーク間での通信状況についての情報を示す履歴レポート）	最近 1 時間のネットワーク間での通信状況（分単位）。
	Server Activity Summary Trend (Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数システムのサーバがネットワークとの間で送受信したデータの稼働状況（日単位）。
	Server Sessions Trend (Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数システムのサーバでアクティブなセッション数（日単位）。

カテゴリー	レポート名	表示する情報
ネットワーク	System Utilization Status	サーバがネットワークとの間で送受信した状況。
プロセス	Application Status	アプリケーションの稼働状況。
	Application Status (8.4)	
	Application Process Count	最近 1 時間の 1 分ごとの，アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況。
	Application Process Count (8.4)	
	Application Process Status	アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況。
	Application Process Status (8.4)	
	CPU Usage - Top 10 Processes	CPU 使用率が高いプロセスの上位 10 個。
	Monitoring Process Detail	最近 1 時間の 1 分ごとの，特定のプロセスについての性能情報。
	Monitoring Process Detail (8.4)	
	Page Faults - Top 10 Processes	ページフォルトが発生した頻度が高いプロセスの上位 10 個。
	Process Detail	特定のプロセスのシステムリソース消費についての詳細。
プロセッサ	CPU Status (Multi-Agent)	最近 24 時間の複数のエージェントについての CPU 使用率の要約（時単位）。
	CPU Trend	最近 1 か月間のユーザーモードと特権モードで実行された CPU 使用率（日単位）。
	CPU Trend (Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数システムの CPU 使用率（日単位）。
	CPU Usage Summary	最近 1 時間の CPU 使用率の要約（分単位）。
メモリー	Memory Available Trend (Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数システムの物理メモリーの空き容量（日単位）。
	Memory Paging	最近 1 時間のページングしたページ数の頻度（分単位）。
	Memory Paging Status (Multi-Agent)	最近 24 時間の複数のエージェントについてのメモリーのページフォルトが発生した状況の要約（時単位）。
	OS Memory Usage Status（メモリー使用量を示すリアルタイムレポート）	物理メモリーの空き容量。
	OS Memory Usage Status（メモリー使用量を示す履歴レポート）	最近 24 時間のシステムの物理メモリーの空き容量の要約（時単位）。
	System Memory Detail	最近 1 時間のシステムの物理メモリーの詳細（分単位）。
予約レポート	Network Segment Detail	予約レポートのため使用できない。
	Network Segment Summary	

Access Failure Status（システムアクセスエラーを示すリアルタイムレポート）

概要

Access Failure Status レポートは，システムアクセス試行でのエラー数をリアルタイムで表示します。表示形式は折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Real-Time/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Errors Access Permissions	OS 起動後に，ユーザーが（クライアントとして）適切に保護されていないファイルにアクセスしているため，ファイルオープンエラーで STATUS_ACCESS_DENIED が発生した回数。※1
Errors Granted Access	OS 起動後に，正常にオープンしているファイルに権限を持たないユーザーがアクセスしたため，アクセス拒否された回数。※1
Errors Logon	OS 起動後に，サーバへログオンに失敗した回数。サーバのセキュリティを破ることを目的とするパスワード推測プログラムなどが使用されているかを示す。※1

Access Failure Status（システムアクセスエラーを示す履歴レポート）

概要

Access Failure Status レポートは，最近 24 時間にシステムへのアクセス試行中に発生したエラー数を，1 時間ごとの累積値で表示します。表示形式は折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Errors Access Permissions	OS 起動後に，ユーザーが（クライアントとして）適切に保護されていないファイルにアクセスしているため，ファイルオープンエラーで STATUS_ACCESS_DENIED が発生した回数。※1
Errors Granted Access	OS 起動後に，正常にオープンしているファイルに権限を持たないユーザーがアクセスしたため，アクセス拒否された回数。※1
Errors Logon	OS 起動後に，サーバへログオンに失敗した回数。サーバのセキュリティを破ることを目的とするパスワード推測プログラムなどが使用されているかを示す。※1

Application Status

概要

Application Status レポートは，アプリケーションの稼働状況をリアルタイムで表示します。表示形式は表です。

注意

このレポートは，PFM - Agent for Platform のバージョンが 11-50 より前の場合に使用します。PFM - Agent for Platform 11-50 以降では，Application Status (8.4)レポートを使用してください。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Application Summary Extension（PD_APP2）

フィールド

フィールド名	説明
Application Exist	プロセス監視の設定で指定されたアプリケーションの状態。NORMAL または ABNORMAL を表示する。 アプリケーションの状態は，監視対象に指定した監視対象の状態を基にして得られた結果。 監視対象の状態を確認するには，Application Process Detail（PD_APPD）レコードで表示されている Monitoring Status を参照する。 NORMAL：監視対象のうちどれかの状態が NORMAL ABNORMAL：監視対象の状態がすべて ABNORMAL
Application Name	プロセス監視の設定で指定された名前。
Application Status	プロセス監視の設定で指定されたアプリケーションの状態。NORMAL または ABNORMAL を表示する。 アプリケーションの状態は，監視対象に指定した監視対象の状態を基にして得られた結果。 監視対象の状態を確認するには，Application Process Detail（PD_APPD）レコードで表示されている Monitoring Status を参照する。 NORMAL：監視対象の状態がすべて NORMAL ABNORMAL：監視対象のうちどれかの状態が ABNORMAL

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Application Process Status	アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには，Application Name フィールドをクリックする。

Application Status (8.4)

概要

Application Status (8.4)レポートは，アプリケーションの稼働状況をリアルタイムで表示します。表示形式は表です。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Application Summary Extension（PD_APP2）

フィールド

フィールド名	説明
Application Exist	プロセス監視の設定で指定されたアプリケーションの状態。NORMAL または ABNORMAL を表示する。 アプリケーションの状態は，監視対象に指定した監視対象の状態を基にして得られた結果。 監視対象の状態を確認するには，Application Process Detail（PD_APPD）レコードで表示されている Monitoring Status を参照する。 NORMAL：監視対象のうちどれかの状態が NORMAL ABNORMAL：監視対象の状態がすべて ABNORMAL
Application Name	プロセス監視の設定で指定された名前。
Application Status	プロセス監視の設定で指定されたアプリケーションの状態。NORMAL または ABNORMAL を表示する。 アプリケーションの状態は，監視対象に指定した監視対象の状態を基にして得られた結果。 監視対象の状態を確認するには，Application Process Detail（PD_APPD）レコードで表示されている Monitoring Status を参照する。 NORMAL：監視対象の状態がすべて NORMAL ABNORMAL：監視対象のうちどれかの状態が ABNORMAL

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Application Process Status (8.4)	アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには，Application Name フィールドをクリックする。

Application Process Count

概要

Application Process Count レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとの，アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。このレポートは，ドリルダウンレポートです。

注意

このレポートは，PFM - Agent for Platform のバージョンが 11-50 より前の場合に使用します。PFM - Agent for Platform 11-50 以降では，Application Process Count (8.4)レポートを使用してください。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/Drilldown Only/

レコード

Application Process Detail（PD_APPD）

フィールド

フィールド名	説明
Application Name	プロセス監視の設定で指定された名前。
Monitoring Condition	監視するプロセスまたはサービスを特定するための条件式。
Monitoring Count	監視条件に一致する稼働中のプロセス数またはサービス数。
Monitoring Field	監視するフィールド。
Monitoring Label	監視条件を識別するための名称。
Monitoring Max	監視数の上限値。
Monitoring Min	監視数の下限値。
Monitoring Number	監視条件の番号。
Monitoring Status	監視数の条件結果。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Monitoring Process Detail	特定のプロセスについての性能情報を表示する。このレポートを表示するには，Monitoring Label フィールドをクリックする。

Application Process Count (8.4)

概要

Application Process Count (8.4)レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとの，アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。このレポートは，ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/Drilldown Only/

レコード

Application Process Detail（PD_APPD）

フィールド

フィールド名	説明
Application Name	プロセス監視の設定で指定された名前。
Monitoring Condition	監視するプロセスまたはサービスを特定するための条件式。
Monitoring Count	監視条件に一致する稼働中のプロセス数またはサービス数。
Monitoring Field	監視するフィールド。
Monitoring Label	監視条件を識別するための名称。
Monitoring Max	監視数の上限値。
Monitoring Min	監視数の下限値。
Monitoring Number	監視条件の番号。
Monitoring Status	監視数の条件結果。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Monitoring Process Detail (8.4)	特定のプロセスについての性能情報を表示する。このレポートを表示するには，Monitoring Label フィールドをクリックする。

Application Process Status

概要

Application Process Status レポートは，アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況をリアルタイムで表示します。表示形式は表です。このレポートは，ドリルダウンレポートです。

注意

このレポートは，PFM - Agent for Platform のバージョンが 11-50 より前の場合に使用します。PFM - Agent for Platform 11-50 以降では，Application Process Status (8.4)レポートを使用してください。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Application Process Detail（PD_APPD）

フィールド

フィールド名	説明
Application Name	プロセス監視の設定で指定された名前。
Monitoring Condition	監視するプロセスまたはサービスを特定するための条件式。
Monitoring Count	監視条件に一致する稼働中のプロセス数またはサービス数。
Monitoring Field	監視するフィールド。
Monitoring Label	監視条件を識別するための名称。
Monitoring Min	監視数の下限値。
Monitoring Max	監視数の上限値。
Monitoring Number	監視条件の番号。
Monitoring Status	監視数の条件結果。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Application Process Count	アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況を表示する。このレポートを表示するには，Monitoring Count フィールドをクリックする。

Application Process Status (8.4)

概要

Application Process Status (8.4)レポートは，アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況をリアルタイムで表示します。表示形式は表です。このレポートは，ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Application Process Detail（PD_APPD）

フィールド

フィールド名	説明
Application Name	プロセス監視の設定で指定された名前。
Monitoring Condition	監視するプロセスまたはサービスを特定するための条件式。
Monitoring Count	監視条件に一致する稼働中のプロセス数またはサービス数。
Monitoring Field	監視するフィールド。
Monitoring Label	監視条件を識別するための名称。
Monitoring Min	監視数の下限値。
Monitoring Max	監視数の上限値。
Monitoring Number	監視条件の番号。
Monitoring Status	監視数の条件結果。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Application Process Count (8.4)	アプリケーションのプロセスおよびサービスごとの稼働状況を表示する。このレポートを表示するには，Monitoring Count フィールドをクリックする。

CPU Status (Multi-Agent)

概要

CPU Status (Multi-Agent)レポートは，最近 24 時間の複数のエージェントについての 1 時間ごとの CPU 使用率の要約を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
% Total Interrupt Time	ハードウェア（システムクロック，マウス，ディスクドライバ，データ通信ライン，NIC，その他周辺機器などの割り込みが発生するデバイス）割り込み処理で実行したプロセッサの使用率（%）。 マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
Agent Instance※3	PFM - Agent 名。
Context Switches/sec	すべてのプロセスのスレッドによって，プロセッサで発生したコンテキストスイッチ（実行スレッドが任意にプロセッサを解放する場合，優先順位が高いスレッドによって割り込まれる場合，Executive またはサブシステムサービスを使用するためにユーザーモードと特権モードの間で切り替わる場合）の割合（／秒）。
CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
Privileged CPU %	特権モードで実行したプロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを特権モードで実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
Processor Queue Length	プロセッサのキューにある実行準備ができているスレッドの数。通常，キューの長さが継続的に 2 を超える状態の場合，プロセッサの混雑を示す。※1
System Calls/sec	プロセッサで，実行中のプロセスがシステムサービスルーチンを呼び出した数の割合（／秒）。
User CPU %	ユーザーモードで実行したプロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドをユーザーモードで実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。

CPU Trend

概要

CPU Trend レポートは，日単位で最近 1 か月間のユーザーモードと特権モードで実行された CPU 使用率を表示します。表示形式は折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Monthly Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Privileged CPU %	特権モードで実行したプロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを特権モードで実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
User CPU %	ユーザーモードで実行したプロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドをユーザーモードで実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。

CPU Trend (Multi-Agent)

概要

CPU Trend (Multi-Agent)レポートは，日単位で最近 1 か月間の複数システムの CPU 使用率を表示します。表示形式は折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Monthly Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。

CPU Usage - Top 10 Processes

概要

CPU Usage - Top 10 Processes レポートは，CPU 使用率が高いプロセスの上位 10 個をリアルタイムで表示します。表示形式は集合横棒グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Process Detail Interval（PD_PDI）

フィールド

フィールド名	説明
CPU %	プロセスがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。 Process Detail レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
PID	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。
Program	実行プログラム名。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Process Detail	選択したプロセスが使用するシステムリソースの詳細を表示する。このレポートを表示するには，CPU %フィールドをクリックする。

CPU Usage Summary

概要

CPU Usage Summary レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとの CPU 使用率の要約を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
% Total Interrupt Time	ハードウェア（システムクロック，マウス，ディスクドライバ，データ通信ライン，NIC，その他周辺機器などの割り込みが発生するデバイス）割り込み処理で実行したプロセッサの使用率（%）。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
Context Switches/sec	すべてのプロセスのスレッドによって，プロセッサで発生したコンテキストスイッチ（実行スレッドが任意にプロセッサを解放する場合，優先順位が高いスレッドによって割り込まれる場合，Executive またはサブシステムサービスを使用するためにユーザーモードと特権モードの間で切り替わる場合）の割合（／秒）。
CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
Privileged CPU %	特権モードで実行したプロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを特権モードで実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。 このフィールドは，CPU %フィールドの構成要素である。
Processor Queue Length	プロセッサのキューにある実行準備ができているスレッドの数。通常，キューの長さが継続的に 2 を超える状態の場合，プロセッサの混雑を示す。※1
System Calls/sec	プロセッサで，実行中のプロセスがシステムサービスルーチンを呼び出した数の割合（／秒）。
Total Interrupts/sec	プロセッサが，ハードウェア（システムクロック，マウス，ディスクドライバ，データ通信ライン，NIC，その他周辺機器などの割り込みが発生するデバイス）割り込みを受信処理した数の割合（／秒）。 DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みは含まれない。通常，システムの活動状況がない状態で，このフィールドが大幅に増加している状態の場合，低速なデバイスが存在するなどのハードウェアの問題を示す。
User CPU %	ユーザーモードで実行したプロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドをユーザーモードで実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。

フィールド名	説明
User CPU %	このフィールドは，CPU %の構成要素である。

Disk Time - Top 10 Logical Drives

概要

Disk Time - Top 10 Logical Drives レポートは，ディスク使用率が高い論理ドライブの上位 10 個をリアルタイムで表示します。表示形式は集合横棒グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Logical Disk Overview（PI_LOGD）

フィールド

フィールド名	説明
% Disk Time	読み込みまたは書き込み要求の処理でディスクがビジーだった経過時間の割合（%）。通常，継続的に 100%に近い状態の場合，ディスクが激しく使用されていることを示す。 Logical Drive Detail レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
ID	論理ディスクボリューム名。(例)C:や D:など

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Logical Drive Detail	選択した論理ドライブの詳細を表示する。このレポートを表示するには，% Disk Time フィールドをクリックする。

File System I/O Summary

概要

File System I/O Summary レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとの I/O 使用量の要約を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
File Control Ops/sec	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み以外の操作が発生した数の割合（／秒）。
File Data Ops/sec	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み操作が発生した数の割合（／秒）。
File Read Ops/sec	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込み操作が発生した数の割合（／秒）。
File Write Ops/sec	プロセッサで，ファイルシステムのデータの書き込み操作が発生した数の割合（／秒）。
Page Reads/sec	ページフォルトが発生した時にページインした操作数の割合（／秒）。
Page Writes/sec	ページフォルトが発生した時にページアウトした操作数の割合（／秒）。
Pages Input/sec	ページフォルトが発生した時にページインしたページ数の割合（／秒）。
Pages Output/sec	ページフォルトが発生した時にページアウトしたページ数の割合（／秒）。

Free Megabytes - Logical Drive Status

概要

Free Megabytes - Logical Drive Status レポートは，論理ディスクで使用できる領域に関連する情報をリアルタイムで表示します。表示形式は表と集合横棒グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Real-Time/

レコード

Logical Disk Overview（PI_LOGD）

フィールド

フィールド名	説明
ID	論理ディスクボリューム名。(例)C:や D:など
% Free Space	使用可能な領域全体に対するディスクの空き領域（%）。※1
Drive Type	ディスクのタイプ。有効な値は次のとおり。 • FIXED • NO ROOT DIR • REMOVABLE • DRIVE UNKNOWN
Free Mbytes	使用可能なディスク領域全体に対する未使用領域（メガバイト単位）。※1
Page File Size Mbytes	ドライブに割り当てられた，有効なページングファイルの物理サイズ（メガバイト単位）。※1 ※2
Total Size Mbytes	ディスクのサイズ（メガバイト単位）。※1 ※2

Free Space - Low 10 Logical Drives

概要

Free Space - Low 10 Logical Drives レポートは，空き領域が少ない論理ドライブ上位 10 個をリアルタイムで表示します。表示形式は集合横棒グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Logical Disk Overview（PI_LOGD）

フィールド

フィールド名	説明
% Free Space	使用可能な領域全体に対するディスクの空き領域（%）。※1 Logical Drive Detail レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
ID	論理ディスクボリューム名。(例)C:や D:など

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Logical Drive Detail	選択した論理ドライブの詳細を表示する。このレポートを表示するには，% Free Space フィールドをクリックする。

Free Space - Top 10 Logical Drives

概要

Free Space - Top 10 Logical Drives レポートは，空き領域が多い論理ドライブの上位 10 個をリアルタイムで表示します。表示形式は集合横棒グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Logical Disk Overview（PI_LOGD）

フィールド

フィールド名	説明
% Free Space	使用可能な領域全体に対するディスクの空き領域（%）。※1 Logical Drive Detail レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
ID	論理ディスクボリューム名。(例)C:や D:など

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Logical Drive Detail	選択した論理ドライブの詳細を表示する。このレポートを表示するには，% Free Space フィールドをクリックする。

Logical Drive Detail

概要

Logical Drive Detail レポートは，特定の論理ドライブの詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は一覧です。このレポートは，ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Logical Disk Overview（PI_LOGD）

フィールド

フィールド名	説明
% Disk Read Time	読み込み要求の処理でディスクがビジーだった経過時間の割合（%）。
% Disk Write Time	書き込み要求の処理でディスクがビジー状態だった経過時間の割合（%）。
% Free Space	使用可能な領域全体に対するディスクの空き領域（%）。※1
Avg Disk Bytes/Read	読み込み処理中にディスクから転送された平均値（バイト数／処理）。
Avg Disk Bytes/Write	書き込み処理中にディスクから転送された平均値（バイト数／処理）。
Avg Disk Read Queue Length	ディスクのキューに入った読み込み要求数の平均値。
Avg Disk Secs/Read	ディスクからのデータの読み込み処理の平均時間（秒単位）。
Avg Disk Secs/Write	ディスクへのデータの書き込み処理の平均時間（秒単位）。
Avg Disk Write Queue Length	ディスクのキューに入った書き込み要求数の平均値。
Current Disk Queue Length	ディスクに残っている処理待ちまたは処理中のキューの要求数。通常，キューの長さが継続的に 2 を超える状態の場合，ディスクの混雑を示す。※1
Disk Read Bytes/sec	読み込み処理中にディスクにデータが転送される速度（バイト／秒）。
Disk Reads/sec	ディスクへの読み込み処理の速度（／秒）。
Disk Write Bytes/sec	書き込み処理中にディスクにデータが転送される速度（バイト／秒）。
Disk Writes/sec	ディスクへの書き込み処理の速度（／秒）。
Disk Xfers/sec	ディスクへの読み込みおよび書き込み処理の速度（／秒）。
Drive Type	ディスクのタイプ。有効な値は次のとおり。 • FIXED • NO ROOT DIR • REMOVABLE • DRIVE UNKNOWN

フィールド名	説明
Free Mbytes	使用可能なディスク領域全体に対する未使用領域（メガバイト単位）。※1
ID	論理ディスクボリューム名。(例)C:や D:など
Page File Size Mbytes	ドライブに割り当てられた，有効なページングファイルの物理サイズ（メガバイト単位）。※1 ※2
Total Size Mbytes	ディスクのサイズ（メガバイト単位）。※1 ※2

Memory Available Trend (Multi-Agent)

概要

Memory Available Trend (Multi-Agent)レポートは，日単位で最近 1 か月間の複数システムの物理メモリーの空き容量を表示します。表示形式は折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Monthly Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Available Mbytes	物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位)。プロセスへの割り当て，またはシステムがすぐに利用できるゼロメモリー，空きメモリー，およびスタンバイメモリー（キャッシュ済み）の領域の合計。通常，継続的に Total Physical Mem Mbytes フィールドの 5%より少ない状態の場合，過度なページングが発生していることを示す。※1

Memory Paging

概要

Memory Paging レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとのページングしたページ数の頻度を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Page Faults/sec	ページフォルトが発生した数の割合（／秒）。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーのボトルネックを示す。
Page Reads/sec	ページフォルトが発生した時にページインした操作数の割合（／秒）。
Page Writes/sec	ページフォルトが発生した時にページアウトした操作数の割合（／秒）。
Pages Input/sec	ページフォルトが発生した時にページインしたページ数の割合（／秒）。
Pages Output/sec	ページフォルトが発生した時にページアウトしたページ数の割合（／秒）。
Transition Faults/sec	ページフォルトが発生した時に，共有している別のプロセスによって使われていたページ，または更新されたページリストもしくはスタンバイリストにあるページを回復することによって，ページングしなかった数の割合（／秒）。

Memory Paging Status (Multi-Agent)

概要

Memory Paging Status (Multi-Agent)レポートは，最近 24 時間の複数のエージェントについての，1 時間ごとのメモリーのページフォルトが発生した状況の要約を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Agent Instance※3	PFM - Agent 名。
Page Faults/sec	ページフォルトが発生した数の割合（／秒）。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーのボトルネックを示す。
Page Reads/sec	ページフォルトが発生した時にページインした操作数の割合（／秒）。
Page Writes/sec	ページフォルトが発生した時にページアウトした操作数の割合（／秒）。
Pages Input/sec	ページフォルトが発生した時にページインしたページ数の割合（／秒）。
Pages Output/sec	ページフォルトが発生した時にページアウトしたページ数の割合（／秒）。
Pages/sec	ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（／秒）。 Pages Input/sec フィールドと Pages Output/sec フィールドの合計値の割合。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがある。
Transition Faults/sec	ページフォルトが発生した時に，共有している別のプロセスによって使われていたページ，または更新されたページリストもしくはスタンバイリストにあるページを回復することによって，ページングしなかった数の割合（／秒）。

Monitoring Process Detail

概要

Monitoring Process Detail レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとの，特定のプロセスについての性能情報を表示します。表示形式は折れ線グラフです。このレポートは，ドリルダウンレポートです。

注意

このレポートは，PFM - Agent for Platform のバージョンが 11-50 より前の場合に使用します。PFM - Agent for Platform 11-50 以降では，Monitoring Process Detail (8.4)レポートを使用してください。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/Drilldown Only/

レコード

Application Process Interval（PD_APSI）

フィールド

フィールド名	説明
Application Name	プロセス監視の設定で指定された名前。
CPU %	プロセスがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。
Handle Count	プロセスによってオープンしているハンドル数。
Monitoring Field	監視するフィールド。
Monitoring Label	監視条件を識別するための名称。
Monitoring Number	監視条件の番号。
Page Faults/sec	プロセス内でページフォルトが発生した割合（／秒）。
Page File Kbytes	プロセスがページングファイルで使用している仮想メモリー領域のサイズ（キロバイト単位）。
PID	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。
Pool Paged Kbytes	プロセスが使用しているページング可能なメモリーサイズ（キロバイト単位）。
Pool Nonpaged Kbytes	プロセスが使用しているページング不可能なメモリーサイズ（キロバイト単位）。
Priority Base	プロセスの基本優先順位。値が大きいほど基本優先度が高い。値は次のとおり。 • 24：リアルタイム

フィールド名	説明
Priority Base	• 13：高 • 10：通常以上 • 8：通常 • 6：通常以下 • 4：低
Private Kbytes	プロセスが，ほかのプロセスと共用できないように割り振ったメモリーのサイズ（キロバイト単位）。
Privileged CPU %	プロセスが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。
Program Name	プログラム名。
Thread Count	プロセス内のスレッド（命令を実行する単位）の数。プロセスを実行すると最低 1 つのスレッドが起動される。
User	プロセスの実行ユーザー名。なお，プロセスのセキュリティ ID に対応するアカウント名が見つからない場合「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行ユーザー名が取得できない場合「Unknown」が格納される。
User CPU %	プロセスがユーザーモードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。
Virtual Kbytes	プロセスが使用している仮想アドレス空間のサイズ（キロバイト単位）。
Working Set Kbytes	プロセスで使用しているメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）のサイズ（キロバイト単位）。

Monitoring Process Detail (8.4)

概要

Monitoring Process Detail (8.4)レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとの，特定のプロセスについての性能情報を表示します。表示形式は折れ線グラフです。このレポートは，ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/Drilldown Only/

レコード

Application Process Interval（PD_APSI）

フィールド

フィールド名	説明
Application Name	プロセス監視の設定で指定された名前。
CPU %	プロセスがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。
Handle Count	プロセスによってオープンしているハンドル数。
Monitoring Field	監視するフィールド。
Monitoring Label	監視条件を識別するための名称。
Monitoring Number	監視条件の番号。
Page Faults/sec	プロセス内でページフォルトが発生した割合（／秒）。
Page File Kbytes	プロセスがページングファイルで使用している仮想メモリー領域のサイズ（キロバイト単位）。
PID	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。
Pool Paged Kbytes	プロセスが使用しているページング可能なメモリーサイズ（キロバイト単位）。
Pool Nonpaged Kbytes	プロセスが使用しているページング不可能なメモリーサイズ(キロバイト単位)。
Priority Base	プロセスの基本優先順位。値が大きいほど基本優先度が高い。値は次のとおり。 • 24：リアルタイム • 13：高 • 10：通常以上 • 8：通常 • 6：通常以下

フィールド名	説明
Priority Base	• 4：低
Private Kbytes	プロセスが，ほかのプロセスと共用できないように割り振ったメモリーのサイズ（キロバイト単位）。
Privileged CPU %	プロセスが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。
Program Name	プログラム名。
Thread Count	プロセス内のスレッド（命令を実行する単位）の数。プロセスを実行すると最低 1 つのスレッドが起動される。
User	プロセスの実行ユーザー名。なお，プロセスのセキュリティ ID に対応するアカウント名が見つからない場合「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行ユーザー名が取得できない場合「Unknown」が格納される。
User CPU %	プロセスがユーザーモードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。
Virtual Kbytes	プロセスが使用している仮想アドレス空間のサイズ（キロバイト単位）。
Working Set Kbytes	プロセスで使用しているメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）のサイズ（キロバイト単位）。

OS Memory Usage Status（メモリー使用量を示すリアルタイムレポート）

概要

OS Memory Usage Status レポートは，物理メモリーの空き容量をリアルタイムで表示します。表示形式は一覧と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Real-Time/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Available Mbytes	物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）。プロセスへの割り当て，またはシステムがすぐに利用できるゼロメモリー，空きメモリー，およびスタンバイメモリー（キャッシュ済み）の領域の合計。 通常，継続的に Total Physical Mem Mbytes フィールドの 5%より少ない状態の場合，過度なページングが発生していることを示す。※1
Cache Faults/sec	ファイルシステムキャッシュでページフォルトが発生した数の割合（／秒）。
Cache Mbytes	ファイルシステムキャッシュの使用中のサイズ（メガバイト単位）。※1
Page Faults/sec	ページフォルトが発生した数の割合（／秒）。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーのボトルネックを示す。
Pages/sec	ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（／秒）。 Pages Input/sec フィールドと Pages Output/sec フィールドの合計値の割合。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがある。

OS Memory Usage Status（メモリー使用量を示す履歴レポート）

概要

OS Memory Usage Status レポートは，最近 24 時間のシステムの 1 時間ごとの物理メモリーの空き容量の要約を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Available Mbytes	物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）。プロセスへの割り当て，またはシステムがすぐに利用できるゼロメモリー，空きメモリー，およびスタンバイメモリー（キャッシュ済み）の領域の合計。通常，継続的に Total Physical Mem Mbytes フィールドの 5%より少ない状態の場合，過度なページングが発生していることを示す。※1
Cache Faults/sec	ファイルシステムキャッシュでページフォルトが発生した数の割合（／秒）。
Cache Mbytes	ファイルシステムキャッシュの使用中のサイズ（メガバイト単位）。※1
Page Faults/sec	ページフォルトが発生した数の割合（／秒）。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーのボトルネックを示す。
Pages/sec	ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（／秒）。 Pages Input/sec フィールドと Pages Output/sec フィールドの合計値の割合。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがある。

Page Faults - Top 10 Processes

概要

Page Faults - Top 10 Processes レポートは，ページフォルトが発生した頻度が高いプロセスの上位 10 個をリアルタイムで表示します。表示形式は集合横棒グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Process Detail Interval（PD_PDI）

フィールド

フィールド名	説明
Page Faults/sec	プロセス内でページフォルトが発生した割合（／秒）。 Process Detail レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
PID	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。
Program	実行プログラム名。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Process Detail	選択したプロセスが使用するシステムリソースの詳細を表示する。このレポートを表示するには，Page Faults/sec フィールドをクリックする。

Process Detail

概要

Process Detail レポートは，特定のプロセスのシステムリソース消費についての詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は一覧です。

このレポートは，ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Process Detail Interval（PD_PDI）

フィールド

フィールド名	説明
CPU %	プロセスがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。 マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。
Handle Count	プロセスによってオープンしているハンドル数。※1
Page Faults/sec	プロセス内でページフォルトが発生した割合（／秒）。
Page File Kbytes	プロセスがページングファイルで使用している仮想メモリー領域のサイズ（キロバイト単位）。※1
PID	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。
Pool Nonpaged Kbytes	プロセスが使用しているページング不可能なメモリーサイズ（キロバイト単位）。※1
Pool Paged Kbytes	プロセスが使用しているページング可能なメモリーサイズ（キロバイト単位）。※1
Priority Base	プロセスの基本優先順位。値が大きいほど基本優先度が高い。値は次のとおり。 • 24：リアルタイム • 13：高 • 10：通常以上 • 8：通常 • 6：通常以下 • 4：低
Private Kbytes	プロセスが，ほかのプロセスと共用できないように割り振ったメモリーのサイズ（キロバイト単位）。※1
Privileged CPU %	プロセスが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。

フィールド名	説明
Program	実行プログラム名。
Thread Count	プロセス内のスレッド（命令を実行する単位）の数。 プロセスを実行すると最低 1 つのスレッドが起動される。※1
User	プロセスの実行ユーザー名。 なお，プロセスのセキュリティ ID に対応するユーザー名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行ユーザー名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。
User CPU %	プロセスがユーザーモードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。 マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。
Virtual Kbytes	プロセスが使用している仮想アドレス空間のサイズ（キロバイト単位）。※1
Working Set Kbytes	プロセスで使用しているメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）のサイズ（キロバイト単位）。※1

Process Trend

概要

Process Trend レポートは，日単位で最近 1 か月間のシステムで実行されたプロセス数を表示します。表示形式は折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Monthly Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Processes	メモリー上に保持しているアクティブなプロセス数。※1

Server Activity Detail

概要

Server Activity Detail レポートは，ネットワーク間での通信状況についての情報をリアルタイムで表示します。表示形式は一覧です。

このレポートは，ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Bytes Rcvd/sec	サーバがネットワークから受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Bytes Xmitd/sec	サーバがネットワークに送信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Net Errors/sec	リダイレクタとサーバで重大な通信障害のため，予期しないエラーが発生した割合（／秒）。
Pkts Rcvd/sec	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を受信した割合（／秒）。
Pkts Xmitd/sec	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を送信した割合（／秒）。
Pkts/sec	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を処理した割合（／秒）。
Redir Bytes Rcvd/sec	ネットワークからリダイレクタに受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Redir Bytes Total/sec	リダイレクタがネットワークから送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Redir Bytes Xmitd/sec	リダイレクタからネットワークに送信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Redir File Data Ops/sec	リダイレクタがデータ操作を処理している割合（／秒）。
Redir File Read Ops/sec	アプリケーションがリダイレクタにデータを要求した割合（／秒）。
Redir File Write Ops/sec	アプリケーションがリダイレクタにデータを送信した割合（／秒）。
Redir Server Sessions	OS 起動後に，リダイレクタが管理しているセキュリティオブジェクトのセッション数。※1
Server Disconnects	OS 起動後に，サーバがリダイレクタとの接続を切断した回数。※1

フィールド名	説明
Server Reconnects	OS 起動後に，リダイレクタが新しいアクティブ要求を完了するためにサーバに再接続する必要があった回数。※1
Server Sessions	サーバでアクティブなセッション数。※1
Server Sessions Hung	リモートサーバからの応答がなくタイムアウトになり，処理を継続できないアクティブなセッション数。※1

Server Activity Summary (Multi-Agent)

概要

Server Activity Summary (Multi-Agent)レポートは，最近 24 時間の複数のエージェントについての 1 時間ごとのネットワーク間での通信状況についての要約を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Agent Instance※3	PFM - Agent 名。
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Net Errors/sec	リダイレクタとサーバで重大な通信障害のため，予期しないエラーが発生した割合（／秒）。
Pkts/sec	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を処理した割合（／秒）。
Redir Bytes Total/sec	リダイレクタがネットワークから送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Redir File Data Ops/sec	リダイレクタがデータ操作を処理している割合（／秒）。
Redir Server Sessions	OS 起動後に，リダイレクタが管理しているセキュリティオブジェクトのセッション数。※1
Server Sessions	サーバでアクティブなセッション数。※1

Server Activity Summary（ネットワーク間での通信状況についての情報を示すリアルタイムレポート）

概要

Server Activity Summary レポートは，ネットワーク間での通信状況についての情報をリアルタイムで表示します。表示形式は一覧と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。 Server Activity Detail レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
Net Errors/sec	リダイレクタとサーバで重大な通信障害のため，予期しないエラーが発生した割合（／秒）。
Pkts/sec	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を処理した割合（／秒）。
Redir Bytes Total/sec	リダイレクタがネットワークから送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Redir File Data Ops/sec	リダイレクタがデータ操作を処理している割合（／秒）。
Redir Server Sessions	OS 起動後に，リダイレクタが管理しているセキュリティオブジェクトのセッション数。※1
Server Sessions	サーバでアクティブなセッション数。※1

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Server Activity Detail	サーバの稼働状況の詳細を表示する。このレポートを表示するには，Bytes Total/sec フィールドをクリックする。

Server Activity Summary（ネットワーク間での通信状況についての情報を示す履歴レポート）

概要

Server Activity Summary レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとのネットワーク間での通信状況について表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Net Errors/sec	リダイレクタとサーバで重大な通信障害のため，予期しないエラーが発生した割合（／秒）。
Pkts/sec	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を処理した割合（／秒）。
Redir Bytes Total/sec	リダイレクタがネットワークから送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Redir File Data Ops/sec	リダイレクタがデータ操作を処理している割合（／秒）。
Redir Server Sessions	OS 起動後に，リダイレクタが管理しているセキュリティオブジェクトのセッション数。※1
Server Sessions	サーバでアクティブなセッション数。※1

Server Activity Summary Trend (Multi-Agent)

概要

Server Activity Summary Trend (Multi-Agent)レポートは，日単位で最近 1 か月間の複数システムのサーバがネットワークとの間で送受信したデータの稼働状況を表示します。表示形式は折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Monthly Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。

Server Sessions Trend (Multi-Agent)

概要

Server Sessions Trend (Multi-Agent)レポートは，日単位で最近 1 か月間の複数システムのサーバでアクティブなセッション数を表示します。表示形式は折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Monthly Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Server Sessions	サーバでアクティブなセッション数。※1

System Memory Detail

概要

System Memory Detail レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとのシステムの物理メモリーの詳細を表示します。表示形式は表です。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Available Mbytes	物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）。プロセスへの割り当て，またはシステムがすぐに利用できるゼロメモリー，空きメモリー，およびスタンバイメモリー（キャッシュ済み）の領域の合計。 通常，継続的に Total Physical Mem Mbytes フィールドの 5%より少ない状態の場合，過度なページングが発生していることを示す。※1
Cache Faults/sec	ファイルシステムキャッシュでページフォルトが発生した数の割合（／秒）。
Cache Mbytes	ファイルシステムキャッシュの使用中のサイズ（メガバイト単位）。※1
Copy Read Hits %	ファイルシステムキャッシュのページからの読み込み要求の割合（%）。
Copy Reads/sec	キャッシュからアプリケーションのバッファにメモリーコピー処理を含む，ファイルシステムキャッシュのページから読み込みが発生した割合（／秒）。
Pages/sec	ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（／秒）。 Pages Input/sec フィールドと Pages Output/sec フィールドの合計値の割合。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがある。
Pool Nonpaged Bytes	システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページアウト不可能な物理メモリーのサイズ（キロバイト単位）。 通常，サーバの活動状況が増加していない状態でこのフィールドが一様に増加している状態の場合，メモリーリークを生じているプロセスが実行されている可能性がある。※1
Pool Paged Bytes	システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページアウト可能な物理メモリーのサイズ（キロバイト単位）。※1
System Cache Resident Bytes	OS コード（Ntoskrnl.exe，Hal.dll，ブートドライバ，Ntldr/osloader が読み込むファイルシステム）が使用する，ファイルシステムキャッシュ内のページング可能な物理メモリーサイズ（バイト単位）。※1

System Overview（システムの概要を示すリアルタイムレポート）

概要

System Overview レポートは，システム全体の概要をリアルタイムで表示します。表示形式は一覧と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Available Mbytes	物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）。プロセスへの割り当て，またはシステムがすぐに利用できるゼロメモリー，空きメモリー，およびスタンバイメモリー（キャッシュ済み）の領域の合計。 通常，継続的に Total Physical Mem Mbytes フィールドの 5%より少ない状態の場合，過度なページングが発生していることを示す。※1
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。Server Activity Summary レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。CPU Usage - Top 10 Processes レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
File Control Ops/sec	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み以外の操作が発生した数の割合（／秒）。
File Data Ops/sec	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み操作が発生した数の割合（／秒）。 Disk Time - Top 10 Logical Drives レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
Page Faults/sec	ページフォルトが発生した数の割合（／秒）。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーのボトルネックを示す。Page Faults - Top 10 Processes レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
Pages/sec	ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（／秒）。Pages Input/sec フィールドと Pages Output/sec フィールドの合計値の割合。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがある。
Transition Faults/sec	ページフォルトが発生した時に，共有している別のプロセスによって使われていたページ，または更新されたページリストもしくはスタンバイリストにあるページを回復することによって，ページングしなかった数の割合（／秒）。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Free Space - Top 10 Logical Drives	空き容量が多い論理ドライブの上位 10 個をリアルタイムで表示する。
Network Segment Summary	予約レポートのため使用できない。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
CPU Usage - Top 10 Processes	CPU 使用量が高い上位 10 個のプロセスを表示する。このレポートを表示するには，CPU %フィールドをクリックする。
Disk Time - Top 10 Logical Drives	ディスク使用率が高い上位 10 個の論理ドライブの使用状況を表示する。このレポートを表示するには，File Data Ops/sec フィールドをクリックする。
Page Faults - Top 10 Processes	ページフォルトが発生した頻度が高いプロセスの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには，Page Faults/sec フィールドをクリックする。
Server Activity Summary	ネットワーク間での通信状況についての情報をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには，Bytes Total/sec フィールドをクリックする。

System Overview（システムの概要を示す履歴レポート）

概要

System Overview レポートは，最近 1 時間の 1 分ごとのシステムの概要を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。Server Activity Summary レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。CPU Usage Summary レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
File Control Ops/sec	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み以外の操作が発生した数の割合（／秒）。
File Data Ops/sec	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み操作が発生した数の割合（／秒）。 File System I/O Summary レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
Page Faults/sec	ページフォルトが発生した数の割合（／秒）。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーのボトルネックを示す。Memory Paging レポートを表示するには，このフィールドをクリックする。
Pages/sec	ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（／秒）。Pages Input/sec フィールドと Pages Output/sec フィールドの合計値の割合。通常，継続的に 5 を超える状態の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっているおそれがある。
Transition Faults/sec	ページフォルトが発生した時に，共有している別のプロセスによって使われていたページ，または更新されたページリストもしくはスタンバイリストにあるページを回復することによって，ページングしなかった数の割合（／秒）。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
System Memory Detail	最近 1 時間の 1 分ごとのオペレーティングシステムによるメモリー使用量の詳細を表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
CPU Usage Summary	最近 1 時間の 1 分ごとの CPU 使用量の要約を表示する。このレポートを表示するには，CPU %フィールドをクリックする。
File System I/O Summary	最近 1 時間の 1 分ごとの I/O 使用量の要約を表示する。このレポートを表示するには，File Data Ops/sec フィールドをクリックする。
Memory Paging	最近 1 時間の 1 分ごとのページングしたページ数の頻度を表示する。このレポートを表示するには，Page Faults/sec フィールドをクリックする。
Server Activity Summary	ネットワーク間での通信状況についての情報をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには，Bytes Total/sec フィールドをクリックする。

System Utilization Status

概要

System Utilization Status レポートは，サーバがネットワークとの間で送受信した状況をリアルタイムで表示します。表示形式は一覧と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Real-Time/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
Processor Queue Length	プロセッサのキューにある実行準備ができているスレッドの数。通常，キューの長さが継続的に 2 を超える状態の場合，プロセッサの混雑を示す。※1
Redir Bytes Total/sec	リダイレクタがネットワークから送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Server Sessions	サーバでアクティブなセッション数。※1

Workload Status

概要

Workload Status レポートは，システムのワークロード関連データをリアルタイムで表示します。表示形式は一覧と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Real-Time/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Context Switches/sec	すべてのプロセスのスレッドによって，プロセッサで発生したコンテキストスイッチ（実行スレッドが任意にプロセッサを解放する場合，優先順位が高いスレッドによって割り込まれる場合，Executive またはサブシステムサービスを使用するためにユーザーモードと特権モードの間で切り替わる場合）の割合（／秒）。
CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
Processes	メモリー上に保持しているアクティブなプロセス数。※1
Processor Queue Length	プロセッサのキューにある実行準備ができているスレッドの数。通常，キューの長さが継続的に 2 を超える状態の場合，プロセッサの混雑を示す。※1
Server Sessions	サーバでアクティブなセッション数。※1
System Calls/sec	プロセッサで，実行中のプロセスがシステムサービスルーチンを呼び出した数の割合（／秒）。

Workload Status (Multi-Agent)

概要

Workload Status (Multi-Agent)レポートは，最近 24 時間の複数のシステムについての，1 時間ごとのワークロード関連データの要約を表示します。表示形式は表と折れ線グラフです。

格納先

Reports/Windows/Operating System/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

System Overview（PI）

フィールド

フィールド名	説明
Agent Instance	PFM - Agent 名。
Bytes Total/sec	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。
Context Switches/sec	すべてのプロセスのスレッドによって，プロセッサで発生したコンテキストスイッチ(実行スレッドが任意にプロセッサを解放する場合，優先順位が高いスレッドによって割り込まれる場合，Executive またはサブシステムサービスを使用するためにユーザーモードと特権モードの間で切り替わる場合）の割合（／秒）。
CPU %	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。プロセッサ環境に関わらず最大値は 100 で表示される。
Processes	メモリー上に保持しているアクティブなプロセス数。※1
Processor Queue Length	プロセッサのキューにある実行準備ができているスレッドの数。通常，キューの長さが継続的に 2 を超える状態の場合，プロセッサの混雑を示す。※1
Server Sessions	サーバでアクティブなセッション数。※1
System Calls/sec	プロセッサで，実行中のプロセスがシステムサービスルーチンを呼び出した数の割合(／秒)。

8 レコード

この章では，PFM - Agent for Platform のレコードについて説明します。各レコードのパフォーマンスデータの収集方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の Performance Management の機能について説明している章，または「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

データモデルについて

各 PFM - Agent が持つレコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。各 PFM - Agent と，その PFM - Agent が持つデータモデルには，それぞれ固有のバージョン番号が与えられています。PFM - Agent for Platform のデータモデルのバージョンについては，「付録 H　バージョン互換」を参照してください。

各 PFM - Agent のデータモデルのバージョンは，PFM - Web Console の［エージェント階層］画面でエージェントのプロパティを表示して確認してください。

データモデルについては，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

レコードの記載形式

この章では，PFM - Agent for Platform のレコードをアルファベット順に記載しています。各レコードの説明は，次の項目から構成されています。

機能

各レコードに格納されるパフォーマンスデータの概要および注意事項について説明します。

デフォルト値および変更できる値

各レコードに設定されているパフォーマンスデータの収集条件のデフォルト値およびユーザーが変更できる値を表で示します。「デフォルト値および変更できる値」に記載している項目とその意味を次の表に示します。この表で示す各項目については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

表 8-1　デフォルト値および変更できる値

項目	意味	変更可否
Collection Interval	パフォーマンスデータの収集間隔（秒単位）。	○：変更できる ×：変更できない
Collection Offset※1	パフォーマンスデータの収集を開始するオフセット値（秒単位）。 オフセット値については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。 また，パフォーマンスデータの収集開始時刻については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。	
Log	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか。 Yes：記録する。ただし，「Collection Interval=0」の場合，記録しない。 No：記録しない。	
LOGIF	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうかの条件。	
Over 10 Sec Collection Time※2	システム構成によって，レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうか。 Yes：10 秒以上掛かることがある。 No：10 秒掛からない。	
Sync Collection With※3	レコードのプロパティの［Description］の値に表示されているレコードと同期を取ってパフォーマンスデータを収集するかどうか。詳細は，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。	

項目	意味	変更可否
Realtime Report Data Collection Mode※2	リアルタイムレポートの表示モードを指定。 Reschedule：再スケジュールモード Temporary Log：一時保存モード なお，Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには，一時保存モード（Temporary Log）を指定する必要がある。	○：変更できる ×：変更できない

注※1

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

注※2

履歴収集優先機能が有効の場合に表示されます。

注※3

Sync Collection With の表示がある場合，Collection Interval と Collection Offset は表示されません。

ODBC キーフィールド

PFM - Manager または PFM - Base で，Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な主キーを示します。ODBC キーフィールドには，各レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。ここで示すのは，各レコード固有の ODBC キーフィールドです。複数インスタンスレコードだけが，固有の ODBC キーフィールドを持っています。

各レコード共通の ODBC キーフィールドについては，「ODBC キーフィールド一覧」を参照してください。

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間を示します。ライフタイムについては，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

レコードサイズ

1 回の収集で各レコードに格納されるパフォーマンスデータの容量を示します。

フィールド

各レコードのフィールドについて表で説明します。表の各項目について次に説明します。

- PFM - View 名（PFM - Manager 名）
  - PFM - View 名
    PFM - Web Console で表示されるフィールド名（PFM - View 名）を示します。

- PFM - Manager 名

  PFM - Manager で，SQL を使用して Store データベースに格納されているフィールドのデータを利用する場合，SQL 文で記述するフィールド名（PFM - Manager 名）を示します。

  SQL 文では，先頭に各レコードのレコード ID を付加した形式で記述します。例えば，Process Detail（PD）レコードの Interval（INTERVAL）フィールドの場合，「PD_INTERVAL」と記述します。

- 説明

  各フィールドに格納されるパフォーマンスデータについて説明します。

  表中の※は，フィールドの値が，収集時に OS から返された最新の監視値であることを示します。

  各フィールドのパフォーマンスデータの求め方には，次の種類があります。

  - 今回収集したデータと前回のインターバルで収集したデータによって求められた平均や割合を求めるもの。
  - 今回収集したデータだけで求められるもの（OS 内部で累積された値を含む。表中の※が該当する）。
  - ほかのフィールドのデータから求めるもの（各レコードのフィールドの表にある「データソース」参照）。

  特に断り書きがない場合，データの収集間隔によって求められる値となります。

- 要約

  Agent Store がデータを要約するときの方法（要約ルール）を示します。要約ルールについては，「要約ルール」を参照してください。

- 形式

  char 型や float 型など，各フィールドの値のデータ型を示します。データ型については，「データ型一覧」を参照してください。

- デルタ

  累積値として収集するデータに対し，変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。デルタについては，「フィールドの値」を参照してください。

- サポート対象外

  各フィールドで，サポート対象外の Windows のバージョンを示します。

  - 2008：Windows Server 2008 でサポート対象外であることを示します。
  - 2012：Windows Server 2012 でサポート対象外であることを示します。
  - 2016：Windows Server 2016 でサポート対象外であることを示します。
  - 「－」は，PFM - Agent for Platform でサポートされているすべてのプラットフォームで使用できることを示します。

- データソース

  該当するフィールドの値の計算方法または取得先を示します。フィールドの値については，「フィールドの値」を参照してください。

ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールドには，各レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。ここで示すのは，各レコード共通の ODBC キーフィールドです。PFM - Manager で Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合，ODBC キーフィールドが必要です。

各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧を次の表に示します。各レコード固有の ODBC キーフィールドについては，各レコードの説明を参照してください。

表 8-2　各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールド	ODBC フォーマット	データ	説明
レコード ID_DATE	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された日付を表すレコードのキー。
レコード ID_DATETIME	SQL_INTEGER	内部	レコード ID_DATE フィールドとレコード ID_TIME フィールドの組み合わせ。
レコード ID_DEVICEID	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent が動作しているホスト名。
レコード ID_DRAWER_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	区分。有効な値を次に示す。 m：分 H：時 D：日 W：週 M：月 Y：年
レコード ID_PROD_INST	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent のインスタンス名。
レコード ID_PRODID	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent のプロダクト ID。
レコード ID_RECORD_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	レコードタイプを表す識別子（4 バイト）。
レコード ID_TIME	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された時刻（グリニッジ標準時）。

要約ルール

PI レコードタイプのレコードでは，Collection Interval に設定された間隔で収集されるデータと，あらかじめ定義されたルールに基づき一定の期間（分，時，日，週，月，または年単位）ごとに要約されたデータが，Store データベースに格納されます。要約の種類はフィールドごとに定義されています。この定義を「要約ルール」と呼びます。

要約ルールによっては，要約期間中の中間データを保持する必要のあるものがあります。この場合，中間データを保持するためのフィールドが Store データベース内のレコードに追加されます。このフィールドを「追加フィールド」と呼びます。追加フィールドの一部は，PFM - Web Console でレコードのフィールドとして表示されます。PFM - Web Console に表示される追加フィールドは，履歴レポートに表示するフィールドとして使用できます。

なお，要約によって追加される「追加フィールド」と区別するために，ここでは，この章の各レコードの説明に記載されているフィールドを「固有フィールド」と呼びます。

追加フィールドのフィールド名は次のようになります。

- Store データベースに格納される追加フィールド名
  固有フィールドの PFM - Manager 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。
- PFM - Web Console で表示される追加フィールド名
  固有フィールドの PFM - View 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。

PFM - Manager 名に付加されるサフィックスと，それに対応する PFM - View 名に付加されるサフィックス，およびフィールドに格納されるデータを次の表に示します。

表 8-3　追加フィールドのサフィックス一覧

PFM - Manager 名	PFM - View 名	格納データ
_TOTAL	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和
_TOTAL_SEC	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和（utime 型の場合）
_COUNT	－	要約期間内の収集レコード数
_HI	(Max)	要約期間内のレコードのフィールド値の最大値
_LO	(Min)	要約期間内のレコードのフィールド値の最小値

（凡例）

－：追加フィールドがないことを示します。

要約ルールの一覧を次の表に示します。

表 8-4　要約ルール一覧

要約 ルール名	要約ルール
COPY	要約期間内の最新のレコードのフィールド値がそのまま格納される。
AVG	要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 次に計算式を示す。 **（フィールド値の総和）/（収集レコード数）** 追加フィールド（Store データベース） • _TOTAL • _TOTAL_SEC（utime 型の場合） • _COUNT 追加フィールド（PFM - Web Console）※1※2 • (Total)
ADD	要約期間内のフィールド値の総和が格納される。
HI	要約期間内のフィールド値の最大値が格納される。
LO	要約期間内のフィールド値の最小値が格納される。
HILO	要約期間内のデータの最大値，最小値，および平均値が格納される。 固有フィールドには平均値が格納される。 次に計算式を示す。 **（フィールド値の総和）/（収集レコード数）** 追加フィールド（Store データベース） • _HI • _LO • _TOTAL • _TOTAL_SEC（utime 型の場合） • _COUNT 追加フィールド（PFM - Web Console）※1※2 • (Max) • (Min) • (Total)
%	要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 主に百分率のフィールドに適用される。 次に計算式を示す。 **（フィールド値の総和）/（収集レコード数）** 追加フィールド（Store データベース） • _TOTAL • _TOTAL_SEC（utime 型の場合） • _COUNT
−	要約されないことを示す。

注※1

PFM - Manager 名に「_AVG」が含まれる utime 型のフィールドは，PFM - Web Console に追加される「(Total)」フィールドを履歴レポートで利用できません。

注※2

PFM - Manager 名に次の文字列が含まれるフィールドは，PFM - Web Console に追加される（Total）フィールドを履歴レポートで利用できません。

「_PER_」，「PCT」，「PERCENT」，「_AVG」，「_RATE_TOTAL」

データ型一覧

各フィールドの値のデータ型と，対応するCおよびC++のデータ型の一覧を次の表に示します。この表で示す「データ型」の「フィールド」の値は，各レコードのフィールドの表にある「形式」の列に示されています。

表 8-5　データ型一覧

データ型		サイズ（バイト）	説明
フィールド	Cおよび C++		
char(n)	char( )	( )内の数	nバイトの長さを持つ文字データ。
double	double	8	数値（1.7E±308（15桁））。
float	float	4	数値（3.4E±38（7桁））。
long	long	4	数値（-2,147,483,648～2,147,483,647）。
short	short	2	数値（-32,768～32,767）。
string(n)	char[ ]	( )内の数	nバイトの長さを持つ文字列。最後の文字は，「null」。
time_t	unsigned long	4	数値（0～4,294,967,295）。
timeval	構造体	8	数値（最初の4バイトは秒，次の4バイトはマイクロ秒を表す）。
ulong	unsigned long	4	数値（0～4,294,967,295）。
utime	構造体	8	数値（最初の4バイトは秒，次の4バイトはマイクロ秒を表す）。
word	unsigned short	2	数値（0～65,535）。
（該当なし）	unsigned char	1	数値（0～255）。

フィールドの値

ここでは，各フィールドに格納される値について説明します。

データソース

各フィールドには，Performance Management や監視対象プログラムから取得した値や，これらの値をある計算式に基づいて計算した値が格納されます。各フィールド値の取得先または計算方法は，フィールドの表の「データソース」列で示します。

PFM - Agent for Platform の「データソース」列の文字列は，Windows から取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定している場合，そのフィールドに設定される値の計算方法を示します。なお，データソースでは，次に示す表記方法で示します。

- 「－」は，Windows から取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定していないことを示します。
- 「ReturnValue」は，加工していないパフォーマンスデータを示します。
- （T1）は今回収集したデータ，（T0）は前回のインターバルで収集した値を示します。
- ほかのフィールドの値を使用して計算している場合，フィールド名を PFM - Manager 名で示します。

例えば，Active Server Pages（PI_ASP2）レコードの Debugging Requests（DEBUGGING_REQUESTS）フィールドは，「TOTAL_DEBUGGING_REQUESTS (T1) - TOTAL_DEBUGGING_REQUESTS (T0)」と記載し，このフィールドの値には，その時点で収集された TOTAL_DEBUGGING_REQUESTS フィールドの値から 1 回前に収集された TOTAL_DEBUGGING_REQUESTS フィールドの値を引いた値が格納されます。

デルタ

変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。例えば，1 回目に収集されたパフォーマンスデータが「3」，2 回目に収集されたパフォーマンスデータが「4」とすると，変化量として「1」が格納されます。各フィールドの値がデルタ値かどうかは，フィールドの表の「デルタ」列で示します。

リアルタイムレポートの設定で，［デルタ値で表示］がチェックされている場合，最初にデータが収集されたときから値が表示されます。ただし，前回のデータを必要とするレポートの場合，初回の値は「0」で表示されます。2 回目以降のデータ収集は，収集データの値が表示されます。

PFM - Agent for Platform で収集されるパフォーマンスデータは，次の表のように異なります。

表 8-6　PFM - Agent for Platform で収集されるパフォーマンスデータ

レコードタイプ	デルタ	データ種別	［デルタ値で表示］のチェック※	レコードの値
PI レコードタイプ	Yes	－	－	－

レコードタイプ	デルタ	データ種別	［デルタ値で表示］のチェック※	レコードの値
PI レコードタイプ	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		• 履歴データ • アラームの監視データ	－	収集時点の値が表示される。
PD レコードタイプ	Yes	－	－	－
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		• 履歴データ • アラームの監視データ	－	収集時点の値が表示される。

（凡例）

－：該当しない

注※

次に示す PFM - Web Console の項目がチェックされているかどうかを示します。

- レポートウィザードの［編集 ＞ 表示設定（リアルタイムレポート）］画面の［デルタ値で表示］
- レポートウィンドウの［Properties］タブの［表示設定（リアルタイムレポート）］の［デルタ値で表示］

パフォーマンスデータが収集される際の注意事項を次に示します。

- PFM - Agent for Platform で最初に格納される履歴レポートのパフォーマンスデータは，前回収集されたデータと今回収集されたデータを基に作成されます。このため，履歴レポートを収集開始してから最初にパフォーマンスデータが収集されるまでの時間は，設定した収集間隔の最大 2 倍の時間が掛かります。
- リアルタイムレポートを収集開始してから最初にパフォーマンスデータが収集されるまでの時間は，次のレコードを除き最小 5 秒の時間が掛かります。
  - Device Detail（PD_DEV）
  - Event Log（PD_ELOG）
  - Service Process Detail（PD_SVC）
- システムを長期間運用するなどして，OS のカウンタ値がラップアラウンドしたときに，デルタフィールドの値が極端に大きくなることがあります。

各フィールドの平均および割合

各フィールドの平均や割合の値については，Interval 時間によって秒単位の値として求められるものと，データの収集間隔によって求められるものとがあります。特に断り書きがない場合，データの収集間隔によって求められる値となります（Interval が 60 秒間隔の場合，1 分単位のデータとなります）。

Interval フィールドの値

Interval フィールドの値は，レコードタイプによって異なります。Interval フィールドの値を次の表に示します。

表 8-7　Interval フィールドの値

レコードタイプ	インスタンスタイプ	レポートタイプ	説明	
			Interval（INTERVAL）	Interval2（INTERVAL2）
PI レコードタイプ	複数インスタンスレコード	リアルタイムレポート	最初の値は「5」。 以降はレポートに設定されている「更新間隔※」の値を表示する（秒単位）。	
		履歴レポート	レポートに設定されている「更新間隔※」の値を表示する（秒単位）。 要約した場合，最後に収集した値を表示する。	レポートに設定されている「更新間隔※」の値を表示する（秒単位）。 要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。
	シングルインスタンスレコード	リアルタイムレポート	最初の値は「5」。 以降はレポートに設定されている「更新間隔※」の値を表示する（秒単位）。	－
		履歴レポート	レポートに設定されている「更新間隔※」の値を表示する（秒単位）。 要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	－
PD レコードタイプ	複数インスタンスレコード	リアルタイムレポート	最初の値は「5」。 以降はレポートに設定されている「更新間隔※」の値を表示する（秒単位）。 ただし，次のレコードでは，常に「0」。 • Device Detail（PD_DEV） • Process Detail（PD） • Process End Detail（PD_PEND） • Service Process Detail（PD_SVC）	－

レコードタイプ	インスタンスタイプ	レポートタイプ	説明	
			Interval（INTERVAL）	Interval2（INTERVAL2）
PD レコードタイプ	複数インスタンスレコード	履歴レポート	レポートに設定されている「更新間隔※」の値を表示する（秒単位）。 ただし，次のレコードでは，常に「0」。 • Device Detail（PD_DEV） • Process Detail（PD） • Process End Detail（PD_PEND） • Service Process Detail（PD_SVC）	－
	シングルインスタンスレコード	リアルタイムレポート	－	－
		履歴レポート	－	－

（凡例）

－：該当しない

注※

「更新間隔」は，次の計算式で算出されます。

Interval フィールドの値 ＝ Record Time フィールドの値 - 前回取得時の Record Time フィールドの値

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドを次の表に示します。

表 8-8　Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Agent Host (DEVICEID)	PFM - Agent が動作しているホスト名。	string(256)	No	すべて	−
Agent Instance (PROD_INST)	PFM - Agent が動作しているホスト名。	string(256)	No	すべて	−
Agent Type (PRODID)	PFM - Agent のプロダクト ID。1 バイトの識別子で表される。	char	No	すべて	−
Date (DATE)	レコードが作成された日。グリニッジ標準時。※1※2	char(3)	No	すべて	−
Date and Time (DATETIME)	Date（DATE）フィールドと Time（TIME）フィールドの組み合わせ。※2	char(6)	No	すべて	−
Drawer Type (DRAWER_TYPE)	PI レコードタイプのレコードの場合，データが要約される区分。	char	No	すべて	−
GMT Offset (GMT_ADJUST)	グリニッジ標準時とローカル時間の差。秒単位。	long	No	すべて	−
Time (TIME)	レコードが作成された時刻。グリニッジ標準時。※1※2	char(3)	No	すべて	−

(凡例)

−：Windows から取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定していないことを意味します。

注※1

PI レコードタイプのレコードでは，データが要約されるため，要約される際の基準となる時刻が設定されます。レコード区分ごとの設定値を次の表に示します。

表 8-9　レコード区分ごとの設定値

区分	レコード区分ごとの設定値
分	レコードが作成された時刻の 0 秒
時	レコードが作成された時刻の 0 分 0 秒
日	レコードが作成された日の 0 時 0 分 0 秒
週	レコードが作成された週の月曜日の 0 時 0 分 0 秒

区分	レコード区分ごとの設定値
月	レコードが作成された月の 1 日の 0 時 0 分 0 秒
年	レコードが作成された年の 1 月 1 日の 0 時 0 分 0 秒

注※2

レポートによるデータ表示を行った場合，Date フィールドは YYYYMMDD 形式で，Date and Time フィールドは YYYYMMDD hh:mm:ss 形式で，Time フィールドは hh:mm:ss 形式で表示されます。

Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド

jpctool db dump コマンドで，Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると，次に示すフィールドが出力されます。これらのフィールドも，Store データベースに記録されるとき追加されるフィールドですが，PFM - Web Console では表示されないため，レポートに表示するフィールドとして使用できません。これらのフィールドは，PFM - Agent が内部で使用するフィールドなので，運用では使用しないでください。

- レコード ID_DATE_F
- レコード ID_DEVICEID_F
- レコード ID_DRAWER_TYPE_F
- レコード ID_DRAWER_COUNT
- レコード ID_DRAWER_COUNT_F
- レコード ID_INST_SEQ
- レコード ID_PRODID_F
- レコード ID_PROD_INST_F
- レコード ID_RECORD_TYPE
- レコード ID_RECORD_TYPE_F
- レコード ID_SEVERITY
- レコード ID_SEVERITY_F
- レコード ID_TIME_F
- レコード ID_UOWID
- レコード ID_UOWID_F
- レコード ID_UOW_INST
- レコード ID_UOW_INST_F
- レコード ID_PFM - Manager 名_SEC
- レコード ID_PFM - Manager 名_MSEC

レコードの注意事項

レコードを収集する場合の注意事項を次に示します。

レコードのインスタンスがユニークに識別されない場合の注意事項

PFM - Agent for Platform は，一定間隔で OS の最新情報を参照してパフォーマンスデータを収集しています。レコードのフィールドが，OS から取得した情報でレコードのインスタンスをユニークに識別できない場合，次のようになります。

1. フィールドの末尾に項番「#n」（n=1，2，3・・・）が付加されます。

   末尾に項番が付加されるレコードのフィールドを次の表に示します。

   表 8-10　末尾に項番が付加されるレコードのフィールド

レコード名	フィールド名
Event Log（PD_ELOG）	Source Name（SOURCE_NAME）
Generic Data Detail（PD_GEND）	Instance（INSTANCE）
Generic Data Interval（PI_GENI）	Instance（INSTANCE）
Logical Disk Overview（PI_LOGD）	ID（INSTANCE）
NBT Overview（PI_NBT）	Instance（INSTANCE）
Nerwork Interface Overview（PI_NETI）	Instance（INSTANCE）
Page File Detail（PD_PAGF）	Instance（INSTANCE）
Physical Disk Overview（PI_PHYD）	ID（INSTANCE）
Process End Detail（PD_PEND）	Program（PROCESS_NAME）
Generic Data Detail64（PD_GD64）	Instance（INSTANCE）
Generic Data Interval64（PI_GI64）	Instance（INSTANCE）

   OS から取得した情報でレコードのインスタンスをユニークに識別できない場合，レコードのインスタンスごとに収集されたパフォーマンスデータは，正しい値ですが，インスタンスに対応するデバイス（例えば，Nerwork Interface Overview（PI_NETI）レコードの場合，対応する NIC）を識別することはできません。

2. PD_UPD，PD_UPDB，PI_UPI，PI_UPIB，PI_XUI1～PI_XUI5 レコードでは，最初のインスタンスを採用します。

システムの環境が変更された場合などに，レコードのインスタンスの整合性が保証できないため，正しいリアルタイムデータの情報の更新や，履歴データの集約ができません。

レコードが収集されない場合の注意事項およびアプリケーションイベントログ

レコードが収集されない場合の注意事項

PFM - Agent for Platform で次のレコードのパフォーマンスデータを収集する場合，パフォーマンスコンソール※上でオブジェクトがモニタリング可能な状態である必要があります。各レコードに対応するオブジェクト，イベントログに出力されるソース（サービス）名，およびパフォーマンス拡張 DLL を次の表に示します。

注※

各レコードに対応するオブジェクトの名称は，「パフォーマンス」で確認できます。各レコードに対応するオブジェクトが存在しない場合，Microsoft 社が提供している Microsoft Knowledge Base で公開されている手順に従って，モニタリング可能な状態にしてください。

表 8-11　各レコードに対応するオブジェクト，イベントログに出力されるソース（サービス）名，およびパフォーマンス拡張 DLL

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	オブジェクト名	イベントログに出力されるソース［サービス］名	パフォーマンス拡張 DLL
ディスク	Logical Disk Overview（PI_LOGD）	LogicalDisk	PerfDisk	PerfDisk.dll
	Physical Disk Overview（PI_PHYD）	PhysicalDisk		
プロトコル	ICMP Overview（PI_ICMP）	ICMP	Tcpip	perfctrs.dll
	ICMP Version 6 Overview（PI_ICM6）	ICMPv6		
	IP Overview（PI_IP）	IP または IPv4		
	IP Version 6 Overview（PI_IP6）	IP または IPv6		
	TCP Overview（PI_TCP）	TCP または TCPv4		
	TCP Version 6 Overview（PI_TCP6）	TCP または TCPv6		

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	オブジェクト名	イベントログに出力されるソース［サービス］名	パフォーマンス拡張 DLL
プロトコル	UDP Overview（PI_UDP）	UDP または UDPv4	Tcpip	perfctrs.dll
	UDP Version 6 Overview（PI_UDP6）	UDP または UDPv6		
ネットワーク関連	Network Interface Overview（PI_NETI）	Network Interface	Tcpip	perfctrs.dll
	NBT Overview（PI_NBT）	NBT Connection		
	WINS Server Overview（PI_WINS）	WINS Server	Wins	winsctrs.dll
	Browser Overview（PI_BRSR）	Browser	PerfNet	perfnet.dll
	Server Work Queues Overview（PI_SVRQ）	Server Work Queues		
	System Overview（PI）	Redirector		
		Server		
OS 全般（プロセッサ，メモリーなど）	System Overview（PI）	Cache	PerfOS	PerfOS.dll
		Memory		
		Objects		
		System		
		Processor および Processor Information		
	Processor Overview（PI_PCSR）	Processor		
	Page File Detail（PD_PAGF）	Paging File		

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	オブジェクト名	イベントログに出力されるソース［サービス］名	パフォーマンス拡張 DLL
プロセス関連	Process Detail (PD)	Process	PerfProc	PerfProc.dll
	Process Detail Interval (PD_PDI)			
	Application Process Interval (PD_APSI)			
	Application Process Overview (PD_APS)			
	Application Summary (PD_APP)			
	Application Summary Extension (PD_APP2)			
	Application Process Detail (PD_APPD)			
	Process End Detail (PD_PEND)			
	Workgroup Summary (PI_WGRP)			
Active Directory	Active Directory Overview (PI_AD)	Database	ESENT	esentprf.dll
		NTDS	NTDS	ntdsperf.dll
		DNS	DNS	dnsperf.dll
全般	Generic Data Detail (PD_GEND)	収集データ追加ユーティリティで設定したオブジェクト	オブジェクトごとに異なる。	
	Generic Data Interval (PI_GENI)			

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	オブジェクト名	イベントログに出力されるソース［サービス］名	パフォーマンス拡張 DLL
その他	Event Log (PD_ELOG)	対象外	（該当なし）	
	Device Detail (PD_DEV)			
	User Data Detail (PD_UPD)			
	User Data Detail - Extended (PD_UPDB)			
	User Data Interval (PI_UPI)			
	User Data Interval - Extended (PI_UPIB)			
	Service Process Detail (PD_SVC)			
	Application Service Overview (PD_ASVC)			
	User Data Interval - Expanded 1 (PI_XUI1)			
	User Data Interval - Expanded 2 (PI_XUI2)			
	User Data Interval - Expanded 3 (PI_XUI3)			
	User Data Interval -			

カテゴリー	レコード名（レコード ID）	オブジェクト名	イベントログに出力されるソース［サービス］名	パフォーマンス拡張 DLL
その他	Expanded 4（PI_XUI4）	対象外	（該当なし）	
	User Data Interval - Expanded 5（PI_XUI5）			

レコードが正常に収集されない場合のアプリケーションイベントログ

アプリケーションイベントログに Perflib（すべてのオブジェクトに共通のソース（サービス）名）または各オブジェクトのソース（サービス）名が記録されている場合，PFM - Agent for Platform が正常に動作しないことや，そのソース（サービス）に対応するレコードが収集できないことがあります。次の表に示すようなアプリケーションイベントログが記録されている場合，ソース（サービス）を再インストールするか，Microsoft 社が提供している Microsoft Knowledge Base に公開されている原因を取り除くか，ソース（サービス）の開発元に対処方法を問い合わせて，アプリケーションイベントログが記録されない環境に修復してください。PFM - Agent for Platform が正常に動作しない場合や，そのソース（サービス）に対応するレコードが収集できない場合のアプリケーションイベントログの一例を次の表に示します。

表 8-12　レコードが正常に収集されない場合のアプリケーションイベントログの例

イベント ID	ソース（サービス）名	イベントログの内容
1008	Perflib※	サービス "**サービス名**" (DLL "**DLL 名**") の Open プロシージャに失敗しました。このサービスのパフォーマンス データは利用できません。返されたステータス コードは， データ DWORD 0 です。
1009	Perflib※	サービス "**サービス名**" (DLL "**DLL 名**") の Open プロシージャで，例外が発生しました。 このサービスのパフォーマンス データは利用できません。返された例外コードは， データ DWORD 0 です。
1010	Perflib※	サービス "**サービス名**" (DLL "**DLL 名**") の Collect プロシージャで，例外が発生したか，または 無効なステータスが返されました。カウンタ DLL から返されるパフォーマンス データは， パフォーマンス データ ブロックに返されません。返された例外またはステータス コードは， データ DWORD 0 です。
1011	Perflib※	"**サービス名**" サービスに対して指定されたライブラリ ファイル "**DLL 名**" を開けません でした。このサービスのパフォーマンス データは利用できません。ステータス コードは， データ DWORD 0 です。
2001	Perflib※	"**サービス名**" サービスが Performance サブキーを持っていないか，またはそのキーを 開けませんでした。このサービスに対しては，パフォーマンス カウンタは収集されません。 Win32 エラー コードはデータで返されます。
2002	Perflib※	DLL "**DLL 名**" のサービス "**サービス名**" の Open プロシージャの完了までに，確立されている 待機時間よりも長い時間が掛かりました。この拡張可能カウンタま

イベント ID	ソース （サービス）名	イベントログの内容
2002	Perflib※	たはデータを収集している サービスに問題があるか，このコールが試行されるときに，システムがビジー状態だった 可能性があります。
2000	PerfDisk	システムから論理ボリューム情報を読み取れません。 戻された状態コードはデータ DWORD 0 です。

注※

上記表以外の Perflib が出力するアプリケーションイベントログについては，Microsoft 社が提供している Microsoft Knowledge Base を参照してください。

各レコードの注意事項

- Internet Protocol version 6（IPv6）環境の場合，次のレコードの性能情報は収集できません。
  - ICMP Overview（PI_ICMP）
  - IP Overview（PI_IP）
  - TCP Overview（PI_TCP）
  - UDP Overview（PI_UDP）
- 複数インスタンスレコードのうち，インスタンス名が「_Total」で示されるレコードのデータ値には，すべてのインスタンスの合計値や平均値が収集されます。また，収集間隔中にインスタンス情報が変更された場合，値が一致しない場合があります。
- レコード収集中にシステムリソースに変更があった場合，Agent Collector サービスは次のメッセージを共通メッセージログに出力し，レコード収集を 2 回しません。

  KAVF11406-W システムリソースに変更がありました (レコード ID)
- PFM - Agent for Platform では，データモデルで定義されたデータ型以上の値は扱えません。データモデルで定義されたデータ型以上の値が収集された場合，正確な値が表示されなくなります。

プロセスのプログラム名を使用する場合の注意事項

プロセスのプログラム名には Windows のパフォーマンスレジストリーから取得したデータを設定しています。これらの名称は Windows のタスクマネージャーやシステムモニタで表示される名前とは，大文字小文字などが一致しない場合があります。

アラーム定義やレポートに表示するフィールドの表示条件の定義に，プロセスのプログラム名を使用する場合は，大文字および小文字の区別が必要になります。次の手順に従って，大文字小文字の違いを含めてのプロセスのプログラム名を確認してください。その後，確認したプロセスのプログラム名を使用して，アラーム定義での監視プロセスやレポートに表示するフィールドの表示条件などを設定してください。

1. PFM - Web Console を起動する。
2. レポートウィザードを起動する。

レポートウィザードの起動方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

3. レポートに表示するフィールドを定義する。

   レポートウィザードの［新規レポート ＞ フィールド］画面で監視する対象となるレコードとフィールドを設定します。

   - レコード：Process Detail（PD）
   - フィールド：Program（INSTANCE）

4. レポートウィザードに従って，レポートの作成を終了する。

5. 作成したレポートを表示する。

   システム内のプロセスのプログラム名がすべて表示されます。

データを取得できない場合のレコード生成結果

フィールドに格納するデータを取得できない場合のレコード生成結果について説明します。

- レコードが生成されない

  ODBC キーフィールドとして定義されたフィールドに格納するパフォーマンスデータを PFM - Agent for Platform が収集できない場合，レコードは生成されません。

- 値が「Unknown」または「UNKNOWN」のフィールドを持つレコードが生成される

  データ型が文字列のフィールドで，OS から取得した値が不明，または取得できない場合，値が「Unknown」または「UNKNOWN」のフィールドを持つレコードが生成されます。

予約レコードについての注意事項

PFM - Web Console のレポートウィザードの［新規レポート ＞ フィールド］画面の［レコード］では，予約レコードになっているレコードが表示され，レポートを作成することができますが，予約レコードのレポートを表示することはできません。

また，PFM - Agent for Platform 07-50 以前のバージョンから PFM - Agent for Platform 08-00 以降にバージョンアップした場合，履歴の収集設定時に，PFM - Agent for Platform 08-00 以降では予約レコードになっているレコードが表示され，変更操作も可能になります。この場合，PFM - Agent for Platform 08-00 以降で予約レコードになっているレコードを収集対象に設定しても，レコードの収集は行われません。なお，初回の収集時だけ，共通メッセージログに次のメッセージが出力されます。

KAVF11201-W　不正な収集イベントが発生しました（レコード ID, rc=保守情報）

> **メモ**
>
> PFM - Agent for Platform 08-00 以降を新規インストールした場合，予約レコードはプロパティに表示されません。

Active Directory のインストール方法

PFM - Agent for Platform 08-11 以降のバージョンでは，Active Directory 情報を収集する Active Directory Overview（PI_AD）レコードを使用できます。Active Directory のパフォーマンスデータを取得するには，Active Directory をインストールしてください。Active Directory が有効でない環境では，メッセージ（KAVF11304-W）が出力されて，レコードの取得はできません。Active Directory のインストール方法を次に示します。

1. dcpromo コマンドを実行する。

   Windows の［スタート］ボタンをクリックして，［ファイル名を指定して実行］を選択します。［ファイル名を指定して実行］ダイアログが起動されますので，［名前］ボックスにdcpromo と入力し，［OK］ボタンをクリックします。［Active Directory のインストールウィザード］が起動します。

2. Active Directory をインストールする。

   ［Active Directory のインストールウィザード］の手順に従い，Active Directory をインストールします。

レコード一覧

PFM - Agent for Platform で収集できるレコードおよびそのレコードに格納される情報を，カテゴリー別に次の表に示します。

表 8-13　PFM - Agent for Platform のレコード一覧（カテゴリー別）

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
Active Directory	Active Directory Overview	PI_AD	ディレクトリサービスである Active Directory についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
サービス機能	WINS Server Overview	PI_WINS	WINS サーバサービスの通信についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
システム メモリー プロセッサ ネットワーク	System Overview	PI	次の Windows パフォーマンスオブジェクトについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。 • Cache オブジェクト • Memory オブジェクト • Objects オブジェクト • Processor オブジェクトおよび Processor Information オブジェクト • Redirector オブジェクト • Server オブジェクト • System オブジェクト
ディスク	Logical Disk Overview	PI_LOGD	ハードディスクドライブまたは固定ディスクドライブの論理パーティションの読み込み，書き込み，転送，および領域についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	Physical Disk Overview	PI_PHYD	ハードディスクまたは固定ディスクドライブの読み込み，書き込み，および転送についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
ネットワーク	Browser Overview	PI_BRSR	Windows Browser サービスについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	NBT Overview	PI_NBT	ローカルコンピュータをリモートコンピュータに接続している 1 つの NBT 接続を介してデータが送受信された割合についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	Network Interface Overview	PI_NETI	TCP/IP 接続を介してデータとパケットが送受信された割合，および TCP/IP 接続の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
ネットワーク プロセッサ	Server Work Queues Overview	PI_SVRQ	サーバのキューの長さおよびキュー内の処理についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
プロセス	Process Detail	PD	1 つのプロセスのページング，メモリー，および時間の使用状況などについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
	Process Detail Interval	PD_PDI	1 つのプロセスのページング，メモリー，および時間の使用状況などについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
	Process End Detail	PD_PEND	プロセスが終了したあとの状態を示すパフォーマンスデータ。
	Workgroup Summary	PI_WGRP	Process Detail（PD）レコードに格納されるレコードを，ある時点での状態で，ワークグループを単位に要約したパフォーマンスデータ。
	Application Process Interval	PD_APSI	プロセス監視の設定を行っているプロセスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
	Application Process Overview	PD_APS	プロセスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
プロセス関連	Device Detail	PD_DEV	ファイルシステムドライバおよびカーネルドライバのデバイスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
	Service Process Detail	PD_SVC	サービス制御マネージャー（SCM）に登録されている，Win32 プロセスなどのアプリケーションサービスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
	Application Service Overview	PD_ASVC	サービス制御マネージャー（SCM）に登録されている，Win32 プロセスなどのアプリケーションサービスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
プロセッサ	Processor Overview	PI_PCSR	各プロセッサでの算術，および論理計算の実行，周辺機器操作の初期化，プロセスのスレッドの実行などの割り込みの割合，および時間の割合などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
プロトコル	ICMP Overview	PI_ICMP	インターネットプロトコルバージョン 4 の ICMP プロトコルを使用しているシステムによって送受信された ICMP メッセージ数の割合，および ICMP の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	ICMP Version 6 Overview	PI_ICM6	インターネットプロトコルバージョン 6 の ICMP プロトコルを使用しているシステムによって送受信された ICMP メッセージ数の割合，および ICMP の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
プロトコル	IP Overview	PI_IP	インターネットプロトコルバージョン 4 の IP プロトコルを使用して IP データグラムが送受信された割合，および IP の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	IP Version 6 Overview	PI_IP6	インターネットプロトコルバージョン 6 の IP プロトコルを使用して IP データグラムが送受信された割合，および IP の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	TCP Overview	PI_TCP	インターネットプロトコルバージョン 4 の TCP プロトコルを使用して TCP セグメントが送受信された割合や TCP の接続数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	TCP Version 6 Overview	PI_TCP6	インターネットプロトコルバージョン 6 の TCP プロトコルを使用して TCP セグメントが送受信された割合や TCP の接続数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	UDP Overview	PI_UDP	インターネットプロトコルバージョン 4 の UDP プロトコルを使用して送受信された UDP データグラムについての割合，および UDP の各種エラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
	UDP Version 6 Overview	PI_UDP6	インターネットプロトコルバージョン 6 の UDP プロトコルを使用して送受信された UDP データグラムについての割合，および UDP の各種エラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
メッセージ	Event Log	PD_ELOG	次のある時点でのアプリケーション，システム，およびセキュリティについてのイベントログデータ。 • 各イベントログの時刻 • イベントソース • イベントの種類 • イベント ID • イベントの説明
メモリー	Page File Detail	PD_PAGF	システムのページングファイルのインスタンスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
ユーザーレコード	Generic Data Detail	PD_GEND	ユーザーが定義した，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
	Generic Data Interval	PI_GENI	ユーザーが定義した，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
ユーザーレコード	Application Summary	PD_APP	Process Detail（PD）に格納されるレコードを，アプリケーションを単位に，ある時点での状態で要約したパフォーマンスデータ。
	User Data Detail	PD_UPD	ある時点での状態を示すユーザー独自のパフォーマンスデータ。
	User Data Detail - Extended	PD_UPDB	
	User Data Interval	PI_UPI	ある一定の時間を単位としたユーザー独自のパフォーマンスデータ。
	User Data Interval - Extended	PI_UPIB	
	User Data Interval - Expanded 1	PI_XUI1	
	User Data Interval - Expanded 2	PI_XUI2	
	User Data Interval - Expanded 3	PI_XUI3	
	User Data Interval - Expanded 4	PI_XUI4	
	User Data Interval - Expanded 5	PI_XUI5	
	Application Summary Extension	PD_APP2	Application Process Overview（PD_APS）レコードおよび Application Service Overview（PD_ASVC）レコードに格納されるレコードを，アプリケーションを単位に，ある時点での状態で要約したパフォーマンスデータ。
	Application Process Detail	PD_APPD	Application Process Overview（PD_APS）レコードおよび Application Service Overview（PD_ASVC）レコードに格納されるレコードを，アプリケーション単位で監視しているプロセスおよびサービスごとに，ある時点での状態で要約したパフォーマンスデータ。
	Generic Data Detail64	PD_GD64	ユーザーが定義した，ある時点での状態を示す 64 ビットのパフォーマンスデータ。
	Generic Data Interval64	PI_GI64	ユーザーが定義した，ある一定の時間を単位とした 64 ビットのパフォーマンスデータ。
予約レコード	Active Server Pages	PI_ASP2	予約レコードのため使用できない。
	Active Server Pages Overview	PI_ASP	
	AppleTalk Overview	PI_APLE	

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
予約レコード	Broker Service - MSNLogon	PI_BRKS	予約レコードのため使用できない。
	Chat Service Overview	PI_CHAT	
	Content Index Detail	PD_CIND	
	Content Index Filter Detail	PD_CINF	
	Exchange Conn for Lotus cc:Mail	PI_ECCM	
	Exchange Database Overview	PI_EDB	
	Exchange Dir Service Overview	PI_EDS	
	Exchange Info Store Perf Data	PI_EIPD	
	Exchange Info Store Private	PI_EIPR	
	Exchange Info Store Public	PI_EIPU	
	Exchange Internet Mail Service	PI_EIMS	
	Exchange Internet Protocols	PI_EINP	
	Exchange MSMail Conn Interchange	PI_EMCI	
	Exchange MSMail Conn PC MTA Srv	PI_EMTS	
	Exchange MTA Connections	PI_EMTC	
	Exchange MTA Performance	PI_EMTA	
	Exchange Web Component Overview	PI_EWEB	
	FTP Server Overview	PI_FTPS	
	FTP Server Service Overview	PI_FTPM	
	Gateway Service for NetWare	PI_GTWY	
	Gopher Service Overview	PI_GOPH	

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
予約レコード	HTTP Content Index Overview	PI_HTCI	予約レコードのため使用できない。
	HTTP Service Overview	PI_HTTP	
	Image Detail	PD_IMAG	
	Internet Addon Services Global	PI_IASG	
	Internet Info Server Global	PI_IIS	
	LDAP Server Overview	PI_LDAP	
	Membership Agent Overview	PI_MEMA	
	Microsoft Commerce Server	PI_MCS	
	NetBEUI Interface Overview	PI_BEUI	
	NetBEUI Resource Overview	PI_BEUR	
	Network Link IPX Overview	PI_LIPX	
	Network Link NetBIOS Overview	PI_LBIO	
	Network Link SPX Overview	PI_LSPX	
	Network Segment Overview	PI_NSEG	
	NNTP Commands	PI_NWSC	
	NNTP Server	PI_NWSS	
	NNTP Server Client Overview	PI_NTPC	
	NNTP Server Service Overview	PI_NTPS	
	POP3 Server Overview	PI_POP3	
	Process Address Space Detail	PD_ADRS	
	Send Mail Overview	PI_SNDM	
	SMTP Server Overview	PI_SMTP	

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
予約レコード	SMTP Server Service Overview	PI_SMT2	予約レコードのため使用できない。
	Telephony Overview	PI_TELE	
	Thread Detail	PD_THRD	
	Thread Details Detail	PD_THD	
	Vote Management Overview	PI_VOTE	
	Web Proxy Server Cache Overview	PI_WPSC	
	Web Proxy Server Service	PI_WPSS	
	Web Service Overview	PI_WEB	
	WinSock Proxy Server Overview	PI_WSPS	

Active Directory Overview（PI_AD）

機能

Active Directory Overview（PI_AD）レコードには，ディレクトリサービスである Active Directory について，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。Active Directory の監視例については，「3.1.7　Active Directory の監視例」を参照してください。

注意

Active Directory が有効でない環境では，警告メッセージが出力されて Active Directory Overview（PI_AD）レコードは取得できません。Active Directory のインストール方法については，「Active Directory のインストール方法」を参照してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

Active Directory サービスの起動から終了まで。

レコードサイズ

- 固定部：1533 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
AB Client Sessions (AB_CLIENT_SESSIONS)	接続されているアドレス帳クライアントセッションの数。	HILO	ulong	No	−	−
ATQ Threads LDAP (ATQ_THREADS_LDAP)	現在 ATQ が LDAP 要求処理のために割り当てているスレッドの数。	COPY	ulong	No	−	−
ATQ Threads Other (ATQ_THREADS_OTHER)	現在 ATQ が LDAP 以外の DS サービスへ割り当てたスレッドの数。	COPY	ulong	No	−	−
Cache % Hit (CACHE_HIT)	データベースキャッシュにより，ファイル操作を発生させることなく実行されたデータベースファイルページの要求の割合。	AVG	double	No	2016	−
Cache Page Fault Stalls/sec (CACHE_PAGE_FAULT_STALLS_SEC)	データベースキャッシュから割り当てることができるページがないためにサービスを受けられない，1 秒当たりのページフォルトの数。	AVG	double	No	2016	−
Cache Page Faults/sec (CACHE_PAGE_FAULTS_SEC)	データベースキャッシュマネージャが，データベースキャッシュから新しいページを割り当てるために必要な，1 秒当たりのデータベースファイルページの要求の数。	AVG	double	No	2016	−
Cache Size (CACHE_SIZE)	データベースキャッシュマネージャがデータベースファイルから頻繁に使用される情報を保持するのに使用するシステムメモリーの容量。	COPY	ulong	No	2016	−
DRA In After Compress (DRA_IN_AFTER_COMPRESS)	入力方向の圧縮されたレプリケーションデータの圧縮されたバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮後のサイズ。	COPY	ulong	No	−	−
DRA In After Compress/sec (DRA_IN_AFTER	入力方向の圧縮されたレプリケーションデータの圧縮されたバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮後のサイズ(バイト数／秒)。	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
_COMPRESS_PER_SEC)	入力方向の圧縮されたレプリケーションデータの圧縮されたバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮後のサイズ(バイト数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA In Before Compress (DRA_IN_BEFORE_COMPRESS)	入力方向の圧縮されたレプリケーションデータの元のバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮前のサイズ。	COPY	ulong	No	−	−
DRA In Before Compress/sec (DRA_IN_BEFORE_COMPRESS_PER_SEC)	入力方向の圧縮されたレプリケーションデータの元のバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮前のサイズ(バイト数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA In Not Compress (DRA_IN_NOT_COMPRESS)	入力方向のレプリケーションでソースで圧縮されていないバイト数(例:同じサイトの DSA からのレプリケーション)。	COPY	ulong	No	−	−
DRA In Not Compress/sec (DRA_IN_NOT_COMPRESS_PER_SEC)	入力方向のレプリケーションでソースで圧縮されていないバイト数(例:同じサイトの DSA からのレプリケーション)。(バイト数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA In Total (DRA_IN_TOTAL)	入力方向のレプリケーションの合計バイト数。圧縮されていないバイト数(圧縮前)と圧縮されたバイト数(圧縮された後)の合計。	COPY	ulong	No	−	−
DRA In Total/sec (DRA_IN_TOTAL_PER_SEC)	入力方向のレプリケーションの合計バイト数。圧縮されていないバイト数(圧縮前)と圧縮されたバイト数(圧縮された後)の合計(バイト数／秒)。	COPY	double	No	−	−
DRA In Object Updates in Pkt (DRA_IN_OBJECT_UPDATES_IN_PKT)	現在のディレクトリレプリケーション更新パケットの中で受信されたオブジェクト更新で,ローカルサーバにまだ適用されていない更新の数。	COPY	ulong	No	−	−
DRA In Objects/sec (DRA_IN_OBJECTS_PER_SEC)	近隣ノードから入力方向のレプリケーションをとおして受信したオブジェクトの数（オブジェクト数／秒)。	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
DRA In Property Apply/sec (DRA_IN_PROPERTY_APPLY_PER_SEC)	着信プロパティが整合性ロジックで優勢だったために更新されたプロパティの数(プロパティ数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA In Property Filter/sec (DRA_IN_PROPERTY_FILTER_PER_SEC)	すでに実行されたレプリケーションの間に受信されたプロパティ変更の数(プロパティ数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA In Values/sec (DRA_IN_VALUES_PER_SEC)	識別名である入力方向のレプリケーションパートナーから受信したオブジェクトプロパティ値の数(プロパティ値数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA Out After Compress (DRA_OUT_AFTER_COMPRESS)	出力方向の圧縮されたレプリケーションデータの圧縮されたバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮後のサイズ。	COPY	ulong	No	−	−
DRA Out After Compress/sec (DRA_OUT_AFTER_COMPRESS_PER_SEC)	出力方向の圧縮されたレプリケーションデータの圧縮されたバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮後のサイズ(バイト数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA Out Before Compress (DRA_OUT_BEFORE_COMPRESS)	出力方向の圧縮されたレプリケーションデータの元のバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮前のサイズ。	COPY	ulong	No	−	−
DRA Out Before Compress/sec (DRA_OUT_BEFORE_COMPRESS_PER_SEC)	出力方向の圧縮されたレプリケーションデータの元のバイト数。別のサイトの DSA からの圧縮前のサイズ(バイト数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA Out Not Compress (DRA_OUT_NOT_COMPRESS)	出力方向のレプリケーションで圧縮されていないバイト数(例: 同じサイトの DSA からのレプリケーション)。	COPY	ulong	No	−	−
DRA Out Not Compress/sec (DRA_OUT_NOT_COMPRESS_PER_SEC)	出力方向のレプリケーションで圧縮されていないバイト数(例: 同じサイトの DSA からのレプリケーション)(バイト数／秒)。	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
DRA Out Total (DRA_OUT_TOTAL)	出力方向のレプリケーションの合計バイト数。圧縮されていないバイト数(圧縮前)と圧縮されたバイト数(圧縮された後)の合計。	COPY	ulong	No	−	−
DRA Out Total/sec (DRA_OUT_TOTAL_PER_SEC)	出力方向のレプリケーションの合計バイト数。圧縮されていないバイト数(圧縮前)と圧縮されたバイト数(圧縮された後)の合計(バイト数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA Out Objects Filter/sec (DRA_OUT_OBJECTS_FILTER_PER_SEC)	出力方向のレプリケーションで参照されたオブジェクトで，出力方向のパートナーが適用していない更新がないと判定されたオブジェクトの数(オブジェクト数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA Out Objects/sec (DRA_OUT_OBJECTS_PER_SEC)	出力方向のレプリケーションのオブジェクト数(オブジェクト数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA Out Property/sec (DRA_OUT_PROPERTY_PER_SEC)	出力方向のレプリケーションのプロパティ数(プロパティ数／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA Out Values/sec (DRA_OUT_VALUES_PER_SEC)	出力方向のレプリケーションパートナーへ送信された識別名を含んでいるオブジェクトプロパティ値の数(プロパティ値／秒)。	AVG	double	No	−	−
DRA Pending Replication Sync (DRA_PENDING_REPLICATION_SYNC)	このサーバのキューに登録されていてまだ処理されていないディレクトリ同期の数。	COPY	ulong	No	−	−
DRA Sync Failures on SM (DRA_SYNC_FAILURES_ON_SM)	近隣ノードに対する同期要求で，スキーマの同期がとれていないために失敗したものの数。	COPY	ulong	No	−	−
DRA Sync Requests Made (DRA_SYNC_REQUESTS_MADE)	近隣ノードに対する同期要求の数。	COPY	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
DRA Sync Requests Successful (DRA_SYNC_REQUESTS_SUCCESSFUL)	近隣ノードに対する同期要求で，正常に返されたものの数。	COPY	ulong	No	−	−
DS Directory Reads/sec (DS_DIRECTORY_READS_PER_SEC)	1 秒当たりのディレクトリ読み取り数。	AVG	double	No	−	−
DS Directory Searches/sec (DS_DIRECTORY_SEARCHES_PER_SEC)	1 秒当たりのディレクトリ検索数。	AVG	double	No	−	−
DS Directory Writes/sec (DS_DIRECTORY_WRITES_PER_SEC)	1 秒当たりのディレクトリ書き込み数。	AVG	double	No	−	−
DS Monitor List Size (DS_MONITOR_LIST_SIZE)	現在この DSA に登録されているオブジェクトが更新されるとき通知される要求の数。	COPY	ulong	No	−	−
DS Name Cache hit rate (DS_NAME_CACHE_HIT_RATE)	DSA 名キャッシュで満たされたディレクトリオブジェクト名コンポーネントの参照の割合。	AVG	double	No	−	−
DS Notify Queue Size (DS_NOTIFY_QUEUE_SIZE)	キューに登録されていて，まだクライアントに送信されていない保留中の更新通知の数。	COPY	ulong	No	−	−
DS Sec DP Events (DS_SEC_DP_EVENTS)	キューに登録されていてまだ処理されていないセキュリティ記述子の伝達イベントの数。	COPY	ulong	No	−	−
DS Sec DP Runtime Queue (DS_SEC_DP_RUNTIME_QUEUE)	現在の DS セキュリティ記述子の伝達子イベントを処理している間，確認する必要があるオブジェクトの残数。	COPY	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
DS Threads in Use (DS_THREADS_IN_USE)	現在ディレクトリサービスによって使用されているスレッドの数(ディレクトリサービスプロセスで使用されているスレッドの数とは異なる)。	COPY	ulong	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位)。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位)。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Kerberos Authentications (KERBEROS_AUTHENTICATIONS)	クライアントがこの DC を認証するためにこの DC へのチケットを使う 1 秒当たりの回数。	AVG	double	No	−	−
LDAP Active Threads (LDAP_ACTIVE_THREADS)	ローカルディレクトリサービスの LDAP サブシステムによって使用されているスレッドの現在の数。	COPY	ulong	No	−	−
LDAP Bind Time (LDAP_BIND_TIME)	最後に成功した LDAP バインドにかかった時間(ミリ秒)。	COPY	ulong	No	−	−
LDAP Client Sessions (LDAP_CLIENT_SESSIONS)	接続されている LDAP クライアントセッションの数。	HILO	ulong	No	−	−
LDAP Searches/sec (LDAP_SEARCHES_PER_SEC)	LDAP クライアントが検索操作を実行する速度。	AVG	double	No	−	−
LDAP Successful Binds/sec (LDAP_SUCCESSFUL_BINDS_PER_SEC)	1 秒当たりの LDAP バインド数。	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
LDAP UDP operations/sec (LDAP_UDP_OPERATIONS_PER_SEC)	LDAP サーバが 1 秒間に処理している UDP 操作の数。	AVG	double	No	−	−
Log Record Stalls/sec (LOG_RECORD_STALLS_SEC)	ログバッファに空きがないために，追加できない 1 秒当たりのログレコードの数。	AVG	double	No	2016	−
Log Threads Waiting (LOG_THREADS_WAITING)	データベースの更新を完了させるために，ログバッファ上のデータがログファイルに書き込まれるのを待機しているスレッドの数。	COPY	ulong	No	2016	−
Log Writes/sec (LOG_WTITES_SEC)	ログバッファ上のデータがログファイルに書き込まれる 1 秒当たりの回数。	AVG	double	No	2016	−
NTLM Authentications (NTLM_AUTHENTICATIONS)	この DC が提供する NTLM 認証の 1 秒当たりの数。	AVG	double	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「AD」。	COPY	char(8)	No	−	−
SAM Password Changes/sec (SAM_PASSWORD_CHANGES_SEC)	1 秒当たりの SAM でのパスワード変更数。	AVG	double	No	−	−
Table Open Cache % Hit (TABLE_OPEN_CACHE_HIT)	キャッシュしたスキーマ情報を使用して開かれたデータベーステーブルの割合。	AVG	double	No	2016	−
Table Open Cache Hits/sec (TABLE_CACHE_HITS_SEC)	キャッシュしたスキーマ情報を使用して開かれたデータベーステーブルの 1 秒当たりの数。	AVG	double	No	2016	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Table Open Cache Misses/sec (TABLE_OPEN_CACHE_MISSES_SEC)	キャッシュしたスキーマ情報を使用せずに開かれたデータベーステーブルの 1 秒当たりの数。	AVG	double	No	2016	−
Table Opens/sec (TABLE_OPEN_SEC)	1 秒当たりに開かれたデータベーステーブルの数。	AVG	double	No	2016	−
Zone Transfer Failure (ZONE_TRANSFER_FAILURE)	マスタ DNS サーバの失敗したゾーン転送数の合計。	COPY	ulong	No	−	−
Zone Transfer Request Received (ZONE_TRANSFER_REQUEST_RECEIVED)	マスタ DNS サーバが受信したゾーン転送要求数の合計。	COPY	ulong	No	−	−
Zone Transfer SOA Request Sent (ZONE_TRANSFER_SOA_REQUEST_SENT)	セカンダリ DNS サーバが送信したゾーン転送 SOA 要求数の合計。	COPY	ulong	No	−	−
Zone Transfer Success (ZONE_TRANSFER_SUCCESS)	マスタ DNS サーバの成功したゾーン転送数の合計。	COPY	ulong	No	−	−

Application Process Detail（PD_APPD）

機能

Application Process Detail（PD_APPD）レコードには，Application Process Overview（PD_APS）レコードおよび Application Service Overview（PD_ASVC）レコードに格納されるレコードを，アプリケーション単位で監視しているプロセスおよびサービスごとに，ある時点での状態で要約したパフォーマンスデータが格納されます。アプリケーションの監視条件ごとに 1 件のレコードが格納されます。このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- アプリケーション定義を変更するには，PFM - Web Console から設定を変更する必要があります。
- OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合，Monitoring Count，Monitoring Status フィールドは正しく収集できません。PFM - Agent for Platform 起動中に Windows Management Instrumentation サービスのスタートアップの種類が「無効」になった場合，「無効」以外に設定したあと，PFM - Agent for Platform を再起動してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Sync Collection With	Detail Records, APP2	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

- PD_APPD_APPLICATION_NAME
- PD_APPD_MONITORING_NUMBER

ライフタイム

PFM - Web Console でアプリケーション定義が追加されたときから，削除されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：263 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Application Name (APPLICATION_NAME)	プロセス監視の設定で指定された名前。	−	string(64)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	Application Process Detail(PD_APPD)レコードが格納されたインターバルの秒数。常に「0」。	−	ulong	No	−	−
Monitoring Condition (MONITORING_CONDITION)	監視するプロセスまたはサービスを特定するための条件式。	−	string(128)	No	−	−
Monitoring Count (MONITORING_COUNT)	監視条件に一致する稼働中のプロセス数はまたサービス数。	−	ulong	No	−	−
Monitoring Field (MONITORING_FIELD)	監視するフィールド。	−	string(16)	No	−	−
Monitoring Label (MONITORING_LABEL)	監視条件を識別するための名称。	−	string(32)	No	−	−
Monitoring Max (MONITORING_MAX)	監視数の上限値。	−	ulong	No	−	−
Monitoring Min (MONITORING_MIN)	監視数の下限値。	−	ulong	No	−	−
Monitoring Number (MONITORING_NUMBER)	監視条件の番号。	−	word	No	−	−
Monitoring Status (STATUS)	監視数の条件結果。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。	−	string(9)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「APPD」。	−	char(8)	No	−	−

Application Process Interval（PD_APSI）

機能

Application Process Interval（PD_APSI）レコードには，プロセス監視の設定を行っているプロセスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- 各プロセスは，収集時に実行しているプログラムを表します。
- 収集インターバル中に，Program Name（PROGRAM_NAME）フィールドに対応するレコードが新規に生成された場合，次のフィールドは前回収集した情報から値を算出するため，最初の値は 0 で表示されます。
  - CPU %（PCT_PROCESSOR_TIME）
  - IO Data Bytes/sec（IO_DATA_BYTES_PER_SEC）
  - IO Data Operations/sec（IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Other Bytes/sec（IO_OTHER_BYTES_PER_SEC）
  - IO Other Operations/sec（IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Read Bytes/sec（IO_READ_BYTES_PER_SEC）
  - IO Read Operations/sec（IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Write Bytes/sec（IO_WRITE_BYTES_PER_SEC）
  - IO Write Operations/sec（IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC）
  - Privileged CPU %（PCT_PRIVILEGED_TIME）
  - User CPU %（PCT_USER_TIME）
  - Page Faults/sec（PAGE_FAULTS_PER_SEC）
- このレコードの Program Name（PROGRAM_NAME）フィールドの値が，「System」または「System Idle Process」の場合，Elapsed Time（ELAPSED_TIME）フィールドが正しく収集できないことがあります。この場合，Elapsed Time（ELAPSED_TIME）フィールドの値は，System Overview（PI）レコードの System Up Time（SYSTEM_UP_TIME）に近似していますので，この値を利用してください。
- 取得元の情報に ASCII コードの文字（0x20～0x7E）以外が含まれる場合，Program Name（PROGRAM_NAME）フィールドには，「#(0x23)」に変換された値が格納されます。1 バイト単位で変換されるため，例えば，マルチバイト文字の「A」（全角）は次のように変換されます。

取得元の情報		変換後の情報	
文字コードの種類	バイナリ	バイナリ	文字列
Shift-JIS コード	8260	2360	#`
EUC コード	A3C1	2323	##

取得元の情報		変換後の情報	
文字コードの種類	バイナリ	バイナリ	文字列
UTF-8 コード	EFBCA1	232323	###

- Program Name（PROGRAM_NAME）フィールドの値は，Windows のタスクマネージャーの［プロセス］タブを開いた際に，［イメージ名］列に表示される値に相当します。
- OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合，このレコードは収集できません。PFM - Agent for Platform 起動中に Windows Management Instrumentation サービスのスタートアップの種類が「無効」になった場合，「無効」以外に設定したあと，PFM - Agent for Platform を再起動してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Sync Collection With	Detail Records, APP2	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

- PD_APSI_ID_PROCESS
- PD_APSI_START_TIME
- PD_APSI_APPLICATION_NAME
- PD_APSI_MONITORING_NUMBER

ライフタイム

アプリケーション定義が設定されてプロセスが実行されたときから，プロセスが終了するかアプリケーション定義が削除されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：712 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Application Name (APPLICATION_NAME)	プロセス監視の設定で指定された名前。	−	string(64)	No	−	−
CPU % (PCT_PROCESSOR_TIME)	プロセスがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	−	double	No	−	−
Creating Process ID (PROCESS_ID)	このプロセスを起動したプロセスのプロセス ID。※	−	ulong	No	−	−
Elapsed Time (ELAPSED_TIME)	プロセスが実行している総経過時間（秒単位）。※	−	utime	No	−	−
Group (GROUP_NAME)	プロセスを実行したユーザーが所属するグループ名。グループ名はドメイン名，またはローカルシステムによってあらかじめ定義された名前（「NT AUTHORITY」，コンピュータ名など）。プロセスのセキュリティ ID に対応するグループ名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行グループ名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。	−	string(36)	No	−	−
Handle Count (HANDLE_COUNT)	プロセスによってオープンしているハンドル数。※	−	ulong	No	−	−
IO Data Bytes/sec (IO_DATA_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	−	double	No	−	−
IO Data Operations/sec (IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしている操作数の割合（／秒）。	−	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
IO Other Bytes/sec (IO_OTHER_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	double	No	－	－
IO Other Operations/sec (IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしている操作数の割合（／秒）。	－	double	No	－	－
IO Read Bytes/sec (IO_READ_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	double	No	－	－
IO Read Operations/sec (IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしている操作数の割合（／秒）。	－	double	No	－	－
IO Write Bytes/sec (IO_WRITE_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	double	No	－	－
IO Write Operations/sec (IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしている操作数の割合（／秒）。	－	double	No	－	－
Interval (INTERVAL)	常に「0」。	－	ulong	No	－	－
Monitoring Field (MONITORING_FIELD)	監視するフィールド。	－	string(16)	No	－	－
Monitoring Label (MONITORING_LABEL)	監視条件を識別するための名称。	－	string(32)	No	－	－
Monitoring Number (MONITORING_NUMBER)	監視条件の番号。	－	word	No	－	－
PID (ID_PROCESS)	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。	－	ulong	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Page Faults/sec (PAGE_FAULTS_PER_SEC)	プロセス内でページフォルトが発生した割合（／秒）。	－	double	No	－	－
Page File Kbytes (PAGE_FILE_BYTES)	プロセスがページングファイルで使用している仮想メモリー領域のサイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Page File Kbytes Peak (PAGE_FILE_BYTES_PEAK)	プロセスがページングファイルで使用していた仮想メモリー領域の最大サイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Pool Nonpaged Kbytes (POOL_NONPAGED_BYTES)	プロセスが使用しているページング不可能なメモリーサイズ(キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Pool Paged Kbytes (POOL_PAGED_BYTES)	プロセスが使用しているページング可能なメモリーサイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Priority Base (PRIORITY_BASE)	プロセスの基本優先順位。値が大きいほど基本優先度が高い。値は次のとおり。 • 24：リアルタイム • 13：高 • 10：通常以上 • 8：通常 • 6：通常以下 • 4：低	－	ulong	No	－	－
Private Kbytes (PRIVATE_BYTES)	プロセスが，ほかのプロセスと共用できないように割り振ったメモリーのサイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Privileged CPU % (PCT_PRIVILEGED_TIME)	プロセスが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%)。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	－	double	No	－	－
Program Name (INSTANCE)	プログラム名。	－	string(257)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「APSI」。	−	char(8)	No	−	−
Start time (START_TIME)	プロセスの開始時刻。	−	time_t	No	−	−
Thread Count (THREAD_COUNT)	プロセス内のスレッド（命令を実行する単位）の数。プロセスを実行すると最低 1 つのスレッドが起動される。※	−	ulong	No	−	−
User (USER_NAME)	プロセスを実行したユーザー名。 プロセスのセキュリティ ID に対応するユーザー名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行ユーザー名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。	−	string(36)	No	−	−
User CPU % (PCT_USER_TIME)	プロセスがユーザーモードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	−	double	No	−	−
Virtual Env ID (VIRTUAL_ENV_ID)	OS が提供する仮想化システムによって作成される仮想化環境の ID。	−	string(65)	No	2008，2012	−
Virtual Kbytes (VIRTUAL_BYTES)	プロセスが使用している仮想アドレス空間のサイズ（キロバイト単位）。※	−	double	No	−	−
Virtual Kbytes Peak (VIRTUAL_BYTES_PEAK)	プロセスが使用していた仮想アドレス空間の最大サイズ（キロバイト単位）。※	−	double	No	−	−
Working Set Kbytes	プロセスで使用しているメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量または	−	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(WORKING_SET)	ページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）のサイズ(キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Working Set Kbytes Peak (WORKING_SET_PEAK)	プロセスで使用していたメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）の最大サイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－

Application Process Overview（PD_APS）

機能

Application Process Overview（PD_APS）レコードには，プロセスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。システム内に存在するプロセス ID につき 1 件のレコードが作成されます。このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- このレコードは，リアルタイムレポートだけで使用できます。
- 各プロセスは，収集時に実行されているプログラムを表します。
- 収集インターバル中に，Program Name（PROGRAM_NAME）フィールドに対応するレコードが新規に生成された場合，次のフィールドは前回収集した情報から値を算出するため，最初の値は 0 で表示されます。
  - CPU %（PCT_PROCESSOR_TIME）
  - IO Data Bytes/sec（IO_DATA_BYTES_PER_SEC）
  - IO Data Operations/sec（IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Other Bytes/sec（IO_OTHER_BYTES_PER_SEC）
  - IO Other Operations/sec（IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Read Bytes/sec（IO_READ_BYTES_PER_SEC）
  - IO Read Operations/sec（IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Write Bytes/sec（IO_WRITE_BYTES_PER_SEC）
  - IO Write Operations/sec（IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC）
  - Privileged CPU %（PCT_PRIVILEGED_TIME）
  - User CPU %User CPU %（PCT_USER_TIME）
  - Page Faults/sec（PAGE_FAULTS_PER_SEC）
- このレコードの Program Name（PROGRAM_NAME）フィールドの値が，「System」または「System Idle Process」の場合，Elapsed Time（ELAPSED_TIME）フィールドが正しく収集できないことがあります。この場合，Elapsed Time（ELAPSED_TIME）フィールドの値は，System Overview（PI）レコードの System Up Time（SYSTEM_UP_TIME）に近似していますので，この値を利用してください。
- このレコードの履歴レポートを表示すると，KAVJS5001-I のエラーが発生します。
- 取得元の情報に ASCII コードの文字（0x20～0x7E）以外が含まれる場合，Program Name（PROGRAM_NAME）フィールドおよび Command Line（COMMAND_LINE）フィールドには，「#(0x23)」に変換された値が格納されます。1 バイト単位で変換されるため，例えば，マルチバイト文字の「A」（全角）は次のように変換されます。

取得元の情報		変換後の情報	
文字コードの種類	バイナリ	バイナリ	文字列
Shift-JIS コード	8260	2360	#`
EUC コード	A3C1	2323	##
UTF-8 コード	EFBCA1	232323	###

- Program Name（PROGRAM_NAME）フィールドの値は，Windows のタスクマネージャーの［プロセス］タブを開いた際に，［イメージ名］列に表示される値に相当します。
- OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合，このレコードは収集できません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	×
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Sync Collection With	Detail Records, APP2	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

- PD_APS_ID_PROCESS
- PD_APS_START_TIME

ライフタイム

プロセスの実行から終了まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：4,695 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
CPU %（PCT_PROCESSOR_TIME）	プロセスがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	−	double	No	−	−
Command Line（COMMAND_LINE）	コマンドライン。	−	string(4097)	No	−	−
Creating Process ID（PROCESS_ID）	このプロセスを起動したプロセスのプロセス ID。※	−	ulong	No	−	−
Elapsed Time（ELAPSED_TIME）	プロセスが実行している総経過時間（秒単位）。※	−	utime	No	−	−
Group（GROUP_NAME）	プロセスを実行したユーザーが所属するグループ名。グループ名はドメイン名，またはローカルシステムによってあらかじめ定義された名前（「NT AUTHORITY」，コンピュータ名など）。プロセスのセキュリティ ID に対応するグループ名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行グループ名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。	−	string(36)	No	−	−
Handle Count（HANDLE_COUNT）	プロセスによってオープンしているハンドル数。※	−	ulong	No	−	−
IO Data Bytes/sec（IO_DATA_BYTES_PER_SEC）	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	−	double	No	−	−
IO Data Operations/sec（IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC）	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしている操作数の割合（／秒）。	−	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
IO Other Bytes/sec (IO_OTHER_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	double	No	－	－
IO Other Operations/sec (IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしている操作数の割合（／秒）。	－	double	No	－	－
IO Read Bytes/sec (IO_READ_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	double	No	－	－
IO Read Operations/sec (IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしている操作数の割合（／秒）。	－	double	No	－	－
IO Write Bytes/sec (IO_WRITE_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	double	No	－	－
IO Write Operations/sec (IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしている操作数の割合（／秒）。	－	double	No	－	－
Interval (INTERVAL)	常に「0」。	－	ulong	No	－	－
PID (ID_PROCESS)	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。	－	ulong	No	－	－
Page Faults/sec (PAGE_FAULTS_PER_SEC)	プロセス内でページフォルトが発生した割合（／秒）。	－	double	No	－	－
Page File Kbytes (PAGE_FILE_BYTES)	プロセスがページングファイルで使用している仮想メモリー領域のサイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－
Page File Kbytes Peak	プロセスがページングファイルで使用していた仮想メモリー領	－	double	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(PAGE_FILE_BYTES_PEAK)	域の最大サイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Pool Nonpaged Kbytes (POOL_NONPAGED_BYTES)	プロセスが使用しているページング不可能なメモリーサイズ(キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Pool Paged Kbytes (POOL_PAGED_BYTES)	プロセスが使用しているページング可能なメモリーサイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Priority Base (PRIORITY_BASE)	プロセスの基本優先順位。値が大きいほど基本優先度が高い。値は次のとおり。 • 24：リアルタイム • 13：高 • 10：通常以上 • 8：通常 • 6：通常以下 • 4：低	－	ulong	No	－	－
Private Kbytes (PRIVATE_BYTES)	プロセスが，ほかのプロセスと共用できないように割り振ったメモリーのサイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Privileged CPU % (PCT_PRIVILEGED_TIME)	プロセスが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%)。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	－	double	No	－	－
Program Name (INSTANCE)	プログラム名。	－	string(257)	No	－	－
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	－	time_t	No	－	－
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「APS」。	－	char(8)	No	－	－
Start time (START_TIME)	プロセスの開始時刻。	－	time_t	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Thread Count (THREAD_COUNT)	プロセス内のスレッド（命令を実行する単位）の数。プロセスを実行すると最低 1 つのスレッドが起動される。※	－	ulong	No	－	－
User (USER_NAME)	プロセスを実行したユーザー名。 プロセスのセキュリティ ID に対応するユーザー名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行ユーザー名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。	－	string(36)	No	－	－
User CPU % (PCT_USER_TIME)	プロセスがユーザーモードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	－	double	No	－	－
Virtual Env ID (VIRTUAL_ENV_ID)	OS が提供する仮想化システムによって作成される仮想化環境の ID。	－	string(65)	No	2008，2012	－
Virtual Kbytes (VIRTUAL_BYTES)	プロセスが使用している仮想アドレス空間のサイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Virtual Kbytes Peak (VIRTUAL_BYTES_PEAK)	プロセスが使用していた仮想アドレス空間の最大サイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Working Set Kbytes (WORKING_SET)	プロセスで使用しているメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）のサイズ(キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Working Set Kbytes Peak (WORKING_SET_PEAK)	プロセスで使用していたメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照でき	－	double	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Working Set Kbytes Peak (WORKING_SET_PEAK)	るメモリー量を示す）の最大サイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－

Application Service Overview（PD_ASVC）

機能

Application Service Overview（PD_ASVC）レコードには，サービス制御マネージャー（SCM）に登録されている，Win32 プロセスなどのアプリケーションサービスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- このレコードは，リアルタイムレポートだけで使用できます。
- このレコードの履歴レポート表示すると，KAVJS5001-I のエラーが発生します。
- 取得元の情報に ASCII コードの文字（0x20～0x7E）以外が含まれる場合，Service Name（SERVICE_NAME）フィールドおよび Display Name（DISPLAY_NAME）フィールドには，「#(0x23)」に変換された値が格納されます。1 バイト単位で変換されるため，例えば，マルチバイト文字の「A」（全角）は次のように変換されます。

取得元の情報		変換後の情報	
文字コードの種類	バイナリ	バイナリ	文字列
Shift-JIS コード	8260	2360	#`
EUC コード	A3C1	2323	##
UTF-8 コード	EFBCA1	232323	###

- Service Name（SERVICE_NAME）フィールドの値は，サービス制御マネージャー（SCM）でサービスのプロパティを開いたときに，［サービス名］に表示される値に相当します。
- Display Name（DISPLAY_NAME）フィールドの値は，サービス制御マネージャー（SCM）でサービスのプロパティを開いたときに，［表示名］に表示される値に相当します。
- State（STATE）フィールドの値が RUNNING 以外の場合，PID（ID_PROCESS）フィールドの値は 0 となります。
- OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合，PID フィールドは正しく収集できません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	×
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Sync Collection With	Detail Records, APP2	×

項目	デフォルト値	変更可否
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

- PD_ASVC_SERVICE_NAME
- PD_ASVC_TYPE

ライフタイム

サービスのインストールからアンインストールまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：4,854 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Accepted Controls (ACCEPTED_CONTROLS)	サービスが受信するコントロールコード。このフィールドの値は，次の値の一部または全部がリストされる。 • PAUSE_CONTINUE : [一時停止]，[再開]できる。 • SHUTDOWN : OS のシャットダウンがサービスに通知される。 • STOP : [停止]できる。 データモデルバージョン 4.1 以降は，次の値もリストされる。 • PARAMCHANGE : 再起動せずに[開始パラメータ]の再読み込みができる。 • NETBINDCHANGE : ネットワークから再起動せずにバインドの変更を受け付けることができる。 • HARDWAREPROFILECHANGE : ハードウェアプロファイルが変更された場合，サービスに通知される。	－	string(128)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Accepted Controls (ACCEPTED_CONTROLS)	• POWEREVENT：OS の電源状態が変更された場合，サービスに通知される。 • SESSIONCHANGE：OS のセッション状態が変更された場合，サービスに通知される。	−	string(128)	No	−	−
Checkpoint (CHECKPOINT)	スタート，ストップ，または続行の各処理中に，各ステップの完了に従って，その進行状況をレポートするためにサービスが使用するチェックポイントプログレスカウンタ（インクリメント方式）。このような処理がない場合，この値は，「0」。	−	long	No	−	−
Display Name (DISPLAY_NAME)	サービスを識別するためにユーザーインターフェースプログラムによって使用される名前。	−	string(257)	No	−	−
Image Path (IMAGE_PATH)	サービスのバイナリーファイルへの完全修飾パス。	−	string(4097)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	常に「0」。	−	ulong	No	−	−
PID (ID_PROCESS)	プロセス ID。	−	ulong	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「ASVC」。	−	char(8)	No	−	−
Service Exit Code (SERVICE_EXIT_CODE)	サービス固有の終了コード。	−	long	No	−	−
Service Name (SERVICE_NAME)	サービスコントロールマネージャーデータベースで使用されているサービス名。	−	string(257)	No	−	−
Service Type (TYPE)	次の 2 つのサービスタイプのうちどちらか 1 つ。 • WIN32_OWN_PROCESS：サービスアプリケーションがそのアプリケーション	−	string(64)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Service Type（TYPE）	専用のプロセス内で動作する。 • WIN32_SHARE_PROCESS：サービスアプリケーションが 1 つのプロセスをほかのサービスと共有する。 また，サービスがデスクトップと会話することを示す場合，次のタイプもリストされる。 • INTERACTIVE_PROCESS	－	string(64)	No	－	－
State（STATE）	データ収集時のサービスの状態。このフィールドの値は，次のどれか。 • CONTINUE_PENDING：[一時停止]後の[再開]ボタンで[起動]処理中の状態 • PAUSE_PENDING：[一時停止]処理中の状態 • PAUSED：[一時停止]状態 • RUNNING：[起動]状態 • START_PENDING：[起動]処理中の状態 • STOP_PENDING：[停止]処理中の状態 • STOPPED：[停止]状態	－	string(31)	No	－	－
Wait Hint（WAIT_HINT）	サービスがその状態またはチェックポイントを更新するまでに，保留しているスタート，ストップ，または続行の各処理に掛かると予想される時間（ミリ秒単位）。	－	ulong	No	－	－
Win32 Exit Code（WIN32_EXIT_CODE）	Win32 終了コード。	－	long	No	－	－

Application Summary（PD_APP）

機能

Application Summary（PD_APP）レコードには，Process Detail（PD）に格納されるレコードを，アプリケーションを単位に，ある時点での状態で要約したパフォーマンスデータが格納されます。アプリケーションごとに 1 件のレコードが格納されます。このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

アプリケーションの定義を変更するには，PFM - Web Console から設定を変更する必要があります。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Sync Collection With	Detail Records, PD	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

PD_APP_APPLICATION_NAME

ライフタイム

PFM - Web Console からアプリケーションの稼働監視の設定がされたときから，削除されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：984 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Application Name（APPLICATION_NAME）	Application monitoring setting に指定された名前。	－	string(64)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Application Status (APPLICATION_STATUS)	すべての Process Range 条件の結果。NORMAL, ABNORMAL を表示する。Process01 Status～Process15 Status に空白が表示されている場合，空白は無視する。NORMAL：Process01 Status～Process15 Status の結果がすべて NORMAL。ABNORMAL：Process01 Status～Process15 Status の結果のうちどれかが ABNORMAL。 空白：未設定。	－	string(10)	No	－	－
Application Exist (APPLICATION_EXIST)	すべての Process Range 条件の結果。NORMAL, ABNORMAL を表示する。Process01 Status～Process15 Status に空白が表示されている場合，空白は無視する。 NORMAL：Process01 Status～Process15 Status の結果のうちどれかが NORMAL。 ABNORMAL：Process01 Status～Process15 Status の結果がすべて ABNORMAL。 空白：未設定。	－	string(10)	No	－	－
Interval (INTERVAL)	Application Summary (PD_APP) レコードが格納されたインターバルの秒数。常に「0」。	－	ulong	No	－	－
Process01 Count (PROCESS01_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	－	word	No	－	－
Process01 Kind (PROCESS01_KIND)	条件に指定した種別を表示。	－	string(4)	No	－	－
Process01 Name (PROCESS01_NAME)	プロセス名称。	－	string(32)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Process01 Range (PROCESS01_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process01 Status (PROCESS01_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process02 Count (PROCESS02_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process02 Kind (PROCESS02_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process02 Name (PROCESS02_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−
Process02 Range (PROCESS02_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process02 Status (PROCESS02_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process03 Count (PROCESS03_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process03 Kind (PROCESS03_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process03 Name (PROCESS03_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Process03 Range (PROCESS03_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	－	string(12)	No	－	－
Process03 Status (PROCESS03_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	－	string(10)	No	－	－
Process04 Count (PROCESS04_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	－	word	No	－	－
Process04 Kind (PROCESS04_KIND)	条件に指定した種別を表示。	－	string(4)	No	－	－
Process04 Name (PROCESS04_NAME)	プロセス名称。	－	string(32)	No	－	－
Process04 Range (PROCESS04_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	－	string(12)	No	－	－
Process04 Status (PROCESS04_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	－	string(10)	No	－	－
Process05 Count (PROCESS05_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	－	word	No	－	－
Process05 Kind (PROCESS05_KIND)	条件に指定した種別を表示。	－	string(4)	No	－	－
Process05 Name (PROCESS05_NAME)	プロセス名称。	－	string(32)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Process05 Range (PROCESS05_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process05 Status (PROCESS05_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL, ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process06 Count (PROCESS06_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process06 Kind (PROCESS06_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process06 Name (PROCESS06_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−
Process06 Range (PROCESS06_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process06 Status (PROCESS06_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL, ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process07 Count (PROCESS07_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process07 Kind (PROCESS07_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process07 Name (PROCESS07_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Process07 Range (PROCESS07_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process07 Status (PROCESS07_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL, ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process08 Count (PROCESS08_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process08 Kind (PROCESS08_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process08 Name (PROCESS08_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−
Process08 Range (PROCESS08_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process08 Status (PROCESS08_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL, ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process09 Count (PROCESS09_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process09 Kind (PROCESS09_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process09 Name (PROCESS09_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Process09 Range (PROCESS09_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process09 Status (PROCESS09_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process10 Count (PROCESS10_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process10 Kind (PROCESS10_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process10 Name (PROCESS10_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−
Process10 Range (PROCESS10_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process10 Status (PROCESS10_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process11 Count (PROCESS11_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process11 Kind (PROCESS11_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process11 Name (PROCESS11_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Process11 Range (PROCESS11_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process11 Status (PROCESS11_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process12 Count (PROCESS12_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process12 Kind (PROCESS12_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process12 Name (PROCESS12_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−
Process12 Range (PROCESS12_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process12 Status (PROCESS12_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process13 Count (PROCESS13_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process13 Kind (PROCESS13_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process13 Name (PROCESS13_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Process13 Range (PROCESS13_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process13 Status (PROCESS13_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process14 Count (PROCESS14_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process14 Kind (PROCESS14_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process14 Name (PROCESS14_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−
Process14 Range (PROCESS14_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process14 Status (PROCESS14_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL，ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Process15 Count (PROCESS15_COUNT)	稼働中の該当プロセス数。	−	word	No	−	−
Process15 Kind (PROCESS15_KIND)	条件に指定した種別を表示。	−	string(4)	No	−	−
Process15 Name (PROCESS15_NAME)	プロセス名称。	−	string(32)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Process15 Range (PROCESS15_RANGE)	各プロセスの範囲条件。「下限値-上限値」で表す。	−	string(12)	No	−	−
Process15 Status (PROCESS15_STATUS)	各プロセス単位の Process Range 条件結果。NORMAL, ABNORMAL，空白のどれかを表示する。 NORMAL：問題なし。 ABNORMAL：異常あり。 空白：未設定。	−	string(10)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「APP」。	−	char(8)	No	−	−

Application Summary Extension（PD_APP2）

機能

Application Summary Extension（PD_APP2）レコードには，Application Process Overview（PD_APS）レコードおよび Application Service Overview（PD_ASVC）レコードに格納されるレコードを，アプリケーションを単位に，ある時点での状態で要約したパフォーマンスデータが格納されます。アプリケーションごとに 1 件のレコードが格納されます。このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- アプリケーションの定義を変更するには，PFM - Web Console から設定を変更する必要があります。
- OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合，Application Exist，Application Status フィールドは正しく収集できません。PFM - Agent for Platform 起動中に Windows Management Instrumentation サービスのスタートアップの種類が「無効」になった場合，「無効」以外に設定したあと，PFM - Agent for Platform を再起動してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

PD_APP2_APPLICATION_NAME

ライフタイム

PFM - Web Console でアプリケーション定義が追加されたときから，削除されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：169 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Application Exist (EXIST)	プロセス監視の設定で指定されたアプリケーションの状態。NORMAL，ABNORMAL を表示する。 アプリケーションの状態は，監視対象に指定した監視対象の状態を基にして得られた結果。 監視対象の状態を確認するには，PD_APPD レコードで表示されている Monitoring Status を参照する。 NORMAL：監視対象のうちのどれかの状態が NORMAL。 ABNORMAL：監視対象の状態がすべて ABNORMAL。	－	string(10)	No	－	－
Application Name (APPLICATION_NAME)	プロセス監視の設定で指定された名前。	－	string(64)	No	－	－
Application Status (STATUS)	プロセス監視の設定で指定されたアプリケーションの状態。NORMAL，ABNORMAL を表示する。 アプリケーションの状態は，監視対象に指定した監視対象の状態を基にして得られた結果。 監視対象の状態を確認するには，PD_APPD レコードで表示されている Monitoring Status を参照する。 NORMAL：監視対象の状態がすべて NORMAL。 ABNORMAL：監視対象のうちのどれかの状態が ABNORMAL。	－	string(10)	No	－	－
Case Sensitive (CASE_SENSITIVE)	大文字と小文字の区別。 Yes:区別する。	－	string(4)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Case Sensitive (CASE_SENSITIVE)	No:区別しない。	－	string(4)	No	－	－
Interval (INTERVAL)	Application Summary Extension(PD_APP2)レコードが格納されたインターバルの秒数。常に「0」。	－	ulong	No	－	－
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	－	time_t	No	－	－
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「APP2」。	－	char(8)	No	－	－
Virtual Env ID (VIRTUAL_ENV_ID)	OS が提供する仮想化システムによって作成される仮想化環境の ID。	－	string(65)	No	2008，2012	－

Browser Overview（PI_BRSR）

機能

Browser Overview（PI_BRSR）レコードには，Windows Browser サービスについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

注意

OS が提供する Computer Browser サービス（サービス名：Browser）が停止している場合，このレコードは収集できません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：1,001 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Announcements Domain/sec (ANNOUNCEMENTS_DOMAIN_PER_SEC)	ドメインがドメイン自体をネットワークに通知した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Announcements Server/sec (ANNOUNCEMENTS_SERVER_PER_SEC)	ドメインのサーバがサーバ自体をサーバに通知した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Announcements Total/sec (ANNOUNCEMENTS_TOTAL_PER_SEC)	Announcements Server/sec フィールドと Announcements Domain/sec フィールドの合計値（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Duplicate Master Announcements (DUPLICATE_MASTER_ANNOUNCEMENTS)	マスターブラウザーが，同一ドメイン上に別のマスターブラウザーを検出した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Election Pkts/sec (ELECTION_PACKETS_PER_SEC)	ワークステーションが，ブラウザーエレクションパケットを受信した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Enumerations Domain/sec (ENUMERATIONS_DOMAIN_PER_SEC)	ワークステーションが，ドメイン参照要求を処理した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Enumerations Other/sec (ENUMERATIONS_OTHER_PER_SEC)	ワークステーションが，ドメインまたはサーバ以外の参照要求を処理した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Enumerations Server/sec (ENUMERATIONS_SERVER_PER_SEC)	ワークステーションがサーバ参照要求を処理した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Enumerations Total/sec (ENUMERATION	ワークステーションが参照要求を処理した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
S_TOTAL_PER_SEC)	Enumerations Server/sec フィールド，Enumerations Domain/sec フィールド，および Enumerations Other/sec フィールドの合計値。	AVG	float	No	−	−
Illegal Datagrams/sec (ILLEGAL_DATAGRAMS_PER_SEC)	ワークステーションが不正なフォーマットのデータグラムを受信した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Mailslot Allocations Failed (MAILSLOT_ALLOCATIONS_FAILED)	データグラムレシーバーがユーザーメールスロット書き込みを保管するためのバッファの割り当てに失敗した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Mailslot Opens Failed/sec (MAILSLOT_OPENS_FAILED_PER_SEC)	ワークステーションが，ほかのワークステーションのメールスロットに配信するメールスロットメッセージを受信した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Mailslot Receives Failed (MAILSLOT_RECEIVES_FAILED)	トランスポート障害のために受信できなかったメールスロットメッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Mailslot Writes Failed (MAILSLOT_WRITES_FAILED)	正常に受信したが，メールスロットに書き込めなかったメールスロットメッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Mailslot Writes/sec (MAILSLOT_WRITES_PER_SEC)	メールスロットメッセージを正常に受信した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Missed Mailslot Datagrams (MISSED_MAILSL	構成または割り当て制限のために廃棄されたメールスロットデータグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
OT_DATAGRAMS)	構成または割り当て制限のために廃棄されたメールスロットデータグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Missed Server Announcements (MISSED_SERVER_ANNOUNCEMENTS)	構成または割り当て制限のために失われたサーバ通知数。※	AVG	ulong	No	−	−
Missed Server List Reqs (MISSED_SERVER_LIST_REQUESTS)	ブラウザーサーバのリストを取り出す要求のうち，ワークステーションが受信したが処理できなかった要求数。※	AVG	ulong	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「BRSR」。	COPY	char(8)	No	−	−
Server Announce Allocs Failed/sec (SERVER_ANNOUNCE_ALLOC_FAIL_PER_SEC)	メモリー不足のために，サーバ通知またはドメイン通知が失敗した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Server List Reqs/sec (SERVER_LIST_REQUESTS_PER_SEC)	ブラウザーサーバのリストを取り出す要求をワークステーションが処理した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

Device Detail（PD_DEV）

機能

Device Detail（PD_DEV）レコードには，ファイルシステムドライバおよびカーネルドライバのデバイスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは，複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_DEV_DEVICE_NAME
- PD_DEV_DEVICE_TYPE

ライフタイム

デバイスドライバのインストールからアンインストールまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：2,392 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Active（ACTIVE）	データ収集時にデバイスがアクティブだったかどうかを示す。 有効な値は次のとおり。 • YES • NO	−	string(8)	No	−	−
Depend Group Name（DEPEND_GROUP_NAME）	デバイスをロードする前にロードしておく必要のあるグループ名のリスト。ロードしておく必要がない場合，空白で表示される。	−	string(256)	No	−	−
Depend Service Name（DEPEND_SERVICE_NAME）	デバイスをロードする前にロードしておく必要のあるサービス名のリスト。ロードしておく必要がない場合，空白で表示される。	−	string(256)	No	−	−
Device Name（DEVICE_NAME）	デバイス名。ユーザーインターフェースプログラムがデバイスを識別するために使う名前。	−	string(256)	No	−	−
Device Type（DEVICE_TYPE）	次の 2 つのデバイスドライバサービスタイプのうちどちらか 1 つ。 • FILE_SYSTEM_DRIVER：ファイルシステムのデバイスドライバサービス • KERNEL_DRIVER：カーネルのデバイスドライバサービス	−	string(36)	No	−	−
Error Control（ERROR_CONTROL）	デバイスサービス起動時に失敗した場合のエラー深刻度。有効な値は次のとおり。 • CRITICAL：可能な場合，開始プログラムはエラーをログに記録する。直前に利用した正常な構成を使って開始操作を行っている場合，失敗する。それ以外の場合，直前に利用した正常な構成を使ってシステムを再起動する。	−	string(16)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Error Control (ERROR_CONTROL)	• IGNORE：開始プログラムはエラーをログに記録して開始操作を続行する。 • NORMAL：開始プログラムはエラーをログに記録，およびメッセージボックスをポップアップ表示して開始操作を続行する。 • SEVERE：開始プログラムはエラーをログに記録する。直前に利用した正常な構成を使って開始操作を行っている場合，開始操作を続行する。それ以外の場合，直前に利用した正常な構成を使ってシステムを再起動する。	－	string(16)	No	－	－
Group Name (GROUP_NAME)	レジストリーに登録されているロード順序を決定するグループリストのうち，このデバイスが所属しているグループ名。どのグループにも所属していない場合，空白で表示される。	－	string(256)	No	－	－
Image Path (IMAGE_PATH)	デバイスのイメージパス名。 起動していないデバイスの場合，空白で表示される。 イメージパス名が取得できない場合(レジストリ情報なし)は空白で表示される。	－	string(1024)	No	－	－
Interval (INTERVAL)	常に「0」。	－	ulong	No	－	－
Object Name (OBJECT_NAME)	システムがデバイスドライバをロードするために使用するオブジェクト名。I/O システムが作成した既定のオブジェクト名をドライバ名として使うことを予定している場合，この値は空白で表示される。	－	string(256)	No	－	－
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	－	time_t	No	－	－
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「DEV」。	－	char(8)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Start Constant (START_CONSTANT)	デバイスの開始値。値は次のとおり。 • AUTO：システム起動時に自動的に開始する。 • BOOT：システムローダーが開始する。 • DISABLED：開始できないデバイスサービス。 • DEMAND：プロセスが StartService 関数(API)を呼び出したときに SCM が開始する。 • SYSTEM：IoInitSystem 関数(API)が開始する。	－	string(24)	No	－	－
Tag（TAG）	レジストリーにタグ順次ベクターが指定されていた場合，Group Name フィールドによって指定されたグループ内でのロード順序。デバイスに関するタグが指定されていなかった場合，この値は「0」。	－	long	No	－	－

Event Log（PD_ELOG）

機能

Event Log（PD_ELOG）レコードには，次のある時点でのアプリケーション，システム，およびセキュリティについてのイベントログデータが格納されます。

- 各イベントログの時刻
- イベントソース
- イベントの種類
- イベント ID
- イベントの説明

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- このレコードは，イベントログの監視を開始してからの増分を収集します。履歴レポートの場合，最初に格納されるデータは，設定した収集間隔の最大 2 倍の時間が掛かります。リアルタイムレポートの場合，2 回目以降に収集されます。
- このレコードの収集間隔内に大量のイベントログが記録された場合，ほかのレコード収集が遅延したり，タイムアウトになったりすることがあります。このレコードを収集する場合，収集間隔 10 秒に対するイベントログの増分が「1,000 件／同時に表示するレポート数」以下となるように，収集間隔を設定してください。
- このレコードは，Agent Collector サービス起動後に，レコード収集している時間帯に発生したイベントログだけを収集します。このため，OS の起動・停止時，Performance Management の起動・停止時，およびこのレコード収集の起動・停止時に発生したイベントログは収集できません。
- このレコードは，イベントログの記録内容を収集するレコードであり，アラームで異常または警告を検知したあと，正常に戻ったことを自動的に判断する運用には不向きです。このため，［常にアラーム通知する］を指定するなど，異常または警告の条件を満たした場合に，必ずアラームイベントを通知するような設定が推奨されます。
- 収集データ追加ユーティリティでイベントログの収集対象を設定できます。
- レコード収集中に，収集対象外のイベントログを収集対象に変更した場合，前回の収集時間から発生したイベントログを収集します。
- このレコードは，論理ホスト環境での収集に対応していません。物理ホスト環境で収集してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_ELOG_EVENT_ID
- PD_ELOG_SOURCE_NAME
- PD_ELOG_TIME_GENERATED

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：677 バイト
- 可変部：944 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Computer Name (COMPUTER_NAME)	イベントを生成したコンピュータ名。	－	string(36)	No	－	－
Description (DESCRIPTION)	イベントログの説明。	－	string(512)	No	－	－
Event Category (EVENT_CATEGORY)	イベントのソース固有のサブカテゴリー。	－	string(36)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Event ID (EVENT_ID)	イベント ID。	−	ulong	No	−	−
Event Type ID (EVENT_TYPE_ID)	イベントタイプの識別名。このフィールドの値は，次のどれか。 0 : Success Audit 0 : Failure Audit 1 : Critical 2 : Error 3 : Warning 4 : Information 5 : Verbose	−	ulong	No	−	−
Event Type Name (EVENT_TYPE_NAME)	イベントタイプ。このフィールドの値は，次のどれか。 • エラー • 警告 • 情報 • 成功の監査 • 失敗の監査	−	string(26)	No	−	−
Log Name (LOG_NAME)	イベントログの種類。このフィールドの値は，次のどれか。 • Application : アプリケーション • Security : セキュリティ • System : システム また，カスタムイベントログ名も表示される。	−	string(26)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「ELOG」。	−	char(8)	No	−	−
Source Name (SOURCE_NAME)	エントリーを生成したソース名(アプリケーション，サービス，ドライバ，またはサブシステム)。	−	string(256)	No	−	−
Time Generated (TIME_GENERATED)	イベントエントリーがサブミットされた時刻。	−	time_t	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Name (USER_NAME)	イベント記録時にアクティブだったユーザー名。	－	string(36)	No	－	－
User Sid (USER_SID)	イベント記録時にアクティブだったユーザーのセキュリティ ID の種類。 このフィールドの値は次のどれか。 1：ユーザー 2：グループ 3：ドメイン 4：エイリアス 5：既知のグループ 6：削除されたアカウント 7：無効 8：不明な種類 9：コンピュータ 0：情報なし	－	ulong	No	－	－

Generic Data Detail（PD_GEND）

機能

Generic Data Detail（PD_GEND）レコードは，ユーザーが定義した，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されるユーザーレコードです。収集したいオブジェクトのすべてのパフォーマンスデータを格納するのではなく，特定のパフォーマンスデータだけを格納できるため，オーバーヘッドとディスク領域を節約できます。

パフォーマンスデータの種類に応じて，次の 2 つのフィールドのどちらか 1 つにデータが格納されます。

- Double（DOUBLE_DATA）
- String Data（STRING_DATA）

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- 収集データ追加ユーティリティで設定した収集対象のインスタンスが存在しない場合，Data Type（DATA_TYPE）フィールドの値が空白で，パフォーマンスデータが設定されないレコードが作成されます。
- このレコードは，同じ名称のインスタンスが，頻繁に消滅，生成するようなインスタンスのパフォーマンスデータの収集には向いていません。

  収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定したインスタンスのうち，同一のデータ収集間隔内で，同じ名称のインスタンスが消滅，生成した場合，別々のインスタンスを同じインスタンスとして扱うため，パフォーマンスデータが正しく収集されません。
- 収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定するインスタンスには，同じ名称のインスタンスが，複数同時に存在できるインスタンスを設定しないでください。

  収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定したインスタンスに，同じ名称のインスタンスが複数存在する状態（Generic Data Detail（PD_GEND）レコードの Instance（INSTANCE）フィールドに「#n」が付加される状態）で，その中の 1 つ以上のインスタンスが消滅した場合，継続して動作している同名のインスタンスのパフォーマンスデータが不正になることがあります。

  また，同じ名称のインスタンスが新たに生成された場合も，継続して動作している同名のインスタンスのパフォーマンスデータが不正になることがあります。
- 収集インターバル中に収集データ追加ユーティリティで収集レコードを追加した場合，前回収集した情報から性能値を算出するレコードの最初の性能値は，「0」で表示されます。
- ユーザーレコードを設定する場合，WOW64 をサポートしていないオブジェクトは，収集データ追加ユーティリティの［PI_GENI・PD_GEND レコードの設定］ダイアログボックスに表示されません。
- 64 ビットパフォーマンスデータを収集する場合は，Generic Data Detail64（PD_GD64）レコードをご使用ください。
- このレコードは，論理ホスト環境での収集に対応していません。物理ホスト環境で収集してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_GEND_INSTANCE
- PD_GEND_COUNTER_NAME
- PD_GEND_OBJECT_NAME

ライフタイム

収集データ追加ユーティリティでレコード追加からレコード削除まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,052 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Counter Name (COUNTER_NAME)	カウンタ名。	－	string(256)	No	－	パフォーマンスコンソールのカウンタ名
Data Type (DATA_TYPE)	レコードに蓄積されたデータの種類。正常値は次のとおり。 • DOUBLE	－	string(12)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Data Type (DATA_TYPE)	• STRING	−	string(12)	No	−	−
Double (DOUBLE_DATA)	実数型または整数型で表示される値。	−	double	No	−	−
Float (FLOAT_DATA)	常に「0」。	−	float	No	−	−
Instance (INSTANCE)	インスタンス名。 シングルインスタンスのオブジェクトの場合，空白で表示される。	−	string(256)	No	−	パフォーマンスコンソールのインスタンス名
Integer (INTEGER_DATA)	常に「0」。	−	long	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。	−	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Object Name (OBJECT_NAME)	オブジェクト名。	−	string(256)	No	−	パフォーマンスコンソールのオブジェクト名
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。デフォルトのレコード名は「GEND」。	−	char(8)	No	−	−
String Data (STRING_DATA)	整数型の値を 16 進数(0x)形式で文字列表示する。	−	string(256)	No	−	−

Generic Data Detail64（PD_GD64）

機能

Generic Data Detail64（PD_GD64）レコードは，ユーザーが定義した，ある時点での状態を示す 64 ビットパフォーマンスデータが格納されるユーザーレコードです。収集したいオブジェクトのすべてのパフォーマンスデータを格納するのではなく，特定のパフォーマンスデータだけを格納できるため，オーバーヘッドとディスク領域を節約できます。

パフォーマンスデータの種類に応じて，次の 2 つのフィールドのどちらか 1 つにデータが格納されます。

- Double（DOUBLE_DATA）
- String Data（STRING_DATA）

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- 収集データ追加ユーティリティで設定した収集対象のインスタンスが存在しない場合，Data Type（DATA_TYPE）フィールドの値が空白で，パフォーマンスデータが設定されないレコードが作成されます。
- このレコードは，同じ名称のインスタンスが頻繁に消滅，生成するようなインスタンスのパフォーマンスデータの収集には向いていません。

  収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定したインスタンスのうち，同一のデータ収集間隔内で，同じ名称のインスタンスが消滅，生成した場合，別々のインスタンスを同じインスタンスとして扱うため，パフォーマンスデータが正しく収集されません。
- 収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定するインスタンスには，同じ名称のインスタンスが，複数同時に存在できるインスタンスを設定しないでください。

  収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定したインスタンスに，同じ名称のインスタンスが複数存在する状態（PD_GD64 レコードの Instance（INSTANCE）フィールドに「#n」が付加される状態）で，その中の 1 つ以上のインスタンスが消滅した場合，継続して動作している同名のインスタンスのパフォーマンスデータが不正になることがあります。また，同じ名称のインスタンスが新たに生成された場合も，継続して動作している同名のインスタンスのパフォーマンスデータが不正になることがあります。
- 収集インターバル中に収集データ追加ユーティリティで収集レコードを追加した場合，前回収集した情報から性能値を算出するレコードの最初の性能値は，「0」で表示されます。
- ユーザーレコードを設定する場合，64 ビットをサポートしていないオブジェクトは，収集データ追加ユーティリティの［PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定］ダイアログボックスに表示されません。
- このレコードは，論理ホスト環境での収集に対応していません。物理ホスト環境で収集してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_GD64_INSTANCE
- PD_GD64_COUNTER_NAME
- PD_GD64_OBJECT_NAME

ライフタイム

収集データ追加ユーティリティでレコード追加からレコード削除まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,084 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Counter Name (COUNTER_NAME)	カウンタ名。	－	string(256)	No	－	パフォーマンスコンソールのカウンタ名
Data Type (DATA_TYPE)	レコードに蓄積されたデータの種類。正常値は次のとおり。 • DOUBLE	－	string(12)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Data Type (DATA_TYPE)	• STRING	－	string(12)	No	－	－
Double (DOUBLE_DATA)	実数型または整数型で表示される値。	－	double	No	－	－
Instance (INSTANCE)	インスタンス名。 シングルインスタンスのオブジェクトの場合，空白で表示される。	－	string(256)	No	－	パフォーマンスコンソールのインスタンス名
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。	－	ulong	No	－	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Object Name (OBJECT_NAME)	オブジェクト名。	－	string(256)	No	－	パフォーマンスコンソールのオブジェクト名
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	－	time_t	No	－	－
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。デフォルトのレコード名は「GEND」。	－	char(8)	No	－	－
String Data (STRING_DATA)	整数型の値を 16 進数(0x)形式で文字列表示する。	－	string(256)	No	－	－

Generic Data Interval（PI_GENI）

機能

Generic Data Interval（PI_GENI）レコードは，ユーザーが定義した，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されるユーザーレコードです。収集したいオブジェクトのすべてのパフォーマンスデータを格納するのではなく，特定のパフォーマンスデータだけを格納できるため，オーバーヘッドとディスク領域を節約できます。

パフォーマンスデータの種類に応じて，次の 2 つのフィールドのどちらか 1 つにデータが格納されます。

- Double（DOUBLE_DATA）
- String Data（STRING_DATA）

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- 収集データ追加ユーティリティで設定した収集対象のインスタンスが存在しない場合，Data Type（DATA_TYPE）フィールドの値が空白で，パフォーマンスデータが設定されないレコードが作成されます。
- このレコードは，同じ名称のインスタンスが，頻繁に消滅，生成するようなインスタンスのパフォーマンスデータの収集には向いていません。収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定したインスタンスのうち，同一のデータ収集間隔内で，同じ名称のインスタンスが消滅，生成した場合，別々のインスタンスを同じインスタンスとして扱うため，パフォーマンスデータが正しく収集されません。
- 収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定するインスタンスには，同じ名称のインスタンスが，複数同時に存在できるインスタンスを設定しないでください。

  収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定したインスタンスに，同じ名称のインスタンスが複数存在する状態（Generic Data Interval（PI_GENI）レコードの Instance（INSTANCE）フィールドに「#n」が付加される状態）で，その中の 1 つ以上のインスタンスが消滅した場合，継続して動作している同名のインスタンスのパフォーマンスデータが不正になることがあります。

  また，同じ名称のインスタンスが新たに生成された場合も，継続して動作している同名のインスタンスのパフォーマンスデータが不正になることがあります。
- 収集インターバル中に収集データ追加ユーティリティで収集レコードを追加した場合，前回収集した情報から性能値を算出するレコードの最初の性能値は，「0」で表示されます。
- ユーザーレコードを設定する場合，WOW64 をサポートしていないオブジェクトは，収集データ追加ユーティリティの［PI_GENI・PD_GEND レコードの設定］ダイアログボックスに表示されません。
- 64 ビットパフォーマンスデータを収集する場合は，Generic Data Interval64（PI_GI64）レコードをご使用ください。
- このレコードは，論理ホスト環境での収集に対応していません。物理ホスト環境で収集してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_GENI_INSTANCE
- PI_GENI_COUNTER_NAME
- PI_GENI_OBJECT_NAME

ライフタイム

収集データ追加ユーティリティでレコード追加からレコード削除まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,092 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Counter Name (COUNTER_NAME)	カウンタ名。	COPY	string(256)	No	－	パフォーマンスコンソールのカウンタ名
Data Type (DATA_TYPE)	レコードに蓄積されたデータの種類。正常値は次のとおり。 • DOUBLE	COPY	string(12)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Data Type (DATA_TYPE)	• STRING	COPY	string(12)	No	−	−
Double (DOUBLE_DATA)	実数型または整数型で表示される値。	AVG	double	No	−	−
Float (FLOAT_DATA)	常に「0」。	AVG	float	No	−	−
Instance (INSTANCE)	インスタンス名。 シングルインスタンスのオブジェクトの場合，空白で表示される。	COPY	string(256)	No	−	パフォーマンスコンソールのインスタンス名
Integer (INTEGER_DATA)	常に「0」。	AVG	ulong	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Object Name (OBJECT_NAME)	オブジェクト名。	COPY	string(256)	No	−	パフォーマンスコンソールのオブジェクト名
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。デフォルトのレコード名は「GENI」。	COPY	char(8)	No	−	−
String Data (STRING_DATA)	整数型の値を 16 進数(0x)形式で文字列表示する。	COPY	string(256)	No	−	−

Generic Data Interval64（PI_GI64）

機能

Generic Data Interval64（PI_GI64）レコードは，ユーザーが定義した，ある一定の時間を単位とした64 ビットパフォーマンスデータが格納されるユーザーレコードです。収集したいオブジェクトのすべてのパフォーマンスデータを格納するのではなく，特定のパフォーマンスデータだけを格納できるため，オーバーヘッドとディスク領域を節約できます。

パフォーマンスデータの種類に応じて，次の 2 つのフィールドのどちらか 1 つにデータが格納されます。

- Double（DOUBLE_DATA）
- String Data（STRING_DATA）

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- 収集データ追加ユーティリティで設定した収集対象のインスタンスが存在しない場合，Data Type（DATA_TYPE）フィールドの値が空白で，パフォーマンスデータが設定されないレコードが作成されます。
- このレコードは，同じ名称のインスタンスが，頻繁に消滅，生成するようなインスタンスのパフォーマンスデータの収集には向いていません。収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定したインスタンスのうち，同一のデータ収集間隔内で，同じ名称のインスタンスが消滅，生成した場合，別々のインスタンスを同じインスタンスとして扱うため，パフォーマンスデータが正しく収集されません。
- 収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定するインスタンスには，同じ名称のインスタンスが複数同時に存在できるインスタンスを設定しないでください。収集データ追加ユーティリティで収集対象に設定したインスタンスに，同じ名称のインスタンスが複数存在する状態（PI_GI64 レコードの Instance（INSTANCE）フィールドに「#n」が付加される状態）で，その中の 1 つ以上のインスタンスが消滅した場合，継続して動作している同名のインスタンスのパフォーマンスデータが不正になることがあります。また，同じ名称のインスタンスが新たに生成された場合も，継続して動作している同名のインスタンスのパフォーマンスデータが不正になることがあります。
- 収集インターバル中に収集データ追加ユーティリティで収集レコードを追加した場合，前回収集した情報から性能値を算出するレコードの最初の性能値は，「0」で表示されます。
- ユーザーレコードを設定する場合，64 ビットをサポートしていないオブジェクトは，収集データ追加ユーティリティの［PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定］ダイアログボックスに表示されません。
- このレコードは，論理ホスト環境での収集に対応していません。物理ホスト環境で収集してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_GI64_INSTANCE
- PI_GI64_COUNTER_NAME
- PI_GI64_OBJECT_NAME

ライフタイム

収集データ追加ユーティリティでレコード追加からレコード削除まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,084 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Counter Name (COUNTER_NAME)	カウンタ名。	COPY	string(256)	No	－	パフォーマンスコンソールのカウンタ名
Data Type (DATA_TYPE)	レコードに蓄積されたデータの種類。正常値は次のとおり。 • DOUBLE	COPY	string(12)	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Data Type (DATA_TYPE)	• STRING	COPY	string(12)	No	−	−
Double (DOUBLE_DATA)	実数型または整数型で表示される値。	AVG	double	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME(T1) - RECORD_TIME(T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME(T1) - RECORD_TIME(T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
String Data (STRING_DATA)	整数型の値を 16 進数(0x)形式で文字列表示する。	COPY	string(256)	No	−	−

ICMP Overview（PI_ICMP）

機能

ICMP Overview（PI_ICMP）レコードには，インターネットプロトコルバージョン 4 の ICMP プロトコルを使用しているシステムによって送受信された ICMP メッセージ数の割合，および ICMP の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：1,113 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Messages Outbound Errors (MESSAGES_OUTBOUND_ERRORS)	OS 起動後に，バッファの不足など ICMP 内で検出された問題のために，送信されなかった ICMP メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Messages Rcvd Errors (MESSAGES_RECEIVED_ERRORS)	OS 起動後に，受信したが，エラーがあると判定された ICMP メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Messages Rcvd/sec (MESSAGES_RECEIVED_PER_SEC)	受信した ICMP メッセージ数の割合（／秒）。 このフィールドは，受信時にエラーになったメッセージも含む。	AVG	float	No	−	−
Messages Sent/sec (MESSAGES_SENT_PER_SEC)	送信した ICMP メッセージ数の割合（／秒）。 このフィールドは，送信時にエラーになったメッセージも含む。	AVG	float	No	−	−
Messages/sec (MESSAGES_PER_SEC)	送受信した ICMP メッセージ数の割合（／秒）。 このフィールドは，送受信時にエラーになったメッセージも含む。	AVG	float	No	−	−
Rcvd Address Mask (RECEIVED_ADDRESS_MASK)	OS 起動後に，受信した ICMP アドレスマスク要求メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Address Mask Reply (RECEIVED_ADDRESS_MASK_REPLY)	OS 起動後に，受信した ICMP アドレスマスク応答メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Rcvd Destination Unreachable (RECEIVED_DEST_UNREACHABLE)	OS 起動後に，受信した ICMP 送信先到達不能メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Echo Reply/sec (RECEIVED_ECHO_REPLY_PER_SEC)	受信した ICMP エコー応答メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Rcvd Echo/sec (RECEIVED_ECHO_PER_SEC)	受信した ICMP エコーメッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Rcvd Parameter Problem (RECEIVED_PARAMETER_PROBLEM)	OS 起動後に，受信した ICMP パラメーター障害メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Redirect/sec (RECEIVED_REDIRECT_PER_SEC)	受信した ICMP リダイレクトメッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Rcvd Source Quench (RECEIVED_SOURCE_QUENCH)	OS 起動後に，受信した ICMP 発信元抑制メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Time Exceeded (RECEIVED_TIME_EXCEEDED)	OS 起動後に，受信した ICMP 時間超過メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Timestamp Reply/sec (RECEIVED_TIMESTAMP_REPLY_PER_SEC)	受信した ICMP タイムスタンプ応答メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Rcvd Timestamp/sec (RECEIVED_TIMESTAMP_PER_SEC)	受信した ICMP タイムスタンプ要求メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「ICMP」。	COPY	char(8)	No	−	−
Sent Address Mask (SENT_ADDRESS_MASK)	OS 起動後に，送信した ICMP アドレスマスク要求メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sent Address Mask Reply (SENT_ADDRESS_MASK_REPLY)	OS 起動後に，送信した ICMP アドレスマスク応答メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sent Destination Unreachable (SENT_DESTINATION_UNREACHABLE)	OS 起動後に，送信した ICMP 送信先到達不能メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sent Echo Reply/sec (SENT_ECHO_REPLY_PER_SEC)	送信した ICMP エコー応答メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sent Echo/sec (SENT_ECHO_PER_SEC)	送信した ICMP エコーメッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sent Parameter Problem (SENT_PARAMETER_PROBLEM)	OS 起動後に，送信した ICMP パラメーター障害メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sent Redirect/sec (SENT_REDIRECT_PER_SEC)	送信した ICMP リダイレクトメッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sent Source Quench (SENT_SOURCE_QUENCH)	OS 起動後に，送信した ICMP 発信元抑制メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sent Time Exceeded (SENT_TIME_EXCEEDED)	OS 起動後に，送信した ICMP 時間超過メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sent Timestamp Reply/sec (SENT_TIMESTA	送信した ICMP タイムスタンプ応答メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
MP_REPLY_PER_SEC)	送信した ICMP タイムスタンプ応答メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Sent Timestamp/sec (SENT_TIMESTAMP_PER_SEC)	送信した ICMP タイムスタンプ要求メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－

ICMP Version 6 Overview（PI_ICM6）

機能

ICMP Version 6 Overview（PI_ICM6）レコードには，インターネットプロトコルバージョン 6 の ICMP プロトコルを使用しているシステムによって送受信された ICMP メッセージ数の割合，および ICMP の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：1,209 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Messages Outbound Errors (MESSAGES_OUTBOUND_ERRORS)	OS 起動後に，バッファの不足など ICMP 内で検出された問題のために，送信されなかった ICMP メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Messages Rcvd Errors (MESSAGES_RECEIVED_ERRORS)	OS 起動後に，受信したが，エラーがあると判定された ICMP メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Messages Rcvd/sec (MESSAGES_RECEIVED_PER_SEC)	受信した ICMP メッセージ数の割合（／秒）。 このフィールドは，受信時にエラーになったメッセージも含む。	AVG	float	No	−	−
Messages Sent/sec (MESSAGES_SENT_PER_SEC)	送信した ICMP メッセージ数の割合（／秒）。 このフィールドは，送信時にエラーになったメッセージも含む。	AVG	float	No	−	−
Messages/sec (MESSAGES_PER_SEC)	送受信した ICMP メッセージ数の割合（／秒）。 このフィールドは，送受信時にエラーになったメッセージも含む。	AVG	float	No	−	−
Rcvd Destination Unreachable (RECEIVED_DEST_UNREACHABLE)	OS 起動後に，受信した ICMP 送信先到達不能メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Echo Reply/sec (RECEIVED_ECHO_REPLY_PER_SEC)	受信した ICMP エコー応答メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Rcvd Echo/sec (RECEIVED_ECHO_PER_SEC)	受信した ICMP エコーメッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Rcvd Membership Query (RECEIVED_MEMBERSHIP_QUERY)	グループにメンバーシップの問い合わせを受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Membership Reduction (RECEIVED_MEMBERSHIP_REDUCTION)	グループにメンバーシップのキャンセルを受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Membership Report (RECEIVED_MEMBERSHIP_REPORT)	グループにメンバーシップの報告を受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Neighbor Advert (RECEIVED_NEIGHBOR_ADVERT)	Neighbor Advertisement (NA) パケットを受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Neighbor Solicit (RECEIVED_NEIGHBOR_SOLICIT)	Neighbor Solicitation (NS) パケットを受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Packet Too Big (RECEIVED_PACKET_TOO_BIG)	予想より大きいサイズで受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Parameter Problem (RECEIVED_PARAMETER_PROBLEM)	OS 起動後に，受信した ICMP パラメーター障害メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Redirect/sec (RECEIVED_REDIRECT_PER_SEC)	受信した ICMP リダイレクトメッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Rcvd Router Advert	ルーターの宣言を受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(RECEIVED_ROUTER_ADVERT)	ルーターの宣言を受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Router Solicit (RECEIVED_ROUTER_SOLICIT)	ルーターの要求を受信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Rcvd Time Exceeded (RECEIVED_TIME_EXCEEDED)	OS 起動後に，受信した ICMP 時間超過メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「ICM6」。	COPY	char(8)	No	−	−
Sent Destination Unreachable (SENT_DESTINATION_UNREACHABLE)	OS 起動後に，送信した ICMP 送信先到達不能メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sent Echo Reply/sec (SENT_ECHO_REPLY_PER_SEC)	送信した ICMP エコー応答メッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sent Echo/sec (SENT_ECHO_PER_SEC)	送信した ICMP エコーメッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sent Membership Query (SENT_MEMBERSHIP_QUERY)	グループにメンバーシップの問い合わせを送信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Sent Membership Reduction (SENT_MEMBERSHIP_REDUCTION)	グループにメンバーシップのキャンセルを送信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Sent Membership Report (SENT_MEMBERSHIP_REPORT)	グループにメンバーシップの報告を送信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Sent Neighbor Advert (SENT_NEIGHBOR_ADVERT)	Neighbor Advertisement (NA) パケットを送信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Sent Neighbor Solicit (SENT_NEIGHBOR_SOLICIT)	Neighbor Solicitation (NS) パケットを送信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Sent Packet Too Big (SENT_PACKET_TOO_BIG)	予想より大きいサイズで送信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Sent Parameter Problem (SENT_PARAMETER_PROBLEM)	OS 起動後に，送信した ICMP パラメーター障害メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sent Redirect/sec (SENT_REDIRECT_PER_SEC)	送信した ICMP リダイレクトメッセージ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sent Router Advert (SENT_ROUTER_ADVERT)	ルーターの宣言を送信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Sent Router Solicit (SENT_ROUTER_SOLICIT)	ルーターの請求を送信したパケット数。	AVG	ulong	No	−	−
Sent Time Exceeded (SENT_TIME_EXCEEDED)	OS 起動後に，送信した ICMP 時間超過メッセージ数。※	AVG	ulong	No	−	−

IP Overview（PI_IP）

機能

IP Overview（PI_IP）レコードには，インターネットプロトコルバージョン 4 の IP プロトコルを使用して IP データグラムが送受信された割合，および IP の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：953 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Datagrams Forwarded/sec (DATAGRAMS_FORWARDED_PER_SEC)	最終送信先でなかったため，データグラムを最終送信先へ転送するルートを検索した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Outbound Discarded (DATAGRAMS_OUTBOUND_DISCARDED)	OS 起動後に，宛先への伝送を妨げる問題は検出されなかったが，バッファ領域の不足などが原因で廃棄された送信データグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Outbound No Route (DATAGRAMS_OUTBOUND_NO_ROUTE)	OS 起動後に，宛先に伝送するための経路が検出できなかったために廃棄された送信データグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd Address Errors (DATAGRAMS_RECEIVED_ADDRESS_ERRORS)	OS 起動後に，IP ヘッダーの宛先フィールドにある IP アドレスがこのシステムで受信されるアドレスとして有効でなかったために破壊された受信データグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd Delivered/sec (DATAGRAMS_REC_DELIVERED_PER_SEC)	ICMP などの IP ユーザープロトコルに正常に送信した受信データグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Rcvd Discarded (DATAGRAMS_REC_DISCARDED)	処理の継続を妨げる問題はなかったが，バッファ領域の不足などのために廃棄された受信データグラム数（OS 起動からの累積値）。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd Header Errors (DATAGRAMS_RECEIVED_HEADER_ERRORS)	OS 起動後に，IP ヘッダーのエラーが原因で破壊された受信データグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd Unknown Protocol	OS 起動後に，正常に受信したが，不明またはサポートされていないプロトコルのために廃棄	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(DATAGRAMS_REC_UNKNOWN_PROTOCOL)	されたローカルアドレス指定の受信データグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd/sec (DATAGRAMS_RECEIVED_PER_SEC)	ネットワークインターフェースを介して受信したデータグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Sent/sec (DATAGRAMS_SENT_PER_SEC)	ネットワークインターフェースを介して送信したデータグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams/sec (DATAGRAMS_PER_SEC)	ネットワークインターフェースを介して送受信されたデータグラム数の割合（／秒）。 このフィールドは，Datagrams Rcvd/sec フィールドと Datagrams Sent/sec フィールドの合計値。	AVG	float	No	−	−
Fragment Reassembly Failures (FRAGMENT_REASSEMBLY_FAILURES)	OS 起動後に，IP の再構成アルゴリズムが検出した，タイムアウト，エラーなどの失敗数。※	AVG	ulong	No	−	−
Fragmentation Failures (FRAGMENTATION_FAILURES)	OS 起動後に，断片化が必要だったが，「Don't Fragment」フラグがセットされているなどの理由で廃棄されたデータグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Fragmented Datagrams/sec (FRAGMENTED_DATAGRAMS_PER_SEC)	データグラムが正常に断片化された数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Fragments Created/sec (FRAGMENTS_CREATED_PER_SEC)	データグラムを断片化した結果，生成された IP フラグメント数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Fragments Rcvd/sec	再構築が必要な IP フラグメントを受信した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(FRAGMENTS_RECEIVED_PER_SEC)	再構築が必要な IP フラグメントを受信した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Fragments Reassembled/sec (FRAGMENTS_RE_ASSEMBLED_PER_SEC)	IP フラグメントが正しく再構築された数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「IP」。	COPY	char(8)	No	−	−

IP Version 6 Overview（PI_IP6）

機能

IP Version 6 Overview（PI_IP6）レコードには，インターネットプロトコルバージョン 6 の IP プロトコルを使用して IP データグラムが送受信された割合，および IP の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：953 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Datagrams Forwarded/sec (DATAGRAMS_FORWARDED_PER_SEC)	最終送信先でなかったため，データグラムを最終送信先へ転送するルートを検索した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Outbound Discarded (DATAGRAMS_OUTBOUND_DISCARDED)	OS 起動後に，宛先への伝送を妨げる問題は検出されなかったが，バッファ領域の不足などが原因で廃棄された送信データグラム数。 この値には，同じ条件の Datagrams Forwarded/sec の値が含まれる。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Outbound No Route (DATAGRAMS_OUTBOUND_NO_ROUTE)	OS 起動後に，宛先に伝送するための経路が検出できなかったために廃棄された送信データグラム数。 この値には，同じ条件の Datagrams Forwarded/sec の値が含まれる。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd Address Errors (DATAGRAMS_RECEIVED_ADDRESS_ERRORS)	OS 起動後に，IP ヘッダーの宛先フィールドにある IP アドレスがこのシステムで受信されるアドレスとして有効でなかったために破壊された受信データグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd Delivered/sec (DATAGRAMS_REC_DELIVERED_PER_SEC)	ICMP などの IP ユーザープロトコルに正常に送信した受信データグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Rcvd Discarded (DATAGRAMS_REC_DISCARDED)	処理の継続を妨げる問題はなかったが，バッファ領域の不足などのために廃棄された受信データグラム数（OS 起動からの累積値）。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd Header Errors (DATAGRAMS_RECEIVED_HEADER_ERRORS)	OS 起動後に，IP ヘッダーのエラーが原因で破壊された受信データグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Datagrams Rcvd Unknown Protocol (DATAGRAMS_REC_UNKNOWN_PROTOCOL)	OS 起動後に，正常に受信したが，不明またはサポートされていないプロトコルのために廃棄されたローカルアドレス指定の受信データグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd/sec (DATAGRAMS_RECEIVED_PER_SEC)	エラーを含むネットワークインターフェースを介して受信したデータグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Sent/sec (DATAGRAMS_SENT_PER_SEC)	ネットワークインターフェースを介して送信した，ICMP を含むローカル IP ユーザープロトコルの割合（／秒）。 この値に，Datagrams Forwarded/sec は含まれない。	AVG	float	No	−	−
Datagrams/sec (DATAGRAMS_PER_SEC)	エラーを含むネットワークインターフェースを介して送受信されたデータグラム数の割合（／秒）。 この値に，Forwarded datagrams は含まれない。	AVG	float	No	−	−
Fragment Reassembly Failures (FRAGMENT_REASSEMBLY_FAILURES)	OS 起動後に，IP の再構成アルゴリズムが検出した，タイムアウト，エラーなどの失敗数。※	AVG	ulong	No	−	−
Fragmentation Failures (FRAGMENTATION_FAILURES)	OS 起動後に，断片化が必要だったが，「Don't Fragment」フラグがセットされているなどの理由で廃棄されたデータグラム数。※	AVG	ulong	No	−	−
Fragmented Datagrams/sec (FRAGMENTED_DATAGRAMS_PER_SEC)	データグラムが正常に断片化された数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Fragments Created/sec (FRAGMENTS_C	データグラムを断片化した結果，生成された IP フラグメント数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
REATED_PER_SEC)	データグラムを断片化した結果，生成された IP フラグメント数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Fragments Rcvd/sec (FRAGMENTS_RECEIVED_PER_SEC)	再構築が必要な IP フラグメントを受信した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Fragments Reassembled/sec (FRAGMENTS_RE_ASSEMBLED_PER_SEC)	IP フラグメントが正しく再構築された数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	－	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	－	－
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「IP6」。	COPY	char(8)	No	－	－

Logical Disk Overview（PI_LOGD）

機能

Logical Disk Overview（PI_LOGD）レコードには，ハードディスクドライブまたは固定ディスクドライブの論理パーティションの読み込み，書き込み，転送，および領域についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- このレコードは，ハードディスクドライブまたは固定ディスクドライブの性能情報が収集されます。このため，ネットワークディスクなどの性能情報は監視できません。
- このレコードの ID（INSTANCE）フィールドの値が「Harddisk」で始まる文字列で表示されている場合，次のフィールドは正しく収集されません。この現象は，OS がディスクボリュームを正常に認識できない場合に発生します。また，ID（INSTANCE）フィールドの値が「_Total」の場合，収集したレコードの合計値となるため，正しく収集されません。このため，このフィールドをアラームで監視した場合，不当に異常を通知することがあります。

  ・Drive Type（DRIVE_TYPE）フィールドは，「NO ROOT DIR」と表示されます。

  ・Page File Size Mbytes（PAGE_FILE_SIZE_BYTES）フィールド，および Total Size Mbytes（TOTAL_DISK_SIZE）フィールドは「0」で表示されます。
- このレコードの ID（INSTANCE）フィールドに対応するディスクボリュームに，セキュリティの設定によってアクセスできない場合，このディスクボリュームのレコードは作成されません。このディスクボリュームのレコードを作成する必要がある場合，SYSTEM ユーザーアカウントがアクセスできるセキュリティ設定をしてください。
- OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合，Page File Size Mbytes フィールドは正しく収集できません。PFM - Agent for Platform 起動中に Windows Management Instrumentation サービスのスタートアップの種類が「無効」になった場合，「無効」以外に設定したあと，PFM - Agent for Platform を再起動してください。
- このレコードでは，Windows のフォルダマウント機能を使用して作成したマウントポイントごとのディスク使用率は監視できません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○

項目	デフォルト値	変更可否
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

PI_LOGD_INSTANCE

ライフタイム

ディスクドライブの構成から構成変更まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：700 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
% Disk Read Time (PCT_DISK_READ_TIME)	読み込み要求の処理でディスクがビジーだった経過時間の割合（%）。	%	float	No	－	－
% Disk Time (PCT_DISK_TIME)	読み込みまたは書き込み要求の処理でディスクがビジーだった経過時間の割合（%）。通常，継続的に 100%に近い状態の場合，ディスクが激しく使用されていることを示す。	%	float	No	－	－
% Disk Usage (PCT_DISK_USAGE)	領域全体に対するディスクの使用率（%）。※	%	float	No	－	100 - PCT_FREE_SPACE
% Disk Write Time (PCT_DISK_WRITE_TIME)	書き込み要求の処理でディスクがビジー状態だった経過時間の割合（%）。	%	float	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
% Free Space (PCT_FREE_SPACE)	使用可能な領域全体に対するディスクの空き領域（%）。※	%	float	No	−	−
% Idle Time (PCT_IDLE_TIME)	ディスクがアイドル状態だった時間の割合（%）。	%	float	No	−	−
Available Space Mbytes (FREE_DISK_SIZE)	Free Mbytes フィールドと同じ値。※	AVG	ulong	No	−	−
Avg Disk Bytes/Read (AVG_DISK_BYTES_PER_READ)	読み込み処理中にディスクから転送された平均値（バイト数／処理）。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Bytes/Write (AVG_DISK_BYTES_PER_WRITE)	書き込み処理中にディスクから転送された平均値（バイト数／処理）。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Bytes/Xfer (AVG_DISK_BYTES_PER_TRANSFER)	書き込み処理中または読み込み処理中にディスク間で転送された平均値（バイト数／処理）。通常，転送サイズが大きいほどシステムは効率的に実行されていることを示す。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Queue Length (AVG_DISK_QUEUE_LENGTH)	ディスクのキューに入った読み込みおよび書き込み要求数の平均値。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Read Queue Length (AVG_DISK_READ_QUEUE_LENGTH)	ディスクのキューに入った読み込み要求数の平均値。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Secs/Read (AVG_DISK_SEC_PER_READ)	ディスクからのデータの読み込み処理の平均時間（秒単位）。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Secs/Write (AVG_DISK_SEC_PER_WRITE)	ディスクへのデータの書き込み処理の平均時間（秒単位）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Avg Disk Secs/ Xfer (AVG_DISK_SEC_ PER_TRANSFER)	ディスク転送処理の平均時間(秒単位)。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Write Queue Length (AVG_DISK_WRI TE_QUEUE_LEN GTH)	ディスクのキューに入った書き込み要求数の平均値。	AVG	float	No	−	−
Current Disk Queue Length (CURRENT_DISK _QUEUE_LENGT H)	ディスクに残っている処理待ちまたは処理中のキューの要求数。通常，キューの長さが継続的に「2」を超える状態の場合，ディスクの混雑を示す。※	AVG	ulong	No	−	−
Disk Bytes/sec (DISK_BYTES_PE R_SEC)	書き込みまたは読み込み処理中にディスク間でデータが転送される速度（バイト／秒)。通常，転送速度が速いほどシステムは効率的に実行されていることを示す。	AVG	float	No	−	−
Disk Read Bytes/sec (DISK_READ_BY TES_PER_SEC)	読み込み処理中にディスクからデータが転送される速度（バイト/秒)。	AVG	float	No	−	−
Disk Reads/sec (DISK_READS_PE R_SEC)	ディスクからの読み込み処理の速度（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Disk Write Bytes/sec (DISK_WRITE_B YTES_PER_SEC)	書き込み処理中にディスクにデータが転送される速度（バイト/秒)。	AVG	float	No	−	−
Disk Writes/sec (DISK_WRITES_P ER_SEC)	ディスクへの書き込み処理の速度（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Disk Xfers/sec (DISK_TRANSFE RS_PER_SEC)	ディスクへの読み込みおよび書き込み処理の速度（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Drive Type (DRIVE_TYPE)	ディスクのタイプ。有効な値は次のとおり。 • FIXED • NO ROOT DIR	COPY	string(36)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Drive Type (DRIVE_TYPE)	• REMOVABLE • DRIVE UNKNOWN	COPY	string(36)	No	−	−
Free Mbytes (FREE_MEGABYTES)	使用可能なディスク領域全体に対する未使用領域（メガバイト単位）。このフィールドを履歴レポートで要約した場合，最小値が表示される。※	LO	ulong	No	−	−
ID（INSTANCE）	論理ディスクボリューム名。 (例)C:や D:など	COPY	string(256)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Page File Size Mbytes (PAGE_FILE_SIZE_BYTES)	ドライブに割り当てられた，有効なページングファイルの物理サイズ（メガバイト単位）。※	COPY	double	No	2008, 2012, 2016	ReturnValue / 1MB
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「LOGD」。	COPY	char(8)	No	−	−
Split IO/Sec (SPLIT_IO_PER_SEC)	ディスクへの I/O が複数の I/O に分割された割合（／秒）。分割 I/O は，大き過ぎて 1 つの I/O に収まらない場合，またはディスクが断片化しているサイズのデータを要求する場合に発生する。	AVG	float	No	−	−
Total Size Mbytes (TOTAL_DISK_SIZE)	ディスクのサイズ（メガバイト単位）。※	COPY	double	No	−	(ディスク上のクラスタの総数 * クラスタ当たりのセクタ

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Total Size Mbytes (TOTAL_DISK_SIZE)	ディスクのサイズ（メガバイト単位)。※	COPY	double	No	－	数 * セクタ当たりのバイト数) / 1MB

NBT Overview（PI_NBT）

機能

NBT Overview（PI_NBT）レコードには，ローカルコンピュータをリモートコンピュータに接続している 1 つの NBT 接続を介してデータが送受信された割合についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

収集インターバル中に，Instance（INSTANCE）フィールドに対応するレコードが新規に生成された場合，次のフィールドは前回収集した情報から値を算出するため，最初の値は「0」で表示されます。

Bytes Rcvd/sec

Bytes Sent/sec

Bytes Total/sec

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

PI_NBT_INSTANCE

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：308 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Bytes Rcvd/sec (BYTES_RECEIVED_PER_SEC)	リモートコンピュータに対する NBT 接続を介してローカルコンピュータが受信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Bytes Sent/sec (BYTES_SENT_PER_SEC)	リモートコンピュータに対する NBT 接続を介してローカルコンピュータが送信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Bytes Total/sec (BYTES_TOTAL_PER_SEC)	リモートコンピュータに対する NBT 接続を介してローカルコンピュータが送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Instance (INSTANCE)	リモート接続名。NetBIOS 名で示される。16 バイト目に「.」が付加されている場合，リモートコンピュータから NBT 接続されたことを示す。	COPY	string(256)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「NBT」。	COPY	char(8)	No	−	−

Network Interface Overview（PI_NETI）

機能

Network Interface Overview（PI_NETI）レコードには，TCP/IP 接続などの接続を介してデータとパケットが送受信された割合，および各接続の各種のエラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

IPv4 と IPv6 が共存している環境では，IPv4 と IPv6 の集約された情報が収集されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

PI_NETI_INSTANCE

ライフタイム

NIC インストールから NIC 取り外しまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：532 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Bytes Rcvd/sec (BYTES_RECEIVED_PER_SEC)	ネットワークインターフェースで受信されるデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Bytes Sent/sec (BYTES_SENT_PER_SEC)	ネットワークインターフェースで送信されるデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Bytes Total/sec (BYTES_TOTAL_PER_SEC)	ネットワークインターフェースで送受信されるデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Current Bandwidth (CURRENT_BANDWIDTH)	ネットワークインターフェースの帯域幅の概算値（ビット／秒）。帯域幅が安定している，または正確な帯域幅の概算値が得られない場合，ノミナル帯域幅の概算値（ビット／秒）。※	AVG	ulong	No	−	−
Instance (INSTANCE)	ネットワークのインスタンス名。 インスタンス名は，ループバックアドレス（127.0.0.1），NIC，デバイスごとのダイヤルアウト WAN ラッパーである。 TCP/IP プロトコルのバインドの順（ループバックは常に最初）に次のように表示される。 NIC の場合，ドライバ名。	COPY	string(256)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Output Queue Length	発信パケットのキューの長さ（パケット単位）。NDIS (Network Driver Interface	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(OUTPUT_QUEUE_LENGTH)	Specification）が要求をキューに入れるため，このフィールドの値は常に「0」。※	AVG	ulong	No	−	−
Pkts Outbound Discarded (PACKETS_OUTBOUND_DISCARDED)	OS 起動後に，伝送を妨げるエラーは検出されなかったが，バッファ領域を空にするなどの理由によって，廃棄の対象として選択された発信パケット数。※	AVG	ulong	No	−	−
Pkts Outbound Errors (PACKETS_OUTBOUND_ERRORS)	OS 起動後に，エラーのため伝送されなかった発信パケット数。※	AVG	ulong	No	−	−
Pkts Rcvd Discarded (PACKETS_RECEIVED_DISCARDED)	OS 起動後に，上層プロトコルへの受け渡しを妨げるエラーは検出されなかったが，バッファ領域を空にするなどの理由によって，廃棄の対象として選択された着信パケット数。※	AVG	ulong	No	−	−
Pkts Rcvd Errors (PACKETS_RECEIVED_ERRORS)	OS 起動後に，上層プロトコルへの受け渡しを妨げるエラーを含んだ着信パケット数。※	AVG	ulong	No	−	−
Pkts Rcvd Non-Unicast/sec (PACKETS_REC_NON_UNICAST_PER_SEC)	上層プロトコルに受け渡される非ユニキャスト（サブネットブロードキャストやサブネットマルチキャストなど）のパケットの割合（パケット／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pkts Rcvd Unicast/sec (PACKETS_REC_UNICAST_PER_SEC)	上層プロトコルに受け渡されるサブネットのユニキャストのパケットの割合（パケット／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pkts Rcvd Unknown (PACKETS_RECEIVED_UNKNOWN)	OS 起動後に，ネットワークインターフェースを介して受信され，不明なプロトコルまたはサポートされていないプロトコルのために廃棄されたパケット数。※	AVG	ulong	No	−	−
Pkts Rcvd/sec (PACKETS_RECEIVED_PER_SEC)	ネットワークインターフェースで受信されるパケットの割合（パケット／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Pkts Sent Non-Unicast/sec (PACKETS_SENT_NON_UNICAST_PER_SEC)	上層プロトコルによって，非ユニキャスト（サブネットブロードキャストやサブネットマルチキャストなど）のアドレスへ伝送されるパケットの割合（パケット／秒)。	AVG	float	No	−	−
Pkts Sent Unicast/sec (PACKETS_SENT_UNICAST_PER_SEC)	上層プロトコルによってサブネットユニキャストのアドレスへ伝送されるパケットの割合(パケット／秒)。	AVG	float	No	−	−
Pkts Sent/sec (PACKETS_SENT_PER_SEC)	ネットワークインターフェースで送信されるパケットの割合(パケット／秒)。	AVG	float	No	−	−
Pkts/sec (PACKETS_PER_SEC)	ネットワークインターフェースで送受信されるパケットの割合(パケット／秒)。	AVG	float	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「NETI」。	COPY	char(8)	No	−	−

Page File Detail（PD_PAGF）

機能

Page File Detail（PD_PAGF）レコードには，システムのページングファイルのインスタンスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

ページングファイルは，コミットされた物理メモリーをバックアップする，ディスクで予約された領域です。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

PD_PAGF_INSTANCE

ライフタイム

仮想メモリーのページングファイルの設定から設定変更まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：264 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
% Usage (PCT_USAGE)	ページングファイルの使用率 (%)。※	－	float	No	－	－
% Usage Peak (PCT_USAGE_PEAK)	ページングファイルのピーク時の使用率（%)。※	－	float	No	－	－
Instance (INSTANCE)	ページングファイルのファイルパス。 (¥??¥C:¥pagefile.sys のように表示される)。	－	string(256)	No	－	－
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位)。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。	－	ulong	No	－	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	－	time_t	No	－	－
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PAGF」。	－	char(8)	No	－	－

Physical Disk Overview（PI_PHYD）

機能

Physical Disk Overview（PI_PHYD）レコードには，ハードディスクまたは固定ディスクドライブの読み込み，書き込み，および転送についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。物理ディスクは，分割された論理パーティションの合計値または平均値となります。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- このレコードを収集している状態，または Windows の管理ツールの一つ，パフォーマンスコンソールの「システムモニタ」および「パフォーマンス ログと警告」で Physical Disk オブジェクトのカウンタを監視している状態で，物理ディスクを追加および削除した場合，Agent Collector サービスを再起動してください。
- Agent Collector サービスを再起動しても ID（INSTANCE）フィールドに物理ディスクが反映されない場合，OS を再起動してください。再起動しないでレコードを収集すると，各項目が正しく収集されません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

PI_PHYD_INSTANCE

ライフタイム

ハードディスク構成からハードディスク追加，削除，構成変更まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：596 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
% Disk Read Time (PCT_DISK_READ_TIME)	読み込み要求の処理でディスクがビジーだった経過時間の割合（%）。	%	float	No	−	−
% Disk Time (PCT_DISK_TIME)	読み込みまたは書き込み要求の処理でディスクがビジーだった経過時間の割合（%）。通常，継続的に 100%に近い状態の場合，ディスクが激しく使用されていることを示す。	%	float	No	−	−
% Disk Write Time (PCT_DISK_WRITE_TIME)	書き込み要求の処理でディスクがビジー状態だった経過時間の割合（%）。	%	float	No	−	−
% Idle Time (PCT_IDLE_TIME)	ディスクがアイドル状態だった時間の割合（%）。	%	float	No	−	−
Avg Disk Bytes/Read (AVG_DISK_BYTES_PER_READ)	読み込み処理中にディスクから転送された平均値（バイト数／処理）。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Bytes/Write (AVG_DISK_BYTES_PER_WRITE)	書き込み処理中にディスクから転送された平均値（バイト数／処理）。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Bytes/Xfer (AVG_DISK_BYTES_PER_TRANSFER)	書き込み処理中または読み込み処理中にディスク間で転送された平均値（バイト数／処理）。通常，転送サイズが大きいほどシステムは効率的に実行されていることを示す。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Queue Length (AVG_DISK_QUEUE_LENGTH)	ディスクのキューに入った読み込みおよび書き込み要求数の平均値。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Read Queue Length	ディスクのキューに入った読み込み要求数の平均値。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(AVG_DISK_READ_QUEUE_LENGTH)	ディスクのキューに入った読み込み要求数の平均値。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Secs/Read (AVG_DISK_SEC_PER_READ)	ディスクからのデータの読み込み処理の平均時間（秒単位)。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Secs/Write (AVG_DISK_SEC_PER_WRITE)	ディスクへのデータの書き込み処理の平均時間（秒単位)。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Secs/Xfer (AVG_DISK_SEC_PER_TRANSFER)	ディスク転送処理の平均時間(秒単位)。	AVG	float	No	−	−
Avg Disk Write Queue Length (AVG_DISK_WRITE_QUEUE_LENGTH)	ディスクのキューに入った書き込み要求数の平均値。	AVG	float	No	−	−
Current Disk Queue Length (CURRENT_DISK_QUEUE_LENGTH)	ディスクに残っている処理待ちまたは処理中のキューの要求数。通常，キューの長さが継続的に 2 を超える状態の場合，ディスクの混雑を示す。※	AVG	ulong	No	−	−
Disk Bytes/sec (DISK_BYTES_PER_SEC)	書き込みまたは読み込み処理中にディスク間でデータが転送される速度（バイト／秒)。通常，転送速度が速いほどシステムが効率的に実行されていることを示す。	AVG	float	No	−	−
Disk Read Bytes/sec (DISK_READ_BYTES_PER_SEC)	読み込み処理中にディスクにデータが転送される速度（バイト/秒)。	AVG	float	No	−	−
Disk Reads/sec (DISK_READS_PER_SEC)	ディスクへの読み込み処理の速度（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Disk Write Bytes/sec (DISK_WRITE_BYTES_PER_SEC)	書き込み処理中にディスクにデータが転送される速度（バイト/秒)。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Disk Writes/sec (DISK_WRITES_PER_SEC)	ディスクへの書き込み処理の速度（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Disk Xfers/sec (DISK_TRANSFERS_PER_SEC)	ディスクへの読み込みおよび書き込み処理の速度（／秒）。	AVG	float	No	−	−
ID（INSTANCE）	物理ディスク番号。	COPY	string(256)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME(T1) - RECORD_TIME(T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME(T1) - RECORD_TIME(T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PHYD」。	COPY	char(8)	No	−	−
Split IO/Sec (SPLIT_IO_PER_SEC)	ディスクへの I/O が複数の I/O に分割された割合（／秒）。分割 I/O は，大き過ぎて 1 つの I/O に収まらない場合，またはディスクが断片化しているサイズのデータを要求する場合に発生する。	AVG	float	No	−	−

Process Detail（PD）

機能

Process Detail（PD）レコードには，1 つのプロセスのページング，メモリー，および時間の使用状況などについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

プロセスの存続中または PFM - Agent for Platform がアクティブな間，レコードを収集するたびに新たにアクティブになった各プロセスについて，このレコードは作成されます。このレコードに格納されるパフォーマンスデータは，更新間隔が同じ場合，Process Detail Interval（PD_PDI）レコードと同じです。しかし，ある時点に収集したパフォーマンスデータと一回前に収集したパフォーマンスデータが同じプロセスのものだった場合，同じレコードにパフォーマンスデータが格納され，値がデータベースに上書きされるため，その点が Process Detail Interval（PD_PDI）レコードと異なります。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- 各プロセスは，収集時に実行しているプログラムを表します。
- 収集インターバル中に，Program（INSTANCE）フィールドに対応するレコードが新規に生成された場合，次のフィールドは前回収集した情報から値を算出するため，最初の値は「0」で表示されます。
  - ・CPU %（PCT_PROCESSOR_TIME）
  - ・IO Data Bytes/sec（IO_DATA_BYTES_PER_SEC）
  - ・IO Data Operations/sec（IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC）
  - ・IO Other Bytes/sec（IO_OTHER_BYTES_PER_SEC）
  - ・IO Other Operations/sec（IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC）
  - ・IO Read Bytes/sec（IO_READ_BYTES_PER_SEC）
  - ・IO Read Operations/sec（IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC）
  - ・IO Write Bytes/sec（IO_WRITE_BYTES_PER_SEC）
  - ・IO Write Operations/sec（IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC）
  - ・Page Faults/sec（PAGE_FAULTS_PER_SEC）
  - ・Privileged CPU %（PCT_PRIVILEGED_TIME）
  - ・User CPU %（PCT_USER_TIME）
- このレコードの Program（INSTANCE）フィールドの値が，「System」または「Idle」の場合，Elapsed Time（ELAPSED_TIME）フィールドが正しく収集できないことがあります。この場合，Elapsed Time（ELAPSED_TIME）フィールドの値は，System Overview（PI）レコードの System Up Time（SYSTEM_UP_TIME）に近似していますので，この値を利用してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_INSTANCE
- PD_ID_PROCESS

ライフタイム

プロセスの実行から終了まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：537 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
CPU % (PCT_PROCESSOR_TIME)	プロセスがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	－	float	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Creating Process ID (PROCESS_ID)	このプロセスを起動したプロセスのプロセス ID。※	－	ulong	No	－	－
Elapsed Time (ELAPSED_TIME)	プロセスが実行している総経過時間（秒単位）。※	－	ulong	No	－	－
Group (GROUP_NAME)	プロセスを実行したユーザーが所属するグループ名。グループ名はドメイン名，またはローカルシステムによってあらかじめ定義された名前（「NT AUTHORITY」，コンピュータ名など）。プロセスのセキュリティ ID に対応するグループ名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行グループ名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。	－	string(36)	No	－	－
Handle Count (HANDLE_COUNT)	プロセスによってオープンしているハンドル数。※	－	ulong	No	－	－
IO Data Bytes/sec (IO_DATA_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	float	No	－	－
IO Data Operations/sec (IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしている操作数の割合（／秒）。	－	float	No	－	－
IO Other Bytes/sec (IO_OTHER_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	float	No	－	－
IO Other Operations/sec (IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしている操作数の割合（／秒）。	－	float	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
IO Read Bytes/sec (IO_READ_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしているデータ量の割合（バイト／秒)。	－	float	No	－	－
IO Read Operations/sec (IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしている操作数の割合（／秒)。	－	float	No	－	－
IO Write Bytes/sec (IO_WRITE_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒)。	－	float	No	－	－
IO Write Operations/sec (IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしている操作数の割合（／秒)。	－	float	No	－	－
Interval (INTERVAL)	常に「0」。	－	ulong	No	－	－
PID (ID_PROCESS)	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。	－	ulong	No	－	－
Page Faults/sec (PAGE_FAULTS_PER_SEC)	プロセス内でページフォルトが発生した割合（／秒)。	－	float	No	－	－
Page File Kbytes (PAGE_FILE_BYTES)	プロセスがページングファイルで使用している仮想メモリー領域のサイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Page File Kbytes Peak (PAGE_FILE_BYTES_PEAK)	プロセスがページングファイルで使用していた仮想メモリー領域の最大サイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Pool Nonpaged Kbytes (POOL_NONPAGED_BYTES)	プロセスが使用しているページング不可能なメモリーサイズ(キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Pool Paged Kbytes (POOL_PAGED_BYTES)	プロセスが使用しているページング可能なメモリーサイズ（キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Priority Base (PRIORITY_BASE)	プロセスの基本優先順位。値が大きいほど基本優先度が高い。値は次のとおり。 • 24：リアルタイム • 13：高 • 10：通常以上 • 8：通常 • 6：通常以下 • 4：低	−	ulong	No	−	−
Private Kbytes (PRIVATE_BYTES)	プロセスが，ほかのプロセスと共用できないように割り振ったメモリーのサイズ（キロバイト単位）。※	−	double	No	−	−
Privileged CPU % (PCT_PRIVILEGED_TIME)	プロセスが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	−	float	No	−	−
Program (INSTANCE)	実行プログラム名。	−	string(256)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PD」。	−	char(8)	No	−	−
Thread Count (THREAD_COUNT)	プロセス内のスレッド（命令を実行する単位）の数。プロセスを実行すると最低 1 つのスレッドが起動される。※	−	ulong	No	−	−
User (USER_NAME)	プロセスを実行したユーザー名。 プロセスのセキュリティ ID に対応するユーザー名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行ユーザー名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。	−	string(36)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User CPU %（PCT_USER_TIME）	プロセスがユーザーモードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	－	float	No	－	－
Virtual Env ID（VIRTUAL_ENV_ID）	OS が提供する仮想化システムによって作成される仮想化環境の ID。	－	string(65)	No	2008，2012	－
Virtual Kbytes（VIRTUAL_BYTES）	プロセスが使用している仮想アドレス空間のサイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－
Virtual Kbytes Peak（VIRTUAL_BYTES_PEAK）	プロセスが使用していた仮想アドレス空間の最大サイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－
Working Set Kbytes（WORKING_SET）	プロセスで使用しているメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）のサイズ(キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Working Set Kbytes Peak（WORKING_SET_PEAK）	プロセスで使用していたメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）の最大サイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－

Process Detail Interval（PD_PDI）

機能

Process Detail Interval（PD_PDI）レコードには，1 つのプロセスのページング，メモリー，および時間の使用状況などについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

プロセスの存続中または PFM - Agent for Platform がアクティブな間，レコードを収集するたびに新たにアクティブになった各プロセスについて，このレコードは作成されます。このレコードに格納されるパフォーマンスデータは，更新間隔が同じ場合，Process Detail（PD）レコードと同じです。しかし，ある時点に収集したパフォーマンスデータと一回前に収集したパフォーマンスデータが同じプロセスのものだった場合，同じレコードにパフォーマンスデータが格納されないで新しいレコードがデータベースに格納されるので，その点が Process Detail（PD）レコードと異なります。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- 各プロセスは，収集時に実行しているプログラムを表します。
- 収集インターバル中に，Program（INSTANCE）フィールドに対応するレコードが新規に生成された場合，次のフィールドは前回収集した情報から値を算出するため，最初の値は「0」で表示されます。
  - CPU %（PCT_PROCESSOR_TIME）
  - IO Data Bytes/sec（IO_DATA_BYTES_PER_SEC）
  - IO Data Operations/sec（IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Other Bytes/sec（IO_OTHER_BYTES_PER_SEC）
  - IO Other Operations/sec（IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Read Bytes/sec（IO_READ_BYTES_PER_SEC）
  - IO Read Operations/sec（IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC）
  - IO Write Bytes/sec（IO_WRITE_BYTES_PER_SEC）
  - IO Write Operations/sec（IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC）
  - Page Faults/sec（PAGE_FAULTS_PER_SEC）
  - Privileged CPU %（PCT_PRIVILEGED_TIME）
  - User CPU %（PCT_USER_TIME）
- このレコードの Program（INSTANCE）フィールドの値が，「System」または「Idle」の場合，Elapsed Time（ELAPSED_TIME）フィールドが正しく収集できないことがあります。この場合，Elapsed Time（ELAPSED_TIME）フィールドの値は，System Overview（PI）レコードの System Up Time（SYSTEM_UP_TIME）に近似していますので，この値を利用してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_PDI_INSTANCE
- PD_PDI_ID_PROCESS

ライフタイム

プロセスの実行から終了まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：472 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
CPU %（PCT_PROCESSOR_TIME）	プロセスがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	－	float	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Creating Process ID (PROCESS_ID)	このプロセスを起動したプロセスのプロセス ID。※	－	ulong	No	－	－
Elapsed Time (ELAPSED_TIME)	プロセスが実行している総経過時間（秒単位）。※	－	ulong	No	－	－
Group (GROUP_NAME)	プロセスを実行したユーザーが所属するグループ名。グループ名はドメイン名，またはローカルシステムによってあらかじめ定義された名前（「NT AUTHORITY」，コンピュータ名など）。プロセスのセキュリティ ID に対応するグループ名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行グループ名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。	－	string(36)	No	－	－
Handle Count (HANDLE_COUNT)	プロセスによってオープンしているハンドル数。※	－	ulong	No	－	－
IO Data Bytes/sec (IO_DATA_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	float	No	－	－
IO Data Operations/sec (IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしている操作数の割合（／秒）。	－	float	No	－	－
IO Other Bytes/sec (IO_OTHER_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	float	No	－	－
IO Other Operations/sec (IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしている操作数の割合（／秒）。	－	float	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
IO Read Bytes/sec (IO_READ_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	float	No	－	－
IO Read Operations/sec (IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしている操作数の割合（／秒）。	－	float	No	－	－
IO Write Bytes/sec (IO_WRITE_BYTES_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	－	float	No	－	－
IO Write Operations/sec (IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセスが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしている操作数の割合（／秒）。	－	float	No	－	－
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。	－	ulong	No	－	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
PID (ID_PROCESS)	プロセス ID。実行しているプロセスの一意の識別子。	－	ulong	No	－	－
Page Faults/sec (PAGE_FAULTS_PER_SEC)	プロセス内でページフォルトが発生した割合（／秒）。	－	float	No	－	－
Page File Kbytes (PAGE_FILE_BYTES)	プロセスがページングファイルで使用している仮想メモリー領域のサイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－
Page File Kbytes Peak (PAGE_FILE_BYTES_PEAK)	プロセスがページングファイルで使用していた仮想メモリー領域の最大サイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－
Pool Nonpaged Kbytes (POOL_NONPAGED_BYTES)	プロセスが使用しているページング不可能なメモリーサイズ(キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Pool Paged Kbytes (POOL_PAGED_BYTES)	プロセスが使用しているページング可能なメモリーサイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Priority Base (PRIORITY_BASE)	プロセスの基本優先順位。値が大きいほど基本優先度が高い。値は次のとおり。 • 24：リアルタイム • 13：高 • 10：通常以上 • 8：通常 • 6：通常以下 • 4：低	−	ulong	No	−	−
Private Kbytes (PRIVATE_BYTES)	プロセスが，ほかのプロセスと共用できないように割り振ったメモリーのサイズ（キロバイト単位）。※	−	double	No	−	−
Privileged CPU % (PCT_PRIVILEGED_TIME)	プロセスが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	−	float	No	−	−
Program (INSTANCE)	実行プログラム名。	−	string(256)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PDI」。	−	char(8)	No	−	−
Thread Count (THREAD_COUNT)	プロセス内のスレッド（命令を実行する単位）の数。プロセスを実行すると最低 1 つのスレッドが起動される。※	−	ulong	No	−	−
User (USER_NAME)	プロセスの実行ユーザー名。 なお，プロセスのセキュリティ ID に対応するユーザー名が見つからない場合は「NONE_MAPPED」，プロセス ID から実行ユーザー名が取得できない場合は「Unknown」が格納される。	−	string(36)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User CPU %（PCT_USER_TIME）	プロセスがユーザーモードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	－	float	No	－	－
Virtual Kbytes（VIRTUAL_BYTES）	プロセスが使用している仮想アドレス空間のサイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－
Virtual Kbytes Peak（VIRTUAL_BYTES_PEAK）	プロセスが使用していた仮想アドレス空間の最大サイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－
Working Set Kbytes（WORKING_SET）	プロセスで使用しているメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）のサイズ(キロバイト単位)。※	－	double	No	－	－
Working Set Kbytes Peak（WORKING_SET_PEAK）	プロセスで使用していたメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）の最大サイズ（キロバイト単位）。※	－	double	No	－	－

Process End Detail（PD_PEND）

機能

Process End Detail（PD_PEND）レコードには，プロセスが終了したあとの状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- このレコードは，リアルタイムでは収集できません。
- 各プロセスは，収集前に実行されていたプログラムを表します。
- このレコードは，プロセスのパフォーマンスデータを，Collection Interval とは別のタイミングで常に 60 秒間隔で監視し，終了したプロセスのデータを最大 1,000 件，サービス内部で保持しています。このため，60 秒未満の稼働時間で終了したプロセス情報は収集できません。

  また，サービス内部で保持した終了プロセスのデータは，Collection Interval ごとに Store データベースに格納します。このため，終了プロセス数が 1,000 件を超えない Collection Interval 値を設定してください。
- このレコードが格納するパフォーマンスデータは，Process Detail（PD）レコードおよび Process Detail Interval（PD_PDI）レコードと異なります。
- OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合，このレコードは収集できません。PFM - Agent for Platform 起動中に Windows Management Instrumentation サービスのスタートアップの種類が「無効」になった場合，「無効」以外に設定したあと，PFM - Agent for Platform を再起動してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負

荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_PEND_PROCESS_ID
- PD_PEND_PROCESS_NAME

ライフタイム

プロセスの実行から終了まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：352 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
CPU %（PROCESSOR_PERCENT）	経過時間のうち，プロセスのすべてのスレッドがコードの実行のためにプロセッサを使用した時間の割合（／秒）。	－	float	No	－	(USER_TIME + KERNEL_TIME) / (EXIT_TIME - CREATION_TIME)
Creation Time（CREATION_TIME）	プロセスが作成された時刻。	－	time_t	No	－	－
Elapsed Time（ELAPSED_TIME）	該当プロセスが実行していた総経過時間（秒単位）。	－	ulong	No	－	EXIT_TIME - CREATION_TIME
Exit Code（EXIT_CODE）	プロセスの終了コード。	－	long	No	－	－
Exit Time（EXIT_TIME）	プロセスが終了した時刻。	－	time_t	No	－	－
Interval（INTERVAL）	常に「0」。	－	ulong	No	－	－
Kernel Time（KERNEL_TIME）	システムプライベートデータへアクセスできるように，カーネルモードでコードの実行に費やした時間（秒単位）。	－	utime	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
PID (PROCESS_ID)	プロセスの識別子。	－	long	No	－	－
Priority (PRIORITY)	プロセスの基本優先順位。値は次のとおり。 • REALTIME • HIGH • ABOVE-NORMAL • NORMAL • BELOW-NORMAL • IDLE • Not Applicable	－	string(24)	No	－	－
Privileged CPU% (KERNEL_PERCENT)	経過時間のうち，プロセスのスレッドが，システムプライベートデータへのアクセスを得るためにカーネルモードでコードの実行に費やした時間の割合（／秒）。	－	float	No	－	KERNEL_TIME / (EXIT_TIME - CREATION_TIME)
Program (PROCESS_NAME)	実行プログラム名。	－	string(256)	No	－	－
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	－	time_t	No	－	－
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PEND」。	－	char(8)	No	－	－
Total CPU Time (TOTAL_CPU_TIME)	カーネルモードおよびユーザーモードでコードの実行に掛かった時間（秒単位）。	－	utime	No	－	USER_TIME + KERNEL_TIME
User CPU % (USER_PERCENT)	経過時間のうち，プロセスのスレッドがユーザーモードでのコードの実行に費やした時間の割合（／秒）。	－	float	No	－	USER_TIME / (EXIT_TIME - CREATION_TIME)
User Time (USER_TIME)	ユーザーモードでコードの実行に費やした時間（秒単位）。	－	utime	No	－	－
Working Set Max Kbytes (WORKING_SET_MAX)	プロセスの最大ワーキングセットサイズ（キロバイト単位）。	－	double	No	－	ReturnValue / 1KB
Working Set Min Kbytes	プロセスの最小ワーキングセットサイズ（キロバイト単位）。	－	double	No	－	ReturnValue / 1KB

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(WORKING_SET_MIN)	プロセスの最小ワーキングセットサイズ（キロバイト単位)。	－	double	No	－	ReturnValue / 1KB

Processor Overview（PI_PCSR）

機能

Processor Overview（PI_PCSR）レコードには，各プロセッサでの算術，および論理計算の実行，周辺機器操作の初期化，プロセスのスレッドの実行などの割り込みの割合，および時間の割合などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

- マルチプロセッサ環境で，Instance（INSTANCE）フィールドが「_Total」で示される次のフィールドの最大値は，「100」です。
  - % DPC Time（PCT_DPC_TIME）
  - % Interrupt Time（PCT_INTERRUPT_TIME）
  - CPU %（PCT_PROCESSOR_TIME）
  - Privileged CPU %（PCT_PRIVILEGED_TIME）
  - User CPU %（PCT_USER_TIME）
- OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：WinMgmt）のスタートアップ種類を「無効」に設定している場合，このレコードは収集できません。
- Processor オブジェクトを使用する場合，取得できるプロセッサ情報は 64 個までとなります。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

PI_PCSR_INSTANCE

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：532 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
% C1 Time (PCT_C1_TIME)	プロセッサが C1 低消費電力状態（C1 ステート）だった時間の割合（%）。 プロセッサがすべてのコンテキストを維持し，速やかに実行状態に戻ることができる低消費電力状態。C1 ステートをサポートしていないプロセッサの場合，常に「0」。	%	float	No	−	−
% C2 Time (PCT_C2_TIME)	プロセッサが C2 低消費電力状態（C2 ステート）だった時間の割合（%）。 C1 ステートより低電力で，プロセッサがシステムキャッシュのコンテキストだけ維持している低消費電力状態。C2 ステートをサポートしていないプロセッサの場合，常に「0」。	%	float	No	−	−
% C3 Time (PCT_C3_TIME)	プロセッサが C3 低消費電力状態（C3 ステート）だった時間の割合（%）。 C2 ステートより低電力で，プロセッサはキャッシュの整合性を維持できない低消費電力状態。C3 ステートをサポートしていないプロセッサの場合，常に「0」。	%	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
% DPC Time (PCT_DPC_TIME)	標準割り込みより低い優先順位で実行される特権モードの DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込み処理で実行したプロセッサの使用率（%）。	%	float	No	−	−
% Idle Time (PCT_IDLE_TIME)	プロセッサがアイドル状態だった時間の割合（%）。	%	float	No	−	−
% Interrupt Time (PCT_INTERRUPT_TIME)	ハードウェア（システムクロック，マウス，ディスクドライバ，データ通信ライン，NIC，その他周辺機器などの割り込みが発生するデバイス）割り込み処理で実行したプロセッサの使用率（%）。	%	float	No	−	−
APC Bypasses/sec (APC_BYPASSES_PER_SEC)	プロセッサが，カーネル APC（非同期プロシージャ呼び出し）割り込みを回避された割合（／秒）。	AVG	float	No	2008, 2012, 2016	−
C1 Trans/sec (PCT_C1_TRANSITIONS_PER_SEC)	プロセッサが C1 低消費電力状態（C1 ステート）に入った割合（／秒）。 プロセッサが十分なアイドル状態の場合，C1 ステートに入り，割り込みが発生した場合，C1 ステートから出る。C1 ステートをサポートしていないプロセッサの場合，常に「0」。	%	float	No	−	−
C2 Trans/sec (PCT_C2_TRANSITIONS_PER_SEC)	プロセッサが C2 低消費電力状態（C2 ステート）に入った割合（／秒）。 C1 ステートより低電力で，プロセッサが十分なアイドル状態の場合，C1 ステートから C2 ステートに入り，割り込みが発生した場合，C2 ステートから出る。C2 ステートをサポートしていないプロセッサの場合，常に「0」。	%	float	No	−	−
C3 Trans/sec (PCT_C3_TRANSITIONS_PER_SEC)	プロセッサが C3 低消費電力状態（C3 ステート）に入った割合（／秒）。	%	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
C3 Trans/sec (PCT_C3_TRANSITIONS_PER_SEC)	C2 ステートより低電力で，プロセッサが十分なアイドル状態の場合，C2 ステートから C3 ステートに入り，割り込みが発生した場合，C3 ステートから出る。C3 ステートをサポートしていないプロセッサの場合，常に「0」。	%	float	No	−	−
CPU % (PCT_PROCESSOR_TIME)	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。	%	float	No	−	−
DPC Bypasses/sec (DPC_BYPASSES_PER_SEC)	プロセッサが，標準割り込みより低い優先順位で実行される特権モードの DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みを回避された割合（／秒）。	AVG	float	No	2008, 2012, 2016	−
DPC Rate (DPC_RATE)	標準割り込みより低い優先順位で実行される特権モードの DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みが，プロセッサの DPC キューに追加されたプロセッサクロックのタイマチェック間での平均値。※	AVG	ulong	No	−	−
DPCs Queued/sec (DPCS_QUEUED_PER_SEC)	標準割り込みより低い優先順位で実行される特権モードの DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みが，プロセッサの DPC キューに追加された数の平均値（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Instance (INSTANCE)	プロセッサのインスタンス名。「0」から始まる番号で表示される。	COPY	string(256)	No	−	−
Interrupts/sec (INTERRUPTS_PER_SEC)	プロセッサが，ハードウェア（システムクロック，マウス，ディスクドライバ，データ通信ライン，NIC，その他周辺機器などの割り込みが発生するデバイス）割り込みを受信処理した数の割合（／秒）。 DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みは含まれない。通常，システムの活動状況がな	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Interrupts/sec (INTERRUPTS_PER_SEC)	い状態で，このフィールドが大幅に増加している状態の場合，低速なデバイスが存在するなどのハードウェアの問題を示す。	AVG	float	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Privileged CPU % (PCT_PRIVILEGED_TIME)	特権モードで実行したプロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを特権モードで実行した経過時間の割合。	%	float	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PCSR」。	COPY	char(8)	No	−	−
User CPU % (PCT_USER_TIME)	ユーザーモードで実行したプロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドをユーザーモードで実行した経過時間の割合。	%	float	No	−	−

Server Work Queues Overview（PI_SVRQ）

機能

Server Work Queues Overview（PI_SVRQ）レコードには，サーバのキューの長さおよびキュー内の処理についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

OS が提供する Server サービス（サービス名：LanmanServer）が停止している場合，このレコードは収集できません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

PI_SVRQ_INSTANCE

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：532 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Active Threads (ACTIVE_THREADS)	プロセッサでサーバクライアントからの要求を処理しているスレッド数。 システムは，不要なコンテキストの切り替えを最小限に抑えるために，この値をできるだけ低くしようとする。※	AVG	ulong	No	−	−
Available Threads (AVAILABLE_THREADS)	プロセッサでクライアントからの要求を処理していないサーバスレッド数。 サーバは動的にスレッドの数を調整し，サーバのパフォーマンスを最適化する。※	AVG	ulong	No	−	−
Available Work Items (AVAILABLE_WORK_ITEMS)	プロセッサの使用可能な作業アイテム（クライアントからのすべての要求を表し，サーバは処理を高速化するためにプロセッサごとに使用可能な作業領域を維持する）の数。 通常，0 以外の値が継続する場合，Server サービスの MinFreeWorkItems レジストリー値を増やす必要があると見なす。 Instance フィールドが「Blocking Queue」の場合，このフィールドの値は常に「0」。※	AVG	ulong	No	−	−
Borrowed Work Items (BORROWED_WORK_ITEMS)	プロセッサの使用可能な作業アイテム（クライアントからのすべての要求を表し，サーバは処理を高速化するためにプロセッサごとに使用可能な作業領域を維持する）がなくなり，別のプロセッサから未使用の作業アイテムを借り出した数。 通常，値が増え続ける場合，Server サービスの MaxWorkItems または MinFreeWorkItems レジストリー値を増やす必要があると見なす。	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Borrowed Work Items (BORROWED_WORK_ITEMS)	Instance フィールドが「Blocking Queue」の場合，このフィールドの値は常に「0」。※	AVG	ulong	No	−	−
Bytes Rcvd/sec (BYTES_RECEIVED_PER_SEC)	サーバがプロセッサでネットワーククライアントから受信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Bytes Sent/sec (BYTES_SENT_PER_SEC)	サーバがプロセッサでネットワーククライアントに送信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Bytes Xferd/sec (BYTES_TRANSFERRED_PER_SEC)	サーバがプロセッサでネットワーククライアントに送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Context Blocks Queued/sec (CONTEXT_BLOCKS_QUEUED_PER_SEC)	サーバでの処理待ちのため，作業コンテキストブロックがサーバの FSP キューに入れられる必要があった回数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Current Clients (CURRENT_CLIENTS)	プロセッサが処理しているクライアント数。サーバは，クライアント負荷をシステム内の全サーバに動的に振り分ける。 Instance フィールドが「Blocking Queue」の場合，このフィールドの値は常に「0」。※	AVG	ulong	No	−	−
Instance (INSTANCE)	サーバワークキューのインスタンス名。 Blocking Queue と「0」から始まる番号で表示される。	COPY	string(256)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は 5。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は 5。履歴レポートで	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Interval2 (INTERVAL2)	要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Queue Length (QUEUE_LENGTH)	この CPU のサーバ作業キューの現在の長さ。キューの長さが「4」を超える状態が持続する場合，プロセッサに大きな負荷がかかっていると見なすことができる。この値はある時点でのカウントであり，ある時間間隔での平均値ではない。※	AVG	ulong	No	−	−
Read Bytes/sec (READ_BYTES_PER_SEC)	サーバがプロセッサでクライアントのためにファイルから読み込んだデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Read Ops/sec (READ_OPERATIONS_PER_SEC)	サーバがプロセッサでクライアントのためにファイルからデータを読み込んだ処理数の割合（／秒）。 Instance フィールドが「Blocking Queue」の場合，このフィールドの値は常に「0」。	AVG	float	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「SVRQ」。	COPY	char(8)	No	−	−
Total Bytes/sec (TOTAL_BYTES_PER_SEC)	サーバがプロセッサでクライアントのためにファイルから読み込みおよび書き込みしたデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Total Ops/sec (TOTAL_OPERATIONS_PER_SEC)	サーバがプロセッサでクライアントのためにファイルからデータを読み込みおよび書き込みした処理数の割合（／秒）。 Instance フィールドが「Blocking Queue」の場合，このフィールドの値は常に「0」。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Work Item Shortages (WORK_ITEM_SHORTAGES)	プロセッサの使用可能な作業アイテム（クライアントからのすべての要求を表し，サーバは処理を高速化するためにプロセッサごとに使用可能な作業領域を維持する）が不足している数。 通常，0 以外の値が継続する場合，Server サービスの MaxWorkItems レジストリー値を増やす必要があると見なす。 Instance フィールドが「Blocking Queue」の場合，このフィールドの値は常に「0」。※	AVG	ulong	No	－	－
Write Bytes/sec (WRITE_BYTES_PER_SEC)	サーバがプロセッサでクライアントのためにファイルに書き込んだデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	－	－
Write Ops/sec (WRITE_OPERATIONS_PER_SEC)	サーバがプロセッサでクライアントのためにファイルにデータを書き込んだ処理数の割合（／秒）。 Instance フィールドが「Blocking Queue」の場合，このフィールドの値は常に「0」。	AVG	float	No	－	－

Service Process Detail（PD_SVC）

機能

Service Process Detail（PD_SVC）レコードには，サービス制御マネージャー（SCM）に登録されている，Win32 プロセスなどのアプリケーションサービスについての，ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

このレコードは，複数インスタンスレコードです。

注意

仮想化環境のサービスの情報は収集されません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_SVC_SERVICE_NAME
- PD_SVC_TYPE

ライフタイム

サービスのインストールからアンインストールまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,775 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Accepted Controls (ACCEPTED_CONTROLS)	サービスが受信するコントロールコード。このフィールドの値は，次の値の一部または全部がリストされる。 • PAUSE_CONTINUE : [一時停止]，[再開]できる。 • SHUTDOWN : OS のシャットダウンをサービスに通知する。 • STOP : [停止]できる。 データモデルバージョン 4.1 以降は，次の値もリストされる。 • PARAMCHANGE : 再起動しないで[開始パラメータ]の再読み込みができる。 • NETBINDCHANGE : ネットワークから再起動しないでバインドの変更を受け付けることができる。 • HARDWAREPROFILECHANGE : ハードウェアプロファイルが変更された場合，サービスに通知される。 • POWEREVENT : OS の電源状態が変更された場合，サービスに通知される。 • SESSIONCHANGE : OS のセッション状態が変更された場合，サービスに通知される。	−	string(128)	No	−	−
Checkpoint (CHECKPOINT)	スタート，ストップ，または続行の各処理中に，各ステップの完了に従って，その進行状況をレポートするためにサービスが使用するチェックポイントプログレスカウンタ（インクリメント方式）。このような処理がない場合，この値は，「0」。	−	long	No	−	−
Display Name (DISPLAY_NAME)	サービスを識別するためにユーザーインターフェースプログラムによって使用される名前。	−	string(256)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Image Path (IMAGE_PATH)	サービスのバイナリーファイルへの完全修飾パス。	−	string(1024)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	常に「0」。	−	ulong	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	−	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「SVC」。	−	char(8)	No	−	−
Service Exit Code (SERVICE_EXIT_CODE)	サービス固有の終了コード。	−	long	No	−	−
Service Name (SERVICE_NAME)	サービスコントロールマネージャーデータベースで使用されているサービス名。	−	string(256)	No	−	−
Service Type (TYPE)	次の 2 つのサービスタイプのうちどちらか 1 つ。 • WIN32_OWN_PROCESS：サービスアプリケーションがそのアプリケーション専用のプロセス内で動作する。 • WIN32_SHARE_PROCESS：サービスアプリケーションが 1 つのプロセスをほかのサービスと共有する。 また，サービスがデスクトップと会話することを示す場合，次のタイプもリストされる。 • INTERACTIVE_PROCESS	−	string(64)	No	−	−
State（STATE）	データ収集時のサービスの状態。このフィールドの値は，次のどれか。 • CONTINUE_PENDING：[一時停止]後の[再開]ボタンで[起動]処理中の状態 • PAUSE_PENDING：[一時停止]処理中の状態 • PAUSED：[一時停止]状態 • RUNNING：[起動]状態	−	string(31)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
State（STATE）	• START_PENDING：[起動]処理中の状態 • STOP_PENDING：[停止]処理中の状態 • STOPPED：[停止]状態	－	string(31)	No	－	－
Wait Hint（WAIT_HINT）	サービスがその状態またはチェックポイントを更新するまでに，保留しているスタート，ストップ，または続行の各処理に掛かると予想される時間（ミリ秒単位）。	－	ulong	No	－	－
Win32 Exit Code（WIN32_EXIT_CODE）	Win32 終了コード。	－	long	No	－	－

System Overview（PI）

機能

System Overview（PI）レコードには，次の Windows パフォーマンスオブジェクトについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

System Overview（PI）レコードは，システムが適切に使われているか確認するための情報が格納されているレコードです。各 Windows パフォーマンスオブジェクトについての説明を次に示します。

- Cache オブジェクト

  Cache オブジェクトは，キャッシュマネージャーとファイルシステムドライバの動作で，ディスクにアクセスをしないで高速アクセスするために，データを保管する物理メモリーの領域であるファイルシステムキャッシュについての情報を監視します。

  キャッシュは通常アプリケーションに使用されるため，アプリケーションの I/O 操作のインジケーターとなります。メモリー容量が少ない場合，キャッシュサイズは小さくなり効果的な動作が望めません。

- Memory オブジェクト

  Memory オブジェクトは，物理メモリーおよび仮想メモリーの動作を管理します。

  物理メモリーは RAM（ランダムアクセスメモリー）の領域です。仮想メモリーは物理メモリー内とディスク上の領域から成ります。

  仮想メモリー領域は物理メモリー領域にマップされ，一定時間以上アクセスされないページは仮想メモリーに退避し，物理メモリーを有効利用します。

  ページングは，ページイン（物理メモリーにページの読み込み）とページアウト（仮想メモリーにページを移動）によるディスクと物理メモリーの間で起こるコードとデータの移動です。

  ページフォルトは，物理メモリーに存在しないページをアクセスした時に発生する割り込み処理です。過度なページングによるメモリー不足は，システム処理の遅延の原因となります。

- Objects オブジェクト

  Objects オブジェクトは，プロセス，スレッド，ミューテックスおよびセマフォなどのシステムの論理オブジェクトを監視します。

  各オブジェクトは，自分自身についての基本情報を格納するメモリーが必要です。この情報は，不要なリソースの消費を検出できます。

- Processor オブジェクトおよび Processor Information オブジェクト

  Processor オブジェクトおよび Processor Information オブジェクトは，プロセッサの処理状況を監視します。コンピュータには複数のプロセッサが存在します。

  プロセッサは，算術および論理計算の実行，周辺機器の操作の初期化，プロセスのスレッドを実行するコンピュータの一部です。

- Redirector オブジェクト

  Redirector オブジェクトは，クライアントコンピュータから発信されるネットワーク接続を監視します。

- Server オブジェクト

Server オブジェクトは，サーバコンピュータのネットワーク間の通信を監視します。

- System オブジェクト
  System オブジェクトは，すべてのプロセッサによるシステム全体の各種処理状況を監視します。

注意

- System Overview（PI）レコードの収集開始時に，OS のシステム管理情報を提供する Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：WinMgmt）のスタートアップ種類を「無効」に設定している場合，以下のフィールドの値は，正しく収集できません。
  - % Total DPC Time（PCT_TOTAL_DPC_TIME）
  - % Total Interrupt Time（PCT_TOTAL_INTERRUPT_TIME）
  - Active CPUs（NUMBER_OF_ACTIVE_CPUS）
  - CPU %（PCT_TOTAL_PROCESSOR_TIME）
  - Privileged CPU %（PCT_TOTAL_PRIVILEGED_TIME）
  - System Type（SYSTEM_TYPE）
  - Total DPC Rate（TOTAL_DPC_RATE）
  - Total DPCs Queued/sec（TOTAL_DPCS_QUEUED_PER_SEC）
  - Total Interrupts/sec（TOTAL_INTERRUPTS_PER_SEC）
  - User CPU %"
- OS が提供する Server サービス（サービス名：LanmanServer）が停止している場合，Server オブジェクトに対応する次に示すフィールドは収集できません。
  - Blocking Reqs Rejected（BLOCKING_REQUESTS_REJECTED）
  - Bytes Rcvd/sec（BYTES_RECEIVED_PER_SEC）
  - Bytes Total/sec（BYTES_TOTAL_PER_SEC）
  - Bytes Xmitd/sec（BYTES_TRANSMITTED_PER_SEC）
  - Context Blocks Queued/sec（CONTEXT_BLOCKS_QUEUED_PER_SEC）
  - Errors Access Permissions（ERRORS_ACCESS_PERMISSIONS）
  - Errors Granted Access（ERRORS_GRANTED_ACCESS）
  - Errors Logon（ERRORS_LOGON）
  - Errors System（ERRORS_SYSTEM）
  - File Directory Searches（FILE_DIRECTORY_SEARCHES）
  - Files Open（FILES_OPEN）
  - Files Opened Total（FILES_OPENED_TOTAL）
  - Logon Total（LOGON_TOTAL）
  - Logon/sec（LOGON_PER_SEC）
  - Pool Nonpaged Failures（POOL_NONPAGED_FAILURES）
  - Pool Nonpaged Peak（POOL_NONPAGED_PEAK）
  - Pool Paged Failures（POOL_PAGED_FAILURES）

・Pool Paged Peak（POOL_PAGED_PEAK）
・Server Pool Nonpaged Bytes（SERVER_POOL_NONPAGED_BYTES）
・Server Pool Paged Bytes（SERVER_POOL_PAGED_BYTES）
・Server Sessions（SERVER_SESSIONS）
・Sessions Errored Out（SESSIONS_ERRORED_OUT）
・Sessions Forced Off（SESSIONS_FORCED_OFF）
・Sessions Logged Off（SESSIONS_LOGGED_OFF）
・Sessions Timed Out（SESSIONS_TIMED_OUT）
・Work Item Shortages（WORK_ITEM_SHORTAGES）

- Processor オブジェクトを使用する場合，取得できるプロセッサ情報は 64 個までとなります。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	Yes	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：3,235 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
% Committed Bytes in Use (PCT_COMMITTED_BYTES_IN_USE)	仮想メモリーの使用率（%）。Commit Limit Mbytes に対する Committed Mbytes の割合。※	%	float	No	−	−
% Physical Mem (PCT_PHYSICAL_MEMORY)	物理メモリーの使用率（%）。※	%	double	No	−	100 ＊ USED_PHYSICAL_MEMORY_BYTES / TOTAL_PHYSICAL_MEMORY_KBYTES
% Registry Quota in Use (PCT_REGISTRY_QUOTA_IN_USE)	プロセッサで，利用できるすべてのレジストリークォータのうち，システムが使用している割合（%）。※	%	float	No	−	−
% Total DPC Time (PCT_TOTAL_DPC_TIME)	標準割り込みより低い優先順位で実行される特権モードの DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込み処理で実行したプロセッサの使用率（%）。 マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は「100」で表示される。	%	float	No	−	−
% Total Interrupt Time (PCT_TOTAL_INTERRUPT_TIME)	ハードウェア（システムクロック，マウス，ディスクドライバ，データ通信ライン，NIC，その他周辺機器などの割り込みが発生するデバイス）割り込み処理で実行したプロセッサの使用率（%）。 マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は「100」で表示される。	%	float	No	−	−
Active CPUs (NUMBER_OF_ACTIVE_CPUS)	プロセッサ数。	COPY	ulong	No	−	−
Alignment Fixups/sec (ALIGNMENT_FIXUPS_PER_SEC)	プロセッサで，システムが固定した整列フォルトの割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Async Copy Reads/sec (ASYNC_COPY_READS_PER_SEC)	キャッシュからアプリケーションのバッファにメモリーコピー処理を含む，ファイルシステムキャッシュのページから非同期読み込みが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Async Data Maps/sec (ASYNC_DATA_MAPS_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュにマッピングしたページがメインメモリーにない場合，そのページを取り出すまで待機しない割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Async Fast Reads/sec (ASYNC_FAST_READS_PER_SEC)	ファイルシステムを介さないでキャッシュから直接データを非同期取り出しが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Async MDL Reads/sec (ASYNC_MDL_READS_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュのページのアクセスに，MDL（メモリー記述子リスト）を使用し，非同期読み込みが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Async Pin Reads/sec (ASYNC_PIN_READS_PER_SEC)	データをディスク上に書き戻す前処理で，ファイルシステムキャッシュ内に非同期読み込みが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Available Mbytes (AVAILABLE_BYTES)	物理メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）。 プロセスへの割り当て，またはシステムがすぐに利用できるゼロメモリー，空きメモリー，およびスタンバイメモリー（キャッシュ済み）の領域の合計。 通常，継続的に Total Physical Mem Mbytes フィールドの 5%より少ない状態の場合，過度なページングが発生していることを示す。※	AVG	double	No	−	−
Blocking Reqs Rejected (BLOCKING_REQUESTS_REJECTED)	サーバが空の作業項目数が不足したため，SMB（ファイルサービスやプリントサービスを実現するためのネットワークプロトコル）のブロッキングを拒否した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Bytes Rcvd/sec (BYTES_RECEIVED_PER_SEC)	サーバがネットワークから受信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Bytes Total/sec (BYTES_TOTAL_PER_SEC)	サーバがネットワークとの間で送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	double	No	−	−
Bytes Xmitd/sec (BYTES_TRANSMITTED_PER_SEC)	サーバがネットワークに送信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
CPU % (PCT_TOTAL_PROCESSOR_TIME)	プロセッサの使用率（%）。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は「100」で表示される。	%	float	No	−	−
Cache Faults/sec (CACHE_FAULTS_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュでページフォルトが発生した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Cache Mbytes (CACHE_BYTES)	ファイルシステムキャッシュの使用中のサイズ（メガバイト単位）。※	AVG	double	No	−	−
Cache Mbytes Peak (CACHE_BYTES_PEAK)	ファイルシステムキャッシュの使用していた最大サイズ（メガバイト単位）。※	AVG	double	No	−	−
Commit Limit Mbytes (COMMIT_LIMIT)	仮想メモリー領域の合計サイズ（メガバイト単位）。 ページングファイルの拡張を必要としないでコミットできるメモリー領域の合計。※	AVG	double	No	−	−
Committed Mbytes (COMMITTED_BYTES)	仮想メモリー領域の使用（コミット）しているサイズ（メガバイト単位）。 通常，継続的に Total Physical Mem Mbytes フィールドの値より大きい場合，より多くのメモリーが必要な可能性があることを示す。※	AVG	double	No	−	−
Conns Core (CONNECTS_CORE)	OS 起動後に，オリジナルの MS-Net SMB プロトコルを稼	AVG	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Conns Core (CONNECTS_CORE)	働しているサーバに接続する必要があった回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns LAN Manager 2.0 (CONNECTS_LAN_MANAGER_20)	LAN Manager 2.0 サーバ（LMX サーバを含む）との接続数。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns LAN Manager 2.1 (CONNECTS_LAN_MANAGER_21)	LAN Manager 2.1 サーバ（LMX サーバを含む）との接続数。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Windows NT (CONNECTS_WINDOWS_NT)	OS 起動後に，以前の OS と接続した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Context Blocks Queued/sec (CONTEXT_BLOCKS_QUEUED_PER_SEC)	サーバで作業コンテキストブロックが処理待ちのため，FSP キューに入れられる必要があった数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Context Switches/sec (CONTEXT_SWITCHES_PER_SEC)	すべてのプロセスのスレッドによって，プロセッサで発生したコンテキストスイッチ（実行スレッドが任意にプロセッサを解放する場合，優先順位が高いスレッドによって割り込まれる場合，Executive またはサブシステムサービスを使用するためにユーザーモードと特権モードの間で切り替わる場合）の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Copy Read Hits % (COPY_READ_HITS_PCT)	ファイルシステムキャッシュのページからの読み込み要求の割合（%）。	%	float	No	−	−
Copy Reads/sec (COPY_READS_PER_SEC)	キャッシュからアプリケーションのバッファにメモリーコピー処理を含む，ファイルシステムキャッシュのページから読み込みが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Current Commands (CURRENT_COMMANDS)	処理待ちのためキューに入っているリダイレクタへの要求の数。※	AVG	ulong	No	−	−
Current Processes (CURRENT_PROCESSES)	プロセッサで，実行中のプロセス数。※	AVG	ulong	No	−	−
Current Threads (CURRENT_THREADS)	プロセッサで，実行中のスレッド数。※	AVG	ulong	No	−	−
Data Flush Pages/sec (DATA_FLUSH_PAGES_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュがキャッシュの内容をディスクに書き込んだ回数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Data Flushes/sec (DATA_FLUSHES_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュがキャッシュの内容をディスクに書き込んだ割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Data Map Hits % (DATA_MAP_HITS_PCT)	ページングが発生しないでファイルシステムキャッシュにページをマッピングした要求の割合（%）。	%	float	No	−	−
Data Map Pins/sec (DATA_MAP_PINS_PER_SEC)	サポート対象外のため，常に「0」。	AVG	float	No	−	−
Data Maps/sec (DATA_MAPS_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュにページをマッピングした割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Demand Zero Faults/sec (DEMAND_ZERO_FAULTS_PER_SEC)	ページフォルトを解決するために必要なゼロページ（以前保存されていたデータが空になったゼロだけのページ）数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Errors Access Permissions (ERRORS_ACCESS_PERMISSIONS)	OS 起動後に，ユーザーが（クライアントとして）適切に保護されていないファイルにアクセスしているため，ファイルオープンエラーで STATUS_ACCESS_DENIED が発生した回数。履歴レポートで要約した場合，最大値が表示される。※	HI	ulong	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Errors Granted Access (ERRORS_GRANTED_ACCESS)	OS 起動後に，正常にオープンしているファイルに権限を持たないユーザーがアクセスしたため，アクセス拒否された回数。履歴レポートで要約した場合，最大値が表示される。※	HI	ulong	No	−	−
Errors Logon (ERRORS_LOGON)	OS 起動後に，サーバへログオンに失敗した回数。サーバのセキュリティを破ることを目的とするパスワード推測プログラムなどが使用されているかを示す。履歴レポートで要約した場合，最大値が表示される。※	HI	ulong	No	−	−
Errors System (ERRORS_SYSTEM)	OS 起動後に，サーバで予期しないエラーが発生した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Events（EVENTS）	アクティブなイベント（2 つ以上のスレッドがそれぞれの実行の同期を取る）数。※	AVG	ulong	No	−	−
Exception Dispatches/sec (EXCEPTION_DISPATCHES_PER_SEC)	プロセッサで，システムがディスパッチした例外の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Fast Read Not Possibles/sec (FAST_READ_NOT_POSSIBLES_PER_SEC)	ファイルシステムを呼び出さないで，API コールでファイルシステムキャッシュ内のデータを取得しようとしたが，できなかった割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Fast Read Resource Misses/sec (FAST_READ_RESOURCE_MISSES_PER_SEC)	リソース不足で要求を処理できなかったために，キャッシュミスが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Fast Reads/sec (FAST_READS_PER_SEC)	ファイルシステムを介さないでキャッシュから直接データを取り出した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
File Control Bytes/sec (FILE_CONTROL	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み以外の操作で，転送したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
_BYTES_PER_SEC)	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み以外の操作で，転送したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	－	－
File Control Ops/sec (FILE_CONTROL_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み以外の操作が発生した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
File Data Ops/sec (FILE_DATA_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込みおよび書き込み操作が発生した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
File Directory Searches (FILE_DIRECTORY_SEARCHES)	サーバで現在アクティブなファイルに対する検索回数。※	AVG	ulong	No	－	－
File Read Bytes/sec (FILE_READ_BYTES_PER_SEC)	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込み操作で，転送したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	－	－
File Read Ops/sec (FILE_READ_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセッサで，ファイルシステムのデータの読み込み操作が発生した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
File Write Bytes/sec (FILE_WRITE_BYTES_PER_SEC)	プロセッサで，ファイルシステムのデータの書き込み操作で，転送したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	－	－
File Write Ops/sec (FILE_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC)	プロセッサで，ファイルシステムのデータの書き込み操作が発生した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Files Open (FILES_OPEN)	サーバで現在開かれているファイルの数。※	AVG	ulong	No	－	－
Files Opened Total (FILES_OPENED_TOTAL)	OS 起動後に，サーバがクライアントに代わってファイルオープンに成功した回数。※	AVG	ulong	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Floating Emulations/sec (FLOATING_EMULATIONS_PER_SEC)	プロセッサで，システムが実行したフローティングエミュレーションの割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Free System Page Table Entries (FREE_SYSTEM_PAGE_TABLE_ENTRIES)	システムが使用していないページテーブルエントリーの数。※	AVG	ulong	No	－	－
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	－	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Lazy Write Flushes/sec (LAZY_WRITE_FLUSHES_PER_SEC)	遅延書き込み（メモリー上でページが変更されたあとでディスクを更新する処理）スレッドが，キャッシュの内容をディスクに書き込んだ割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Lazy Write Pages/sec (LAZY_WRITE_PAGES_PER_SEC)	遅延書き込み（メモリー上でページが変更されたあとでディスクを更新する処理）スレッドが，ページをディスクに書き込んだ割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Logon Total (LOGON_TOTAL)	OS 起動後に，サーバに対し，対話式ログオン，ネットワークログオン，サービスログオン，成功したログオン，および失敗したログオンの合計数。※	COPY	ulong	No	－	－
Logon/sec (LOGON_PER_SEC)	対話式ログオン，ネットワークログオン，サービスログオン，成功したログオン，および失敗したログオンが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
MDL Read Hits % (MDL_READ_HITS_PCT)	ファイルシステムキャッシュのページのアクセスに，MDL（メモリー記述子リスト）を使用し，読み込みした要求の割合（%）。	%	float	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
MDL Reads/sec (MDL_READS_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュのページのアクセスに，MDL（メモリー記述子リスト）を使用し，読み込みが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Mutexes (MUTEXES)	アクティブなミューテックス（スレッドの実行を制御し，1つのスレッドを実行できるようにする）数。※	AVG	ulong	No	−	−
Net Errors/sec (NETWORK_ERRORS_PER_SEC)	リダイレクタとサーバで重大な通信障害のため，予期しないエラーが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Non Committed Mbytes (NON_COMMITTED_BYTES)	仮想メモリー領域の未使用サイズ（メガバイト単位）。※	AVG	double	No	−	COMMIT_LIMIT - COMMITTED_BYTES
Page Faults/sec (PAGE_FAULTS_PER_SEC)	ページフォルトが発生した数の割合（／秒）。通常，継続的に5を超える状態の場合，メモリーのボトルネックを示す。	AVG	float	No	−	−
Page Reads/sec (PAGE_READS_PER_SEC)	ページフォルトが発生した時にページインした操作数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Page Writes/sec (PAGE_WRITES_PER_SEC)	ページフォルトが発生した時にページアウトした操作数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pages Input/sec (PAGES_INPUT_PER_SEC)	ページフォルトが発生した時にページインしたページ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pages Output/sec (PAGES_OUTPUT_PER_SEC)	ページフォルトが発生した時にページアウトしたページ数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pages/sec (PAGES_PER_SEC)	ページフォルトが発生した時にページングしたページ数の割合（／秒）。Pages Input/sec フィールドと Pages Output/sec フィールドの合計値の割合。通常，継続的に5を超える状態の場合，メモリーがシステムのボトルネックになっている可能性がある。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Pin Read Hits % (PIN_READ_HITS_PCT)	ファイルシステムキャッシュ内のページにアクセスするためにディスク上のデータ読み取り要求をしなかった割合（%）。	%	float	No	−	−
Pin Reads/sec (PIN_READS_PER_SEC)	データをディスク上に書き戻す前処理で，ファイルシステムキャッシュ内に読み込まれた割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pkts Rcvd/sec (PACKETS_RECEIVED_PER_SEC)	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を受信した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pkts Xmitd/sec (PACKETS_TRANSMITTED_PER_SEC)	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を送信した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pkts/sec (PACKETS_PER_SEC)	リダイレクタがパケット（サーバメッセージブロック［SMB］ともいう）を処理した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pool Nonpaged Allocs (POOL_NONPAGED_ALLOCS)	システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページアウト不可能な物理メモリー領域を割り当てた回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Pool Nonpaged Bytes (POOL_NONPAGED_BYTES)	システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページアウト不可能な物理メモリーのサイズ(バイト単位)。通常，サーバの活動状況が増加していない状態でこのフィールドが一様に増加している状態の場合，メモリーリークを生じているプロセスが実行されている可能性がある。※	AVG	double	No	−	−
Pool Nonpaged Failures (POOL_NONPAGED_FAILURES)	サーバで，物理メモリーが少な過ぎるために，ページング不可能なメモリーの割り当てに失敗した平均回数（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Pool Nonpaged Peak	OS 起動後のある時点でサーバが使用していた，システムのコ	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(POOL_NONPAGED_PEAK)	ンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所であるページング不可能なメモリーサイズの最大値（バイト単位)。このフィールドは，コンピュータに搭載する物理メモリーの指標となる値。※	AVG	double	No	−	−
Pool Paged Allocs (POOL_PAGED_ALLOCS)	システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページアウト可能な物理メモリー領域を，割り当てた回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Pool Paged Bytes (POOL_PAGED_BYTES)	システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページアウト可能な物理メモリーのサイズ(キロバイト単位)。※	AVG	double	No	−	−
Pool Paged Failures (POOL_PAGED_FAILURES)	OS 起動後に，サーバで物理メモリーまたは仮想メモリーが少な過ぎるために，ページング可能なメモリーの割り当てに失敗した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Pool Paged Peak (POOL_PAGED_PEAK)	OS 起動後のある時点でサーバが割り当てた，システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所であるページング可能なメモリーサイズの最大値（バイト単位)。このフィールドは，コンピュータに搭載する物理メモリーと仮想メモリーの設定値の指標となる値。※	AVG	double	No	−	−
Pool Paged Resident Bytes (POOL_PAGED_RESIDENT_BYTES)	システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページアウト可能な常駐する物理メモリーのサイズ（キロバイト単位)。※	AVG	double	No	−	−
Privileged CPU % (PCT_TOTAL_PRIVILEGED_TIME)	特権モードで実行したプロセッサの使用率（%)。プロセッサが非アイドル状態のスレッドを特権モードで実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境	%	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Privileged CPU % (PCT_TOTAL_PRIVILEGED_TIME)	に関わらず最大値は 100 で表示される。	%	float	No	−	−
Processes (PROCESSES)	メモリー上に保持しているアクティブなプロセス数。※	AVG	ulong	No	−	−
Processor Queue Length (PROCESSOR_QUEUE_LENGTH)	プロセッサのキューにあるスレッドの数です。ディスクカウンタとは異なり，このカウンタは実行準備ができているスレッドだけをカウントし，実行中のスレッドはカウントしません。プロセッサが複数ある場合でもプロセッサ時間のキューは 1 つです。プロセッサが複数ある場合に，プロセッサごとの負荷を確認したい場合は，プロセッサの数で割る必要があります。※	AVG	ulong	No	−	−
Read Aheads/sec (READ_AHEADS_PER_SEC)	キャッシュマネージャーがファイルへ順次アクセスを検出し，ファイルシステムキャッシュから読み取りが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Read Bytes Cache/sec (READ_BYTES_CACHE_PER_SEC)	アプリケーションがリダイレクタを使用してファイルシステムキャッシュに読み込んだ割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Read Bytes Net/sec (READ_BYTES_NETWORK_PER_SEC)	データがファイルシステムキャッシュになかったために，アプリケーションがネットワークを介して読み込んだデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Read Bytes Nonpaging/sec (READ_BYTES_NON_PAGING_PER_SEC)	リダイレクタによってアプリケーションの通常のファイル要求を，ネットワークコンピュータに対して読み込んだデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Read Bytes Paging/sec (READ_BYTES_PAGING_PER_SEC)	リダイレクタがアプリケーションのページフォルトでデータを読み込んだデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Read Ops Random/sec (READ_OPERATIONS_RANDOM_PER_SEC)	特定のファイルハンドルを使用してファイルごとデータを取得し，データをランダムに読み込み操作をした割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Read Pkts Small/sec (READ_PACKETS_SMALL_PER_SEC)	アプリケーションがサーバの調整バッファサイズの 4 分の 1 未満の読み込み操作をした割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Read Pkts/sec (READ_PACKETS_PER_SEC)	読み込みパケットがネットワークにデータの読み込み要求をした割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Reads Denied/sec (READS_DENIED_PER_SEC)	サーバが読み込み要求を受け入れられなかった割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Reads Large/sec (READS_LARGE_PER_SEC)	アプリケーションがサーバの調整バッファサイズの 2 倍以上の読み込み操作をした割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PI」。	COPY	char(8)	No	−	−
Redir Bytes Rcvd/sec (REDIR_BYTES_RECEIVED_PER_SEC)	ネットワークからリダイレクタに受信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Redir Bytes Total/sec (REDIR_BYTES_TOTAL_PER_SEC)	リダイレクタがネットワークから送受信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Redir Bytes Xmitd/sec (REDIR_BYTES_TRANSMITTED_PER_SEC)	リダイレクタからネットワークに送信したデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	float	No	−	−
Redir File Data Ops/sec	リダイレクタがデータ操作を処理している割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(REDIR_FILE_DATA_OPERATIONS_PER_SEC)	リダイレクタがデータ操作を処理している割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Redir File Read Ops/sec (REDIR_FILE_READ_OPS_PER_SEC)	アプリケーションがリダイレクタにデータを要求した割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Redir File Write Ops/sec (REDIR_FILE_WRITE_OPS_PER_SEC)	アプリケーションがリダイレクタにデータを送信した割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Redir Server Sessions (REDIR_SERVER_SESSIONS)	OS 起動後に，リダイレクタが管理しているセキュリティオブジェクトのセッション数。※	AVG	ulong	No	－	－
Sections (SECTIONS)	アクティブなセクション（プロセスがデータ格納用に作成する仮想メモリー領域）数。※	AVG	ulong	No	－	－
Semaphores (SEMAPHORES)	アクティブなセマフォ（別のスレッドと共有しているデータに対する排他的アクセスをセマフォを使用して取得する）数。※	AVG	ulong	No	－	－
Server Disconnects (SERVER_DISCONNECTS)	OS 起動後に，サーバがリダイレクタとの接続を切断した回数。※	AVG	ulong	No	－	－
Server Pool Nonpaged Bytes (SERVER_POOL_NONPAGED_BYTES)	サーバが使用している，システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページング不可能なメモリーサイズ（バイト単位）。※	AVG	double	No	－	－
Server Pool Paged Bytes (SERVER_POOL_PAGED_BYTES)	サーバが使用している，システムのコンポーネントがタスクを実行する時に領域を取得した場所である，ページング可能なメモリーサイズ（バイト単位）。※	AVG	double	No	－	－

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Server Reconnects (SERVER_RECONNECTS)	OS 起動後に，リダイレクタが新しいアクティブ要求を完了するためにサーバに再接続する必要があった回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Server Sessions (SERVER_SESSIONS)	サーバでアクティブなセッション数。※	AVG	ulong	No	−	−
Server Sessions Hung (SERVER_SESSIONS_HUNG)	リモートサーバからの応答がなくタイムアウトになり，処理を継続できないアクティブなセッション数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sessions Errored Out (SESSIONS_ERRORED_OUT)	OS 起動後に，予期しないエラーまたは自動切断タイムアウトや正常に接続したセッションによって終了したセッション数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sessions Forced Off (SESSIONS_FORCED_OFF)	OS 起動後に，強制的にログオフされたセッション数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sessions Logged Off (SESSIONS_LOGGED_OFF)	OS 起動後に，正常終了したセッション数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sessions Timed Out (SESSIONS_TIMED_OUT)	OS 起動後に，アイドル時間がサーバの AutoDisconnect パラメーター値を超過したために終了したセッション数。※	AVG	ulong	No	−	−
Sync Copy Reads/sec (SYNC_COPY_READS_PER_SEC)	キャッシュからアプリケーションのバッファにメモリーコピー処理を含む，ファイルシステムキャッシュのページから同期読み込みが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sync Data Maps/sec (SYNC_DATA_MAPS_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュにマッピングしたページがメインメモリーにない場合，そのページを取り出すまで待機する割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sync Fast Reads/sec	ファイルシステムを介さないでキャッシュから直接データを同	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
(SYNC_FAST_READS_PER_SEC)	期取り出しが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sync MDL Reads/sec (SYNC_MDL_READS_PER_SEC)	ファイルシステムキャッシュのページのアクセスに，MDL（メモリー記述子リスト）を使用し，同期読み込みが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Sync Pin Reads/sec (SYNC_PIN_READS_PER_SEC)	データをディスク上に書き戻す前処理で，ファイルシステムキャッシュ内に同期読み込みが発生した割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
System Cache Resident Bytes (SYSTEM_CACHE_RESIDENT_BYTES)	OS コード（Ntoskrnl.exe，Hal.dll，ブートドライバ，Ntldr/osloader が読み込むファイルシステム）が使用する，ファイルシステムキャッシュ内のページング可能な物理メモリーサイズ（バイト単位）。※	AVG	double	No	−	−
System Calls/sec (SYSTEM_CALLS_PER_SEC)	プロセッサで，実行中のプロセスがシステムサービスルーチンを呼び出した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
System Code Resident Bytes (SYSTEM_CODE_RESIDENT_BYTES)	OS コード（Ntoskrnl.exe，Hal.dll，ブートドライバ，Ntldr/osloader が読み込むファイルシステム）が使用する，ページング可能な物理メモリーサイズ（バイト単位）。※	AVG	double	No	−	−
System Code Total Bytes (SYSTEM_CODE_TOTAL_BYTES)	OS コード（Ntoskrnl.exe，Hal.dll，ブートドライバ，Ntldr/osloader が読み込むファイルシステム）が使用する，ページング可能な仮想メモリーサイズ（バイト単位）。※	AVG	double	No	−	−
System Driver Resident Bytes (SYSTEM_DRIVER_RESIDENT_BYTES)	デバイスドライバが使用するページング可能な物理メモリー領域のサイズ（バイト単位）。※	AVG	double	No	−	−
System Driver Total Bytes (SYSTEM_DRIVE	デバイスドライバが使用するページング可能な仮想メモリー	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
R_TOTAL_BYTES)	領域のサイズ（バイト単位）。※	AVG	double	No	−	−
System Type (SYSTEM_TYPE)	プロセッサの種類。	COPY	string(50)	No	−	−
System Up Time (SYSTEM_UP_TIME)	OS が起動してからの稼働経過時間（秒単位）。	COPY	ulong	No	−	−
Threads (THREADS)	メモリー上に保持しているアクティブなスレッド数。※	AVG	ulong	No	−	−
Total APC Bypasses/sec (TOTAL_APC_BYPASSES_PER_SEC)	プロセッサが，カーネル APC（非同期プロシージャ呼び出し）割り込みを回避された割合（／秒）。	AVG	float	No	2008, 2012, 2016	−
Total DPC Bypasses/sec (TOTAL_DPC_BYPASSES_PER_SEC)	プロセッサが，標準割り込みより低い優先順位で実行される特権モードの DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みを回避された割合（／秒）。※	AVG	float	No	2008, 2012, 2016	−
Total DPC Rate (TOTAL_DPC_RATE)	標準割り込みより低い優先順位で実行される特権モードの DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みが，プロセッサの DPC キューに追加されたプロセッサクロックのタイマチェック間での平均値。※	AVG	ulong	No	−	−
Total DPCs Queued/sec (TOTAL_DPCS_QUEUED_PER_SEC)	標準割り込みより低い優先順位で実行される特権モードの DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みが，プロセッサの DPC キューに追加された数の平均値（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Total Interrupts/sec (TOTAL_INTERRUPTS_PER_SEC)	プロセッサが，ハードウェア（システムクロック，マウス，ディスクドライバ，データ通信ライン，NIC，その他周辺機器などの割り込みが発生するデバイス）割り込みを受信処理した数の割合（／秒）。 DPC（遅延プロシージャ呼び出し）割り込みは含まれない。通常，システムの活動状況がな	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Total Interrupts/sec (TOTAL_INTERRUPTS_PER_SEC)	い状態で，このフィールドが大幅に増加している状態の場合，低速なデバイスが存在するなどのハードウェアの問題を示す。	AVG	float	No	−	−
Total Physical Mem Mbytes (TOTAL_PHYSICAL_MEMORY_KBYTES)	物理メモリー領域の合計サイズ(メガバイト単位)。※	COPY	double	No	−	ReturnValue / 1MB
Trans Pages RePurposed/sec (TRANS_PAGES_REPURPOSED_PER_SEC)	キャッシュ内に残り，異なる目的で再使用した移行キャッシュのページ数の割合（／秒)。	AVG	double	No	−	−
Transition Faults/sec (TRANSITION_FAULTS_PER_SEC)	ページフォルトが発生した時に，共有している別のプロセスによって使われていたページ，または更新されたページリストもしくはスタンバイリストにあるページを回復することによって，ページングしなかった数の割合（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Used Physical Mem Mbytes (USED_PHYSICAL_MEMORY_BYTES)	物理メモリー領域の使用サイズ(メガバイト単位)。※	AVG	double	No	−	TOTAL_PHYSICAL_MEMORY_KBYTES - AVAILABLE_BYTES
User CPU % (PCT_TOTAL_USER_TIME)	ユーザーモードで実行したプロセッサの使用率（%)。プロセッサが非アイドル状態のスレッドをユーザーモードで実行した経過時間の割合。マルチプロセッサ環境に関わらず最大値は「100」で表示される。	%	float	No	−	−
Work Item Shortages (WORK_ITEM_SHORTAGES)	受信通知時に STATUS_DATA_NOT_ACCEPTED（作業アイテムが利用できない，または作業アイテムを割り当てできない）が戻された割合（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Write Bytes Cache/sec (WRITE_BYTES_	アプリケーションがリダイレクタを使用してファイルシステム	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
CACHE_PER_SEC)	キャッシュに書き込みした割合(バイト／秒)。	AVG	float	No	−	−
Write Bytes Net/sec (WRITE_BYTES_NETWORK_PER_SEC)	データがファイルシステムキャッシュになかったために，アプリケーションがネットワークを介して書き込んだデータ量の割合（バイト／秒)。	AVG	float	No	−	−
Write Bytes Nonpaging/sec (WRITE_BYTES_NON_PAGING_PER_SEC)	リダイレクタによってアプリケーションの通常のファイル要求を，ネットワークコンピュータに対して書き込みした割合(バイト／秒)。	AVG	float	No	−	−
Write Bytes Paging/sec (WRITE_BYTES_PAGING_PER_SEC)	リダイレクタがアプリケーションのページフォルトでデータを書き込んだデータ量の割合（バイト／秒)。	AVG	float	No	−	−
Write Copies/sec (WRITE_COPIES_PER_SEC)	ページフォルトが発生した時に物理メモリーにある別の場所からページをコピーした数の割合(／秒)。	AVG	float	No	−	−
Write Ops Random/sec (WRITE_OPERATIONS_RANDOM_PER_SEC)	特定のファイルハンドルを使用してファイルごとデータを取得し，データをランダムに書き込み操作した割合（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Write Pkts Small/sec (WRITE_PACKETS_SMALL_PER_SEC)	アプリケーションがサーバの調整バッファサイズの４分の１未満の書き込み操作をした割合(／秒)。	AVG	float	No	−	−
Write Pkts/sec (WRITE_PACKETS_PER_SEC)	書き込みパケットがネットワークにデータの書き込み要求をした割合（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Writes Denied/sec (WRITES_DENIED_PER_SEC)	サーバが書き込み要求を受け入れられなかった割合（／秒)。	AVG	float	No	−	−
Writes Large/sec (WRITES_LARGE_PER_SEC)	アプリケーションがサーバの調整バッファサイズの２倍以上の書き込み操作をした割合（／秒)。	AVG	float	No	−	−

TCP Overview（PI_TCP）

機能

TCP Overview（PI_TCP）レコードには，インターネットプロトコルバージョン 4 の TCP プロトコルを使用して TCP セグメントが送受信された割合や TCP の接続数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：825 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Conn Failures (CONNECTION_FAILURES)	OS 起動後に，TCP 接続が SYN-SENT 状態または SYN-RCVD 状態から CLOSED 状態へ直接移行した回数と，TCP 接続が SYN-RCVD 状態から LISTEN 状態に直接移行した回数の合計値。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Active (CONNECTIONS_ACTIVE)	OS 起動後に，TCP 接続が CLOSED 状態から SYN-SENT 状態に直接移行した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Established (CONNECTIONS_ESTABLISHED)	ESTABLISHED 状態または CLOSE-WAIT 状態のどちらかだった TCP 接続数の合計値。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Passive (CONNECTIONS_PASSIVE)	OS 起動後に，TCP 接続が LISTEN 状態から SYN-RCVD 状態に直接移行した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Reset (CONNECTIONS_RESET)	OS 起動後に，TCP 接続が ESTABLISHED 状態または CLOSE-WAIT 状態から CLOSED 状態に直接移行した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「TCP」。	COPY	char(8)	No	−	−
Segments Rcvd/sec (SEGMENTS_RECEIVED_PER_SEC)	セグメントを受信した割合（／秒）。エラー受信，および確立された接続上にあるものを含む。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Segments Retransmitted/sec (SEGMENTS_RETRANSMITTED_PER_SEC)	以前に転送された 1 バイト以上のデータが入っているセグメントを再転送した割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Segments Sent/sec (SEGMENTS_SENT_PER_SEC)	セグメントが送信された割合（／秒）。接続しているセグメントは含まれるが，再送バイトを含むセグメントは含まれない。	AVG	float	No	－	－
Segments/sec (SEGMENTS_PER_SEC)	TCP プロトコルを使用して TCP セグメントが送受信された割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－

TCP Version 6 Overview（PI_TCP6）

機能

TCP Version 6 Overview（PI_TCP6）レコードには，インターネットプロトコルバージョン 6 の TCP プロトコルを使用して TCP セグメントが送受信された割合や TCP の接続数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：825 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Conn Failures (CONNECTION_FAILURES)	OS 起動後に，TCP 接続が SYN-SENT 状態または SYN-RCVD 状態から CLOSED 状態へ直接移行した回数と，TCP 接続が SYN-RCVD 状態から LISTEN 状態に直接移行した回数の合計値。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Active (CONNECTIONS_ACTIVE)	OS 起動後に，TCP 接続が CLOSED 状態から SYN-SENT 状態に直接移行した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Established (CONNECTIONS_ESTABLISHED)	ESTABLISHED 状態または CLOSE-WAIT 状態のどちらかだった TCP 接続数の合計値。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Passive (CONNECTIONS_PASSIVE)	OS 起動後に，TCP 接続が LISTEN 状態から SYN-RCVD 状態に直接移行した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Conns Reset (CONNECTIONS_RESET)	OS 起動後に，TCP 接続が ESTABLISHED 状態または CLOSE-WAIT 状態から CLOSED 状態に直接移行した回数。※	AVG	ulong	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「TCP6」。	COPY	char(8)	No	−	−
Segments Rcvd/sec (SEGMENTS_RECEIVED_PER_SEC)	セグメントを受信した割合（／秒）。エラー受信，および確立された接続上にあるものを含む。	AVG	float	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Segments Retransmitted/sec (SEGMENTS_RETRANSMITTED_PER_SEC)	以前に転送された 1 バイト以上のデータが入っているセグメントを再転送した割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－
Segments Sent/sec (SEGMENTS_SENT_PER_SEC)	セグメントが送信された割合（／秒）。接続しているセグメントは含まれるが，再送バイトを含むセグメントは含まれない。	AVG	float	No	－	－
Segments/sec (SEGMENTS_PER_SEC)	TCP プロトコルを使用して TCP セグメントが送受信された割合（／秒）。	AVG	float	No	－	－

UDP Overview（PI_UDP）

機能

UDP Overview（PI_UDP）レコードには，インターネットプロトコルバージョン 4 の UDP プロトコルを使用して送受信された UDP データグラムについての割合，および UDP の各種エラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：761 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Datagrams No Port/sec (DATAGRAMS_NO_PORT_PER_SEC)	宛先ポートにアプリケーションが存在しない UDP データグラムを受信した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Rcvd Errors (DATAGRAMS_RECEIVED_ERRORS)	OS 起動後に，宛先ポートにアプリケーションが存在しない理由以外で配送できなかった UDP データグラムの受信数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd/sec (DATAGRAMS_RECEIVED_PER_SEC)	UDP ユーザーに配送された UDP データグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Sent/sec (DATAGRAMS_SENT_PER_SEC)	エンティティが送信した UDP データグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams/sec (DATAGRAMS_PER_SEC)	エンティティが送受信した UDP データグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「UDP」。	COPY	char(8)	No	−	−

UDP Version 6 Overview（PI_UDP6）

機能

UDP Version 6 Overview（PI_UDP6）レコードには，インターネットプロトコルバージョン 6 の UDP プロトコルを使用して送受信された UDP データグラムについての割合，および UDP の各種エラー数などについての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：761 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Datagrams No Port/sec (DATAGRAMS_NO_PORT_PER_SEC)	宛先ポートにアプリケーションが存在しない UDP データグラムを受信した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Rcvd Errors (DATAGRAMS_RECEIVED_ERRORS)	OS 起動後に，宛先ポートにアプリケーションが存在しない理由以外で配送できなかった UDP データグラムの受信数。※	AVG	ulong	No	−	−
Datagrams Rcvd/sec (DATAGRAMS_RECEIVED_PER_SEC)	UDP ユーザーに配送された UDP データグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams Sent/sec (DATAGRAMS_SENT_PER_SEC)	エンティティが送信した UDP データグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Datagrams/sec (DATAGRAMS_PER_SEC)	エンティティが送受信した UDP データグラム数の割合（／秒）。	AVG	float	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「UDP6」。	COPY	char(8)	No	−	−

User Data Detail（PD_UPD）

機能

User Data Detail（PD_UPD）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある時点での状態を示すユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_UPD_TT
- PD_UPD_TS_KEY
- PD_UPD_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：284 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種類（UPD）。	−	char (8)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時（グリニッジ標準時）。	−	time_t	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードを格納するための間隔の秒の長さ。常に「0」。	−	ulong	No	−	−
Trans String Key (TS_KEY)	文字列型のトランザクションストリングキー。	−	string(20)	No	−	−
Trans Data Key (TD_KEY)	数値型のトランザクションデータキー。	−	ulong	No	−	−
Trans Type（TT）	トランザクションタイプ。	−	string(20)	No	−	−
Collect Time (API_TIME)	データが変換された時。	−	time_t	No	−	−
User Long 1（L1）	long 型整数値。	−	double	No	−	−
User Long 2（L2）	long 型整数値。	−	double	No	−	−
User Unsigned Long 1（UL1）	unsigned long 型整数値。	−	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 2（UL2）	unsigned long 型整数値。	−	ulong	No	−	−
User Float 1（F1）	浮動小数点値。	−	double	No	−	−
User Float 2（F2）	浮動小数点値。	−	double	No	−	−
User Time 1（T1）	時間値（PFM - Web Console のローカルタイムで表示されます）。	−	time_t	No	−	−
User String 1（S1）	サイズ 16 の文字列。	−	string(16)	No	−	−
User String 2（S2）	サイズ 16 の文字列。	−	string(16)	No	−	−
User String 3（S3）	サイズ 16 の文字列。	−	string(16)	No	−	−
User String 4（S4）	サイズ 16 の文字列。	−	string(16)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User String 5（S5）	サイズ 32 の文字列。	－	string(32)	No	－	－
User String 6（S6）	サイズ 32 の文字列。	－	string(32)	No	－	－
User String 7（S7）	サイズ 64 の文字列。	－	string(64)	No	－	－

User Data Detail - Extended（PD_UPDB）

機能

User Data Detail - Extended（PD_UPDB）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある時点での状態を示すユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。User Data Detail（PD_UPD）レコードより，多くのフィールドが用意されています。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PD_UPDB_TT
- PD_UPDB_TS_KEY
- PD_UPDB_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：712 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種類（UPDB）。	−	char (8)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時（グリニッジ標準時）。	−	time_t	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードを格納するための間隔の秒の長さ。常に「0」。	−	ulong	No	−	−
Trans String Key (TS_KEY)	文字列型のトランザクションストリングキー。	−	string(20)	No	−	−
Trans Data Key (TD_KEY)	数値型のトランザクションデータキー。	−	ulong	No	−	−
Trans Type（TT）	トランザクションタイプ。	−	string(20)	No	−	−
Collect Time (API_TIME)	データが変換された時。	−	time_t	No	−	−
User Long 1（L1）	long 型整数値。	−	double	No	−	−
User Long 2（L2）	long 型整数値。	−	double	No	−	−
User Long 3（L3）	long 型整数値。	−	double	No	−	−
User Long 4（L4）	long 型整数値。	−	double	No	−	−
User Long 5（L5）	long 型整数値。	−	double	No	−	−
User Unsigned Long 1（UL1）	unsigned long 型整数値。	−	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 2（UL2）	unsigned long 型整数値。	−	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 3（UL3）	unsigned long 型整数値。	−	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 4（UL4）	unsigned long 型整数値。	−	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 5（UL5）	unsigned long 型整数値。	−	ulong	No	−	−
User Float 1（F1）	浮動小数点値。	−	double	No	−	−
User Float 2（F2）	浮動小数点値。	−	double	No	−	−
User Float 3（F3）	浮動小数点値。	−	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Float 4（F4）	浮動小数点値。	－	double	No	－	－
User Float 5（F5）	浮動小数点値。	－	double	No	－	－
User Time 1（T1）	時間値（PFM - Web Console のローカルタイムで表示されます）。	－	time_t	No	－	－
User String 1（S1）	サイズ 16 の文字列。	－	string(16)	No	－	－
User String 2（S2）	サイズ 16 の文字列。	－	string(16)	No	－	－
User String 3（S3）	サイズ 16 の文字列。	－	string(16)	No	－	－
User String 4（S4）	サイズ 16 の文字列。	－	string(16)	No	－	－
User String 5（S5）	サイズ 16 の文字列。	－	string(16)	No	－	－
User String 6（S6）	サイズ 32 の文字列。	－	string(32)	No	－	－
User String 7（S7）	サイズ 32 の文字列。	－	string(32)	No	－	－
User String 8（S8）	サイズ 32 の文字列。	－	string(32)	No	－	－
User String 9（S9）	サイズ 32 の文字列。	－	string(32)	No	－	－
User String 10（S10）	サイズ 32 の文字列。	－	string(32)	No	－	－
User String 11（S11）	サイズ 64 の文字列。	－	string(64)	No	－	－
User String 12（S12）	サイズ 64 の文字列。	－	string(64)	No	－	－
User String 13（S13）	サイズ 64 の文字列。	－	string(64)	No	－	－
User String 14（S14）	サイズ 64 の文字列。	－	string(64)	No	－	－
User String 15（S15）	サイズ 64 の文字列。	－	string(64)	No	－	－

User Data Interval（PI_UPI）

機能

User Data Interval（PI_UPI）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある一定の時間を単位としたユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_UPI_TT
- PI_UPI_TS_KEY
- PI_UPI_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：396 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種類（UPI)。	COPY	char (8)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時（グリニッジ標準時)。	COPY	time_t	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードを格納するための間隔の秒の長さ。常に「0」。	COPY	ulong	No	−	−
Trans String Key (TS_KEY)	文字列型のトランザクションストリングキー。	COPY	string(20)	No	−	−
Trans Data Key (TD_KEY)	数値型のトランザクションデータキー。	COPY	ulong	No	−	−
Trans Type（TT）	トランザクションタイプ。	COPY	string(20)	No	−	−
Collect Time (API_TIME)	データが変換された時。	COPY	time_t	No	−	−
User Long 1（L1）	long 型整数値。	AVG	double	No	−	−
User Long 2（L2）	long 型整数値。	AVG	double	No	−	−
User Long Roll 1 (L1_R)	蓄積された long 型整数値(このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Long Roll 2 (L2_R)	蓄積された long 型整数値(このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Unsigned Long 1（UL1）	unsigned long 型整数値。	AVG	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 2（UL2）	unsigned long 型整数値。	AVG	ulong	No	−	−
User Unsigned Long Roll 1 (UL1_R)	蓄積された unsigned long 型整数値(このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	ulong	No	−	−
User Unsigned Long Roll 2 (UL2_R)	蓄積された unsigned long 型整数値(このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	ulong	No	−	−
User Float 1（F1）	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 2（F2）	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Float Roll 1 (F1_R)	蓄積された浮動小数点値(このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Roll 2 (F2_R)	蓄積された浮動小数点値(このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Time 1（T1）	時間値（PFM - Web Console のローカルタイムで表示されます)。	COPY	time_t	No	−	−
User String 1（S1）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 2（S2）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 3（S3）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 4（S4）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 5（S5）	サイズ 32 の文字列。	COPY	string(32)	No	−	−
User String 6（S6）	サイズ 32 の文字列。	COPY	string(32)	No	−	−
User String 7（S7）	サイズ 64 の文字列。	COPY	string(64)	No	−	−

User Data Interval - Expanded 1（PI_XUI1）

機能

User Data Interval - Expanded 1（PI_XUI1）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある一定の時間を単位としたユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。User Data Interval - Extended（PI_UPIB）レコードより，多くの数値型のフィールドが用意されています。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_XUI1_TT
- PI_XUI1_TS_KEY
- PI_XUI1_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,148 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種類（XUI1）。	COPY	char (8)	No	−	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時（グリニッジ標準時）。	COPY	time_t	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバルの秒数。常に「0」。	COPY	ulong	No	−	−
Trans String Key (TS_KEY)	文字列型のトランザクションストリングキー。	COPY	string(20)	No	−	−
Trans Data Key (TD_KEY)	数値型のトランザクションデータキー。	COPY	ulong	No	−	−
Trans Type（TT）	トランザクションタイプ。	COPY	string(20)	No	−	−
Collect Time (API_TIME)	データが変換された時。	COPY	time_t	No	−	−
User Float 01 (F01)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 02 (F02)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 03 (F03)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 04 (F04)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 05 (F05)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 06 (F06)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 07 (F07)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 08 (F08)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 09 (F09)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 10 (F10)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Float 11 (F11)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 12 (F12)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 13 (F13)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 14 (F14)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 15 (F15)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 16 (F16)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 17 (F17)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 18 (F18)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 19 (F19)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 20 (F20)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 21 (F21)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 22 (F22)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 23 (F23)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 24 (F24)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 25 (F25)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 26 (F26)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 27 (F27)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 28 (F28)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Float 29 (F29)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 30 (F30)	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float Add 01 (F01_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 02 (F02_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 03 (F03_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 04 (F04_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 05 (F05_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 06 (F06_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 07 (F07_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 08 (F08_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 09 (F09_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 10 (F10_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 11 (F11_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Float Add 12 (F12_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 13 (F13_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 14 (F14_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 15 (F15_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 16 (F16_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 17 (F17_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 18 (F18_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 19 (F19_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 20 (F20_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 21 (F21_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 22 (F22_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 23 (F23_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 24 (F24_A)	蓄積された浮動小数点値	ADD	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Float Add 24 (F24_A)	(このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 25 (F25_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 26 (F26_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 27 (F27_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 28 (F28_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 29 (F29_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Add 30 (F30_A)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Time 1（T1）	時間値（PFM - Web Console のローカルタイムで表示されます)。	COPY	time_t	No	−	−
User String 1（S1）	サイズ 64 の文字列。	COPY	string(64)	No	−	−
User String 2（S2）	サイズ 64 の文字列。	COPY	string(64)	No	−	−
User String 3（S3）	サイズ 128 の文字列。	COPY	string(128)	No	−	−

User Data Interval - Expanded 2（PI_XUI2）

機能

User Data Interval - Expanded 2（PI_XUI2）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある一定の時間を単位としたユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。User Data Interval - Extended（PI_UPIB）レコードより，多くの数値型のフィールドが用意されています。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_XUI2_TT
- PI_XUI2_TS_KEY
- PI_XUI2_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,148 バイト

フィールド

「Record Type」フィールドの値は「XUI2」です。それ以外は PI_XUI1 レコードと同じです。

User Data Interval - Expanded 3（PI_XUI3）

機能

User Data Interval - Expanded 3（PI_XUI3）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある一定の時間を単位としたユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。User Data Interval - Extended（PI_UPIB）レコードより，多くの数値型のフィールドが用意されています。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_XUI3_TT
- PI_XUI3_TS_KEY
- PI_XUI3_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,148 バイト

フィールド

「Record Type」フィールドの値は「XUI3」です。それ以外は PI_XUI1 レコードと同じです。

User Data Interval - Expanded 4（PI_XUI4）

機能

User Data Interval - Expanded 4（PI_XUI4）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある一定の時間を単位としたユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。User Data Interval - Extended（PI_UPIB）レコードより，多くの数値型のフィールドが用意されています。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_XUI4_TT
- PI_XUI4_TS_KEY
- PI_XUI4_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,148 バイト

フィールド

「Record Type」フィールドの値は「XUI4」です。それ以外は PI_XUI1 レコードと同じです。

User Data Interval - Expanded 5（PI_XUI5）

機能

User Data Interval - Expanded 5（PI_XUI5）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある一定の時間を単位としたユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。User Data Interval - Extended（PI_UPIB）レコードより，多くの数値型のフィールドが用意されています。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_XUI5_TT
- PI_XUI5_TS_KEY
- PI_XUI5_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：1,148 バイト

フィールド

「Record Type」フィールドの値は「XUI5」です。それ以外は PI_XUI1 レコードと同じです。

User Data Interval - Extended（PI_UPIB）

機能

User Data Interval - Extended（PI_UPIB）レコードは，ユーザーレコードの一つです。ある一定の時間を単位としたユーザー独自のパフォーマンスデータが格納されます。User Data Interval（PI_UPI）より，多くのフィールドが用意されています。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

- PI_UPIB_TT
- PI_UPIB_TS_KEY
- PI_UPIB_TD_KEY

ライフタイム

jpcuser コマンドが実行されたときから，次のjpcuser コマンドが実行されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：992 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時（グリニッジ標準時)。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種類（UPIB)。	COPY	char (8)	No	−	−
Interval (INTERVAL)	レコードを格納するための間隔の秒の長さ。常に「0」。	COPY	ulong	No	−	−
Trans String Key (TS_KEY)	文字列型のトランザクションストリングキー。	COPY	string(20)	No	−	−
Trans Data Key (TD_KEY)	数値型のトランザクションデータキー。	COPY	ulong	No	−	−
Trans Type（TT）	トランザクションタイプ。	COPY	string(20)	No	−	−
Collect Time (API_TIME)	データが変換された時。	COPY	time_t	No	−	−
User Long 1（L1）	long 型整数値。	AVG	double	No	−	−
User Long 2（L2）	long 型整数値。	AVG	double	No	−	−
User Long 3（L3）	long 型整数値。	AVG	double	No	−	−
User Long 4（L4）	long 型整数値。	AVG	double	No	−	−
User Long 5（L5）	long 型整数値。	AVG	double	No	−	−
User Long Roll 1 (L1_R)	蓄積された long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Long Roll 2 (L2_R)	蓄積された long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Long Roll 3 (L3_R)	蓄積された long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Long Roll 4 (L4_R)	蓄積された long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Long Roll 5 (L5_R)	蓄積された long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Unsigned Long 1（UL1）	unsigned long 型整数値。	AVG	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 2（UL2）	unsigned long 型整数値。	AVG	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 3（UL3）	unsigned long 型整数値。	AVG	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 4（UL4）	unsigned long 型整数値。	AVG	ulong	No	−	−
User Unsigned Long 5（UL5）	unsigned long 型整数値。	AVG	ulong	No	−	−
User Unsigned Long Roll 1 (UL1_R)	蓄積された unsigned long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	ulong	No	−	−
User Unsigned Long Roll 2 (UL2_R)	蓄積された unsigned long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	ulong	No	−	−
User Unsigned Long Roll 3 (UL3_R)	蓄積された unsigned long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	ulong	No	−	−
User Unsigned Long Roll 4 (UL4_R)	蓄積された unsigned long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	ulong	No	−	−
User Unsigned Long Roll 5 (UL5_R)	蓄積された unsigned long 型整数値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	ulong	No	−	−
User Float 1（F1）	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 2（F2）	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 3（F3）	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 4（F4）	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float 5（F5）	浮動小数点値。	AVG	double	No	−	−
User Float Roll 1 (F1_R)	蓄積された浮動小数点値	ADD	double	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User Float Roll 1 (F1_R)	(このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Roll 2 (F2_R)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Roll 3 (F3_R)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Roll 4 (F4_R)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Float Roll 5 (F5_R)	蓄積された浮動小数点値 (このフィールドは要約時に加算されます)。	ADD	double	No	−	−
User Time 1（T1）	時間値（PFM - Web Console のローカルタイムで表示されます)。	COPY	time_t	No	−	−
User String 1（S1）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 2（S2）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 3（S3）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 4（S4）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 5（S5）	サイズ 16 の文字列。	COPY	string(16)	No	−	−
User String 6（S6）	サイズ 32 の文字列。	COPY	string(32)	No	−	−
User String 7（S7）	サイズ 32 の文字列。	COPY	string(32)	No	−	−
User String 8（S8）	サイズ 32 の文字列。	COPY	string(32)	No	−	−
User String 9（S9）	サイズ 32 の文字列。	COPY	string(32)	No	−	−
User String 10 (S10)	サイズ 32 の文字列。	COPY	string(32)	No	−	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User String 11 (S11)	サイズ 64 の文字列。	COPY	string(64)	No	−	−
User String 12 (S12)	サイズ 64 の文字列。	COPY	string(64)	No	−	−
User String 13 (S13)	サイズ 64 の文字列。	COPY	string(64)	No	−	−
User String 14 (S14)	サイズ 64 の文字列。	COPY	string(64)	No	−	−
User String 15 (S15)	サイズ 64 の文字列。	COPY	string(64)	No	−	−

WINS Server Overview（PI_WINS）

機能

WINS Server Overview（PI_WINS）レコードには，WINS サーバサービスの通信についての，ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

注意

ネットワークサービスの Windows インターネット ネーム サービス（WINS）のインストールが必要です。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset※	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

注※

指定できる値は，0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは，複数のデータを収集する場合に，一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので，収集処理の負荷を分散するために使用します。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値に関係なく，Collection Interval と同様の時間となります。

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：921 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Failed Queries/sec (FAILED_QUERIES_PER_SEC)	WINS サーバが受信に失敗したクエリー数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Failed Releases/sec (FAILED_RELEASES_PER_SEC)	WINS サーバが受信に失敗したリリース数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Group Conflicts/sec (GROUP_CONFLICTS_PER_SEC)	WINS サーバが受信したグループ登録が，データベース内のレコードと矛盾していたため競合した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Group Registrations/sec (GROUP_REGISTRATIONS_PER_SEC)	WINS サーバが受信したグループ登録数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Group Renewals/sec (GROUP_RENEWALS_PER_SEC)	WINS サーバが受信したグループリニューアル数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	2012, 2016	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Queries/sec (QUERIES_PER_SEC)	WINS サーバがクエリーを受信した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	2012, 2016	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「WINS」。	COPY	char(8)	No	2012, 2016	−
Releases/sec (RELEASES_PER_SEC)	WINS サーバが受信したリリース数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Successful Queries/sec (SUCCESSFUL_QUERIES_PER_SEC)	WINS サーバが受信に成功したクエリー数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Successful Releases/sec (SUCCESSFUL_RELEASES_PER_SEC)	WINS サーバが受信に成功したリリース数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Total Conflicts/sec (TOTAL_NUMBER_OF_CONFLICTS_PER_SEC)	WINS サーバが認識した競合数の割合（／秒）。このフィールドは，Group Conflicts/sec フィールドと Unique Conflicts/sec フィールドの合計値。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Total Registrations/sec (TOTAL_NUMBER_OF_REGS_PER_SEC)	WINS サーバが受信した登録数の割合（／秒）。このフィールドは，Group Registrations/sec フィールドと Unique Registrations/sec フィールドの合計値。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Total Renewals/sec (TOTAL_NUMBER_OF_RENEWALS_PER_SEC)	WINS サーバが受信したリニューアル数の割合（／秒）。このフィールドは，Group Renewals/sec フィールドと Unique Renewals/sec フィールドの合計値。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Unique Conflicts/sec (UNIQUE_CONFLICTS_PER_SEC)	WINS サーバが受信した固有な登録とリニューアルが，データベース内のレコードと矛盾していたため競合した数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Unique Registrations/sec (UNIQUE_REGISTRATIONS_PER_SEC)	WINS サーバが受信した固有な登録数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−
Unique Renewals/sec (UNIQUE_RENEWALS_PER_SEC)	WINS サーバが受信した固有なリニューアル数の割合（／秒）。	AVG	float	No	2012, 2016	−

Workgroup Summary（PI_WGRP）

機能

Workgroup Summary（PI_WGRP）レコードには，Process Detail（PD）に格納されるレコードを，ある時点の状態でワークグループ単位に要約したパフォーマンスデータが格納されます。

ワークグループごとに 1 件のレコードが格納されます。このレコードは，複数インスタンスレコードです。

なお，定義されたワークグループのどれにも入らないすべてのプロセスレコードのために，「Other」という名前のワークグループが自動的に生成されます。

注意

- ワークグループ情報は，収集データ追加ユーティリティで設定する必要があります。ワークグループ情報と収集データ追加ユーティリティについては，「6. ユーザーレコードの収集」を参照してください。
- Process Detail（PD）レコードの Program（INSTANCE）フィールドの値が「_Total」で，かつ PID（ID_PROCESS）フィールドの値が「0」のレコードは，全体の合計や平均を表すデータであるため，収集されません。
- 該当マシンのプロセス数が多い場合など，収集する対象数が多くなった場合，処理量が多くなるため CPU 使用率などの負荷が高くなります。
- このレコードは，論理ホスト環境での収集に対応していません。物理ホスト環境で収集してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Sync Collection With	Detail Records, PD	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

- PI_WGRP_WORKGROUP_NAME
- PI_WGRP_CONDITION

ライフタイム

収集データ追加ユーティリティでのレコード追加からレコード削除まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：608 バイト

フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
CPU %（PCT_PROCESSOR_TIME）	ワークグループがプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	%	double	No	−	PD レコード PCT_PROCESSOR_TIME フィールド
Condition（CONDITION）	ワークグループの収集条件。値は次のとおり。 • AND：Groups フィールド，Users フィールド，Programs フィールドすべてに一致したプロセスを収集。 • OR：Groups フィールド，Users フィールド，Programs フィールドのどれかに一致したプロセスを収集。	COPY	string(4)	No	−	収集データ追加ユーティリティのワークグループ名
Groups（GROUPS）	定義したグループ名。35 文字以上の場合，最後の文字は「>」。	COPY	string(36)	No	−	収集データ追加ユーティリティのグループ名
Handle Count（HANDLE_COUNT）	ワークグループによってオープンしているハンドル数。	HILO	double	No	−	PD レコード HANDLE_COUNT フィールド
IO Data Bytes/sec（IO_DATA_BYTES_PER_SEC）	ワークグループが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード IO_DATA_BYTES_PER_SEC フィールド
IO Data Operations/sec（IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC）	ワークグループが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込みしている操作数の割合（／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード IO_DATA_OPERATIONS_PER_SEC フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
IO Other Bytes/sec (IO_OTHER_BYTES_PER_SEC)	ワークグループが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしているデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード IO_OTHER_BYTES_PER_SEC フィールド
IO Other Operations/sec (IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC)	ワークグループが生成するすべての I/O 操作で，読み込みおよび書き込み以外（制御関数など）の操作をしている操作数の割合（／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード IO_OTHER_OPERATIONS_PER_SEC フィールド
IO Read Bytes/sec (IO_READ_BYTES_PER_SEC)	ワークグループが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード IO_READ_BYTES_PER_SEC フィールド
IO Read Operations/sec (IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC)	ワークグループが生成するすべての I/O 操作で，読み込みしている操作数の割合（／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード IO_READ_OPERATIONS_PER_SEC フィールド
IO Write Bytes/sec (IO_WRITE_BYTES_PER_SEC)	ワークグループが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしているデータ量の割合（バイト／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード IO_WRITE_BYTES_PER_SEC フィールド
IO Write Operations/sec (IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC)	ワークグループが生成するすべての I/O 操作で，書き込みしている操作数の割合（／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード IO_WRITE_OPERATIONS_PER_SEC フィールド
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，最後に格納した値を表示する。	COPY	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)
Interval2 (INTERVAL2)	レコードが格納された収集間隔の時間（秒単位）。 リアルタイムレポートの場合，最初の値は「5」。履歴レポートで要約した場合，要約したレコードの合計を表示する。	ADD	ulong	No	−	RECORD_TIME (T1) - RECORD_TIME (T0)

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
Page Faults/sec (PAGE_FAULTS_PER_SEC)	ワークグループ内でページフォルトが発生した割合（／秒）。	AVG	double	No	−	PD レコード PAGE_FAULTS_PER_SEC フィールド
Page File Kbytes (PAGE_FILE_BYTES)	ワークグループがページングファイルで使用している仮想メモリー領域のサイズ（キロバイト単位）。	AVG	double	No	−	PD レコード PAGE_FILE_BYTES フィールド
Pool Nonpaged Kbytes (POOL_NONPAGED_BYTES)	ワークグループが使用しているページング不可能なメモリーサイズ（キロバイト単位）。	AVG	double	No	−	PD レコード POOL_NONPAGED_BYTES フィールド
Pool Paged Kbytes (POOL_PAGED_BYTES)	ワークグループが使用しているページング可能なメモリーサイズ（キロバイト単位）。	AVG	double	No	−	PD レコード POOL_PAGED_BYTES フィールド
Private Kbytes (PRIVATE_BYTES)	ワークグループのプロセスが，ほかのプロセスと共用できないように割り振ったメモリーのサイズ（キロバイト単位）。	AVG	double	No	−	PD レコード PRIVATE_BYTES フィールド
Privileged CPU % (PCT_PRIVILEGED_TIME)	ワークグループが特権モードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	%	double	No	−	PD レコード PCT_PRIVILEGED_TIME フィールド
Process Count (PROCESS_COUNT)	ワークグループが実行しているプロセス数。	HILO	ulong	No	−	−
Programs (PROGRAMS)	定義したプログラム名。35 文字以上の場合，最後の文字は「>」。	COPY	string(36)	No	−	収集データ追加ユーティリティのプログラム名
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	−	−
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「WGRP」。	COPY	char(8)	No	−	−
Thread Count (THREAD_COUNT)	ワークグループ内のスレッド（命令を実行する単位）の数。プロセスを実行すると最低 1 つのスレッドが起動される。	HILO	double	No	−	PD レコード THREAD_COUNT フィールド

PFM-View 名 (PFM-Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート対象外	データソース
User CPU %（PCT_USER_TIME）	ワークグループがユーザーモードでプロセッサを使用した経過時間の割合（%）。マルチプロセッサ環境では，「プロセッサ数＊100%」を最大値とした使用率が表示される。ただし，収集タイミングよって最大値を超えることがある。	%	double	No	−	PD レコード PCT_USER_TIME フィールド
Users（USERS）	定義したユーザー名。35 文字以上の場合，最後の文字は「>」。	COPY	string(36)	No	−	収集データ追加ユーティリティのユーザー名
Virtual Kbytes（VIRTUAL_BYTES）	ワークグループが使用している仮想アドレス空間のサイズ（キロバイト単位）。	AVG	double	No	−	PD レコード VIRTUAL_BYTES フィールド
Workgroup（WORKGROUP_NAME）	定義したワークグループ名。	COPY	string(36)	No	−	収集データ追加ユーティリティのワークグループ名
Working Set Kbytes（WORKING_SET）	ワークグループで使用しているメモリー使用量（ワーキングセットと呼び，メモリーの総量またはページフォルトなしに参照できるメモリー量を示す）のサイズ（キロバイト単位）。	AVG	double	No	−	PD レコード WORKING_SET フィールド

9 コマンド

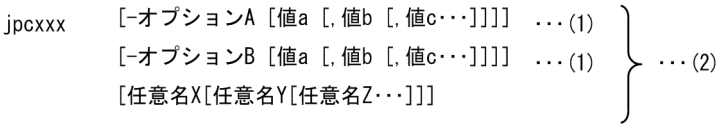
この章では，PFM - Agent for Platform で使用できるコマンドの文法について説明します。

コマンドの記載形式

ここでは，コマンドの記載形式として，コマンドの指定方法と，コマンドの文法の説明に使用する記号について説明します。

コマンドの指定方法

コマンドの指定形式を次に示します。



(1）を「オプション」と呼びます。(2）を「引数」と呼びます。

コマンドの文法の説明に使用する記号

コマンドの文法の説明に使用する記号を次に示します。

[　]（角括弧）

この記号で囲まれている項目は，任意に指定できます（省略できます)。

jpcappcvt

形式

```
jpcappcvt      [-n]
```

機能

jpcappcvt コマンドは，09-00 以前のアプリケーション定義（アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定）を，09-10 以降のアプリケーション定義（プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定）に変換します。

実行権限

Administrators 権限を持つユーザー

格納先フォルダ

インストール先フォルダ¥jp1pc¥agtt¥agent¥

引数

-n

このオプションを指定すると，コマンドの実行を中断する問い合わせメッセージが出力されなくなり，ユーザーの応答が不要になります。非対話形式で実行したい場合に指定します。

注意事項

- このコマンドは論理ホスト上では実行できません。
- -n オプションを指定しない場合，コマンドは対話形式で実行されます。ユーザーは，画面に表示される問い合わせメッセージに従って変換してください。
- このコマンドを実行すると，変換後の設定が自動で有効になるため，Agent Collector サービスを再起動する必要はありません。
- 09-00 以前のアプリケーション定義はそのまま保持され，変換した 09-10 以降のアプリケーション定義が作成されます。
- コマンド実行時に，すでに 09-10 以降のアプリケーション定義が設定されている場合，KAVF11606-Q メッセージが出力され，既存の設定を上書きしてもよいかどうか確認します。なお，非対話形式でこのコマンドを実行した場合は，メッセージの出力が抑止されるため，既存の設定が強制的に上書きされます。
- アプリケーションの稼働・非稼働情報収集で使用する Application Summary（PD_APP）レコードと，プロセスの稼働・非稼働情報収集で使用する Application Process Detail（PD_APPD）レコードおよび Application Summary Extension（PD_APP2）レコードでは，プロセス情報の収集方法が異なるため，このコマンドを実行しても，各フィールドに表示される値が異なります。

次のフィールドの値が，対応する Application Summary（PD_APP）レコードのフィールドの値と異なる場合は，監視条件を見直してください。

- Application Process Detail（PD_APPD）レコード
  Monitoring Count フィールド
  Monitoring Status フィールド
- Application Summary Extension（PD_APP2）レコード
  Application Status フィールド
  Application Exist フィールド

Application Summary（PD_APP）レコードのフィールドと，Application Process Detail（PD_APPD）レコードおよび Application Summary Extension（PD_APP2）レコードのフィールドの対応を次の表に示します。

表 9-1　Application Summary（PD_APP）レコードのフィールドと Application Process Detail（PD_APPD）レコードおよび Application Summary Extension（PD_APP2）レコードのフィールドの対応

Application Summary（PD_APP）レコードのフィールド	Application Process Detail（PD_APPD）レコードのフィールド	Application Summary Extension（PD_APP2）レコードのフィールド
Application Name	Application Name	Application Name
Application Status	－	Application Status
Application Exist	－	Application Exist
ProcessXX Count※	Monitoring Count	－
ProcessXX Range※	Monitoring Min Monitoring Max	－
ProcessXX Status※	Monitoring Status	－
ProcessXX Kind※	Monitoring Field	－
ProcessXX Name※	Monitoring Condition	－

（凡例）

－：対応するフィールドがないことを示します。

注※

「XX」には 01～15 までの数値が入ります。また，「XX」は，Application Process Detail（PD_APPD）レコードの「Monitoring Label」フィールドの値（MonitoringXX）に対応した数値となります。

戻り値

0	正常終了した。
0 以外	異常終了した。

使用例

対話形式でのコマンド実行例を次に示します。

```
> C:¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc¥agtt¥agent¥jpcappcvt.exe
KAVF11600-Q コンバートしますか？(Y/N) y
KAVF11606-Q プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定が既にあります。上書きしてもよろしいですか？(Y/N) y
KAVF11601-I 設定のコンバートに成功しました
```

10 メッセージ

この章では，PFM - Agent for Platform のメッセージ形式，出力先一覧，Windows イベントログの一覧，およびメッセージ一覧について説明します。

10.1　メッセージの形式

PFM - Agent for Platform が出力するメッセージの形式と，マニュアルでの記載形式を示します。

10.1.1　メッセージの出力形式

PFM - Agent for Platform が出力するメッセージの形式を説明します。メッセージは，メッセージ ID とそれに続くメッセージテキストで構成されます。形式を次に示します。

```
KAVFnnnnn-Yメッセージテキスト
```

メッセージ ID は，次の内容を示しています。

K
　システム識別子を示します。

AVF
　PFM - Agent のメッセージであることを示します。

nnnnn
　メッセージの通し番号を示します。PFM - Agent for Platform のメッセージ番号は，「11xxx」です。

Y
　メッセージの種類を示します。

- E：エラー
  処理は中断されます。
- W：警告
  メッセージ出力後，処理は続けられます。
- I：情報
  ユーザーに情報を知らせます。
- Q：応答
  ユーザーに応答を促します。

メッセージの種類と Windows イベントログの種類との対応を次に示します。

-E

- レベル：エラー
- 意味：エラーメッセージ

-W

- レベル：警告

- 意味：警告メッセージ

-I

- レベル：情報
- 意味：付加情報メッセージ

-Q

（出力されない）

10.1.2　メッセージの記載形式

このマニュアルでのメッセージの記載形式を示します。メッセージテキストで太字になっている部分は，メッセージが表示される状況によって表示内容が変わることを示しています。また，メッセージをメッセージ ID 順に記載しています。記載形式の例を次に示します。

メッセージ ID

英語メッセージテキスト
日本語メッセージテキスト

メッセージの説明文

(S)

システムの処置を示します。

(O)

メッセージが表示されたときに，オペレーターが取る処置を示します。

参考

システム管理者がオペレーターから連絡を受けた場合は，「11.　トラブルへの対処方法」を参照してログ情報を採取し，初期調査をしてください。

トラブル要因の初期調査をする場合は，OS のログ情報（Windows イベントログ）や，PFM - Agent for Platform が出力する各種ログ情報を参照してください。これらのログ情報でトラブル発生時間帯の内容を参照して，トラブルを回避したり，トラブルに対処したりしてください。また，トラブルが発生するまでの操作方法などを記録してください。同時に，できるだけ再現性の有無を確認するようにしてください。

10.2　メッセージの出力先一覧

ここでは，PFM - Agent for Platform が出力する各メッセージの出力先を一覧で示します。

表中では，出力先を凡例のように表記しています。

（凡例）

○：出力する

－：出力しない

表 10–1　PFM - Agent for Platform のメッセージの出力先一覧

メッセージ ID	出力先									
	Windows イベントログ	共通メッセージログ	Event Log(PD_ELOG) レコードのフィールド	標準出力	標準エラー出力	パブリックログ	デバッグログ	コンバートログ	JP1 システムイベント※1	エージェントイベント※2
KAVF11001	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11002	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11003	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11004	○	○	－	－	－	－	－	－	○	○
KAVF11005	－	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11006	－	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11007	－	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11100	－	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11101	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11201	－	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11300	－	○	－	－	－	－	－	－	○	○
KAVF11301	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11302	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11304	－	○	－	－	－	－	－	－	○	○
KAVF11307	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11308	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11310	○	○	－	－	－	－	－	－	－	－
KAVF11311	－	○	－	－	－	－	－	－	○	○

メッセージ ID	出力先									
	Windows イベントログ	共通メッセージログ	Event Log(PD_ELOG) レコードのフィールド	標準出力	標準エラー出力	パブリックログ	デバッグログ	コンバートログ	JP1 システムイベント※1	エージェントイベント※2
KAVF11313	○	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11316	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11317	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11318	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11319	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11320	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11321	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11322	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11323	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11324	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11325	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11326	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11327	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11405	−	−	○※3	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11406	−	○	−	−	−	−	−	−	○	○
KAVF11407	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11500	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11501	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11502	−	○	−	−	−	−	−	−	○	○
KAVF11503	○	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11504	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11505	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11506	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11507	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11508	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11509	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−

メッセージ ID	出力先									
	Windows イベントログ	共通メッセージログ	Event Log(PD_ELOG) レコードのフィールド	標準出力	標準エラー出力	パブリックログ	デバッグログ	コンバートログ	JP1 システムイベント※1	エージェントイベント※2
KAVF11510	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11511	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11512	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11550	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−
KAVF11551	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−
KAVF11552	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−
KAVF11600	−	−	−	○	−	−	−	−	−	−
KAVF11601	−	−	−	○	−	−	−	○	−	−
KAVF11602	−	−	−	−	○	−	−	○	−	−
KAVF11603	−	−	−	○	−	−	−	○	−	−
KAVF11604	−	−	−	○	−	−	−	○	−	−
KAVF11605	−	−	−	○	−	−	−	○	−	−
KAVF11606	−	−	−	○	−	−	−	−	−	−
KAVF11607	−	−	−	−	○	−	−	○	−	−
KAVF11608	−	−	−	−	○	−	−	○	−	−
KAVF11609	−	−	−	−	○	−	−	○	−	−
KAVF11610	−	−	−	−	○	−	−	○	−	−
KAVF11611	−	−	−	−	○	−	−	○	−	−
KAVF11650	−	○	−	−	−	−	−	−	−	−
KAVF11850	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−
KAVF11851	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−
KAVF11852	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−
KAVF11853	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−
KAVF11901	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11902	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11904	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−

メッセージ ID	出力先									
	Windows イベントログ	共通メッセージログ	Event Log(PD_ELOG) レコードのフィールド	標準出力	標準エラー出力	パブリックログ	デバッグログ	コンバートログ	JP1 システムイベント※1	エージェントイベント※2
KAVF11905	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11906	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11907	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11908	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11909	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11910	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11911	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11912	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11913	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11914	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11915	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11916	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11917	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11919	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11920	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11923	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11924	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11925	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11926	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11927	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11928	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11929	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11930	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11931	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11932	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11935	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−

メッセージ ID	出力先									
	Windows イベントログ	共通メッセージログ	Event Log(PD_ELOG) レコードのフィールド	標準出力	標準エラー出力	パブリックログ	デバッグログ	コンバートログ	JP1 システムイベント※1	エージェントイベント※2
KAVF11941	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−
KAVF11943	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11948	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11950	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11951	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11952	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11953	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11954	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11957	−	−	−	○	−	−	−	−	−	−
KAVF11959	−	−	−	−	−	○	−	−	−	−
KAVF11983	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11984	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11985	−	−	−	−	○	○	−	−	−	−
KAVF11986	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11987	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11988	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11989	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11990	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11991	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11992	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11993	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11994	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11995	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11996	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11997	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−
KAVF11998	−	−	−	−	○	−	−	−	−	−

注※1

JP1 システムイベントは，エージェントの状態の変化を JP1/IM に通知するイベントです。JP1 システムイベントの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，統合管理製品（JP1/IM）と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

JP1 システムイベントを発行するための前提プログラムを次の表に示します。

表 10–2　JP1 システムイベントを発行するための前提プログラム

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
監視マネージャー	PFM - Manager	09-00 以降
監視コンソールサーバ	PFM - Web Console	08-00 以降
監視エージェント	PFM - Agent for Platform	08-00 以降 （PFM - Agent が出力するイベントを発行するには，09-00 以降が必要です）
	PFM - Manager または PFM - Base	09-00 以降
	JP1/Base	08-50 以降

注※2

エージェントイベントは，エージェントの状態の変化を PFM - Manager に通知するイベントです。エージェントイベントの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，イベントの表示について説明している章を参照してください。

エージェントイベントを発行するための前提プログラムを次の表に示します。

表 10–3　エージェントイベントを発行するための前提プログラム

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
監視マネージャー	PFM - Manager	09-00 以降
監視コンソールサーバ	PFM - Web Console	08-00 以降
監視エージェント	PFM - Agent for Platform	09-00 以降
	PFM - Manager または PFM - Base	09-00 以降

注※3

このメッセージは，Event Log（PD_ELOG）レコードの Description（DESCRIPTION）フィールドに収集データとして出力されます。ログに出力されるメッセージではありません。

10.3 Windows イベントログの一覧

ここでは，PFM - Agent for Platform が Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を示します。

Windows イベントログは，［イベントビューア］ウィンドウのアプリケーションログに表示されます。

> **メモ**
>
> ［イベントビューア］ウィンドウは，Windows の［スタート］メニューから表示される［管理ツール］－［イベントビューア］を選択することで表示できます。

PFM - Agent for Platform が出力するイベントの場合，［イベントビューア］ウィンドウの［ソース］に識別子「PFM-Platform」が表示されます。

PFM - Agent for Platform が Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を次の表に示します。

表 10–4 Windows イベントログ出力メッセージ情報一覧

メッセージ ID	Windows イベントログ	
	イベント ID	種類
KAVF11001-I	11001	情報
KAVF11002-E	11002	エラー
KAVF11003-I	11003	情報
KAVF11004-E	11004	エラー
KAVF11101-E	11101	エラー
KAVF11301-E	11301	エラー
KAVF11302-E	11302	エラー
KAVF11307-E	11307	エラー
KAVF11308-E	11308	エラー
KAVF11310-E	11310	エラー
KAVF11313-E	11313	エラー
KAVF11503-E	11503	エラー

10.4　メッセージ一覧

PFM - Agent for Platform が出力するメッセージと対処方法について説明します。PFM - Agent for Platform のメッセージ一覧を次に示します。

KAVF11001-I

Agent Collector has stopped. (host=**ホスト名**, service=**ホスト名**<Windows>)
Agent Collector が停止しました（host=**ホスト名**, service=**ホスト名**<Windows>）

Agent Collector サービスが正常終了しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

KAVF11002-E

Agent Collector failed to start.
Agent Collector の起動に失敗しました

Agent Collector サービスの起動に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し，そのメッセージの対処方法に従ってください。

KAVF11003-I

Agent Collector has started. (host=**ホスト名**, service=**ホスト名**<Windows>)
Agent Collector が起動しました（host=**ホスト名**, service=**ホスト名**<Windows>）

Agent Collector サービスの起動が完了しました。

(S)

Agent Collector サービスのパフォーマンスデータ収集処理を開始します。

KAVF11004-E

Agent Collector stopped abnormally.
Agent Collector が異常停止しました

Agent Collector が異常停止しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

イベントログや共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し，そのメッセージの対処方法に従ってください。

KAVF11005-I

Agent Store has been connected.
Agent Store に接続しました

Agent Collector サービス起動処理中に，Agent Store サービスとの接続に成功しました。

(S)

Agent Collector サービスの起動処理を続行します。

KAVF11006-I

Name Server has been connected.
Name Server に接続しました

Agent Collector サービス起動処理中に，Name Server サービスとの接続に成功しました。

(S)

Agent Collector サービスの起動処理を続行します。

KAVF11007-W

A user command failed to start.(record=**レコード ID**, en=**OS 詳細コード**)
ユーザーコマンドの起動に失敗しました（record=**レコード ID**, en=**OS 詳細コード**）

ユーザーコマンドの起動に失敗しました。

(S)

後続の処理を継続します。

(O)

指定されたユーザーコマンドが正しいか，次のことを確認してください。

- 指定に誤りがないか
- 指定されたユーザーコマンドが存在するか
- 指定されたユーザーコマンドに実行権限があるか

KAVF11100-E

An error occurred in an OS API (関数名). (rc=**エラーコード**, **保守情報**)
OS の API(**関数名**)でエラーが発生しました （rc=**エラーコード**, **保守情報**）

OS の API でエラーが発生しました。保守情報がない場合，空白で表示されます。

(S)

起動時のエラーの場合，Agent Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF11101-E

An error occurred in a function (関数名). (rc=**エラーコード**, **保守情報**)
関数(**関数名**)でエラーが発生しました（rc=**エラーコード**, **保守情報**）

制御間の関数でエラーが発生しました。保守情報がない場合，空白で表示されます。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF11201-W

An illegal collection event occurred. (**レコード ID**, rc=**保守情報**)
不正な収集イベントが発生しました（**レコード ID**, rc=**保守情報**）

レコード ID で示されるサポート対象外の収集イベントが発生しました。

- rc ＝ 0 ： リアルタイムレポート
- rc ＝ 1 ： 履歴レポートまたはアラーム

(S)

レコード ID で示されるレコード収集処理はしません。Agent Collector 処理を継続します。

(O)

サポートしていないレコードのリアルタイムレポート，アラームでの監視，または Store データベース記録をしようとしています。

- リアルタイムレポートの場合は，該当レコードの収集を停止してください。
- アラームでの監視の場合は，該当ホストでサポートしていないレコードを使用しているアラームのバインドを解除してください。アラームのバインドを解除する方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。
- Store データベース記録の場合は，該当ホストでサポートしていないレコードの Store データベース記録を停止してください。Store データベース記録の停止方法については，「付録 E.2　Agent Collector サービスのプロパティ一覧」を参照してください。

KAVF11300-W

An attempt to allocate memory for (**レコード ID**) failed.
メモリーの確保に失敗しました（**レコード ID**）

レコード ID で示されるメモリーの確保に失敗しました。レコード ID に”UNKNOWN”が出力されている場合，複数のレコード ID でメモリーの確保に失敗したことを示します。

(S)

レコード ID で示されるレコードの収集を中断して，次のレコード収集処理を続行します。

(O)

ほかのアプリケーションなどを終了させるか，メモリーを増やしてください。

要因が判明しない場合，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF11301-E

Initialization of Agent Configuration failed.
Agent Configuration の初期化に失敗しました

Agent Collector サービス起動処理中に，サービス起動情報ファイルの読み込みに失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

サービス起動情報ファイル（jpcagt.ini）が，次のフォルダにあるかどうかを確認してください。

- 物理ホストの場合：**インストール先フォルダ**¥agtt¥agent
- 論理ホストの場合：**環境フォルダ**¥jp1pc¥agtt¥agent

jpcagt.ini ファイルがない場合，バックアップしたjpcagt.ini ファイルをフォルダ配下にコピーしてください。バックアップしたjpcagt.ini ファイルがない場合は，jpcagt.ini.model ファイルを**インス**

トール先フォルダ¥agtt¥agent または環境フォルダ¥jp1pc¥agtt¥agent にコピーして，jpcagt.ini にリネームしてください。

なお，jpcagt.ini.model ファイルは，論理ホストの場合でもインストール先フォルダ¥agtt¥agent フォルダにあるファイルを使用してください。

要因が判明しない場合，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF11302-E

TCP/IP initialization failed.
TCP/IP の初期化に失敗しました

Agent Collector サービス起動処理中に，TCP/IP の初期化に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

ネットワークの設定に誤りがないかどうか確認してください。

KAVF11304-W

Data could not be collected for a record レコード ID. (rc=リターンコード).
レコード：レコード ID のデータ収集ができませんでした（rc=リターンコード）

レコード ID で示されるレコードのデータ収集ができませんでした。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

レコード名に対応するサービスがインストールされているかどうか，また，サービスが起動されているかどうかを確認してください。

このメッセージが継続して出力される場合，Windows のパフォーマンスオブジェクトからパフォーマンスデータの一部またはすべてが取得できない状態となっている可能性があります。

次のレジストリが存在するかどうかを確認し，レジストリの値に「0」以外の値が設定されている場合は「0」を設定してください。

HKLM¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥Service-name¥Performance¥Disable Performance Counters

Service-name には，次に示す文字列が入ります。

PerfDisk，PerfOS，PerfNet，PerfProc，Tcpip

要因が判明しない場合，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF11307-E

The registry key could not be opened. (**レジストリーキー名**, rc=**エラーコード**)
レジストリーキーがオープンできませんでした（**レジストリーキー名**, rc=**エラーコード**）

レジストリーキー名で示されるレジストリーキーをオープンできませんでした。

(S)

Agent Collector サービスを停止します。

(O)

レジストリーに正しくアクセスできる状態にあるかどうか確認してください。アクセスできない場合，OS のリソースが不足していないか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11308-E

The value for the open registry key could not be obtained. (**レジストリーキー名**, rc=**リターンコード**)
オープン済みレジストリーキーから値を取得できませんでした（**レジストリーキー名**, rc=**リターンコード**）

レジストリーキー名で示されるレジストリーキーのオープンには成功しましたが，レジストリーの値を取得できませんでした。

(S)

Agent Collector サービスを停止します。

(O)

レジストリーに正しくアクセスできる状態にあるかどうか確認してください。アクセスできない場合，OS のリソースが不足していないか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11310-E

Information about the open registry key could not be retrieved. (**レジストリーキー名**, rc=**リターンコード**)
オープン済みレジストリーキーから情報を取得できませんでした（**レジストリーキー名**, rc=**リターンコード**）

オープン済みレジストリーキーから情報を取得できませんでした。

(S)

Agent Collector サービスの処理を停止します。

(O)

OS のリソースが不足していないか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11311-W

An attempt to open a file (**ファイル名**) failed. (rc=**リターンコード**)
ファイル (**ファイル名**) のオープンに失敗しました（rc=**リターンコード**）

ファイル名で示される，パフォーマンスデータ定義ファイルやパフォーマンスデータ定義ログファイルのオープンに失敗しました。

現在起動中の Agent Collector サービスは Windows のレジストリーを参照して同等の情報を取得するため，その動作自体に問題はありませんが，システムの一部が破損しているおそれがあります。

(S)

Agent Collector サービスの処理を続行します。

(O)

指定したファイルの有無を確認し，ファイルがない場合には OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11313-E

Information about the performance registry could not be retrieved.
パフォーマンスレジストリーから情報を取得できませんでした

パフォーマンスレジストリーから情報を取得できませんでした。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11316-W

The information to be collected has not been set by the Collection Data Addition utility. (**レコード ID**)
収集データ追加ユーティリティで，収集情報を設定していません (**レコード ID**)

レコード ID で示されるレコードの収集情報を，収集データ追加ユーティリティで設定していません。

(S)

Agent Collector サービスの処理を続行します。レコード ID で示されるレコードを収集しませんでした。

(O)

収集データ追加ユーティリティで収集情報を設定してから，レコードを収集してください。

KAVF11317-W

The information to be collected has not been set in Web Console. (**レコード ID**)
Web Console で，収集情報を設定していません (**レコード ID**)

レコード ID で示されるレコードの収集情報を，PFM - Web Console で設定していません。

(S)

Agent Collector サービスの処理を続行します。レコード ID で示されるレコードを収集しませんでした。

(O)

PFM - Web Console で収集情報を設定してから，レコードを収集してください。

KAVF11318-W

Invalid entry in **ファイル名**.
ファイル（**ファイル名**）の指定に誤りがあります

定義ファイルの内容またはユーザーコマンドプロパティの指定に誤りが見つかりました。

(S)

定義内容を無視して Agent Collector サービスの起動を継続します。

(O)

表示されているファイル内の定義を修正し，サービスを再起動してください。または，ユーザーコマンドプロパティを修正してください。

KAVF11319-E

jpctRegistry terminated with error. (rc=**リターンコード**)
jpctRegistry が異常終了しました(rc=**リターンコード**)

jpctRegistry が異常終了しました。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11320-E

jpctRegistry timed out. (rc=リターンコード)
jpctRegistry がタイムアウトしました(rc=リターンコード)

jpctRegistry がタイムアウトしました。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11321-E

A collection auxiliary process failed to start. (rc=リターンコード,en=OS 詳細コード)
収集補助プロセスの起動に失敗しました (rc=リターンコード,en=OS 詳細コード)

Agent Collector 起動時に収集補助プロセスの起動に失敗しました。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11322-E

A collection auxiliary process failed to restart. (rc=リターンコード,en=OS 詳細コード)
収集補助プロセスの再起動に失敗しました (rc=リターンコード,en=OS 詳細コード)

収集補助プロセスの異常停止時の再起動に失敗しました。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

このメッセージが続けて出力される場合，OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11323-E

jpctRegistry failed to start. (rc=リターンコード,en=OS 詳細コード)
jpctRegistry の起動に失敗しました (rc=リターンコード,en=OS 詳細コード)

jpctRegistry の起動に失敗しました。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

このメッセージが続けて出力される場合，OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

その他，収集データ追加ユーティリティで，数千といった大量のオブジェクトを収集対象に指定していないか確認してください。多過ぎるオブジェクトを指定した場合に本メッセージが出力されることがあります。

KAVF11324-E

A collection auxiliary process terminated with an error. (rc=**リターンコード**)

収集補助プロセスが異常終了しました (rc=**リターンコード**)

Agent Collector 起動時に収集補助プロセスが異常終了しました。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11325-E

A collection auxiliary process terminated with an error when attempting to restart. (rc=**リターンコード**)

収集補助プロセスが再起動時に異常終了しました (rc=**リターンコード**)

収集補助プロセスの異常停止時の再起動時に異常終了しました。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

このメッセージが続けて出力される場合，OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11326-E

A collection auxiliary process timed out. (rc=**リターンコード**)

収集補助プロセスがタイムアウトしました(rc=**リターンコード**)

Agent Collector 起動時に収集補助プロセスがタイムアウトしました。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

このメッセージが続けて出力される場合，OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11327-E

A collection auxiliary process timed out when attempting to restart. (rc=**リターンコード**)
収集補助プロセスが再起動時にタイムアウトしました(rc=**リターンコード**)

収集補助プロセスの異常停止時の再起動時にタイムアウトしました。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

このメッセージが続けて出力される場合，OS のリソースが不足していないかどうか，また，OS 全般に障害が発生していないかどうかを確認してください。

KAVF11405-W

The description for Event ID (**イベント ID**) in Source (**ソース名**) cannot be found. The local computer may not have the necessary registry information or message DLL files to display messages from a remote computer. You may be able to use the /AUXSOURCE= flag to retrieve this description; see Help and Support for details. The following information is part of the event: **文字列**.
イベント ID（**イベント ID**）（ソース **ソース名** 内）に関する説明が見つかりませんでした。リモートコンピュータからメッセージを表示するために必要なレジストリー情報またはメッセージ DLL ファイルがローカルコンピュータにないおそれがあります。この説明を取得するために/AUXSOURCE=フラグを使用できる可能性があります。詳細については，ヘルプとサポートを参照してください。次の情報はイベントの一部です:**文字列**

ソース名，イベント ID に示されるイベントログメッセージが取得できませんでした。

(S)

Agent Collector サービスの処理を続行します。

(O)

指定されたソース名に対応するサービスがアンインストールされていないかどうか，また，ソース名のファイルがあるかどうかを確認してください。

KAVF11406-W

The system resources have been modified. (**レコード ID**)
システムリソースに変更がありました（**レコード ID**）

レコード ID で示される，関連するシステムリソースに変更がありました。

(S)

レコード ID で示されるレコードの収集処理を 2 回スキップします。

KAVF11407-E

Performance data cannot be collected because the Remote Registry Service (**サービス名**：Remote Registry) is not running. (rc=**リターンコード**)
リモートレジストリサービス（**サービス名**：Remote Registry）が起動していないため，パフォーマンスデータを取得できません。(rc=**リターンコード**)

リモートレジストリーサービスが起動していないため，パフォーマンスデータを取得できない状態です。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

サービス名で示されるサービスを起動してから，Agent Collector サービスを再起動してください。

KAVF11500-W

It failed to occur JP1 system event or Agent event extension.
JP1 システムイベントの発行または拡張エージェントイベントの発行に失敗しました

JP1 システムイベントの発行または拡張エージェントイベントの発行に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を続行します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し，そのメッセージの対処方法に従ってください。要因が判明しない場合，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11501-W

It failed to issue JP1 system event or Agent event extension, because Memory is insufficient.
メモリー不足のため，JP1 システムイベントの発行または拡張エージェントイベントの発行に失敗しました

JP1 システムイベントの発行または拡張エージェントイベントの発行に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を続行します。

(O)

メモリーなどのシステムリソースが不足していないか確認してください。要因が判明しない場合，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11502-W

The event log message indicated by Event ID (**イベント ID**) in Source (**ソース名**) could not be obtained. See Help and Support for details. The following information is part of the event: character-string.

イベント ID（**イベント ID**）（ソース **ソース名** 内）に示されるイベントログメッセージが取得できませんでした。詳細については，ヘルプとサポートを参照してください。次の情報はイベントの一部です:**文字列**

ソース名，イベント ID に示されるイベントログメッセージが取得できませんでした。

(S)

Agent Collector サービスの処理を続行します。

(O)

指定されたソース名に対応するサービスがアンインストールされていないかどうか，また，ソース名のファイルがあるかどうかを確認してください。

KAVF11503-E

The logical host environment of Agent for Platform is not set up correctly, or the logical host environment is invalid. (lhost=**論理ホスト名**)

Agent for Platform の論理ホスト環境が正しくセットアップされていないか，または論理ホスト環境が不正です (lhost=**論理ホスト名**)

Agent for Platform の論理ホスト環境が正しくセットアップされていないか，または論理ホスト環境が不正です。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

同一装置内の PFM - Manager または PFM - Base のバージョンが 11-01 未満でないかを確認してください。11-01 未満の場合は，次の流れで論理ホスト環境をセットアップし直してください。

1. PFM - Agent for Platform の論理ホスト環境をアンセットアップする
2. PFM - Manager または PFM - Base を 11-01 以降にバージョンアップする
3. PFM - Agent for Platform の論理ホスト環境をセットアップする

要因が判明しない場合，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11504-W

The user command did not end in the seconds specified in the time-out value (nn seconds) and will now be forcibly ended. (record=レコード ID)

ユーザーコマンドがタイムアウト値で指定した時間(nn 秒)内に終了しなかったため，強制終了します (record=レコード ID)

ユーザーコマンドが User Command Timeout プロパティで指定した時間内に終了しなかったため，強制終了します。

(S)

該当するユーザーコマンドを強制終了します。また，ユーザーコマンドが正常終了していないため，該当するレコードの収集処理をスキップして，Agent Collector の処理を続行します。

(O)

ユーザーコマンドが終了しない要因を取り除いてください。または，User Command Timeout プロパティの値を，ユーザーコマンドの実行時間以上の値に設定してください。

KAVF11505-I

The user command that was executed during the previous record collection is still running and will now be forcibly ended. (record=レコード ID)

前回のレコード収集時に実行したユーザーコマンドが終了していないため，強制終了します (record=レコード ID)

前回のレコード収集時に実行したユーザーコマンドが終了していないため，強制終了します。

(S)

該当するユーザーコマンドを強制終了します。また，強制終了したユーザーコマンドに対応するレコードの収集処理をスキップして，Agent Collector の処理を続行します。

KAVF11506-W

The user command execution and collection processing of the corresponding record will be skipped because the user command does not end. (record=レコード ID)

ユーザーコマンドが終了しないためユーザーコマンドの実行と該当レコードの収集処理をスキップします (record=レコード ID)

強制終了したユーザーコマンドが終了しないため，ユーザーコマンドの実行と該当するレコードの収集処理をスキップします。

(S)

該当するレコードの収集処理をスキップして，Agent Collector の処理を続行します。

(O)

終了しないユーザーコマンドを強制終了してください。

KAVF11507-I

The user command ended. (record=**レコード ID**)

ユーザーコマンドが終了しました (record=**レコード ID**)

強制終了したユーザーコマンドが終了しました。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

KAVF11508-W

Record collection processing will be skipped, because no user data file has been created. (record=**レコード ID**)

ユーザーデータファイルが作成されていないため該当レコードの収集処理をスキップします (record=**レコード ID**)

前回のレコード収集タイミング以降にユーザーデータファイルが作成されていないため，該当レコードの収集処理をスキップします。

(S)

該当レコードの収集処理をスキップして，Agent Collector の処理を続行します。

(O)

ユーザーデータファイルが作成されていない要因を取り除いてください。要因として，次のことが考えられます。

- ユーザーコマンドが実行されなかった
- ユーザーコマンドの実行に失敗した
- ユーザーコマンドが完了していない

KAVF11509-I

Failed to connect to Docker Engine (en=**OS 詳細コード**). Note that, if this problem reoccurs during the next attempt to collect information, this message will not be output again. The same applies for all consecutive attempts hereafter.

Docker Engine との接続に失敗しました (en=**OS 詳細コード**)。次回以降の収集タイミングで Docker Engine との接続に失敗しても，接続失敗が連続している間は，メッセージの出力を抑止します

Docker Engine との接続に失敗しました。Docker 環境で動作している場合は，PD，PD_APSI，および PD_APS レコードの Virtual Env ID フィールドに「N/A」が格納されます。

Docker Engine との接続に失敗した場合，Agent Collector サービスを起動してから 1 回目の接続失敗時だけこのメッセージを出力します。2 回目以降の接続失敗時は KAVF11510-W メッセージを出力します。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

Docker 環境を使用していない場合は，無視してください。

Docker 環境を使用している場合は，Docker Engine との接続に失敗する要因として，次のことが該当していないかどうかを確認し，要因を取り除いてください。

- Docker Engine が起動していない
- Docker Engine との接続に使用する名前付きパイプの設定を変更している

要因が判明しない場合は，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11510-W

Failed to connect to Docker Engine (en=**OS 詳細コード**). Note that, if this problem reoccurs during the next attempt to collect information, this message will not be output again. The same applies for all consecutive attempts hereafter.

Docker Engine との接続に失敗しました (en=**OS 詳細コード**)。次回以降の収集タイミングで Docker Engine との接続に失敗しても，接続失敗が連続している間は，メッセージの出力を抑止します

Docker Engine との接続に失敗しました。PD，PD_APSI，および PD_APS レコードの Virtual Env ID フィールドに「N/A」が格納されます。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

Docker Engine との接続に失敗する要因として，次のことが該当していないかどうかを確認し，要因を取り除いてください。

- Docker Engine が起動していない
- Docker Engine との接続に使用する名前付きパイプの設定を変更している

要因が判明しない場合は，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11511-W

Backup of the collection data addition utility settings failed. (rc=**リターンコード**)

Backup of the collection data addition utility settings failed. (rc=**リターンコード**)

Collection Data Addition Utility(収集データ追加ユーティリティ)の設定のバックアップに失敗しました。

(S)

バックアップコマンドの処理を続行します。

(O)

Collection Data Addition Utility(収集データ追加ユーティリティ)を起動している場合は終了し，再度バックアップを実行してください。それでも同じメッセージが出力され，バックアップに失敗する場合は，Collection Data Addition Utility(収集データ追加ユーティリティ)の設定を手動でバックアップしてください。

KAVF11512-W

The attempt to restore the settings of the collection data addition utility failed. (rc=**リターンコード**)

The attempt to restore the settings of the collection data addition utility failed. (rc=**リターンコード**)

Collection Data Addition Utility(収集データ追加ユーティリティ)の設定のリストアに失敗しました。

(S)

リストアコマンドの処理を続行します。

(O)

Agent Collector サービスが起動している場合は終了し，再度リストアを実行してください。また，Collection Data Addition Utility(収集データ追加ユーティリティ)を起動している場合は終了し，再度リストアを実行してください。それでも同じメッセージが出力され，リストアに失敗する場合は，手動によるリストアを実行してください。

KAVF11550-E

An attempt to create a folder failed. (folder=**フォルダ名**, cmd=**コマンド名**, rc=**リターンコード**)

An attempt to create a folder failed. (folder=**フォルダ名**, cmd=**コマンド名**, rc=**リターンコード**)

フォルダの作成に失敗しました。

(S)

コマンドの処理を終了します。

(O)

次のことを確認してコマンドを再実行してください。

- アクセス権限があるか
- ディスク容量が不足していないか

KAVF11551-E

An attempt to copy a file failed. (from **コピー元パス** to **コピー先パス**, cmd=**コマンド名**, rc=**リターンコード**)

An attempt to copy a file failed. (from **コピー元パス** to **コピー先パス**, cmd=**コマンド名**, rc=**リターンコード**)

ファイルのコピーに失敗しました。

(S)

コマンドの処理を終了します。

(O)

次のことを確認してコマンドを再実行してください。

- アクセス権限があるか
- ディスク容量が不足していないか
- コピー元ファイルが存在しているか

KAVF11552-E

The system environment is invalid.

The system environment is invalid.

システム環境が不正です。

(S)

コマンドの処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF11600-Q

Do you want to convert? (Y/N)

コンバートしますか？(Y/N)

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定から，プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定を作成します。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前に実装していた既存の機能のことです。プロセスの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前で実装していたアプリケーションの稼働・非稼働情報収集の機能を拡張したものです。

(S)

応答を待ちます。

(O)

変換する場合は，「Y」または「y」を入力してください。変換しない場合は，「N」または「n」を入力してください。それ以外の値を指定すると，同じメッセージが再表示されます。

KAVF11601-I

Conversion of a setting was successful.
設定のコンバートに成功しました

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定から，プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定の作成に成功しました。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前に実装していた既存の機能のことです。プロセスの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前で実装していたアプリケーションの稼働・非稼働情報収集の機能を拡張したものです。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を終了します。

KAVF11602-E

An attempt to convert a setting has failed.
設定のコンバートに失敗しました

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定から，プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定の作成に失敗しました。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前に実装していた既存の機能のことです。プロセスの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前で実装していたアプリケーションの稼働・非稼働情報収集の機能を拡張したものです。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を終了します。

(O)

直前のメッセージを確認してください。

KAVF11603-W

An attempt to convert a setting will now halt.
設定のコンバートを中断します

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定から，プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定を作成する処理を中断します。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前に実装していた既存の機能のことです。プロセスの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前で実装していたアプリケーションの稼働・非稼働情報収集の機能を拡張したものです。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を中断します。

(O)

変換を実施したい場合は，jpcappcvt コマンドを実行し直してください。

KAVF11604-W

A settings for collecting application operation and non-operation information does not exist.
アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定がありません

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定の設定がありません。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前に実装していた既存の機能のことです。プロセスの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前で実装していたアプリケーションの稼働・非稼働情報収集の機能を拡張したものです。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を継続します。

(O)

PFM - Web Console の［エージェント］階層または［サービス］階層から，プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定を行ってください。

KAVF11605-W

A settings for collecting application operation and non-operation information is not correct.
アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定が正しくありません

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定が正しくありません。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前に実装していた既存の機能のことです。プロセスの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前で実装していたアプリケーションの稼働・非稼働情報収集の機能を拡張したものです。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を継続します。

(O)

設定ファイルが壊れているおそれがあります。PFM - Web Console の［サービス］階層から，アプリケーションの稼働・非稼働情報収集の設定をやり直すと，ファイルが修復されることがあります。

または，PFM - Web Console の［エージェント］階層または［サービス］階層から，プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定を行ってください。

KAVF11606-Q

A settings for collecting process operation and non-operation information already exists. Would you like to overwrite it? (Y/N)

プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定が既にあります。上書きしてもよろしいですか？(Y/N)

プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定を上書きするかどうかを確認します。

アプリケーションの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前に実装していた既存の機能のことです。プロセスの稼働・非稼働情報収集とは，09-00 以前で実装していたアプリケーションの稼働・非稼働情報収集の機能を拡張したものです。

(S)

応答を待ちます。

(O)

プロセスの稼働・非稼働情報収集の設定を上書きする場合は，「Y」または「y」を入力してください。上書きしない場合は，「N」または「n」を入力してください。それ以外の値を指定すると，同じメッセージが再表示されます。

KAVF11607-E

Administrator permissions are required.

Administrator 権限が必要です

jpcappcvt コマンドが Administrator 権限を持たないユーザーによって実行されました。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を終了します。

(O)

Administrator 権限を持つユーザーでjpcappcvt コマンドを実行してください。

KAVF11608-E

An attempt to execute a command has failed, because of not executing from the Performance Management Administrator Console.

管理者コンソールから実行されなかったため，コマンドの起動に失敗しました

jpcappcvt コマンドが管理者コンソールから実行されませんでした。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を終了します。

(O)

次のどちらかの手順で，管理者コンソールからjpcappcvt コマンドを実行してください。

- Windows の［スタート］メニューの［すべてのプログラム］－［Performance Management］－［管理者コンソール］を選択する。
- Windows の［スタート］メニューの［すべてのプログラム］－［アクセサリ］－［コマンドプロンプト］を右クリックし，［管理者として実行］を選択する。

KAVF11609-E

A fatal error has occurred.
致命的なエラーが発生しました

致命的なエラーが発生しました。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11610-E

An attempt to allocate memory failed.
メモリーの確保に失敗しました

メモリーの確保に失敗しました。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を終了します。

(O)

ほかのアプリケーションなどを終了させるか，メモリーを増やしてください。

要因が判明しない場合，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF11611-E

Convert command is being executed.
コンバートコマンドが実行中です

jpcappcvt コマンドの実行中に，jpcappcvt コマンドを実行しました。

(S)

jpcappcvt コマンドの処理を終了します。

(O)

jpcappcvt コマンドの処理が終了してから，jpcappcvt コマンドを再実行してください。

KAVF11650-W

An error occurred in the communication with Docker Engine. Note that, if this problem reoccurs during the next attempt to collect information, this message will not be output again. The same applies for all consecutive attempts hereafter.

Docker Engine との通信中にエラーが発生しました。次回以降の収集タイミングで Docker Engine との通信中にエラーが発生しても，エラー発生が連続している間は，メッセージの出力を抑止します

Docker Engine との通信中にエラーが発生しました。実行環境を特定できなかったプロセスの，PD，PD_APSI，および PD_APS レコードの Virtual Env ID フィールドに「N/A」が格納されます。

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

Agent Collector のレコード収集時に，Docker Engine がビジー状態だった可能性があります。Agent Collector のレコード収集タイミングでの Docker Engine に対する操作（Docker コマンドの実行など）を避けるようにしてください。

KAVF11850-E

Error: Multiple logical host name options cannot be specified.

Error: 論理ホスト名オプションを複数指定することはできません

論理ホスト名オプションを複数指定することはできません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

論理ホスト名オプションは指定しないか，1 つだけ指定してください。

KAVF11851-E

Error: The specification of the logical host name is incorrect.

Error: 論理ホスト名の指定に誤りがあります

論理ホスト名が指定されていない，指定された論理ホスト名の長さが制限値を超えている，または指定された論理ホスト名に誤りがあります。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

論理ホスト名を確認してコマンドを再実行してください。

KAVF11852-E

Error: The specified logical host name is not set up. (lhost=**論理ホスト名**)
Error: 指定された論理ホスト名はセットアップされていません（lhost=**論理ホスト名**）

指定された論理ホスト名はセットアップされていません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

論理ホスト名を確認してコマンドを再実行してください。

KAVF11853-E

Error: The environment folder cannot be accessed. (folder=**環境フォルダ名**)
Error: 環境フォルダにアクセスできません（folder=**環境フォルダ名**）

環境フォルダにアクセスできません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

次のことを確認してください。

- 指定した論理ホストに対応する環境フォルダがあるかどうか
- コマンドを待機系ノードで実行していないか

KAVF11901-W

Warning: The specified value (**指定された値**) for the option (tt) is too long. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)
Warning: オプション（tt）に指定された値（**指定された値**）が長過ぎます（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（tt）に指定された値が長過ぎます。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

指定した値を短くしてください。

KAVF11902-W

Warning: The specified value (**指定された値**) for the option (ks) is too long. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプション（ks）に指定された値（**指定された値**）が長過ぎます（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（ks）に指定された値が長過ぎます。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

指定した値を短くしてください。

KAVF11904-W

Warning: The data value count (**指定された値の数**) does not match the option count (**オプションの数**). (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: 指定された値の数（**指定された値の数**）とオプションの数（**オプションの数**）が異なっています（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

指定された値の数とオプションの数が異なっています。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

指定された値の数とオプションの数を同じにしてください。

KAVF11905-W

Warning: The data line is too long. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: データ行が長過ぎます（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

データ行が長過ぎます。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

データ行を短くしてください。

KAVF11906-W

Warning: The specified value for the option must be 0 or a positive number. (**オプション名** = **指定された値**, filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプションに指定する値は 0 以上でなければなりません（**オプション名**=**指定された値**, ファイル名=**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション名に示されるオプションに 0 より小さい値が指定されました。

(S)

jpcuser コマンドは 0 を設定して，処理を継続します。

(O)

0 以上の値を指定してください。

KAVF11907-W

Warning: The specified value for the option is too long. (**オプション名** = **指定された値**, filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプションに指定された値が長過ぎます（**オプション名**=**指定された値**，ファイル名=**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション名に示されるオプションに指定する値が長過ぎます。

(S)

jpcuser コマンドは，オプションに指定された値の最大長を超える部分を切り捨てて，処理を継続します。

(O)

指定した値を短くしてください。

KAVF11908-W

Warning: The specified value (**指定された値**) for the option (t) is invalid. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプション（t）に指定された値（**指定された値**）は無効です（ファイル名=**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（t）に指定された値は無効です。

(S)

jpcuser コマンドは n/a を設定して，処理を継続します。

(O)

指定した値を正しく直してください。

KAVF11909-W

Warning: The specified value for the option must be a numeric value. (**オプション名 = 指定された値**, filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプションに指定する値は数値でなければなりません（**オプション名＝指定された値**，ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション名に示されるオプションに数値以外が指定されています。

(S)

jpcuser コマンドは 0 を設定して，処理を継続します。

(O)

数値を指定してください。

KAVF11910-W

Warning: The specified value for a floating-point number option is invalid. (**オプション名 = 指定された値**, filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: 浮動小数点オプションに指定された値は無効です（**オプション名＝指定された値**，ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション名に示される浮動小数点オプションに指定された値は無効です。

(S)

jpcuser コマンドは 0 を設定して，処理を継続します。

(O)

指定した値を正しく直してください。

KAVF11911-W

Warning: An overflow or an underflow occurred for the value specified for the option. (**オプション名 = 指定された値**, filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプションに指定された値が原因でオーバーフローまたはアンダーフローが発生しました（**オプション名＝指定された値**，ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション名に示されるオプションに指定された値が原因で，オーバーフローまたはアンダーフローが発生しました。

(S)

jpcuser コマンドは処理を継続します。

(O)

指定した値を正しく直してください。

KAVF11912-W

Warning: "" is specified for the option (**オプション名**). (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: ””がオプション（**オプション名**）に指定されました（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション名に示されるオプションに値が指定されていません。

(S)

jpcuser コマンドは 0 を設定して，処理を継続します。

(O)

値を指定してください。

KAVF11913-W

Warning: The specified value (**指定された値**) for the option(ki) must be 0 or a positive number. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプション（ki）に指定する値（**指定された値**）は 0 以上でなければなりません（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（ki）の値に 0 より小さい値が指定されました。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

0 以上の値を指定してください。

KAVF11914-W

Warning: An overflow or an underflow occurred for the value (**指定された値**) specified for the option (ki). (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプション（ki）に指定された値（**指定された値**）が原因でオーバーフローまたはアンダーフローが発生しました（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（ki）に指定された値が原因で，オーバーフローまたはアンダーフローが発生しました。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

指定した値を正しく直してください。

KAVF11915-W

Warning: "" is specified for the option (tt). (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)
Warning: ”” がオプション（tt）に指定されました（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（tt）に値が指定されていません。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

値を指定してください。

KAVF11916-E

Error: The specified value (**指定された値**) for record-ID is invalid.
Error: レコード ID に指定された値（**指定された値**）は無効です

レコード ID に指定された値（**指定された値**）は無効です。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

指定した値を正しく直してください。

KAVF11917-E

Error: An invalid number of arguments was specified.
Error: 無効な数の引数が指定されました

無効な数の引数が指定されました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

指定した値の数を正しく直してください。

KAVF11919-E

Error: An invalid arguments (**指定された値**) were specified.
Error: 無効な引数（**指定された値**）が指定されました

無効な引数が指定されました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

指定した値を正しく直してください。

KAVF11920-E

Error: The user-defined data file option (-file) is not specified.
Error: ユーザ作成データファイルオプション（-file）が指定されていません

ユーザー作成データファイルオプション（-file）が指定されていません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

ユーザー作成データファイルオプション（-file）を指定してください。

KAVF11923-E

Error: The user-defined data file cannot be opened. (filename = **ファイル名**)
Error: ユーザ作成データファイルをオープンできません（ファイル名＝**ファイル名**）

ユーザー作成データファイルにアクセスできません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

指定したファイル名が正しいか，ファイル名に指定されたファイルが存在するか，およびファイル名に指定されたファイルにアクセスできるか確認してください。要因が判明しない場合は，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11924-E

Error: There is no product information section in the user-defined data file.
Error: ユーザ作成データファイルにプロダクト情報セクションがありません

ユーザー作成データファイルにプロダクト情報セクションがありません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

プロダクト情報セクションを指定してください。

KAVF11925-E

Error: The product information section of the user-defined data file is invalid. Product Name=**プロダクト名**, FormVer=**フォーマットバージョン**

Error: ユーザ作成データファイルのプロダクト情報セクションが不正です Product Name=**プロダクト名**, FormVer=**フォーマットバージョン**

ユーザー作成データファイルのプロダクト情報セクションが不正です。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

プロダクト情報セクションを正しく直してください。

KAVF11926-E

Error: The user-defined data file does not contain an option header line.

Error: ユーザ作成データファイルにオプションヘッダー行がありません

ユーザー作成データファイルにオプションヘッダー行がありません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

オプションヘッダー行を指定してください。

KAVF11927-E

Error: The user-defined data file does not contain any data lines.

Error: ユーザ作成データファイルにデータ行がありません

ユーザー作成データファイルにデータ行がありません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

データ行を指定してください。

KAVF11928-E

Error: The option header line is too long.
Error: オプションヘッダー行が長過ぎます

オプションヘッダー行が長過ぎます。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

オプションヘッダー行を短くしてください。

KAVF11929-E

Error: Too many options (**指定された値**) were specified.
Error: オプションが多過ぎます（オプション＝**指定された値**）

オプションが多過ぎます。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

指定した内容を正しく直してください。

KAVF11930-E

Error: An invalid option (**オプション名**) was specified.
Error: 無効なオプション（**オプション名**）が指定されました

オプション名に示されるオプションに無効な値が指定されました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

オプションを正しく直してください。

KAVF11931-E

Error: The option (**オプション名**) is not supported for the specified record (**レコード ID**).
Error: オプション（**オプション名**）は指定されたレコード（**レコード ID**）ではサポートしていません

指定されたオプションは，指定されたレコード ID ではサポートしていません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

レコード ID またはオプションを正しく直してください。

KAVF11932-E

Error: The option (tt) is not specified.
Error: オプション（tt）が指定されていません

オプション（tt）が指定されていません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

オプション（tt）を指定してください。

KAVF11935-E

Error: A fatal error has occurred.
Error: 致命的なエラーが発生しました

致命的なエラーが発生しました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11941-E

Error: Administrator permissions are required.
Error: Administrator 権限が必要です

jpcuser コマンドが Administrator 権限を持たないユーザーによって実行されました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

Administrator 権限を持つユーザーでjpcuser コマンドを実行してください。

KAVF11943-E

Error: jpcuser terminated with error.
Error: jpcuser は異常終了しました

jpcuser コマンドが異常終了しました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

パブリックログに出力されている直前のメッセージを確認し，そのメッセージの対処方法に従ってください。

KAVF11948-I

Information: jpcuser terminated successfully.
Information: jpcuser は正常終了しました

jpcuser コマンドは正常終了しました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

KAVF11950-W

Warning: "" is specified for the option (ki). (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)
Warning: ”” がオプション（ki）に指定されました（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（ki）に""が指定されました。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

オプション（ki）に有効な値を指定してください。

KAVF11951-W

Warning: "" is specified for the option (ks). (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)
Warning: ”” がオプション（ks）に指定されました（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（ks）に""が指定されました。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

オプション（ks）に有効な値を指定してください。

KAVF11952-E

Error: The option header line specified in the user-defined data file is incorrect. (**指定された値**)
Error: ユーザ作成データファイルに指定されたオプションヘッダー行が不正です（**指定された値**）

ユーザー作成データファイルに指定されたオプションヘッダー行が不正です。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

オプションヘッダー行を正しく直してください。

KAVF11953-W

Warning: The data line specified in the user-defined data file is incorrect. (**指定された値**, filename = **ユーザ作成データファイルパス**)
Warning: ユーザ作成データファイルに指定されたデータ行が不正です（**指定された値**，ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

ユーザー作成データファイルに指定されたデータ行が不正です。

(S)

jpcuser コマンドは現在の行をスキップして，処理を継続します。

(O)

データ行を正しく直してください。

KAVF11954-W

Warning: jpcuser terminated with a warning.
Warning: jpcuser は警告終了しました

jpcuser コマンドが警告終了しました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

直前のメッセージに示される警告の要因を取り除いてください。

KAVF11957-I

Information: Usage: jpcuser <Record Name> -file <User-defined Data File Path> [-file <User-defined Data File Path>]... [-debug <value>] [-lhost <logical host name>]
Information: Usage: jpcuser <Record Name> -file <User-defined Data File Path> [-file <User-defined Data File Path>]... [-debug <value>] [-lhost <logical host name>]

このメッセージは，jpcuser コマンドの使用方法を示します。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

KAVF11959-E

Error: An attempt to allocate memory failed.
Error: メモリーの確保に失敗しました

メモリーの確保に失敗しました。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

ほかのアプリケーションなどを終了させるか，メモリーを増やしてください。要因が判明しない場合は，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11983-E

Error: The name of a user-defined data file is duplicated. (filename = ファイル名)
Error: ユーザ作成データファイルが重複しています（ファイル名＝ファイル名）

ユーザー作成データファイルが重複しています。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

ユーザー作成データファイルの指定の重複を取り除いてください。

KAVF11984-E

Error: The debug option is duplicated.
Error: デバッグオプションが重複しています

デバッグオプションが重複しています。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

デバッグオプションは指定しないか，1 回の指定にしてください。

KAVF11985-E

Error: There are no user-defined data files.
Error: ユーザ作成データファイルが一件もありません

ユーザー作成データファイルが 1 件もありません。

(S)

jpcuser コマンドの処理を終了します。

(O)

指定したファイル名が正しいか，ファイル名に指定されたファイルが存在するか，およびファイル名に指定されたファイルにアクセスできるか確認してください。要因が判明しない場合は，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11986-W

Warning: The option header line specified in the user-defined data file is incorrect. (option = **指定された値**, filename = **ユーザ作成データファイルパス**)
Warning: ユーザ作成データファイルに指定されたオプションヘッダー行が不正です（オプション名＝**指定された値**，ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

ユーザー作成データファイルに指定されたオプションヘッダー行が不正です。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

オプションヘッダー行を正しく直してください。

KAVF11987-W

Warning: The user-defined data file cannot be opened. (filename = **ファイル名**)
Warning: ユーザ作成データファイルをオープンできません（ファイル名＝**ファイル名**）

ユーザー作成データファイルにアクセスできません。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

指定したファイル名が正しいか，ファイル名に指定されたファイルが存在するか，およびファイル名に指定されたファイルにアクセスできるか確認してください。要因が判明しない場合は，保守資料を採取したあと，システム管理者に連絡してください。

KAVF11988-W

Warning: There is no product information section in the user-defined data file. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: ユーザ作成データファイルにプロダクト情報セクションがありません（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

ユーザー作成データファイルにプロダクト情報セクションがありません。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

プロダクト情報セクションを指定してください。

KAVF11989-W

Warning: The product information section of the user-defined data file is invalid. Product Name = **プロダクト名**, FormVer = **フォーマットバージョン**, filename = **ユーザ作成データファイルパス**

Warning: ユーザ作成データファイルのプロダクト情報セクションが不正です Product Name=**プロダクト名**, FormVer=**フォーマットバージョン**，ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**

ユーザー作成データファイルのプロダクト情報セクションが不正です。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

プロダクト情報セクションを正しく直してください。

KAVF11990-W

Warning: The user-defined data file does not contain an option header line. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: ユーザ作成データファイルにオプションヘッダー行がありません（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

ユーザー作成データファイルにオプションヘッダー行がありません。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

オプションヘッダー行を指定してください。

KAVF11991-W

Warning: The user-defined data file does not contain any data lines. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: ユーザ作成データファイルにデータ行がありません（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

ユーザー作成データファイルにデータ行がありません。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

データ行を指定してください。

KAVF11992-W

Warning: The option header line is too long. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプションヘッダー行が長過ぎます（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプションヘッダー行が長過ぎます。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

オプションヘッダー行を短くしてください。

KAVF11993-W

Warning: Too many options (**指定された値**) were specified. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプションが多過ぎます（オプション＝**指定された値**，ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプションが多過ぎます。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

指定した内容を正しく直してください。

KAVF11994-W

Warning: An invalid option (**オプション名**) was specified. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: 無効なオプション（**オプション名**）が指定されました（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション名に示されるオプションに無効な値が指定されました。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

オプションを正しく直してください。

KAVF11995-W

Warning: The option (**オプション名**) is not supported for the specified record (**レコード ID**). (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプション（**オプション名**）は指定されたレコード（**レコード ID**）ではサポートしていません（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

指定されたオプションは，指定されたレコード ID ではサポートしていません。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

レコード ID またはオプションを正しく直してください。

KAVF11996-W

Warning: The option (tt) is not specified. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)

Warning: オプション（tt）が指定されていません（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

オプション（tt）が指定されていません。

(S)

このユーザー作成データファイルをスキップします。

(O)

オプション（tt）を指定してください。

KAVF11997-W

Warning: The user-defined data file was skipped. (filename = **ユーザ作成データファイルパス**)
Warning: ユーザ作成データファイルをスキップしました（ファイル名＝**ユーザ作成データファイルパス**）

ユーザー作成データファイルをスキップしました。

(S)

該当ファイルをスキップし，jpcuser コマンドを続行します。

(O)

このメッセージの直前に出力されているメッセージを確認して原因を取り除いてください。

KAVF11998-E

Error: You do not have permission to execute the command.
Error: コマンドの実行権限がありません

jpcuser コマンドの実行権限がありません。

(S)

jpcuser コマンドの実行を中止します。

(O)

Windows［スタート］メニューの［プログラム］－［Performance Management］－［管理者コンソール］から実行してください。または，「管理者として実行」で開いたコマンドプロンプトから実行してください。

11 トラブルへの対処方法

この章では，Performance Management の運用中にトラブルが発生した場合の対処方法などについて説明します。ここでは，主に PFM - Agent でトラブルが発生した場合の対処方法について記載しています。Performance Management システム全体のトラブルへの対処方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

11.1　対処の手順

Performance Management でトラブルが起きた場合の対処の手順を次に示します。

現象の確認

次の内容を確認してください。

- トラブルが発生したときの現象
- メッセージの内容（メッセージが出力されている場合）
- 共通メッセージログなどのログ情報

各メッセージの要因と対処方法については，「10.　メッセージ」を参照してください。また，Performance Management が出力するログ情報については，「11.3　トラブルシューティング時に採取するログ情報」を参照してください。

資料の採取

トラブルの要因を調べるために資料の採取が必要です。「11.4　トラブルシューティング時に採取が必要な Windows に関する資料」および「11.5　トラブルシューティング時に採取する Windows に関する資料の採取方法」を参照して，必要な資料を採取してください。

問題の調査

採取した資料を基に問題の要因を調査し，問題が発生している部分，または問題の範囲を切り分けてください。

11.2　トラブルシューティング

ここでは，Performance Management 使用時のトラブルシューティングについて記述します。Performance Management を使用しているときにトラブルが発生した場合，まず，この節で説明している現象が発生していないか確認してください。

11.2.1　ハングアップや異常停止に関するトラブルシューティング

Performance Management を使用時に次の現象が発生した場合，拡張カウンタ DLL によってトラブルが引き起こされているおそれがあります。

- PFM Agent for Windows サービスが起動中にも関わらず，パフォーマンス情報が収集されない
- PFM Agent for Windows サービスが異常終了する
- PFM Agent for Windows サービスを停止すると，KAVE05034-E のエラーメッセージが出力される

この場合，Microsoft 社が提供している Microsoft Knowledge Base の次の情報を参照してください。

- パフォーマンス モニタが起動時またはカウンタの追加時にハングアップする
- パフォーマンス モニタ カウンタの問題のトラブルシューティング

11.2.2　その他のトラブルに関するトラブルシューティング

トラブルが発生したときの現象を確認してください。メッセージが出力されている場合は，メッセージの内容を確認してください。また，Performance Management が出力するログ情報については，「11.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報」を参照してください。

「11.2.1　ハングアップや異常停止に関するトラブルシューティング」および，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照しても，トラブルが解決できなかった場合，または，これら以外のトラブルが発生した場合，トラブルの要因を調査するための資料を採取し，システム管理者に連絡してください。

採取が必要な資料および採取方法については，「11.4　トラブルシューティング時に採取が必要な Windows に関する資料」および「11.5　トラブルシューティング時に採取する Windows に関する資料の採取方法」を参照してください。

11.3　トラブルシューティング時に採取するログ情報

Performance Management でトラブルが発生した場合，ログ情報を確認して対処方法を検討します。Performance Management を運用しているときに出力されるログ情報には，次の 4 種類があります。

- システムログ
- 共通メッセージログ
- 稼働状況ログ
- トレースログ

ここでは，4 種類のログ情報，および各ログ情報に設定できるログオプションについて説明します。

11.3.1　トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類

(1)　システムログ

システムログとは，システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。このログ情報はイベントログファイルに出力されます。

出力形式については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の，ログ情報について説明している章を参照してください。

論理ホストで運用する場合の注意事項

Performance Management のシステムログのほかに，クラスタソフトによる Performance Management の制御などを確認するにはクラスタソフトのログが必要です。

(2)　共通メッセージログ

共通メッセージログとは，システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。システムログよりも詳しいログ情報が出力されます。共通メッセージログの出力先ファイル名やファイルサイズについては，「11.3.2　トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびフォルダ一覧」を参照してください。また，出力形式については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の，ログ情報について説明している章を参照してください。

論理ホストで運用する場合の注意事項

論理ホストで運用する Performance Management の場合，共通メッセージログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは，フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれ，メッセージは同じログファイルに記録されます。

(3) 稼働状況ログ

稼働状況ログとは，PFM - Web Console が出力するログ情報のことです。稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。また，出力形式については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の，ログ情報について説明している章を参照してください。

(4) トレースログ

トレースログとは，トラブルが発生した場合に，トラブル発生の経緯を調査したり，各処理の処理時間を測定したりするために採取するログ情報のことです。

トレースログは，Performance Management のプログラムの各サービスが持つログファイルに出力されます。

論理ホストで運用する場合の注意事項

論理ホストで運用する Performance Management の場合，トレースログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは，フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれ，トレースログは同じログファイルに記録されます。

11.3.2 トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびフォルダ一覧

ここでは，Performance Management から出力されるログ情報について説明します。稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

(1) 共通メッセージログ

ここでは，Performance Management のログ情報のうち，共通メッセージログについて，ログの出力元であるサービス名または制御名，ログファイル名，およびディスク使用量を，次の表に示します。

表 11-1 共通メッセージログのファイル名（Windows の場合）

項番	ログ情報の種類	出力元	ファイル名	ディスク使用量※1（キロバイト）
1	共通メッセージログ	Performance Management	インストール先フォルダ¥log¥jpclog{01|02}※2	8,192（＊2）
2			インストール先フォルダ¥log¥jpclogw{01|02}※2	8,192（＊2）

項番	ログ情報の種類	出力元	ファイル名	ディスク使用量※1（キロバイト）
3	共通メッセージログ（論理ホストで運用する場合）	論理ホストで運用する Performance Management	環境フォルダ※3¥jp1pc¥log¥jpclog{01|02}※2	8,192 (＊2)
4			環境フォルダ※3¥jp1pc¥log¥jpclogw{01|02}※2	8,192 (＊2)

注※1

（ ）内の数字は，1 つのサービスに対して作成されるログファイルの数を示します。例えば，「2,048(＊2)」の場合，ディスク使用量が 2,048 キロバイトのログファイルが最大で 2 つ作成されることを示します。この場合，ディスク使用量は合計で 4,096 キロバイトとなります。

注※2

共通メッセージログのログファイル名には，末尾に「01」または「02」が付加されます。

シーケンシャルファイル（jpclog）方式の場合

ログ情報は，まず，末尾が「01」のログファイルに出力されます。ログファイルのサイズが上限に達すると，ログファイル名の末尾が「01」から「02」に変更され，ファイル名の末尾が「01」のログファイルが新規作成されます。その後出力されるログ情報は，末尾が「01」のログファイルに出力されます。すでにファイル名の末尾が「02」のログファイルがある場合は，上書きされます。最新のログは常にファイル名の末尾が「01」のログファイルに出力されます。

ラップアラウンドファイル（jpclogw）方式の場合

ログ情報は，まず，末尾が「01」のログファイルに出力されます。ログファイルのサイズが上限に達すると，ファイル名の末尾が「02」のログファイルが新規作成されます。その後出力されるログ情報は，末尾が「02」のログファイルに出力されます。すでにファイル名の末尾が「02」のログファイルがある場合は，一度データをすべて削除し，先頭行からログが出力されます。そのあとログの出力ファイルが交互に入れ替わります。

ログファイルの出力方式については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注※3

環境フォルダは，論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のフォルダです。

(2) トレースログ

ここでは，Performance Management のログ情報のうち，PFM - Agent のトレースログの出力元であるサービス名または制御名，および格納先ディレクトリ名を，次の表に示します。

表 11-2　トレースログの格納先フォルダ名（Windows の場合）

項番	ログ情報の種類	出力元	フォルダ名
1	トレースログ	Performance Management コマンド	インストール先フォルダ¥tools¥log¥
2		Agent Collector サービス	インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥
3		Agent Store サービス	インストール先フォルダ¥agtt¥store¥log¥
4	トレースログ（論理ホストで運用する場合）	Performance Management コマンド	環境フォルダ※¥jp1pc¥tools¥log¥
5		Agent Collector サービス	環境フォルダ※¥jp1pc¥agtt¥agent¥log¥
6		Agent Store サービス	環境フォルダ※¥jp1pc¥agtt¥store¥log¥

注※

環境フォルダは，論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のフォルダです。

11.4　トラブルシューティング時に採取が必要な Windows に関する資料

「11.2　トラブルシューティング」に示した対処をしてもトラブルを解決できなかった場合，トラブルの要因を調べるための資料を採取し，システム管理者に連絡する必要があります。この節では，トラブル発生時に採取が必要な資料について説明します。

Performance Management では，採取が必要な資料を一括採取するためのコマンドを用意しています。PFM - Agent の資料を採取するには，jpcras コマンドを使用します。jpcras コマンドを使用して採取できる資料については，表中に記号で示しています。

注意

jpcras コマンドで採取できる資料は，コマンド実行時に指定するオプションによって異なります。コマンドに指定するオプションと採取できる資料については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の，コマンドについて説明している章を参照してください。

論理ホストで運用する場合の注意事項

論理ホストで運用する場合の注意事項を次に示します。

- 論理ホストで運用する場合の Performance Management のログは，共有ディスクに格納されます。なお，共有ディスクがオンラインになっている場合は，jpcras コマンドで共有ディスク上のログも一括して採取できます。
- フェールオーバー時の問題を調査するには，フェールオーバーの前後の資料が必要です。このため，実行系と待機系の両方の資料が必要になります。
- 論理ホストで運用する Performance Management は，クラスタソフトから起動や停止を制御されているので，論理ホストで運用する Performance Management の調査には，クラスタソフトの資料が必要です。クラスタソフトの動きと Performance Management の動きを対比して調査してください。

11.4.1　トラブルシューティング時に採取する OS のログ情報

OS に関する次のログ情報の採取が必要です。OS のログ情報を次の表に示します。

表 11-3　OS のログ情報

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	Windows イベントログ	−	○
	WMI ログ	システムフォルダ¥system32¥WBEM¥Logs¥*※	○
プロセス情報	プロセスの一覧	−	○
システムファイル	hosts ファイル	システムフォルダ¥system32¥drivers¥etc¥hosts	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムファイル	services ファイル	システムフォルダ¥system32¥drivers¥etc¥services	○
OS 情報	システム情報	−	○
	ネットワークステータス	−	○
	環境変数	−	○
	ホスト名	−	○
	Windows ファイアウォールの情報	−	○
ダンプ情報	問題のレポートと解決策のログファイル	ユーザーモードプロセスダンプの出力先フォルダ¥プログラム名.プロセス ID.dmp 例：jpcagtt.exe.2420.dmp	×

(凡例)

○：採取できる

×：採取できない

−：該当しない

注※

別のフォルダにログファイルが出力されるように設定している場合は，該当するフォルダから資料を採取してください。

11.4.2 トラブルシューティング時に採取する Performance Management の情報

Performance Management に関する次の情報の採取が必要です。また，ネットワーク接続でのトラブルの場合，接続先マシン上のファイルの採取も必要です。Performance Management の情報を次の表に示します。

表 11-4 Performance Management の情報

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名 またはレジストリ	jpcras コマンドでの採取
共通メッ	Performance Managem	インストール先フォルダ¥log¥jpclog{01|02}※1	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名 またはレジストリ	jpcras コマンドでの採取
セージログ	ent から出力されるメッセージログ(シーケンシャルファイル方式)	インストール先フォルダ¥log¥jpclog{01|02}※1	○
	Performance Management から出力されるメッセージログ(ラップアラウンドファイル方式)	インストール先フォルダ¥log¥jpclogw{01|02}※1	○
構成情報	各構成情報ファイル	−	○
	jpctool service list コマンドの出力結果	−	○
バージョン情報	製品バージョン	−	△
	履歴情報	−	△
データベース情報	Agent Store	• Store バージョン 1.0 の場合 インストール先フォルダ¥agtt¥store¥*.DB インストール先フォルダ¥agtt¥store¥*.IDX • Store バージョン 2.0 の場合 インストール先フォルダ¥agtt¥store¥STPD インストール先フォルダ¥agtt¥store¥STPI フォルダ下の次に示すファイル。 *.DB *.IDX	○
トレースログ	Performance Managem	_※2	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名 またはレジストリ	jpcras コマンドでの採取
トレースログ	ent のプログラムの各サービスのトレース情報	―※2	○
ユーザー独自のパフォーマンスデータ収集機能の情報	構成情報	インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥jpcuser.ini	○
	デバッグログ	インストール先フォルダ ¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug¥jpcuser_dbg_{01|02|03|04|05}.log	○
	トレースログ	インストール先フォルダ ¥agtt¥agent¥jpcuser¥log¥trace¥msglog{01|02}	○
	パブリックログ	インストール先フォルダ ¥agtt¥agent¥jpcuser¥log¥public¥jpclog{01|02}	○
	ユーザーデータファイル	インストール先フォルダ ¥agtt¥agent¥jpcuser¥userdata¥jpcuser_{UPI|UPIB|UPD|UPDB|XUI1|XUI2|XUI3|XUI4|XUI5}	○
	ユーザーデータファイルのバックアップファイル	インストール先フォルダ ¥agtt¥agent¥jpcuser¥userdata¥jpcuser_{UPI|UPIB|UPD|UPDB|XUI1|XUI2|XUI3|XUI4|XUI5}_bak	○
Agent Collector サービス独自ログ	パフォーマンス情報	• インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥map.log • インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥map64.log	○
		• インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥cdaumap.log • インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥cdaumap64.log	△
	WMI エラー情報	インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥agtterr.log	○
定義ファイル	パフォーマンスカウンタ定義ファイル（英語）	システムフォルダ¥system32 フォルダ下の次に示すファイル。 perfc009.dat perfh009.dat	△
	パフォーマンスカウンタヘルプ定義ファイル（日本語）	システムフォルダ¥system32 フォルダ下の次に示すファイル。 perfc011.dat perfh011.dat	△

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名 またはレジストリ	jpcras コマンドでの採取
定義ファイル	アプリケーション定義ファイル（09-00 以前）	インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcapp	○
	アプリケーション定義ファイル（09-10 以降）	インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcapp2	○
レジストリ情報	サービス関連情報（パフォーマンス定義情報を含む）	”HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services”	△
	パフォーマンス定義情報（デフォルト）	”HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows NT¥CurrentVersion¥Perflib”	△
	PFM - Agent for Platform 設定情報	”HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥HITACHI¥JP1PCAGTT”	△
	PFM - Agent for Platform 設定情報（WOW64）	”HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥HITACHI¥JP1PCAGTT”	△
インストールログ※3	インストール時のメッセージログ	システムフォルダ¥TEMP¥HCDINST¥*.LOG	×
言語環境の情報	言語環境の情報	• インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥system_lang{01|02}.log • インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥log¥public¥user_lang{01|02|03|04}.log	○
		• インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥pcconfig{1|2}.log • インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥jpcappcvt{01|02}.log	△

（凡例）

○：採取できる（物理ホストと論理ホスト）

△：採取できる（物理ホストだけ）

×：採取できない

－：該当しない

注

論理ホストで運用する場合は「**インストール先フォルダ**」を「**環境フォルダ¥jp1pc**」に読み替えてください。

注※1

ログファイルの出力方式については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注※2

トレースログの格納先フォルダについては，「11.3.2　トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびフォルダ一覧」を参照してください。

注※3

インストールに失敗した場合に採取してください。

11.4.3　トラブルシューティング時に採取するオペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について，次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成（各 OS のバージョン，ホスト名，PFM - Manager と PFM - Agent の構成など）
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は，ログイン時の Performance Management ユーザー名
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は，コマンドに指定した引数

11.4.4　トラブルシューティング時に採取する画面上のエラー情報

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は，操作画面のハードコピー
- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー（詳細ボタンがある場合はその内容を含む）
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は，［コマンドプロンプト］ウィンドウまたは［管理者コンソール］ウィンドウのハードコピー

11.4.5 トラブルシューティング時に採取するパフォーマンスデータに関する情報

パフォーマンスデータに関する次の情報の採取が必要です。また，マシン上のファイル，コマンド結果，レジストリ情報の採取も必要です。

PFM - Agent for Platform をインストールした環境で採取する必要がある，PFM - Agent for Platform 固有のパフォーマンスデータに関する情報を次の表に示します。

表 11-5　PFM - Agent for Platform 固有のパフォーマンスデータに関する情報

情報の種類	概要	採取が必要な情報 （ファイル名，取得コマンド名またはレジストリ定義場所）	jpcras コマンドでの採取
パフォーマンス定義情報	カウンタ定義ファイル	システムフォルダ¥system32¥perfc009.dat	△
		システムフォルダ¥system32¥perfc011.dat	△
		システムフォルダ¥system32¥perfh009.dat	△
		システムフォルダ¥system32¥perfh011.dat	△
	カウンタ定義場所（レジストリ）	HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows NT¥CurrentVersion¥Perflib	△
		HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services	△
	カウンタ情報	インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥map.log	○
		インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥map64.log	○
		インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥cdaumap.log	△
		インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥cdaumap64.log	△
OS 情報（コマンド）※1	ホスト名	hostname	△
	バージョン	ver	△
	クラスタ	cluster	△
	デバイス	mode	△
	ディスクカウンタ	diskperf	△
	ディスクボリューム	mountvol	△
		vol	△
	仮想ドライブ	subst	△
	TCP/IP	ipconfig	△
	IPX	ipxroute config	△
	ネットワーク状態	nbtstat	△

情報の種類	概要	採取が必要な情報 （ファイル名，取得コマンド名またはレジストリ定義場所）	jpcras コマンドでの採取
OS 情報（コマンド）※1	ネットワーク名	net name	△
	クライアント	net view	△
	サービス	net start	△
	Server サービス	net config server	△
	Workstation サービス	net config workstation	△
	セッション	net session	△
	共有リソース	net share	△
		net use	△
	ユーザーアカウント	net user	△
		net accounts	△
	ローカルグループ	net localgroup	△
	ドメインコントローラー	dsquery server	△
		dsquery ou	△
		dsquery user	△
	プロセス	tasklist /m	△
		tasklist /svc	△
	TCP/IP	netstat -a	△
Docker 情報※2	－	docker version docker ps -a --no-trunc docker top Docker コンテナの ID※3 docker inspect Docker コンテナの ID※3 type %programdata%¥docker¥config¥daemon.json	△

（凡例）

○：採取できる（物理ホストと論理ホスト）

△：採取できる（物理ホストだけ）

－：該当しない

注

論理ホストで運用する場合は「**インストール先フォルダ**」を「**環境フォルダ¥jp1pc**」に読み替えてください。

注※1

コマンドの詳細については，Windows のヘルプを参照してください。

注※2

Windows Server 2016 以降で Docker 環境を使用している場合だけ採取が必要です。

注※3

すべての Docker コンテナに対して採取が必要です。

11.4.6 トラブルシューティング時に採取するユーザーモードプロセスダンプ

Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は，ユーザーモードプロセスダンプを採取してください。

11.4.7 トラブルシューティング時に採取する問題レポート

Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は，問題レポートを採取してください。

11.4.8 トラブルシューティング時に採取するその他の情報

上記以外で必要な情報を次に示します。

- Windows の［イベントビューア］ウィンドウの，［システム］および［アプリケーション］の内容
- ［アクセサリ］－［システムツール］－［システム情報］の内容

11.5 トラブルシューティング時に採取する Windows に関する資料の採取方法

トラブルシューティング時に採取する Windows に関する資料の採取方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

11.6 Performance Management の障害検知

Performance Management では，ヘルスチェック機能を利用することで Performance Management 自身の障害を検知できます。ヘルスチェック機能では，監視エージェントや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を監視し，監視結果を監視エージェントの稼働状態の変化として PFM - Web Console 上に表示します。

また，PFM サービス自動再起動機能を利用することで，PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合に自動的に PFM サービスを再起動したり，定期的に PFM サービスを再起動したりすることができます。

ヘルスチェック機能によって監視エージェントの稼働状態を監視したり，PFM サービス自動再起動機能によって PFM サービスを自動再起動したりするには，Performance Management のサービスの詳細な状態を確認するステータス管理機能を使用します。このため，対象となる監視エージェントがステータス管理機能に対応したバージョンであり，ステータス管理機能が有効になっている必要があります。ホストの稼働状態を監視する場合は前提となる条件はありません。

また，Performance Management のログファイルをシステム統合監視製品である JP1/Base で監視することによっても，Performance Management 自身の障害を検知できます。これによって，システム管理者は，トラブルが発生したときに障害を検知し，要因を特定して復旧の対処をします。

Performance Management 自身の障害検知の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

11.7 Performance Management システムの障害回復

Performance Management のサーバで障害が発生したときに，バックアップファイルを基にして，障害が発生する前の正常な状態に回復する必要があります。

障害が発生する前の状態に回復する手順については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

付録

付録 A　構築前のシステム見積もり

PFM - Agent for Platform を使ったシステムを構築する前に，使用するマシンの性能が，PFM - Agent for Platform を運用するのに十分であるか，見積もっておくことをお勧めします。

付録 A.1　メモリー所要量

メモリー所要量は，PFM - Agent for Platform の設定状況や使用状況によって変化します。メモリー所要量の見積もり式については，リリースノートを参照してください。

付録 A.2　ディスク占有量

ディスク占有量は，パフォーマンスデータを収集するレコード数によって変化します。ディスク占有量の見積もりには，システム全体のディスク占有量，Store データベース（Store バージョン 1.0）のディスク占有量，または Store データベース（Store バージョン 2.0）の見積もりが必要になります。これらの見積もり式については，リリースノートを参照してください。

付録 B　識別子一覧

PFM - Agent for Platform を操作したり，PFM - Agent for Platform の Store データベースからパフォーマンスデータを抽出したりする際，PFM - Agent for Platform であることを示す識別子が必要な場合があります。PFM - Agent for Platform の識別子を次の表に示します。

表 B-1　PFM - Agent for Platform の識別子一覧

用途	名称	識別子	説明
コマンドなど	プロダクト ID	T	プロダクト ID とは，サービス ID の一部。サービス ID は，コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合や，パフォーマンスデータをバックアップする場合などに必要である。サービス ID については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録に記載されている命名規則を参照のこと。
	サービスキー	agtt または Windows	コマンドを使用して PFM - Agent for Platform を起動する場合や，終了する場合などに必要である。サービスキーについては，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録に記載されている命名規則を参照のこと。
ヘルプ	ヘルプ ID	pcat	PFM - Agent Platform のヘルプであることを表す。

付録 C　プロセス一覧

ここでは，PFM - Agent for Platform のプロセス一覧を記載します。

PFM - Manager，PFM - Base，および PFM - Web Console のプロセスについては，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照してください。PFM - Agent for Platform のプロセス一覧を次の表に示します。なお，プロセス名の後ろに記載されている値は，同時に起動できるプロセス数です。

表 C-1　PFM - Agent for Platform のプロセス一覧

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagtt.exe(1)	Agent Collector サービスプロセス。このプロセスは，PFM - Agent for Platform ごとに 1 つ起動する。
jpcsto.exe(1)	Agent Store サービスプロセス。このプロセスは，PFM - Agent for Platform ごとに 1 つ起動する。
stpqlpr.exe(1)※1	Store データベースのバックアップ/エクスポート実行プロセス。
jpctRegistry32.exe(2)※2	収集プロセス（32 ビット版）。このプロセスは収集のたびに起動／停止する。
jpctRegistry64.exe(1)	収集プロセス（64 ビット版）。このプロセスは収集のたびに起動／停止する。
jpctRegistry32Sub.exe(1)	収集補助プロセス（32 ビット版）。Agent Collector サービスが起動されたときに起動し，Agent Collector サービス停止時に終了する。

注※1

jpcsto.exe プロセスの子プロセスです。

注※2

論理ホスト環境の場合は，プロセス数が 1 になります。

付録 D　ポート番号一覧

ここでは，PFM - Agent for Platform で使用するポート番号を記載します。

PFM - Manager，および PFM - Base のポート番号およびファイアウォールの通過方向については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照してください。

ポート番号は，ユーザー環境に合わせて任意の番号に変更することもできます。

ポート番号の変更方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお，使用するプロトコルは TCP/IP です。

注意

Performance Management は，1 対 1 のアドレス変換をする静的 NAT(Basic NAT)に対応しています。

動的 NAT や，ポート変換機能を含む NAPT（IP Masquerade，NAT+）には対応していません。

付録 D.1　PFM - Agent for Platform のポート番号

PFM - Agent for Platform で使用するポート番号は，優先ポート番号です。

`jpcconf port define` コマンド実行時にポート番号を任意の番号に変更しない場合，これらの優先ポート番号が割り当てられます。また，`jpcconf port define` コマンドを実行しない場合，サービスが再起動されるたびにシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。なお，同一装置内の論理ホストと物理ホストの両方，または複数の論理ホストに Performance Management シリーズプログラムのサービスがある場合は，それぞれに重複しないポート番号を割り当てる必要があります。

PFM - Agent for Platform で使用する優先ポート番号を次の表に示します。

表 D-1　PFM - Agent for Platform で使用する優先ポート番号

優先ポート番号	サービス名	パラメーター※1	用途
20279	Agent Store サービス	`jp1pcstot`[_論理ホスト名] ※2	パフォーマンスデータを記録したり，履歴レポートを取得したりするときに使用する。
20280	Agent Collector サービス	`jp1pcagtt`[_論理ホスト名] ※2	アラームをバインドしたり，リアルタイムレポートを取得したりするときに使用する。

注※1

`services` ファイルのサービス名です。

注※2

_**論理ホスト名**は論理ホストのサービスの場合に付きます。物理ホストのサービスの場合には付きません。

付録 D.2　ファイアウォールの通過方向

ファイアウォールを挟んで PFM - Manager と PFM - Agent for Platform を配置する場合については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の，ファイアウォールの通過方向について説明している個所を参照してください。

付録 E　PFM - Agent for Platform のプロパティ

ここでは，PFM - Web Console で表示される PFM - Agent for Platform の Agent Store サービスのプロパティ一覧，および Agent Collector サービスのプロパティ一覧を記載します。

付録 E.1　Agent Store サービスのプロパティ一覧

PFM - Agent for Platform の Agent Store サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 E-1　PFM - Agent for Platform の Agent Store サービスのプロパティ一覧

フォルダ名	プロパティ名	説明
-	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
General	－	ホスト名やフォルダなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Directory	サービスの動作するカレントフォルダ名が表示される。
	Host Name	サービスが動作するホスト名が表示される。
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。
	Physical Address	IPv6 通信機能が無効の場合，サービスが動作するホストの IP アドレスおよびポート番号が表示される。
	Physical Address(IPv4)	IPv6 通信機能が有効の場合，サービスが動作するホストの IP アドレス（IPv4）が表示される。
	Physical Address(IPv6)	IPv6 通信機能が有効の場合，サービスが動作するホストの IP アドレス（IPv6）が表示される。
	Port Number	IPv6 通信機能が有効の場合，サービスが動作するポート番号が表示される。
	User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
	Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。

フォルダ名		プロパティ名	説明
System		－	サービスが起動されている OS の，OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		CPU Type	CPU の種類が表示される。
		Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。
		OS Type	OS の種類が表示される。
		OS Name	OS 名が表示される。
		OS Version	OS のバージョンが表示される。
Network Services		－	Performance Management 通信共通ライブラリーについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Build Date	Agent Store サービスの作成日が表示される。
		INI File	jpcns.ini ファイルの格納フォルダ名が表示される。
Network Services	Service	－	サービスについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Description	ホスト名やサービス種別などサービスの追加情報が表示される。
		Local Service Name	サービス ID が表示される。
		Remote Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Master Manager サービスのサービス ID が表示される。
		EP Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Correlator サービスのサービス ID が表示される。
Retention		－	Store バージョンが 1.0 の場合にデータの保存期間を設定する。詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。
		Product Interval - Minute Drawer	分ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。 • Minute

フォルダ名	プロパティ名	説明
Retention	Product Interval - Minute Drawer	• Hour • Day • 2 Days • 3 Days • 4 Days • 5 Days • 6 Days • Week • Month • Year
	Product Interval - Hour Drawer	時間ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。 • Hour • Day • 2 Days • 3 Days • 4 Days • 5 Days • 6 Days • Week • Month • Year
	Product Interval - Day Drawer	日ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。 • Day • 2 Days • 3 Days • 4 Days • 5 Days • 6 Days • Week • Month • Year
	Product Interval - Week Drawer	週ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。 • Week • Month • Year

フォルダ名		プロパティ名	説明
Retention		Product Interval - Month Drawer	月ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。 • Month • Year
		Product Interval - Year Drawer	年ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間。Year で固定。
		Product Detail - PD レコードタイプのレコード ID	各 PD レコードタイプのレコードの保存レコード数を設定する。0～2,147,483,647 の整数が指定できる。 **注意**：範囲外の数値，またはアルファベットなどの文字を指定した場合，エラーメッセージが表示される。
RetentionEx		－	Store バージョンが 2.0 の場合にデータの保存期間を設定する。詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。
RetentionEx	Product Interval - PI レコードタイプのレコード ID	－	PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。
		Period - Minute Drawer (Day)	PI レコードタイプのレコード ID ごとに，分単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を 0～366 の整数で指定できる。
		Period - Hour Drawer (Day)	PI レコードタイプのレコード ID ごとに，時間単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を 0～366 の整数で指定できる。
		Period - Day Drawer (Week)	PI レコードタイプのレコード ID ごとに，日単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（週の数）を 0～522 の整数で指定できる。
		Period - Week Drawer (Week)	PI レコードタイプのレコード ID ごとに，週単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（週の数）を 0～522 の整数で指定できる。

フォルダ名		プロパティ名	説明
RetentionEx	Product Interval - PI レコードタイプのレコード ID	Period - Month Drawer (Month)	PI レコードタイプのレコード ID ごとに，月単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（月の数）を 0～120 の整数で指定できる。
		Period - Year Drawer (Year)	PI レコードタイプのレコード ID ごとに，年単位のパフォーマンスデータの保存期間が表示される。
	Product Detail - PD レコードタイプのレコード ID	Period (Day)※	PD レコードタイプのレコード ID ごとに，パフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を 0～366 の整数で指定できる。
	Product Log - PL レコードタイプのレコード ID	Period (Day)	PL レコードタイプのレコード ID ごとに，パフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を 0～366 の整数で指定できる。
Disk Usage		－	各データベースで使用されているディスク容量が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティには，プロパティを表示した時点でのディスク使用量が表示される。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Product Interval	PI レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
		Product Detail	PD レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
		Product Alarm	PA レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - Agent for Platform（Windows）では使用しない。
		Product Log	PL レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - Agent for Platform（Windows）では使用しない。
		Total Disk Usage	データベース全体で使用されるディスク容量が表示される。
Configuration		－	Agent Store サービスのプロパティが表示される。
		Store Version	Store データベースのバージョンが表示される。

フォルダ名	プロパティ名	説明
Configuration	Store Version	• Store バージョン 1.0 の場合 「1.0」 • Store バージョン 2.0 の場合 「2.0」
Multiple Manager Configuration	Primary Manager	監視二重化の場合，プライマリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。
	Secondary Manager	監視二重化の場合，セカンダリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。

（凡例）

－：該当しない

注※

レコード ID が APS または ASVC の場合，0（固定）となります。

付録 E.2　Agent Collector サービスのプロパティ一覧

PFM - Agent for Platform の Agent Collector サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 E-2　PFM - Agent for Platform の Agent Collector サービスのプロパティ一覧

フォルダ名	プロパティ名	説明
－	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
	Data Model Version	データモデルのバージョンが表示される。
General	－	ホスト名やフォルダなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Directory	サービスの動作するカレントフォルダ名が表示される。
	Host Name	サービスが動作するホスト名が表示される。
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。

フォルダ名		プロパティ名	説明
General		Physical Address	IPv6 通信機能が無効の場合，サービスが動作するホストの IP アドレスおよびポート番号が表示される。
		Physical Address(IPv4)	IPv6 通信機能が有効の場合，サービスが動作するホストの IP アドレス（IPv4）が表示される。
		Physical Address(IPv6)	IPv6 通信機能が有効の場合，サービスが動作するホストの IP アドレス（IPv6）が表示される。
		Port Number	IPv6 通信機能が有効の場合，サービスが動作するポート番号が表示される。
		User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
		Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。
System		－	サービスが起動されている OS の，OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		CPU Type	CPU の種類が表示される。
		Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。
		OS Type	OS の種類が表示される。
		OS Name	OS 名が表示される。
		OS Version	OS のバージョンが表示される。
Network Services		－	Performance Management 通信共通ライブラリーについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Build Date	Agent Collector サービスの作成日が表示される。
		INI File	jpcns.ini ファイルの格納フォルダ名が表示される。
Network Services	Service	－	サービスについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Description	ホスト名やサービス種別などサービスの追加情報が表示される。
		Local Service Name	サービス ID が表示される。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Network Services	Service	Remote Service Name	Agent Collector サービスが接続する Agent Store サービスのサービス ID が表示される。
		AH Service Name	同一ホストにある Action Handler サービスのサービス ID が表示される。
JP1 Event Configurations		−	JP1 イベントの発行条件を設定する。
		各サービス	Agent Collector サービス，Agent Store サービス，Action Handler サービス，および Status Server サービスのリスト項目から「Yes」または「No」を選択し，サービスごとに JP1 システムイベントを発行するかどうかを指定する。
		JP1 Event Send Host	JP1/Base の接続先イベントサーバ名を指定する。ただし，Action Handler サービスと同一マシンの論理ホストまたは物理ホストで動作しているイベントサーバだけ指定できる。指定できる値は 0～255 バイトの半角英数字，「.」および「-」である。範囲外の値を指定した場合は，省略したと仮定される。値を省略した場合は，Action Handler サービスが動作するホストがイベント発行元ホストとして使用される。「localhost」を指定した場合は，物理ホストを指定したものと仮定される。
		Monitoring Console Host	JP1/IM - Manager のモニター起動で PFM - Web Console を起動する場合，起動する PFM - Web Console ホストを指定する。指定できる値は 0～255 バイトの半角英数字，「.」および「-」である。範囲外の値を指定した場合は，省略したと仮定される。値を省略した場合は，接続先の PFM - Manager ホストが仮定される。
		Monitoring Console Port	起動する PFM - Web Console のポート番号（http リクエストポート番号）を指定する。指定できる値は 1～65535 である。範囲外の値を指定した場合は，省略したと仮定される。値を省略した場合は，20358 が設定される。
		Monitoring Console Https	JP1/IM - Manager のモニター起動で PFM - Web Console を起動する場

フォルダ名		プロパティ名	説明
JP1 Event Configurations		Monitoring Console Https	合，PFM - Web Console に https を使用した暗号化通信で接続するかどうかを指定する。デフォルトは No。 • Yes：暗号化通信を使用する • No：暗号化通信を使用しない
JP1 Event Configurations	Alarm	JP1 Event Mode	アラームの状態が変化した場合に，次のどちらのイベントを発行するか設定する。 • JP1 User Event：JP1 ユーザーイベントを発行する • JP1 System Event：JP1 システムイベントを発行する
Detail Records		－	PD レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は，太字で表示される。
Detail Records	レコード ID※1	－	レコードのプロパティが格納されている。
		Description	レコードの説明が表示される。このプロパティは変更できない。
		Log	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し，レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ，Collection Interval が 0 より大きい値であれば，データベースに記録される。
		Log(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に，JP1/SLM - Manager からレコードを PFM - Agent for Platform の Store データベースに記録するかどうかについて「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
		Monitoring(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に，レコードを JP1/SLM - Manager に送信するかどうかについて，JP1/SLM - Manager での設定が「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Detail Records	レコード ID※1	Collection Interval※2	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0～2,147,483,647 秒で，1 秒単位で指定できる。なお，0 と指定した場合は 0 秒となり，データは収集されない。
		Collection Offset※2	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は，Collection Interval で指定した値の範囲内で，0～32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値によらないで，Collection Interval と同様の時間となる。
		Over 10 Sec Collection Time	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうかが「Yes」または「No」で表示される。 • Yes：10 秒以上掛かることがある • No：10 秒掛からない このプロパティは変更できない。
		Realtime Report Data Collection Mode	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 • Reschedule：再スケジュールモードの場合 • Temporary Log：一時保存モードの場合 なお，Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには，一時保存モード（Temporary Log）を指定する必要がある。
		LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の［サービス階層］タブで表示されるサービスのプロパティ画面の，下部フレームの［LOGIF］をクリックすると表示される［ログ収集条件設定］ウィンドウで

フォルダ名		プロパティ名	説明
Detail Records	レコード ID※1	LOGIF	作成した条件式（文字列）が表示される。
		Sync Collection With	次の形式で指定したレコードと収集の同期を取る。 Sync Collection With =**レコード種別, レコード ID** **（例）**Sync Collection With=Interval Records, PI
Interval Records		－	PI レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は，太字で表示される。
Interval Records	レコード ID※1	－	レコードのプロパティが格納されている。
		Description	レコードの説明が表示される。このプロパティは変更できない。
		Log	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し，レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ，Collection Interval が 0 より大きい値であれば，データベースに記録される。
		Log(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に，JP1/SLM - Manager からレコードを PFM - Agent for Platform の Store データベースに記録するかどうかについて「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
		Monitoring(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に，レコードを JP1/SLM - Manager に送信するかどうかについて，JP1/SLM - Manager での設定が「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
		Collection Interval	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0～2,147,483,647 秒で，1 秒単位で指定できる。なお，0 と指定した場合は 0 秒となり，データは収集されない。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Interval Records	レコード ID※1	Collection Offset	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は，Collection Interval で指定した値の範囲内で，0～32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお，データ収集の記録時間は，Collection Offset の値によらないで，Collection Interval と同様の時間となる。
		Over 10 Sec Collection Time	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうかが「Yes」または「No」で表示される。 • Yes：10 秒以上掛かることがある • No：10 秒掛からない このプロパティは変更できない。
		Realtime Report Data Collection Mode	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 • Reschedule：再スケジュールモードの場合 • Temporary Log：一時保存モードの場合 なお，Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには，一時保存モード（Temporary Log）を指定する必要がある。
		LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の［サービス階層］タブで表示されるサービスのプロパティ画面の，下部フレームの［LOGIF］をクリックすると表示される［ログ収集条件設定］ウィンドウで作成した条件式（文字列）が表示される。
Log Records		－	PL レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。PFM - Agent for Platform ではこのレコー

フォルダ名		プロパティ名	説明
Log Records		－	ドをサポートしていないため使用しない。
Restart Configurations		－	PFM サービス自動再起動の条件を設定する。PFM - Manager または PFM - Base が 08-50 以降の場合に設定できる。PFM サービス自動再起動機能については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。
		Restart when Abnormal Status	Status Server サービスが Action Handler サービス，Agent Collector サービス，および Agent Store サービスの状態を正常に取得できない場合にサービスを自動再起動するかどうかを設定する。
		Restart when Single Service Running	Agent Store サービスと Agent Collector サービスのどちらかしか起動していない場合にサービスを自動再起動するかどうかを設定する。
Restart Configurations	Action Handler	Auto Restart	Action Handler サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合，サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1～1,440 分で，1 分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合，連続して再起動を試行する回数を 1～10 の整数で設定する。
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し，Action Handler サービスに対して，定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合，再起動間隔を 1～1,000 の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合，リスト項目から「Hour」，「Day」，「Week」または「Month」を選択し，再起動間隔の単位を設定する。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Restart Configurations	Action Handler	Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を 1971～2035 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を 1～12 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。
	Agent Collector	Auto Restart	Agent Collector サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合，サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1～1,440 分で，1 分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合，連続して再起動を試行する回数を 1～10 の整数で設定する。
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し，Agent Collector サービスに対して，定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合，再起動間隔を 1～1,000 の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合，リスト項目から「Hour」，「Day」，「Week」または「Month」を選択し，再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を 1971～2035 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を 1～12 の整数で指定できる。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Restart Configurations	Agent Collector	Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。
	Agent Store	Auto Restart	Agent Store サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合，サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1～1,440 分で，1 分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合，連続して再起動を試行する回数を 1～10 の整数で設定する。
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し，Agent Store サービスに対して，定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合，再起動間隔を 1～1,000 の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合，リスト項目から「Hour」，「Day」，「Week」または「Month」を選択し，再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を 1971～2035 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を 1～12 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Restart Configurations	Agent Store	Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。
ITSLM Connection Configuration		－	連携する JP1/SLM - Manager に関する情報が表示される。
ITSLM Connection Configuration	ITSLM Connection	－	接続先 JP1/SLM - Manager に関する情報が表示される。
		ITSLM Host	接続している JP1/SLM - Manager のホスト名が表示される。JP1/SLM - Manager と接続していない場合，本プロパティは表示されない。
		ITSLM Port	接続している JP1/SLM - Manager のポート番号が表示される。JP1/SLM - Manager と接続していない場合，本プロパティは表示されない。
	MANAGE ITSLM CONNECTION	－	JP1/SLM - Manager との接続を停止するかどうかを設定する。
		DISCONNECT ITSLM CONNECTION	接続を停止する JP1/SLM - Manager のホスト名をリスト項目から指定する。リスト項目から「(空文字)」を指定した場合は何もしない。JP1/SLM - Manager と接続していない場合，リスト項目には「(空文字)」だけが表示される。
Multiple Manager Configuration		Primary Manager	監視二重化の場合，プライマリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。
		Secondary Manager	監視二重化の場合，セカンダリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。
Agent Configuration		ALL Container Collection for Process※3	収集するプロセスの情報を Docker ホスト環境だけにするかどうかを指定する。 • Yes：Docker ホスト環境および Docker コンテナ環境のプロセス情報を収集する。 • No：Docker ホスト環境のプロセス情報だけを収集する。
		User Defined Record	ユーザーレコードの最大インスタンス数を指定する。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Agent Configuration		DataMaxCount※4	ユーザーレコードの最大インスタンス数を指定する。
		Use Processor Information Object	プロセッサのパフォーマンスデータ収集に Processor Information オブジェクトを使用するかどうかを指定する。「Yes」を指定した場合は，Processor Information オブジェクトが存在するシステムで 64 個を超えるプロセッサのパフォーマンスデータが収集できる。 • Yes：使用する • No：使用しない
Application monitoring setting	インスタンス名※5	－	追加した監視インスタンス名称。
		Process[01-15] Kind※6	プロセス種別。 • None：指定なし。 • Service Name：PD_SVC レコードの ServiceName のフィールドの値を参照。 • Command Line：PD レコードの Program フィールドの値を参照。
		Process[01-15] Name※6	プロセス名を 127 バイト以内で入力する。
		Process[01-15] Range※6	プロセス数のしきい値の下限値と上限値を「1-2」のようにハイフン（-）でつないで入力する。ハイフンを使用しないで値を 1 つだけ指定すると，下限値と上限値に同じ値を設定できる。例えば，「10」を指定すると，「10-10」が設定される。設定できる値は 0～65535。
ADDITION OR DELETION A SETTING		ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING	追加する監視インスタンス名称。
		DELETE AN APPLICATION MONITORING SETTING	削除する監視インスタンス名称を選択する。削除しない場合には「None」を選択する。
Advanced application monitoring		－	プロセスの稼働・非稼働情報を収集するための設定をする。
Advanced application monitoring	Application monitoring setting	Case Sensitive	監視条件との比較で大文字と小文字を区別するかどうかを指定する。 • Yes：区別する。

フォルダ名			プロパティ名	説明
Advanced application monitoring	Application monitoring setting		Case Sensitive	• No：区別しない。
	Application monitoring setting	アプリケーション名※7	−	追加したアプリケーションの名称。
			Virtual Environment ID※3	PD_APP2 レコードおよび PD_APPD レコードのプロセスの収集データ範囲を指定するための，仮想化環境（コンテナ）の識別子を 64 バイトの 16 進数で設定する。収集データ範囲を Docker ホスト環境だけにする場合は「0」を指定する。 未設定の場合は，すべてのプロセスが対象となる。
			Monitoring[01-15] Label※8	監視条件を識別するための名称を 31 バイト以内で指定する。 デフォルトでは Monitoring [01-15] が設定される。指定していない場合は，Monitoring [01-15]が設定される。 このプロパティに指定する値はユニークである必要がある。
			Monitoring[01-15] Field※8	監視するフィールド。 • None：指定なし。 • Program Name：PD_APS レコードの Program Name フィールドの値を参照。 • Command Line：PD_APS レコードの Command Line フィールドの値を参照。 • Service Name：PD_ASVC レコードの Service Name のフィールドの値を参照。 デフォルトでは「None」が設定される。
			Monitoring[01-15] Condition※8	監視条件を 4,096 バイト以内で指定する。 デフォルトでは空白が設定される。
			Monitoring[01-15] Range※8	監視数のしきい値の下限値と上限値を「1-2」のようにハイフン（-）でつないで指定する。指定できる値は 0～65535。
	ADDITION OR DELETION A SETTING		ADD AN APPLICATION	追加するアプリケーション名称を 63 バイト以内で指定する。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Advanced application monitoring	ADDITION OR DELETION A SETTING	MONITORING SETTING	このプロパティに指定する値はユニークである必要がある。
		DELETE AN APPLICATION MONITORING SETTING	削除するアプリケーション名称を選択する。デフォルトでは，アプリケーション名は表示されない。
User Command Setting		User Command Execution Timing	ユーザーコマンド定期実行機能でユーザーコマンドを実行するタイミングを指定する。 • After：レコード収集後にユーザーコマンドを実行する • Before：レコード収集前にユーザーコマンドを実行する デフォルトでは「After」が設定される。
		User Command Timeout	ユーザーコマンド定期実行機能で「User Command Execution Timing」プロパティに「Before」を選択した場合に，ユーザーコマンドの実行を打ち切る時間（秒）※9 を 1～86,400 の整数で指定する。 デフォルトでは 5 が設定される。
User Command Setting	ユーザーレコード名 ※10	Execute	ユーザーコマンド定期実行機能を実行するかどうか指定する。 • Yes：実行する。 • No：実行しない。
		UserCommand	ユーザーコマンドの絶対パスを指定する。絶対パスに指定できる文字列の最大長は 255 バイト。 指定できる文字は，次の文字を除く，半角英数字および半角記号。 | < >

（凡例）

－：該当しない

注※1

フォルダ名には，データベース ID を除いたレコード ID が表示されます。各レコードのレコード ID については，「8.　レコード」を参照してください。

注※2

Sync Collection With が表示されている場合，Collection Interval と Collection Offset は表示されません。

注※3

Windows Server 2016 の場合だけ表示されます。

注※4

このプロパティの対象レコードは，PD_UPD，PD_UPDB，PI_UPI，PI_UPIB，PI_XUI1～PI_XUI5 レコードです。

注※5

フォルダ名には，「ADDITION OR DELETION A SETTING」の「ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING」プロパティに設定したインスタンス名称が表示されます。設定方法については，「6.7　アプリケーションの稼働・非稼働情報収集に関する設定」を参照してください。

注※6

「Process[01-15] Kind」，「Process[01-15] Name」，「Process[01-15] Range」の「[01-15]」は各プロパティ名称の該当個所に「01 から 15 までの数字」が入ることを指します。実際にプロパティ項目として表示される際には「Process01 Kind」，「Process07 Name」，「Process15 Range」といった表示になります。

注※7

フォルダ名には，「Advanced application monitoring」－「ADDITION OR DELETION A SETTING」の「ADD AN APPLICATION MONITORING SETTING」プロパティに設定したアプリケーション名が表示されます。

注※8

「Monitoring[01-15] Label」，「Monitoring[01-15] Field」，「Monitoring[01-15] Condition」，「Monitoring[01-15] Range」の「[01-15]」は，各プロパティ名称の該当個所に「01 から 15 までの数字」が入ることを指します。実際にプロパティ項目として表示される際には，「Monitoring01 Label」，「Monitoring06 Field」，「Monitoring10 Condition」，「Monitoring15 Range」といった表示になります。

注※9

ユーザーコマンドの実行を打ち切る時間は，ほかのレコード収集のタイミングに影響がない範囲で指定する必要があります。

注※10

フォルダ名には，「PD_UPD」，「PD_UPDB」，「PI_UPI」，「PI_UPIB」，および「PI_XUI[1-5]」が表示されます。「PI_XUI[1-5]」の「[1-5]」は，「1 から 5 までの数字」が入ることを指します。実際にフォルダ名として表示される際には，「PI_XUI1」，「PI_XUI3」，「PI_XUI5」といった表示になります。

付録 F　ファイルおよびフォルダー一覧

ここでは，PFM - Agent for Platform のファイルおよびフォルダー一覧を記載します。

Performance Management のインストール先フォルダは次のとおりです。

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc

PFM - Agent for Platform のファイルおよびフォルダー一覧を次の表に示します。

表 F-1　PFM - Agent for Platform のファイルおよびフォルダー一覧

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtt¥	－	PFM - Agent for Platform（Windows）のルートフォルダ
	readme_言語コード.txt	README.TXT
	version.txt	バージョン情報
	.	PFM - Agent for Platform（Windows） 各種ファイル
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥	－	Agent Collector サービスのルートフォルダ
	COSLMMI.DB	JP1/SLM 連携設定のデータファイル
	COSLMMI.IDX	JP1/SLM 連携設定のデータファイルのインデックスファイル
	COSLMMI.LCK	JP1/SLM 連携設定のデータファイルのロックファイル
	agtterr.log	内部トレースログ
	func_trace00.log	
	func_trace01.log	
	jpcagt.ini	Agent Collector サービス設定ファイル
	jpcagt.ini.model	Agent Collector サービス設定ファイルのモデルファイル
	jpcagtt.exe	Agent Collector サービス実行プログラム

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥	jpcapp※1	アプリケーション定義ファイル（09-00 以前）
	jpcapp2※1	アプリケーション定義ファイル（09-10 以降）
	jpcappcvt.ini	コンバートコマンド設定ファイル
	jpcappcvt.ini.model	コンバートコマンド設定ファイルのモデルファイル
	jpcappcvt.exe	コンバートコマンド実行プログラム
	jpcappcvtJPN.dll	jpcappcvt.exe のサテライト DLL ファイル
	jpcconfig.exe	収集データ追加ユーティリティ実行プログラム
	jpcconfigJPN.dll	jpcconfig.exe のサテライト DLL ファイル
	x64exec.exe	x64 ネイティブ実行プログラム
	jpctRegistry32.exe	32 ビットの実行モジュール
	jpctRegistry64.exe	64 ビットの実行モジュール
	jpctRegistry32Sub.exe	収集補助プロセス
	map.log	32 ビットパフォーマンスレジストリから取得したインデックスマップの内部トレースログファイル
	map64.log	64 ビットパフォーマンスレジストリから取得したインデックスマップの内部トレースログファイル
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥log¥	－	Agent Collector サービス内部ログファイル格納フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥lib¥	－	メッセージカタログ格納フォルダ
	jpcagttmsg.dll	PFM - Agent for Platform（Windows）メッセージカタログファイル

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥	−	ユーザー独自のパフォーマンスデータ収集機能用のルートフォルダ
	jpcuser.exe	ユーザー独自のパフォーマンスデータ収集機能の実行プログラム
	jpcuser.ini	ユーザー独自のパフォーマンスデータ収集機能の構成ファイル
	jpcuser.ini.model	ユーザー独自のパフォーマンスデータ収集機能の構成モデルファイル
	jpcusercommand.ini	ユーザーコマンド定期実行機能の構成ファイル
	jpcusercommand.ini.model	ユーザーコマンド定期実行機能の構成モデルファイル
	jpcuserJPN.dll	jpcuser.exe のサテライト DLL ファイル
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥debug¥	−	jpcuser コマンドのデバッグログフォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥log¥trace¥	−	トレースログファイル（内部ログファイル）格納フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥log¥public¥	−	パブリックログファイル格納フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥userdata¥	−	ユーザーデータファイルの出力フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥jpcuser¥userdata¥temp	−	ユーザーデータファイル(テンポラリ)
インストール先フォルダ¥agtt¥agent¥PerfRegistryData	−	jpctRegistry のパフォーマンスデータ格納フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥	−	Agent Store サービスのルートフォルダ
	*.DB	パフォーマンスデータファイル
	*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル
	*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥	jpcsto.ini	Agent Store サービス設定ファイル
	jpcsto.ini.model	Agent Store サービス設定ファイルのモデルファイル
	*.DAT	データモデル定義ファイル
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥backup¥	−	標準のデータベースバックアップ先フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥partial¥	−	標準のデータベース部分バックアップ先フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥dump¥	−	標準のデータベースエクスポート先フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥import¥	−	標準のデータベースインポート先フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥log¥	−	Agent Store サービス内部ログファイル格納フォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥STPD¥	−	PD データベース固有のフォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥STPI¥	−	PI データベース固有のフォルダ
インストール先フォルダ¥agtt¥store¥STPL¥	−	PL データベース固有のフォルダ
インストール先フォルダ¥auditlog¥	−	動作ログファイルの標準の出力フォルダ
	jpcauditn.log※2	動作ログファイル
インストール先フォルダ¥setup¥	−	セットアップファイル格納フォルダ
	jpcagttu.Z	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (UNIX)
	jpcagttw.EXE	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (Windows)
インストール先フォルダ¥setup¥alarm	−	アラームテーブル復旧用格納フォルダ
	TALARM	アラームテーブル 6.70 復旧用ファイル
インストール先フォルダ¥setup¥extract	−	セットアップファイル展開フォルダ

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥setup¥update¥	−	バージョンアップ作業用フォルダ
インストール先フォルダ¥setup¥update¥agtt¥	−	PFM - Agent for Platform（Windows） バージョンアップ作業用フォルダ
	.	PFM - Agent for Platform（Windows） バージョンアップ作業用ファイル

（凡例）

−：該当しない

注※1

プロセス監視の設定を行っていない場合は，存在しません。

注※2

n は数値です。ログファイル数は，jpccomm.ini ファイルで変更できます。

また，Visual Studio 2010 用の再頒布ファイルをインストールします。インストールされる Visual Studio 2010 の再頒布ファイル一覧を次の表に示します。

表 F-2　インストールされる Visual Studio 2010 の再頒布ファイル一覧

フォルダ名	ファイル名	説明
%Systemroot%¥system32	mfc100.dll	Microsoft Visual C++ 2010 SP1 MFC 再頒布ファイル（x64 用）です。
	mfc100u.dll	
	mfcm100.dll	
	mfcm100u.dll	
	msvcp100.dll	Microsoft Visual C++ 2010 SP1 CRT 再頒布ファイル（x64 用）です。
	msvcr100.dll	
	mfc100chs.dll	Microsoft Visual C++ 2010 SP1 MFCLOC 再頒布ファイル（x64 用）です。
	mfc100cht.dll	
	mfc100deu.dll	
	mfc100enu.dll	
	mfc100esn.dll	
	mfc100fra.dll	
	mfc100ita.dll	
	mfc100jpn.dll	

フォルダ名	ファイル名	説明
%Systemroot%¥system32	mfc100kor.dll	Microsoft Visual C++ 2010 SP1 MFCLOC 再頒布ファイル（x64 用）です。
	mfc100rus.dll	

付録 G　バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項

PFM - Agent for Platform をバージョンアップするには，PFM - Agent for Platform を上書きインストールします。インストールの操作の詳細については，「4.　Windows 版のインストールとセットアップ」を参照してください。

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合の注意事項については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章および付録にある，バージョンアップの注意事項について説明している個所を参照してください。

ここでは，PFM - Agent for Platform をバージョンアップする場合の注意事項を示します。

- バージョンアップする際には，古いバージョンの PFM - Agent for Platform をアンインストールしないでください。アンインストールすると，古いバージョンで作成したパフォーマンスデータなども一緒に削除されてしまうため，新しいバージョンで使用できなくなります。
- PFM - Agent for Platform を上書きインストールすると，次の項目が自動的に更新されます。
  - Agent Store サービスの Store データベースファイル
  - ini ファイル

付録 H　バージョン互換

PFM - Agent には，製品のバージョンのほかに，データモデルのバージョンがあります。

データモデルは，上位互換を保っているため，古いバージョンで定義したレポートの定義やアラームの定義は，新しいバージョンのデータモデルでも使用できます。

PFM - Agent for Platform のバージョンの対応を次の表に示します。

表 H-1　PFM - Agent for Platform のバージョン対応表

PFM - Agent for Platform のバージョン	データモデルのバージョン	監視テンプレートのアラームテーブルのバージョン
06-70	3.0	6.70
07-00	4.0	7.00
	4.1	
07-50	5.0	7.50
08-00	6.0	8.00
08-10	7.0	8.10
08-11	7.2	8.11
08-50	7.4	8.50
09-00	7.6	09.00
09-10	7.8	09.10
10-00	8.0	
11-00		
11-01		
11-10	8.2	
11-50	8.4	10.00

PFM - Agent for Platform の場合，PFM - Web Console の画面の［アラーム階層］に，使用中の Performance Management システムにはないバージョンのアラームテーブルが表示されることがあります。Performance Management システムで使用しているアラームテーブルのバージョンおよびバージョンの互換性をご確認の上，使用してください。

バージョン互換については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，付録に記載されているバージョン互換を参照してください。

付録 I　動作ログの出力

Performance Management の動作ログとは，システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

例えば，PFM サービスの起動・停止時や，PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログに出力されます。

動作ログは，PFM - Manager または PFM - Base が 08-10 以降の場合に出力できます。

動作ログは，CSV 形式で出力されるテキストファイルです。定期的に保存して表計算ソフトで加工することで，分析資料として利用できます。

動作ログは，jpccomm.ini の設定によって出力されるようになります。ここでは，PFM - Agent および PFM - Base が出力する動作ログの出力内容と，動作ログを出力するための設定方法について説明します。

付録 I.1　動作ログに出力される事象の種別

動作ログに出力される事象の種別および PFM - Agent および PFM - Base が動作ログを出力する契機を次の表に示します。事象の種別とは，動作ログに出力される事象を分類するための，動作ログ内での識別子です。

表 I-1　動作ログに出力される事象の種別

事象の種別	説明	PFM - Agent および PFM - Base が出力する契機
StartStop	ソフトウェアの起動と終了を示す事象。	• PFM サービスの起動・停止 • スタンドアロンモードの開始・終了
ExternalService	JP1 製品と外部サービスとの通信結果を示す事象。 異常な通信の発生を示す事象。	PFM - Manager との接続状態の変更
ManagementAction	プログラムの重要なアクションの実行を示す事象。 ほかの監査カテゴリーを契機にアクションが実行されたことを示す事象。	自動アクションの実行

付録 I.2　動作ログの保存形式

ここでは，動作ログのファイル保存形式について説明します。

動作ログは規定のファイル（カレント出力ファイル）に出力され，満杯になった動作ログは別のファイル（シフトファイル）として保存されます。動作ログのファイル切り替えの流れは次のとおりです。

1. 動作ログは，カレント出力ファイル「jpcaudit.log」に順次出力されます。

2. カレント出力ファイルが満杯になると，その動作ログはシフトファイルとして保存されます。

   シフトファイル名は，カレント出力ファイル名の末尾に数値を付加した名称です。シフトファイル名は，カレント出力ファイルが満杯になるたびにそれぞれ「**ファイル名末尾の数値**+1」へ変更されます。つまり，ファイル末尾の数値が大きいほど，古いログファイルとなります。

   例

   カレント出力ファイル「jpcaudit.log」が満杯になると，その内容はシフトファイル「jpcaudit1.log」へ保管されます。

   カレント出力ファイルが再び満杯になると，そのログは「jpcaudit1.log」へ移され，既存のシフトファイル「jpcaudit1.log」は「jpcaudit2.log」へリネームされます。

   なお，ログファイル数が保存面数（jpccomm.ini ファイルで指定）を超えると，いちばん古いログファイルから削除されます。

3. カレント出力ファイルが初期化され，新たな動作ログが書き込まれます。

動作ログの出力要否，出力先および保存面数は，jpccomm.ini ファイルで設定します。jpccomm.ini ファイルの設定方法については，「付録 I.4　動作ログを出力するための設定」を参照してください。

付録 I.3　動作ログの出力形式

Performance Management の動作ログには，監査事象に関する情報が出力されます。動作ログは，ホストごとに 1 ファイル出力されます。動作ログの出力先ホストは次のようになります。

- サービスを実行した場合：実行元サービスが動作するホストに出力
- コマンドを実行した場合：コマンドを実行したホストに出力

動作ログの出力形式，出力先，出力項目について次に説明します。

(1)　出力形式

```
CALFHM x.x,出力項目 1=値 1,出力項目 2=値 2,…,出力項目 n=値 n
```

(2)　出力先

```
インストール先フォルダ¥auditlog¥
```

動作ログの出力先は，jpccomm.ini ファイルで変更できます。jpccomm.ini ファイルの設定方法については，「付録 I.4　動作ログを出力するための設定」を参照してください。

(3)　出力項目

出力項目には 2 つの分類があります。

- 共通出力項目
  動作ログを出力する JP1 製品が共通して出力する項目です。
- 固有出力項目
  動作ログを出力する JP1 製品が任意に出力する項目です。

(a) 共通出力項目

共通出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお，この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含みます。

表 I-2 動作ログの共通出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	共通仕様識別子	－	CALFHM	動作ログフォーマットであることを示す識別子
2	共通仕様リビジョン番号	－	x.x	動作ログを管理するためのリビジョン番号
3	通番	seqnum	通し番号	動作ログレコードの通し番号
4	メッセージ ID	msgid	KAVExxxxx-x	製品のメッセージ ID
5	日付・時刻	date	YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssTZD※	動作ログの出力日時およびタイムゾーン
6	発生プログラム名	progid	JP1PFM	事象が発生したプログラムのプログラム名
7	発生コンポーネント名	compid	サービス ID	事象が発生したコンポーネント名
8	発生プロセス ID	pid	プロセス ID	事象が発生したプロセスのプロセス ID
9	発生場所	ocp:host	• ホスト名 • IP アドレス	事象が発生した場所
10	事象の種別	ctgry	• StartStop • Authentication • ConfigurationAccess • ExternalService • AnomalyEvent • ManagementAction	動作ログに出力される事象を分類するためのカテゴリー名
11	事象の結果	result	• Success（成功） • Failure（失敗） • Occurrence（発生）	事象の結果

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
12	サブジェクト識別情報	subj:pid	プロセス ID	次のどれかの情報 • ユーザー操作によって動作するプロセス ID • 事象を発生させたプロセス ID • 事象を発生させたユーザー名 • ユーザーに 1：1 で対応づけられた識別情報
		subj:uid	アカウント識別子（PFM ユーザー/JP1 ユーザー）	
		subj:euid	実効ユーザー ID（OS ユーザー）	

（凡例）

－：なし。

注※

T は日付と時刻の区切りです。

TZD はタイムゾーン指定子です。次のどれかが出力されます。

+hh:mm：UTC から hh:mm だけ進んでいることを示す。

-hh:mm：UTC から hh:mm だけ遅れていることを示す。

Z：UTC と同じであることを示す。

(b) 固有出力項目

固有出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお，この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含みます。

表 I-3 動作ログの固有出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	オブジェクト情報	obj	• PFM - Agent のサービス ID • 追加，削除，更新されたユーザー名（PFM ユーザー）	操作の対象
		obj:table	アラームテーブル名	
		obj:alarm	アラーム名	
2	動作情報	op	• Start（起動） • Stop（停止） • Add（追加） • Update（更新） • Delete（削除）	事象を発生させた動作情報

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
2	動作情報	op	• Change Password（パスワード変更） • Activate（有効化） • Inactivate（無効化） • Bind（バインド） • Unbind（アンバインド）	事象を発生させた動作情報
3	権限情報	auth	• 管理者ユーザー Management • 一般ユーザー Ordinary • Windows Administrator • UNIX SuperUser	操作したユーザーの権限情報
		auth:mode	• PFM 認証モード pfm • JP1 認証モード jp1 • OS ユーザー os	操作したユーザーの認証モード
4	出力元の場所	outp:host	PFM - Manager のホスト名	動作ログの出力元のホスト
5	指示元の場所	subjp:host	• **ログイン元ホスト名** • **実行ホスト名**（jpctool alarm コマンド実行時だけ）	操作の指示元のホスト
6	自由記述	msg	**メッセージ**	アラーム発生時，および自動アクションの実行時に出力されるメッセージ

固有出力項目は，出力契機ごとに出力項目の有無や内容が異なります。出力契機ごとに，メッセージ ID と固有出力項目の内容を次に説明します。

■ PFM サービスの起動・停止（StartStop）

- 出力ホスト：該当するサービスが動作しているホスト
- 出力コンポーネント：起動・停止を実行する各サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	起動：KAVE03000-I 停止：KAVE03001-I
動作情報	op	起動：Start

項目名	属性名	値
動作情報	op	停止：Stop

■ スタンドアロンモードの開始・終了（StartStop）

- 出力ホスト：PFM - Agent ホスト
- 出力コンポーネント：Agent Collector サービス，Agent Store サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	スタンドアロンモードを開始：KAVE03002-I スタンドアロンモードを終了：KAVE03003-I

注 1　固有出力項目は出力されない。

注 2　PFM - Agent の各サービスは，起動時に PFM - Manager ホストに接続し，ノード情報の登録，最新のアラーム定義情報の取得などを行う。PFM - Manager ホストに接続できない場合，稼働情報の収集など一部の機能だけが有効な状態（スタンドアロンモード）で起動する。その際，スタンドアロンモードで起動することを示すため，KAVE03002-I が出力される。その後，一定期間ごとに PFM - Manager への再接続を試み，ノード情報の登録，定義情報の取得などに成功すると，スタンドアロンモードから回復し，KAVE03003-I が出力される。この動作ログによって，KAVE03002-I と KAVE03003-I が出力されている間は，PFM - Agent が不完全な状態で起動していることを知ることができる。

■ PFM - Manager との接続状態の変更（ExternalService）

- 出力ホスト：PFM - Agent ホスト
- 出力コンポーネント：Agent Collector サービス，Agent Store サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	PFM - Manager へのイベントの送信に失敗（キューイングを開始）：KAVE03300-I PFM - Manager へのイベントの再送が完了：KAVE03301-I

注 1　固有出力項目は出力されない。

注 2　Agent Store サービスは，PFM - Manager へのイベント送信に失敗すると，イベントのキューイングを開始し，以降はイベントごとに最大 3 件がキューにためられる。KAVE03300-I は，イベント送信に失敗し，キューイングを開始した時点で出力される。PFM - Manager との接続が回復したあと，キューイングされたイベントの送信が完了した時点で，KAVE03301-I が出力される。この動作ログによって，KAVE03300-I と KAVE03301-I が出力されている間は，PFM - Manager へのイベント送信がリアルタイムでできていなかった期間と知ることができる。

注 3　Agent Collector サービスは，通常，Agent Store サービスを経由して PFM - Manager にイベントを送信する。何らかの理由で Agent Store サービスが停止している場合だけ，直接 PFM - Manager にイベントを送信するが，失敗した場合に KAVE03300-I が出力される。この場合，キューイングを開始しないため，KAVE03301-I は出力されない。この動作ログによって，PFM - Manager に送信されなかったイベントがあることを知ることができる。

■ 自動アクションの実行（ManagementAction）

- 出力ホスト：アクションを実行したホスト
- 出力コンポーネント：Action Handler サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	コマンド実行プロセス生成に成功：KAVE03500-I

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	コマンド実行プロセス生成に失敗：KAVE03501-W E-mail 送信に成功：KAVE03502-I E-mail 送信に失敗：KAVE03503-W
自由記述	msg	コマンド実行：cmd=実行したコマンドライン E-mail 送信：mailto=送信先 E メールアドレス

注　コマンド実行プロセスの生成に成功した時点で KAVE03500-I が出力される。その後，コマンドが実行できたかどうかのログ，および実行結果のログは，動作ログには出力されない。

(4)　出力例

動作ログの出力例を次に示します。

```
CALFHM 1.0, seqnum=1, msgid=KAVE03000-I, date=2007-01-18T22:46:49.682+09:00,
progid=JP1PFM, compid=TA1host01, pid=2076,
ocp:host=host01, ctgry=StartStop, result=Occurrence,
subj:pid=2076,op=Start
```

付録 I.4　動作ログを出力するための設定

動作ログを出力するための設定は，jpccomm.ini ファイルで定義します。設定しない場合，動作ログは出力されません。動作ログを出力するための設定内容とその手順について次に示します。

(1)　設定手順

動作ログを出力するための設定手順を次に示します。

1. ホスト上の全 PFM サービスを停止させる。
2. テキストエディターなどで，jpccomm.ini ファイルを編集する。
3. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

(2)　jpccomm.ini ファイルの詳細

jpccomm.ini ファイルの詳細について説明します。

(a)　格納先フォルダ

インストール先フォルダ

(b)　形式

jpccomm.ini ファイルには，次の内容を定義します。

- 動作ログの出力の有無
- 動作ログの出力先
- 動作ログの保存面数
- 動作ログのファイルサイズ

指定形式は次のとおりです。

"項目名"=値

設定項目を次の表に示します。

表 I-4　jpccomm.ini ファイルで設定する項目および初期値

項番	項目	説明
1	[Action Log Section]	セクション名です。変更はできません。
2	Action Log Mode	動作ログを出力するかどうかを指定します。この項目の設定は省略できません。 • 初期値 0（出力しない） • 指定できる値 0（出力しない），1（出力する） これ以外の値を指定すると，エラーメッセージが出力され，動作ログは出力されません。
3	Action Log Dir	動作ログの出力先を指定します。 制限長を超えるパスを設定した場合や，ディレクトリへのアクセスが失敗した場合は，共通ログにエラーメッセージが出力され，動作ログは出力されません。 • 初期値 省略 • 省略した場合に適用される値（デフォルト値） **インストール先フォルダ¥auditlog¥** • 初期値 **インストール先フォルダ¥auditlog¥** • 指定できる値 1～185 バイトの文字列
4	Action Log Num	ログファイルの総数の上限（保存面数）を指定します。カレント出力ファイルとシフトファイルの合計を指定してください。 • 初期値 省略 • 省略した場合に適用される値（デフォルト値） 5 • 指定できる値 2～10 の整数 数値以外の文字列を指定した場合，エラーメッセージが出力され，デフォルト値である 5 が設定されます。

項番	項目	説明
4	Action Log Num	範囲外の数値を指定した場合，エラーメッセージを出力し，指定値に最も近い 2～10 の整数値が設定されます。
5	Action Log Size	ログファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。 • 初期値 省略 • 省略した場合に適用される値（デフォルト値） 2048 • 指定できる値 512～2096128 の整数 数値以外の文字列を指定した場合，エラーメッセージが出力され，デフォルト値である 2048 が設定されます。 範囲外の数値を指定した場合，エラーメッセージが出力され，指定値に最も近い 512～2096128 の整数値が設定されます。

付録 J　JP1/SLM との連携

PFM - Agent for Platform は，JP1/SLM と連携することによって，監視を強化できます。

PFM - Agent for Platform は，JP1/SLM 上での監視を実現するために，JP1/SLM 用のデフォルト監視項目を PFM - Manager に提供します。

複数インスタンスレコードの場合，キーに指定した値と一致したレコードを収集します。収集対象とするキーについては，各レコードの収集結果を確認してください。

表 J-1　PFM - Agent for Platform が PFM - Manager に提供するデフォルト監視項目

JP1/SLM での表示名	説明	レコード (レコード ID)	キー (PFM - Manager 名)	フィールド名
CPU Usage	プロセッサの使用率（%)。	System Overview (PI)	－	PCT_TOTAL_PROCESSOR_TIME
Available Memory	物理メモリー領域の未使用サイズ (メガバイト単位)。	System Overview (PI)	－	AVAILABLE_BYTES
Logical Disk Free Size	論理ディスクの未使用領域 (メガバイト単位)。	Logical Disk Overview (PI_LOGD)	ID（INSTANCE）	FREE_MEGABYTES
Disk Busy %	ディスクが読み込みまたは書き込み要求の処理で，ビジーの状態であった時間の割合（%)。	Physical Disk Overview (PI_PHYD)	ID（INSTANCE）	PCT_DISK_TIME
Network Bytes	ネットワークインターフェースで送受信されるデータ量の割合	Network Interface Overview (PI_NETI)	Instance (INSTANCE)	BYTES_TOTAL_PER_SEC

JP1/SLM での表示名	説明	レコード（レコード ID）	キー（PFM - Manager 名）	フィールド名
Network Bytes	（バイト/秒）。	Network Interface Overview（PI_NETI）	Instance（INSTANCE）	BYTES_TOTAL_PER_SEC

（凡例）

－：なし

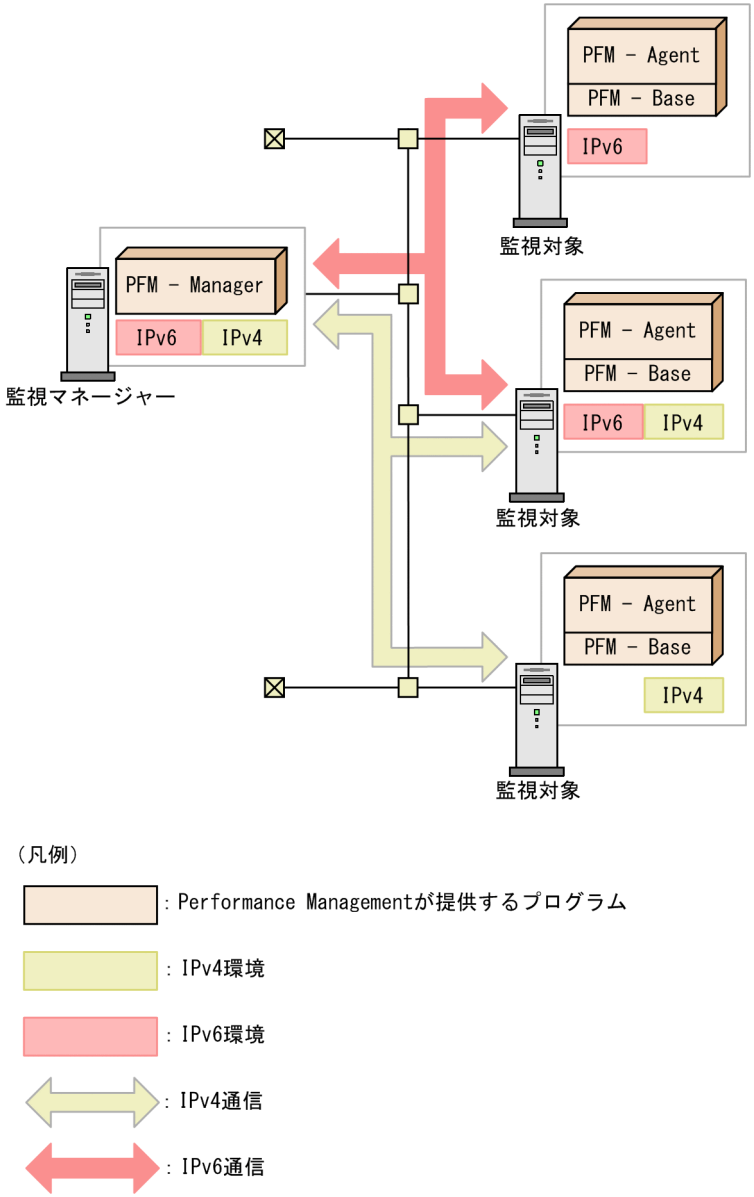
デフォルト監視項目を PFM - Manager に提供するためには，セットアップファイルをコピーして，セットアップコマンドを実行する必要があります。詳細は，「4.4.1　PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for Platform の登録」を参照してください。

付録 K　IPv4 環境と IPv6 環境での通信について

Performance Management では，ネットワーク構成が IPv4 環境だけでなく IPv6 環境にも対応しています。そのため，IPv4 環境と IPv6 環境が混在するネットワーク構成でも，Performance Management を運用できます。

ただし，PFM - Agent および PFM - Manager が導入されているホストの OS が Windows または Linux の場合に限ります。

図 K-1　IPv4 環境と IPv6 環境での通信の適用範囲



IPv6 環境で通信を有効にするには，jpcconf ipv6 enable コマンドを実行する必要があります。jpcconf ipv6 enable コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。また，jpcconf ipv6 enable コマンドを実行す

る条件やタイミングについては，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の IPv6 環境が含まれる場合のネットワーク構成例について説明している章を参照してください。

付録 L　各バージョンの変更内容

各バージョンのマニュアルの変更内容を示します。

付録 L.1　11-50 の変更内容

- Windows Server 2016 で Docker 環境（Windows コンテナ機能）を利用する場合，コンテナごとのプロセスを監視する機能をサポートした。
- 次のアラームテーブルを追加した。
  - PFM Windows Template Alarms [APP] 10.00
  - PFM Windows Template Alarms [PS] 10.00
- ユーザー独自のパフォーマンスデータの収集で，ユーザーコマンドの実行に失敗したなどの理由でユーザーデータファイルが作成されていない場合に，レコードの収集処理をスキップするようにした。
- 次のレポートを追加した。
  - Application Status (8.4)
  - Application Process Count (8.4)
  - Application Process Status (8.4)
  - Monitoring Process Detail (8.4)
- PD レコード，PD_APP2 レコード，PD_APSI レコード，および PD_APS レコードに次のフィールドを追加した。
  - Virtual Env ID

  また，上記レコードのファイルサイズを変更した。
- PD_ELOG レコードの Event Type ID フィールドの説明を変更した。
- PD_SVC レコードの注意事項を追加した。
- 次のメッセージを追加した。
  KAVF11508-W，KAVF11509-I，KAVF11510-W，KAVF11650-W
- 次のメッセージを変更した。
  KAVF11007-W，KAVF11907-W
- Agent Collector サービスに次のプロパティを追加した。
  - ALL Container Collection for Process
  - Virtual Environment ID

付録 L.2　11-10 の変更内容

- ユーザー独自のパフォーマンスデータに次のレコードを追加した。
  PI_XUI1，PI_XUI2，PI_XUI3，PI_XUI4，PI_XUI5
- 次の OS をサポートした。
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard
- ユーザーコマンド定期実行機能でユーザーコマンドを実行するタイミングを選択できるようにした。
- 次のメッセージを追加した。
  KAVF11504-W，KAVF11505-I，KAVF11506-W，KAVF11507-I

付録 L.3　11-01 の変更内容

- 論理ホスト環境に対応して，クラスタ運用ができるようになった。
- 次のメッセージを追加した。
  KAVF11503-E，KAVF11550-E～KAVF11552-E，KAVF11850-E～KAVF11853-E
- 次のメッセージの内容を変更した。
  KAVF11301-E，KAVF11957-I
- ポート番号は同一装置内で重複しないように割り当てる必要があることを記載した。

付録 L.4　11-00 の変更内容

(1)　資料番号（3021-3-056）から資料番号（3021-3-A51）への変更内容

- 次の OS をサポートする OS から削除した。
  PFM - Manager および PFM - Web Console
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2003（R2 を含む）
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008（R2 以外）
  - AIX 6 (32bit)
  - AIX 7 (32bit)
  - HP-UX 11i V3 (IPF)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (x86)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (AMD/Intel 64)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)

- Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (x86)
- Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)
- Solaris 10

PFM - Base および PFM - Agent for Platform

- Microsoft(R) Windows Server(R) 2003（R2 を含む）
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008（R2 以外）

- 次の OS をサポートした。

  PFM - Manager および PFM - Web Console

  - CentOS 6.1 (x64)以降
  - CentOS 7.1 以降
  - Red Hat Enterprise Linux(R) Server 7.1 以降
  - Oracle Linux(R) Operating System 6.1 (x64)以降
  - Oracle Linux(R) Operating System 7.1 以降
  - SUSE Linux(R) Enterprise Server 12
- 次のプロパティを追加した。

  Agent Store サービスのプロパティ

  - Multiple Manager Configuration

  Agent Collector サービスのプロパティ

  - Monitoring Console Https
  - Multiple Manager Configuration
  - Over 10 Sec Collection Time
  - Realtime Report Data Collection Mode
  - Use Processor Information Object
- 製品の名称を，JP1/ITSLM から JP1/SLM に変更した。
- ネットワーク管理製品（NNM）との連携を廃止した。
- ODBC 準拠のアプリケーションプログラムを廃止した。
- Performance Management で使用できる言語に，次の言語を追加した。
  - 韓国語
  - スペイン語
  - 中国語（簡体字）
  - ドイツ語
  - フランス語

- ロシア語

- Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合の注意事項を記載した。
- 次のメッセージを変更した。
  KAVF11304-W，KAVF11321-E，KAVF11322-E，KAVF11324-E～KAVF11327-E

(2) 資料番号（3021-3-354）から資料番号（3021-3-A51）への変更内容

- 次の OS をサポートする OS から削除した。
  PFM - Manager および PFM - Web Console
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2003（R2 を含む）
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008（R2 以外）
  - AIX 6 (32bit)
  - AIX 7 (32bit)
  - HP-UX 11i V3 (IPF)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (x86)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (AMD/Intel 64)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (x86)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)
  - Solaris 10

  PFM - Base，PFM - Agent for Platform
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2003（R2 を含む）
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008（R2 以外）
- 次の OS をサポートした。
  PFM - Manager，PFM - Web Console および PFM - Base
  - CentOS 6.1 (x64)以降
  - CentOS 7.1 以降
  - Red Hat Enterprise Linux(R) Server 7.1 以降
  - Oracle Linux(R) Operating System 6.1 (x64)以降
  - Oracle Linux(R) Operating System 7.1 以降
  - SUSE Linux(R) Enterprise Server 12
- 監視エージェントとして次の製品を追加した。
  - PFM - Agent for Cosminexus

- PFM - Agent for DB2
- PFM - Agent for Domino
- PFM - Agent for Exchange Server
- PFM - Agent for HiRDB
- PFM - Agent for IIS
- PFM - Agent for OpenTP1
- PFM - Agent for WebLogic Server
- PFM - Agent for WebSphere Application Server

- 次のプロパティを追加した。
  Agent Store サービスのプロパティ
  - Multiple Manager Configuration

  Agent Collector サービスのプロパティ
  - Monitoring Console Https
  - Multiple Manager Configuration
  - Over 10 Sec Collection Time
  - Realtime Report Data Collection Mode
  - Use Processor Information Object
- 製品の名称を，JP1/ITSLM から JP1/SLM に変更した。
- ネットワーク管理製品（NNM）との連携を廃止した。
- ODBC 準拠のアプリケーションプログラムを廃止した。
- Performance Management で使用できる言語に，次の言語を追加した。
  - 韓国語
  - スペイン語
  - ドイツ語
  - フランス語
  - ロシア語
- Windows Management Instrumentation サービス（サービス名：Winmgmt）のスタートアップの種類を「無効」に設定している場合の注意事項を記載した。
- 次のメッセージを変更した。
  KAVF11304-W，KAVF11321-E，KAVF11322-E，KAVF11324-E～KAVF11327-E

付録 L.5　10-00 の変更内容

(1)　資料番号（3021-3-056）の変更内容

- 64 ビットパフォーマンスデータを収集する機能を追加した。
- 64 ビットパフォーマンスデータを収集する機能の追加に伴い，次のレコードを追加した。
  - Generic Data Detail64（PD_GD64）
  - Generic Data Interval64（PI_GI64）
- 次の収集プロセスを追加することで，収集処理を OS 種別に対応したプロセスにした。
  - jpctRegistry32.exe（32 ビット版だけ）
  - jpctRegistry64.exe（64 ビット版だけ）
  - jpctRegistry64Sub.exe（64 ビット版だけ）
- プロセスの監視条件を 4,096 バイトまで設定できるようにした。
- 次のデフォルト監視項目を PFM - Manager に提供することで，JP1/ITSLM と連携できるようにした。
  - PCT_TOTAL_PROCESSOR_TIME
  - AVAILABLE_BYTES
  - FREE_MEGABYTES
  - PCT_DISK_TIME
  - BYTES_TOTAL_PER_SEC
- PFM - Agent for Platform をインストールするホストが Windows Server 2008 R2 の場合に，IPv6 環境でもパフォーマンスデータを収集できるようにした。

  次のメッセージを追加した。

  KAVF11319-E，KAVF11320-E，KAVF11321-E，KAVF11322-E，KAVF11323-E，KAVF11324-E，KAVF11325-E，KAVF11326-E，KAVF11327-E，KAVF11511-W，KAVF11512-W
- データモデルのバージョンを 7.8 から 8.0 に変更した。

(2)　資料番号（3021-3-354）の変更内容

- 64 ビットパフォーマンスデータを収集する機能を追加した。
- 64 ビットパフォーマンスデータを収集する機能の追加に伴い，次のレコードを追加した。
  - Generic Data Detail64（PD_GD64）
  - Generic Data Interval64（PI_GI64）
- 次の収集プロセスを追加することで，収集処理を OS 種別に対応したプロセスにした。
  - jpctRegistry32.exe（32 ビット版だけ）

- jpctRegistry64.exe（64 ビット版だけ）
- jpctRegistry64Sub.exe（64 ビット版だけ）

- 次のデフォルト監視項目を PFM - Manager に提供することで，JP1/ITSLM と連携できるようにした。
  - PCT_TOTAL_PROCESSOR_TIME
  - AVAILABLE_BYTES
  - FREE_MEGABYTES
  - PCT_DISK_TIME
  - BYTES_TOTAL_PER_SEC
- PFM - Agent for Platform をインストールするホストが Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2012 の場合に，IPv6 環境でもパフォーマンスデータを収集できるようにした。
- 次のメッセージを追加した。
  KAVF11319-E，KAVF11320-E，KAVF11321-E，KAVF11322-E，KAVF11323-E，KAVF11324-E，KAVF11325-E，KAVF11326-E，KAVF11327-E，KAVF11511-W，KAVF11512-W
- データモデルのバージョンを 7.8 から 8.0 に変更した。

付録 L.6　09-10 の変更内容

(1)　資料番号（3020-3-R48-21）の変更内容

- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能を追加した。
- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，次のレコードを追加した。
  - Application Process Detail（PD_APPD）
  - Application Process Interval（PD_APSI）
  - Application Process Overview（PD_APS）
  - Application Service Overview（PD_ASVC）
  - Application Summary Extension（PD_APP2）
- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，次のアラームを追加した。
  - Application Status
  - Process Existence
- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，PFM Windows Template Alarms [PS] 09.10 アラームテーブルのバージョンを 09.00 から 09.10 に変更した。
- セットアップコマンドを非対話形式で実行できるようにした。

- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，アプリケーション定義ファイル「jpcapp2」を追加した。
- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，PFM Windows Template Alarms [APP] 09.10 アラームテーブルを追加した。
- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，次のレポートを追加した。
  - Application Process Count
  - Application Process Status
  - Application Status
  - Monitoring Process Detail
- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，jpcappcvt コマンドを追加した。
- 次のメッセージを追加した。

  KAVF11600-Q，KAVF11601-I，KAVF11602-E，KAVF11603-W，KAVF11604-W，KAVF11605-W，KAVF11606-Q，KAVF11607-E，KAVF11608-E，KAVF11609-E，KAVF11610-E，KAVF11611-E
- Windows 環境で採取が必要な情報に WMI ログを追加した。
- Performance Management で採取が必要な情報に jpcapp2 ファイルを追加した。
- トラブル発生時に採取が必要なパフォーマンスデータに関する情報の一覧を追加した。
- メモリー所要量の見積もりを変更した。
- ディスク占有量の見積もりを変更した。
- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，Agent Collector サービスのプロパティに，Advanced application monitoring のフォルダを追加した。
- プロセスの稼働・非稼働を監視する機能の追加に伴い，次のファイルを追加した。
  - jpcapp2
  - jpcappcvt.ini
  - jpcappcvt.ini.model
  - jpcappcvt.exe
- データモデルのバージョンを 7.6 から 7.8 に変更した。
- 監視テンプレートのアラームテーブルのバージョンを 09.00 から 09.10 に変更した。

付録 L.7　09-00 の変更内容

(1)　資料番号（3020-3-R48）の変更内容

- 「ソリューションセット」の名称を「監視テンプレート」に変更した。

- 収集データ追加ユーティリティの操作性が向上した。
- 監視テンプレートのアラームテーブルのバージョンを 8.50 から 09.00 に変更した。これに伴い，次のアラームテーブルを追加した。
  - PFM Windows Template Alarms [CPU]09.00
  - PFM Windows Template Alarms [MEM]09.00
  - PFM Windows Template Alarms [DSK]09.00
  - PFM Windows Template Alarms [NET]09.00
  - PFM Windows Template Alarms [PS]09.00
  - PFM Windows Template Alarms [LOG]09.00

  また，次のアラームを追加した。
  - Processor Queue
  - SVR Processor Queue
  - Committed Mbytes
  - Pages/sec
  - Page Faults/sec
  - Logical Disk Free
  - Disk Busy %
  - Logical Disk Queue
  - Physical Disk Queue
  - Network Received
  - Process End
  - Process Alive
  - Service(Service Nm)
  - Service(Display Nm)
  - Event Log(all)
  - Event Log(System)
- JP1/IM との連携機能を強化した。これに伴い，Agent Collector サービスのプロパティ一覧に次のフォルダを追加した。

  JP1 Event Configurations
- 次のメッセージを追加した。

  KAVF11500-W～KAVF11502-W
- データモデルのバージョンを 7.4 から 7.6 に変更した。

- 08-51 以前のコマンドと互換性を持つ新形式のコマンドが追加されたことに伴い，09-00 以降のコマンドを次のように表記した。

  09-00 以降のコマンド（08-51 以前のコマンド）

付録 M　このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

付録 M.1　関連マニュアル

関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

JP1/Performance Management 関連

- JP1 Version 11 パフォーマンス管理 基本ガイド（稼働性能管理編）（3021-3-A36）
- JP1 Version 11 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド（3021-3-A37）
- JP1 Version 11 JP1/Performance Management 運用ガイド（3021-3-A38）
- JP1 Version 11 JP1/Performance Management リファレンス（3021-3-A39）

JP1 関連

- JP1 Version 10 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R)用)（3021-3-177）

付録 M.2　このマニュアルでの表記

このマニュアルでは，製品名を次のように表記しています。

表記		製品名
AIX		AIX V6.1
		AIX V7.1
		AIX V7.2
HP-UX	HP-UX 11i	HP-UX 11i V3 (IPF)
JP1/Base		JP1/Base
JP1/IM	JP1/IM - Manager	JP1/Integrated Management - Manager
	JP1/IM - View	JP1/Integrated Management - View
JP1/ITSLM （10-50 以前）	JP1/ITSLM - Manager	JP1/IT Service Level Management - Manager
	JP1/ITSLM - UR	JP1/IT Service Level Management - User Response
JP1/NETM/DM		JP1/NETM/DM Client
		JP1/NETM/DM Manager

表記			製品名
JP1/NETM/DM			JP1/NETM/DM SubManager
JP1/SLM	JP1/SLM - Manager		JP1/Service Level Management - Manager
	JP1/SLM - UR		JP1/Service Level Management - User Response
Linux	CentOS	CentOS 6 (x64)	CentOS 6.1 (x64)以降
		CentOS 7	CentOS 7.1 以降
	Linux 6 (x64)		Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6.1 (64-bit x86_64)以降
	Linux 7		Red Hat Enterprise Linux(R) Server 7.1 以降
	Oracle Linux	Oracle Linux 6 (x64)	Oracle Linux(R) Operating System 6.1 (x64)以降
		Oracle Linux 7	Oracle Linux(R) Operating System 7.1 以降
	SUSE Linux	SUSE Linux 12	SUSE Linux(R) Enterprise Server 12
Performance Management			JP1/Performance Management
PFM - Agent	PFM - Agent for JP1/AJS※	PFM - Agent for JP1/AJS3	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS3
	PFM - Agent for Cosminexus※		JP1/Performance Management - Agent Option for uCosminexus Application Server
	PFM - Agent for DB2		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM DB2
	PFM - Agent for Domino		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM Lotus Domino
	PFM - Agent for Enterprise Applications		JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications
	PFM - Agent for Exchange Server※		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Exchange Server
	PFM - Agent for HiRDB※		JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB

表記			製品名
PFM - Agent	PFM - Agent for WebSphere MQ※		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere MQ
	PFM - Agent for IIS※		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Internet Information Server
	PFM - Agent for Microsoft SQL Server		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) SQL Server
	PFM - Agent for OpenTP1※		JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1
	PFM - Agent for Oracle		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle
	PFM - Agent for Platform	PFM - Agent for Platform（UNIX）	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform（UNIX(R)用）
		PFM - Agent for Platform（Windows）	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform（Windows(R)用）
	PFM - Agent for Service Response		JP1/Performance Management - Agent Option for Service Response
	PFM - Agent for WebLogic Server※		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle(R) WebLogic Server
	PFM - Agent for WebSphere Application Server※		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere Application Server
PFM - Base			JP1/Performance Management - Base
PFM - Manager			JP1/Performance Management - Manager
PFM - RM	PFM - RM for Microsoft SQL Server		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Microsoft(R) SQL Server
	PFM - RM for Oracle		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle
	PFM - RM for Platform		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Platform
	PFM - RM for Virtual Machine		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Virtual Machine

表記		製品名
PFM - Web Console		JP1/Performance Management - Web Console
Solaris	Solaris 10	Solaris 10 (SPARC)
	Solaris 11	Solaris 11 (SPARC)

PFM - Manager，PFM - Agent，PFM - Base，PFM - Web Console，および PFM - RM を総称して，Performance Management と表記することがあります。

注※

この製品は日本語環境だけで動作する製品です。

付録 M.3　このマニュアルで使用する英略語

このマニュアルで使用する英略語を次に示します。

英略語	英字での表記
API	Application Programming Interface
CPU	Central Processing Unit
CSV	Comma Separated Values
DDE	Dynamic Data Exchange
DHCP	Dynamic Host Configuration Protocol
DNS	Domain Name System
FQDN	Fully Qualified Domain Name
FTP	File Transfer Protocol
HTML	Hyper Text Markup Language
HTTP	Hyper Text Transfer Protocol
ICMP	Internet Control Message Protocol
IMAP	Internet Message Access Protocol
IP	Internet Protocol
IPF	Itanium Processor Family
IPv4	Internet Protocol Version 4
IPv6	Internet Protocol Version 6
IPX	Internetwork Packet eXchange
LAN	Local Area Network
LDAP	Lightweight Directory Access Protocol

英略語	英字での表記
MAPI	Messaging API
MTA	Message Transfer Agent
NAPT	Network Address Port Translation
NAT	Network Address Translation
NBT	NetBIOS over TCP/IP
NIC	Network Interface Card
NNTP	Network News Transfer Protocol
ODBC	Open Database Connectivity
OS	Operating System
SCM	Service Control Manager
SCSI	Small Computer System Interface
SMTP	Simple Mail Transfer Protocol
SNMP	Simple Network Management Protocol
SPX	Sequenced Packet eXchange
TCP	Transmission Control Protocol
TCP/IP	Transmission Control Protocol/Internet Protocol
UAC	User Access Control
UDP	User Datagram Protocol
URL	Uniform Resource Locator
WAN	Wide Area Network
Web	World Wide Web
WINS	Windows Internet Name Service
WOW64	Windows On Windows 64

付録 M.4　このマニュアルでのプロダクト名，サービス ID，およびサービスキーの表記

Performance Management 09-00 以降では，プロダクト名表示機能を有効にすることで，サービス ID およびサービスキーをプロダクト名で表示できます。

識別子	プロダクト名表示機能	
	無効	有効
サービス ID	TS1 **ホスト名**	**ホスト名**<Windows>(Store)
	TA1 **ホスト名**	**ホスト名**<Windows>
サービスキー	agtt	Windows

このマニュアルでは，プロダクト名表示機能を有効としたときの形式で表記しています。

なお，プロダクト名表示機能を有効にできるのは，次の条件を同時に満たす場合です。

- PFM - Agent の同一装置内の前提プログラム（PFM - Manager または PFM - Base）のバージョンが 09-00 以降
- PFM - Web Console および接続先の PFM - Manager のバージョンが 09-00 以降

付録 M.5　Performance Management のインストール先フォルダの表記

Windows 版 Performance Management のデフォルトのインストール先フォルダは，次のとおりです。

PFM - Base のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc

このマニュアルでは，PFM - Base のインストール先フォルダを，**インストール先フォルダ**と表記しています。

PFM - Manager のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc

PFM - Web Console のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pcWebCon

付録 M.6　KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト），1MB（メガバイト），1GB（ギガバイト），1TB（テラバイト）はそれぞれ 1,024 バイト，$1{,}024^2$ バイト，$1{,}024^3$ バイト，$1{,}024^4$ バイトです。

付録 N　用語解説

(英字)

Action Handler

PFM - Manager または PFM - Base のサービスの一つです。アクションを実行するサービスのことです。

Agent Collector

PFM - Agent のサービスの一つです。パフォーマンスデータを収集したり，アラームに設定されたしきい値で，パフォーマンスデータを評価したりするサービスのことです。

Agent Store

PFM - Agent のサービスの一つです。パフォーマンスデータを格納するサービスのことです。Agent Store サービスは，パフォーマンスデータの記録のためにデータベースを使用します。各 PFM - Agent に対応して，各 Agent Store サービスがあります。

Correlator

PFM - Manager のサービスの一つです。サービス間のイベント配信を制御するサービスのことです。アラームの状態を評価して，しきい値を超過するとアラームイベントおよびエージェントイベントを，Trap Generator サービスおよび PFM - Web Console に送信します。

HA クラスタシステム

高可用性を実現させるためのクラスタシステムです。障害が発生しても運用を継続できるようにすることを目的としています。業務実行中のサーバで障害が発生すると，待機していた別のサーバが業務の処理を引き継ぎます。これによって，障害発生時の業務の中断を防ぎ，可用性を向上させることができます。

このマニュアルでは，単に「クラスタシステム」と記述している場合は，HA クラスタシステムのことを指します。

JP1/SLM

業務システムをサービス利用者が体感している性能などの視点で監視し，サービスレベルの維持を支援する製品です。

JP1/SLM と連携することで，稼働状況の監視を強化できます。

Master Manager

PFM - Manager のサービスの一つです。PFM - Manager のメインサービスのことです。

Master Store

PFM - Manager のサービスの一つです。各 PFM - Agent から発行されたアラームイベントを管理するサービスのことです。Master Store サービスはイベントデータの保持のためにデータベースを使用します。

Name Server

PFM - Manager のサービスの一つです。システム内のサービス構成情報を管理するサービスのことです。

ODBC キーフィールド

PFM - Manager または PFM - Base で，Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な主キーです。ODBC キーフィールドには，各レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。

PD レコードタイプ

→「Product Detail レコードタイプ」を参照してください。

Performance Management

システムのパフォーマンスに関する問題を監視および分析するために必要なソフトウェア群の総称です。Performance Management は，次の 5 つのプログラムプロダクトで構成されます。

- PFM - Manager
- PFM - Web Console
- PFM - Base
- PFM - Agent
- PFM - RM

PFM - Agent

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Agent は，システム監視機能に相当し，監視対象となるアプリケーション，データベース，OS によって，各種の PFM - Agent があります。PFM - Agent には，次の機能があります。

- 監視対象のパフォーマンスの監視
- 監視対象のデータの収集および記録

PFM - Base

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。Performance Management の稼働監視をするための基盤機能を提供します。PFM - Agent を動作させるための前提製品です。PFM - Base には，次の機能があります。

- 各種コマンドなどの管理ツール

- Performance Management と他システムとの連携に必要となる共通機能

PFM - Manager

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Manager は，マネージャー機能に相当し，次の機能があります。

- Performance Management のプログラムプロダクトの管理
- イベントの管理

PFM - Manager 名

Store データベースに格納されているフィールドを識別するための名称です。コマンドでフィールドを指定する場合などに使用します。

PFM - View 名

PFM - Manager 名の別名です。PFM - Manager 名に比べ，より直感的な名称になっています。例えば，PFM - Manager 名の「INPUT_RECORD_TYPE」は，PFM - View 名で「Record Type」です。PFM - Web Console の GUI 上でフィールドを指定する場合などに使用します。

PFM - Web Console

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。Web ブラウザで Performance Management システムを一元的に監視するため Web アプリケーションサーバの機能を提供します。PFM - Web Console には，次の機能があります。

- GUI の表示
- 統合監視および管理機能
- レポートの定義およびアラームの定義

PI レコードタイプ

→「Product Interval レコードタイプ」を参照してください。

PL レコードタイプ

→「Product Log レコードタイプ」を参照してください。

Product Detail レコードタイプ

現在起動しているプロセスの詳細情報など，ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PD レコードタイプは，次のような，ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

- システムの稼働状況
- 現在使用しているファイルシステム容量

Product Interval レコードタイプ

1 分ごとのプロセス数など，ある一定の時間（インターバル）ごとのパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PI レコードタイプは，次のような，時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。

- 一定時間内に発生したシステムコール数の推移
- 使用しているファイルシステム容量の推移

Product Log レコードタイプ

UNIX 上で実行されているアプリケーションまたはデータベースのログ情報が格納されるレコードタイプのことです。

Store データベース

Agent Collector サービスが収集したパフォーマンスデータが格納されるデータベースのことです。

Trap Generator

PFM - Manager のサービスの一つです。SNMP トラップを発行するサービスのことです。

（ア行）

アクション

監視するデータがしきい値に達した場合に，Performance Management によって自動的に実行される動作のことです。次の動作があります。

- E メールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トラップの発行
- JP1 イベントの発行

アラーム

監視するデータがしきい値に達した場合のアクションやイベントメッセージを定義した情報のことです。

アラームテーブル

次の情報を定義した 1 つ以上のアラームをまとめたテーブルです。

- 監視するオブジェクト（Process，TCP，WebService など）
- 監視する情報（CPU 使用率，1 秒ごとの受信バイト数など）
- 監視する条件（しきい値）

インスタンス

このマニュアルでは，インスタンスという用語を次のように使用しています。

- レコードの記録形式を示す場合

  1 行で記録されるレコードを「単数インスタンスレコード」，複数行で記録されるレコードを「複数インスタンスレコード」，レコード中の各行を「インスタンス」と呼びます。

- PFM - Agent の起動方式を示す場合

  同一ホスト上の監視対象を 1 つのエージェントで監視する方式のエージェントを「シングルインスタンスエージェント」と呼びます。これに対して監視対象がマルチインスタンスをサポートする場合，監視対象のインスタンスごとにエージェントで監視する方式のエージェントを「マルチインスタンスエージェント」と呼びます。マルチインスタンスエージェントの各エージェントを「インスタンス」と呼びます。

エージェント

パフォーマンスデータを収集する PFM - Agent のサービスのことです。

（カ行）

監視テンプレート

PFM - Agent に用意されている，定義済みのアラームとレポートのことです。監視テンプレートを使用することで，複雑な定義をしなくても PFM - Agent の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

管理ツール

サービスの状態の確認やパフォーマンスデータを操作するために使用する各種のコマンドまたは GUI 上の機能のことです。次のことができます。

- サービスの構成および状態の表示
- パフォーマンスデータの退避および回復
- パフォーマンスデータのテキストファイルへのエクスポート
- パフォーマンスデータの消去

クラスタシステム

クラスタシステムとは，複数のサーバシステムを連携して 1 つのシステムとして運用するシステムです。大きく分けて HA（High Availability）クラスタシステムと負荷分散クラスタシステムの 2 種類があります。

このマニュアルでは，単に「クラスタシステム」と記述している場合は，HA クラスタシステムのことを指します。

（サ行）

サービス ID

Performance Management プログラムのサービスに付加された，一意の ID のことです。コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合，または個々のエージェントのパフォーマンスデータをバックアップする場合などは，Performance Management プログラムのサービス ID を指定してコマンドを実行します。

サービス ID の形式は，プロダクト名表示機能の設定によって異なります。サービス ID の形式については，マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の，Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

実行系ノード

クラスタシステムを構成するそれぞれのサーバシステムの，業務を実行中のノード（論理ホストがアクティブなノード）のことです。

収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）

ユーザーレコードに格納されるパフォーマンスデータを設定するための機能のことです。収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）は，Windows の［スタート］メニューから実行します。

スタンドアロンモード

PFM - Agent 単独で起動している状態のことです。PFM - Manager の Master Manager サービスおよび Name Server サービスが，障害などのため起動できない状態でも，PFM - Agent だけを起動して，パフォーマンスデータを収集できます。

ステータス管理機能

PFM - Manager および PFM - Agent 上で動作するすべてのサービスの状態を管理する機能です。ステータス管理機能を用いると，システム管理者は各ホストでのサービスの起動や停止などの状態を正しく把握できるため，障害復旧のための適切な対処を迅速に行うことができます。

（タ行）

待機系ノード

クラスタシステムを構成するそれぞれのサーバシステムの，実行系ノードの障害時に業務を引き継げるよう待機しているノードのことです。

単数インスタンスレコード

1 行で記録されるレコードです。このレコードは，固有の ODBC キーフィールドを持ちません。

→「インスタンス」を参照してください。

データベース ID

PFM - Agent の各レコードに付けられた，レコードが格納されるデータベースを示す ID です。データベース ID は，そのデータベースに格納されるレコードの種類を示しています。データベース ID を次に示します。

- PI　：PI レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。
- PD　：PD レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。

データモデル

各 PFM - Agent が持つレコードおよびフィールドの総称のことです。データモデルは，バージョンで管理されています。

ドリルダウンレポート

レポートまたはレポートのフィールドに関連づけられたレポートです。あるレポートの詳細情報や関連情報を表示したい場合に使用します。

（ハ行）

バインド

アラームをエージェントと関連づけることです。バインドすると，エージェントによって収集されているパフォーマンスデータが，アラームで定義したしきい値に達した場合，ユーザーに通知できるようになります。

パフォーマンスデータ

監視対象システムから収集したリソースの稼働状況データのことです。

非対話形式（コマンド）

コマンドの実行中に必要な入力作業について，オプションの指定や定義ファイルの読み込みで代替するコマンドの実行形式です。

非対話形式でコマンドを実行することで，稼働監視システムの構築を省力化でき，ユーザーの負担を軽減できます。

フィールド

レコードに含まれる個々の稼働情報です。Performance Management での監視項目に該当します。例えば，System Overview(PI)レコードの場合は，CPU %や Page Faults/sec などがフィールドに相当します。

フェールオーバー

クラスタシステムで障害が発生したときに，業務を実行するサーバの処理を実行系ノードから待機系ノードに引き継ぐことです。

複数インスタンスレコード

複数行で記録されるレコードです。このレコードは，固有の ODBC キーフィールドを持っています。

→「インスタンス」を参照してください。

物理ホスト

クラスタシステムを構成する各サーバに固有な環境のことです。物理ホストの環境は，フェールオーバー時にもほかのサーバに引き継がれません。

プロダクト ID

該当する Performance Management プログラムのサービスが，Performance Management のどのプログラムプロダクトのものかを示す 1 バイトの識別子のことです。サービス ID の一部です。

（ヤ行）

ユーザーレコード

デフォルトでは用意されていないパフォーマンスデータを収集し，特定のレコードに格納するように，ユーザーが設定したレコードです。ユーザーレコードを設定すると，収集したパフォーマンスデータを PFM - Web Console から監視できます。ユーザーレコードには，次の種類があります。

- Application Summary（PD_APP）レコード
- Generic Data Detail（PD_GEND）レコード
- Generic Data Interval（PI_GENI）レコード
- Event Log（PD_ELOG）レコード
- User Data Detail（PD_UPD）レコード
- User Data Detail - Extended（PD_UPDB）レコード
- User Data Interval（PI_UPI）レコード
- User Data Interval - Extended（PI_UPIB）レコード
- User Data Interval - Expanded n（PI_XUIn）レコード（n は 1～5 の数字）
- Workgroup Summary（PI_WGRP）レコード

（ラ行）

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間のことです。

リアルタイムレポート

監視対象の現在の状況を示すレポートです。

履歴レポート

監視対象の過去から現在までの状況を示すレポートです。

レコード

目的ごとに分類された稼働情報の集まりです。例えば，SystemOverview(PI)レコードは，CPU 使用率や物理メモリー領域の未使用サイズなど，システムの概要を把握するための稼働情報の集まりです。監視エージェントは，レコードの単位で稼働情報を収集します。収集できるレコードは，エージェントプログラムによって異なります。

レポート

PFM - Agent が収集したパフォーマンスデータをグラフィカルに表示する際の情報を定義したものです。主に，次の情報を定義します。

- レポートに表示させるレコード
- パフォーマンスデータの表示項目
- パフォーマンスデータの表示形式（表，グラフなど）

論理ホスト

クラスタシステムでの運用時に JP1 の実行環境となる論理上のサーバのことです。障害の発生時には，論理ホスト単位で系が切り替わります。論理ホストは専用の IP アドレスを持ち，フェールオーバー時にはその IP アドレスを引き継いで動作します。そのため，障害で物理的なサーバが切り替わった場合も，クライアントからは同じ IP アドレスでアクセスでき，1 つのサーバが常に動作しているように見えます。

（ワ行）

ワークグループ

PFM - Agent for Platform が実行されているプロセスを監視するまとまりの単位のことです。ワークグループは，次の単位で指定できます。

- Windows ユーザー
- Windows グループ
- プロセスによって実行されているプログラム

索引

記号

[PD_ELOG レコード設定] ダイアログボックス 166
[PI_GENI・PD_GEND レコードの設定] ダイアログボックス 160
[PI_GI64・PD_GD64 レコードの設定] ダイアログボックス 174
[PI_WGRP レコード設定] ダイアログボックス 168
[PI_WGRP レコードの追加] ダイアログボックス 168
[PI_WGRP レコードの変更] ダイアログボックス 172
[イベントモニター] 画面 207
[テンプレートの編集] メニュー 190
[プロセス監視の設定] 画面 182
[プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成] 画面 183
[プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成 > アプリケーション定義のテンプレートから入力] 画面 193
[プロセス監視の設定 > アプリケーション定義の新規作成 > 監視対象種別一覧から追加] 画面 186
[プロセス監視の設定 > アプリケーション定義のテンプレート] 画面 191
[プロセス監視の設定 > アプリケーション定義のテンプレートの新規作成] 画面 191

数字

32 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報30
64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報30
64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの内容確認 176
64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報としてユーザーレコードに設定されているユーザーレコードの削除 177
64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報の収集に関する設定 174
64 ビットパフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定 174

A

Access Failure Status レポート 305, 306
Action Handler 722
Active Directory Overview（PI_AD）レコード 388
Active Directory のインストール方法 380
Active Directory の監視例 68
Agent Collector 722
Agent Collector サービスのプロパティー一覧 670
Agent Store 722
Agent Store サービスのプロパティー一覧 665
Application Process Count (8.4)レポート 311
Application Process Count レポート 310
Application Process Detail（PD_APPD）レコード 397
Application Process Interval（PD_APSI）レコード 399
Application Process Overview（PD_APS）レコード 406
Application Process Status (8.4)レポート 313
Application Process Status レポート 312
Application Service Overview（PD_ASVC）レコード 413
Application Status (8.4)レポート 309
Application Status アラーム 297
Application Status レポート 307
Application Summary（PD_APP）レコード 417
Application Summary Extension（PD_APP2）レコード 427
Available Memory アラーム 256

B

Browser Overview（PI_BRSR）レコード 430

C

Committed Mbytes アラーム 266
Correlator 722
CPU Status (Multi-Agent)レポート 314
CPU Trend (Multi-Agent)レポート 316

CPU Trend レポート 315
CPU Usage Summary レポート 318
CPU Usage アラーム 258
CPU Usage - Top 10 Processes レポート 317

D

Device Detail（PD_DEV）レコード 434
Disk Busy %アラーム 274
Disk Space アラーム 260
Disk Time - Top 10 Logical Drives レポート 320
Docker 環境で収集できるデータ 44

E

Event Log(all)アラーム 290
Event Log（PD_ELOG）レコード 438
Event Log(System)アラーム 295

F

File System I/O Summary レポート 321
Free Megabytes - Logical Drive Status レポート 322
Free Space - Low 10 Logical Drives レポート 323
Free Space - Top 10 Logical Drives レポート 324

G

Generic Data Detail 30
Generic Data Detail（PD_GEND）レコード 442
Generic Data Detail64（PD_GD64）レコード 445
Generic Data Interval 30
Generic Data Interval（PI_GENI）レコード 448
Generic Data Interval64（PI_GI64）レコード 451

H

HA クラスタシステム 722

I

ICMP Overview（PI_ICMP）レコード 454
ICMP Version 6 Overview 459
IP Overview（PI_IP）レコード 464
IPv4 環境と IPv6 環境での通信について 704
IP Version 6 Overview 468
IP アドレスの設定 93

J

JP1/SLM 722
JP1/SLM との連携 702
jpcappcvt コマンド 586
jpcconf db define コマンド 116
jpcsto.ini 117
jpcuser コマンド 236

L

Logical Disk Free アラーム 272
Logical Disk Overview（PI_LOGD）レコード 472
Logical Disk Queue アラーム 276
Logical Drive Detail レポート 325

M

Master Manager 722
Master Store 723
Memory Available Trend (Multi-Agent)レポート 327
Memory Paging Status (Multi-Agent)レポート 329
Memory Paging レポート 328
Monitoring Process Detail (8.4)レポート 332
Monitoring Process Detail レポート 330

N

Name Server 723
NBT Overview（PI_NBT）レコード 478
Network Interface Overview（PI_NETI）レコード 480
Network Received アラーム 280

O

ODBC キーフィールド 723
ODBC キーフィールド一覧 360
OS Memory Usage Status レポート 334, 335

P

Page Faults/sec アラーム 270
Page Faults - Top 10 Processes レポート 336
Page File Detail（PD_PAGF）レコード 484
Pages/sec アラーム 268
PD 490
PD_APP 417
PD_APP2 427
PD_APPD 397
PD_APS 406
PD_APSI 399
PD_ASVC 413
PD_DEV 434
PD_ELOG 438
PD_GD64 445
PD_GEND 30, 442
PD_PAGF 484
PD_PDI 496
PD_PEND 502
PD_SVC 516
PD_UPD 552
PD_UPDB 555
PD レコードタイプ 22, 723
Performance Management 723
Performance Management システムの障害回復 658
PFM 製品が導入されていない複数のホストからのパフォーマンスデータの収集例 74
PFM - Agent 723
PFM - Agent for Platform のインストール手順 104
PFM - Agent for Platform の運用方式の変更 116
PFM - Agent for Platform の概要 20
PFM - Agent for Platform のシステム構成の変更 115
PFM - Agent for Platform の接続先 PFM - Manager の設定 110
PFM - Agent for Platform のセットアップファイル 108
PFM - Agent for Platform の特長 21
PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー 131
PFM - Base 723
PFM - Manager 724
PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for Platform の登録 106
PFM - Manager が停止した場合の影響と対処 132
PFM - Manager 名 724
PFM - View 名 724
PFM - Web Console 724
Physical Disk Overview（PI_PHYD）レコード 486
Physical Disk Queue アラーム 278
PI 520
PI_AD 388
PI_BRSR 430
PI_GENI 30, 448
PI_GI64 451
PI_ICM6 459
PI_ICMP 454
PI_IP 464
PI_IP6 468
PI_LOGD 472
PI_NBT 478
PI_NETI 480
PI_PCSR 506
PI_PHYD 486
PI_SVRQ 511
PI_TCP 542
PI_TCP6 545
PI_UDP 548
PI_UDP6 550
PI_UPI 558
PI_UPIB 571
PI_WGRP 579
PI_WINS 576
PI_XUI1 561
PI_XUI2 567
PI_XUI3 568
PI_XUI4 569
PI_XUI5 570
PI レコードタイプ 22, 724

PL レコードタイプ　724
Process Alive アラーム　284
Process Detail（PD）レコード　490
Process Detail Interval（PD_PDI）レコード　496
Process Detail レポート　337
Process End Detail（PD_PEND）レコード　502
Process End アラーム　282
Process Existence アラーム　293
Processor Overview（PI_PCSR）レコード　506
Processor Queue アラーム　262
Process Trend レポート　339
Product Detail レコードタイプ　724
Product Interval レコードタイプ　725
Product Log レコードタイプ　725

S

Server Activity Detail レポート　340
Server Activity Summary (Multi-Agent)レポート　342
Server Activity Summary Trend (Multi-Agent)レポート　345
Server Activity Summary レポート　343, 344
Server Sessions Trend (Multi-Agent)レポート 346
Server Work Queues Overview（PI_SVRQ）レコード　511
Service(Display Nm)アラーム　288
Service(Service Nm)アラーム　286
Service Process Detail（PD_SVC）レコード　516
Store データベース　22, 725
Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド　371
Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド　369
Store バージョン 2.0 への移行　119
SVR Processor Queue アラーム　264
System Memory Detail レポート　347
System Overview（PI）レコード　520
System Overview レポート　348, 350
System Utilization Status レポート　352

T

TCP Overview（PI_TCP）レコード　542
TCP Version 6 Overview　545
Trap Generator　725

U

UDP Overview（PI_UDP）レコード　548
UDP Version 6 Overview　550
User Data Detail（PD_UPD）レコード　552
User Data Detail - Extended（PD_UPDB）レコード　555
User Data Interval（PI_UPI）レコード　558
User Data Interval - Expanded 1（PI_XUI1）レコード　561
User Data Interval - Expanded 2（PI_XUI2）レコード　567
User Data Interval - Expanded 3（PI_XUI3）レコード　568
User Data Interval - Expanded 4（PI_XUI4）レコード　569
User Data Interval - Expanded 5（PI_XUI5）レコード　570
User Data Interval - Extended（PI_UPIB）レコード　571

V

VMware/Hyper-V を使用した仮想化システムで収集できるデータ　41

W

Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定126
Windows イベントログの一覧　598
Windows の運用上の問題点を通知できます　23
Windows のパフォーマンスデータを収集できます 21
WINS Server Overview（PI_WINS）レコード 576
Workgroup Summary（PI_WGRP）レコード 579
Workload Status (Multi-Agent)レポート　354
Workload Status レポート　353

あ

アクション　23, 725
アプリケーションおよびプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定をする場合の注意事項　154
アプリケーション定義を変換する　586
アプリケーションの稼働・非稼働情報　32
アプリケーションの稼働・非稼働情報収集時のアラーム運用例　214
アプリケーションの稼働・非稼働情報収集に関する設定　210
アプリケーションの稼働・非稼働情報として収集したユーザーレコードの確認または変更　213
アプリケーションの稼働・非稼働情報として収集したユーザーレコードの設定の削除　214
アプリケーションの稼働・非稼働情報を収集するためのユーザーレコードの設定　210
アラーム　23, 725
アラーム一覧　254
アラームおよびレポートが容易に定義できます　23
アラームテーブル　23, 725
アラームの記載形式　253
アンインストール　112
アンインストール手順　113
アンインストール前の注意事項　112

い

イベントログ監視の定義例　88
イベントログ情報　31
イベントログ情報として設定されているユーザーレコードの削除　167
イベントログ情報として設定されているユーザーレコードの内容確認　167
イベントログ情報の収集に関する設定　166
イベントログ情報を収集するためのユーザーレコードの設定　166
イベントログの監視例　67
インスタンス　726
インストール手順　104
インストールとセットアップ　90
インストールとセットアップの流れ　91
インストールに必要な OS ユーザー権限　95
インストールの前に確認すること　93
インストール前の注意事項　101

え

エイリアス名　93
エージェント　726
エージェント階層でのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定　182

か

過去のバージョンとの機能差異　179
仮想化システム上で PFM - Agent for Platform を利用する際の注意事項　38
仮想化システム上での PFM - Agent for Platform のインストール　35
仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の設定　36
仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の利用例（仮想化システムの設定を変更するべきか判断したい場合）　36
仮想化システム上での PFM - Agent for Platform の利用例（物理的なリソース追加が必要であるか判断したい場合）　37
仮想化システム上での運用　34
仮想化システム上でのパフォーマンス監視で最も重要なシステムリソース　35
仮想化システム上でのパフォーマンス監視の目的　34
仮想化システムの機能と収集されるパフォーマンスデータ　41
仮想化システムの利点　34
仮想化システム別の収集データ範囲　49
稼働状況ログ　644
監視対象の大文字と小文字の区別　205
監視テンプレート　23, 52, 252, 726
監視テンプレートについて　52
管理ツール　726

き

共通メッセージログ　643, 644

く

クラスタシステム　726
クラスタシステムで運用する場合の注意事項　154
クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform の運用方式の変更　153
クラスタシステムでの PFM - Agent for Platform の構成　129
クラスタシステムでのアンインストール手順　152
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ　147
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ　147
クラスタシステムでのアンセットアップ手順　148
クラスタシステムでのインストール手順　140
クラスタシステムでのインストールとセットアップ　134
クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ　134
クラスタシステムでのインストールの前に確認すること　136
クラスタシステムでの運用　128
クラスタシステムでのセットアップ手順　140
クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート　153

こ

コマンドでのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定　201
コマンドの記載形式　585
コマンドの指定方法　585
コマンドの文法の説明に使用する記号　585

さ

サービス ID　727
サービス階層でのプロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定　194

し

識別子一覧　661
システム見積もり　660
システムログ　643
実行系ノード　727
実ホスト名　93
収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）　727
収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）の起動　157
収集データ追加ユーティリティ（Collection Data Addition Utility）の終了　158
障害検知　657

す

スタンドアロンモード　727
ステータス管理機能　657, 727

せ

接続先 PFM - Manager の解除　113
セットアップ　106
セットアップコマンド　108
前提 OS　93
前提プログラム　95

そ

その他のトラブルに関するトラブルシューティング　642

た

待機系ノード　727
対処の手順　641
単数インスタンスレコード　727

て

ディスク監視の定義例　84
ディスク情報収集時の注意点　40
ディスク占有量　660
ディスクの監視例　61
データ型一覧　364
データベース ID　728
データモデル　22, 356, 728

と

同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール，セットアップするときの注意事項　101
動作ログ出力の設定　111
動作ログに出力される事象の種別　693
動作ログの出力　693
動作ログの出力形式　694
動作ログの保存形式　693
動作ログを出力するための設定　699
トラブルシューティング　642
トラブルシューティング時に採取が必要な Windows に関する資料　647
トラブルシューティング時に採取する OS のログ情報　647
トラブルシューティング時に採取する Performance Management の情報　648
トラブルシューティング時に採取する Windows に関する資料の採取方法　656
トラブルシューティング時に採取するオペレーション内容　652
トラブルシューティング時に採取する画面上のエラー情報　652
トラブルシューティング時に採取するその他の情報　655
トラブルシューティング時に採取するパフォーマンスデータに関する情報　653
トラブルシューティング時に採取するログ情報　643
トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類　643
トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびフォルダー一覧　644
トラブルシューティング時に採取する問題レポート　655
トラブルシューティング時に採取するユーザーモードプロセスダンプ　655
トラブルへの対処方法　640
ドリルダウンレポート　728
ドリルダウンレポート（フィールドレベル）　300
ドリルダウンレポート（レポートレベル）　300
トレースログ　644, 645

ね

ネットワーク環境の設定　93
ネットワーク監視の定義例　86
ネットワーク情報収集時の注意点　40
ネットワークの監視例　64
ネットワークの設定　109

は

バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項　691
バージョンアップの注意事項　102
バージョン互換　692
バインド　23, 728
バックアップ　123
パフォーマンス監視で最も重要なシステムリソース 27
パフォーマンス監視について　26
パフォーマンス監視の定義例　77
パフォーマンス監視の目的　26
パフォーマンスコンソールカウンター情報収集に関する設定　160
パフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの削除　164
パフォーマンスコンソールカウンター情報として設定されているユーザーレコードの内容確認　163
パフォーマンスコンソールカウンター情報を収集するためのユーザーレコードの設定　160
パフォーマンスデータ　728
パフォーマンスデータの格納先の変更　109, 116
パフォーマンスデータの管理方法　26
パフォーマンスデータの収集方法　26
パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます　22
パフォーマンスデータを収集するために必要な環境構築　97
パフォーマンスデータを保存できます　22
パフォーマンスの監視例　54
ハングアップや異常停止に関するトラブルシューティング　642

ひ

非対話形式（コマンド）　728

日立サーバ論理分割機構を使用した仮想化システムで収集できるデータ　42

ふ

ファイアウォールの通過方向　664

ファイルおよびフォルダー一覧　685

フィールド　22, 299, 728

フィールドの値　365

フェールオーバー　728

フェールオーバー時の処理　131

フェールオーバー前後のパフォーマンスデータの連続性についての注意事項　155

複数インスタンスレコード　729

物理ホスト　729

プログラムのインストール順序　104

プロセス一覧　662

プロセス稼働の監視条件を 4,096 バイトにする場合の前提条件　100

プロセス情報収集時の注意点　40

プロセスの稼働・非稼働情報　32

プロセスの稼働・非稼働情報収集時にアラームが発生したときの対応例　206

プロセスの稼働・非稼働情報収集の概要　179

プロセスの稼働・非稼働情報の収集に関する設定　179

プロセスの稼働・非稼働情報の収集に使用するレコード　180

プロセス・サービス監視の定義例　87

プロセス・サービスの監視例　65

プロセッサ監視の定義例　77

プロセッサ情報収集時の注意点　38

プロセッサの監視例　54

プロダクト ID　729

プロパティ　665

へ

ベースラインの選定　27

ほ

ポート番号　663

ポート番号一覧　663

ポート番号の設定　95

ま

マニュアルの参照手順　127

マニュアルを参照するための設定　126

め

メッセージ　589

メッセージ一覧　599

メッセージの記載形式　591

メッセージの形式　590

メッセージの出力形式　590

メッセージの出力先一覧　592

メモリー監視の定義例　79

メモリー情報収集時の注意点　39

メモリー所要量　660

メモリーの監視例　58

ゆ

ユーザーコマンド　221

ユーザーコマンド定期実行機能　222

ユーザー作成データ　221

ユーザー作成データの内容が正しいかどうかを確認するためのデバッグログの参照　244

ユーザー作成データのファイル形式　239

ユーザーデータファイル　222

ユーザー独自のパフォーマンスデータ　32

ユーザー独自のパフォーマンスデータ収集の機能概要　221

ユーザー独自のパフォーマンスデータの収集に関する設定　221

ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集するための設定　227

ユーザー独自のパフォーマンスデータを収集する場合の注意事項　154

ユーザーレコード　29, 729

ユーザーレコード収集の概要　29

ユーザーレコード設定時の注意事項　158
ユーザーレコードの収集　156
ユーザーレコードの収集時に起動する画面　157

よ

要約ルール　361

ら

ライフタイム　729

り

リアルタイムレポート　21, 730
リストア　124
利用ポート情報の収集例　73
履歴レポート　22, 730

れ

レコード　22, 299, 730
レコード一覧　381
レコードの記載形式　357
レコードの注意事項　372
レプリケーション　72
レポート　21, 730
レポート一覧　303
レポートの記載形式　299
レポートのフォルダ構成　301

ろ

ログのファイルサイズ変更　109
論理ホスト　730

わ

ワークグループ　730
ワークグループ情報　31
ワークグループ情報として設定されているユーザーレコードの内容確認　171
ワークグループ情報として設定されているユーザーレコードの内容変更　171
ワークグループ情報としてユーザーレコードに設定されているユーザーレコードの削除　173
ワークグループ情報の収集に関する設定　168
ワークグループ情報を収集するためのユーザーレコードの設定　168

株式会社 日立製作所

〒 100-8280　東京都千代田区丸の内一丁目 6 番 6 号